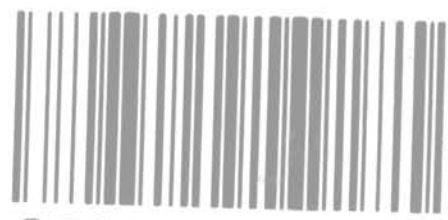


氏今
易學史



C0831248

今
氏
易
學
史





影 小 者 著

序

予が今君を識つたのは今から二十餘年前、大正八年頃だつたと思ふ。當時今君は、多分それが君の處女作だつたのであらう、題は忘れてしまつたが、舊約全書に材を取つた短篇小説を提げて文壇にデビューしようとしてゐた。君を始めて予に紹介したのは、その頃本郷曙町の予の寓居へ毎日のやうに遊びに来てゐた佐藤春夫であつたが、春夫は先づその作品を讀ましてくれたのであつたか、作品より先に當の本人を予の家へ引つ張つて來たのであつたか、今はつきりした記憶がない。記憶してゐるのは、かねがね會ふ前から、春夫が「今は美少年だよ」と云つてゐたことである。予は會つてみて、いかにも春夫の言の偽りでないのを知つた。その後予は君の容貌のことを「支那の狡童のやうだ」と何かに書いたことがあるが、圓顔で色白で、肌理が細かで、やゝ出眼な圓らかな瞳を持つてゐるところは一見して唐子の感じがした。予は又、その時君が青森縣弘前

の産であることを聞いて、成る程、此の顔だけはあの雪國の美人系のそれなのだなど、思ったことだつた。

春夫は又その作品のことを「ちよつとよい物だ」と云つてゐたが、予も一讀して奇なりと感じた。そして當時「我等」と云ふ雑誌を出してをられた長谷川如是閑氏に推舉したことを覚えてゐるが、何等かの事情でそれは「我等」には載らないでしまつたやうだ。尤も君が二十何歳かの時の勞作であるから、今讀んだならば稚拙なものであるかも知れないが、その文章も、内容も、甚だ特色に富んでゐて、君が好學の精神は既に早くあの中に現はれてゐたやうに思ふ。

さて、予はそれから間もなく東京の家を疊んで小田原に移り、横濱に移り、震災後は關西に移つて來たので、自然君とも會ふ機會が稀になつた。君が小田原の家へ遊びに來た時、予が甚だ不機嫌であつたので、君は予に嫌はれたと云ふ風に思つたことがあるらしいが、實はあの頃の予は家庭の事件などで精神的にも肉體的にもひどく參らされ、厭人的になつてゐた、めで、勿論君に對しどうと云ふことがあつたのではない。予は君の長篇作「愛經」が大毎の紙上に連載され出し

た時は、心から君の花々しい進出を喜んだものだつた。君もその頃は一二度東京からやつて来て、阪急岡本の予の家に泊つて行つたことがあつたが、正直を云ふと、予はその後十年ぐらゐの間の君の内的變遷のあとを、今もなほ詳かにしない。既に新進作家の一人として立ち、あのまゝ輝かしい文學の道を切り拓いて行くかに見えた君は、何故かあれから次第に作品を發表しないやうになり、公的にも私的にもばつたり消息を絶つに至つた。これは予の臆測に過ぎないが、君は當時或る有力なる先輩に激越な言辭を以て公開狀を書いたりしたことがあるので、幾分そんなことなども機縁になつてゐるかも知れない。やがて叡山に參籠し、天台宗の僧侶になつたと云ふことを聞いた。君はもはや昔日の今東光ではなく、今は今春聽と名告る圓頂緇衣の人なのであつた。予は「春聽」と云ふ法名に何となく詩的含蓄があるのを感じ、あの往年の美少年が僧形になつた姿を想像した。そしてたとひ佛門に入つても恐らくたゞの坊さんで終ることはあるまい。今に再び文學的活動を始めるのではないかと思つたりした。

然るに、たしか一昨年の夏、實に一別以來久し振に東京の偕樂園で會つた時には、君は意外に

も一廉の易學者になつてゐた。佐藤春夫の細君の話では、「今さんの易はなかなかよく中るので、信者も相當に多い」と云ふ。してみれば、君は此の方面の學問に於いて研鑽を積んだばかりでなく、それを實際に活用する機鋒に於いても、すぐれたものがあるのであらう。君がいつ、どう云ふ動機から、その持ち前の好學の精神を易に傾倒するに至つたのか、予はその邊のいきさつを知らないけれども、蓋し君の今の造詣は、恐らく雌伏十年の間にあらゆる世路の辛酸を嘗め、幾度か生死の關門に出入しつゝ、纔かに贏ち得た成果なのではないか。予は君に問うてみた譯ではないが、實は私かに左様に想像し、解釋してゐる。

予は全くの門外漢であるから、此の「易學史」のやうな専門的の書物に序文などを書く資格はないのだが、今回君の多年の研究の結晶たる著作が上梓されるに方り、一つには君の懇請もだし難く、一つには二十年來の友人として君の大成を喜ぶの餘り、聊か過去に於ける君との因縁を述べて序文に換へることにした。若し夫れ此の書の内容を學問的に検討し、批評し紹介するのには、他に適任者があつてあらう。たゞ、今は總べての東洋の古典が新しく見直されようとしてゐるの

であるから、此の書は著作者自身に取つてその生涯の一時期を劃する記念塔であるのみならず、世間一般に取つても頗る時機を得た、有意義な出版であると云へる。それにしても、君をしてあの時あのまゝ文學の道を進ましめたとしたら、今頃はどうなつてゐたであらう乎。その世を益し、社會に貢獻することは孰方が大きかつたであらう乎。予はしばしば斯く思ふことを禁じ得ない。

昭和十六年正月

谷崎潤一郎

序

回顧すれば、予の今君と交を締する正に三十年に垂んとするものがある。君が紅顔も稍老に近い。予が雙鬢の華髪は既に鏘するにすべもない。君は予が文歴と馬齡との一日の長を以て、近業の一書に序文を徴せられるのも、年久しい交を懐しむがためであらう。思ひを同じくするがために、予も敢てこれを固辭しないと一言へ、もと易の事は未だ何等學ぶところもない。この東洋古來の叡智に對して甚だ淺薄な常識觀を披瀝する外に餘儀なきを羞づるものである。

古人が人事を盡して天命を待たんとするに當つて、人間の思慮を促すための一手段として、或は星辰を望み龜を卜する等の事をいよいよ複雑にしたのは、傳へ聞く行路に迷ふた古の聖僧が手中の杖を投じて行く手の方向を天意に問ひ、或は蠻山の民が枝上の小鳥の形態を見て一日の吉凶を知るの淡如たる無邪氣な態度に較べて、一段と執拗に用ゐるに足らぬ人間の思慮分別を再三再

四反覆し得るの工夫を残り、然る後に事を決して悔なからしめんとする態度の我意に執しつゝ、然れどもおもむろに天意に従ふ。癡なりと雖も聊か人情に近いのを面白いとするものである。所詮は「したいやうにはならない、なるやうになる」だけの人生をいかにすべきを思ひ煩ふのも人生ならば、當るも八卦當らぬも八卦事の當否は抑も末であらう。超然として人生の諸相を且つは看且つは慮つて懇ろに他と親しみ自らの心を誠にせんとするは、やがて行動せずして行動に生きる所以で亦生に對する不即不離の一妙境であると思はれる。予は屢々、今君が箴卜の態度を傍觀して、この愚感を抱き君を賢なりとした。篤學な君が易學史は更に何事を予に教へるであらうか。これが上梓を樂しみ待つの外に所思もない。妄人の妄語を故人の一祭に供して、取捨を君に委ねる。

昭和辛巳春宵礪川の慵齋にて

佐藤春夫

序

易とは何ぞや——

これを簡潔に定義するは難事中の難事なり。その困難は修辭上の問題に非ずして、易そのものの有する性格に所來すればなり。

而かも強いて定義せんことを欲せんか、忽ちにして最も通俗なる見解と一致すべし。即ち、

——易とは八卦なり。

易とは八卦にして盡くるなり。八卦は象徴にして、而かも取りて徴せらるべき萬象の無限に應じて變通するもの。こゝに『易』の名の由來あり。此の故に各々の種族と其の時代との穎智を八卦の上に凝集して易經の態を成せり。夏の連山、殷の歸藏、周の周易を稱するものは是れなり。春秋以後新たに易名を樹つることなくして周易を基とするも、歴代、釋と註とを以て各時代の學的

展望を吾人に開陳せしめたり。

(それ故、易の歴史を修するは、嘗に其の變遷を叙するに止まらず、自ら易とは何ぞやの命題に回答を與ふると共に、而かも一面に於て易經の古典としての樞要なる地歩に鑑み、勢ひ側面よりする支那儒學史の形容を具すべきこと必然たり。)

若し其れ歴史的考證に專念するの餘り、各々の時代性を易の外被の如く解して是れを剝ぎ去るときは、雍の皮を剝ぐも同斷、易の素材たる八卦に還元するに過ぎず。茲に於てか眞の易は其の歴史の流れの中に、その本體と、而して現に脈動して吾人と共に生きつゝある大いなる意義を看取する以外に、易とは何ぞやの命題を正しく理解し解決する道は無きが如し。仍ち易學に於て其の史的展開の考究が特に重視せらるゝ所以なり。

従つて、儒學の視野に於て易を探らんとする者も、自然科學乃至社會科學の角度より易を究明せんとする者も、將又方術として易の占法を實踐せんとする者も、八卦の上に凝集せられたる『易』の時代的變遷及び學的展開とを史策の上に詳らかにすることこそ不可缺の前提といふべきなり。

然しながら就いて問ふべき易學の史籍は皆無といふに非るも而かも猶易統の鳥瞰は得て望むべからず。即ち勞多くして酬らるゝところ尠き易の修史に獻身するが如き篤學の士無く、當路また其の努力と效果との靚面ならぬ基礎學に對する關心乏しきが如くにして、滔々として眼前の功業をのみ競ふ學風の嘆かるゝとき、我が今春聽氏の決然病後の瘦軀を鞭つて自ら此の任に當り、今や東亞の指導原理を盛る東洋學の確立のために其の古典が再認識せられ、易また重要なる意義の注目されつゝある時に際して、その著述の漸くにして上梓に遭ふは眞に我々易學に携るものゝ喜びといふべく、また以て氏の豫見の正中をこそ稱すべきなり。

本書の續篇たる近代易學史の完結の速かならんことを切に待望しつゝ、同學盟契の厚誼を以て請はるゝがまゝに茲に不文を列ね、敢へて易學斯界のために著者の功を稱し、その勞の幾多後學の感謝に依て稿らはるべきを信するなり。

昭和辛巳雨水・岳麓精舎にて

加 藤 大 岳

自序

孔子世家の傳ふるところ、孔子、晩に易を喜み、序、彖、繫、象、說卦、文言あり云々と。

余、文學に志して其の初めて易經を繙きしは十七の年なりき。是もとより字句を追ふのみにして探源に至らずと雖も、占筮に及びては至簡にして煩ならず、至要にして迂ならず、至易にして難からず、略その要旨を得たり。後、唯物史觀の學說行はれるに及びて却つて易の理法のいよ、遼遠なることを知れり。三十にして佛門に入り偶ま藕益大師の典籍に接するや、はからずも天台易の眞髓を踵繼す。四十にして益々、易の玄旨を悟る。或は余も亦、晩年に及んでは易に於て則ち彬彬たるを得ん乎。

易、漢の代に及んで博士に取り立てられしより以來、易學史また儒學史と並行す。五經確立して經學史の存するありて、易學史の有らざる亦その然る所以ならむ乎。然りと雖も斯學の便の爲、今、儒學史より獨立せしめむとす。唯、淺學菲才にして力及ばざらむことを懼るのみ。

支那人、治を談ずれば必らず唐虞三代に及ぶ。唐虞三代とは夏、商（殷）、而して周これなり。其の文化の隆盛なることは以て支那人の誇稱するが如くならずと雖も、而も尙、四千有餘年の古に在りて禮樂の邦たりしは疑ふべからざるなり。而して今日に傳へられし易は周の易なり。周易は亦、周の文化を傳へしものと爲す所以なり。されば易學史は遂に支那文化史と一般と言ふべし。

今、日支の間、不測の變を生ず。然れども天下豈に不變たるべけんや。通に於て塞を起し、塞に即して通を成ず。故に繫辭に是を生々之謂易といふなり。日支は夫れ同文同種の族、而して歴史的には共同の文化圏に生長し、更に印度と共に三國は亦その宗教を一つとする運命共同態を爲すものなり。然も尙、戰ふ所以のものは何ぞや。剛柔相推して變化を生ずればなり。變化とは即ち進退の象なり。此の故に日本を愛する者は吉凶を想ひ、支那を識る者は悔吝を愁ふ。吉凶とは失得の象なり。悔吝とは憂虞の象なり。慎で誠めざるべけんや。

日支、戰ひて却て和を致す。是れ險を行ひて順なるべければなり。此の故に日支の間、却て其の文化の再認識を責む。物を辨へ言を正さむが爲なり。支那古代文化は易を以て最となす。故に易學史無くんば非らざるなり。然も其の此れ無きは難解難入なる上に、世下るに従ひて雜占の爲

に禍ひされしに由るなり。余いま短才を顧ずして敢て此を梓に上す所以のものは、意、もとより日支文化に聊か寄與するところ有らむ事を希ふ衷情に出づ。易に曰く、憧々として往來すれば、朋、爾の思に従ふと。

維時皇紀二千六百年吉春

東 光 坊 春 聽

目次

序	谷崎潤一郎	(一)
序	佐藤春夫	(六)
序	加藤大岳	(八)
自序		(二)
☆		
第一章		(三)
第二章		(七)
第三章		(三)
第四章		(三)
第五章		(七)
第六章		(五)

第七章	(七)
第八章	(六)
第九章	(四)
第十章	(四)
第十一章	(一〇三)
第十二章	(一〇九)
第十三章	(一六)
第十四章	(一五)
第十五章	(一九)
第十六章	(一九)
第十七章	(一七)
第十八章	(一八)
第十九章	(一〇三)
第二十章	(二六)
第二十一章	(四)

目次

第二十二章	(三五)
第二十三章	(三六七)
第二十四章	(三九三)
第二十五章	(三〇四)
第二十六章	(三八)
第二十七章	(三六三)
第二十八章	(三八三)
第二十九章	(三九四)
第三十章	(四〇九)
第三十一章	(四三三)
第三十二章	(四四一)
第三十三章	(四五〇)
☆		
跋	(四六七)

易
學
史

空白页

第一章

幽玄にして其の意また簡古なる易は、人の知る如く書物の名稱である。

それは總て十有二篇。上下の二經に、十翼と稱せられる彖傳上下、象傳上下、繫辭傳上下、文言傳、說卦傳、序卦傳、雜卦傳の十篇を以て構成されて居るのである。

されば繫辭傳に、易の書たるや遠ざくべからず（易之爲書也不可遠）と謂ひ、また曰く、易の書たるや始を原ね終を要めて以て質と爲すなり（易之爲書原始要終以爲質也）とあり、また、易の書たるや廣大にして悉く備はる（易之爲書也廣大悉備）とあつて、このやうに三度までも繰り返して居ることに依つて、それが書物の名稱であることを規定して居る點は注意すべきである。それ故に唐の陸徳明は、その經典釋文に於て、易は經の名なり、と註して居るのである。

その内容にあつては太極⁽³⁾を説き、兩儀⁽⁴⁾を示し、四象⁽⁵⁾を明らめ、八卦⁽⁶⁾を出し、六十四卦⁽⁷⁾を展開し、三百八十四爻⁽⁸⁾を聯ねるに、單に文字を以てするばかりでなく、一種のアジア的なる符號を用ふるところから、これを學ぶ者は其等に對して一定の豫備知識を有たなければ、これを完全に理解することが出來ないのである。その點に於て易經は、書物なる概念に必ずしも規定されないのである。従つて易經が古來、難解とされる所以である。

しかしながら古、易と謂つて、易經とは言はなかつた。その是を爲して經典としたのは何時の頃からであらう

か。

易正義序に曰く。

子夏傳に曰ふ。分つて上下二篇と爲すと雖も、未だ經字あらず。經字は、是れ後人の加ふる所なり。起ること誰より始まるを知らずと。案するに前漢の孟喜本に曰く、分上下二經と。是れ孟喜の前に已に經字を題せるなり。其の篇に經字を題するは後に起ると雖も、其の經と稱する理は久しく前に在り。故に禮記經解に云ふ、絜靜精微易教也と。既に經解の篇に在れば是れ易に經と稱する理あるなり。

此の文献は後の學者に種々の問題を提起せしめた。而して孫星衍の如きは、何の疑ひもなく按ずるに、禮經解に易あれば、易に經字を題せるは子夏の前に在り。

とさへ斷定して居るのであるが、孔子の言として傳へられる禮經解それ自身が後代の僞作だといふ定説となつてゐる今日では、右のやうな薄弱な基礎に立つての立論は成り立たないのである。少くとも漢以後、易が五經に取り立てられてからの事と觀察されなければならないのである。

(1) 唐代の條に其の傳を出す。

(2) 經典釋文二十卷なり。この他に易疏二十卷の著あり。

(3) 天地萬物の根本なり。宋代、周惇頤、現れて太極説を樹立し、宋學の根本思想となれり。後に論を出す。

(4) 陰陽をいふなり。繫辭上傳の易有二太極一是生二兩儀一に基く。班固の典引に太極之元兩儀始分とある是なり。

(5) 繫辭上傳の兩儀三四象に基く。象は即ち現象なり。陰陽分れて四種となる。即ち陰に老少、陽に老少なり。而して之を氣象に取れば、春は少陽にして、夏は老陽なり。秋は少陰にして、冬は老陰なるが如し。

(6) 易のら、ら、な、ひの算木の表面に現れたる兆象なり。即ち乾兌離震巽坎艮坤の八をいふなり。

(7) 小成の卦、即ち原卦八なり。之を重ねて大成の卦、即ち重卦を得ること六十四なり。

(8) 一卦は六の爻より成る。而して六十四卦にして三百八十四爻を得るなり。

(9) 唐の孔穎達の五經正義の中にあり。舊唐書儒學傳に義疏といひ、新唐書孔穎達傳に義訓といひ、唐會要に義贊といふもの是なり。

(10) 子夏は周代、衛の人なり。名は商。字は子夏。孔子の門弟にして孔夫子より四十四才若かりきといふ。博學にして經典に通じ、子游と共に文學十科に列す。師の歿後、學を西河に講じ、魏の文侯これに師事せり。經書の傳、多く子夏によりて傳はると稱せらる。老ひて子を喪ひ、哭して遂に盲目となると。

(11) 後に傳を出す。

(12) 禮記二十六を經解と名づく。これ六經の語なけれども、莊子天運篇に載するところの六籍（詩、書、禮、樂、易、春秋）を篇首に掲げ、前述の如く、聚粹精微なるは易の教なりと言へり。總べて四十九篇。漢初、傳ふるところの禮は儀禮十七篇のみ。魯の高堂生これを傳ふ。時に瑕丘の蕭奮、禮を治め、再傳して后蒼に至る。蒼、梁の戴德、及び德の從兄の子戴聖（字は次君）に授くと。戴聖は漢の宣帝の時の人。九江太守に至る。禮家に大小戴あるは即ち是なり。右の如く諸儒の説を集め、緇衣は公孫尼子の撰、中庸は子思の著、月令は呂不韋の修むるところ、樂記は荀卿もしくは河間獻王、毛

生等の作るところ、玉制は漢の文帝の時博士の録するところ、大學は曾子の傳、而して經解は孔子の言と傳ふ。然れども多くは確證あるに非ず。

(13) 孫星衍。字は淵如。江蘇省陽湖の人なり。清の乾隆五十二年、進士第二人を賜ひ、編修を授けらる。嘉慶二十三年正月卒す。時に六十六才なり。

(14) 正義に曰く、經解一篇は總て是れ孔子の言なり。記者これを録して以て經解と爲す者なり。

第二章

易の名義には古來、二説が有る。

一つは象形に由來する象形説である。他の一は考證的な表意説である。

許慎の説文は右の兩説を取り容れたもの、従つて最も妥當なものとして支持されて來たのである。而して近世になつて段玉裁によつて之の確説が打ち樹てられたのである。今その段注を引用する。

㊦。

蜥易蠃蜒守宮也（説文）

（段註） 虫部蜥下曰、蜥易也。蠃下曰、在壁曰蠃、在艸曰蜥。釋魚曰、榮蠃蜥蜴、蜥蜴蠃、蠃蜒守宮也。郭云、轉相解博異語別四名也。方言曰、守宮秦晉西夏謂之守宮、或謂之蠃蠃、或謂之蜥蜴、其在澤中者、謂之易蜴。南楚謂之蛇醫、或謂之蠃蠃。東齊海岱謂之蠃蠃。北燕謂之祝蜥。桂林之中、守宮大者而能鳴、謂之蛤解。按許舉其三者略也。易本蜥易、語言假借而難易之義出焉。鄭氏贊易曰、易之爲名也、一言而函三義、簡易一也、變易二也、不易三也。按易象二字。皆古以語言假借立名、如象卽像似之像也。故許先言本義、而後引秘書說云、秘書者明其未必然也。

象形（説文）

(段註) 上象首、不象四足、尾甚微、故不象。羊益切、十六部、古無去入之分、亦以豉切。今俗書蜥易字多作蜥、非也。按方言、蜥易其在澤中者謂之易蜥。郭云、蜥音析、是可證。蜥即蜥字非羊益切。小雅、胡爲之虺蜥。毛傳曰、蜥蠃也。釋文、蜥、星歷反、字又作蜥、說文引詩正作蜥、毛語正與三方言合。方言、易蜥南楚謂之蛇醫、或謂之蠃蠃。謂在澤中者也。蠃即虫部之蜥字。蛇醫也。陸璣云、蜥一名蠃蠃水蜥也。或謂之蛇醫。如蜥易。然則蜥易者統名、倒言易蜥及單言蜥者、別其在澤中者上言也。

祕書說曰、日月爲易(說文)

(段註) 祕書謂之緯書。目部亦云、祕書瞋从戊。按參同契曰、日月爲易、剛柔相當。陸氏德明、引虞翻注參同契云、字从二日下月。

象二易也(說文)

(段註) 謂上从日象陽。下从月象陰。緯書說字多言形而非其義、此雖近理、要非六書之本然、下體亦非月也。

(一曰、从勿、凡易之屬、皆从易)

字解をみると蠃蠃はハモリで、蜥易はトカゲ、守宮はヤモリである。

然も陸佃⁽⁴⁾の説文云易蜥易蠃守宮也、象形、周易之義、疑出於此。蜥易日十二時變色故曰易也といふのが通説となり、清の陳元龍⁽⁵⁾の格致鏡原には、方術の士は蜥易を器に容れて養ひ、飼ふに丹砂を食せしめ、その全身

を赤色にし、能く雹を吐き、雨を祈るに用ひて、之を龍子と稱するなど、傳へられて居る。

しかしながら注目すべき點は、この生物が能く十二色に變ずるなど、其の保護色を有することが知られてゐる點などから考察すると、それはヤモリでなく、キモリでなく、またトカゲでもなく、寧ろカメレオンではないかといふ事である。原産地を北アフリカの海岸地方とするカメレオンが、亞細亞の南方にも棲息することは夙に知られてゐたからである。従つて變易の意を蜥易に托し、その象形文字を易であるとする説は、今日に於て最も妥當な見解とすべきである。

第二の説も亦、古くから有力に支持されて來たのである。即ち日と月とを合成して易字を爲すといふ考證的な説は、言ふまでもなく識緯的な會意から發足するものであつた。されば周易參同契には日月爲₍₆₎易剛柔相當といひ、虞翻₍₇₎の註に字从₍₇₎日下月とあるのを見ると、虞翻また祕書の説に従つたこと明瞭である。

祕書は緯書のことであるが、緯書には多く怪異のことが記され、古代東洋人の神話的譚が主題となつて居るのである。従つて支那文字の如き表意文字にあつては、その解釋は各人の或る程度までの自由を認容するものゝ必ずしも理論的不確實さをも亦、意に介しないのである。それ故に段玉裁は、此れ理に近しと雖も、要は六書₍₉₎の本然に非ずと斷じて居るのである。今日でも尙ほ、易を神祕なものとする一群の人々にあつては、日と月とは之を併記すれば明となり、之を合成すれば易と爲ると主張して、第二説を固執するものゝ如くであるが、これは畢竟、附會の説たるを免れ得ないのである。

易は、蜥易が日に十二回も色を變ずるところから、これを書名としたと傳へられるが必ずしも此の解釋にだけ限定することも亦、不當なのである。その從屬的な意義として、鄭玄は易緯乾鑿度によつて、次の如くに分析して居るのである。即ち、易一名而含三義。易簡一也。變易二也。不易三也と、而して易に易簡、變易、不易の三義あることは争ふべからざる事實である。

之を判釋するものは、易簡はその徳なり、變易はその氣なり、不易はその位なりと云ふのである。されば宋の時代に至つて朱子現れ、更にこれを敷衍して曰く、有_二交易、變易之義、故謂_三之易_一と、即ち交易とは對待である。さうして變易とは流行であると言ふのである。

(1) 許慎は漢の人なり。字は叔重。汝南召陵の産なり。博く經書に通じ、馬融も之を敬重すと傳へらる。時の人これを五經無雙許叔重と稱す。漢の獻帝の時、孝廉に擧げられ、太尉となり、更に南閣祭酒に至れり。

(2) 嚴密には說文解字なり。十五卷あり。十四篇にして五百四十一部に分ち、文字九千三百五十三字を擧ぐ。後世の辭書の始めとす。許慎これを著してより後、字源の討究する學を說文學と稱するに至れり。

(3) 段玉裁は清朝の人なり。字は若膺。茂堂と號す。金壇の人なり。乾隆帝の庚辰の舉人にして、四川巫山縣の知縣と爲る。戴東原に學び、最も考證學に秀で、多くの著書あり。說文解字注は其の勞作にして且つ貢獻發明すること多し。

(4) 陸佃は宋の人なり。字は農師。越州山陰の人なり。貧居苦學し、油無きを以て月光の下に書を讀みし逸事は多くの人の知るところなり。進士に擢らる。かつて王安石に學びしも、其の新法を是とせず。徽宗の時、尙書左丞となり、崇寧元

年卒す。

(5) 陳元龍は清の人なり。字は廣陵。乾齋と號す。海寧の人なり。康熙二十四年の進士にして編修を授けられ、後に文淵閣大學士に至る。康熙四十五年、勅を奉じて歷代賦彙を撰す。

(6) 周易參同契三卷。漢の魏伯陽の撰なり。その説、周易に似て、その實は爻象を借りて作丹の意を論ぜり、朱子に考異一卷及び注あり。

(7) 後に傳を出せり。

(8) 緯書は經義に假托して吉凶禍福の豫言を記せり。尙書緯、春秋緯、易緯、禮緯、樂緯、詩緯、孝經緯、(これを七緯といふ) 論語緯、河圖緯、洛書緯の十種あり。孔子に托するも實は西漢末に成れるものにして、東漢の光武帝これを好み従つて大いに流行して鄭玄さへも其の註を作れり。六朝宋の大明中はじめて圖讖を禁じ、隋の煬帝は使を四方に派して其の書を搜ねて之を焚けり。故に今日に傳はるものは完本に非ず。緯書を收録するもの次の如し。

緯書十卷 (明杜士榮編)

古微書三十六卷 (明孫穀編)

說郛 (明陶宗儀編)

玲瓏山館叢書 (清顧湘編)

武英殿聚珍版全書 (清乾隆勅撰)

古經解彙函 (清鐘謙鈞編)

漢學堂叢書 (清林春溥編)

經義考 (清朱彝尊撰)

七緯三十八卷 (清趙在翰編)

緯櫛十四卷 (清喬樞年編)

雅雨堂叢書 (清盧見曾編)

藝海珠塵 (清吳省蘭編)

第二章

後漢書 (宋范曄撰
晉司馬彪撰)

路史 (宋羅泌撰)

尙書中候疏證 (清皮錫瑞撰)

(9) 造字の基本を六書といふ。周禮地官小司徒に曰く、八歲入ニ小學ニ保氏教ニ國子ニ先以ニ六書と。劉歆これが七略を作りて其の名目を定め、漢書藝文志また之に依りて説を立てり。許慎の説文序また其の語を引きて名目を立て、附するに定義を以てし、所謂、造字の基本とす。一に指事、二に象形、三に形聲、四に會意、五に轉注、六に假借これなり。多く許慎を宗とするも異説少なからず。

(10) 後に傳を出す。

(11) 易に關する十八篇の緯書の一なり。四庫全書提要によるに原書の完全に存するもの乾鑿度と乾坤鑿度の二篇なりと。而して緯櫛によれば、兩書の佚文各二節を掲げたり。雅雨堂叢書に鄭玄易乾鑿度二卷を收め、藝海珠塵には易緯乾鑿度二卷を收めり。

(12) 後に傳を出す。

第三 章

奉官宗伯下に、周禮太卜三易の法を掌るの記が有り、之に依つて易の種類が三つあることが、古來、學者の間に未解決の問題を提出して居るのである。曰く、掌三易之法。一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、其別皆六十有四と。

杜子春⁽¹⁾は、連山は伏羲⁽²⁾の易で、歸藏は黃帝⁽³⁾の易であるといふ説をなし、鄭玄⁽⁴⁾は夏に於ては連山と云ひ、商⁽⁵⁾に於ては歸藏と言ひ、周に於て周易といふのであると主張した。而して右の三易の義を釋して曰く、連山者、象山之出⁽⁶⁾、連連不絕。歸藏者、萬物莫不歸藏於其中。周易者、言易道周普无所不備と。

唐に至つて孔穎達⁽⁸⁾は曰く、世譜等の群書を案するに、神農⁽⁹⁾は一に連山氏と云ひ、また列山氏と言ふ。黃帝は一に歸藏氏と云ふ。これに依つて覆ふるに左傳昭二十九年に烈山氏の名あり、禮記祭法に厲山氏の名あつて、皆な神農氏を指すのを見れば、孔穎達の説は蓋し歴史的根據を有するかの如くである。されば神農氏の易は連山と名づけて夏に於て之を用ひ、黃帝の易は歸藏と名づけて商⁽⁵⁾に於て之を用ひたものとなす説が稍や合理的に受納されるのである。

而して注目すべき點は、その經卦みな八、その別みな六十有四とあるのに據れば、連山も歸藏も共に周易と等しく、八卦を以て基本と爲し、其の二卦を合成して六十四卦を得、之を行ふものゝ如くである事である。

孔穎達の解釋によると、連山は純長⁽¹³⁾を首となし、歸藏は純坤⁽¹²⁾を首とするといふのである。周易は普ねく知らるゝ如く純乾⁽¹³⁾を首とするが、斯の如く六十四卦の配列を異にする點を指摘した事は、非常に重大な問題に觸れたと言はなければならぬ。孔穎達は、これを豊かな理論付けによつて後人を納得せしめ得るまでに發展せしめ得なかつたが、しかしながら古易三別に、おぼろ氣ながら分類を立て得た點は偉としなければならぬ。基本を同じくしながら六十四卦の配列に相異あるといふ事實の發見は、易學史の上に一つの示唆を投げかけるものである。何故このやうに彼が言ひ得たかといふ一つの文献として、たとへば禮記禮運に孔子曰、我欲⁽¹⁴⁾觀⁽¹⁵⁾殷道、是故之⁽¹⁶⁾宋而不⁽¹⁷⁾足⁽¹⁸⁾徵也、吾得⁽¹⁹⁾坤乾⁽²⁰⁾焉と。この文献は明らかに坤を首とする殷の歸藏易なることを示して居るのである。

されば古來、易學者の間に疑問を投じてゐる春秋左傳の襄公九年の條も亦、古易の片鱗をうかゞふ點では重要な文献と言はなければならぬ。その傳に曰く

穆姜⁽¹⁴⁾、東宮に薨ず。始め往かんとして之を筮す。艮の八に之くに遇ふ。史曰く、是を艮の隨に之くと謂ふ。隨は其れ出づるなり。君必ず速に出でん。姜曰く、亡⁽¹⁷⁾し、是れ周易に於て曰く、隨は元亨利貞咎なしと。元⁽¹⁸⁾は體の長なり。亨⁽¹⁹⁾は嘉の會なり。利⁽²⁰⁾は義の和なり。貞⁽²¹⁾は事の幹なり。仁⁽²²⁾を體するは以て禮に合ふに足り、物を利するは以て義を和するに足り、貞固は以て事に幹たるに足れり。然り。故に諷ふ可らざるなり。是を以て、隨ふと雖も咎なし。今、我は婦人にして亂に與かり、固より下位に在り、而も仁ならざるあるは元と謂ふべからず。國家を靖んぜざるは亨と謂ふべからず。作して身を害するは利と謂ふべからず。位を棄て⁽²³⁾、姦⁽²⁴⁾するは貞と謂ふべからず。

四徳ある者は、隨ふと雖も咎なし。我は皆これ無し。豈に隨ならんや。我は則ち惡を取れり。能く咎なからんや。必らず此に死なん。出づることを得ざらんと。

艮之隨は、言ふまでもなく周易の法である。時の史官が、艮之八を艮之隨と解釋した點を見れば、明らかに周易以外の筮法が存在したことを物語るものであらう。

筮法を究明すれば、艮之八は、艮の第二爻のみの變ぜざるものと爲すことが出来る。しかしながら兎も角、艮之八といふ筮法は周易に無く、連山か歸藏の何れかの筮法であらうとすることは疑ふことが出来ない。されば古易は連山、歸藏の他にも別種が有り得るとする想像も亦、可能なのである。

唯、惜しむらくは連山、歸藏ともに名稱を周禮にとゞめて、その内容に就ては何等知るを得ないのが今日の状態である。しかしながら後世、朱竹垞⁽²⁴⁾の經義考⁽²⁵⁾、あるひは馬國翰⁽²⁶⁾の玉函山房輯佚書等に連山と歸藏の研究を載せては居るが、傳へられるところの連山と歸藏は、共に後人の假托たること勿論である。僞書作成は偏奇なる學者の最も好むところ、支那の學者に往々にして此の悪い趣味を見出すことは、畢竟、その民族性の然らしむるところであらうか。

(1) 杜子春は後漢末、緱氏の人なり。周禮を劉歆に受け、永平の初め頃まで尙ほ生存せりと傳へらる。年九十にして南山に家す。鄭衆・賈逵など往きて業を受け、これよりして周禮の學はじめて天下に傳ふと。

(2) 伏羲は古の傳説的皇帝なり。風姓なり。蛇身にして人首といふ。聖徳あり。日月の明に象る。故に太昊と稱す。民に

佃漁、畜牧を教へ、犠牲を養うて庖厨に充つ。故にまた庖犠氏といふなり。始めて八卦を畫し、書契を作るといふ。陳に都し、在位百十五年、而して十五世に傳へ、凡そ千二百六十年にして神農氏興ると傳へらる。一に必義また慮義に作る。

(3) 黃帝。姓は公孫。名は軒轅なり。惟ふに黃土地帶の皇帝にして、黃河治水時代の文化圈に屬する統治者ならんか。有熊國少典の子なりと。神農氏の政衰ふるに當り、阪泉に戰ひて遂に之に代り、始めて海内を統一し、東は海に至り、西は空桐(甘肅及び肅州)に至り、南は揚子江に及び、北は釜山(直隸及び宣化府)に達し、涿鹿(直隸、宣化、涿州)に都す。この時に至りて文化漸く發達し、容成は曆法を作り、蒼頡は文字を始め、所謂、蒙昧の世を去りて歴史時代に入ると傳へらる。故に後世、道教の徒は黃帝を尊びて眞君と稱す。

(4) 後に傳を出す。

(5) 禹。舜の讓りを受けて王と稱し、山西省解州夏縣の安邑に都して、國號を夏と稱す。子啓に傳へて、始めて世襲のこととを始む。所謂、母系制度より父系制度に移りしを示すものならんか。その子太康に至りて衰へしが、子相、立ちて都を河南省歸往府商邱縣の商邱に移し、少康の時に至つて夏道起り、履癸(桀)の代に至つて、成湯に滅さる。十七世、四百五十年と傳ふ。

(6) 成湯は名宰相伊尹を用ひて桀を伐ち、夏に代りて河南省歸往府商邱縣の亳はくに都し、國號を商と稱す。これを商と言へるは、湯の祖先契、唐虞の世、司徒となりて始めて商に封ぜられし故なり。商とは今の陝西省商州なり。故に湯、また國を商と號す。盤庚の時、河南省河南府偃師縣の殷に移りしより亦、殷の名あり。武乙に至りて河南省衛輝府淇縣の河北に遷れり。湯より後、五興五衰して紂の代に及びて、周の武王に亡さる。傳世二十八代、六百四十四年と傳へらる。

(7) 姬姓なり。堯舜の時、后稷たりし稷の後裔なり。その子孫、西戎の間に在りしが、太公奭父の時、岐山の下に移りて國號を周と稱す。その之を周と號するは、岐山の南に周原ありを以てなり。その孫、昌(文王)に至りて呂昌を用ひて西伯と爲り、その子發(武王)は殷の紂王を滅して王と爲り、鎬京に都し、成王の時、叔父の周公旦、政を攝して百度備はり、穆王に至るまで五代の間、國よく治まれり。厲王、暴政を行ひしより國人遂に王を逐ひ、周公召公政を攝する十四年の共和の世あり。宣王立ちて中興の大業を成せしが、幽王に至りて美人褒姒を愛し、爲に中侯の犬戎を導くあり。平王立つに及びて犬戎を避けて東の方、洛邑に移れり。武王より平王に至るまで三百四十八年なり。周室、東遷の後、春秋の世となれり。王室の勢力衰へて、天下の諸侯を制する能はず。威烈王の二十三年、晉の大夫を諸侯と爲すより後を戰國の世と稱し、春秋の世には、尙ほ名を王室に假るものありしが、以後は微々として振はず、王室在れども無きが如くして赧王の時、西周に移れり。初め考王の時、弟桓公を河南に封ぜしが、その孫に至りて東周と西周とになれり。此に至りて東西治を分つ。王の五十九年、秦を怖れて合縱を計り、却つて秦のために滅され、後、七年にして東周もまた亡びるに至れり。武王より三十七世、八百六十七年と傳へらる。

(8) 後に傳を出す。

(9) 世表、世本、その譜等なり。世表は史記に黃帝以下、周の共和の世に至るまでを叙し、之を列して表を爲り、之を三代世表といふ。世本は先秦時代に於る史書にして古來、問題多きものなり。前漢書、司馬遷傳贊によるに、此の書は黃帝以來、春秋時代の帝王公侯卿大夫の祖世の出づる所を録し、而して司馬遷の史記は、左氏國語、世本、戰國策、楚漢春秋等に據りしことを記せり。戰國時代中期以後、左傳の以後たるや論無し。この書、北宋の太平興國八年に成りし太平御覽

の引用書目の中に掲げたれば、北宋時代には尙ほ存せしこと明らかにして、その南渡の後、散逸せしものならんか。然もその傳來は怪しむべき點多く、漢志の春秋家には世本十五篇、隋志の譜系部には世本二卷、劉向撰、世本四卷、宋衷撰とし、新舊唐志には世本四本四卷、宋衷撰、世本別錄一卷、帝譜世本七卷、宋均撰、世本譜二卷を載せり。斯の如く撰者の異同あるは註記の混同に基き、隋唐の頃には既に古傳本と後世の註記文との判別を困難とせるものゝ如し。されば孔穎達は、その左傳正義に、世本轉寫多レ誤、其本未ニ必然ニ也(宣二疏)と言ひ、また今之世本與ニ遷言ニ不レ同、世本多レ誤、不レ足ニ依憑(昭二七疏)と言へり。

(10) 姜姓なり。姜水に長ずるに因りて以て姓とす。火徳を以て王たり、故に炎帝といふ。木を切りて耜を爲り、木を揉めて耒を爲る。耒耨の用を以て萬民に教ふ。始めて耕を教ふる故に神農氏と稱す。楮鞭を以て草木を鞭打ち、始めて百草を管めて醫藥を作る。また五弦の瑟を作れり。人に教へて日中に市を爲し、交易して退かしめ、各その所を得たり。八卦を重ねて六十四卦と爲すは神農氏に依ると傳へらる。初め陳に都し、後に曲阜に居す。神農氏もと烈山に起る。故にまた烈山氏といひ、また厲山氏ともいふ。大陸が古代日本文化圈に屬せし頃、農耕及び醫術、音樂、交易等を漢民族に教へし統治者ならんか。神農の子袁、袁の子克、克の子楡岡、凡そ八世、五百三十年を傳ふ。一に曰く、帝承、帝臨、帝則、帝百、帝來、帝襄、帝榆と。この時、諸侯に風沙氏ありて、叛して命を奉ぜず。神農退きて徳を修む。風沙の民、その君を攻めて來り投じ、歸伏せりと。

(11) 艮下艮上なり。



(12) 坤下坤上なり。



(13) 乾下乾上なり。☰☰

(14) 穆姜は成姜の母なり。穆姜は叔孫僑如と淫し、成公を廢せんとして事成らず。遂に東宮に徙されしこと成公十六年にあり。

(15) 艮は艮下艮上なり。艮之八は、艮爲山の二爻の變ぜざるものにして、他の五爻は皆な變ず。

(16) 澤雷隨なり。震下兌上なり。☱☳

(17) 我の此の卦に應ずる徳無きをいふなり。

(18) 元は元始なり。

(19) 亨は亨通なり。

(20) 利は利和なり。

(21) 貞は貞固なり。

(22) 仁を體するは元の徳なればなり。

(23) 姤は淫なり。

(24) 後に傳を出す。

(25) 經義考三百卷あり。二十七日あれども、そのうち四類の本文を缺く。

(26) 清の人なり。號は詞溪、竹吾と字す。山東歷城の人なり。道光十一年の舉人にして、翌十二年に進士に第す。陝西、

石泉、涇陽の知縣を経て、隴州の知州となり、咸豐二年、官を辭して歸る。その著、玉函山房輯佚書は最も有名なるもの

なれども、一説に此の書は眞に彼の作なるやを疑ふ學者有り。馬國翰は藏書家として知られ、五萬七千餘卷を所藏せりと傳へらるゝも、その歿後、人に盜まれて多く散佚せりと。

(27) 六百卷あり。馬國翰の書齋を玉函山房と名づく。傳へらるゝところによれば、清の乾隆年間、山陰の章宗源、唐以前の諸儒者の著書の史志に見へて、然も既に散佚せるものを務めて集録せりと。道光の年間、馬國翰その稿本を得て序を改め、經、史、子の三編に分ちて編すと。

第 四 章

孔子が六經を刪定したといふ儒教的神話は、今日では何人もその儘には信受しないのである。その上に孔子の時には、無論、六經は未だ出來て居らず、僅に詩三百と尙書の幾分かが存在したに過ぎなかつたらうとする學説が認められる今日、しかしながら易は既に其の原型を存したであらうと想像されるのである。何とならば易的發想は、實に文字（歴史）以前に屬するからである。

曾つて内藤湖南博士が言はれた如く——射儀の計算官及び其れから發達して禮儀を掌る者もあつて、それが卜筮等(6)を司る巫の仕事をなすやうになり、卜筮に使ふ繻辭(8)も始めはただ諷誦だけであつたが、後には文字の發明と共に記録せられることになり、終に史籍書を生ずるに至つた。これが記録の始めであつて、即ち歴史の始めである——と云ふ説は極めて留意すべきである。しかしながら此のやうな文化的發展が其の基礎的構造を据えたのは實に周の時代であり、それ故に原始的な未完成易も周の時代に、他の諸易と混合したりしながら、今日、傳へられる如き完成易としての形態を整へ、されば其を指して周易と言ふのであらう。

周禮宗伯の條を見ると、曰く、大宗伯之職、掌_レ建_レ邦之天神人鬼地祇之禮、以_レ佐_レ王建_レ保邦國、以_レ吉禮、事_レ邦國之鬼神祇、以_レ禋祀、祀_レ昊天上帝、以_レ實柴、祀_レ日月星辰、以_レ禋燎、祀_レ司中司命風師雨師、以_レ血祭、祭_レ社稷五祀五嶽、以_レ狸沈、祭_レ山林川澤、以_レ罷辜、祭_レ四方百物、以_レ肆獻裸、享_レ先王、以_レ饋食、享_レ先王、以_レ祀、春享_レ先王。

以_レ輪夏享_三先王。以_レ嘗、秋享_三先王。以_レ烝、冬享_三先王。とあつて夏、殷の時代には如何なる神祇が尊崇せられた明しないが、周の時代に及ぶと稍や其の全貌をうかがひ知ることが出来、その神々の種類や祭祀の種類に至るまでが、前述の如く傳へられて居るのである。

即ち其等のものは、天神、人鬼、地祇の神々であつて、それは昊天上帝⁽¹⁰⁾であり、日であり、月であり、星辰であり、司中⁽¹²⁾であり、司命⁽¹³⁾であり、風師⁽¹⁴⁾であり、雨師⁽¹⁵⁾であり、社⁽¹⁶⁾であり、稷⁽¹⁷⁾であり、五祀⁽¹⁸⁾であり、五嶽⁽¹⁹⁾であり、山であり、林であり、川であり、澤であり、四方百物であり、先王⁽²⁰⁾である。また祭祀は抑も禋祀⁽²¹⁾であり、實柴⁽²²⁾であり、樵⁽²³⁾であり、血祭⁽²⁴⁾であり、貍沈⁽²⁵⁾であり、罷辜⁽²⁶⁾であり、肆獻裸⁽²⁷⁾であり、饋食⁽²⁸⁾であり、祠⁽²⁹⁾であり、禴⁽³⁰⁾であり、嘗⁽³¹⁾であり、烝⁽³²⁾などである。

言ふ迄もなく是等の祭禮は、約千年に近い周代を中心に考察して、従つて周代以前のものが繼承されて居たり、或は周末の祭であつたり、乃至は周の時代に於てさへ祭の名ばかりを存して中絶し、更に後には全く行はれなくなつたものも混じて居るに相違ない。さういふことは吾々の身近かな例にさへ、僅かな時代の推移の中に見受けられる事實に徴して、そのやうに言ひ得られる。しかしながら今は、そのやうな神々や祭祀が當面の問題ではないのである。

それよりも支那大陸の、西方の奥地であるウラル・アルタイ地方から現れて來たところの、而して日本原人などと根幹を同じくする周氏族が、その政治的統一に、前時代の殷に於ける狩獵民族的傾向を物語る血腥い祭禮を

揚棄することによつて、宗教的自由を興へて新しい信仰を勃興せしめることにより、民心の歸一を計つた點を見落してはならない。

何となれば黃土地帯に西南方から移つて混血した雜種の漢民族と自稱する一民族は、民間から輩出して秦を倒すや、周氏族の宗教政策を巧みに攝取して成功したからである。

而して斯の如き一つの信仰共同態を組織することに依つて、幾多の異民族を包含する漢といふ大國家を建設する強い紐帶としての役割を果さしめたのである。さうして易は、そのやうな温床に育つた。従つて易は、漢民族の文化の所産ではないのである。この點を判然と認識しなければならぬ。

古代東洋人の宗教的心理の所産として卜筮を認識することは妥當な見解であらう。と言ふよりは宗教的心理を生む素朴な過程に隨伴して、却つて卜筮といふ媒體を必要としたと觀察したい。

そのやうな宗教心理の検討は易學史の本來の目的から逸脱したものはあるが、しかしながら卜筮が生れる必然性の中に、既に他の文献に於て古代東洋人の一つの性格を物語る神祕的傾向の存することも亦見遁してはならないのである。さうして此の傾向は時代を経るに従つて極めて固陋なまでに支那人の性格に喰ひ込み、遂には顯著な特性として彼等の運命を支配する迄に至つて居るのである。

その神祕的な豫言は讖緯(33)として知られ、左傳の中に豫言として取り扱はれて居る繇辭は、その最も古風な格調を示して居るものである。左傳易の研究としては清の毛奇齡(34)に左國易説があり、新井白蛾(35)に春秋占筮易があり、

眞勢中州⁽³⁶⁾に左氏傳古話考があることは多くの人の知るところであらう。本田成之氏の如きは、易などは傳を除いたら皆な讖緯の辭ばかりであると云つて差支えない。易の十翼の如きは此の謎のやうな讖緯の言葉に合理的の説明を加へたものに他ならぬであらう、と迄に極言してゐるが、これはもとより行き過ぎの言説であつて、必ずしも易をその様に認識することは學的ではないのである。

唯、吾々が僅かに肯定する所以のものは、讖緯をさへ生む温床としての支那的性格を、宗教上の立場から包容するに過ぎないのであつて、畢竟、易は古代東洋人の自然發生的な科學として、その發展の様相に於ては目的意識的な文化科學として、共に把握し得ることを主張するものである。

春秋に扱はれた占は、易學者の側から許りでなく、多くの支那學者間に論議の對象として歴史的な閱歷を有つてゐる。といふ事實は、左傳の中に織り込まれた讖緯的説話を没却しては、遂に左傳を全副的に理解し能はない如く、經書と緯書とは絶對的に區別し得ないといふ事實を物語るものなのである。即ち讖緯なりとして退くべからざる所以である。

この點に本田成之氏は其の經學史論に述べて曰く、「春秋」も此の緯讖の考から發生したのであらうと余は斷定するのであるが、勿論、これを解釋するにも之を用ひない譯にはゆかぬのである。讖緯の書は漢志⁽³⁷⁾に載つて居らず、奇怪な記事が多く、古いことがあるかと思へば漢末の事まで書いてあることがあるから、或は此等の書は皆な漢末の哀帝⁽³⁸⁾、平帝⁽³⁹⁾の際に出來たものであらうといふ説もあるが、必ずしも左様ばかりではない。恐らく經學と

は密接の關係があるものもあり、殊に易、春秋などは之を離れては全く説明の出来ぬものがあらうと思はれる。
論語に

鳳鳥不_レ至、河不_レ出_レ圖、吾已矣夫（子罕）

とあり、易傳に河出_レ圖、洛出_レ書、聖人則_レ之とあるのは讖緯のことを書いたものである。鄭玄の六藝論に、
六藝は圖の生ずる所なり、とあつて詰り六經は皆な讖緯から出來たものであるといふ意味である。少くとも鄭玄は左様に解釋して六經に註釋を加へたものらしい。論語の彼の文句は何ういふ意味で言つたか分らず、また眞に孔子の言葉かどうかも分らぬが、易、春秋には随分怪異のことが多く書かれてあるがこれを除去することは出來ぬのである。胡毋生や董仲舒などの重要視してゐる春秋の條例といふものも亦皆な讖緯から來てゐる様である。その他、公羊など今文派の微言大義といふやうなものも亦これから出たものやうである。緯書は大部分は傳はらぬが處々に散見してゐる所から少しばかり鈔録して見ると（古徵書玉函山房輯佚書、開元占經）

孔子、庶に在りて徳、施す所なく、功就す所なし。志は春秋にあり。行は孝經にあり。又曰く、某、匹夫徒步を以て正法を制す。春秋を以て商（子夏）に屬し、孝經を以て參（曾子）に屬す。（孝經鉤命訣）
孔子、春秋を作り、天人の際を陳べ、異を記して符を考ふ。（春秋握誠圖）

これ等は「史記」自叙傳に「太史公曰、余董生に聞く、曰く、周道衰廢し、孔子、魯の司寇となり、諸侯之を害し、大夫之を糞ぐ。孔子言の用ひられず、道の行はれざるを知り二百四十年の中を是非して以て天下の儀表と

爲す」といふ所や、「漢書」の董仲舒の對策に似た所がある。こんな文句は澤山また有る。また孟子の「世衰へ道微にして云々孔子惟れて春秋を作る」といふ意味とも似通つて居る。その公羊傳に一致する所の多いのは、鄭玄が孔子善₍₄₅₎干讖と評したので分る。

王とは孰れを謂ふ、文王を謂ふ也。

春秋、三科九旨を設く。(春秋緯演孔圖)

昭定哀を見る所の世と爲し、文宣成襄を聞く所の世と爲し、隱桓莊閔僖を傳聞する所の世と爲す。(同上)

これ全く何休₍₄₅₎の説と一致して居る。

正朔三にして改まり、文質再にして復す云々。(春秋元命包)

董仲舒及び一般の公羊家の取るところ、文質三統₍₄₆₎の説は是である。

元年とは何ぞ。元、宜しく一と爲すべし。之を元と謂ふは何ぞ。曰く君の始元なり。春秋は元の深きを以て天の端を正す。天の端を以て王者の政を正す。正は上、天文を奉じて號令を立てざれば即ち道術原なし。故に先づ春を陳べ後に王を言ふ。天深く其の元を正さざれば則ち其の化を成す能はず。故に先づ元を起し、然る後、春を陳ぶ。(春秋元命包)

これ亦、董仲舒の説の出る所で天人相與の關係を述べた者である。天を以て人を正し人を以て天を推すといふ説である。余は前に經學は昔の巫、史に淵源があると考へたが、巫、史とも天人相關に依つて説を立て其が洪範₍₄₇₎

の庶徴となり、後には五行思想などと結び付き天文曆數と人事とを相關せしめて凡ての事柄を判斷するやうになり、其が漢の陰陽災異の説となつたのである。「春秋」及び「春秋傳」は丁度その中間に位するものである。孔子は勿論、孟子に至つても吾之不遇魯侯天也。臧氏之子、焉能使予不遇哉と云つた所は一種の天人の信仰で讖緯的である。従つて左氏や公羊に天人相關の讖緯の説があつても異むに足らぬのであると。

吾々は、周易以前の未完成易の在り方を、そのやうな文献の中から片鱗を拾ひ出すことは、さまで困難ではないのである。

卜筮といひ、讖緯といひ、種々なるものが上代の轉換期に際して混合したり、同化し合つたり、融解したり、そのやうな文化的機能が、漸く歴史に現れる頃になつた物を基準として、吾々の思惟業績を擴大して行かなければならない。

(1) 莊子、外篇天運篇に曰く、孔子謂老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經。自以爲久矣。孰知其故矣。而して其の天下篇に亦曰く、詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分と。

(2) 詩經なり。殷より春秋時代に至る詩三百十一篇。内六篇は題目のみにして笙詩といふ。

(3) 書經なり。もと百篇ありしが、秦の始皇の時に燒け散佚す、今、傳ふるところの古文及び今文を合せて五十有八篇あり。

(4) 六藝に射あり。周の時代は射を重んぜり。スキタイ系統の民族は弓矢の道を重しと爲すものゝ如し。

(5) 計算官とは、射儀の時、盛算器を持つ者、即ち射儀の計算官これなり。射義を見よ。

(6) 周官の太卜、卜師、龜人、蕪氏、占人の諸職、また尙書洪範、また史記龜策傳等に卜法に關する文あり。その法、明火を取りて燧を燒き、その火、熾んなるに及びて楚燂(また木契といふ)を燃して龜甲を灼き、罅裂(これを兆といふ)によりて占ふ。既に漢の代に至りて衰へ、唐に至りて卜官絶えたり。筮は筮に文を出す。

(7) 説文に曰く、巫、祝也。女能事二無形、以レ舞降レ神者、象二人兩袂舞形一とあり。史記の天官書に殷巫咸精二天文曆數一といひ、祈禱、降神のほか祓除を行ひ、醫藥、卜筮、天文を兼ねたり。周禮に男女の巫のことあり、巫は女のミコにして、覡(げき)は男のミコなり。

(8) 繇(ちゆう)なり。卜筮の辭をいふ。左傳閔二年杜預の注に繇、卦兆之占辭とあり。また孫詒讓の周禮正義には案、卜繇之文、皆爲二韻語一、與レ詩相類、故亦謂二之頌一とあり。その有名なる例は宣公四年の傳なり。晉の獻公、驪姫を以て夫人と爲さんと欲し、之を卜するに不吉なり。之を筮するに吉なり。公曰く、筮に従はん。卜人曰く、筮は短く龜は長し。長きに従ふに如かず。且つ其の繇に曰く、之を專にせば渝り、公の渝を攘まん。一薰一蕪、十年にして尙ほ臭ありと(專レ之渝、攘公之渝、一薰一蕪、十年尙猶有レ臭)必らず不可なりと。聽かずして之を立て奚齊を生む。その他の例枚舉に遑なし。案ずるに繇の字、漢書文帝紀、顔師古の註に、繇、晉丈救反、本作摯、摯書也。謂レ讀二卜詞一也とあり。

(9) 漢書藝文志の周の宣王の太史の名、始め蝌蚪文の遺風を改めて大篆十五篇を作るとす。所謂、摯書または周篆これなり、許慎の説文叙も之に従ふ。近世、王國維これを疑ひ、史籀篇疏證を著し、一大卓見を示す。

(10) 昊天は天の神なり。

(11) 上帝は古代にありては黃帝、白帝、青帝、赤帝なり。後、漢の高祖、雍の四帝祠を見て怪しみ、黑帝を加へて五帝の祠を完成せりと。これ五行思想の發生を物語るものにして、五行家の作爲せるものか。

(12) 司中は星の名なり。

(13) 司命は宮中の小神なり。

(14) 風師は風の神。また箕星の名なり。

(15) 雨師は雨の神。また畢星の名なり。

(16) 社は土の神。后土なり。

(17) 稷は穀物の神なり。祭義に曰く、建_二國之神位、右_二社稷、而左_二宗廟と。

(18) 一年の間に行ふ五つの祭を五祀といふ。春は戸、夏は竈、秋は門、冬は_二路、季夏は中霤を祀る。一に行を井に作る。

(19) 泰山(東嶽)、華山(西嶽)、霍(衡)山(南嶽)、恆山(北嶽)、嵩山(中嶽)これなり。

(20) 古の善き天子なり。

(21) 禋祀(いんし)なり。天帝を祀るに精意を以て享祭すると解す。濱名祖光氏曰く、舜典に、上帝に類_リし、六宗に禋_レし、山川を望_モす、とあるは古來の註者、類禋望を以て皆な祭名となせど、その名の義は經學の大家たる朱子さへ、類は只是れ祭天の名、其の義は則ち曉るべからず、と言へる如く、終に分らないのである。それも其の筈、禋類(いぬり)は我が祖國語の祈禱(いぬり)にて、上帝に禋類、六宗に禋類したのを、漢文の格調から、禋類を禋と類に分けて、上帝に類_リし、六宗に

禋すとなしたのであれば、漢語として讀むでは分らう譯がない。望も望秩(まつり)の下略である。春秋國語に、禋は精意にして享くるの謂と見ゆ。精意とは心を專にすること、享くるとは神より恵を受くることなれば、禋の祈りなること眞に明らかである。

(22) 柴は紫なり。柴を燔きて天を祭るなり。周禮、夏官に男巫掌二望祀一とあり。また史記、秦始皇紀に至二雲夢二望二祀虞舜於九疑山一とあり。また漢書の禱二祀神祇二望二秩山川とあり。共に同じ。尙書、舜典、傳の九州名山、大川五嶽、四瀆之屬、皆一時望三祭之一とあり。瀆名祖光氏の東大古族言語史觀に據り、一説を出す。曰く、祭を約むればマチに歸納す。ツリの約千なればである。因つて庚申待は庚申祭と知れる。月待といふのも本け月祭の義であつたらう。是等の所謂、待は上世に早く望秩に作られ、今猶ほ舜典の中に存す。曰く、歲の二月、東に巡守して岱宗に至り、柴して山川を望秩すと。秩は古へ單音に於て用ひられたれど、亦、入聲にあつてはチツと音した。即ちチツは東音のチリである。之に望が加はつてマチリとなつたのが即ち祭である。されど斯る東語の顯露が、後の漢儒に覺れる譯なければ、彼等は字義に總つて訓むほかない。是に於て孔安國は言へらく、東岳諸侯の境内に在る山川大山を、其の秩次の如く望むで、而して之を祭れるなりとされど典文には望二秩山川一とある許りで、望にも秩にも、其の字に祭の義が無いのであれば、孔安國の説の如く釋かうとするには、望二秩山川一而祭とあつてからのことで、さうないうちは其の説を容れ所がない譯である。故に望秩を秩次に望むと訓んでは、祭の字を添へなければ何の意義をも爲さない文句となる。是れ豈に典文の原意ならむや。蓋んぞ望秩を以て當代の祭名とは釋かざる。是れ我が祖國語の望秩にて祭の義なればである。魏志東夷傳に、舞天(舞古音まう天古音ちん)と見へたるも、望秩の異譯にして、當時、濊族が祭祀をマチリ、もしくはマチと言つてゐたからである。某博士が舞

天を巫覡と訓むるのは、我が祖國語の大陸に於ける古代の地位、及び權威に就て未だ何物を、究め居られざるに因るべしと。

また曰く

舜が柴さいして山川を望秩まつつたといふは、幣へいして山川を祭つたことなれど、當時、ヌサを單に柴さいとのみ言つたのか、或はヌサの上略なるか、何れとも詳かでないが、その何れを庶しとするやは後代の所謂、封禪を考へた後の判斷であらう。但し漢儒は柴さいを以て柴薪さいしんの柴と爲し、祭を燔やき天を祭る作法の稱と言つてゐる。如何さまさう取れもすれば、亦、敢て濫りに其を否定することもしない。因つて先づ封禪を考ふるに、封は奉ほうにて、一音はフウ、約めてフと音す。そして其の字音のフは不奴ふに往來の音則に依り、ヌと音せらるること多ければ、封も奉ほうも俱に讀むでヌと爲せるのである。蓋し字音の奉ほうと國語の幣へいとは根本に相通へるものあるべく、奉字の形象と、大麻おほぬえの圖樣とが互に相似て違はないのが以て其の證とされる。夫の岩戸神樂の其の時に、眞禰の上枝に玉を取りつけ、中枝に鏡を取りかけ、下枝したへに白帛しろはく青帛あおはくを取りたれて以て幣へいとし捧げた状を、造字藝術の者に命じて圖象せしめたなら、古篆の奉字に造つて獻じたに違ひない。舜が五玉三帛を供へたといふのも、亦、この式の供へ方であつたらう。また蟬せみは祭まつにて、祭も亦、神前の供物に象り造られた文字にして、一音はサイ、主音はサ、乃ち奉ほうと共に奉祭ほうまつの成語を爲す。知るべし幣へいの奉祭ほうまつにして、亦、是れ封禪ほうぜんなるを。之を封禪ほうぜんとなせるは固より假字に過ぎざれど、裏に潜める祖國語のヌサが此の二字をして靈たまならしめてゐる。何を以て其の然るを知るやと言はゞ夫の封禪といふ稱呼は、もと漢族の言詞に非ず。されば彼等のもてる正經古傳に、嘗て封禪の二字を現示した者が無い。但その東族の故地に國し、東族の遺裔を民とせる齊國に於て、其の地で人となつた管夷吾の書に、封禪篇あるを其の最始

とする。されど其も篇名ばかりで、文は無い。文は無けれど當にあつて然るべき縁境の中に現はれた篇名である。則ち之を史記封禪書に見ても、封禪のことは齊の桓公と管仲との問答に造られて居り、また之を白虎通に見ても、封禪を行ふは齊の泰山でなければならぬことに定義付けてある。泰山は之を岱宗とも言ひ、禹域第一の名山なれども、周から目して東夷となせる地の靈峰である。而して其の所謂、東夷は殷周革命に由りて、我が東大族の勢力が遂に東方に偏在した稱なのであれば、即ち泰山も其の中に存し、封禪の稱も其の中に現れ、齊の桓公と管仲との問答も其の中に於て行はれたのである、されば封禪の事そのことが元と東大族語より生れ出でたるものなること、亦知るべきに非ずや。しかのみならず封禪の儀の神聖を説いて、秦の始皇を齷弄したのも齊の方士であつた。彼等は幣の一語を封と禪に分ち、升つて泰山の上に於てするを封と爲し、下つて梁父の山に於てするを禪と爲した。曰く、王者の盛業は升り封して其の成功を天に告げ、下り禪して其の弘基を厚うするに在り、然らざれば天咎永く保たれずと。而して其の封禪の盛儀といふは極めて驕奢ならざるべからずと煽り立てた。史記封禪書に載せてある管仲の言(蓋し假托)にも、若し眞に封禪を行はんとならば齊國の富を擧ぐるも猶ほ爲し難しとの風情を説き立てゝある。斯る間にあつて古今秀逸の大詐僞をやつたのは徐福にて、彼は童男童女の多數と、無數の財貨珍寶とをせしめて行方を晦ました。獨り秦始皇に於てのみ然るに非ず、彼等、諸方士は漢の武帝をも然く齷弄し去つたのである。茅坤曰く、封禪はもと幻なり、秦皇漢武を以て終る、悲しい哉と。吾が祖國語の幣が封禪の字に於て奇悖の世相を秦漢の際に幻出したる斯の如し。之に對し司馬遷は封禪の儀、闕然として湮滅し、その詳かなるは得て紀聞すべからず、と言つてゐる。蓋しそれは古儀に就てゝあらう。遷は漢武の世の太史なれば、秦皇漢武の行つた封禪の儀の如何なるものであるかを聞見しない筈はない。それにさう言ふのは古儀に就てゝあらうか、何にせよ幣の原義

が借字の封禪に掩はれて居るのであれば、それと悟らずにひたすら封禪の字に就て義を求めては、その分らぬも道理にこそ。白虎通に「封とは金泥に銀繩するなり」と。また云ふ「石泥に銀繩し封するに印璽を以てするなり」と。その繩を言へるは我が注連繩に幽契あるべく思はるれど、封を以て封緘の義となしたは字義に即せるものである。また禪を以て讓の義と爲し、成功の相傳を明かにする意の稱と爲したのも禪讓の禪に即したものである。然り而して白虎通の是等の説は、後儒の從ひ難しとする所であつて、史記正義に曰へらく「泰山の上に築土して壇を爲り、以て天を祭つて天の功に報ゆ、故に之を封といふ。泰山の下、小山の上(梁父)に於て、地を除いて地の功に報ゆ、故にこれを禪といふ」と。また曰く「之を禪といふは、之を神とするなり」と。こは神と禪との通聲に考へたのであらう。斯の如く種々に解かれた結果、終に「封禪とは祭名、土を積み、山を増ふるを封といひ、壇を爲り、地を祭るを禪といふ」に落着した。壇とは地を除ひ庭とするをいふ。要するに封も禪も祭を爲すための土臺といふに決した譯であるが、誰か知らん此の土臺の上に立つる奉字形の幣が即ち是れ眞の封禪なりとは。封禪が黄帝以前の無懷氏からあつたといふのも、燕齊方士の寓言ならんが、しかし幣は人世の最初からあつたに相違なからう。舜が岱宗に至り、山川を望秩つたといふのも、亦、封禪を以てしたに違ひない。されど正經古傳に絶えて其の字が見へないので、只、わづかに舜典に「柴さいして望秩まつる」とあるばかり。蓋し柴はヌサの上略ならんかと。

(23) 樵燎(いうれう)なり。庭火なり。

(24) いけにへを殺し血を取りて神に奉るなり。

(25) たぬきなり。

- (26) 神を祭るに牲をハリツケにするなり。
- (27) 肆獻裸——未考
- (28) 饋食は祭祀に熟食を獻ずるをいふなり。儀禮に特牲饋食禮あり。
- 29) 祠は周の春の祭なり。
- (30) 禴(やく)は禘(やく)なり、夏殷の世、天下の行ふ春の祭なり。周の代に及んで春祭を祠といひ、夏祭を禘といふ。
- (31) 秋の祭を嘗といふ。
- (32) 冬の祭を烝といふ。
- (33) 讖は豫言または隱語なり。緯は經に對す。普通これを連稱して天人感應、または陰陽五行の説に基き、符瑞説もしくは卜筮鬼神の思想を加味し、以て天文地理災祥變異を説明す。前漢の元鼎、神爵、甘露などの年號は符瑞に基き、史記の天官書、漢書の天文志、五行志も亦、天人感應を説明せり。別に讖緯學あり。これを緯後學、また內學、また秘經等と稱せり。
- (34) 後に傳を出す。
- (35) 先哲叢談、續近世叢書語等にその傳見ゆ。新井白蛾。名祈登。字謙吉。江都人。父祈勝、加賀人。西遊ニ京師ニ、從ニ淺見綱齋ニ學、後遷ニ居江都。白蛾年十三、學ニ千家庭ニ、父奉ニ父命ニ師ニ事菅野兼山ニ、講ニ究洛閩之學。兼山、名彦、字直養、三宅尙齋門人也。白蛾有ニ雋才、年二十二、始聚レ徒茲授、然當時物門之徒、以ニ漢魏古學、李王古文辭、風ニ靡一時、白蛾自知レ不レ可ニ與抗。去遊ニ關在諸國、後來ニ京師。研ニ究易義、專信ニ象數占筮之說、以建ニ門戶、著ニ易書十餘種、以ニ占筮ニ恒有ニ奇中。其業振ニ一

世、婦人小童莫_レ不_レ知、其名_二者_一、世稱曰、古易中興。晚應_二加賀聘_一、徒_二於金澤_一。寬政四年歿。年六十八と。

(36) 續諸家人物志、尾張名家誌にその傳見ゆ。眞勢中洲。名は達富。字は發賁。中洲と號し、彦右衛門といふ。尾張の人なり。京師に學びて新井白蛾の門に遊び、易說を以て世に知らる。後、専ら占筮のみを事とし、屢々、奇驗の名あり。文化十四年二月、年六十四にして卒す。著書甚だ多く、周易講義、周易象徴、周易諺解、復古堂一家言、左國占法斷解、復古雜著等あり。

(37) 漢書十志の一なり。藝文志なり。

(38) 前漢十世なり。姓は劉、名は欣。定陶王康の子、元帝の庶孫なり。母は丁姬。このとき政柄外戚に移り、漢室益々弱し。帝。位に即き主威を強くし、武宣に則らんとして屢々、大臣を誅す。然れども痿痺を病み、國を享くる永からず、元壽二年崩す。在位僅かに六年なり。

(39) 前漢十二世なり。名は箕子、後に衍と改む。中山王興の子、元帝の庶孫なり。大司馬王莽、政を執る。元始五年、王莽。帝を毒殺す。在位僅かに五年なり。

(40) 六藝に二あり。禮樂射御書數と而して六經なり。鄭玄の六藝論は漢魏遺書鈔三一にあり。

(41) 胡毋生は漢代、齊の人なり。公羊春秋を始め、景帝のとき博士となり、董仲舒と業を同じくす。年老ひ歸りて齊に教授す。齊の春秋を云ふもの皆な之を宗としてつかふといふ。胡毋は氏なり。生は名なり。

(42) 董仲舒は漢の廣川の人なり。若くして春秋を治め、考景のとき博士となり、帷を下して教授し、三年、國を窺はずと傳へらる。武帝の時、賢良を以て對策して嘉納せられ、江都の相となる。次いで災異を言ひ、之を誤りしに坐して黜けら

る。人と爲り廉直、膠西の相となり、後、病を以て免じ、桂巖山に居り、桂巖子と號す。

(43) 清代、咸豐同治の頃、江蘇浙江地方に起りし公羊學派（また常州學派）は、西漢今文の學を以て、東漢古文の學と區別し、公羊を以て西漢今文の學なりとす。

齊の人、公羊高は業を子夏に受け、春秋傳を作る。これ左氏傳、穀梁傳と共に春秋三傳と稱せらるゝ公羊傳なりとす。また外傳五十篇を著はせり。

(44) 公羊學派は、孔子の微言大義は今文家の公羊高にのみ依りて傳へらるるものなりと主張す。

(45) 何休は東漢の任城、樊の人なり。字は邵公。質朴にして口訥、而して六經に通ず。鄭玄と論争せしことより知らる。北新城の長に除せられ、大いに講舍を作り、生徒百を集めて學を講ず。太傳の陳蕃これを召して政事に參與せしめしが後、陳蕃、事によりて退けられしを以て、坐して廢錮せらる。それよりまた門を閉ちて籠居し、著述に従へりと。

(46) 夏殷周の三代の政治を文質三統といふなり。集解に曰く、馬融云所レ因謂ニ三綱五常、所ニ損益一謂ニ文質三統一也と。

(47) 尙書、周書にあり。洪は大なり。範は法なり。天下を治むる大法の謂にして、その目すべて九あり、故に洪範九疇と云ふ。

第 五 章

易が人に魅力を與えるものは、其の奇矯な符號と、その配列の繪畫的表現にあることは否定することが出來な
う。

従つて易經はこれを全然、文章でのみ解釋することは完全な理解に到達し得ないのである。

それ故に說文解字を著した許慎は、黃帝の時代の史官、倉頡が、始めて文字を作つた時よりも、更に遡つて、
八卦は實に伏羲が作つたのであると主張して居る。即ち八卦は、文字よりも先に作成されたといふ說である。而
して此の提案は今日も有力な支持を受けて居るのである。

章を改めて研究されべき、八卦は何人の手によつて製作されたかといふ根本的な命題に入る前に、先づ吾々は
古くは後漢の時代に既に、斯の如く文字に先行して八卦が存在したといふ注目すべき論が行はれて居た點を忘れ
てはならないのである。而してその事實は、夏、殷、周の三易より更に古く、原始型の易が存在したであらうと
する想像に對して、有力な現實的な根據を與えるであらう。

されば易緯には、また別の主張が述べられて居るのである。それは八卦こそが古代の文字である、といふ示唆
に富んだ說である。従つて明の時代に及んで陳仁錫評の通鑑綱目前篇卷ノ一に曰く、太昊伏羲氏の時、八卦を劃
し、書契を作る、と云ひ八卦と文字とは同時に創作せられたものであると説いて居る。

そこで近世の支那學者として著名なラクーベリ⁽³⁾の如く、八卦は古代の辭書である、といふ説がなされるのであらう。ラクーベリの説は奇警に過ぐるやうであるが、しかしながら廣義な意味に於ては、八卦は、而して亦、易經に規定せられた六十四卦の内容は、百科全書的内容を包藏して居ると云へば言へないことはないのである。

その作者を孔子と傳へられる十翼にも、伏義は八卦を劃す、とは明記してあるが、易を作るとは書いて居らない事實からも、易よりも卦といふ文字の方が更に史的に古いのではあるまいか。

しかしながら卦といふ字が古いとは云へ、語としての意味を今日ほど明確に規定してゐたか否かは、大いに疑はしい。然るに拘はらず結繩文字の前身としての卦といふ語が、今日、吾々の知れるが如く奇偶の符號として、それが其の儘、近代にまで繼承され、而もその機能を發揮してゐることは、確かに驚嘆されて好い。

ともかく卦が符號であるか、文字であるかといふ微妙な問題は、將來への文字發達史の上に、一つの問題を投げかけて居るのであつて、易を修する人々にあつても關心無きを得ないのである。

奇偶六畫の符號は、このやうな古色蒼然たる神祕の影を搖翳させて、天地萬物の像を表現する。それを形而上學的に受け取るのも、また形而下學として攝取するのも、それは學ぶ人にあつて隨意であるが、このやうな易の性格から、宋の楊誠齋⁽⁴⁾によつて唱へられるやうな、畫前の易と、畫後の易といふやうな説も亦生れるのではあるまいか。

曰く、易に二あり。未畫（畫前）の易あり。既畫（畫後）の易あり。未畫は易の理にして、既畫は易の書なり。

天尊地卑といひ、卑高以陳といひ、動靜有常といひ、方以類聚物以群分といひ、在天成象在地成形といふ、此れ未畫の易なり、易の理なり、聖人作るあり、仰觀俯察、是に於て此の畫を制し、彼の理を寫し、彼の理を羅し、此の畫に歸して易の書生ず、此れ既畫の易なりと。

斯の如く未畫の易を設定して、哲學的解釋を下し得るに至つたのは、儒學が佛教の影響を多分に受けた宋の時代に於て始めて見られる現象で、しかしながらそのやうな展開は、易學を飛躍せしめずには措かなかつたのである。而して斯のやうな易の取り扱ひ方は、宋の時代を最極とし、されば易の理念は高度の段階に達し、明末清初に至るまでに佛教的易解さへ生れたのである。従つて奇偶六畫の形象の現れ方に確然とした理法が示されてゐる易は、それ故に長い歴史と共に常に、新しい衣裳を凝らして存在する理由である。

卦の、最もオリヂナルな姿は、周子(5)の謂へる如く圓周であつたらうといふ事は疑へない。而して一陰一陽は表現の世界に於けるところの對立の様相から生れたのは言ふ迄もないことである。朱子(6)は之を解釋して太極判れて始めて一奇一偶を生じて一畫と爲るもの二つ、是を兩儀と爲す。其の數は陽は一にして、陰は二なり。

と易學啓蒙(7)に述べて居るが、この太極より兩儀を生ずるといふ思想體系の發想は甚だ注目すべき點でなければならぬ。

周が其の國家統一策に取り容れた王道の思想的基準として、この易理を根本の基礎としたといふ事は、周だけ

の創造であらうか。

一つの重要な點を指示すれば、古事記の冒頭に曰く

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、次高御產巢日神、次神產巢日神、此三柱神云々。

とあつて、天之御中主神より、高御產巢神、神產巢日神の陰陽二柱の神と共に造化の三神と申し上ぐる日本神代の體系も亦、斯の如き出發點を具有して居るのである。

また日本書紀神代卷の大己貴命の歸順の條に曰く

(前略) 高皇產靈尊、因勅曰、吾則起天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣。汝天兒屋命、太玉命、宣持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉。乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之云々。

この神籬は後世の神祇官なることは既に文學博士栗田寛先生の考證があり、且つ古史に見へる最初の記事として古來から注目される文獻なのであるが、神籬は高千穗宮に齋き祭らせ給ふたが、當時は御社は無く、その之の有つたのは神武天皇の御代になつてからである。古語拾遺の「逮于神武天皇東征之年云々、爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬」とあるのは其で、即ち八神を祭られたことが知られるのである。その御神名は

高皇產靈

神皇產靈

魂留產靈

足産靈タムミタマ

大宮賣神オホミヤノメノカミ

事代主ノ神

御膳神ミケツ

神名帳なる神祇官の西院に坐す御座ミカの祭る神八座は是であるが、奇しくも其の展開は八卦と等しい八座の組織によつて、神祇官八神殿が成立して居るのである。

後世、大膳式に見へる御膳神八座とあるも、右に由來して御食津神カミツネを本神として、他に御膳ミケツに由ある神々七座を合せて、八座を祭られたものであらう。栗田先生はその注に曰く

「宮内式に、凡ト下供奉神事ニミヤノ小齊人ニミヤノ者其日神祇官副宣ニミヤノ、始ニミヤノ自ニミヤノ八男八女ニミヤノ至ニミヤノ御膳司人等ニミヤノ、次々令ニミヤノ參進ニミヤノ云々、即隨ニミヤノ次令ニミヤノ昇ニミヤノ廳ニミヤノ、先トニミヤノ八男八女ニミヤノ已下御膳司人等次諸司人等ニミヤノ云々と見え、儀式神今食儀に、神祇副令ニミヤノ云、八社男八社女、御膳司等色々人等次第令ニミヤノ參進、省掌稱唯、退出、仰ニミヤノ八社男以下、依ニミヤノ次令ニミヤノ參進、先八社男次八社女、次典膳以下云々云々、其八女及女官立ニミヤノ廳上東壁下ニミヤノ云々、膳伴造鑽ニミヤノ燈即炊ニミヤノ御飯ニミヤノ安ニミヤノ宿禰吹ニミヤノ火、内膳司率ニミヤノ諸司伴部及采女等ニミヤノ、各供ニミヤノ其職ニミヤノ料ニミヤノ理御膳雜物ニミヤノと見えたる八男八女を、八社男八社女とも稱ひて、もはら御膳司とも仕奉る趣なるは、其の遺式なるべきに思ひ合べし。また文德實錄に、齋衛二年十二月、天安元年四月、大

炊寮大八島神に敍位の事見え、三代實錄の貞觀元年四月、大炊寮大八島神に敍位の事見え、三代實錄の貞觀元年正月敍位の下に、大炊寮大八島竈神八前と見えたる竈神も、同時に大八島に饒りて、八神を竈神として祭り給へるにはあらざるか。竹取物語に、大炊づかさの飯かしく屋の棟に、つくの穴ごととに、つばくらめは巢をくひ侍る云々と申す、云々中納言云々籠に乗りてつられのぼりて、うかがひ給へるに云々、綱を引すぐしてつなたゆる、すなはちに八島のかなへの上のけさまに落たまへり、といへること見えたり。さて此の御膳神八座を大嘗の時祭らるることは、大嘗祭式に祭御膳八神於内院と見え、また凡齋郡之齋院祭神八前云々、また、凡大嘗祭事畢差三彌宣卜部一人遣兩齋國祭御膳神八座即爲解齋など見えたり。」

吾々の大和民族の祖先達が定着した大八島國は、八座の神を祭つて、八社の男、八社の女をして御膳の司とした。このやうな事實は單なる偶然から來たものとする事が出来るであらうか。

禮記に曰く

天子の大蜡八、伊耆氏始めて蜡を爲す。蜡は索なり。歳の十二月、萬物を合聚し、而して之を索饗するなり。主は先嗇、祭は司嗇、饗は農、及び郵表嘽、禽獸なり。迎貓は其の田鼠を食する爲め、迎虎は其の田家を食する爲め、迎之を祭るなり。祭坊は水庸事の與めなり。土は其の宅に反し、水は其の壑に歸す、昆虫は作す毋く、草木は澤に歸す云々と。

註に曰く、蜡は八神を祭るなりと。

このやうな類似の有機的關聯に就て、古來、何人が想ひをめぐらせたことがあつただらうか。從來、日本の神代史をひもとく人々が見通して居た明らかな事實は、日本上代史を單なる一島國のそれとして理解して居たといふ狭い眼孔そのものであつた。神代史も亦、大陸的規模に於て把握されなければならなかつたのである。

古事記の作者は、吾が日本上代を

國種如クニノタガヒニ浮脂ウキアブラニ而、久羅下那洲多陀用幣疏クワシノナシラタタヒノヒラキ之時

といふやうな描寫をした爲に、近代の人々は適確に讀むことが出来なくなつて仕舞つた。しかしながら三紀層の火山噴出のため形成せられた日本列島は、正しく右の描寫の如き状態にあつたことは想像し得られるのである。而して此の火山時代の地質的變化は、大陸と日本とを隔絶する要因となつたであらう。出雲族が朝鮮半島と交通して居た歴然たる實證に驚く前に、上代日本民族が如何に大陸に於て活動して居たかを想ひ描いた人があるだらうか。

八卦を作成したと傳へられる伏羲にしる、農耕を民に教へた神農にしる、それ等の民族系統の活動地帯は、山東、直隸、河南の一部である沖積層の地域である事實は注目されなければならない。若し大膽に言ひ得るならば支那最古の文化が築かれた沖積層地帯は、實に日本古代の大和民族の文化に他ならないといふ事これである。而して黃帝に至つて、壽丘（河南省開封府新鄭縣）に生れ、涿鹿（直隸省宣化府保安州）に都し、橋山（陝西省鄜州中部縣）に葬られたと傳へられて居るが、この黃土帯に活躍した三皇は、少くとも日本民族と根幹を同じくす

る民族ではなからうかといふ想像は、必ずしも排斥出来ないであらう。

學術上、周易として取り扱はれて居る易は、過去に於て左様な悠遠な展望を歴史的背景として所有して居るといふことを記憶して置きたい。

一説に、兩儀は對立ではなく、此の陰^一と陽^一とは、古代東洋人の生殖器崇拜から生れた表現であるといふ論もある。即ち^一は男性器であり、^一は女陰を象つたものとする。釋名⁽⁹⁾によると、陰陽は素朴な天文學から生れたもので、日輪は實であり。月輪は闕である。即ち滿れば闕くるのである。故に日を^一に象り、缺所あるが故に月を^一に象るといふのである。是等の説は陰陽の畫を意義付んが爲に成された彫跡が無いでもない。しかしながら事實は、賢明にも古代東洋人が、彼等の視野に映ずる現象を、對立の姿に於いて把へたと解釋するのが妥當なのである。

此の陽爻と陰爻とを重ねて、更に一畫を加へたといふ智慧こそ、吾々が充分に檢覈しなければならぬ主題と言はなければならぬ。これを四畫となし、或は五畫としないで、何故に三畫を以て満足したのであらうか。

ところが遺憾ながら、之に關する有力な文献は少いのである。若干の夫を觸目して、今日の人々が満足するか否かわからない。何故なら、それこそは後代の學者が放恣な解釋を下したに他ならないからである。

その最も古い文献は易緯乾鑿度である。易緯は既に述べた如く、八卦を古代文字とするところから、端的に三畫を以て文字とし、何故に三畫を生まねばならぬし亦生むだかといふ必然性は、問題として取り上げなかつた

のである。

乾 ☰ は ☷ の形相から来て、即ち蓋天に象るといふ。また川の字に象り、天の銀河が地を覆ふに據るといふのである。

坤 ☷ は ☷ から来て、地道の右順を象るといふ。

巽 ☴ は風を象徴せるもので、風は萬物の形を逐ふて入らざる所なく、天地の氣脈が之によつて相通するからであるといふ。

艮 ☶ は古文の山から来たもので、山は元氣積陽を含み、石を成し、また雨を呼び、山澤氣を通ずるからであるといふ。

坎 ☵ は古文の水の字から来たもので、水の性は内陽にして、外は陰だからであるといふ。

離 ☲ は古文の火の字から来たもので、火の性は外陽にして、内陰だからであるといふ。

震 ☳ は古文の雷の字である。卦名として震と爲すのは、震動する謂であつて雷の聲を形容す。能く萬物を鼓動して、息むものは之を起し、閉づるものは之を啓くからであるといふ。

兌 ☱ は古文の澤の字から来たもので上虚しく、下實なることを示し、徳澤を萬物に及ぼすからであるといふ。しかしながら此の様な解釋は畢竟、何ものをも説明して居らないに等しい。

次に、漢書の律曆志に⁽¹⁶⁾

太極元氣は三を函して一と爲す。

とあつて、これが相當に準據されて來た説であつた。三を函して一と爲すといふことは、天地人の三を含藏して、混淪いまだ判明せず、一となつて居るといふ事を指して言つたものである。されば孟康⁽¹¹⁾の註に

元氣始めて子に起る。未だ分れざるの時は天地人混合して一となる。

などと言つて居るが、これは音律上の問題で、この主題とは關係が無い如くであるが、函三爲一といふ言葉は屢々引用され、また幾重にも附會されるのである。而して此の音律上の原則を卦にまで援用しなければならぬといふ事は、その事自體が極めて薄弱な理由で、結局、何人をも納得せしむるものではないのである。

このやうな經過を辿つた末に、明の郝敬⁽¹²⁾は次のやうな所まで達した。即ち

凡そ物三なれば定る、鼎足の類これなり。凡そ事三なれば備る。冠三加、命三錫の類これなり。時三なれば變る、三年三月の類これなり。人三なれば衆、三黨三軍の類これなり。數三なれば完し、兩邊中間の類これなり。形三なれば具る、首尾胸腹の類これなり。禮三なれば終る、祭三獻、樂三闋の類これなり。

若し斯の如き例を擧げよとならば、四でも、五でも、六でも、七でも、八でも、九でも隨意に羅列して合理化することが出来る。吾々は其所に於てか何等の内容を示さない修辭を聽かされるに過ぎないことを悟るであらう。

されば近世、中華民國の郭沫若⁽¹³⁾は其の信奉する唯物史觀によつて周易を分析して

曰く

八卦の根柢は吾々が甚だ明瞭に看取し得るが如く、古代の生殖器崇拜の残存である。一を畫して男根に像り、二に分つて女陰に像つた。従つてこれよりして男女、父母、陰陽、剛柔、天地等の觀念が演繹されたのである。原始人の數的觀念は三を以て最も多きものとし、最も神祕なものとしてゐた（三光、三才、三綱、三寶、三元、三品、三官、三帝、三身、三世）。一陰一陽の一畫が錯綜し、重疊して三をなすに當り、たまたま八種の異なる方式を得ることが出來た。この事は洛書（禹の時、洛水に浮び出た神龜の背部にあつたと稱する九種の紋樣）が、一二三四五六七八九の配合によつて魔術的な乗積をなしてゐると同様のものであつて、斯る偶然的發見、のみならず十二分に妙趣ある結合は、原始人より見たときに、如何に神奇であり、如何に神祕であつたらうか！ここに於てか河圖（伏羲の時に黄河から浮び出た龍馬の背部にあつたと稱する神祕な圖）洛書の傳説は一樣に生まれ出たのである。八卦は斯くして二重の祕密性に包まれた——一は生殖器的祕密であり、一は數學的祕密である。數學の程度が漸次に進化するにつれて、三三の相重や、八八から更に六十四種の異つた方式を得られることを知つた云々と。

しかしながら郭沫若の以上の説明では、唯物的辯證法さへ本當に解つては居ないと言ひ度いのである。その三を説明するに當つて、原始人の數的觀念は三を以て最も多きものとし、最も神祕なものとした、などと云ふ言葉は、それ自體が神祕的な想像であつて、科學的ではないのである。周易の非科學性を排撃しながら、自ら斯の如

き非論理的な踏誨を敢て爲す以のものは、郭沫若が易理の辯證法を明確に把握して居らないからである。而して易に對する不信を表明する側に立つ人々は、マルクス主義者ばかりではなく、科學的だと稱する近世的ヨーロッパ文化によつて洗禮された植民地的頭腦の一般知識階級が陥入つてゐるところの認識不足と、非科學性の典型として多く見られる事實でもある。

然らば三は如何にして生じたか。

古代東洋人のうちの最も熱情的な、而して思索力を具へた賢明な何人かは、彼等が人間的に生長する如く、自然成長的に其の自然への觀照を擴大したであらう。此の鋭い觀照の前に置かれたものは、自然の中に生起する運動でなければならぬ。陽や光や男を一といふ數で把握することを知つた彼等は、それに對立する陰や暗や女を二といふ數で把握することは、極めて容易であつたらう。その符號が示す如く、一や二といふ數は、しかしながら運動と變化を與へるものではない。

晝の次に夜が來、亦、明けてゆくといふ、斯の如き不休の運動と變化の中で、最も正しい思惟形式として取り上げられたところのものは辯證法であつたに相違ない。一と一に、他の一を附加するといふ智慧は、彼等が運動するものの存在することを認識したからに據るのである。故に三といふ數が生れたのである。

而して此の三を得た時に於て、彼等は自然界には最小のものから最大のものに至るまで、砂粒から太陽に至るまで、また微生物から人間に至るまでが、永久の發生と消滅とに於て、不斷の流動に於て、不休の運動と變化と

に於て——その存在を嚴として保つものである事實を發見したのである。

アリストテレス⁽¹⁴⁾が出現するまで、辯證法といふ思惟方法を知ることが出来なかつたヨーロッパ人に比較して、古代東洋人の優れた知性を、吾々は今こそ見出すのである。而して支那の古るさ、従つて其の文化の歴史を想ひ描く時に、斯の如き斷定は單なる妄誕に非ることを知らなければならぬ。

しかしながら、正、反、合を三で現はすといふ辯證法的思惟は、尙ほ未だ自然生長的な單純さを免れ得ない。而して之を重疊するといふ事實は、エンゲルス⁽¹⁵⁾の謂ふ如く「自然の中に生起する進化過程に對して、總體としての諸關聯に對して、一研究領域から他の領域への諸轉化に對して、類推を、従つてまた、説明方法を提供」することに他ならない。

それなればこそ始めて、三といふ數は首尾完結せりといふことも出来るし、說卦の、三才に象るといふ言葉の意味も明瞭になるし、天人一貫の理法を寓する卦に於て必要な條件を具備するものであるといふ事も、深い意義を以て會得されるのである。

(1) 漢書の古今人表、及び許慎の説文解字序に、蒼頡は黃帝の史官と明記されしより、晉の皇甫謐の帝王世紀また之を傳承し、世の定説となりしが如し。されど異説多く路史、通鑑前編は伏羲以前の古帝王の名となせるは、東洋古代史にとつて注目すべき點とす。古史攷は神農時代の人となし、共に三皇時代に文字を創製せしと傳ふる蒼頡を置くは多くの暗示を含めり。

- (2) 明の人なり。字は明卿。長州の人なり。天啓年間、殿試を以て翰林編修に拜す。權貴の意にきからひて罪を得て籍を削らる。崇禎年間、南京國子祭酒に拜す。次いで病を得て卒す。
- (3) アルベール・テリアン・ドュ・ラクーペリ (Albert Terrien de Lacouperie) 一八四五年、アーヴルに生れ、後、イギリスに歸化し、大英博物館收藏の支那貨幣目錄を作製す。その上代支那文化の西方起源論は、上代支那文化とバビロン文化を比較し、西方亞細亞に淵源することを論じて學界に論争を捲き起せしを以て有名なり。一八九四年死す。
- (4) 後に傳を出す。
- (5) 後に傳を出す。
- (6) 後に傳を出す、
- (7) 後に傳を出す。
- (8) 三卷あり。天武天皇、博覽強記なる裨田阿禮に兼て親撰び給へる舊事を誦み習はしめしを、元明天皇の和銅四年、博士多朝臣安麻呂が阿禮より聞き取り筆記して成れり。
- (9) 釋名(せきめい)八卷あり。漢の劉熙の撰にして二十篇より成る。
- (10) 史志の類にして班固の漢書に置きしに始まり、歷代正史に之を設く。一朝の樂律及び曆法の沿革を叙せるものなり。
- (11) 孟康は三國時代の人。字は公休。孟子十八代の子孫なり。魏の明帝の時散騎侍郎たり。歷官して廣陵郡侯となれり。
漢書を注す。
- (12) 後に傳を出す。

(13) 四川省樂山の人なり。日本九州帝大出身の醫學士なり。かつて郁達夫、成仿吾等と創造社を結びロマンチズム文學運動をなす。後、蔣介石の北伐に従ひ、國民革命軍總司令部宣傳科長となり、國民黨共產黨の分裂後、南昌革命委員會主席團の一人たり。次で上海に歸り再び創造社を起し、文學運動をなさんとせし時、通緝令によりて身の危険を感じ、日本に亡命し、一九三〇年ひそかに歸國し、中國左翼作家聯盟に参加せしも蔣介石の壓迫によりて再び日本に亡命す。一九三九年、支那事變勃發するや蔣介石は中國共產黨の傀儡となり、通緝令を撤廢す。此に於て郭沫若は日本を脱出し人民戰線派に投じ、現に吾が國によりて其の生命の安全を得たりし恩義を忘却して、日本の中傷誹謗に狂奔し居れり。

(14) アリストテレスは紀元前三八四年、カルキデイケーの東部ストリモン灣に沿へるスタギリヤ町に生る。父はマケドニア王アミュンタス二世の侍醫ニコマコスにして、父は幼少の頃死し、父の友プロクセノスに養はれて生長し、ナハオ、アテネに赴き、プラトンのアカデミーに學ぶこと二十年なり。プラトンの死後アテネを去り、アタルネウスの僭主ヘルミアスの許に行き、アツソスにて三年教ゆ。そのペルシア王に捕へられて殺されるや、姪のピテユアスを連れて難を避け、マケドニア王フィリッポス二世に招かれてペラに赴く。太子アレクサンドロス(アレキサンダー大王)の師となりしは有名なる事實とす。大王アジア遠征の途、アテネに歸り、リュケイオンに學校を建つ。大王死して後、アテネの愛國派の勢力勃興するや次第にその地位不安となり。遂に不信仰の非難を蒙り、エウボイアのカルキスに逃亡し、胃病のため死す。

(15) フリドリッヒ・エンゲルスは一八二〇年にライン州バルメンに生る。紡績工場主の子なり。一八三八年ブレーメンの一商館に勤めながら學問と政治教育を積めり。この時代は左派青年ヘーゲル學徒の影響を受けし頃なり。一八四二年父の關係せるエルメン・エンゲルス商會(在英國マンチェスター)の紡績工場に働くべく渡英(この途中ライン新聞編輯所に

て初てカール・マルクスと會見せり。イギリス工業の中心地に於て近代資本主義を見聞す。一八四八年の革命にドイツに於てマルクスと共に活躍せるも失敗し、一八六九年までマンチェスターに於て商業と研究との生活をなし、マルクスの亡命生活を支持せり。一八七〇年ロンドンに移り、マルクスと共に著作と運動とを共にせり。

第 六 章

周易は既述の如く、上下經二篇、及び十翼の十篇より成立して居るが、易の作者に就て觸れてゐるのは、繫辭傳に限られ、而も次の如く四ヶ所に異つて記されて居る。

その第一は繫辭上傳の傳説的なる記述であるが、曰く

河、圖を出し、洛、書を出して、聖人之に則る。

その第二は繫辭下傳に曰く

古者、包犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀。俯しては則ち法を地に觀。鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取る。是に於て始めて八卦を作り、以て神明の徳を通じ、以て萬物の情を類す。

その第三は同じく下傳に曰く

易の興るや、其れ中古に於けるか。易を作る者は、其れ憂患有るか。

その第四は同じく下傳に曰く

易の興るや、其れ殷の末世、周の盛徳に當るか。文王と紂との事に當るか。是の故に其の辭危し。

第一の河圖洛書は多分に傳説的ではあるが、この場合の聖人は伏羲を指して居るので、古來、重要視せ

られる第二説と共に、伏羲が易を作つたといふことに對しては何人も異説を唱へるものがないのである。唯、此で留意して居なければならぬ點は、繫辭傳では、八卦を作ると明らかに記しながら、重卦、即ち六十四卦を作つたとは言つて居らないのである。従つて然らば重卦を作つたのは何人であるか——それに四説がある。

朱子の正義⁽¹⁾に曰く、重卦の人は諸儒同じからず、凡そ四説あり。王弼等⁽²⁾以爲へらく、伏羲卦を畫すと。鄭玄の徒は以爲へらく、神農卦を重ぬと。孫盛は以爲へらく、夏禹卦を重ぬと。史遷等⁽³⁾以爲へらく、文王卦を重ぬと。

これを解り易く示すと左の如くである。

甲 伏羲卦を重ぬとなすは王弼の説。

乙 神農卦を重ぬとなすは鄭玄の説。

丙 夏禹卦を重ぬとなすは孫盛の説。

丁 文王卦を重ぬとなすは司馬遷の説。

朱子は之に對して曰く

其の夏禹及び文王卦を重ぬといふ者は、繫辭を案するに、神農の時、已に蓋取^三益與噬嗑^一あり、此れを以て之を論すれば攻めずして自ら破る。其の神農、重卦といふ、亦、未だ得た^二と爲さず。今、諸文を以て之を驗せんに、案するに、説卦に云ふ、昔者聖人之作^レ易也幽^ニ贊於神明^一而生^レ著と^レ九之作といふは創造の謂なり。神農以後は便ち是れ述修、之を作るといふべからず。則ち幽贊用著は伏羲を^レ謂なり。故に乾の繫辭に曰く、垂^ニ皇策^一

者儀と。上繫に用繩を論じて曰く、四營而成_レ易、十有八變而成_レ卦と。既に聖人易を作り、十八變して卦を成すといへば、明らかに用著は六爻の後に在り。三畫の時に非ず。伏羲著を用ふ、即ち伏羲已に卦を重ねたるなり。説卦また云ふ。昔者聖人之作_レ易也、將_レ以_レ順_レ性命之理、是以立_レ天之道、曰_レ陰與_レ陽。立_レ地之道、曰_レ柔與_レ剛。立_レ人之道、曰_レ仁與_レ義。兼_レ三才_レ而兩_レ之、故易六畫而成_レ卦と。既に聖人易を作り、三才を兼ねて之を兩にすと云へば、また神農始めて卦を重ねたるに非ず。また上繫に云ふ。易_レ聖人之道四_レ焉。以_レ言者尙_レ其辭、以_レ動者尙_レ其變、以_レ制_レ器者尙_レ其象、以_レ卜筮者尙_レ其占と。この四事みな六爻の後に在り。何となれば三畫の時、未だ象繇あらざれば其の辭を尙ぶあるを得ず。因て之を重ね、始めて變動あり。三畫にては動かざれば其の變を尙ぶあるを得ず。著を揲へ、爻を布き、方めて之を卜筮に用ふ。著は六爻の後に起る。三畫にては其の占を尙ぶあるを得ず。自然中間の以て器を制するものは其の象を尙ぶも、亦、三畫の時に非ず。今、伏羲、繩を結んで罍器を爲るときは、是れ器を制す。明なり伏羲の已に卦を重ねたることを。また周禮に、小史掌_レ三皇五帝之書とあり。明なり三皇の已に書ありしことを。下繫に云ふ、上古結繩而治、後世聖人易_レ之以_レ書契_レ蓋取_レ諸_レ夫_レと。既に夬卦に象つて書契を造る、伏羲に書契あれば夬卦ありしなり。故に孔安國の書序に曰ふ、古は伏羲氏の天下に王たるや、始めて八卦を畫し、書契を造り、以て結繩の政に代ふと、また曰く、伏羲神農黃帝の書これを三墳といふと、是なり。また八卦小成、爻象未だ備はらず、之を重ね六を成し、能事畢る。若し重卦、神農より起ると謂はば其の功たるや、豈、繫辭に比するのみならんや。何ぞ易緯等に因りて歷る所の三聖を數へ、ただ伏羲、文王、孔子といひて竟に

神農に及ばざる。明なり神農は但蓋取諸益ありて、卦を重ねざることを。故に今、王輔嗣に依りて伏羲、既に八卦を畫し、即ち自ら重ねて六十四卦と爲すを以て、其の實を得たりと爲す。

孔穎達現れて、伏羲重卦の説を述べて以來、これが殆んど定説となつたものの如くであるが、また皮錫瑞は文王説を述べて曰く

經を解するには最初の説を以て主と爲すべし。史記儒林傳に曰く、魯の商瞿、易を孔子に受けてより、六世を傳へて齊人田何⁽⁹⁾字は子莊に至りて漢興る。田何、東武の人、王同⁽¹⁰⁾、子仲に傳へ、子仲は菑川の人楊何⁽¹¹⁾に傳ふ。易を言ふもの楊何の家を木とすと。これ楊何、商瞿を距ること凡そ八傳、漢初易をいふ皆な楊何を主とす。太史公談も亦易を楊何に受く。史公易を云ふ、必らず楊何の説を用ひしならん。周本紀に曰く、西伯蓋位に即きて五十年その菱里に囚はるる、蓋し易の八卦を益して六十四卦と爲すと。日者傳に曰く、伏羲八卦を作りてより、周の文王三百八十四爻を演じて天下治まると。正義に謂へらく、史遷等以て文王卦を重ねと爲すと。その説甚だ明らかなり。且獨り史遷の説然りと爲すのみに非るなり。

更に楊雄⁽¹²⁾、班固⁽¹³⁾、王充⁽¹⁴⁾あり。楊雄は西漢末の人。班固、王充は東漢初の人。皆な史遷の説と同じ。鄭玄は東漢末の人。已に諸人の後に在り。その説以爲へらく、神農卦を重ねと。蓋益噬嗑に取るを以て據と爲す。謂へらく、伏羲の取諸離は八卦の内に在り、神農の取益噬嗑は六十四卦の内に在りと。孔疏また神農の時已に蓋取益與噬嗑あるを以て、伏羲重卦の證と爲す。案するに此の説ただ泥む。朱子語類に曰く、十三卦の所謂、蓋取諸

離蓋取諸益なる者は繩を結んで網罟を爲る、離の象あるをいふ、離を觀て始めて此れあるに非るなりと。また云ふ、是れ先づ離に見るありて而して後、網罟を爲り、先づ益に見るありて耒耜を爲るならず、聖人また只是れ魚鼈の屬を見、以て之を取るあらんと欲し、遂に一箇の物事を做し去り、他を別起し、却つて離の象に合し、益の意に合せるのみと。沈寓山簡曰く、大傳蓋取諸益取諸賤、凡そ一十三卦、蓋し聖人耒耜益を得、狐矢賤を得といふのみ、先づ卦名ありて乃ち其器を作るを謂ふに非るなりと。陳澧曰く、案するに繫辭いふ所の取諸は考工記輸入の取諸園也、取諸易直也、取諸急也と、文義正に同じ。輸入意も諸を園に取る、園物を見て、之を取るに非るなり。意もて易直と急とに取る、易直と急との物を見るに因つて、之を取るに非るなりと。此の三說皆な極めて通ず。神農の時、已に益と噬嗑とありて文王重卦といふを得ざるを疑ふべきなし。後人猶ほ疑ふものあり。皆な常に疑ふべからざる所を疑ふなり。

また曰く

顧炎武の口知録に曰く、襄公九年穆姜、東宮に遷らんとし、之を筮し、艮の隨に之くに遇ふ。姜曰く、是れ周易に於て隨元亨利貞无咎と。獨り是於周易といふときは夏商皆な此の卦あり。而して八卦を重ねて六十四卦と爲す者は文王に始らざるを知るなりと。錫瑞案するに顧氏は左氏の占書を棟取せるを知らず、唐の啖助已に盡くは信すべからざるを言へり。占筮の書には傳會多し。穆姜元亨利貞の義を説くは全く孔子の文言に同じ。以て暗合と爲さんか、未だ必ずしも穆姜の學聖人と同じからず。以て孔子文言を作り穆姜の説を勸襲すと爲さんか、尤

も是の理なし。疑ふらくは古書、孔子の文言を取りて之を穆姜に傳け、而して左氏之を載せたるを。當に反つて其の文に據り、重卦文王に始らざるを疑ふべからざるなり。

そこで繫辭の第三と第四とが問題となつて來るのである。即ち、これは重卦に就いて言及して居るのではなく、周易卦爻の辭を言つて居るのだと理解しなくてはならない。荀子⁽²²⁾は文王、姜里に囚はれて周易を作ると言ひ初めて以來、司馬遷その説を受け、鄭玄また其の説に従つて來た。然るに爻辭の中には文王以後のことを記するものが少くない。愈々紛糾する所以である。朱子の正義に曰く

案するに周易の繫辭には凡そ二説あり。一説は以爲へらく、卦辭爻辭は並に是れ文王の作る所なり。知るらくは、案するに繫辭に云ふ、易之興也、其於中古乎、作易者其有憂患乎。また曰く、易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪、當文王與紂之事邪と。また乾鑿度に云ふ、垂皇策者犧、卦道演德者文、成命者孔と。通卦驗にまた云ふ、蒼牙通靈、昌之成、孔演命、明道經と。此の諸文に準ずれば、伏羲卦を制し、文王辭を繫け、孔子十翼を作れるなり。易三聖を歴とは只此れをいふのみ。故に史遷いふ、文王囚はれて易を演ずと、即ち是れ作易者其有憂患乎なりと、鄭學の徒並に此の説に依れるなり。一は以爲へらく、爻辭を驗するに、多くは是れ文王後の事なり。案するに升卦の六四、王用享于岐山は武王殷に克つ後、始めて文王を追號して王と爲す。若し爻辭は是れ文王の制する所ならば、應に王用享于岐山といふべからず。また明夷六五、箕子之明夷は武王兵を觀す後、箕子始めて囚奴せらる。文王宜しく箕子之明夷を豫言すべからず。また既濟の九五、東鄰殺

牛、不如_二西鄰之禴祭_一は、説者みな云ふ、西鄰は文王を謂ひ、東鄰は紂をいふと。文武の時、紂尙は南面す、豈自ら已福徳を受け殿に勝るといふべけんや。また君の國に抗せんと欲し、遂に東西相鄰すといふのみ。また左傳に韓宣子、魯に適き易象を見ていふ、吾乃ち周公の徳を知ると。周公流言の謗を被る亦、憂患と爲すを得るなり。此の諸説を驗して以て卦辭は文王、爻辭は周公と爲すと馬融、陸績等並に此の説に同じ。今依つて之を用ふ。ただ三聖と言ひ、周公を數へざる所以は父、子の業を統ぶる故を以てなり。

即ち、卦辭も爻辭も共に文王の作るとなす説と、卦辭は文王の作るところ、爻辭は周公の作るものとなす説とがある。而して馬融、鄭衆、賈逵、陸績等は後説に従つたことがわかる。

崔述は右の説に服し得ないとして且つ曰く、

近世、周易を説くもの、皆な爻辭を以て文王の作と爲し、爻辭を以て周公の作と爲す。朱子の本義もまた然り。余、按ずるに傳の前章に易之興也、其於_二中古_一乎、作_レ易者其有_二憂患_一乎といひ、初より未だ中古の何時たり、而して憂患の何事たるを言はず、此の章に至りて始めて其の文王の時に作るを言ふ。然れども未だ嘗つて文王の自作する所と言はざるなり。且つ其當といひ、其有といひ、邪といひ、乎といひ、皆な疑詞を爲して敢て決せず。則ち是れ傳を作るもの、ただ其の文に就いて之を推度し、尙ほ敢て其の時世を決言せざるもの。況んや能く其の何人の書たるを決知せんや。司馬氏の史記を作るに至りて、傳の此の文に困りて遂に之を附會し、以て文王姜里の演ずる所と爲す。是を以て周の本紀に云ふ、西伯の姜里に囚はるる、蓋し易の八卦を益して六十四卦と爲すと。

自序にも亦云ふ、西伯姜里に拘はれ周易を演ずと。演とは増なり。即ち本紀いふ所の八を益して六十四と爲すものなり。是より遂に易卦を以て文王の重ぬる所と爲す。班氏、漢書を作るに及び、また史記の言に因り、遂に斷じて辭を以て文王の繋くるところと爲す。是を以て藝文志にいふ、文王易の六爻を重ね、上下篇を作ると。また云ふ、人は三聖を更へ、世は三古を歴と。是より遂に易の彖爻の辭を以て文王の作る所と爲す。然れども其の中甚だ疑ふべきものあり。明夷の五に、箕子の明夷と稱し、夬の四に王用亨_ニ於岐山_一と稱す。皆な文王以後のことなり。文王まさに豫知して之を豫言すべからず。史漢の説復た通すべからず。是に於て馬融、陸績の徒、已むことを得ず乃ち爻辭を割き、謂ひて周公の作るところと爲し、以て之を曲全す。而して鄭康成、王弼は復た卦を以て包犧神農の重ぬるところ、文王の演ずるところに非すと爲す。然る後、後儒始めて獨り彖辭を以て之を文王に屬し、爻辭を分ちて之を周公に屬せり。是に由て之を言へば文王彖辭を作り周公爻辭を作るといふは、乃ち漢以後の儒者、史記漢志の文に因りて展轉して之を猜度せるもの、信じて徵すべきものに非るなり。夫れ卦を以て義(伏)農(神)の重ぬるところと爲すは確據なしと雖も、理は固より或は之あり。周公の易に繋くるが如きは傳記従つて未だ之に言及せるものあらず。惟だ春秋傳に、易象を見て周公の徳を知るの語あるのみ。然れども此れは易象を謂ふなり、易辭をいふに非るなり。晋の文公の襄王を迎へんと謀るや、之を筮し大有の睽に之くに遇ふ。曰く吉なりと。公用享_ニ于天子_一之卦に遇ふと。則ち是れ易辭、晋もとより之あり、魯に至つて後見るを待たず。且つ即し起の見る所の者をして果して易の辭にして卦爻の辭は果して文王と公との分繋する所ならしめば、文に於

て當に文王周公の徳と兼言すべし、亦、ただ周公のみを美して文王に及ばざるを得ざるなり。秦漢以後は司馬班氏最も古に近しと爲す。然れども皆なただ文王と言ひて周公を稱せず、乃ち易緯乾鑿度通卦驗等の書の最も附會を善くする者に至る迄また但だ羲文孔の三聖人を稱して、一言も周公に及ぶなし。焉んぞ卦爻の辭を分ちて之を兩人に屬するを得んや。

この説に關し、吾々は佐藤一齋(28)の説を思ひ起す。一齋は大傳及び春秋傳を以て文王の作に非ず、周公の作にも非ずとなし、彖爻ともに同一人の作で、殷周の際に製作されたいが、然も何人の作であるかは不明だといふのである。

宋の歐陽修(28)以後、葉適(29)、陸象山(30)、姚際恆(31)、崔述など現れて縦横に論議し、近代、吾が國の支那學者等によつても種々、論ぜられてゐるが、特に内藤湖南博士の説は傾聽するに足るのである。唯、博士の所論は爻辭を以て漢初の作とされて居るのであるが、私の見るところでは却つて漢代に斧鉞を加へたが爲に、内藤博士の如き結論に到達したのではないかと言ひたいのである、

(1) 後に解を出す。

(2) 後に傳を出す。

(3) 後に傳を出す。

(4) 孫盛は晋の人。字を安國といふ。楚の子なり。學を好む。魏武春秋三十卷。晋春秋十餘卷あり。二子あり。長は潛、

次を放となす。

- (5) 司馬遷は前漢の史家にして、夏陽（陝西省韓城縣）の人太史令談の子なり。龍門に生る。子長と字す。自序に依るに、その祖は上古に天地を掌りし重黎の後裔にして、その後、宣王のとき姓を司馬氏と改め、代々、周史を修む。春秋の初めに奔り、少梁に遷りしが其の間、一族分散す。遷の一家は少梁（夏陽）に留り、その父談のとき武帝に仕へて太史令となり、その籍を茂陵に移す。十歳にして古文を誦し、二十歳にして江淮に周遊し、會稽山に上り、禹穴を探り、九疑を窺ひ、轉じて沅湘兩河に浮び、更に北して汝澗を渡りて山東に入り、業を齊魯の都に習ひ、孔子の遺風を觀察し、梁楚を経て歸る。仕官して郎中となり、奉使して巴蜀以南を征し、邛笮、昆明を略して還る。時に漢朝隆盛、その威を飾るに泰山に封禪す。父談病みて従ふ能はず、周南に留れり。遷、南方の征旅より歸り、河洛の間に見ゆ。而して遷、泰山に赴く。帝に從ひて海上より碣石に出で、遼西に至り、更に別れて山西に入り、北邊九原を経て長安に歸れり。父死してその職を襲ぎ、修史の業を繼ぐ。時に朝廷、曆法改正をなし、遷の太初曆は後世曆法の規範たり。偶々、李陵、匈奴に降り、帝の怒に觸れ宮刑に處せらる。遷大いに憤懣す。その後、中書令に至りしも世に出るを好まず。斯くて遂に大著史記を完成す。前後二十有餘年なり。

(6) 後に傳を出す。

- (7) 皮錫瑞は清の學者なり。鹿門と號す。湖北省善化の人なり。同治十二年の拔貢、光緒八年の舉人なり。漢宋の學に精通し、詩及び駢文にたくみに、公羊「改蒞」の説を信じ、玉制に箋し、魯學を擴張す。近代蜀派の祖なり。江西經訓書院の山長、湖南優級師範、京師大學堂の經學教習に携り、後、故郷に歸りて著述に従ふ。光緒三十四年正月歿す。時に年六

十。

(8) 後に傳を出す。

(9) 後に傳を出す。

(10) 後に傳を出す。

(11) 後に傳を出す。

(12) 楊雄は前漢末の人。字は子雲。蜀の成都に生る。その先は周の伯僑と傳ふ。子孫晋の楊公となり、六卿の争ひに敗れて楚に逃れ、漢楚の戦ひに亂を避けて江州(重慶)に奔り、楊季の代に至りて盧江の太守となり、その後、復仇を恐れて嶧山の陽の郛(成都の西)に農に従ふ。季より五世にして雄生る。家産十金、田一壠、宅一區の貧家に生れ、書を讀み、長安に遊學して、年四十一歳にして初めて大司馬車騎將軍王晋に認められ、門下史に輔せられ、その薦によりて待詔となり、歲餘にして甘泉賦、羽獵賦を成帝に獻じて郎に除せられ、給事黃門となれり。哀帝の時、阿らざる爲め重ぜられず、成、哀、平の三帝の間、同じ官にあり。王莽の時、老年に及び漸く大夫となり、易を好んで太支を作る。王莽帝位に即き、雄を殺さんとす。天祿閣にて書を校せし雄は飛び降りて自殺を圖る。許されしも病みて官を去り、再び太夫となりしが天鳳五年歿す。

(13) 班固は後漢の人。扶風安陵(陝西省咸陽縣)に生る。字は孟堅。班彪の子なり。光武帝の建武三十年、父死するや故郷に歸り、先に父が史記に續けし著書の成らざるを遺憾とし、漢書編纂の業につきしに、明帝に私改二作國史一者として上告する者ありし爲め、詔によりて郡に捕へられ、京兆の獄に下る。而して家書悉く官沒さる。時に弟超、兄の身を案じ、闕下

に馳せて狀を陳ぶ。帝これを奇として校書部に召し、蘭台令史を授く。是に於て前睢陽令陳宗、長陵令尹敏、司隸從事孟異等と共に世祖本紀を著し、次で郎に遷り、功臣、平林、新市、公孫述の事を撰して列傳、載記二十八篇を奏し、更に詔を奉じて、永平中より章帝の建初年中に至るまで、二十有餘年の歲月を費して漢書を作る。(但し八表及び天文志は妹昭これを續成す)章帝のとき玄武司馬に遷り、建初四年、帝、諸儒を白虎觀に會して五經の同異を講論するや、白虎通德論を撰し、後、母の喪を以て官を去る。和帝の時、大將軍竇憲に従ひ、中護軍となりて匈奴を征す。永元四年、竇憲の不軌を謀つて破れて自殺するや、坐して免官さる。時に班固に對して怨みを抱ける洛陽令种兢に捕へられ、獄に死す。年六十一と傳ふ。

(14) 王充は東漢、上虞の人なり。字は仲任。班固の父彪の門人なりと。家貧にして書なく、常に洛陽の書肆に行きて、その賣るところの書を閱し、一見、能く之を悉く記憶す。章帝の時、世を讀つて論衡八十五篇三十卷を著せり。永元中、七十にして卒す。

(15) 後に解を出す。

(16) 未考

(17) 陳濃は清の人。字は剛甫。番禺の人なり。道光年間の舉人にして、その學百般に亘り、天文、地理、樂律、算術、古文、駢文、填詞、篆隸眞行の書、悉く究めざるはなし。力めて漢宋門戶の見を排す。學海堂、菊坡精舍に主筆たり。

(18) 考工記一卷は周禮の第六篇なり。百工に就きて述ぶ。漢の武帝のとき李氏、周官を得て河間獻王に奉りしが、六官中、冬官司寇の一官を缺けるを以て千金を以て之を求むるも得ず。因りて此を以て補足す。故に冬官考工記ともいふなり。然

れども考工記は百工と言へども三十工を説きしに過ぎず。これのみにては完全ならず。然るに成帝のとき劉歆は諸儒に反して之を信じ、哀帝のとき周禮を以て其の錄略に載す。門人杜子春また能く其の讀に通じ、王莽の時代、遂に之を學官に立つるに至れり。時代下つて明の世、郝京山これに異説を立て、冬官はもと宰相の位なれば確たる職掌なし。故に周禮には最初より錄せずと。王濟之もこれを以て、經を亂すものなりと論ず。清の江永は齊人の作なりといふ。

(19) 後に傳を出す。

(20) 日知錄三十二卷。清の顧炎武の撰なり。讀書して得るところを筆記したるものにして、考證極めて精確なり。三十有餘年の結晶といふ。

(21) 啖助(たんじよ)は唐の人。趙州に生れ、後、關中に移れり。字は叔佐。經術に通ず。天寶の末、臨清尉、身陽主簿に至る。秩滿ち退官して亦仕へず。疏糗自ら甘んず。春秋に精しく集傳を作る。凡そ十年にして成ると傳へらる。啖助及びその門弟趙匡等は經を信じ、傳を駁し、春秋の本傳は左傳、公羊、穀梁等に誤り傳へられたるものなれば悉く信すべからず。故にその眞隨を極めんとするものは寧ろ本經に據るべしとなし、これ宋學勃興の先聲となれり。

(22) 周の荀況の撰するところ、孫卿書ともいふ。今本二十卷三十二篇なり。もと三百二十三篇十二卷なりしが、漢の劉向、その重複を去りて三十三篇とす。後、唐の楊倞これを改め、篇に於て一を減じ、卷に八を増し、荀卿子と改題す。清代に至つて盧文昭は校本荀子を作り、王念孫も案語を加ふ。

(23) 賈逵(かき)漢の人。字は景伯。陝西省の平陵に生る。博士賈誼の孫なり。常に太學に居て人事に通ぜず、人これを問事不_レ休賈長頭と言へり。父の讒は左氏春秋に通じ、かねて國語、周官、尙書、毛詩に通ず。遂また其の業を傳へ、永平

年中、左氏傳解說三十篇、國語解說二十一篇を獻ず。明帝その書を得て喜び、寫して秘館に藏せしめ、また班固と共に秘書を校合せしむ。章帝の時、公羊嚴顏諸生高才の者二十人を選ばせ、左氏を教へしむ。これより左傳はじめて天下に盛行するに至れりと。

(24) 後に傳を出す。

(25) 崔述は清の人。大名に生る。字は武承。東壁と號す。考證學に秀で、乾隆の舉人となり、羅源縣の令となる。

(26) 佐藤一齋。名は坦。字は大道。一齋と號し、愛日樓、老吾軒と號す。その塾を百之寮また風自寮といひ、その遊息する所を錫難老軒といふ。江戸の人、初め信行と名づけ、幾久歳と稱す。年二十一にして今の名に改め、捨藏と稱す。曾祖周軒はじめて儒を以て岩村侯に住へ家老に至る。祖治助信全、父勘平信由みな職を繼ぐ。一齋幼にして書を好み射騎刀槍學ばざるなし。即ち北條流兵法、小笠原流禮を良くし、七歳にして三井親和に學びて篆隸を學び、十二三歳殆んど成人の如し。寛政二年はじめて士籍に上り、入りて祭酒述齋の末だ林氏を嗣がず、藩の公子を以て濱町の下邸に居るに近侍す。

井上四明、鷹見星泉の門に出入す。次で浪人して浪花に遊び、間大業の家に入る。大業、曆數に精しく、介して中井竹山に從學せしむ。更に皆川淇園に見え、業成つて江都に歸る。林簡順の門に入り儒を以て業となす。簡順卒して述齋嗣ぐ。是に於て師弟の名を正す。心を六經に潛め、その交る學者は松崎謙堂、清水赤城、市野隼卿なり。寛政十二年、松浦靜山侯に從ひて平戸に到り、長崎に於て清人沈敬瞻、劉雲臺、錢宇文、周慶書等と交はる。文化二年林氏の塾長たり。天保十二年、儒官となり、昌平官舎に住す。門下三千と號す。十二年特旨を以て、易を幕殿に講ず。安政六年八月病みて歿す。壽八十八なり。一齋、經に於て最も易に精しく周易欄外書十卷、啓蒙欄外書一卷、圖考一卷を著す。かつて曰く、仰觀俯

蔡を作易の本と爲す。而して後世、多く天文を説きて地理に及ばずと。因りて河圖に基き、地體圖を作れり。

(27) 易卦は伏羲に畫せられて、辭は周代に繋けらる。經文に帝乙高宗箕子あり、其の周に成ること疑ひなし。大傳に曰く、易之興也其於中古乎。作_レ易者其有_二憂患_一乎。また曰く其當_二殷之末世周之盛德_一邪。當_二文王與_レ紂之事_一邪と。是れ以て其の時代を推すべきなり。而して作者は竟に之を指名すること能はず。乃ち先儒沿襲して彖辭を謂ひて文王の作る所と爲す。蓋し司馬遷に出で、經傳の未だ言はざるところなり。大傳は、未だ作易者といひて文王といはず。況んや當_二文王與_レ紂之事_一といふは其の事まきに之に當ると謂ふなり。乃ち按いて以て其の文王に非るを證すべきなり。先儒また彖辭を謂ひて周公の作る所と爲す。蓋し老氏韓宣子に本づく。然れども其の見_レ易象與_二魯春秋_一知_レ周公之德與_二周之所_一以_二王_一也といふときは、未だ定めて周公の作る所と爲さず。若し此れに據りて以て周公と爲すときは、春秋もまた周公の作る所なるか。殆んど通ぜざるなり。之を要するに彖爻の辭は一手に出づ。殷周之際蓋し作者あり。今強ひて其の人を覓むるも益なきのみ。

(28) 後に傳を出す。

(29) 葉適(せふてき)宋の人なり。字は正則。水心と號す。永嘉に生る。淳熙五年、進士となり、司業に官たり。かつて陳傳良を推薦し、時の人、人を得たるを稱す。累進して寶文閣待制となれり。かつて韓侂胄に忤らひ、坐して杜門に貶せらる。門を閉ぢて著述に従ひ、自ら一家をなす。博學雄才、その言ふところ當時に重ぜられる。

(30) 後に傳を出す。

(31) 姚際恒は清の人。字は立方。また首源といふ。安徽桐城に生る。

(32) 内藤湖南文學博士(支那學第三卷第七號)に曰く、

卦爻辭の成立に就いて、例へば升の卦の王用亨于岐山^一とか、明夷の卦の箕子之明夷などの語から推して、爻辭が文王の作でなく周公の作であるとするやうな説は、孔穎達の正義などから存在するのであるが、其の他にも之と相似た疑問を提出し得る者がある。例へば蠱の卦に不事王侯^二高^三尙其事^一とあるが如き、王侯を並べいふことは子が現に記憶する材料では、史記の秦始皇本紀二十六年及び陳涉世家等であつて、春秋以前の語とは思はれない。それからまた殊に予の研究したいと思ふのは、泰と歸妹との兩卦に見えてゐる帝乙歸妹の語である。帝乙といふ語は尙書にも酒誥、多士、多方の三篇に各々一たび見えてゐる。これに就て従來、餘り深く穿鑿した人はないやうであるが、史記殷本紀に周武王爲天子^二其後世貶^三帝號^一號爲^レ王とあるのに對し、史記志疑の著者玉繩の挾んだ非常な疑問があつて大いに參考となる。即ち梁玉繩の考は、夏殷周三代の君は皆な王と稱し、まゝ亦、后と稱することもあつたが、未だ帝と稱したことがあるを聞かぬ。夏殷の君に帝の字を用ひたのは史記に始まる。而して史記殷本紀のこの解釋によれば、帝王には其の稱號の如何によつて高下の相違があるやうであるが、古書には決して左様なことは見へて居ない。また帝乙といふものがあるからとて夏殷の君が皆な帝と稱したとも思はれない。此の誤は國語周語に、祖甲を帝甲と記し、紂のことを帝辛と記してゐる所から起つたのであるが、國語の文は全く書法の誤で之を根據とすることは出来ぬ。故に曲禮の措^二之廟立^三之主^一曰^レ帝の條の孔穎達の正義に、崔靈恩を引き、生きて帝と稱したものは死して後もまた帝と稱し、生きて王と稱したものは死して後もまた王と稱したと言つてゐるが、此の説が一番確實である。それで要するに帝乙といふのは即ち其の人の名であつて決して廟號ではない。魏の崔鴻の十六國春秋に、西秦の乞伏熾盤に苻衝將軍信帝ありとするが、これなども信帝といふのが其の人の名なのであつて、

度、帝乙といふのが單に帝乙といふ名に過ぎないのと同じことであると。これが大體、梁玉繩の意見である。折衝將軍信帝を例に擧げたことなどは隨分牽強に過ぎて取るに足らぬけれども、兎に角、夏殷の君を帝と稱すること、並に帝乙の稱に就いて種々疑問を起したのは大いに參考に値する。予の考ふる所では帝の字の原義は上帝であつたと思ふ。尙書洪範に帝が禹に洪範九疇を錫へたとある帝の字は、古來、天帝と解してゐる。呂刑の中に見ゆる帝、或は皇帝の字は帝顓頊、もしくは帝堯、帝舜と解されてゐるが、今文家は之を天帝と解してゐる。前に引用した曲禮の語でも、鄭玄は帝の字を天神と解してゐる。思ふにこれが帝の字の原義であつたに相違ない。然るに戰國の頃、七國ともに其の國君を王と稱する様になつてから、王の稱號が段々輕くなつたために、何かそれ以上の稱號を求める傾向を生じて來て、遂に秦の昭王、齊の湣王に至つて同時に東帝西帝と稱し帝號を取るやうになつた。これが恐らく帝の字を實在の君主に用ふるやうになつた最初であらう。而して此の後、秦始皇に至つて自ら皇帝とも稱した。尙書堯典に帝の字を實在の君主に用ひたのも何れ此の頃のものなのであらう。それからまた公羊家の考で、天子が崩すれば存して三王と爲り、緇滅すれば五帝と爲り、下つて附庸に至り、緇して九皇と爲り、下つて其の民たるに極まるといふ説が現れて來たので、遂に夏殷の君主を帝と稱するに至り、司馬遷も其の意味からして夏殷の本紀に帝の字を用ひたのであらう。さう考ふれば問題の帝乙といふ語は、少くとも秦昭王と齊湣王とが相ひ共に帝と稱した時代より以前に溯ることが出来なくなつて來るので、畢竟、易の爻辭の中には戰國の末から漢初に到る間に出來た語さへも合んでゐることを認めねばならないやうになるのである。

第七章

朱子の易學啓蒙下卷に曰く、渾然たる太極の中には兩儀、四象、六十四卦の理、已に其の中に燦然たりと。易を知らんと欲せば、先づ太極を知らざるべからずである。繫辭上傳に易有_二太極_一とある是である。

太極といふ字句は必ずしも易經に限らない。莊子にも此の字句を見出すことが出来る。しかしながら太極の解釋が哲學的内容を以て擴大されたのは宋の時代に入つてからである。従つて其の理論的發展の様相に就ては宋代に於て多く述べるところがあるであらうが、宋の陳北溪の言へる如く、太極の字義は孔子以來明かならざりしが、北宋の周濂溪が太極圖及び太極圖說を作るに至つて、方に始めて説き得て明白なり。といふ事實を先に肯定して置きたい。

繫辭上傳の、易は天地と準ず、故に能く天地の道を彌綸す、といふ句は、幾度か古聖によつて檢覈され來つたが、畢竟、易は宇宙の摸寫と其の再構成にあることが主張された。而して太極は、實に宇宙的太極として把握されたのである。

漢民族の理解した天文學としての蓋天說⁽³⁾や渾天說⁽⁴⁾は、天動說の範疇に屬し、従つて古易に盛られた「太極」を理解し能はなかつたのである。従つて古代カルデア地方の宇宙創造以前の說を繼承した伏羲が、太極を假定したのを、繫辭傳の作者も理解し能はなかつたので、易に太極有り、と素朴に述べることしか出來なかつたものであ

る。近世、ラプラス⁽⁵⁾及びカント⁽⁶⁾等に依つて導かれた星雲説によつて太極を理解することが出来るのは、近代人の夥しい利益とするところであるが、太極的理念として哲學的に主張し得た宋代哲人の偉業をも忘れてはならぬのである。

陳北溪曰く

總じて之を言へば只是れ渾淪たる一箇の理のみ。また只是れ一箇の太極のみ。之を萬物は一太極に體統すと云ふ。分つて之を言へば則ち天地萬物は各々、此の理を具へて亦、各一太極あり。之を一物各一太極を具すと云ふ。また都て渾淪として缺くる所なし。其の分つよりして言へば則ち許多の道理を成す。若し萬物の上に就いて總じて論ずれば、則ち萬物體統の渾淪たるは亦ただ是れ一箇の太極のみ。人は此の理を得て吾が心に聚むれば則ち心を太極と爲す。邵康節⁽⁷⁾が道爲太極と曰ひ、また心爲太極と曰ふ所以なり。道を太極と爲すと謂ふものは、道は即ち太極にして二理なきを言ふなり。心を太極と爲すと謂ふものは、只是れ萬物が吾が心に總會して、此の心が渾淪たる一箇の理のみ。ただ此の道理が流行し出でて、萬物に應接し、千條萬緒が各其の理の當然を得れば則ち是れ亦各一太極なり。萬事に就いて總じて言へば、其の實は舊に依つて只是れ一理、是れ渾淪たる一太極なり。譬へば一大塊の水銀の如し。圓散じて萬々の小塊となるも亦、箇々皆な圓なり。合すれば萬々の小塊も復た一大塊と爲り、舊に依つて亦圓なり。陳敬叟⁽⁸⁾が月は萬川に落ちて處々皆な圓なりの譬へも亦正に斯の如し。此れ太極が天地萬物の表に立ちて天地萬物の中に行き、萬古極りなきの前に在りて萬古極りなきの後を貫き、萬古よりし

て上、萬古を極めて下、大抵また只是れ渾淪たる一箇の理、總べて一太極と爲す所以のみ、此の理流行し、處々皆な圓にして一處の缺くることなし。纔かに一處の缺くることあれば便ち偏り了る。之を太極と謂ふことを得ず、太極本體は本と自ら圓なり。

太極は圓として理解され、○の符號を以て表される。易に於ける陰陽の效用が屢々、主體的なるかに思惟され、易は恰も二元論なるかの如くに判斷され勝ちであるが、その本質に於ては太極一元論なのである。

吾々は太極に類似する説としてギリシアのイオニア學派のアナクシマンドロス⁽⁹⁾に依つて唱へられたト・ア・パイロンを擧げることが出来る。アナクシマンドロスによれば、世界萬有の原質たるものは一切事物を生ずる際に、盡き果つべからざるが故に無際限のものたらざるべからずといふにある。萬物は此のト・ア・パイロン(限界なきもの)によつて産み出され、包括せられ、支配される。従つて彼の説明するところに依る世界は、元素ア・パイロンの運動により、先づ温なるものと冷なるものとが分離し、此の兩者から温なるもの生じ、それより土と空氣と、是等を包む火の圈が生ずる。人間は最初、魚の形にて水中に在り、その後、現在の形で地上に住むに至つた。地は半徑が高さに三倍する圓柱體で中空に浮ぶと説いた。萬物は斯く無際限より出で來れど、また必然の法則に従つて元の無際限に還り、還つてはまた出で、斯くして世界は無際限を本源として無窮に、その分化と歸入を繰り返す。空間的及び時間的に、即ち分量的に、際限なき無際限が性質的に如何なるものなるかは知られて居らないが、唯、空間を填充せるもの、即ち物的形體的存在なることのみは確かである。

その後、此のアパイロンはギリシアの自餘の哲學者間に取り擧げられた。ピュタゴラス學派は偶數をアパイロンと同視し、またプラトン⁽¹¹⁾は此の思想の影響の下に非有をアパイロンと同視した。

易經に於ける最も重要な中心的論題である太極が、宋代に至るまで活潑な理論的研究が爲されなかつたことは注目すべき亞細亞的缺陷としなければならない。而して此は漢以後の經學の罪なのである。

(1) 莊子の大宗師篇に曰く、夫れ道は有信有情にして無爲無形なり。傳ふべくして而も受く可らず。得べくして而も見らべからず。自本自根なり。未だ天地あらざるより、古より以て固に存す。鬼を神にして帝を神にし、天を生じ地を生ず。太極の先に在りて而も高となさず。六極の下に在りて而も深となさず。天地に先立つて生じて而も久となさず。上古に長じて而も老となさず。

林雲銘の莊子因の註に曰く、即ち所謂、信にして而も其の形を見ず。情ありて而も形なし。道は本と未だ始より物あらざるの先に在りて能く天地萬象を包羅するなり。此に到りて道の在る所を痛發す。即ち物の遷るゝを得ざる所の者と爲すなり。

成玄英の莊子疏に曰く、太極とは五氣なり。六極は六合なり。且つ道は五氣の上に在れども高遠と爲さず、六合の下に在れども深遠と爲さず。

(2) 後に傳を出す。

(3) 四庫提要、子部。古蓋天之學、此其遺法、蓋渾天如^レ毬、寫^二星象於外^一、人自^二天外^一觀^レ天、蓋天如^レ笠、寫^二星象於内^一、人

自_二天內_一觀_レ天、笠形半圓、有_レ如_二張蓋_一、故稱_二蓋天_一。

(4) 晉書天文志。天體、故丹陽葛洪釋_レ之曰、渾天儀注云、天如_二雞子_一、地如_二雞中黃_一、孤_二居於天內_一、天大而地小、天表裏有_レ水、天地各乘_レ氣而立、載_レ水而行、周天三百六十五度四分度之一、又中_二分之_一、則半覆_二地上_一、半繞_二地下_一、故二十八宿半見半隱、天轉如_二車轂之運_一也。

(5) ラブラースは一七四九年、フランスのボームンの貧家に生る。成長してパリに出で、ナポレオンの時、内相に任せられ伯爵に叙せらる。ブルボン王朝の復活に際し、ルキ王に仕へて侯爵を授けらる。ボナパルト黨より變節せしを以て其の操守は指彈されたるも、數學者としては名望極めて高し。解析數學に長じ、諸天體の運行の研究に資し、星雲説を稱へて宇宙創造の體系論を組織せり。

(6) カントは一七二四年、ドイツのケーニヒスベルクに生る。その星雲説は大學卒業後の苦學中、自然科學に關する匿名論文 Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels (一七五五年) に於て、宇宙の星雲起源を説けり。此はラブラースが該説を發表せるものより四十年前なりと。

(7) 後に傳を出す。

(8) 陳敬叟は宋の人なり。字は炳然。臨武に生る。博學にして詩文を能くす。咸淳年中の進士なり。勉功郎主簿となる。宋亡ぶるや遂に隱居して仕へず。詩文を友とす。巽氣集若干卷あり。

(9) アナクシマンドロス。紀元前六一〇年の頃、小アジアのミレトスに生る。ターレスの門下と稱せられ、また友たりしと云ふも未だ明かならず。哲學のみならず政治上にも名聲ありき。特に天文地理に通じ、初めて日晷を發明し、地圖を製し、

また天體の遠近、その球狀等を知りたりと。ペリ・フエーゼオスの著ありと傳へらるゝも、早く散佚して傳はらず。唯わづかに其の中の一節のみ傳はれり。

(10) ピュタゴラスは紀元前五八二年頃、ギリシアのサモスに生る。南イタリアのクロトンに行き、哲學的宗教的教團を立て學説をひろむ。後、メタポントに移り、その地で死亡せりと傳へらる。

(11) プラトン。ギリシアのアテネに紀元前四二七年生る。二十歳の時ソクラテスに従ひ、師の刑死後一時亡命し、アテネに戻りて十年の後、エジプト、キレネ等に旅行し且つ著作に従事す。南伊タレンツムに於てピュタゴラス學派の人々と交り、エギナ人に捕へられし後、ロス・アカデモスの聖地附近に學園を作れり。これ有名なるアカデミーなり。

第八章

圓周として理解された太極から、陰陽を生ずることは、易理に於ける注目すべき方法であつた。

これを繫辭上傳には、一陰一陽之を道と謂ふ（一陰一陽之謂道）と云ひ、易の一陰一陽の章として古來、有名な語句になつてゐる。

顯現の世界に於ける現象として兩儀は、毎に相對的に把握される。陰陽の義は日月に配す、と十翼に述べるのも其で、陽は天であり、日であり、晝であり、健であり、男であり、君であり、夫であり、大であり、多であり、上であり、進であり、動であり、盈であり、表であり、眞であり、貴であり、富であり、正であり、善であり、生であり、清であり、閑であり、昇であり、氣である。また陰は地であり、月であり、夜であり、柔であり、順であり、女であり、臣であり、妻であり、小であり、少であり、下であり、退であり、靜であり、虚であり、衷であり、僞であり、賤であり、貧であり、邪であり、惡であり、死であり、濁であり、閉であり、降であり、形であるとなすのである。

これを朱子は朱子語類卷九十四に述べて曰く、

陰陽は本と始なし。但だ陽動陰靜を以て、相對して言へば則ち陽を先とし陰を後とし、陽は始となし、陰は後と爲す。猶ほ一歳は正月を以て更の端となすが如し。實は姑らく此に始るのみ。歳首以前も截然として別に一段

の事を爲すに非ず。則ち是れ其の循環錯綜は先後始終を以て言ふべからざること亦見つべし。

と。また曰く

問ふ。陰陽動靜は大體を以て言へば則ち春夏は是れ動て陽に屬し、秋冬は是れ靜にして陰に屬す。一日に就きて之を言へば、晝は陽にして動き、夜は陰にして靜かなり。一時一刻に就きて之を言へば、時として動靜ならざるはなし。時として陰陽ならざるはなしと。

朱子答へて曰く、陰陽は處として之なきはなし。横に看、縦に見るも皆な見るべし。横に看れば則ち左は陽にして右は陰なり。縦に看れば則ち上は陽にして下は陰なり。手を仰げば則ち陽と爲り、手を覆せば則ち陰となる。明に向ふの處は陽と爲し、明に背くの處は陰と爲る。張橫渠(2)の正蒙參兩篇に云ふ「陰陽の氣は循環迭に至り、聚散相盪し、升降相求め、綱繩相揉み、相兼ね、相制す。之を一にせんと欲するも能はずと」蓋し是を謂ふなり。

宋儒の理氣二元の説は程伊川(4)に發し、朱子に至つて明確にされたのであるが、明の王陽明(5)に至つて其の唯心的陰陽論は、二而一氣に到達した。彼はその傳習錄(6)卷中の五十葉に曰く

周子の靜極つて而して動くの説は、善く觀ざれば亦未だ病あるを免れず。蓋し其の意は太極動きて而して陽を生じ、靜にして而して陰を生ずるより説き來れり。太極生々の理は妙用が息むことなくして常體は易らず。太極の生々は即ち陰陽の生々なり。其の生生の中に就きて、其の妙用が息むことなき者を指して之を動と謂ひ、之を陽の生と謂ふ。動きて而して後に陽を生ずと謂ふに非ざるなり。其の生々の中に就きて其の常體が易らざる者を

指して之を靜と謂ひ、之を陰の生と謂ふ。靜にして而して後に陰を生ずと謂ふに非ざるなり。若し果して靜にして而して後に陰を生じ、動きて而して陽を生ぜば則ち是れ陰陽動靜は截然として各自に一物と爲るなり。陰陽は一氣なり。一氣が屈伸して陰陽と爲るなり。春夏は以て陽と爲し動と爲すべくして未だ嘗つて陰と靜となくんばならず。秋冬は以て陰と爲し靜と爲すべくして未だ嘗て陽と動となくんばならず。春夏は此れ息まず、秋冬も此れ息まず。皆な之を陽と謂ひ之を動と謂つべし。春夏は此れ常體なり。秋冬も此れ常體なり。皆な之を陰と謂ひ、之を靜と謂つべし。元會運世歲月日時より以て刻秒忽微に至るまで皆な然らざることなし。所謂、動靜は端なく陰陽は始なきなり。

斯の如く兩儀として重要視せられる陰陽は、易經だけに關するものであらうか。

吾々の知れる限りに於ては、尙書、春秋、或は詩經も亦、陰陽に説き及ぼしては居らない。僅かに禮記に至つて散見する。高瀬武次郎博士は、禮記の思想は孔子の時代なるか。または漢儒の思想も幾分混入せるものもある。と言はれて居るが、然らば陰陽を哲學的視野の下に置いたものは繫辭を以て最古となすことが出来るだらう。

然るに周末の思想的混沌期に、陰陽家が輩出したことは注目すべき點である。何故に斯の如き思想が生れ、馳つて横行し、流行したかは、畢竟、周室の衰亡といふ政治的現象を中心として、危機的思想として、政治的、經濟的、社會的、文化的に理解されなければならぬ。陰陽家は周末の郷衍を始祖とする。郷衍は臨淄の人と稱せら

れる。初め燕の昭王、士を遇すること厚しと聞き、梁から移つて燕に入つた。昭王は碣石宮を築いて衍に師事した。やがて昭王崩じ、恵王に仕へた。間もなく恵王は讒言を信じて衍を投獄した。然るに己れの冤罪を解明する能はず。天を仰いで大いに哭するに、夏、霜が降つたと傳へられて居る。鄒衍は諸侯に重んじられた幾多の説話を残して居るが、梁に行くや王はこれを郊外に出迎へたと言はれ、趙に遊ぶや平原君は側行席を撤したと傳へられ、また燕の昭王は、籒(7)を擁して衍先生の爲に先驅した程であつた。また一説話に燕に寒谷あつて、黍稷を生じない。然るに一度、鄒衍が其所で律を吹くや、暖氣生じて黍稷を生じたとも言はれて居る。時の人、鄒忌、鄒夷(8)と共に三鄒と稱へたといふ。鄒衍の著書といふものは、今日傳はつて居らない。しかしながら鄒衍の黃帝終始篇といふものは題名だけが傳へられて居る。

史記の太史公自序に曰く、

陰陽、儒、墨、名、法、道德、此れ務めて治を爲すものなり、

また曰く。

嘗て竊かに陰陽の術を觀るに、大詳(或は祥に作る)にして忌諱衆く、人をして拘はりて畏るる所多からしむ。然れども其の四時の大順を序するは失ふべからざるなりと。

概して言へば、陰陽家は四時の氣節、方位等に基づいて、人の行事に就き、吉凶禍福を推定する方術と云ふことが出来る。而して陰陽家は漢代の易學者が陰陽五行を説くに及んで、自然に學説は融解し、この兩者は一見、

辨別することが出来ない程になり、それが三韓を経て、吾が日本にも傳來したのである。⁽¹⁰⁾

鄒衍の説として傳へられるものは、必ずしも周末に誕生したものではない。水火木金土の五行説は、少くとも殷末周初、箕子が武王のために作つたと稱せられる尙書洪範九疇の中に現れてゐる事實から見て、それは更に古代に遡つた時代に行はれてゐたことが想像されるのである。禮記の禮運篇に

人は天地の徳、陰陽の交、鬼神の會、五行の秀氣なり。

などと有るのを見ると、古代東洋人は五行を五つの元素として理解してゐたと考へられるのである。

しかしながら鄒衍の特殊性は、左様な造化説ではなく、五行の徳を以て帝王の世代に配當したと傳へられるところに、方術としての特色が存するのである。即ち虞は土徳、夏は木徳、殷は金徳、周は火徳を以て王と爲るとして、その興亡や盛衰を歴史に準據した。然るに前漢の董仲舒は春秋繁露卷十三に於て、始めて五徳を仁義禮智信の五常に配當し、木は仁、金は義、火は禮、水は智、土は信なりとし、これより東洋的運命學が生長したのである。⁽¹¹⁾
⁽¹²⁾

(1) 後に解を出す。

(2) 後に傳を出す。

(3) 正蒙書は宋の張載横渠の撰。十卷あり。蒙昧未明の説を訂正するの義にして、また單に正蒙としても知らる。太和、參兩、天道、神化、動靜、誠明、太心、中正、至當、作者、三十、有徳、有子、太易、樂器、王種、乾種の十七篇に分つ。

(4) 後に傳を出す。

(5) 後に傳を出す。

(6) 明の王陽明の語録にして三卷。女婿にして門人なる徐愛等の撰なり。

(7) 簪(すゐ又せい)簪なり。史記の高祖紀に太公推し簪とあり。たかばうきなり。

(8) 鄒忌は周の代、齊の人なり。琴を鼓するを以て齊王に見へ、國政に及ぶ。王これを喜び、封じて成侯となし、宰相の印綬を受くるに至る。

(9) 鄒夷(すうせき)は齊の人なり。鄒衍の策を取以て文に紀すと。

(10) 大寶の制によるに、陰陽寮には、頭、助、允、屬の外に、陰陽師、及び陰陽博士の職員を置き、各その業を分擔せしめ、また九州の太宰府、及び諸國の國衙にも陰陽師を置きて、卜筮、占星、漏刻等のことを掌らしめたり。賀茂保憲、安倍晴明の如き名手出でて益々重用され、安倍晴明の後裔土御門家は代々、陰陽頭に任ぜられ且つ陰陽博士となりて徳川時代まで及べり。吾が國の陰陽道また陰陽五行の説に基き、日月干支の運を考察し、相生相克の理を推し、吉凶を定め趨避を辨ず。即ち方位に忌あり、日時に忌あり、一身の忌あり、民衆の忌あり、一事の忌あり、諸事百般の忌あり、鬼門、金神、歳徳、天一などの如き一つとして拘忌に非ざるはなく、冠婚喪祭の大事より、洗髮爪切りに至るまで悉く之に據る。而して之を祈り、之を禳ふには祭を行ふ。即ち泰山府君祭、雷公祭、屬星祭これなり。また符呪なるもの有り。これを門に貼り、また身につけて、轉厄に備ふるなり。またマジナヒあり。従つて呪咀など行ふなり。反閉の如きも禁厭の一にして、亦、災害を避くる法なりとす。而して多くは之を出行の際に用ひ、身固といふものは略法とす。唯あまりに呪縛的な

る運命學なり。然れども三韓より渡來の當時にありては、科學の部門に屬せしものか。即ち日本書紀、推古天皇の十年十月の條に、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書、並遁甲方術之書也、是時選書生三四人以俾學習於觀勒一矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日並立學方術、皆學以爲業とあり。されば陰陽道の行ふところは卜筮、天文、曆學、漏刻、易占、式占、觀相に及べり。

(11) 春秋繁露は漢の董仲舒の撰にして十七卷あり。繁、一に蕃に作る。名義は明ならず。一説に晷の垂るるを聯貫したるものにて、春秋の比事屬辭に象りて名付けたるものなりと。この書、北宋に始めて世に出づと。楚莊王、玉杯、竹林、玉英、精華、王道以下八十二項より成れり。この書は春秋の旨を發揮し、多く公羊傳に基きて立論するも、往々、陰陽五行の事に及べり。

(12) 鄒衍を單なる陰陽家と認識することは亦、一方的觀察たるを免れず。何となれば前漢末に於て既に亡びし春秋鄒氏傳は、春秋公羊傳と同系統に屬する學說にして、漢の王吉これを繼承せり。清の廖平の公羊補證凡例に曰く、鄒子、齊に遊學して海外九州の學を傳ふ。公羊家法と同源。中國より以て海外人の暗ざる所を推し、當時より上天地の始を推し、所謂、小を驗して大を推すは、即ち伯より以て皇帝を推なりと。即ち知る公羊春秋と鄒衍の五行說九州說の類縁あることを。史記の孟子荀卿列傳に曰く、國を有つ者益々淫侈にして、徳を尙ぶこと大雅の之を身に整へ、施いて黎庶に及びたる若くならざること能はざるを睹、乃ち深く陰陽の消息を觀て、怪迂の變、終始大聖の篇、十餘萬言を作る。その語、闕大不經にして必ず先づ小物を驗へ、推して之を大にし、垠なきに至る。先づ今より以上、黃帝に至るまでを序す。學者の共に術ぶる所にして大に世の盛衰を竝ぶ。因つて其の禮祥度制を載せ、推して之を遠くし、天地未だ生ぜず、窈冥にして考へて原ぬ可

からざるに至る。先づ中國の名山、大川、通谷、禽獸、水土の殖する所、物類の珍とする所を列し、因つて之を推して海外の人の睹る能はざる所に及ぼし、天地剖判せし以來、五徳轉移し、治各々宜しき有つて、符應茲の若きを稱引す。以爲らく儒者の所謂、中國は天下に於て乃ち八十一分して其の一に居るのみ。中國をば名づけて赤縣神州といふ。赤縣神州の内、自ら九州あり。禹の序する九州これなり。州の數と爲すを得ず。中國の外に、赤縣神州の如きもの九あり。乃ち所謂、九州なり。是に於て裨海ありて之を環る。人民禽獸、能く相通するもの莫し。一區の中の如きもの、乃ち一州と爲す。此の如きもの九あり。乃ち大瀛海ありて其の外を環る。天地の際なりと。其の術ぶる皆な此の類なり。然れども其の歸を要するに必ず仁義節儉君臣上下六親の施に止まると。文學博士武内義雄氏また曰く、恐らく鄒衍は孟子の遊齊によつて齊に傳つた儒家言を學び、その春秋に對する見方を更に推しひろめて未知の世界に推し及さんとしたものであらう。即ち歴史的には一般に知られて居る事實を歸納して、木火土金水の五行の消長によつて時勢は推移するものと決論し、この五行消長の法則に従つて歴史以前を想像し、又將來を豫測せんとしたものであり、地理的には彼等の目堵する九州を基礎として之を九乗することによつて未知の世界を想像したものであらう。果して然らば鄒衍の五行説にも孟子の影響があらう。之を要するに孟子が稷下に赴いた結果、儒家學説が齊に傳はり、ここで公羊春秋説と鄒衍の五行説が成立したものでらしい。さうして此の公羊春秋の思想は漢に入つて董仲舒が出づるに及んで一世を風靡するやうになり、鄒衍の五行説は間もなく渤海灣海岸の方士に影響して神仙傳説を生んだやうである云々と。

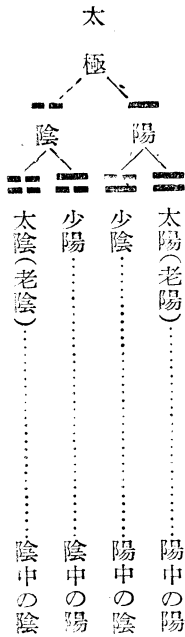
第 九 章

繫辭上傳に曰く、兩儀は四象を生ずと。象は疑ひもなく現象である。しかしながら易經の中には象の字の使用は少くなく、従つて其の意また複雑である。古來、儒者は之を註して區々の説を用ひたが、現象と象徴に大別することは妥當な見解であらう。朱子これを解して曰く

易の象には三様あるに似たり。本畫自ら有るの象あり。奇畫は陽に象り、偶畫は陰に象るが如き是なり。實取諸物の象あり。乾坤六子の天地雷風の類を以て之に象るが如き是なり。只是れ聖人自ら象を取り、未だ是の義を明かにせざる者あり、白馬翰如、載_二鬼一車_一の類の如き是なり。

この本質論は高く評價されなければならない。

四象とは、兩儀より生じたもので、陽儀から生じた陰陽の二つを少陰、太陽(老陽)といひ、陰儀より生じた陰陽の二つを少陽、太陰(老陰)と言ふのである。その記號は



一氣の循環を四象として觀察すれば、春は少陽で、夏は老陽である。従つて秋は少陰にして、冬は老陰でなければならぬ。これは四時として理解するに便であるが、天地間の陰陽に此の四象を具備しないものはないのである。一個の男性は、父からと母からの一切を受け継ぎ、一個の女性は亦、父からと母からの一切を受け継いで居るのである。同腹の兄弟姉妹に相違があるのは、畢竟、その發現特質である優性と、隱在特質である劣性との遺傳的現象であつて、男子（陽）の中に父（陽）と母（陰）と、女子（陰）の中に父（陽）と母（陰）の分子を包蔵することは經驗によつて能く知られてゐる事實である。

斯の如く四象を四方に配當し、東は木にして少陽、南は火にして老陽、西は金にして少陰、北は水にして老陰であると解釋せられ、また數に配當して、太陽は九、少陰は八、少陽は七、太陰は六として理解せられた。七、八、九、六の四數は四象に附着してゐる數で、易では極めて重要なものとし、就中、九と六とは陽爻と陰爻とを表明する。

繫辭上傳に曰く、四象は八卦を生ずと。

四象の上に、各一奇一偶を生じて三畫となるもの八、是に於て三才備はるといふ朱子の説は東洋的結論で、筆者は既述の如く解釋したのである。しかしながら兎も角、八卦は易學が採用した元素であることは是を疑ひ得ない。天、澤、火、雷、風、水、山、地は古代人がいみぢくも見出した元素であり、さういふ意味からは五行の採用する五元素は、異る範疇に屬する系統を傳承したものだ⁽¹⁾と考へられるのである。清の吳肅公は其の五行間⁽²⁾に於

て明快に説いて曰く

易には五行の説無し、尙書の禹貢には六府（水火金木土穀）を言ふ。府は聚なり。皆な以て用を利し生を厚くするなり、洪範には五行を言ふ。萬物を拮擧して五者を以て生民通行の物と爲す。之を五味に歸しては土は爰に稼穡すと曰ふ。民の命を重するなりと。

五行が他の系統より來てゐるといふ研究は、五行研究の機會に譲らなければならぬが、少くとも吾々の知れる限りに於て、佛教に於ては俱舍論(3)の中に地水火風の四大を以て四元素となし、眞言密教にあつては地水火風空の五大を以て五元素として居る。俱舍論に近似してはギリシヤのエンペドクレス(4)が同じく地水火風を四元素と唱へ、これが古代ギリシヤ哲學の提唱し來つた水と火の論争を揚棄したのである。

八卦の性情は説卦傳に簡にして要を得た説明をして

乾は健なり。坤は順なり。震は動なり。巽は入なり。坎は陷なり。離は麗なり。艮は止なり。兌は説なり。

とあるが、更に唐の孔穎達は之を解析して曰く

乾は天に象る。天體逆轉息まず、故に健と爲す。坤は地に象る。地は天に順承す、故に順と爲す。震は雷に象る。雷は萬物を震動す、故に動と爲す。巽は風に象る。風は火に象る。火は必らず物に著く、故に麗と爲す。艮は山に象る。山體靜止、故に止と爲す。兌は澤に象る。澤は萬物を潤す、故に説と爲す。

故に基本八卦を名づけて、乾爲天、兌爲澤、離爲火、震爲雷、巽爲風、坎爲水、艮爲山、坤爲地といふのである。

既に述べたる如く、三畫卦を得た古代東洋人は、更に之に三畫を加へて六畫と爲すは、彼等の智慧が複雑を加へると共に、極めて容易に悟り得た知識であつたであらう。單卦を二重に重ねることによつて、彼等は宇宙の問題から、人間社會の複雑性を解明する秘密を知つた。斯の如くして乾卦を基準として他の七卦を之に重ね、その他卦をも同様の方法を以て繰り返すときに、單行の五十六卦と、八卦それ自身を重ねた重卦の八を得て、六十四卦を得ることが出来る。

邵子は六十四數を、尤も法象自然の妙を見るなり、と言つて居る。

しかしながら太極、兩儀、四象、八卦、六十四卦といふ發展は、更に之に六十四を乗じて四千〇九十六卦を得べしと爲す奇説も現はれる蓋然性を有する。前漢の焦贛は、その易林に該説を主張してゐるが、未だ何人も首肯するところとならない。

されば明の薛瑄は其の讀書錄に記して曰く

易は至微よりして以て至著に至る。太極兩儀四象より以て六十四卦に至るは體用一原なり。⁽¹⁾六十四卦より以て兩儀太極に至るは顯微無間なり。體は即ち微なり。顯は即ち用なり。體用が原を一にすとは、先づ體を言て用は其の中に在り。顯微間なしとは先づ用を言て體は外なること能はず。太極の中に陰陽五行男女萬物の理を涵むは

體用一原なり。陰陽五行男女萬物が太極の理を具ふるは顯微無間なりと。

而も一卦は六爻を包含する。従つて六十四卦、三百八十四爻を包藏する。更に亦、この内に含める策（筮竹）の數は一萬一千五百二十本を包擁する。說卦傳に曰く

二篇の策は萬有一千五百二十にして、萬物の數に當るなり。

といふ所以のものは、大宇宙を表現するの謂であつて、六十四卦を乘することなどの奇趣ではないのである。朱子の易學啓蒙は之を説いて曰く

二篇とは上下經六十四卦なり。六十四卦の陽爻の總數百九十二にして、每爻各三十六策。三奇老陽の過揲の策數なり。之を積て六千九百十二を得るなり。陰爻も亦、百九十二にして每爻二十四策。三偶老陰の過揲の策數なり。之を積て四千六百八を得るなり。また二者陽爻陰爻の策を合せて萬有一千五百二十と爲るなり。若し少陽と爲れば則ち每爻二十八策。二偶一奇の過揲の策數凡て五千三百七十六なり。少陰は則ち每爻三十二策。二奇一偶の過揲の策數凡て六千一百四十四なり。之を合はすも亦、萬有一千五百二十と爲るなりと。

従つて太極より兩儀、四象、八卦、六十四卦、三百八十四爻、萬有一千五百二十策といふ組織と構成は、易哲學の體系として把握されなければならない。

六十四卦の正象とは、次の如きである。

天行健。地勢坤。雲雷屯。山下出泉蒙。雲上天需。天與水違行訟。地中有水師。地上有水比。風行

天上レ小畜。上天下澤履。天地交泰。天地不レ交否。天與レ火同人。火在三天上二大有。地中有レ山謙。雷出レ地奮豫。澤中有レ雷隨。山下有レ風蠱。澤上有レ地臨。風行三地上二觀。雷電噬嗑。山下有レ火賁。山附三於地二剝。雷在三地中一復。天下雷行物與二无妄一。天在三山中二大畜。山下有レ雷頤。水游至習坎。明兩作レ離。山上有レ澤咸。雷風恒。天下有レ山遯。雷在三天上二大壯。明出三地上二晉。明入三地中二明夷。風自レ火出家人。上火下澤睽。山上有レ水蹇。雷雨作解。山下有レ澤損。風雷益。澤上三於天二夬。天下有レ風姤。澤上三於地二萃。地中生レ木升。澤无レ水困。木上有レ水井。澤中有レ火革。木上有レ火鼎。洊雷震。兼山艮。山上有レ木漸。澤上有レ雷歸妹。雷電皆至豐。有レ雷小過。水在三火上二既濟。火在三水上二未濟。

この大象傳の象解は尙ほ複雑を免れないところから、傳義大全に載せられた現行の名稱が、廣く傳誦されて居るのである。

(1) 後に傳を出す。

(2) 後に解を附す。

(3) 阿毘達磨俱舍論の略稱なり。世親の作にして唐の玄奘譯なり。三十卷なり。阿毘は對、達磨は法、俱舍は藏。六足發智婆沙等の薩婆多部の諸論を對法論と名づく。藏には攝持と所依との二義ありて、第一の義は此の論は彼の對法論の中の勝義を攝持包含する故に此の論を名づけて對法藏といふ。即ち對法の二字は彼の本論に屬し、藏の一字は此の論に屬す。

第二の義は彼の本論は此の論の所依なる故に藏と名づく、即ち三字ともに彼の本論の名なり。されば此の論は全く彼の論

を所依として造れるものなれば亦全く彼の名を取りて此の論の名とす。六釋の中には全取他名の有財釋なり。わが國に傳はりし記録は分明せざるも、或は云ふ、皇極天皇の大化年中、智通、智達、智達を兩師これを傳ふと傳へられ、また聖武天皇の天平年中、玄昉僧正これを傳ふと。東大寺に於て學習せしもの最古のものなり。

(4) 地水火風の四大は俱舍論によるに假實の二種に分つ。實の四を四界、または四大界と稱し、假の四を單に四大と稱するなり。實の四大とは、一に地大なり。堅を性として物を支持す。二に水大なり。濕を性とし物を收攝す。三に火大なり。煖を性として物を調熟す。四に風大なり。動を性とし物を生長す。この四は以て一切の色法を造作するによつて、能造の四大といふ。その四大の體は觸處所攝にして唯身根所得なり。身根諸色と觸れて堅澁煖動を覺知するなり。次に假の四大とは、世間、稱するところの地水火風なり。この四大はその實、地水火風及び色聲香味觸の九法の假の和合なれども、そのうち最も堅性の増盛なるを地と名づけ、動性の最も増盛なるを風と名づく。即ち假の四大は所造に屬するなり。然るに成實論に依れば、實の四大を否定し去り、唯、假の四大のみ、色香味觸の四塵を以て、一切の色法の能造となし、四塵和合して四大を構成すと説く。故に四大は唯假法なりと主張す。或は之を二種に分ち、正報の人身を内の四大と稱し、有識の四大と稱し、依報の諸色を外の四大と稱し、無識の四大なりとも稱す。

(5) 地水火風の四大と、空大を加へて五大となす。空は無礙を性とし、不障を用となす。勝論は九實の中に之を攝め、數論は二十五諦の中の第五位に五大あり。俱舍宗は空を一種の顯色として立て、これを色境中に收め、成實宗及びその他の大乘は之を空無の法とす。密教は空に青色團形ありとし、胎藏界の大日法身の體となすなり。密教は攝持を理の義となし、事物を總じて理と稱せり。而して此の五に一切の功德を圓滿すれば五輪と名づくるなり。その種子は阿尼羅吽欠また阿縛

羅訶佉なり。是れ即ち五方五佛の種子なり。而して此の五大を五方の五佛に配するに、善無畏は韋勝軌に地水火風空、次第の如く東西南北中に配し、不空は宿塵經にこれを空風水地と逆次に次第して東西南北中に配せり。これは善無畏の説は始覺上轉の修生、金剛界の東因の義により、また不空の説は世間の五行の木火土金水を東南中西北、また青赤黃白黒に配して、即事而眞の意を明らかめ、本覺下轉の本有胎藏界の中因の義に依るが故なり。従つて不空の方深きなり。されば不空は、中因の義なれば地大を以て中央大日如來として、これを發心の位とす。これ本有の菩提心堅固不動にして、諸法本源の體性たること猶ほ大地の堅固不動にして、且つ萬物の中心にして、その體性本源なる如くなればなり。法界體性智の諸法の本源たるまた然り。大日如來の法界の體性たるまた然り。而して黃は不變色なれば是また菩提心の不變に相應するなり。次に空大を以て東方阿闍如來アジャとし、これを發心の位とす。これ本有の菩提心により、歸本の菩提心を發して萬行を修し、行行圓具して欠減なきこと猶ほ彼の虚空の一切萬物を包含する如くなればなり。其の大圓鏡智の萬象を包含することまた然り。その東方なるは、東方は萬物の始めなれば萬行の起首と相應し、その青色なるは、青色は五色を包含して一切色なれば萬行を包含するに相應す。次に風大を以て西方、阿彌陀如來となし、これを涅槃の位となす。これ阿彌陀は一に無量壽と譯し、無量壽は涅槃の徳なり。而して其の無量壽は風大の徳なること猶ほ世人の壽の風息に類する如くなればなり。その妙觀察智の説法の斷疑生信の功用は、風大の能殺能生の二徳にあるに相應す。その西方にあるは、涅槃は萬物の終歸なれば、東方の萬物の起首に對して之を西位となすなり。而してその白色は無量光、または慈水の白淨に相應す。次に火大を以て南方、寶生如來となし、これを成菩提の位となす。これ萬行成熟して菩提の花を開くこと猶ほ火熱の草木に於けるが如くなればなり。故に寶生佛を胎藏界にては開敷華王如來と稱し、また其の平等性智の説法の差別を亡すこと猶ほ火

の能く物を燒盡するが如し。その南方に配し、赤色なること言はずして明らかなり。次に水大を北方、不空成就(釋迦)となし、これを方便究竟の位となす。これ利他の方便にして、利他の妙業を成就するに其の能く衆生の機に應じ能く迷妄を除くこと猶ほ水の方圓の器に隨ひ、且つ能く塵垢を洗ふ如くなればなり。また其の成所作智の妙業を成ずるの義また然り。その北方にあるはインドの風俗にては、北方を以て勝れたる方角となせば、究竟位を勝位に相應し、黑色は是れ染色の至極なれば究竟位の至極に相應すとなせり。大日經二入眞言品偈は五大の深義を説きしものにて見通すべからざる文獻といふべし。

(6) エンベドクレスは紀元前四九五年、ギリシャのアグリゲンツムの名家に生れ、市に盡したるの故を以て王冠を與へられしが拒絶す。後、アグリゲンツム市を遣はれ、ペロポネッスに死す。時人に魔術者の如く思はれしと傳へらる。パルメニデスの不變の説と、ヘラクレイトスの流轉の説とを和合し、世界は不變なる元素、地、水、火、空氣の結合によりて種々の變化を現はすと説き、この結合分化の力を、愛と憎惡とに歸せり。愛のみある世界は完全なる球であり、それは神なりと。憎のみの世界は元素の分散なりと。この兩極端の間に世界の各状態があり、個の生滅ありと説けり。動植物は地より生ずれども、人體の各部分は別に存し、偶然的結合によりて、初めは畸形を生じ、生存増殖に適するに従ひ漸次に今日の如くなれりと言へり。而して靈魂は元來、神と共に在りしが、墮落によりて地上世界の生物中に入り來りしものにて、個體の間を輪廻すと説けり。故に彼は肉食を禁じ、犠牲を戒しめたり。

(7) 後に傳を出す。

(8) 後に解を附す。

(9) 後に傳を出す。

(10) 讀書錄。十一卷。同じく續讀書錄十二卷あり。明の薛瑄の門人、閻馮錫の編なり。

(11) 體用は元來、佛教の語なり。即ち天台大師の法華文句に體卽實相、無レ有二分別。用卽立三一切法、差降不レ同、如三大地一、生三種々芽とあり。一味の實相を體となし、因果の諸法を用となすなり。宋時代の儒者、多く佛教の影響を受く。程伊川その易傳序に曰く、易は變易なり。時に隨ひて變易して以て道に従ふなり。至微なるものは理なり。至著なるものは象なり。體用一原にして顯微無間なり。故に善く學ぶ者は之を求むる必らず近きよりす。近を易どるは易を知る者に非ざるなりと。易理を釋するに佛教の術語を使用するは多く宋儒に見るところ、薛瑄また之を踏襲せるのみ。

(12) 過揲の策三十六とは、四十九本の筮竹より、三奇老陽の掛扞の策十三本を除去せる數をいふなり。過揲とは四を以て揲へられたるものをいふ。即ち揲を經過したる筮竹にして餘數に對していふなり。餘數と掛一を加へて十三本と爲るなり。百九十二に三十六を乗ずれば即ち六千九百十二なり。以下これに準ず。

第十章

唐の孔穎達、易正義をなすに易緯を引用して述べて曰く

卦は掛なり。(音釋説)物象を懸掛して以て人に示すをいふ。故に之を卦と謂ふ。

と。然るに楊慎(2)これを駁して

孔穎達曰く、卦とは掛なり。これを壁に掛くるなり。蓋し物を懸くる杙なりと。諸儒みな其の説を用ひ、他解なし。予おもへらく、非なり。杙は壁に掛くべし。易卦、豈に壁に掛くべけんや。卦は圭なり。古は律を造り、量を制し、六十四黍を一圭と爲したれば、六十四象、總べて名づけて卦と爲して可なり。應劭(3)は曰く、圭は自然の形、陰陽の始なりと。卦とは亦、自然の形、陰陽の象なり。その字たるや、卜に従つて義を爲し、圭に従つて聲を爲す、亦、兼義なり。古文圭も亦音卦、今桂字、手に従つて義を爲し、圭を化して聲を爲せば、圭即ち音卦なること證すべし。卦は古文の圭字なり。

と言ふ。吾々は此に從來の支那學者の一つのタイプを見る。即ち六十四黍を一圭と爲すから、六十四象の總名を圭、即ち卦と爲すといふやうな尤もらしい説から、多くの牽強附會を試みるのである。それよりは孔疏に玉篇(4)に卦、八卦也、兆也とあり、龜甲を炳きて生じた炸(裂目)の謂かといふのが、正しい。卦字の卜に従ふのを是としなければならぬとすれば、右の端的な解釋が間違つて居らないと言はなければならぬ。故に元來、龜

トの用語であつたのが、援用されたのである。

卦は六畫より構成されて居る。而して其の各一畫を爻と名づけてゐることも亦、人の知るところであらう。繫辭傳には八卦成列、象在其中矣。因而重之、爻在其中矣と。爻は六爻なり、既に重ねて後、卦に六爻あるなり、と朱子の注する所以である。

説文には爻、交也。象ニ易六爻頭交ニ也と言つてゐる。

繫辭また爻を釋して曰く

爻者言ニ乎變一者也。

爻也者效レ此者也。

爻也者效ニ天下之動ニ者也。

これより説をなす者、枚擧に違がないのである。孔穎達は曰く之を爻と謂ふは、繫辭にいふ、爻也者效レ此者也と、聖人爻を畫いて以て下物の象に倣效すとなり。

また吳澄(5)曰く

爻の言たる交なり。

また郝敬は曰く

奇偶相交る、是の故に之を爻と謂ふ。

また楊慎は例の如く別の見解を附して曰く

爻は交疏の臆なり。その字、臆形に象る。今の象眼臆なり。爻に取るところは義旁通に取るなり。

この説は、いたく支那好みに投じ、或る本に至つては、爻を窓の義に解して、一窓の孔六十四、六十四窓の孔すべて三百八十四なりなどと言つてゐるが、此に至つては義解の邪道も亦極れりと言はなければならぬ。吾々はさういふ中で最も妥當な解明を海保漁村の周易古占法の中から擧げたい。曰く

蘇子瞻⁽⁸⁾は言ふ、爻は折俎なり。古は折俎を謂ひて爻と爲す。その文、蓋し折俎の形に象る。後世、易に六爻あるを以て、故に肉を加へて肴と爲し、以て之を別つ。爻は何爲れぞ折俎に取るや。爻は天下の動に效ひ、卦の材を分ち、卦の體を裂きて險夷の變に適するなりと。任兆麟⁽⁹⁾の讀經禠記に、爻は禮俎なり。半肉且に在るに从ふ。且は口足二あるに从ふ。一は地なり。地に藉く形に象る。古は折俎を爻と爲す、後世、肉を加へて肴と爲す。象は全體なり、一卦の全體を言ふ、故に象といふ。一爻の義をいひ、卦の體を裂くこと俎の如し、故に爻といふと。愚按ずるに爻の義は肴に取る、故に古人もまた肴に作る。孔寔碑に、易建八卦、撥^レ肴繫^レ辭と是なり。

唯、こゝで明白にして置かなければならない點は鄭玄の言へる如く

卦は三畫に始る。未だ爻あらざるなり。

如何にも八卦は三畫によつて基礎的に成立したが、それを同時に三爻としては取り扱はないのである。故にまた曰く

因て之を重ね、其の體に上下あり、その位に内外あり、その時に初終あり、その序に先後あり、而して爻は其の中に在り。

即ち六畫にして大成の卦成つて後、はじめて爻の名を生じたので、それ以前には唯、畫と言つたに過ぎない。故に八卦、列を成す時、たゞ之を三畫と謂ふべく、これを三爻と謂ふべからずであつて、畢竟、爻とは全卦の部分としてのみ意義をなすものであり、それ以外には意味がないのである。

しかしながら嚴密に易經に就て見ると、六十四卦、三百八十四爻とは言ひながら、實は三百八十六爻なのである。それは乾爲天と坤爲地の二卦に限り、別に用九と用六の二爻辭あるを以てである。乾の用九に曰く

見群龍无首。吉

また坤の用六に曰く

利永貞。

而して爻辭の作者に就ては、卦辭と共に文王の作なりとするものに、鄭玄、兪球(12)があり、近世になつて孫志祖(13)、張惠言(14)があるが、却つて定説となりつゝあるのは爻辭の作者は周公旦(15)であるといふ説である。而して此の説の支持者としては、馬融(16)、陸績(17)、鄭衆(18)、賈逵(19)、王肅、朱子、郝敬、毛奇齡の多數を擧げることが出来る。

(1) 字音を註するを音釋といふ。一に音註といふ。直音、譬況比方、四聲、反切の四法これなり。

(2) 楊慎は明の人。字は用修。升庵と號す。新都に生る。少師廷和の子なり。年二十四、正徳六年。進士に擧げられ、翰

林修撰を授く。尋で病を以て引退し歸る。世宗立ちて經筵講官に充つ。常に舜典を誦ず。かつて上疏して桂夢張璠の學を排斥し、旨に忤ひて詔獄に下され、杖を受く。また疏してまた杖罪に問はれ、南雲永昌衛に謫せらる。嘉靖三十八年七月、雲南の謫居に卒す。年七十二なり。著一百餘種、世に行はる。隆慶の初め、光祿少卿を贈られ、天啓年中、文憲と追諡す。

(3) 應劭は漢の人。字は仲遠。汝陽の人なり。篤學博覽にして律令を刪定せり。漢官禮儀十四卷を注し、風俗風紀を撰し、以て古今の物類を辨ず。世その該洽に服す。

(4) 玉篇は隋志に三十一卷といひ、唐志に三十卷とす。梁の武帝の大同年中、顧野王の編になる字書なり。この書は説文の部叙に満足せずして増廣改正し、五百四十二部に分つと。本成りて後、太宗簡文帝は詳細妥を得ずとして、簫子顯の子、愷をして改刪せしむ。この時、既に原本の眞を失へり。唐の上元元年、富春の孫強、字を増して上元本を成し、宋の眞宗の大中祥符六年、陳彭年、勅を奉じて之を重修し、遂に原態を失ふと言はる。これ大廣益會玉篇なり。また一に重訂玉篇といふ。本書の原本は支那に佚して却つて吾が國に傳はれり。岡井博士説に據るに

(一) 卷八(心部殘簡) 久原文庫藏

(二) 卷九(言十幸) 早稻田大學藏

(三) (冊一欠) 福井崇蘭館藏

(四) 卷十八(放一方) 藤田男爵藏

(五) 卷十九(冷一遼) 右同斷

(六) (渡一洗) 右同斷

(七) 卷二二(山一品) 神宮文庫藏

(八) 卷二四(魚部殘簡) 大福光寺藏

(九) 卷二七(糸一纏) 高山寺藏

(十) (經一繕) 石山寺藏

以上の如し。以て珍とするに足る。

(5) 後に傳を出す。

(6) 參疑首編

(7) 海保漁村。名は元備。字は郷老。別名を紀之。漁村はその號なり。通稱を章之助といひ、傳經廬と號す。南總武射郡北清邑の人なり。父恭齊、七八歳の頃より學を授く。十四始めて江戸に出づ。二十四歳再び江戸に出で、知を柳沂劉に受け、遂に太田錦城門に入る。天保庚子、周易古占法成る。後三年、京師に遊び、日野亞相公のために賓禮せらる。明年老中佐倉侯の招きに應じ、嘉永壬子、水戸侯の爲に經を講ぜんとして左右に妨げらる。佐竹、水野の招きに應ぜず、幕府の儒官となり處士を教ゆ。教授を命ずること漁村より始むと。後五年、疾を以て辭し、慶應二年九月十八日卒す。六十九歳なり。

(8) 後に傳を出す。

(9) 任兆麟は清の人。字は文田。一字は心齊といふ。江蘇興化の人なり。清朝の大儒任大椿の族弟にして、邑の諸生。孝廉方正に擧げらる。著はすところ有竹居集あり。

(10) 本義に曰く、用九言_下凡筮得_二陽爻_一者、皆用_レ九而不_レ用_レ七。蓋諸卦百九十二陽爻之通例也。以_二此卦純陽而居_レ首、故於_レ此發_レ之、而聖人因繫_二之辭_一、使_下遇_二此卦_一而六爻皆變者即_レ此占_レ之と。

(11) 本義に曰く、用六言_下凡筮得_二陰爻_一者、皆用_レ六而不_レ用_レ八、亦通例也。以_二此卦純陰而居_レ首、故發_レ之。遇_二此卦_一而六爻俱變者、其占如_二此辭_一と。

(12) 俞琰は宋の人。字は玉吾。吳の人なり。寶祐の年間、詞賦を以て稱せらる。宋亡びて後、隱居してまた仕へず。書に於て讀まざるところなし。最も易に精しく、また好んで琴を彈ぜりと。

(13) 孫志祖は清の人。字は詒穀。杭州の人なり。乾隆三十一年の進士にして、御史に官す。平生、著書を以て事となす。折衷精審、武斷の論をなさず。家語疎證、文選考異等の書を著はせり。

(14) 後に傳を出す。

(15) 周公旦は周の文王の子にして、武王の弟なり。武王の歿後、成王を相け、召公奭と共に攝政す。管蔡の徒これを疑ひ、武庚と亂をなすや周公東征し、武庚と管叔を殺し、蔡叔を放つ。後、成王、都を洛邑に營み、周公をして留り治めしめ、陝以東は周公これを主どる。後、魯に封ぜらる。禮樂制度を定め、文物始めて大いに盛となりしは周公に據る。

(16) 後に傳を出す。

(17) 鄭衆は漢の人。字は仲師。父興に従ひ、左氏春秋を受け、三統曆に明かなり。永平の初め、明經を以て給事中となる。節を持って匈奴に使して拜禮を拒む、單于大いに怒り、之を脅服せんとす。鄭衆、劍を按じて自ら誓ふ。後ち歸還し、上言して曰く、臣誠に大漢の節を持し、毘裘に對し獨り拜するに忍びずと。

(18) 後に傳を出す。

(19) 後に傳を出す。

第十章

第十一章

易が遂に儒家の易に終るならば、魏の王弼(1)に於て極れりと謂ふべきであらう。しかしながら所謂、義理の易は同時に煩瑣な理論易に墮すを免れない。

能く易を知る者は筮せずとの謂は、尙ほ賢者に限られるのである。故に儒者は多く義に従ふが故に、卜筮を用ふるを欲しない所以のものは、彼が賢明なるが故である。しかしながら自ら嫌疑を決し得べき人は天下に却つて稀少なのである。社會的不幸は多く人の無智に據る。卜筮が永遠に要求される所以であらう。

程門、筮を取らず。朱子、却つて義理と卜筮を併用した所以のものは、行動的な儒者の面目を發揮せるものと言ひ得るだらう。

尙書(2)、洪範(1)の九疇(2)の第七に稽疑を擧げてゐる。稽は考である。疑迷あれば卜筮して之を考へるのであつて、これが占の最古の文献であらう。卜は龜甲を焼いて占ひ、筮は筮竹を以て占ふのであるが、總稱して占に解釋して好す。

占は、出發點から或る一定の目的點を明らかにするために一に従ひ、それに一定の方向を與えるゝを加へて、卜字を生んだのである。而して卜は口に依つて傳へられるので口字を加へて、占字を得たのであらう。稽疑には公平無私なる人を選んで卜筮者となす。卜筮者は同時に三人を立てゝ占ひ、二人の言に従ふを以て法としたらしい。

故に曰く

汝則ち大疑あれば、謀乃の心に及し、謀卿士に及し、謀庶人に及し、謀卜筮に及す。

と。人事を盡して卜筮に及ぶのに、第一に自心、第二に人、而して最後に卜筮なるべきことを教へて居るのである。この故に繫辭上傳の

天下の吉凶を定め、天下の覺覺⁽⁶⁾を成す者は著龜⁽⁷⁾より大なるは莫し。

といふ意味が明白となつて來るのである。

されば中庸に亦、曰く

國家將に亡びんとするや必ず妖孽⁽⁹⁾あり、著龜に見る。

と。また禮運注の正義に曰く

先王聖人將に大事あれば必ず著龜を秉り執りて吉凶を問ふ。

と。明の來知徳⁽¹⁰⁾の註に曰く

凡そ人、事あれば人謀ること先に在り。事の吉凶未だ決せざるに及で、方に卜筮に決す。是れ易に、人謀、鬼謀、百姓與^レ能と説く所以なり。故に尙書に曰く、謀及^二卿士^一、謀及^二庶人^一、謀及^二卜筮^一と。心を先にして人を後にす、人を先にして鬼を後にす、輕重知るべし。

と。鬼とは此の場合、卜筮を指すこと勿論である。

洪範に、吉凶を定むるに六條を出す。

一に、汝則ち從ひ、龜從ひ、筮從ひ、卿士從ひ、庶民從ふ。是を大同と謂ふ。身其れ康疆にして、子孫其れ吉に逢はん。

二に、汝則ち從ひ、龜從ひ、筮從ひ、卿士逆ひ、庶民逆ふは吉。

三に、卿士從ひ、龜從ひ、筮從ひ、汝則ち逆ひ、庶民逆ふは吉。

四に、庶民從ひ、龜從ひ、筮從ひ、汝則ち逆ひ、卿士逆ふは吉。

五に、汝則ち從ひ、龜從ひ、筮逆ひ、卿士逆ひ、庶民逆ふときは、内に作すは吉、外に作すは凶なり。

六に、龜筮共に人に違ふときは靜を用ふるは吉。作に用ふるは凶なり。

洪範は箕子(註)の作と傳へられてゐるに徴しても、右によつて殷の末期の卜筮法が想見されるのであるが、心を先として人を後にし、人を先にして卜筮を後にするなどは極めて妥當な行き方で、先人の極めて亦常識的なるを知らしむるのである。のみならず右の六法なども、現代の事相に徴して、少しもの矛盾を感じない。即ち第一は人と龜筮と與に皆な從ふので、大同といふのであるが吉ならざるはないこと言ふ迄もない。第二は人君のみ獨り從ふて龜筮も違はざるは吉ならざるはないのである。第三は卿士のみ從ひ、第四は庶民從ふので吉ならざるはないといふ。第五の場合に至ると國論統一せざるの形で、内の祭祀のことに用ひて吉と雖も、尙ほ外の征伐等に用ひては凶と教へてゐる。第六は靜、即ち常を守らば吉なるも、作、即ち動作に用ひては凶を教へてゐるのである。

が、第五と第六などは最も味ひ深い感がある。

禮記表記篇に曰く、大事は即ち卜し、小事は即ち筮すと。殷の湯王十世の孫、盤庚かつて耿(12)より殷(13)に遷らんとして民これを喜ばず、卜に稽ふるの記事が尙書にあるが、斯の如く大事は卜に決したのである。しかしながら孔子、易を賛してより、著重んぜられて龜書は傳はらず、といふも是は龜卜の方が神祕的で、易の機構の合理的なるに及ばない爲に、次第に衰亡した事實を物語るに過ぎないのである。

それゆゑに、易は占筮より來れりといふ説が正しいので、歴史的發展から易を見れば、占筮の易の方が古く、義理の易は新しいのである。

(1) 後に傳を出す。

(2) 高瀬博士の易闡幽に曰く

大正十三年十月十七日、余は伊藤願也氏の來示を得て、始めて伊藤仁齋先生自筆の易經古義と題する原稿を見ることを得たり。紙數二十四枚、半紙に書し朱を以て消したるもの書き入れたるもの、欄外にも行間にも多くの添削あり。從來、世間に周易乾坤古義の題にて傳はるものは此の原稿を門人が整理淨寫したるもの、傳寫なるべし。卷首には易經古義綱領と題して、八箇條の短論文あり。今其の二條の主旨を譯述して之を掲ぐれば左の如し。

古には儒家の易あり、卜筮家の易あり。儒家の易は象是なり。卜筮家の易は繫辭說卦是なり。蓋し象象二篇は専ら陰陽消長の理を明かにして之を人事に及ぼす、一字の卜筮に及ぶ者なし。繫辭說卦は義理に本づくとも雖も、實は卜筮を以て

主と爲す。蓋し卜筮家の易なり。夫れ義理を主とすれば則ち卜筮を雜ふるを得ず。卜筮を主とすれば義理を棄てざるを得ず。何となれば學問は義を主とし、卜筮は利を主とす。義利の辨は猶ほ薰蕕の相入れざるが如し。故に象象二篇には一字の卜筮に入ることなし。卜筮家は其術を崇くせんと欲するのみ。故に義理に託し以て重を取らんと欲するのみ。故に義理に本づくとも雖も實は卜筮を以て主と爲す。易を學ぶ者は唯當に象象の理に従ふべし。繫辭說卦に於ては則ち其の當に取るべきを取りて、卜筮の説に及ぶ者は之を闕て可なり。孔門の旨に背馳するに至らざるなり。莊周曰く、易は以て陰陽を道ふと。周は蓋し儒家の易を學ぶ者なり。若し易をして全く繫辭說卦の説の如くならしめば則ち周は必ず易を以て卜筮を道ふと曰ひて、易は以て陰陽を道ふと曰ふを得ざるなり。善く易を讀む者當に自ら之を知るべし。周の言は先儒以て當れりと爲す、而も繫辭に曰く、以て言ふ者は其辭を尙ぶ、以て動く者は其變を尙ぶ、以て器を制する者は其象を尙ぶ、以て卜筮する者は其占を尙ぶと。若し果して是説の如くならしめば則ち周の言は纔かに其の一を得て其餘に通ぜずと謂ふべし。而して象象も亦備はずと謂ふべし。故に曰く莊周は蓋し儒家の易を學ぶ者なり。

また曰く

周易は固より卜筮の書なり。然れども象象は棄てて而して取らず、専ら陰陽消長の理を明かにし以て之を人事に推す。實に家國天下日用常行の要典と爲す。其の天下萬世に功あること偉なりと謂ふべし。朱考亭氏は又之を卜筮に反へず者は何ぞや。若し易を以て卜筮の書と爲さば則ち易林元龜の屬のみ。豈に詩書春秋と同じく六經に列するに足らんや。義に従へば則ち卜筮を用ふるを欲せず。卜筮を用ふれば則ち義を捨てざるを得ず。孔子曰く、命を知らざれば以て君子と爲すことなしと。また曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩ると。若し易を以て卜筮の書と爲さば則ち易は小人の爲に謀て、君

子の爲に謀るに非ざるなり。且つ語孟の二書は一言も卜筮に及ぶ者なきは蓋し此が爲の故なり。疑あれば則ち須らく卜筮すべし。疑なければ亦何ぞ卜筮せん。世に狐疑多き者は屢卜筮を事とす。然れども卦爻に於て連りに筮得する者あり、終身筮得せざる者あり。又此の爻を筮得すれば則ち唯此一爻が己の用と爲て其他の六十三卦三百八十三爻は皆無用の物と爲らん。浩々たる易經、僅かに一事の用以て通ずることを爲すのみ。豈に以て尙ぶに足らんや。又事と占と相應せざる者あり。故に本義に爻と占者とは相資主と爲るの説あり。南蒯將に叛せんとして之を筮して蕢囊元吉の爻を得たり。故にまた易は君子の爲に謀て小人の爲に謀らずの説あり。附會の譚なり。易を以て卜筮の書と爲せば則ち其蔽は此の如し。學者は詳にせざるべからず。

(3) 古は單に書といひ、或は虞夏商周の名を冠して虞書夏書等といふ。漢以後これを尙書と言ひ、宋以後に至つて書經といふ。

(4) 洪は大なり。範は法にして、上は天文を稽へ、下は地理を祭し、中は人物を參へ、治國平天下の大法の書なり。禹、洪水を治めて天より與えられたりと傳ふ。

(5) 疇は類なり。九疇とは大法を九箇條に分類せるものなり。

(6) 聖聖(びび)つとめて倦まざる貌なり。

(7) 著(し)めとぎなり。後に解を出す。

(8) 正義本、大に作れども、王肅家語注、禮運註、儀禮疏等、大を善に作れり。

(9) 妖孽(えうげつ)わざはひ。災異なり。

(10) 後に傳を出す。

(11) 殷の紂王の親戚なりと。或は云ふ名胥餘。紂始め象箸を爲くる。箕子歎じて曰く、彼象箸を爲らば必ず玉杯を爲らん、玉杯を爲らば必ず遠方珍怪の物を思て之を御せん。輿馬宮室の漸此より始まん救ふべからざるなりと。數々、紂を諫むれど聽かず。乃ち髮を被り、佯り狂して奴と爲る。周の武王、既に殷に克て箕子を訪問す。箕子爲に洪範を陳す。武王、箕子を朝鮮に封じて之を臣とせず。箕子殷の故墟を過ぎ宮室毀壞して禾黍を生ずるを見て之を傷む。哭せんと欲すれば不可なり。泣かんと欲すれば婦人に近しと爲す。乃ち麥秀の詩を作り以て之を歌詠す。其の詩に曰く、麥秀漸漸兮、禾黍油々、彼狡童兮、不與我好兮と。狡童とは殷の紂王をいふ。殷の民、これを聞きて皆な流涕すといふ。

(12) 殷の祖乙、河北の耿に都を定むと。藁城縣西一里と傳ふ。

(13) 河北安陽縣北といふ。發掘せられし殷墟は今日の河南彰德府安陽縣なり。

第十二章

繫辭上傳に曰く

著の徳は圓にして神なり。

と。古本は圓を闕となし、釋文は員に作つてゐるが、意は變化窮りなく方體なきを言ふのである。

また説卦傳に曰く

昔者、聖人の易を作るや、神明を幽贊して著を生ず。

と。謂ふ意味は、深く神明の道を知り贊け、めどぎを用ひて卦を求め、吉凶の占をなす法を生ずると言つて居る。

されば説卦韓注に曰く

著、命を受くること嚮ふが如く然る所以を知らずして然るなり。

と。

按ずるに、曲禮上、卜筮不相襲の孔疏劉向の言に曰く

靈著百年にして神に、其の長久なるを以ての故に能く吉凶を辯ず。

とあり、古代東洋人は著を以て甚だ貴重としたことが想像されるのである。従つて著の神祕性は古文献に蓋し

少くないのである。説文に曰く

著は蒿の屬なり。千歲に生ず、三百莖、易を以て數を爲す。天子は著九尺。諸侯は七尺。大夫は五尺。士は三尺。艸に从ふ著の聲とあり。(第一篇下艸部)

一般に知られたところでは著は「めどぎ」といふ草の一種として理解せられてゐる。一根より數十莖を叢生し、三葉づつ集著し、高さ四五尺、夏に淡紫もしくは紅白の花を開く。一に「めどはぎ」だとも言はれてゐる。著はよもぎ、艾の種類である。太古は九尺などの著が生じたかも知れないが、極めて傳説的な記述たるを免れない。しかしながら文献に徴すると尙ほ更ら靈草として描かれて居るのである。

董仲舒の春秋繁露に曰く、著百莖にして一本、是を以て三代傳へて疑を決す。

淮南子⁽¹⁾に曰く、上に叢著あれば下に伏龜あり。

洪範五行傳に曰く、著生ず百年、一本百莖を生ず。

史記龜策傳⁽²⁾に曰く、著百莖一根を共にす。

また曰く、著生ず、百莖に滿つる者は其の下、必ず神龜ありて之を守り、其の上、必ず青雲ありて之を覆ふ。

また曰く、天下和平、王道得て、著莖長丈、其の叢生する百莖に滿つ。方今の世、著を取る者中古の法度なる能はず。滿百莖長丈なる者を得る能はず、八十莖已上の著長さ八尺なるを取るも即ち得難きなり。人民の好んで卦を用ふる者は滿六十莖已上、長さ六尺に滿つる者を取り、即ち用ふべし。

龜策傳注に徐廣、漢の劉向を引きて曰く、著百年にして一本百莖を生ず。

王充の論衡、狀留篇に曰く、著生す七十歳、一莖生す。七百歳十莖を生ず。神靈の物なり。

曲禮上、陸機の草木疏に曰く、藟藟に似たり。青色科生す。

張華の博物志に曰く、著千歳にして三百莖、本を同うして老ゆ。故に吉凶を知る。

白虎通、禮三正記に曰く、天子の著長さ九尺、諸侯七尺、大夫五尺、士三尺、著は陽なり。故に數奇なり。

白虎通疏證、類聚に逸禮を引きて曰く、天子の著九尺、諸侯七尺、大夫五尺、士三尺、故に坐筮す是なり。

少牢饋食禮立筮の鄭註に曰く、卿大夫の著長さ五尺、立筮するは便に由ると。賈疏に卿大夫の著長さ五尺なる

ものは大載禮、三正記みな此の文あり。立筮便に因るは其の著長きを以て立筮を便と爲す。士の著三尺、坐筮に對して便と爲す。然るが如くんば諸侯の著七尺、天子の著九尺、立筮知るべしと。

以上の著の尺數は再檢討されなければならないこと勿論である。何故から錢塘の律呂古誼卷一周尺を見るに、周時代の一尺は、吾が國の曲尺六寸七分に該當する。而して王國維の中國歷代尺度を見るに、漢時代の一尺は吾が國の七寸九分に足りない。しかしながら其の寸法を以てしても長大な著を得ることは困難であつたに相違なき。

日名靜一氏の筮法鄙見に據るに曰く

故林泰輔博士かつて曲阜の聖廟に謁し、至聖林中より著草の新苗をもたらし歸りて大正八年四月、湯島の聖廟

に移植し、かくて實物により在來の學者の訓ぜし著の和名、ハゴロモ草、ノコギリ草、鐵掃帚、メド萩を考證し、ハゴロモ草、ノコギリ草の全く誤れるを指摘せり。また矢野吉禎博士も曲阜の植物にヒメメドハギ、オホメドハギ（鐵掃帚）のあるを検せらる。而して予も亦、親しく彼地に於て見聞し且つ實物を移植せし經驗に徴せば、著は菊科に屬する多年生草木にして、培養よろしきを得ば一本數十百莖指大身長に上り、培養よろしきを得ざるも尙ほ二三尺篠竹大に叢生す。但し風土の異なる彼地に繁る野生植物も本邦、就中、京都地方に於ては嚴冬霜雪に注意せざれば絶滅するに至る。また著に似て非なるものに蓬蒿の二種あり。かつて燕京天壇に之を獲て彼地の故老に正ししに、一般には識別し難しと言へり。

日名氏の説によつて著の本體が明らかとなつたであらう。而して此の著を得難いのと、年月を経るに従つて折損を生じ易いのと、江南の竹の供給が聽て著が竹に代用されるに至つたものであらう。今日では著といふより、筴竹の方が一般的となつてゐる。

しかしながら亦、一説に、著の字は數の意味を有つてゐると言はれる。三代あるひは龜筮といひ、あるひは卜筮といふ。儀禮戴記は皆な龜筮といひ、あるひは龜筮といふ。大傳、中庸は皆な著龜といふ。蓋し著筴を龜に對して言へば則ち著即ち筴である。著自ら筴と對言すれば則ち著は物の名であつて、筴は著の數である。著これを筴といふのは猶ほ物これを枚といひ、木これを章といひ、竹これを個と言ふが如くである。もし筴と數と對言すれば、則ち一二より億兆に至るこれを數といひ、著の莖數を閱するのを筴といふ。これ數と筴との別である。揲

法に至つては總言すれば則ち著といひ、數に涉れば則ち策といふのである。

(1) 淮南子二十一卷。前漢の淮南王劉安の撰なり。高誘注す。漢書藝文志雜家に淮南子内二十一篇、外三十三篇とあれど今存するものは内篇二十一篇のみなり。

(2) 十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳より成る。列傳は忠臣孝子その他の人物を列叙せり。就中、刺客、循吏、儒林、酷吏、游侠、佞倖、滑稽、日者、貨殖、而して龜策は後世、史家の例となれり。

(3) 王充。字は仲壬。上虞の人。班彪に師事す。博覽強記なり。家貧にして書無し。かつて洛陽の書肆に遊び、賣る所の書を閲し、一見して輒ち能く記憶す。漢の章帝、詔して公車を以て之を徵す。而も行かず。論衡八十五篇を著す。晩年に養性書十六篇を著せり。王充の論衡、中土いまだ傳ふる者あらざるの時、蔡中郎、江東に至りて之を得、秘翫して以て談助と爲す。北に還るに及んで諸公その談の更に遠きを覺り、帳中を檢求して果して論衡一部を得たり。その後、王朗、會稽太守たりしとき又その書を得。時人その才の進むを稱す。或は曰く異人に見へずば當に異書を見しなるべしと。之を問へば果して論衡を以て益す。

(4) 論衡三十卷。原本八十五篇なれども今その一篇を佚す。

(5) 陸機は晋の人。字は士衡。吳郡に生れ、大司馬抗の子なり。その家は世々吳の名族たり。身長七尺、その聲雷の如し。年二十の時、吳亡ぶ。乃ち舊里に退居して學を積むこと十年。太康の末年、弟雲と共に洛陽に入る。成都王穎、用ひて平原内史とす。太安の初、河間王頤と兵を起して長沙王を討つ。機をして後將軍河北大都督たらしめて諸軍兵二十有餘萬を率ゐしむ。おもへらく三世將となるは道家の忌むところ、且つ羈旅の人を以て入りて俄かに軍兵の右に居るは怨心の歸す

るところなりと。固辭す。許されず。戎に臨むに及んで牙旗、偶ま折る。機、心に甚だ之を思む。列軍朝歌より河橋に至る。鼓聲數百里に聞ゆ。長沙王、天子を奉じて來り、機と鹿苑に戰ふ。機が軍、大敗す。小人、機を成都王に讒して、その異心あるを訴ふ。成都王大いに怒り、秀密をして機を收めしむ。機、戎服を脱し、白紗を著して秀密と相見ゆ。神色自若たり。秀密に言ひて曰く、吳朝の傾覆せしより、吾が兄弟宗族、國の重恩を蒙り、入りては帷帳に侍し、出でては符竹を剖く。成都王、我に命ずるに重任を以てす。辭すれども得ず。今日誅を受く。豈に命にあらざやと。よりて成都王に牋す。その辭甚だ凄惻なり。既にして救じて曰く、鹿亭の鶴唳、豈にまた聞くべけんやと。遂に軍中に害に遇ふ。惜しむべし時に年四十三なり。陸機、天才秀逸にして辭藻また宏麗なり。張華かつて之に言ひて曰く、人の文を作る、常に才なきを恨むも、子は更にその多きを患ふと。葛洪もまた嘗て陸機の文を稱して、猶ほ玄圃の積玉の夜光にあらざるはなきが如く、その弘麗研贍、英銳漂逸、また一代の絶なるかと。その人に推服せらるること斯の如し。

(6) 張華は晋の人。字は茂光。范陽方城の人なり。少時、貧にして自ら羊を牧す。同郡の盧欽、彼を見て之を器なりと賞す。郷人劉放もまた其の才を奇とし、女を以て之に妻す。學業優博にして辭藻また温麗なり。その自ら行ふや、造次、必ず禮度を以てす。未だ名を知られざる時、かつて鶴鶴賦を著す。陳留の阮籍、これを見て嘆じて曰く、王佐の才なりと。これより名聲始めて擧る。後、歴進して尚書廣武縣侯となり、名聲一世に重し。晋朝の義禮憲章、多くその増損する所に係る。而して當時の詔誥は皆な其の艸定する所なりき。荀勗、自ら大族なるを以て、帝の寵を恃み、深く張華を嫉視し、遂に華を出して持節都督幽州諸軍事と爲す。永熙の末年、遂に趙王倫の爲に寄せらる。時に年六十九なり。性、人物を好み、後進を誘掖して倦まず。人の一善ある者は即ち咨嘆稱して止まず。書籍を愛し、身、害せられて來するの日、家に餘財

なく、唯、文史ありて箴に溢るといふ。

(7) 博物志十卷。張華の撰と傳へらるるも、恐らくは原撰に非ざるべし。

(8) 白虎通は白虎通義なり。四卷。漢の班固の撰なり。後漢の章帝の建初四年、諸儒を白虎觀に會して五經の同異を講ぜしめ白虎通德論を作る。後、班固これを撰集して書となし、白虎通義と名づけ、略稱して白虎通といふ。

(9) 白虎疏證十二卷。清の陳立これを作れり。

(10) 儀禮及び禮記の篇名なり。

(11) 鄭玄注なり。鄭玄は禮に於て最も精しく、これよりして六朝より唐に至るまで鄭玄學獨り行はると。

(12) 賈逵の疏なり。

(13) 錢塘は清の人。錢大昕の子なり。詩に工に、玉昶の激賞するところとなるも之に満足せず。専ら力を經史に致し、聲、音、文字、律呂、推歩の學に精通せり。律呂考文六卷。史記三書釋疑三卷。淮南子天文訓補注三卷等を著はせり。

(14) 王國維は浙江省海甯州の人なり。字は靜安。觀堂と號す。天資聰明、弱冠にして既に文名あり。羅振玉の知るところとなり、之に従つて力學す。後、羅振玉に従つて日本に遊學す。清の光緒壬戌の冬、蒙古の升古甫相國、奏請して海内の學者を選び、南書房に供奉せしむるに當り、王國維を推薦す。明年、都に入りて職に就く。後、清華學校研究院掌教となりしが、清朝、滅亡するや昭和二年六月二日、頤和園昆明池に身を投じて殉死す。時に年五十一なり。

(15) 筴(サク、ケフ)めどぎなり。曲禮に曰く、龜爲レト、龜爲レ筴とあり。

第十三章

神聖なものとして古代東洋人に重んじられた卜筮も、最も留意しなければならぬ一事は、禮記の表記に記述するが如く

天子に筮無く、大事は皆なトを用ゆ。(鄭註)
といふ事實である。

他日、私は卜占に關して一つの研究を發表する心算であるが、筮よりも古くから行はれたトは、漢民族の有しない一つの文化形態だと信じて居るのである。而して其こそ吾が原始大和民族が未だ大陸に本據を占めてゐた時代から傳へられ、それを吾が文化圏に移住し來つた支那民族が傳承したものであらう。従つて筮よりはトの方が、より神聖なものとして、統治者によつて採用されたのではあるまいか。

吾が古代民族の間にあつて「フトマニ」として知られてゐたところのものは、龜甲でなくして鹿の骨をトに用ひてゐるのである。而してウラル・アルタイ地方から發展した古代民族は、逸早く鹿を見知つて是を用ひたが、漢民族に傳承せられた時には、彼等は水邊に居を下したので、鹿よりも容易に獲得され易い龜を以て代用した事が想像されるのである。

大和民族の古代史傳誦の形式から觀察して、太占(フトマニ)は既に遠く適かな伊弉諾、伊弉冊の御二神が、

大八洲國を生み奉る時、その最初に生んだ蛭兒等の不具の子に對し、如何なる理由からであらうかとて、太占ト相（ト）したと古記に見へてゐるが、その淵源の如何に古代に屬してゐるかを想はしむるではないか。吾々の扱ふ範圍で歴史時代と信じられる天照大神の天の岩戸に籠らせ給ひし時も、天兒屋命が天香山の眞男鹿の肩の骨を焼いて、ト占したと舊記に見へるのである。神武天皇以後、ト事、ト定、ト相、ト問等の記事が古事記に散見するが、未だ鹿トとあつて龜トとは言はないのである。而して魏志東夷傳（一）に日本の鹿トのことが記載されてゐるが、彼等は龜トさへも忘れて仕舞つてゐるので、鹿トが非常に珍らしいことに思はれて特殊な占法であるかの如く記したに過ぎないが、魯や齊の人々によつて傳へられた鹿ト（二）龜トは、漢の末には殆んど知る人が稀れであつたのだから、其所にも太占の大和民族獨特の性格を見出せるではないか。

神功皇后の三韓征伐は種々なる重大な意味を有するが、中臣ノ鳥賊津の後裔は三韓に於て、始めて支那化した龜トの法を傳へた。日本島に住み慣れて外來の文化に接しなくなつた大和民族は、三韓を経て傳へられた支那化した龜ト法を逆輸入した。而して鳥賊津の末裔は壹岐の國や伊豆の國で、大いに此の龜ト法をひろめ自らト部（三）として的一家をなし、臆（四）てそれが日本の上流社會にまで浸潤して、鹿トに代るに龜トが流行し、鹿トは地方的な神社に於ける一種の神事（五）として、形式的行事と化し去つたのである。

天子に箠無し、といふ所以のものは、トと箠との尊卑優劣に非ずして、歴史的な問題であると理解しなくてはならないのである。

何とならば天子諸侯も時として筮を用ひたことがあつた事は文献に徴して明らかである。

曲禮^上に

禮は庶人に下らず。

と。而して孔穎達の疏に曰く

經文三百、威儀三千、若し夫れ事あれば則ち士禮を假りて之を行ふ。

と。之を行ふとは士禮を以て筮儀を行ふの謂である。

秦の始皇は知る如く、周の封建制度を極力打破して、天下統一の大業を遂行したが、則して周禮を砒斥し、就中、禮書の類は悉く之を焚燒した。漢興つて、却つて周制の模倣は強烈を極め、筮を立つるに當つて、周の士禮を假りて筮儀となしたるものなることが想像されるのである。卜は神前に於て行はれ、自ら神庭の儀が具備したものとすれば、筮をして威儀あらしめるには筮儀を規格しなければならなかつたであらう。煩瑣な形式主義が漢代に起り、所謂、漢文化が樹立されたのは、幾多の異民族の文化を採用しながら未だ眞の融解を遂げないうちに、それ自身の形式を整へなければならなかつた内面的な理由に、多くの必然さを認めずには居られない。筮儀も亦、斯の如くして、周の儀禮を基礎として、その上に築かれた煩瑣な形式なのである。

張華の博物志によるに、筮するには必ず沐浴齋潔し、香を焼き、每朔望の日に著を浴し、必らず五度これを浴せしむると書いてある。これは基本的な準備であつたらしい。

従つて、筮日といふものは筮を立てるには非常に大切な契機をなすものとされた。土冠禮に、筮賓も求日の儀の如くす、とあり、少牢饋食禮には、筮尸も筮日の儀の如し、といふのである。また曲禮には、凡そ日を筮するには、旬の外を遠某日といひ、旬の内を近某日といふ。喪事は遠日を先とし、吉事は近日を先にす。而して外事に剛日を用ひ、内事に柔日を用ふと。

大夫以上は祭祀の前十日、先づ日を筮し、士は日を諏らずと雖も、共に祭祀筮日の儀は、廟の門外に筮す、と定められて居た。一説に凌廷堪の禮經釋例によれば、凡そ卜筮は皆な廟門に於て行ふ。唯、將に喪らんとする時のみ、則ち兆南に於てすといふ。何れが是なるか判明しないが、斯様なことも非常に面倒に考へられたものであらう。

土冠禮によると、主人は玄冠朝服し、緇帶素鞵し、廟門の東に位置して、西面し、子姓兄弟、主人の服の如くにして主人の南に立ち、西面して、北を上位となす。また有司群執事は兄弟の服の如くして、西方に位置し、東面して而して北を上位とす、といふのである。

筮と席と卦するところの者とを西塾に具饌し、席を門中闕西闕外に布き、西面す。

而して筮人は、筮を西塾に取り、左に筮を執り、右に上鞮を拙き、かねて筮と之を執り、進んで東面し、命を主人に受くと。

宰主人の左より少しく退き、命を贊く。命じて曰く、孝孫某來日某を筮し、此の某事を諏る。適それ皇祖某子

尙くは嚮けよと。⁽²⁰⁾

筮人許諾し、右に還り、席に即き、門の西に西面して、下轡を抽き、⁽²¹⁾左に筮を執り、右に執轡を兼ね、以て筮を撃つ。⁽²²⁾

遂に述命して曰く、爾大筮、⁽²¹⁾常有るを假る。孝孫某云々と。乃ち轡を釋き筮す。これに立筮と坐筮のあることは位階によつて區別されること勿論である。

卦者、左に在りて坐す。卦するに木を以てすと。鄭玄は一爻毎に地に畫して以て之を識るすと解してゐるが、此の木とは、賈逵によると、木と杖の二つがあつたと記して居る。

筮を卒り、卦を木に書す、と少牢饋食禮は記して居る。賈逵によると此の場合の木は版であると解してゐる。即ち曰く、六爻備る、乃ち方版を以て之を寫すと。

いづれにせよ筮者は執つて以て、之を主人に示すのである。主人これを受け見て之を反す。筮人還り、東面して旅占して卒り、⁽²³⁾吉なれば史、筮を轡し、史かねて筮と卦とを執り、進みて以て主人に占を告げ、吉または從と言ひ、この時、官戒し、宗人に滌を命じ、宰命じて酒を爲らしめ乃ち退くといひ、若しまた吉ならざれば則ち遠日を筮すること、初の儀の如くすと。斯くして筮席を徹して、宗人事の畢りを告ぐのである。これが士儀(古禮)に準據した古代の筮儀である。

之を要するに、古式の筮儀から按ずると、筮を立てる者は特殊な靈媒者の如き人物で、彼の現した卦を史もし

くは博士の如き者が解釋するかの如くである。而して尙ほ其所に巫の如き神秘性の介在するを見るのである。(26)

(1) 魏書なり。百十四卷。十二帝紀、九十二列傳、十志なり。後分ちて百三十卷となす。初め魏の史官鄧淵、崔浩、高允みな編年書を作れるも時事を遺落して三に一を存せず。太和中、李彪、崔光、始めて紀、傳、表、志の日を分ち、宣武帝のとき邢昺は高祖起居註を撰し、崔鴻等は之を補し、下、明帝に及ぶ。文宣帝の天保二年、魏收に詔して魏書を修めしむ。積聚三年その五年に至りて書成る。清の趙翼も魏書爲二曲筆一と。

(2) 職能としては神祇官に属すること令義解に見ゆ。天兒屋根命の十二世の孫、大雷臣、鹿卜に達して仲哀天皇に仕へ、卜部氏を賜はる。神功皇后の代、眞根子命、三韓に使し、歸りて壹岐に留り、子を生み、壹岐氏となす。顯宗天皇の代、五世忍見命、壹岐より山城國に遷り、八世益業、松尾社權祝となる。曾孫平磨(業基)、卜占の術に達し、松尾社祝、月讀社禰宜、平野社領を兼ね、神祇大祐丹波介となり、卜部宿禰を賜はれり。子孫平野社預となり、曾孫兼延、平野、吉田兩社預となる。爾來、子孫、吉田社務を世襲し、時代下りて家號を室町と稱し、後、吉田に改む。子孫相繼ぎて明治に至り、子爵を授けらる。

(3) 例へば上野國、貫前神社に鹿占の神事あり。鹿の骨を焼き、その形によりて或る範圍の町村内に火災等の有無を判ずる神事にして、毎年十二月八日に行はる。先づ宮司、神籬の前に進み、上野國鎮座の大小の神祇を招き奉る。次に神饌を供し、祝詞を奏し各々拜禮す。次に主典、占座に着き爐の中央に篠串を立て、火を熾り出し錐を焼く。次に禰宜、燒錐を以て鹿の骨を貫くこと三度。次に宮司の前に町村名帳、主典の前に筆紙を置く。次に宮司、町村名を呼ぶ。その聲に應じて禰宜、燒錐を以て鹿の肩骨を貫きて、大吉もしくは小吉を告げ、主典これを記す。次に雜役の禰宜、鈴と笹の葉とを持

ちて舞を奏す。次に神饌を撤し、官司、昇神の詞を奏して祭儀を終るなり。

(4) 漢書藝文志に禮古經及び士禮の名ありて、未だ儀禮の稱なし。或は威儀三千といひ、或は曲禮三千といふ。鄭玄に至りて始めて曲禮は今の儀禮なりとす。宋の張淳曰く、疑ふらくは後學其十七篇の中に儀あり禮あるを見て、遂に合して之に名づけしならんと。

(5) 士冠禮(冠義)は禮記の目なり。

(6) 特牲饋食禮には筮日を求日に作れり。

(7) 曲禮孔疏に、郊外のことを外事とす。

(8) 奇日、甲、丙、戊、庚、壬を剛日といふ。

(9) 郊内のことを内事とす。

(10) 偶日、乙、丁、己、辛、癸を柔日といふ。

(11) 凌廷堪は清の人。字は次中。安徽省歙の人なり。乾隆五十二年の進士にして、教授に官す。六歳にして孤なり。家貧なるを以て賈を學ぶ。二十歳餘、始めて書を讀み、辨志賦を著はし、以て志を立つ。その郷の江慎修、載東原の學を慕ひ、また翁覃溪、阮文達に従ひ、禮經を修む。力を用ふること最も深く、寒暑も怠らざること二十有餘年なりと。嘉慶十四年卒す。禮經釋例、燕文考原は世に行はる。

(12) 墓場の南なり。孝經、喪親に曰く、卜其宅兆而安厝之一と。塋界は昔、占ひて定めしなり。

(13) 特牲饋食禮には冠端玄とあり、鄭玄注に冠端玄は玄冠玄端なりと。また賈疏に、朝服もまた玄端と名づくるなりと。

また祭り以外には皮弁を冠し、素積を衣るは百王これを同じくして改易せずと。

(14) 緇は黒色なり。黒き帯なり。

(15) 素は白色なり。鞞(ヒツ)は、韋(ナメシガハ)の膝掛にして朝服に用ゆ。鞞もしくは鞞も同じ。

(16) 雜記に曰く、筮の如きは則ち史練冠長衣して以て筮し、占者は朝服すと。

(17) 園(ゲツ)もしくは(ゲチ)門のしきみ(細)なり。門中に懸てて内外をさへぎる木なり。

(18) 上鞞は抽くも、下鞞は未だ抽かずして、用を待ちて筮する時に併せて抽くなり。士喪禮の賈疏に曰く、鞞に二あり。其の一は下より上に向ひて之を承け、其の一は上より下に向ひて之を鞞むと。鄭玄の註に、鞞は筮を藏する器なり。今時、弓矢を藏するもの之を鞞凡といふと。説文には、鞞は弓矢の鞞なり。段玉裁の注に、方言あるひは之を贖丸と言ふ。左傳服註に、冰鞞は丸蓋なり。後漢書南匈奴傳方言を引きて箭を藏するを鞞丸と爲す。皆な今の方言と異なる。按ずるに總べて之を呼んで鞞丸と曰ひ、また單に之を呼びて鞞といふとあり。

(19) 鄭玄註によれば、左よりするものは神の爲に變を求むればなりと。然るに士冠禮並びに士喪禮には左を右に作る。鄭玄また注して、然る所以のものは、尊者に命ずる者は宜しく右より出づべければなりと。何れが是なるや之を知らず。

(20) 少牢饋食禮に、主人曰く、孝孫某來日丁亥、用つて歳事を皇祖伯某に薦め、某妃を以て某氏に配す。尙くは饗けよと。

(21) 少牢には、筮人を筮史と作れり。

(22) 少牢賈疏に曰く、已に右手を用ひて上鞞を抽く、今また右手を用ひて下鞞を抽くは、之れ二鞞を兼ねて之を執るなりと。

(23) 鄭注に曰く、將に吉凶を問はんとす、故に之を撃つて以て其の神を動かさなりと。

(24) 曲禮は大を泰に作る。

(25) 鄭注に曰く、旅とは衆なりと。其の屬と共に之を占するなり。特牲饋食禮は旅を長に作る。鄭注にまた曰く、長占とは其の年の長幼を以て旅占するなりと。何れが是なるやを知らず。

(26) 太卜籒人、三易を掌り、以て九籒の名を辨ずの鄭注に、此の九巫讀皆な當に筮と爲すべし、字の誤りなりと。疏に曰く、鄭、巫を破りて筮と爲すものは、此れ筮人、筮を掌りて巫事を主とせず、故に筮に従ふなりと。說文に籒の解字に、易卦の用著なり、竹に从ひ籒。籒は古文の巫の字なりとあり。

按ずるに谷川龍山の周易本筮指南に曰く、筮は竹に従ひ、巫に従ふ。六書精義に、筮は善を揀へて卦を求むるなり。また巫は說文に祝なり。女能く無形に事へて、舞を以て神を降す者なりと言へり。蓋し善を揀へて卦を求むるを筮といふ。善は竹にて造る器にして、天地の全數を具するの神物なり。筮は神物に交るの道なれば、神に事ふる義なり。この故に竹に従ひ、巫に従ふ。また占は卜口を合するなり。卜は龜甲の折兆を見て吉凶を告ぐるをいふ。然れば筮は今いふ「うらなひ」のことなり。占は判斷のことなりと。筮の字源の解釋より、その神祕的なる淵源を説明せんと試み、末世、易の合理性を没して易を神傳なるかの如くに思惟するに至りしなり。

第十四章

繫辭上傳に揲筮法を記して曰く

大衍⁽²⁾の數五十、其の用四十有九。分ちて二となし以て兩に象り、一を掛けて以て三に象り、之を揲ふるに四を以て四時に象り、奇を扚に歸して以て閏に象る。五歳にして再閏なり、故に再扚して而る後に掛く。乾の策二百一十有六、坤の策百四十有四、凡そ三百有六十、期⁽⁵⁾の日に當る。二篇の策は萬有一千五百二十、萬物の數に當る。是の故に四營⁽⁶⁾して易を成し、十有八變して卦を成し、八卦にして小成⁽⁷⁾す、引きて之を伸べ、類に觸れて之を長くすれば、天下の能事畢る。道を顯かにし、德行を神にす、是の故に與に酬酢⁽⁸⁾すべく、與に神を祐くべし。子曰く、變化の道を知る者は、其れ神の爲す所を知る乎と。

釋文によると、鄭玄は衍は演なりと解したものの、やうである。私の最も尊敬する明の藕益大師は衍を解して、乘なりと言ひ、之を大乘⁽¹⁰⁾と謂て宜ならずやといふのであるが、衍の解釋としては最も優れたものと思ふのである。

子夏これを謂ひて曰く、一を用ひざるは太極なればなりと。唐僧一行は周易大衍論に子夏の言を引用して以來、太極よりして大衍の數を説く學者が蓋し少くないのである。即ち馬融は其の正義大衍の章に於て、また司馬光は其の筮宗大衍に於てである。

しかしながら此で注意しなければならないことは、繫辭傳の中で、數の名を擧げてゐるのは是に限らない。その第一は

天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十。天の數五、地の數五。五位相得(H)て各々合ふこと有り。天の數二十有五。地の數三十。凡そ天地の數五十有五。此れ變化を成し鬼神を行ふ所以なり。

その第二は、言ふまでもなく、大衍の數五十である。

その第三は

萬有一千五百二十、萬物の數に當る。(I)

この異同から諸説が分派する。蓋し何れも天地の數に非ることを一應認めなければならぬ。而も天地の數を規定しなければ易の原理が確立しないのである。何となれば、易は實に、象と數であるからであると云ふも過言ではないからである。

夫で問題となつたのは大衍の數と天地の數との相違は、繫辭本文の移動ではないかといふ點であつた。易經の難解は實に斯ふしたことから始まる。日名靜一氏これを説明して曰く

大衍の數と天地の數と混同并見せられし所以を考ふるに、或は大傳本文の移動に本くものならんか。則ち韓康伯本、釋文、正義本、李氏易傳本は天地の數の節（天の數五、地の數五より始め、鬼神を行ふ所以なりに終る四十四字）を大衍の數の節（大衍の數より始め、再扚して而して後掛くに終る四十九字）の後に置けり。朱震(I)、李

衡、張浚⁽¹⁸⁾、毛奇齡これに従ふ。程子は天地の數の節が大衍の數の節の後に在るにより、天一の節（天一より地十に終る二十字）一を天地の數の節の上に加ふ（本義）呂祖謙本、同じ。郭雍この説に従ふ。蘇軾、朱子は天地の數の節を大衍の數の節の前に移し、天一の節を更に其の前に加ふ（本義上繫九章）項安世⁽²⁰⁾、吳澄、胡一桂⁽²¹⁾、熊良輔⁽²²⁾、董真卿⁽²³⁾、俞琰⁽²⁴⁾、梁寅⁽²⁵⁾、同じ。李心傳は天地の數の節を韓本、天一の節に移し、合して第十二章と爲す。王申子⁽²⁷⁾この説を主とす。李本は天地の數の節を大衍の數の節の前に移す。程子は大衍の節、天一の節、天地の數の節を合して第九章とす（章句證異卷七）然り而して今これを漢書律歷志、易上繫の辭を引く（顏師古の註にしかいふ）に比ぶれば、漢書は天地の數の節の上に天一の節ありて一文を成し、而して別に大衍の數を記せり（卷二十一上）是れ蓋し程子、朱子、本文移動の典據ならん。

また北村澤吉氏も同じく曰く

十三經注疏⁽²⁹⁾の中に收められた王弼本の經文は、右の天一地二より天九地十に至るまでが、乾隆逃義⁽³⁰⁾の分章に従へば、第十一章の冒頭に在り、天數五より以下は故再扐而後掛と乾之策二百一十有六との間に挿入されるわけで、そこに本文に就ての異同が見られる。

斯くて程朱の説が妥當なものとして、乾隆帝の逃義本に採擇され、一つの定説となつてゐるのである。

天地の數の追究は、河圖洛書に淵源し、これは古く漢の時代から論ぜられて來たのである。而して此れを圖表として完成したのは宋の邵子である。所謂、文王後天（八卦）圖と伏羲先天（八卦）圖これである。

何故このやうに本文雜入が起つたのであらう。恐らく古、經は信憑するに足る定本が存在しなかつたのではあるまいか。それなればこそ東漢の時代、大儒鄭玄現れて經傳の再編輯をしなければならなかつたし、而して鄭玄の手を入れたものが權威あるところから世に行はれたのに由來するものであらう。

しかしながら留意しなければならないことは、鄭玄が手を入れて以來、而して鄭玄自身もその誤りに氣付かずに、天地の數と大衍の數とが混同されて來たのである。さうして複雜から難解を生じたのであつた。宋代、易學研究が高度に進んで初めて天地の數が把握される一方、大衍は天地の數に非ることが證明せられ、歐陽修の如きは其の易或問に、大衍の數は占法なり、古より用ふるところと喝破し、揲筮の爲の數であると認識したことは偉大なる發明であつたのである。

揲筮法のために設定せられた大衍の數五十は、従つて支那人らしい理由を附會せずには安心がならなかつたものゝ如くであつた。種々の名數を合して大衍の數五十とするは易乾鑿度を以て始めとし、爾來、諸説が導き出されたのである。故に京房(31)曰く

大衍の數五十は、十日、十二辰(33)、二十八宿(34)を謂ふなりと。

また荀爽(36)曰く

卦に各六爻あり、六八四十八。乾坤二用を加へて凡て五十なり。而して初九、潛龍用ふる勿れと、故に四十九用ふ。

この苟爽の如く卦爻の數より大衍の數を分析する説は、後、幾多の支持者を得て、例へば崔愷(38)の李氏集解の如くであるが、清の惠棟(39)が現れて破られた。

また鄭玄曰く

天地の數五十有五あり、五行を以て通ず。凡そ五行、五を減じ、大衍また一を減ず。故に四十九なりと。

これは既述の如く、天地の數と大衍の數との混同の始まりであつた。鄭注易の繫辭によるに此の解は、即ち天一水を北に生じ、地二火を南に生じ、天三木を東に生じ、地四金を西に生じ、天五土を中に生ず。陽に耦無く、陰に配無くば未だ相成るを得ず。地六水を北に成して天一と併せ、天七火を南に成して地二と併せ、地八木を東に成して天三と併せ、天九金を西に成して地四と併せ、地十土を中に成して天五と併せ、大衍の數五十有五、五行、各氣を併す。氣併せて五を減ずれば唯、五十有り。五十の數は以て七八九六、卜筮の占を爲し以て之を用ふべからず。故に更に其の一を減ず。故に四十有九なりと。

しかしながら此の無理な解明は、何人にも明瞭に觀取することが出来るであらう。而も鄭玄學が永い間、生命を保持した間は斯の如き説も大いに價値あるものとされて、五行より大衍の數を説く者が陸續として現れ、關朗(40)、陳高(41)、沈括(42)、李覲(42)みな之である。

虞翻曰く

天は二十五にして地は三十なり、故に五十有五、天地の數此に見る。故にその奇五を略して五十と言ふなり

と。

斯の如く天地の數より大衍の數を説くのが定説となり來つたことは縷述の如くで、馬融も亦曰く
北辰、兩儀、日月、四時、五行、十二月、二十四氣(45)なり。

と言ひ、斯くて王肅、王弼、孔穎達、胡瑗(44)、王安石、楊時(45)、程迥(46)、張行成(47)みな悉く然りであつた。

また崔憬曰く

參天兩地にして數に倚る、既に著數を言へば則ち是れ大衍の數を説くなり」と。

鄭玄既に參天兩地よりして大衍の數を解かんと企て、劉敞(48)、朱雲(49)、晁公武(50)、呂大臨(51)などに屬する。

このやうな經過を辿つて遂に歐陽修は、著數占法より大衍の數を把握したのである。李觀この説を祖述した。

この他に、あらゆる角度からして大衍の數を把握せんとした試みが試みられたのは言ふまでもない事である。

上掲の繫辭上傳第九章の揲筮法の文は、簡に過ぎて意甚だ明瞭を缺く爲に、古來、諸儒者の見解が必ずしも一致しないのである。しかしながら朱子、易學啓蒙に十八變筮法を解明してより、この法、最も世に行はれ、本筮法といひ、或は正筮法とも呼ばれてゐる。

即ち大衍の數五十を手を手に捧げ、之を合して一と爲し、之に命ず。其の一を去り、四十九策を用ふ。四十九策合して未だ分れないのは、太極に象ること言ふ迄もない。而して分つて之を二と爲し、以て兩儀に象る。この兩儀のうち左手にあるを天數となし、その一を小指の間に分ち掛く(52)。これ謂ふところの一を掛けて三に象るのであ

る。次に四四にして左手天數を揲へ、また四四もて右手地數を揲へる。これ謂ふところの四を以て揲へるは四時に配するものである。揲ふところの餘一ならざれば則ち二にして、三ならざれば則ち四なるは扱す。而して奇を取り以て扱と扱との並合に歸す。奇と扱とは自ら是れ兩物なれども併せて一處に歸し、左手の小指に掛く。

然らば先に四十九策、二分の後、左手天數の一を小指の間に分けて掛けしは正に右手の小指の間にある。今、扱に合して左手の小指間に掛く。これ謂ふところの奇を扱に歸して以て間に象るものである。

更にその奇を以て扱に歸したるを去り、再び前の左右過揲の策を取つて合せ、また分掛し、初揲の奇を初扱に歸した如く併せて左手の小指の間に掛く。これを再扱と爲す所以のものは再間に象るのである。

また更に第二次過揲の餘策を分け、扱揲すること前の如くして、左手第三の指の間に掛けて一變を成し、即ち掛の一爻を布く。既に二扱をいふ又一を加へて三と爲すは、これ謂ふところの再扱して後掛すといふものである。斯の如く初より上に至る六爻を得て、以て三爻の八純卦、即ち本卦より六爻の重卦に及ぶ次第である。

これ等の説明は尙ほ會得し難い節が多い。今、汎日本易學協會の加藤大岳君は理論と實踐とを以て自ら斯術の指導に當つて居るのであるが、その易學大講座に説明してゐる本筮法は何人にも了解し易く平明に述べあるので引用する。曰く

大衍の數に象つた五十本の筮竹の中から、一本を抜いて、之を筮韜に立て、太極に倣らへ、神靈を倚らしめます。残りの四十九本を握つて、額の高さにまで捧げ、右手の指で筮竹を二つに割り、天地兩儀に象ります。二つ

に割つたものゝ右手にあるのを地策と言ひますが、これを右大刻に載せ、その中の一本を取つて左の小指の間に挟みます。これで左手の策が天、小指の間が人、右の大刻に置かれたのが地で、天人地三才が出来たわけです。次に筮竹を算へて第一の變を現すのでありますが、それには左手にある筮竹を、右手で四本づゝに除いてゆきます。さうすると最後には一本か、二本か、三本か、若しくは四本で割り切れることゝなる。若し割り切れた場合には残りを四本と見做し、この残つた數を、薬指と中指の間に挟み、四本づゝ算へ取つた筮竹は、左大刻の上に載せ、今度は右大刻に置いた地策を左手に取り、之をまた四本づゝ段々と除いて、最後に残つたものを、中指と人差指の間に挟みます。而して始めて人の位として小指の間に挟んだゐた一本と、天策の方を算へて残した薬指の何本かと、今、算へた地策の残り（中指の間）とを一緒にして、掛妨の第一小刻へ置きます。これで第一變を終つたわけですが、此の筮數を檢べてみると

左の残りが一本ならば右の残りが三本。

左二本ならば右二本。

左三本ならば右一本。

左四本ならば右もまた四本。

となるものですから、左右合せて四本か、八本が残り、それに小指の一本を加へるのだから、第一小刻の數は必ず五本か、九本といふことになるわけであります。

次は第二變ですが、第二變に用ひる筈竹は、第一小刻に在る分を除いた四十本か、四十四本の筈で、これをまた第一變と同じやうに、二つに分けて右手に取つた地策の中から一本を左の小指に挟み、左手のものを四擲して扱を薬指に挟み、更に右手のものを四擲して扱を中指に挟んで、また此の三つを合せて第二小刻に置きます。この擲数は

左が一本ならば右が二本。

左が二本ならば右が一本。

左が三本ならば右が四本。

左が四本ならば右が三本。

この四種の何れかでありますから、小指の奇を加へれば四本、または八本となり、第二變の後に大刻にある筈数は三十二か、三十六か、四十となつてゐます。

第三變も亦、第一第二と同じやうにしてやりますが、この扱は第二變と同じ數で、これは第三小刻に掛けます。

この三變を終へた後に、第一、第二、第三の小刻にある策を除いて、四本づゝ割り切られた策數、つまり、左右兩大刻にある策は、合計して三十六か、三十二か、二十八か、二十四といふことになりました。

これだけやつて始めて第一爻、つまり初爻が出来るわけですが、その爻の陰陽、老少を知るには、大刻の方に

殘つてゐる過揲の策か、三つの小刻に掛けた扱の合數かを見なければなりません。

過揲三十六——之を四で除せば九となつて

老陽（掛扱合數十三）とします。

過揲三十二——之を四で除せば八となつて

少陰（掛扱合數十七）とします。

過揲二十八——之を四で除せば七となつて

少陽（掛扱合數二十一）とします。

過揲二十四——之を四で除せば六となつて

老陰（掛扱合數二十五）とします。

過揲を四で除した七と九とは奇數で陽であります。陽は長じたもの、進んだものを老とするので、九が老陽で、七が少陽です。六と八とは偶數で陰ですが、陰は小さいもの、退いたものを陰の道に長じたものとするので、六が老陰で、八が少陰となるわけです。老陽と老陰が、變ずることは言ふ迄ありません。

かうして初爻を得たら、二爻も同じやうに三變を重ねて之を求めます。三爻もこれを繰り返して得ます。それで内卦を得たら、外卦も同じやうにして得て、六爻の八卦を成します。つまり一爻を求めるために三變し、八卦を得る爲に十八變を重ねるので、之を本策十八變法といふのです。

これ今日、修易者に行はれる最も正しい典據による筮法である。

(1) 揲は數えるなり。鄭玄は取るなりと解す。説文には闕持といふ。

(2) 衍は演なりと。王廙。蜀才は衍は廣なりと説けり。

(3) 兩儀なり。

(4) 天地人の三才なり。

(5) 周一歳なり。一歳は三百六十五日四分の一なれども、略、三百六十といふなり。

(6) 後に筮法を解す。四回に手續きを指していふなり。

(7) 揲筮之法、先以三四十九策一、隨レ手平分爲レ二、則以象二兩儀。言二天地一也。取二左手一策一、而掛二之於小指間一、則併二與兩儀二而爲レ三、以象二天地人三才一也。揲レ筮者、左右皆以三四四分レ之、則以象二四時一也。奇零也。言二左右四揲數之餘。扞言二指間一也。四四之後所レ餘之策、或一或二或三或四、歸二之于左手中指左右間一。右者亦如レ之。則以象二四時之餘積レ日而成二閏月一也。三年一閏、五年再閏、故再扞而一變可レ見、然後復掛レ一而爲二第二變一。如レ是三變而一爻成。

(8) 應對することなり。

(9) 後に傳を出す。

(10) 大乘は梵語の Mahāyāna にして摩訶衍また大乘と譯す。大は小に簡ぶの稱、乘は運載の義にして、教法と名づく。即ち大教なり。灰身滅智の空寂の涅槃を求めしむる教を小乗となし、この中に聲聞緣覺の別あり。一切智を開かしむる教を大乘とし、この中に一乗と三乗の別あり。法華經譬喻品に曰く、若有二衆生二從二佛世尊一聞レ法信受。勤修精進。求二一切

智、佛智、自然智、無師智、如來知見、力、無所畏、愍念安樂無量衆生、利益天人、度脫一切。是名大乘。菩薩求此乘。故名爲三摩訶薩」と。

(11) 後に傳を出す。

(12) 司馬光は宋の人。字は君實。世に涑水先生と稱す。仁宗、英宗に歴任し、神宗の時、王安石の新法を議し、去りて洛に歸老すること十五年なり。哲宗、卽位し高太后、朝に臨むや、光、入りて相となり、悉く新法を改む。相位にあること八月にして卒す。時に年六十八歳なり。太師、溫國公を贈り、文正と諡す。資治通鑑の著者として政治家としてよりも知らる。五行説に基きて宇宙を解釋せる潛虛一卷、また武英殿聚珍版全書にある易説六卷、太玄經注八卷は斯學に於て重要な文献とす。

(13) 陽奇を天數となし、陰耦を地數となし各五あり。一三五七九は陽奇、その數合せて二十五。二四六八十は陰耦、その數合せて三十なり。故に天地の數は五十五なりといふ。

(14) 五位相得とは一と六と、二と七と、三と八と、四と九と、五と十と相合ふをいふ。

(15) 按ずるに乾の策二百十六なるものは、乾の老陽一爻三十六策あるを以て、六爻二百十六策なり。乾の少陰は一爻二十八策ありて六爻なれば百六十八策あり。此に老陽の策に據る。また坤の策百四十四なるものは、坤の老陰一爻二十四策あるを以て、六爻百四十四策なり。若し坤の少陰ならば一爻三十二策ありて六爻なれば百九十二策あり。此には坤の老陰に據る故に百四十四なり。今、乾坤の兩策を合すれば三百六十ありて期の數に當る。三百六十日は概略を擧げて、五日四分の一を數へざるなり。易の上下經二篇、六十四卦の全策數は萬有一千五百二十。卽ち二篇の爻すべて三百八十四あり。陰

陽各半す。陽爻百九十二爻、爻別に三十六、すべて六千九百十二あり。陰爻百九十二爻、爻別に二十四、すべて四千六百八なり。陰陽を合して一萬一千五百二十なり。

(16) 後に傳を出す。

(17) 李衡は三國の人。武陵の人なり。建興間、丹陽太守となる。安遠將軍を加ふ。毎に産業を理めんと欲す。妻習氏これを許さず。ひそかに人を龍陽につかはし、橘千株を植えさしむ。終に臨み、その子に謂ひて曰く、汝が母吾家を營するを惡む。故に家貧なること斯の如し。吾、范州に於て橘を種う。乃ち千頭の木奴、汝の衣食を費やさずと。

(18) 張浚は宋の人。字は德遠。漢州綿竹の人なり。進士の第に登り、太常寺簿たり。時に金の粘沒喝、汴京に入り、張邦昌を立てて王とせんと欲す。浚、逃れて大學に入り、肯て狀に署せず。高宗立ちて侍御史に遷る。時に汪黃の二人、權を專にして、盜賊蜂起すれども以て上聞せず。浚、直言す。金人必ず來り攻めん、請ふ、豫め備を爲さんと。二人これを笑ふ。未だ幾何ならずして朱勝非の薦を以て川陝京西諸路制置宣撫使に進み、便宜を以て黜陟す。劉子羽とひそかに謀りて范瓊を誅す。衆皆な悦服す。苗劉の亂を平ぐ。帝、再三問勞して曰く、聖容兩宮隔絶す、一口、羹を啜り、忽ち卿を貶すと聞きて覺えず手を覆す。念ふに卿、謫せられなば此のこと誰にか任せんと。服するところの玉帶を解きて之を賜ふ。浚、閩州より還る。時に辛炳、宿憾を以て御史をひきみて之を劾す。遂に罷められて資政殿學士となり福州に居る。都督趙鼎、帝に言ひて曰く、頃者、陛下、張浚を遣して出でて川陝に使せしめ、國勢今に百倍す。浚、補天浴日の功あり。陛下、礪山帶河の誓あり、乞ふ、之を召して政府に居らしめんと。帝、遂に浚を以て樞密院に知たらしむ。その盡忠竭節を以て中外に諭す。將士等、浚を見て勇氣百倍す。未だ幾くならずして召還せられ司僕射に遷る。浚、中外の庶政を總べ、奏對す

る毎に必ず讐耻の大なるを言ひ、反覆再三す。帝、未だ嘗て容を改め流涕せざるなし。事亘細となく必ず以て浚に咨ふ。諸將に賜ふの詔、往々にして浚に命じて草せしむ。呂祉之の死に囚り、遂に力求して去る。帝、浚に問ふ、秦檜は如何。浚曰く、近頃ともに事を共にし方に其の闇を知ると。檜これを憾み、言官に諷して之を論ぜしめ、永州に安置す。後、檜が和議を主とするを以て、星變に囚りて時事を力陳せんと欲す。母許氏の年老ひたるを以て、之を言ふの禍を被ること測られざるを恐る。許氏これを知り、その父成が紹聖の初の制度を誦して曰く、臣、寧ろ言ひて而して斧鉞に死するも、言はずして以て陛下に負くに忍びずと。浚、意遂に決す。即ち上疏して曰く、當今の事務は大瘡を頭目心腹の間に養ふが如し。決せざれば止まず。遅ければ則ち禍大にして決し難く、疾ければ則ち禍軽くして治し易し。唯、陛下これを心に謀り、謹んで情偽を察せば、庶幾くば社稷安全ならん。然らずんば將に臍を噬まんとす。異時國を以て敵に與ふる者、反りて罪を正議に歸す。これ臣が食て咽喉を下らずして、一夕も安んずる能はざる所以なりと。時に秦檜、太平を文飾す。これを見て大に怒り、遂に連州に貶し、必らず殺さんと欲す。時に秦檜死して免るゝことを得たり。陳俊卿の薦を以て召されて建康府に判たり。浚、命を聞き、舟を買ひ風雪を犯して行く。時に金兵、充斥して采石に焚き、煙焰天に漲る。人、輕進すること勿れと戒む。浚、答へて曰く、吾君命に赴くの急なるを知るのみと。長江に一舟の北行するものなし。獨り浚の小舟に乗じて進む。帝、建康に至る。浚、道左に迎ふ。衛士、浚を見て手を以て額に加へざるはなしと。浚、再び起用せらる。風塵然、民倚りて以て重きをなす。帝これを勞して曰く、卿こゝに在り、朕、北顧の憂なしと。遂に兩淮軍事を措置せしむ。未だ幾くならずして召されて朝に入り、江淮宣撫使となり、魏國公に封ぜらる。孝宗立ちて手書して浚を召す。帝容を收めて曰く、久しく公の名を聞く。今朝廷の恃むところは唯だ公のみと。因つて坐を賜ふ。浚、從容として答へて

曰く、人主の學は一心を以て本と爲す。一心天に合すれば何の濟さざるところあらんと。また和議の非なるを力説し、帝に勸めて意を堅くして恢復を圖らしむ。帝これを嘉納す。浚を進めて樞密使と爲し、江淮軍馬を都督せしむ。浚、帝に請ひ、建康に行幸して以て中原の心を動かし、兵を山東に進めて以て吳璘の聲援をなさんとす。帝、浚卿を見る毎に、浚の動靜飲食顔貌を問ふて曰く、朕の魏公によるは長城の如し、浮言搖奪を容さずと。浚、兵を進めて宿州を恢復し、中原ために震動す。帝、手詔これを慰めて曰く、近日の邊報、中外鼓舞す。十年來この克捷なしと。時に士大夫の和を主とする者、皆な浚の非を議す。帝、浚に書を賜うて曰く、今日、邊事は卿によりて重きをなす。卿、人言を畏れて而して猶豫すべからず。前日事を舉ぐるの初め、朕と卿と之に任ず。今日また須らく卿と之を終ふべしと。浚乃ち各所の守備を修飾す。帝また浚の子、楸を召して入らしむ。浚、附奏して曰く、古より有爲の君、腹心の臣、相與に謀を協せ、志を同うして以て治功をなす。今、臣、孤蹤を以て動もすれば則ち掣肘せらる。陛下、將に安ぞ之を用ひんと。依りて骸骨を乞ふて歸らんとす。帝、楸に言ひて曰く、朕が魏公を待つ加ふるあり。乞去の章、日に上ると雖も朕、決して許さずと。帝、近臣に對して言へば必ず魏公といひ未だ嘗て其の名を斥言せず。尹穡、湯思退に附して魏公を排撃し、遂に降して特進樞密使を授け、宣撫にあて、揚州を治めしむ。未だ一日ならず、また江淮軍を都督せしむ。時に湯思退つとめて和議を主とし、王之望を遣して金に使せしめ、四州を割く。浚、上言して曰く、秦檜、和を主として遂に逆亮の禍をなす。今その黨また出でて惡をなす。今もし和議を唱へば、四海の英雄、誰か陛下の用をなさんや。帝乃ち王之望に手詔して、一行の禮物を回らしむ。會々、金、行人胡昉を捕ふ。帝、浚に言ひて曰く、和議成らざるは天なり。自ら此の事、當に一に歸すべしと。即ち浚に命じて師を江陵に見、忠義の士を招徠し、戰船を増置し、弓矢を葺治せしむ。山東の豪傑、制節を受けんことを

願ふ。且つ檄を以て契丹に諭し、約して應援をなさしむ。金人大いに恐る。湯思退、右正言尹穡に諷して浚を論ず。浚乃ち都督府を請ふ。浚、既に去りて後も上疏して帝に勧め、學を務め、賢に親ましむ。或は浚に勸むるに時事を以て言をなす勿らしむ。浚曰く、君臣の義は天地の間に逃るゝ所なし。吾、兩朝の厚恩を荷ひ、久しく重任に居り、今、國を去ると雖も、唯、上の心の感悟するを望む。上もし浚を用ひば浚まさに道に就くべし。敢て老病を以て辭をなさずと。聞くもの聳然たり。既に行きて餘干に至り、病ひを得。手書して二子に付す。その略に曰く、吾、國相と爲り、中原を恢復して祖宗の耻を雪ぐ能はず。もし死せば當に我を先人の墓側に葬るべからず、我を衡山に葬らば足らんと。數日にして卒す。浚の志は恢復にあり、終身、和議を主とせず。功ならずと雖も人その忠を稱す。太保を贈らる。帝その忠を思ひ太師を贈り、忠獻と謚す。著すところ五經解その他に雜說文集奏議あり。子二人あり。杓と杓なり。

(19) 郭雍は宋の人。字は子和。その父の學を傳へ、陝州に隱居す。乾道中、旌召すれども起たず。號を冲晦處士と賜ふ。孝宗その賢を稔知す。更に願正先生に封ず。部使者をして官を遣り就きて問はしむ。時に年八十三なり。雍、易に於て學精到なり。淳熙の初め、學者忠孝を哀集す。雍が著すところを七大家に列し、大易粹言と題す。

(20) 項安世は宋の人。字は平父。括蒼の人なり。淳熙初年の進士なり。自ら平菴と號す。著すところ易玩辭、世に行はる。兩漢表も重んぜらる。

(21) 後に傳を出す。

(22) 熊良輔は元の人なり。字は任重。別號は梅溪といふ。江西南昌の人なり。延祐己巳、鄉貢に擧げらる。郷に歸りて子弟を訓育す。易を研究して、周易本義集を編し、至治の初めに至つて梓に上す。その他に風雅遺言、小學入門等あり。

(23) 董眞卿は元の人。字は季眞。江西鄱陽の人なり。易理の奥傳を得と傳へらる。天曆の初め、周易會通十四卷を著せり。元統の初年、その子、僕、刻して以て世に行はる。

(24) 俞琰は宋の人。字は玉吾。吳の人なり。寶祐の間、詞賦を以て名あり。宋亡びての後は隱居して亦仕へず。書に於て讀まざるところなしと。最も易に精しく、また好んで琴を彈ぜり。

(25) 梁寅は明人なり。字は孟敬。新喻の人なり。五經に精通せりと。親の老を以て官を辭し隱居す。太祖の時、徵に就く。討論精密、諸儒皆な推服す。間もなく辭して石門山に隱る。而も從學する者多し。稱して梁五經となし、また石門先生と稱せらる。卒する年八十一なり。

(26) 未考

(27) 未考

(28) 顏師古は唐の人。雍州萬年に生る。顏氏の三十七代の孫なり。父の思魯、儒學を以て著聞す。幼にして博覽強記、古訓學に精しく、また文を善くす。性簡峭なり。同輩に接するにも傲然たる態度ありき。高祖に仕へて朝散大夫より中書舍人に遷り、太宗の時、中書侍郎に進む。太宗かつて五經の聖を去ること遠く、傳習の訛傳を歎き、師古に詔して秘書省に於て考定せしめ而して之を天下に頒つ。また太子承乾のために漢書を注して奉れり。秘書監、弘文館學士を授けられ、貞觀二十二年、六十五歳にして卒す。

(29) 後に解を附す。

(30) 乾隆勅選の周易述義なり。後に解を附す。

(31) 漢書律歷志及び玉海等これなり。

(32) 後に傳を出す。

(33) 十干なり。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸これなり。

(34) 十二辰は子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥なり。

(35) 史記天官書によれば、天の星座は五つの集團に區別さる。北極及びその周圍の星座を中宮となし、黃道の左右の星座は東宮、南宮、西宮、北宮に分つ。中宮の星座は天極星（北極また北辰）にして、その中、太一あり。天極星と之を圍める多くの星を合せて紫宮（紫微宮）といふ。天極星の前方に陰德（天一）と稱する三星あり。太一と天一に接して北斗七星あり。東西南北の四宮を通じて黃道もしくは赤道に沿ふところに一宮ごとに七宿の星座あり。此等を總稱して二十八宿といふ。而して月の二十七日と七時間餘（凡そ二十八夜）にして恒量の間を一周することに基き、その一夜ごとに宿する位置を標示す。即ち東宮より初めて北、西、南の諸宮の順に月の移動に合せて左へ進行するものとす。東宮には角、亢、氏、房、心、尾にして蒼龍これを代表す。北宮には斗、牽牛（牛）、婺女（女）、虛、危、營室（室）、東壁（壁）にして玄武これを代表す。西宮には奎、婁、胃、昂、畢、紫微（昴）、參にして白虎これを代表す。南宮には東井（井）、輿鬼（鬼）、柳、七星（星）、張、翼、軫にして朱雀こゝを代表す。

(36) 後に傳を出す。

(37) 未考

(38) 後に傳を出す。

(39) 關朗。字は子明。南北朝の北魏の人なり。太和の末、王虬穆公、晋陽に封せらる。朗、公府記室たり。共に易を談ず。虬曰く、天下の奇才なりと。文中子に關朗篇あり。

(40) 陳高は宋の人。字は可中。開の從子なり。仙游の人なり。元符年中、進士に第し、召試して大學祭酒に除せらる。襲原その心を経術にひそめ、最も易に精通せるを以て推す。やがて博士に遷る。政和中、始めて醫學を學官に立つ。太醫學司業に除せらる。頻りに封事を上りて、遂に蔡京のため忌まれ、致仕す。

(41) 沈括は宋の人。字は存中。湖州の産なり。嘉祐年中、進士となり、太子中允に累官し、太常丞に轉ず。時に民事に籍し、蜀鹽を禁ず。沈括これを論して止めしむ。また契丹をして其の風俗山川を圖せしめ上らしむ。後、翰林學士に拜せらる。事に坐して秀州に謫せられて遂に卒す。博學通ぜざるものなく、律學醫卜みな論著あり。

(42) 李觀は宋の人。字は泰伯。南陽の人なりと。經に通ず。生徒つねに數百人なりと。魯潤甫等みな其の高弟なり。文章を爲るに自ら一家を成す。天下悉くその名を知る。皇祐年中、范仲淹の推薦によりて大學助教になり、大學說書に除す。既に歿す。潤甫その退居類藁、皇祐續藁並びに後集を師のために上梓す。詔ありて其子、參魯を官にす。

(43) 太陽曆により一氣を十五日となし、二氣を一月となし、二十四氣を一年となす。冬至、夏至、春分、秋分の四季に、また立春、立夏、立秋、立冬を各季節の始めとし、この八つを各二つに分類して二十四氣となす。

立 春……雨水 鶯登

春 分……清明 穀雨

立 夏……小滿 芒種

第十四章

夏 至……小暑 大暑

立 秋 ……處暑 白露

秋 分 ……寒露 霜降

立 冬 ……小雪 大雪

冬 至 ……小寒 大寒

始めて二十四氣の記されしは汲冢周書時訓解にして、これを夏小正の十二月（太陰曆）中記載のものと比較するに、大體に於て一致するも、今本の時訓は曆の改正と共に變りしものと思はる。

(44) 後に傳を出す。

(45) 楊時は宋の人。字は中立。南劍將樂に生る。身を經史に潜め、進士に第す。官に召さるれども赴かず。師禮を以て程灝に見ゆ。相得て甚だ喜ぶ。その歸るや灝、これを目送して曰く、吾が道南すと。灝卒す。また程頤に洛に於て從學す。時に年已に四十なりき。而も頤に事ふること益々恭謙なり。一日、頤、瞑息して坐す。時に游酢と侍立して去らず。頤既に覺むれば門外雪深きこと一尺餘り。門を閉ちて仕へざること十年。之を久うして瀏陽餘杭蕭山の三縣を歴知す。士の千里を遠しとせずして之に從學するもの、時を龜山先生と稱す。張聲（カク）、蔡京の子弟の師たり。時を推薦して曰く、龜山は大儒なり宜しく左右に置くべしと。時に高麗國に使する者歸りて、彼の國主、龜山先生安くに在りやと問へりといふ。遂に秘書郎となし、また著作郎に遷る。奏して曰く、堯舜いふ、允に厥中を執れと。洪範に曰ふ、臯は有極を建つと。臣願くば有司に明詔して祖宗の法、著れて綱目となれる者を條具せしめ、今に宜しき者あらば當に損益し、擧て而して之を

行ふべし。元祐熙豐の若き姑く置いて論ずる勿れ、一に中に趨るのみと。徽宗これを首肯す。邇英殿説書に除す。未だ幾ならずして右諫議大夫兼侍講に轉ず。李綱の罷めらるや、大學生と軍門の集るもの實に數萬、闕に伏して綱を留んと乞ふ。朝廷これを防禁せんと欲す。吳敏、時を用ひ以て大學を靖めんと乞ふ。遂に時を以て國子祭酒を兼ねしむ。曰く、蔡京、神宗を繼述するを以て名とするも、實は王安石を挟み以て身利を圖るなり。今日の禍、實に王安石の以て之を啓くありと。また王安石の王爵を追奪し、配享の從を毀去するを望む。帝即ち詔を下し、安石を從祀の列に去る。諫官馮澂、つとめて王安石を主とす。上疏して楊時を諷る。時遂に致仕を乞ふ。徽猷閣直學士に除し、祠を奉ぜしむ。高宗立ちて工部侍郎に除し、次で兼侍講に除す。累りに外を乞ふ。龍圖閣直學士を以て杭州洞霄宮を提舉せしむ。既にしてその請に従ひ致仕せしむ。林泉に優游し、著書講學を以て事とす。卒するの時八十なり。文靖と謚す。州縣に浮沈すること四十七年。朱子、張栻の程氏の學を得る、その源委脈絡は皆な楊時に發すといふ。注目すべき點なり。龜山文集語錄あり。

(46) 程迥(ケイ)は宋の人。字は可久。はじめ寧陵の沙隨に家す。靖康の亂に餘姚に移る。孤貧にして飄泊すること二十有餘年にして始めて讀書すと傳へらる。而して經學を諸所に授く。世に沙隨先生と稱せらる。書註すること百餘卷。隆興年中、進士に第す。任地毎に政令明簡にして、亦、民を治むるに恩義あり。朱子その博聞至行を稱して古人に追配すと。

(47) 張行成は唐の人なり。太宗の朝に給事中に拜せらる。帝かつて曰く、朕、人主と爲り、常に將相のことを兼ね行ふと。行成これに答へて曰く、古、禹は矜伐せずして天下これと争ふなし。陸下、亂を撥して正に反す、群臣、誠に清光を望むに足らず。然れども必ずしも朝に臨んで之を言はず。萬乘の尊を以て乃ち群臣と功能を校す。臣ひそかに陛下のために取らざるなりと。太宗これを嘉みす。

(48) 劉敞は宋の人。字は原父。式の孫なり。學問淵博。文を爲ること最も敏明なり。治平年中、西掖にありしとき、一日、公子公主等九人を進封す。敞、命を受けて九制一揮また文詞典雅なり。累官して集賢學士に至る。著すところ公是集、並に兩漢刊訛あり。時に歐陽修、世に重望を負ふ。而して人の敢て抗する者なし。獨り博學を以て敞の兄弟を敬服す。かつて五代史を携へ就きて訂す。敞、問々、諛語を以て之に酬ゆ。歐陽修頗る樂します。また韓琦に許さる。敞まさに死せんとす、子弟に囑して選に其の集を出すことならしむ。百年の後、當に知者あるべしと。

(49) 朱雲は漢の人なり。字は游平。陵の人。少にして輕俠なりしが、年四十にして始めて易、論語を學ぶ。かつて五鹿充宗と易を論じて充宗を辯折す。仕へて槐里令となる。成帝のとき安昌侯張禹、帝の師傳を以て政を專にす。朱雲、上書して見ゆることを求め、尙方の斬馬劍を賜ひて佞臣一人の頭を斷ち、以て其の餘を厲まさんと請ふ。帝曰く、誰ぞやと。答へて曰く、安昌侯張禹なりと。帝大に怒りて曰く、小臣、下に居りて師傳を延辱す、罪死赦さずと。御史、朱雲を率ひて下る。而も朱雲、殿檻を攀づ。檻折る。朱雲叫んで曰く、臣、下、龍逢比干に従ひて地下に遊ぶを得ば足れり。未だ聖朝の如何を知らざるのみと。左將軍辛慶忌、頭を叩き血を流して之を争ふ。帝意漸く解く。檻を治めんとするに及びて、帝曰く、易ふる勿れと。囚りて之を鞫めて以て直臣を旌す。

(50) 晁公武は宋の人なり。字は子止。冲の子なり。乾道の初、興元府に知たり。良吏の口あり。世に昭德先生と稱せらる。

(51) 呂大臨は宋の人。字は與叔、大忠の弟なり。程頤に學ぶ。謝良佐、游酢、楊時と共に程門の四先生と稱せられたり。

六經に通じ、最も禮に深し。著すところ克己銘諸篇あり。元祐年中、秘書正字となれり。

(52) 日名氏引用に據れば、李氏易傳引用の孔穎達説。

案ずるに此の最小指間に就いて、或は之を左とし、或は之を右とするの二説あり。仲氏易大衍の原注には孔穎達の言として、之を左手最小指間に掛くと曰ひ、虞氏義には下注に扚を左手小指に併合して掛くと云へば、則ち此に一を掛くは左手の小指に在らざるなり、當に右手に在るべしといふ（上繫第八章疏）更にまた別に右手の一を左小指間に著けて以て人に做ふとする張轄、易數大略あり。鄭克、朱子これに同ず（筮宗）また其の右手中より一を左手小指に掛くを虞義と信ずる惠棟もあり（虞氏消息第十五）。

(53) 朱子、何楷等は筮儀に格を用ふ。但し朱子は左右手兩分の著を置くに左右大刻を用ひ、過擲を置くに小刻を用ふ。

(54) 李氏易傳卷十四、虞翻の説。案ずるに扚を馬融は指間なりといひ、荀柔之は別つなりといふ（釋文）、扚の説たる郭雍これを解いて詳なり。折中に曰く、郭雍其先人忠孝の説に基き（案ずるに此の説、宋史本傳に出づ。また直齋書錄解題卷一に曰く、雍自ら言ふ、其父忠孝は學を伊川に受くと）以て著説をつくり張子の言を引いて據と爲す。朱子これと往復辯論せり（大衍の章）。郭氏の説に曰く、扚とは數の餘なり。禮に祭に數の仂を用ふとは是なり。或は指間といふは非なり。

楊子雲は芳に作る。豈に草間を以て芳と爲すかと（筮宗大衍の數五十の章引用）。程大昌は更にこれを敷衍考證して曰く、今古語を合して之を考ふるに、則ち扚（大衍の章の字）防（考工記輪人の章にある字）仂（王制冢宰國用を制するの節に用ふ）泐（考工記百工の章にあり、その鄭註に曰く、泐、讀んで再扚して後卦すの扚の如しと）芳（大支玄數の注に扚と同じとあり）なる者は皆な餘を以て義と爲す（中略）古餘數をいつて扚と爲す。その分合するを以て皆な人手に屬す。故に字もまた手に従ふ。必ずしも諸を指間に掛けて乃ち始めて扚と爲さず（筮宗大衍の章）

(55) 孔疏、並に本義は則ち左右餘擲を奇と爲す（折中卷十四衍の章）故に郭雍曰く、唐より奇を以て扚と爲し、扚を以て

掛と爲し、正策を以て餘數と爲す。殆んど今に五百年なり。名の正しからざる亦通じ難しと。(經義考卷七十釋一行大衍論)

(56) 趙汝樸曰く、次槃には初槃掛扱の餘著を用ひ、三槃には次槃の餘著を用ふるは古法なりと。(筮宗諸家撰法)

(57) これに異説あり。初槃は一を掛けて次槃三槃掛けずと。また他にも諸説あれど煩に過ぐれば今注せず。

(58) 案ずるに後掛すの掛を京氏は卦に作り、再扱して後卦を布くを云ふ(釋文)。その他、此の掛を卦に作るものは鄭玄(考工記勑字の注)許氏(說文勑字)あり。故に說文段注に、蓋し許は京に同ずるなりと曰ふ。而して朱竹院はその經義考卷五孟氏周易章句の條に於て曰く、許氏說文解字の序に易は孟氏を稱すと云へば、則ちその引くところ皆な孟氏の易なりと。然らば孟易もと卦の字に作るか(虞氏義第八章疏)

(59) 本卦の名義二あり。一は此にいふ三爻の八純卦にして、他は之卦に對して重卦を本卦といふ。

(30) (追記)

天地の數より大衍の數を説く者に宋の劉牧あり。字は長民。或は先之ともいふ。彰城の人なり。官は太常博士に至る。易解十五卷あり。晁公武の郡齋讀書志に曰く、

易解十五卷。劉牧長民撰。仁宗時言數者皆宗之と。

第十五章

朱竹垞の經義考卷七十、大衍詳說に宋の趙汝楳⁽²⁾の説として、朱子の門人蔡元定⁽³⁾の四十八策說を掲ぐ。

この説は眞勢易の系統に屬する谷川龍山⁽⁴⁾これを支持し、周易本策指南卷二に曰く

舊本、八を譌て九に作る。八を譌て九に作るとは、其の四十八策にては初變奇を得るもの二、偶を得るもの二、その奇偶の數偏ならず。その四十九策にては初變奇を得るもの三、偶を得るもの一、その奇偶を得るや偏なり。若し奇偶を得ること偏なれば何を以て神を盡さんや。是れ四十九策に非るの微一なり。また之を揲るに四を以てし四時に象るといへり。然れば四は是れ一歲にして奇なり。八は是れ二歲にして偶なり。然るに四十八策は則ち三變ともに四八を得。四十九策は初變五九を得て二變三變四八を得。その四はもとより奇にして八はもとより偶なるを。五は奇に非ず。九は偶に非ず。これ揲ふるに四を以て一歲とすれば一策あまり、二歲とするも亦一策あまり、二變よりして四八を得るものは此れ四十九策に非るの微二なり。また其の用四十有八より再扐して後掛すと云へるは、是れ一變を舉げて三變に及すなり。然るに四十八策を以てすれば三變とも四八を得て一爻を成せり。四十九策を以てすれば初變五九を得、二變三變四八を得。それ三變同じければ其の數を擧ぐるに及ばず。三變同じからざれば必ず其の數を擧げん。今、經文に其の辭なきときは是れ亦、四十九策に非るの微三なり。また四時に象るといふて以て四時を擧げ、閏に象るといふて以て閏を擧げ、凡そ三百六十期の日に當るといふて以て

歳を擧げ、獨り月を擧げざるものは其の四十八策、四を以て之を數ふるときは十二を得。其の十二は以て月の十二に配するなり。四十九策、四を以て數ふるときは一策を餘し、月に配すべからず。これまた四十九策に非ざるの微四なり。また其の四十八策、これを揲ふること一變、以て奇偶を得、三變以て四象を得、一奇もとより三數あり。是れ參天なり。一偶もとより二數あり。是れ兩地なり。蓋し太陽は三奇なり。其の一奇、各、三數なるときは則ち三三九なり。九は是れ太陽の數なり。其の三奇十二策を除けば則ち過揲三十六策なり。其の三十六策、四を以て之を數ふれば九を得。九は是れ太陽の數なり。太陰は二偶なり。其の各二數なるときは二三六なり。六は是れ太陰の數なり。其の三偶は、二十四策を除けば則ち過揲二十四策なり。其の二十四策の四を以て是を數ふれば六を得。六は是れ太陰の數なり。少陽は一奇二偶なり。その一奇三、その二偶四、これを合して七なり。七は是れ少陽の數なり。その一奇二偶、二十策を除けば則ち過揲二十八策なり。其の二十八策、四を以て之を數ふれば七を得。七は是れ少陽の數なり。少陰は一偶二奇なり。その一偶二、その二奇六、これを合して八なり。八は是れ少陰の數なり。其の一偶二奇、十六策を除けば即ち過揲三十二策なり。その三十二策、四を以て數ふれば八を得。八は是れ少陰の數なり。その四十九策も過揲の數に於ては異なることなしといへども、然れども太陽三奇十二策にしては一策を餘し、太陰三偶二十四策にしては一策を餘し、少陽一奇二偶二十策にしては一策を餘し、少陰一偶二奇十六策にしては一策を餘し、四象みな一策を餘して九六七八の數に當らず。是れまた四十九に非ざるの微五なり。斯の如く五微の彰然たるあるを知る。故に通本の九は八の誤たることを知るなり。

第一變の奇偶の數の偏頗である點は、古筮法に於て既に諸家の注意を惹いたらしい點であつた。それ故に宋代、易學が最も理論的發展を見た時に、此の疑問から出發して異説が生れたことは當然であつたのである。而して此所から、喧しい問題となつた掛拊説⁽⁵⁾と過揲説⁽⁶⁾の二説が生れたのである。

斯の如き矛盾を排す爲に、その妥當性を見出すために案出されたのが實に四十八筮説であつて、しかしながら餘りに合目的であるために機械的に過ぎ、每變、必らず四もしくは八であらしめたいために終つてゐるのである。従つて若し占筮といふものが、斯の如く數理的に決定的だとするならば、同時に亦、吉凶貞悔も亦、相半すること餘りに決定的でなければならず、若し易が斯の如き存在ならば、吾々は易を必要としないことも亦、餘りに明白なことではないか。

吾々の知性が、易を諸ふ理由は、易に於ける對立の透過と、萬物流轉の相といふ二つの命題に存すること言ふ迄もない。易の機構はもとより、その總べての表現が悉く對立でないものはなく、亦、その透過でないものはない。然も此の對立の中に絶對の相違性を認めながら、亦、その對立と相違性の中から、物の無限なる統一と同等性とを認めるのである。即ち否定の法則を認めて居るのである。すべての物は過程であり、また變化であるとし、此に萬物流轉の實相を示すのである。即ち、物の變化は、對立と矛盾、テーゼに對するアンチテーゼの法則の對立と相違性と矛盾性と同等性と統一性とを認めるのである。テーゼはアンチテーゼに止揚⁽⁷⁾され、更に此のテーゼ(陽)とアンチテーゼ(陰)との矛盾と統一の中から、新しき第三のテーゼ(三)が生れて來て、太極、兩儀

を生じ、兩儀から四象、八卦となり、斯の如き辯證法的發展は、終始するところなく無限の變化を續けるものなることを示すのである。従つて易に盛られる思想は、萬物流轉の相を明してないものはないのである。易占を籤と混同すべからざる所以である。

司馬溫公は一卷の潛虛を著して、大衍の數を七十五となし、用ふるところの著七十説をなす。曰く

七十五を以て策となし、其の五を虚うして七十を用ひ、二に分ち、左の一を取りて右に掛け、これを揲ふるに十を以てし、左を先にし、右を後にし、おもむろに其の餘を觀、命を以て名に掛し、主客を分ちて陰陽を定む。左揲まづ一を餘せば、右揲は後に二を餘す。是れ主を先にして客を後にする者にして陽。もし先づ左揲二を餘せば右揲は後に一を餘す。是れ客を先にして主を後にするの陰なり。陽には其の顯を用ひ、陰には其の幽を用ふ。生數、⁽⁹⁾純なるものは陰陽を分つべからず、當に右に置きて左を揲すべし。成數、⁽¹⁰⁾純なるものも亦陰陽を分つべからず、左に置きて右を揲すべし。皆な之を揲するに七を以てし、以て揲するところの餘を以て其の吉凶臧否平を觀るなりと。

また玉海⁽¹¹⁾三十五卷によれば、連山易は三十六策を用ひたといひ、歸藏易は四十五策を用ひたと傳へて居る。しかしながら俄かに信憑するに足らない。何となれば今日、連山も歸藏も共にその占法は傳へられて居らないからである。

また漢の楊雄は其の太玄經⁽¹²⁾に曰く、三畫⁽¹³⁾、四重⁽¹⁴⁾、八十一首⁽¹⁵⁾、七百二十九贊⁽¹⁶⁾、これを衍ずるに三十六策。その三

を虚にして三十三策を用ひ、これを揲するに三を以て三幕⁽¹⁷⁾して之を定むと。この方法は梁の人、焦延壽⁽¹⁸⁾の占法を借用したものだと傳へられて居るが、眞偽は不明である。しかしながら蘇洵⁽¹⁹⁾は、この占法を解説して曰く、著の數三十有六にして揲するに三十三を用ひ、一を分ちて以て左手小指中に掛け、その餘を分つに三を以て數へ、餘を合せて以て扚し、再扚の後、三を以て其の餘を數へ、七を一となし、八を二となし、九と三となし、八扚して四位成ると。

秋田、佐竹藩の儒者金岳陽⁽²⁰⁾は百筭法を唱へ、近世、根本通明⁽²¹⁾は三十六變筭法⁽²²⁾を説き、之を以て復古易となす。是等の異説は、異説として悉く根據を有し、立派に主張し得る理論をさへ備へて居るのであるが、惜しむらくは雜占に伍して亦、これを究明するの人がないのである。本書の姉妹篇たるべき易研究に於て、能ふ限り夫を盡したいと思ふが、本書の使命である史的觀點から展望するに止める。

(1) 經義考三百卷あり。清の朱竹垞の撰なり。經義に關する諸説、沿革、存亡を記し、易、詩、周禮、儀禮、禮記、通禮、樂、春秋、論語、孝經、孟子、爾雅、群經、四書、逸經、忠諫、擬經、承師、刊石、書壁、鏤板、著錄、通説等にして、今、宜講、立學、家學、自叙の四類を缺く。

(2) 未考。

(3) 後に傳を出す。

(4) 谷川龍山は通稱を順助といひ、浪花の人なり。眞勢中洲の門人にして、易に關する著述多し。天保二年十二月四日歿

す。年五十八なりと。

(5) 正義に曰く

十有八變而成レ卦とは、每一爻三變あり。初の一爻は五ならざれば九、是れ第一變なり。第二爻は四ならざれば八、是れ第二變なり。第三爻もまた四ならざれば八、是れ三變なり。若し三者ともに多なれば老陰と爲す。初に九を得、第二第三ともに八を得るをいふなり。もし三者ともに少なれば老陽となす。初に五を得、第二第三ともに四を得るをいふなり。若し兩少一多なれば少陰と爲す。初二三との間に、或は四あり、或は五あり、而して八あるを言ふなり。或は二個の四ありて一個の九あるあり。これを兩少一多となすなり。その兩多一少を少陽となすは、三爻の間に或は一個の九あり、一個の八あり、而して一個の四あるをいふ。或は二個の八ありて、一個の五あるなり。これを兩多一少となすなり。斯の如く三變、既に畢り、乃ち一爻を定む。六爻は十有八變、乃ち始めて卦を成すなり。

(6) 過揲とは四策づつ數へたる正策をいふなり。正策の數は、三變にして得たるところの掛扨の數を四十九策より去りたる數に當る。邵子曰く

著の用數、一を掛けて以て三に象る。その餘四十八は一卦の策なり。その十二を四すれば四十八たり。十二に三を去りて九を用ふ。四三十二、去るところの策なり。四九三十六、用ふるところの策なり。十二に五を去りて七を用ふ。四五二十、去るところの策なり。四七二十八、用ふるところの策なり。十二に六を去りて六を用ふ。四六二十四、去るところの策なり。四八三十二、用ふるところの策なり。この故に七九を陽となし、六八を陰となす。九は陽の極數にして、六は陰の極數なり。數極れば反る。故に卦の變となすなりと。

程明道の門下、白雲、郭忠孝は其の父兼山の言を引きて曰く

兼山郭氏いふ。著必らず四十九を用ふるは、唯、四十九のみ、即ち三十六、三十二、二十八、二十四の策を得ればなり。蓋し四十九、その十三を去れば三十六を得、その十七を去れば三十二を得、その二十一を去れば二十八を得、その二十五を去れば二十四を得。凡そ得るとは策數なり。去るとは餘すところの拵なりと。世俗、皆な三多三少を以て卦象を定む。斯の如くなれば必ずしも四十九數ならず。凡そ三十三、三十七、四十一、四十五、五十三、五十七、六十一、六十五、六十九、七十二、七十七、八十一、八十五、八十九、九十三、九十七、皆な以て初爻五に非れば即ち九、再爻、三爻、四ならざれば即ち八の數を得べし。獨り以て三十六、三十二、二十八、二十四の策を得べからざるのみ。

明の何楷曰く

案ずるに翼にいふ。乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四、凡三百有六十、當二期之日。二篇之策、萬有一千五百二十當二萬物之數也。皆な七八九六を以て數を起す。明らけし、正數を用ひて餘數を用ひざるを。

また康樞皇帝も曰く

按ずるに、大傳、乾の掛拵若干、坤の掛拵若干と言はずして但、乾之策、坤之策といふ。則ち策數を以て七八九六を定むといふものは是なるに似たり。

之を要するに、掛拵も正策によるも結果は同じ。然れども掛拵説には五九に掛一を去り、四八に之を去らざる矛盾あり。且つ九六七八を捨て、用ひざるは六爻九六の名に適せず。故に理に於て過擲の數を正となすこと優り、實用に於て掛拵に依る方便なり。

(7) aufhaven

(8) 命とは時の遇ふところにして、吉凶臧否は此れ命と偶ふところなり。

(9) 明の來知德曰く、一二三四五は生數なり。生とは即ち、その成の端倪なりと。

(10) 六七八九十は成數なり。成とは即ち、その生の結果なりと。

(11) 玉海は宋の王應麟、勅を奉じて撰すところなり。二百卷に、辭學指南四卷を附す。梁の武帝の金海に倣ひて玉海となす。宋代類書の淵海にして、天文、律曆、地理、帝學以下の二十一門、二百四十餘類より成れり。

(12) 太玄經十卷は西漢の楊雄の撰。易經に擬して作れるを以て有名なるものなり。その目を易經に對照す。

家 (易の卦)

玄首 (易の象)

玄贊 (易の爻)

玄測 (易の象)

玄文 (易の文言)

玄攸

玄瑩

玄掇

玄圖

玄告

(易の繫辭)

玄數（易の説卦）

玄衡（序卦）

玄籍（雜卦）

易は六十四卦なれども、太玄は八十一家あり。その變化法則また同じ。

(13) 畫は陰陽なり。

(14) 重は六位なり。

(15) 首は卦なり。

(16) 贊は爻なり。

(17) 一二三これを三幕といふ。

(18) 後に傳を出す。

(19) 蘇東坡の父なり。蜀の眉山の人。字は明允。老泉と號す。年二十七にして學に志し、遂に六經百家に通ず。秘書省校書郎となり、建隆以來の禮書を撰せり。姚闢と共に太常因革禮百卷を著せしが、書成りて卒す。時に年五十八なり。易に精なりしが志を果さず、子東坡、父の志を繼ぎて後に易傳を著す。

(20) 金岳陽は秋田藩の儒者なり。名は秀實。後、秀順と改む。初の名は市之助、後、宇平治と稱す。字は天福なり。岳陽はその號、また玉振、まに寬齋とも號せり。資性敏にして、學また深宏、識見ありて常に群衆を凌げりと。勘定奉行より諸奉行を経て、講校たる明德館の文學となり、遂に祭酒に至る。文化十年十月卒す。時に年五十六なり。

(21) 根本通明は秋田の儒者なり。文政五年二月、羽後國仙北郡斯和野村に生る。初の名は周助と稱し、天保三年、明德館分校崇徳書院に入り、通明と改む。間もなく明德館勤學生となり、學術優秀の故を以て監事及び教授を兼ね、次で學長となれり。明治二年、藩の小參事に任じ、五年、秋田藩學校教授を命ぜられ、次で秋田縣權大屬に任ず。後、大藏省に出仕し、八年、大藏省沿革志編取調掛を拜命し、斯文學會の選任講師より、華族會館學則取調委員、宮内省御用掛、皇族御進講、濟寧館講師を経て、明治十九年、御講書始の節、御進講を命ぜらる。後、帝大文科の教授となり、三十二年、文學博士となり、三十九年十月三日歿す。壽八十五なり。近世の易學大家として知らる。この後、斯の如き人を見ず。

(22) 根本先生の占法は、毛奇齡仲氏易の十八變にして内卦を成し、内卦の小成を推して重卦の大成に及ぶものにして、周易復古筮法に詳なり。

第十六章

繫辭上傳に曰く

易有_二聖人之道_一焉、以言者尙_二其辭_一、以動者尙_二其變_一、以制器者尙_二其象_一、以卜筮者尙_二其占_一。(易に聖人の道四有り、以て言ふ者は其の辭を尙び、以て動く者は其の變を尙び、以て器を制する者は其の象を尙び、以て卜筮する者は其の占を尙ぶ。)

卜筮する者が、ともすれば其の占を尙ぶに偏する傾向のあるのは是非もないことで、辭變象占は悉く其の四を兼備しなければならぬ事は言ふ迄もないのである。されば朱竹垞の經義考卷二十一、四學淵源論に、程迥の言を引いて曰く

辭變象占は易中の一體なれば、一を主とするも其の三を用ふべきなり。

と云ひ、易とさへ言へば必らず占筮を尙ぶの偏向を警めて居るのである。

しかしながら、此で少しく注意したいことは、右の問題が看過される一つの契機が存在することは是である。即ち易にいふ、辭變象占の目、これである。

繫辭上傳に曰く

君子居則觀_二其象_一而玩_二其辭_一、動則觀_二其變_一而玩_二其占_一。(君子居るときは即ち其の象を觀て其の辭を玩び、動

くときは則ち其の變を觀て其の占を玩ぶ。）

故に宋の輔廣も曰く

易は須く辭象變占の四字を識得すべし。初九潛龍勿用の如きは辭なり。九あれば六あるは變なり。潛龍は是れ象。勿用は是れ占なり。

また晦庵易說に曰く

問ふ。乾の初九潛龍これ象、勿用はこれ占辭。坤の六二黃裳これ象、元吉これ占辭の如きは甚だ分明なり。坤の初六履霜堅冰至。六二直方大不習无不利。六三含章可貞或従王事无成有終。上六龍戰于野其血玄黃の如きに至つては皆な是れ象を擧げて占意已に象中に見ゆ。これ又別に一例なりや如何。先生曰く、象占の例一ならず、占意たゞ象中に見ゆるものあり、亦、自ら見るべし。乾初九、坤六四の如きは此に至つて分明にして見やすきものなり。直方大の如き、唯、直方なり。故に能く大なり。所謂、教義立ちて徳孤ならざるものなり。六二直方大の象あり。占者この徳ありて此の爻を得ば不習而无不利矣。學習を待たずして利しからざるなきをいふなり。故に直方大を謂て象と爲し、不習而无不利を占辭と爲すもまた可なり。然れども直方なるが故に能く大なり。故に習はざるも利あらざるなし。象既にかくの如し。占者また此の意を離れず。六三陰にして陽位に居る、本これ陰にして些の陽を帶ぶ。故に含章の象と爲す。また貞以て守れば陰の象と爲す。或は王事に従ふとは下卦の上に居るを以て含藏を終へず、故に或時は出で、王事に従ふ象あり。成ることなけれども終ありとは

其の成に居らずして能く終りある象となし、占者に在りて之を用ふれば、始め進んで成ることなきも能く終りありと爲すなり。此れ亦、占意已に象中に見ゆるものなり。六四は重陰不中、故に括囊の象あり。无咎无譽また是れ象中、已に占意を見る云々。

これを六十四卦に推して行けば無理があるし、四つの聖人の道に附會しやうとして却つて破綻を生ずるのである。辭象變占は亦、易それ自身として理解し、辭象變占の日などに拘泥することなく、綜合して君子たるべきの路として把握し、前述の偏向を自戒すべきである。

支那學者フリードリッヒ・ヒルトは次のやうに曰く

古代の支那人は死後の状態に就ては殆ど之に關するの知識を缺き、且つ之を問ふの好奇心もなかりしが、現世に於ける計畫に就ては之が智見と結果とに關し、頗る心を勞したり。従つて此の目的の爲に神占を行ひしが、周公も明かに之を實行し、周代の官吏中には特に之を司掌するの卜官も存せり。而して商紀に於ても盤庚また卜占を實行せりといふ。若し大禹謨に信を置くを得ば、舜もまた之を行へりといふを得べし。卜占の器具は、龜殻と或る種の草程とにして、前者の上には種々の腐蝕的装置を施し、後者は手を以て之を揺がし、依つて以て天意を知り得べしと信ぜり。古代支那の眞に偉大なりし人物が如何にして斯る事を信じ得たりしやは解するに難き所なるが、舜の言なりと云はるゝ一言は注意に値す。舜、禹に語りて曰く、卜占もし吉を示さば之を再びすべからずと。

支那學者すら彼がヨーロッパに生れたといふ理由で、卜占が迷信に感じられることは、東洋流の辯證法が理解

されなかつた點に基くと思はれるが、今一つの他の理由としては、學的根據として信を置くに足る易學史が無いことはであらう。斯學の歴史的過程が展望されないのに、如何して將來への發展が望まれるか。

ヒルト自身、それが古代に於て既に盛行したであらう事を肯定しながら、それを全的に受納しないのは彼が史家として學的良心を守つたものと解釋することが出来るのである。

しかしながら眞實に、春官宗伯下にある如く周禮太卜三易の法を掌つてより以來、筮法の由來するところは淵源遠く、永い歴史を閲して來たのである。従つて今日の知悉せられる完成易——周易に至る迄、幾多の卜占術が綜合せられ、古代聖賢のアルバイトの集積だといふことが想像されるのである。

蓋し易經の特殊性は、その特殊な存在に依存するものであらう。それを端的に説明するところのものは、易は卜筮の書なるが故に、秦の始皇帝の禁學にも制せられず、禁書の厄をも此の故に免れたほどである。程迥によると、易は卜筮の書であると賢明にも進言した秦人巽によつて、始皇帝は之を允許したと傳へられて居る。

従つて、秦亡んで漢の時代に至るや、これを傳受する者が絶へなかつたといふ事實が漢書藝文志や儒林の田何傳に依つて知ることが出来る。それを極言すれば、漢書の劉歆傳によると、漢興つて天下、唯、易卜の書のみあつて未だ他書あらざりきと。聊か誇張に過ぐるやうであるが、秦漢革命の大激動を背景に考へると、或は眞相を傳へて居るのかもしれない。

このやうな保護政策の裡に育つた易は、漢の統一以後は家傳の學問として益々盛行し、やがて家學として發展

する途上、そこに独自の傳統を生じ、そこからして幾多の解釋が其の時代の呼吸をしながら生れたのは當然の過程と言はなければならない。されば孟喜は卦氣を言ひ、京房は通變を以て立ち、荀爽は升降を以てし、鄭玄は爻辰を主張し、虞翻は納甲を以て其の説を樹立するに従ひ、その學徒は鄭易と稱し、虞易と唱へ、比々、斯の如くであつたのである。

少しく經學史に關心を寄せた人々は、經學上に於ける今古文の派生と、その論争を見遁せないであらう。この問題は史的展望のもとに次第に後章に於て、細かく述べらるべき機會があると思ふが、極めて要點をのみ記すと、秦の始皇帝の三十四年、丞相李斯(8)曰く

異時、諸侯並び争ひ、厚く游學(9)を招けり。今、天下已に定まり法令一に出づ。百姓、家に當りては則ち農工を力め、士は則ち法令を學習して禁を避く。今、諸生、今を師とせずして古を學び、以て當世を非り。黔首(10)を惑亂す。丞相臣斯、味死(11)して言す。古は天下散亂し之を能く一にするもの莫し。是を以て諸侯並び作り、語、皆古を道ひて以て今を害し、虚言を飾りて以て實を亂り、人、其の私學する所を善しとし、以て上の建立する所を非れり。今、皇帝、天下を併せ有ち、黑白を別ちて一尊を定む。私學して相與に法教を非るの人、令下ると聞けば、則ち各々、其の學を以て之を議し、入りては則ち心に非り、出でては則ち巷に議し、主に夸りて以て名と爲し、取を異にして以て高しと爲し、群下を率ゐて以て謗を造す。此の如くなるを禁ぜずんば、則ち主務上に降り、黨與下に成らん。之を禁ぜんこと便なり。臣請ふ。史官の秦の記に非ざるものをば皆な之を燒かん。博士の官の職

る所に非ずして天下敢て詩書、百家の語を藏する者あらば悉く守尉に詣し、雜へて之を燒かん。敢て詩書を偶語するもの有らば棄市せん、古を以て今を非る者は族せん、吏の見知して舉せざる者は與に罪を同じくせん。令下りて三十日にして燒かざるものは、黜して城旦と爲さん。去らざる所のものは醫藥、卜筮、種樹の書なり云々と。

これを挾書の律といふのである。斯くして天下の書籍を悉く燒盡し、儒生は坑にせられて、六經はその傳を斷絶したのである。

後、漢に入つて惠帝、この挾書の律を解き、文帝及び景帝は黃老の道を好むによつて、法家の學を愛し、また儒學に見るべきものがなかつた。然るに武帝の世に至つて始めて五經博士が設ふけられ、漢朝はこれ等十四家(18)穀梁は含まず)を學官に立て、博士教授を置き、その寫本は秦漢通行の篆書を用ひて書いた。故に之を「今文」と呼ぶのである。吾々の扱ふ易に關して言へば、六經の首位に置かれた易も、十四家中の四家のうち施讎と梁丘賀の二家學は、既に西晋の亂に及んで亡んで仕舞つたのである。

前漢、景帝の末年、魯の恭王が宮殿を擴張しやうとして孔子の舊宅を壞した時、壁の中から先秦時代の古文字(蝌蚪文)によつて書かれた尙書、禮經、論語、孝經等を發見した。それは武帝の代に孔安國が今文によつて之を讀んだと傳へられるところのものである。司馬遷が史記の諸篇に古文説を取つたのも、この弘安國から受けたものであるとも言はれるのである。ほゞ同時代の河間獻王(21)は書籍の蒐集に力を盡し、周官、尙書、禮記、孟子、老子等の古文で書かれたものを得た。古文發見時代には尙書だけでも古文尙書と稱せられたものも數種あつた。或は

異傳とすることが出来得やう。たとへば蓋豫(22)の古文、杜林(23)の漆書古文、孔僖(24)の古文、劉陶(25)の尙書等の如きである。

後漢の世は始め古文は學官に立てられなかつたが、西州にあつては古文發見が刺激して學官に立てられた。それ故に古文の書は前漢の末に發見せられ、後漢の時代に榮へたので、前漢の經學を今文と稱ぶのに對して、後漢の經學を「古文」と呼んだと言ひ得るのである。古文と敢て名付けるのは其等の經籍が蝌蚪文字によつて記されてあるからで、今古文の區別は畢竟、その文字の上にあつたもので、學的内容に於ては本質的に變りがなかつたとも言へるのである。

しかしながら家法を墨守する人々にあつては、既に今古文の論争を契機として易學の傳統に於ても明らかに今文家と古文家の易學上の派閥が認められ、時世が降つて南北朝の時代に入るや、南朝と北朝の學者間に、著しく傾向を異にするものが生じた。例へば北方にあつては王弼の易が行はれたに反して、南方にあつては鄭玄の易が重んじられたかの如きである。更に時代が降つて趙宋南渡の後に及んで、有名な朱子が周易本義(26)を著した。この本義ひとたび世に現れるや、舉世、滔々として朱子學を以て泰斗となし、後世、わが國の易學者もまた宗と爲すに至つたのである。周易本義は専ら卜筮を主とし、卦爻の辭は必らず其の象、その占を以て分ち、之を解釋した點に特色付けられる。朱子の易學啓蒙(27)に曰く

聖人、象を觀て卦を畫し、著を揲へて以て爻に命じ、天下後世の人をして、皆な以て嫌疑を決し、猶豫を定め、

吉凶悔吝の途に迷はざらしむ。その功盛なりと謂ふべし。近世よく喜んで易を談ずるも此を察せず、予、竊に之を病ひ、因つて同志と頗る舊聞を輯むと。

大聖孔子より朱子まで凡そ一千七百五十年、遂に朱子易あつて他家あらざるに至ると稱せられたのである。

(1) 陸徳明の經典釋文に、聖人の道とあるを明僧紹は、君子の道に作る。

(2) 宋の蔡淵の易象意言に曰く、觀象玩辭學易也、觀變玩占用易也、學易則無所不盡其理、用易則唯盡乎一爻之時、居既盡乎天之理、動必合乎天之道、故曰、自天祐之吉无不利也と。

(3) 輔廣は輔遠の子なり。字は漢卿。朱子並びに呂祖謙に師事す。慶元の初め、僞學の禁興る。ために學者多く解散す。然るに輔廣ひとり動かず。朱子これより深く器重す。嘉定の間、仕へて祠官たり。罷めて後は涪溪に隱れ、著書を以て務となす。五經註釋、四書問答、詩童子問、通鑑集議、日新錄、師訓篇等の諸書あり。時人これを稱して傳貽先生となす。

(4) Friedrich Hirth は一八四五年に生る。清の同治九年より光緒二十三年まで支那の關稅事務に鞅掌し、後、上海において統計局に勤む。一八八六年より八七年までドイツ王立アジャ協會北支那支部總裁たり。一九〇二年より七年まで米國コロンビア大學の支那學教授となり、幾多の著述をなせり。就中、ロツクヒルと共譯になる趙汝适の諸蕃志は有名なり。

(5) 周官太卜三易の灋を掌ると。

又曰く、夏股の連山歸藏は七八不變を以て占を爲し、周易は九六の變を以て占を爲すと。

(6) 後に傳を出す。

(7) 劉歆は前漢の宗室劉向の子なり。字は子駿。成帝に召され宦者に待詔、黃門郎となる。河平中、父と秘書を領校し、父の死後、中壘校尉を襲ふ。哀帝の初、侍中太中大夫となり、騎都尉、奉車都尉、光祿大夫を歴官し、五經博士に選ばれて父の業を嗣ぐ。乃ち六經群書を種別して七略の目を立て、夙に尹咸、翟方進に従ひて春秋左氏傳を修めたるにより、これを毛詩、逸禮、古文尙書と共に學官に建てんことを建白せり。蓋し古文學派の發生は此に始まるなり。然るに當時は今文學派の盛んなる時代にして諸博士また多く反對し、歆は太常、博士に移書して彼等を責む。光祿大夫龔勝この移書に托して骸骨を乞ひ、大司空師丹をして舊章改亂のもとに歆を彈ず。歆ときに帝の庇護厚く幸に事無きを得しも、建白を止め、自ら出でて河内、五原、涿郡の太守を歴任す。一時病みて辭せし後、また安定屬國都尉に出づ。哀帝崩じ、王莽、政を攝す。少時ともに黃門郎に列して以來の親交あり。歆を右曹太中大夫に擧げ、中壘校尉、義和京兆尹となる。やがて紅休侯に封ぜられ、儒林史卜の官を興し、律歴を考定して三統曆譜を著せり。王莽位を篡ふて後、國師公となり、祁烈伯を加へられしも、始建國二年、甄尋が符命にかゝる罪に連坐して、その子、棻、泳、及び門人丁隆等と共に誅せらる。一説に哀帝の建平元年、名を秀、字を顯叔と改むと。

(8) 李斯は禁の上蔡(河南省)の人なり。年少にして郡の少吏となり、發憤して荀子に學び、秦に入る。時に秦王、客を逐ふ。斯その不可を上書して用ひられ、六國統一の大業を助く。始皇帝の丞相として郡縣制を行ひ、天下の諸生を逐ひ、挾書の律を發し、書籍を焚く。されど斯また文に秀で、書に巧に、小篆は彼の創造せる字體なりと傳ふ。始皇、天下を巡遊して到るところに秦の頌德碑を建つ。その文おほむね斯の作に係り、また之を書す。始皇崩じ、宦官趙高に欺かれて、長子扶蘇を退け、二世皇帝を擁立せしも、程なく趙高のために計られて腰斬せらる。

- (9) 學問を以て四方に遊ぶ者をいふ。
- (10) 黔は黒きなり。庶民は黒布を以て頭を覆ふが故にいふ。人民なり。
- (11) 昧は冒なり。死罪を犯して上言すなり。
- (12) 殺して其の屍を市に乗する刑なり。
- (13) 一族を殺すなり。
- (14) 黥は入れ墨の刑なり。
- (15) 城旦は徒刑なり。每旦、出でて築城の勞役に服せしむなり。
- (16) 古九流の一なり。法を尙び、刑を明にするを主とする學問なり。漢書藝文志に曰く、法家者流蓋出ニ於理官信賞必罰以輔_二禮制_一と。
- (1817) 白虎通は易、書、詩、禮、樂を五經となせど、初學記には秦火の後、樂經、燒亡せしによりて、易、書、詩、禮、春秋を五經となせり。就中、禮は漢にありては儀禮をいひ、後世は禮記をいへり。漢の武帝の建元五年、董仲舒の建言により五經博士を置きしに始まる。即ち易は施雠、孟喜、梁丘賀、京房の四家。詩は申公培の傳へたる魯詩、轅固生の齊詩、韓嬰の韓詩。書は歐陽生、大夏侯(夏)小夏侯(健)。禮は大小戴(戴德、戴聖。春秋公羊の嚴彭祖、顏安樂にして之を前漢の十四博士といふ。
- (19) 三國、魏の將司馬懿、字は仲達の孫なり。炎は魏に代つて位に即き、國號を晉となす。これ西晉の武帝なり。武帝は魏の奢侈の後を受け、銳意、政を治め、九品中正の制を創め、また州郡制を布く。その子弟二十七人を封じて王たらしめ、

郡を以て國と爲し、大國は邑二萬戸、三軍にして五千の兵を領し、次國は邑一萬戸、二軍にして三千の兵を領し、小國は邑五千戸、一軍にして千五百の兵を領し、王公は皆な洛陽に居らしめしが、威寧三年、王公を國に歸るを得せしむ。これ他日、宗室八王の亂の起る因子たり。武帝、吳を平げて崩じ、太子立つ。惠帝なり。太子たりし時より暗愚にして其の妃賈后、及びその一黨權を專にす。武帝はじめ汝南王亮と外戚楊駿をして輔佐せしむ。之を快とせざる賈黨は楚王瑋（武帝第五子）を引きて楊黨を誅し、汝南王を殺し、遂に楚王自らも殺されて、賈黨の權強大となる。而して太子適を廢す。趙王倫及び謀臣孫秀これを怒り、賈后及びその黨を誅し、趙王は帝に迫りて位を讓らしむ。成都王顥（武帝第十六子）は鄴にあり、齊王冏（武帝從子）は許昌にあり、河間王顥（懿の弟孚之の孫）は長安にありて大なり。孫秀これと結ばんとせしも、齊王先づ怒り、成都王、河間王、常山王乂（後の長沙王、武帝第六子）と共に兵を發し、趙王及び孫秀を殺し、惠帝を迎ふ。成都王の鄴に歸りし後、齊王驕る。河間王、都に迫り、長沙王も立ちて共に戦ひ、齊王死す。然るに更に長沙王と河間王と争ひを起せしが、東海王越（懿の弟の孫）は長沙王を幽閉し、河間王の部下は長沙王を襲つて殺せり。此に於て東海王と成都王と對立し、東海王敗れて國に歸るや、成都王は鄴より洛陽に入り惠帝を擁す。間もなく河間王の部將は惠帝を擁して長安に遷り、洛陽は東海王の占領するところとなれり。而して東海王の軍、長驅して長安に迫るや、河間王は逃れて山中に奔り、百官また山中を彷徨して饑餓迫らるるの慘狀を呈し、東海王、帝を擁して洛陽に歸りしが、成都王、河間王、相次で殺され、惠帝もまた毒殺さる。太子懷立つ。東海王權を持せしも帝と和せず、憂憤して死す。然るに五胡の羯の石勒攻め入り、ために晉軍十萬これに死す。洛陽また匈奴の劉聰に攻められて落ち、先帝の後羊氏は劉曜に捕はれ、懷帝また山西省の平陽に囚はれて殺さる。内憂外患のために晉、一時、絶つ。これを永嘉の亂といひ、また西晉の

亂ともいふなり。

(20) 後に傳を出す。

(21) 前漢景帝の皇子なり。景帝二年立ちて河間王となる。名は德。溫仁恭儉にして下吏を敬愛し、また明知に優れり。大行令は奏して獻王と諡す。學を修め、古を好み、金帛を加へて四方の道術、學者を招き、また多くの書を集め、その得し書は漢室よりも多かりしと。六藝をあげ、毛氏の詩を立て、左氏春秋の博士を立つ。爲に宮門、山東の儒多しと。

(22) 蓋豫は後漢の人なり。建武年間、徐州の刺史たり。中國人名辭典に曰く、嘗授古文尙書於汝南周防と。

(23) 漢の杜林。字は伯山。扶風茂陵の人なり。父は鄴。幼にして博洽多聞、通儒と稱せらる。初め河西に客たり。隗囂に遇られて節を屈せず。弟成、卒するによりて許されて喪を持して歸る。劍客楊賢をして途に之を殺さしめんとす。杜林自ら鹿車を推して弟の喪を載するを見て、賢、歎じて曰く、我小人と雖も何ぞ義士を殺すに忍びんやと。よりて逃げ去れり。光武帝召して侍御史となし、引見して問ふに經書を以てす。時に郊祀を議す。多くは漢まきに堯を祀るべきを以てす。林曰く、漢業特に起る、功、堯に縁らざるなりと。故に杜林、堯を駁すといふ。官、遂に大司空に至る。

(24) 孔僖は漢の人なり。字は仲和。孔子十九代の孫なり。孔安國より歴代、尙書を世傳す。僖、肅祭に仕へて蘭台令史となり、幸に闕里に従ふ。帝曰く、今日卿に於て光ありやと。僖答へて曰く、陛下先儒を崇禮し聖德を増輝す、光榮に至ては敢て承るところに非ずと。帝大笑して曰く、聖門の子孫に非ずんば安ぞ斯の言あらんやと。

(25) 劉陶は漢の人なり。字は子奇。潁川の人なり。尙書、春秋に通ず。孝廉に擧げられ、侍御史に累官す。中陵郷侯に封ぜらる。三たび尙書令に遷り、侍中に拜す。屢々切諫し、權臣の憚るところとなる。京兆尹に徙る。就かず。徴して諫議

大夫に拜せらる。上書して時務八事を言ふと。

(26) 宋の淳熙四年、周易本義十二卷成る。その巻首に見ゆる撰考筮儀は世、傳へて朱子の作とするも、王懋蹟は斷じて朱子手定の親筆に非ずとなすと凌廷堪の禮經釋例にあり。海保漁村また周易古占法題辭に同じ主張をなせり。

(27) 淳熙十三年、易學啓蒙四篇成る。宋史儒林傳に曰く、易詩傳通鑑綱目を爲るに及んでは皆な蔡元定と往復す。啓蒙の一書は則ち元定に屬して稿を起すと。後章の朱子傳の條に此の事に關して更に述ぶるところあるべし。

第十七章

孔子は、殷は夏の禮に由り、周は殷の禮に由り、損益するところ知るべし、といふ所以のものは、孔子の時代に既に夏殷の文献の徴すべからざるを物語つてゐるものに他ならないのである。

降つて孟子の時代には、早や周の官位爵祿すら明らかでなかつたことが、萬章上によつて知られるのである。

吾々が今日、周代をさへ完全に把握することの困難さは、有周一代の年數凡そ八百年に及び、それは恰も宋元明清の四朝に等しいことから考へても、如何に容易ならざるものであるかといふ事が言ひ得られるのである。吾々が易學史として、遠く迥かな三代に想ひを馳せるに際し、聊かの手懸りとする今日の經傳なるものは、周末からして秦漢の頃の傳説、乃至は記録の斷片なのであるが、其等の斷簡零墨が、また如何に根據とするに頼り無いものであるかを、屢々、痛感せずには居られないのである。そこで近世、金石文の研究と其の發達との助けにより、少しばかり古代史の黎明期が来つゝあるのである。さうした一例として郭沫若の兩周金文辭大系の序に曰く

殷周の古曆はまだ確實に知られてはゐないし、周代列王の年代も異説が多い。恭王を例として言へば、太平御覽卷八十四には帝王世紀を引いて在位二十年と云ひ、通鑑外記には在位十年と云ひ、また皇甫謐の説を引いて在位二十五年とも云つてゐる。後世の皇極經世などにも亦推算して十二年とし、世間では多く此を定説と見做して居る。然し今世に存してゐる赳曹鼎第二器は、その銘文に、佳十又五年五月既生霸壬午隳王周の新宮に在り。王

射廬に射る。と言つて居る。堯王は恭王であり、謚法の興つたのは春秋中葉以後の事とすべきであるから、此所に生きながら王と稱するのは、恰も猷侯鼎に生きながら成王と稱し、宗周鐘に生きながら邵王と稱し、邲段に生きながら穆王と稱し、匡内(14)に生きながら懿王と稱するのと同じである。趙曹鼎第二器は明らかに恭王に十五年のあることを言つてゐるから、彼の二十五年説と二十年説とは何れが正しいか未だ分らないが、十二年説と十年説の如きは皆な誤りである。

斯の如く今まで信じられた歴史は全く顛覆させられたのである。従つて經學史をひもといた人々は、六經が確立するまでの遼遠な時代が、如何に長い間、所謂、無記録時代が続いたかを想像し得るであらう。されば本田博士は經學の起原に關して

蓋し其の初め、史は巫の職を襲いで卜筮を司り、其の繇辭を記録するやうになつて文字も發明せられるやうになり、從來、暗誦によつて傳へたものを、史が之を書籍に筆記するやうになつたのであらう。其の暗誦によつて傳へたことを知るのの替、または師といふ者の存在したことで分り、其の筆記に由るやうになつたのは尹氏といふ者で分り、尹氏と同じ意味に使用せられるところから史の時代に既に文字に表すやうになつたことを想像し得るのである。例へば公羊、穀梁の二傳が暗誦によつて漢に傳はり、左氏傳が書籍によつて傳つたといふやうなものである。詩、書、禮、樂や易象、春秋の基礎となるものを或る時は巫が之を掌り、或る時は大史が之を掌り、また或る時は大司樂が之を掌つたと云へば差支ないやうである。而して詩、書、禮、樂、易、春秋と纏つたのは

勿論、秦漢以後であつて、其の昔では種々雑多の教訓やら傳説があつたので、それ等が後に六經になるまでには可成りの歷程があつたに違ひない。

と言つて居られるのは正當な解釋であるばかりでなく、亦、私の言はんとするところと等しいのである。而して又曰く

汪中⁽¹⁷⁾の左氏春秋釋疑に、古者詩書禮樂、大司樂掌之。易象春秋大史掌之。而儒則有道者、有德者、使^レ教^二國之子弟。死則以爲^二樂祖、祭^三於瞽宗^一者也。後世二官俱亡。而六藝之學、并^三於儒者^一と言つてゐることである。これ今の周禮を根柢とし、左傳と禮記王制の記事を折衷して立てた説である。この古者と言ふのは、何の時代であるか不明であるけれども詩、書、禮、樂、易象、春秋の六藝が一時に完備し、これを大司樂と大史とが分擔した時に存在したとは想像が出來ぬのである。且つ此等の二官が存在した時に儒といふものはなかつた筈であると。

儒⁽¹⁸⁾といふのは孟子、荀子等に始まり、それ以後、學者の稱となつたのである。しかしながら古來、儒の字の最も古い文献として擧げられる周禮天官冢宰の職に

四曰^レ儒^レ以^レ道得^レ民

とあるところから斯く信ぜられ、汪中も亦、左様に信じ誤つたのであるが、狩野文學博士の研究によつて、儒の字は保の字の誤りであることが明白となつたのである。

易學史は亦、當然、經學史⁽¹⁹⁾と平行するものであるから、その歴史的發展は諸先輩の立派な跡付けに従ふのが最

も便利なのであつて、従つて儒學史を知らずして易學史を知ることが不可能なことなのである。

このやうな序曲を前奏時代として、孔子の所謂「詩、書、執禮」となり、やがて其の後、易及び春秋が加はつて六經時代となつたのである。

司馬遷その史記、孔子世家に孔子六經を刪定したと書いて以來、孔子の六經刪定説と其の否定説とは、長い間學界の論争のテーマとなつて來た。その肯定者も然しながら確實な根據なく、却つて否定する側が否定し易い立場にあることだけは斷言し得ると思ふ。

易經、繫辭下傳に、古者包犧氏之王天下也云々といふ有名な句に始まる文章がある。即ち

古者、包犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取る。是に於て始めて八卦を作り、以て神明の徳を通じ、以て萬物の情を類す云々と。

此の章句あるが爲に古來、易を談する人々は多くの誤謬を犯した。十翼が孔子の作でないといふ定説が一般に承認される今日、尙ほ繫辭の章句にとらはれることは學的には一顧の値もないのである。然しながら少くとも宋以前は勿論、その後の保守的な學者は已前として舊説を固執し、敢て誤謬を踏襲して來たのである。

それ故に清の時代に至つて、浙西の學統に屬する吳派の奇才、惠士奇は其の易説に⁽²⁰⁾

易は從來、伏羲によつて始められ、文王に至つて盛になり、孔子に至つて大成したと言はれてゐて、その説が

尙ほ漢の時代にも行はれてゐる。既に然る上は先づ孔子の易を闡明することなくしては文王の易を論ずるに足らず、文王の易にして明かでない限りは、共に伏羲を論ずることが出来ない。然るに文王、孔子の易を捨て、遠く包犧を尋ねることは正に其の方法を誤つたものと言ふべきである。

と指適してゐる事は、易學史を學ぶ人々にとつて三顧の價直ある言なのである。

然らば先づ、如何にして孔子の易を知るべきであるか、畢竟、易の傳統史を遡るより方法はないのである。これには然し異論は少くない。私と雖も斯る傳説と歴史とが混交した如き易學史を以て、必ずしも正鵠なりとするものではない。しかしながら支那學の組織を根本的に改めない限り、今はそのやうな方法に據つて、一應の檢覈を試みるより仕方がないのである。例へば前記の惠士奇の易說によると

孔子の易は漢儒に傳はる。そのうち孟喜は卦氣をいひ、京房は通變を以てし、鄭玄は爻辰を以てし、荀爽は升降を以てし、虞翻は納甲を以て其の說を立て、各自その説くところを異にするが、その歸するところは一である。然るに現在、傳ふるところの易は、魏の王弼の易で、王弼は費直の易を傳へたものであり、もと古文であつたものを、王弼が悉く漢儒の說を改めて自說に依つて解釋を施したものである。然しながら易本來の意味は、王弼の説くところとは必ずしも一致しない。寧ろ漢儒は最も孔子の旨を傳へたものである云々と。

と言ふのであるが、これとても必ずしも信憑するに足らないのである。何となれば漢儒の易が必らず孔子の易を傳へたといふ事實は、史的根據が薄弱なのである。

既に孔子の授易が歴史的に多分に疑惑を存する以上、嚴密な學的な意味に於て孔子の易さへが知られないと言はなければならぬ。唯、わづかに知り得ることは孔子が易に關心を有したといふ事が、その弟子等——魯學派の儒者達の言によつて知られるに過ぎないのである。司馬遷その史記、孔子世家に、孔子晚年易を喜び、韋編三たび絶つに至れり、と記して以來、後世の學者は孔子修易のことを疑ふ人が無いのである。而して論語述而篇に曰く

子曰、加_三我數年、五十以學易、可_三以無_二大過_一矣。

しかしながら朱子は、五十は卒の字の誤寫であらうといふ説を出したが、いづれにせよ孔子が易を學んだといふ弟子の言は動かすことが出来ない。現在の吾々は、それを否定する何等の文献をも發見しない。

繫辭傳の作者が、易の興るや其れ中古に於けるか、と疑問してゐるが、その指すところの中古が支那史の何れの時代に該當するかに就ては何等の解答を記して居らない。茫漠たる四千年の太古に於ける未完成易が未詳なのは是非もないのである。吾々は孔子といふ代名詞が代表するところの傳説的なる易學史を、或る程度、踏み進るべき大道に於ける據點としなければ、左様な易學史への考察さへが可能でないことを反省しなければならぬのである。

史記、儒林傳によると

孔子卒してより後、七十子の徒、諸侯に散遊す。大なる者は師傳卿相と爲り、小なる者は士大夫に友として教

へ、或は隠れて見はれず。故に子路は衛に居り、子張は陳に居り、澹臺子羽は楚に居り、子夏は西河に居り、子貢は齊に終ると。

これを歴史的記録と信ずるとして、このやうに諸弟子が四方に散遊して、一方に孔子の説くところの學説を敷衍し宣布したと同時に、その家學が綜合的に傳へられなかつたであらうことを想定し得るのである。しかしながら若し孔子易が傳へられたと想像するならば、このやうな狭い道を辿つて脈々として傳へられたに相違ないと思ふ。

史記、儒林列傳に曰く

魯の商瞿、易を孔子に受けしより、孔子卒して、商瞿易を傳ふること六世、齊人田何、字は子莊に至る。而して漢興つて、田何、東武の人、王同、子仲に傳ふ。子仲は淄の人楊何に傳ふ。(楊)何は易を以て元光元年徵され、官、中大夫に至る。齊人、即墨成、易を以て城陽の相に至る。廣川の人孟俱、易を以て太子の門大夫と爲る。魯の人周霸、莒の人衡胡、臨淄の人主父偃、皆、易を以て二千石に至る。然れども要するに易を言ふ者は楊何の家に本づく。

吾々は、易傳に關する古文獻として史紀並びに漢書を有する。此等の記事を信ずると否とは各人の隨意とするところである。しかしながら易傳に關する限り、如上の諸文獻を参照せずしては成立しないのである。

史記の筆者は、何に基いて如上の如き傳統を明記し得たか解らない。しかしながら仲尼弟子列傳に記して曰く

商瞿は魯の人なり。字は子木。孔子より少きこと二十九歳。孔子、易を(商)瞿に傳ふ。(商)瞿、楚人、馯臂子弘に傳ふ。(馯臂子)弘は江東の人、矯子庸疵に傳へ、(矯子庸)疵は燕人、周子家豎に傳へ、(周子家)豎は淳千の人、光子乘羽に傳へ、(光子乘)羽は齊人、田子莊何に傳へ、(田子莊)何は東武の人、王子中同に傳へ、(王子中)同は淄川の人、楊何に傳ふ。(楊)何、元朔中、易を治むるを以て漢の中大夫と爲る。

とあつて六傳を明示して居る。

吾々が疑問とするところは、何が故に孔子が七十有二子の中、商瞿に易を授けたかといふことである。易は一面、方術の學問でもあるから、商瞿が諸弟子の中、優れた易占の名手でもあつたのだらうか。更に今一つ不思議とするところは、周公の子伯禽の封ぜられた魯の國は、従つて比較的に周の文化を殘存したに相違なく、孔子の輩出は勿論、孔子を師として集つた門下生も、さうした郷土の好學の影響下に起つた(22)と知られ、孔子の歿後さへ、所謂、魯學は魯や衛の國を中心として黄河以北の地に傳播したのに拘はらず、易に關しては楚(23)であるとか、江東(24)であるとか、燕(25)であるとか、甚しく邊鄙な土地の人物が之れを傳へてゐることである。而して齊の勃興するや、稷下(26)の學として天下に重んじられ、齊の易學の傳統が後世を支配するに至つたことは、誠に解し難い一事としなければならぬ。

しかしながら弟子列傳中、他に一ヶ所、商瞿に關する記事を發見する。即ち有若の條に曰く

商瞿、年長じて子無し。その母、爲に室を取らんとす。孔子、之を齊に使はす。瞿の母、之を請ふ。孔子曰く

憂ふる勿れ。瞿、年四十の後、當に五丈夫の子有るべしと。已にして果して然り云々。

此の記事は孔子の易占とは解し得ても、商瞿に授易の意味とは取れない。然らば孔子が商瞿に易を傳へたといふ事實は千古の秘密と言はなければならぬのである。而も吾々の常識は、商瞿だけに易を傳へたといふ事は納得し能はない。何となれば七十子の徒の一人も、商瞿を除いては、易の傳授にあづからなかつたとするならば、孔子の授學、而して彼の諸國遍歴と、また七十餘君に求めたといふ重大な意味をも抹殺しなければならなくなつて來るからである。

孔子、晩にして易を喜み、象、繫、象、說卦、文言を序づ。易を讀むに韋編三たび絶つ。曰く、我に數年を假し、是の若くせば我、易に於ては則ち彬々たらむと。(孔子世家)鄭玄によると、孔子が衛より魯に歸つたのは哀公の十一年冬であるといふことである。その後は亦、出遊の志もなかつたかの如く、魯の史記に因つて「春秋」の筆を執つた頃を晩年と解し得るであらう。孔子作翼の是非は別として、周室衰へて王道亂離し、學問陵遲して人心危殆に瀕する時に

作易者其有憂患乎(易を作る者は其れ憂患有るか)

と嘆じた作者の心情を忖度するに及んで、畢竟、易は人生に於ける狭き門に非るなきかを思はしむるのである。

また他の重要な文献である漢書儒林傳は記して曰く

魯の商瞿子木、易を孔子に受けてより、以て魯の橋庇子庸に授け、子庸は江東の馯臂子弓に授け、子弓は燕の周魏子家に授け、子家は東武の孫虞子乘に授け、子乘は田何子裝に授く。秦の學を禁ずるに及び、易は筮卜の書たれば獨り禁ぜず。故に傳授する者絶えざるなり。漢興り、田何齊の田を以て杜陵に徙り杜田生と號す。東武の王同子中、雒陽の周王孫、丁寬、齊の服生に授く。皆、易傳數篇を著す。同、淄川の楊何、字は叔元に授く。元光中、徵されて太中大夫と爲る。齊の卽墨成、城陽の相に至り、廣川の孟俱、太子門大夫と爲り、魯の周霸、莒の衡胡、臨淄の主父偃、皆、易を以て大官に至る。易を言ふ者、之を田何に本づく云々と。

史記と漢書は、共に人名に於て先づ異なる點が目に着くのである。例へば、馯臂子弘が馯臂子弓であり、橋子庸疵が橋庇子庸であり、周子家豎が周醜子家であり、光子乘羽が孫虞子乘であり、田子莊何が田何子裝であり、斯の如く人名に相違が見られるばかりでなく、史記は橋子庸疵を漢の人として傳へ、漢書は橋庇子庸を魯の人としてゐる如きである。而して最も大きな相違點は、史記は楊氏易を擧げ、漢書は田氏易を擧げてゐる。斯の如き傳授の差異は何所から來たものであらうか。

本田博士の説の如く、

易の系譜に就ては史記の方が正しくあるべき筈である。殊に史記の作者、司馬遷の父の談は、易を楊何に授けたと云ふ事實は看過してはならぬ。

といふのを其の儘に承認するならば兎も角、史記が楊氏易を擧げるのを是認して、一切の問題は解決されたと

することが出来るであらうか。

史記と漢書の兩説對立の如きは、惟ふに、眞の傳統が既に當代に於て覺めることが不可能であつたことを却つて物語るものであらうと思ふ。

更に漢代、興學の風に乗じて諸學者輩出し、一世の偉觀たるを失はなかつたが、當時の學風、師より受けたまふを墨守して之を後學に傳へ、聊かも取捨するものがなかつた。所謂、一經傳授の風である。従つて易傳の如きは、本來、傳授系統のあるべきものでなかつたのが歴然たる系譜を有し、従つて亦、幸に一つの文献として存し得たのであらう。

何人も如上の如き易傳史を疑ふことは自由であるが、而して易傳史に見へる個々の人物の不思議な存在に拘はらず、それを反駁すべき何等の資料の提出されない限り、今日にあつては此の系列によつて研究が展開されて行く唯一の道なのである。

(1) 一九三〇年に出版さる。一九三五年増訂及び圖録出づ。

(2) 周の第六世なり。姓は姬。名は緊扈といひ、一に伊扈に作る。穆王の子なり。治績としては王の四年戊寅、密を滅せり。丙戌崩す。

(3) 一千卷あり。宋の太平興國二年に李昉等十四人、勅を奉じて撰し、同八年成る。天、時序、地、皇王、偏霸、州郡、居處、封建以下凡そ五十五門に分ち、引用書凡そ一千六百九十種の多きに上る。然れども其の中には今日全く佚して傳は

るざるもの多し。

(4) 帝王世紀は晋の皇甫謐の撰なり。說郛五九の内なり。明の陶宗儀、群書を収録し、說郛と名づく。郁文博及び清陶珽これに増補し百二十卷となす。郭は郭なり。衆説みな其の郭内にあるの義なり。

(5) 通鑑外記は十卷。目錄五卷にして宋の劉恕の撰なり。司馬光の資治通鑑の類書にして伏羲より周の威烈王二十二年までの史實を編年體によりて記述す。一本に外紀と記す。外記とは前紀といふが如し。劉恕は司馬光の通鑑編纂を助けて専ら魏晋以後の事跡を草せりと。また司馬光と共に宋の一祖四宗の實錄を集めて後紀を作れり。

(6) 皇甫謐は六朝、晋の人。安定の人なり。字は士安といひ、漢の太尉皇甫嵩の曾孫なり。年二十、學を好まず遊蕩度なし。後、叔母任氏の教へにより發憤す。郷人席坦に執て書を受け、勤勉怠らず。貧に居て自ら稼穡し、經書を携えて耕すと。遂に典籍百家の言を博綜するに至れり。沈靜寡欲にして高尚の志有り。著述を以て務となし、自ら元晏先生と號す。或は謐に勸むるに、名を修め交を泯くせんことを以てす。謐曰く、聖人にあらざれば就か能く出處を兼存せん。田里に居る、亦以て堯舜の道を樂むべし。何ぞ必ずしも世に接し事を利し、日夜鞅掌して然る後、名を爲さんやと。玄守論を作りて以て之に答ふ。後、魏郡、上計掾に召し、孝廉に擧げ、景元の初め相國辟すれども皆な行かず。その後、郷親、命に應ずるを勸む。釋勸論を作り以て志を通ず。武帝頻りに詔を下し敦く逼りて已まず。上疏して之を辭す。辭切にして言至る。而して遂に聽許せらる。かつて自ら表して帝に就きて書を借らんと請ふ。帝、一車の書を送りて之に與ふと。謐、病むと雖も披閱して息まず。葬送の制を著はし名づけて篤終といふ。太康三年卒す。時に六十八歳なり。

(7) 皇極經世書は十二卷。宋の邵雍の撰なり。元を以て會を經し、會を以て運を經し、運を以て世を經する故に經世と名

づく。邵子の條に説けども今少しく説明すれば、十二辰は一日を爲し、三十日は一月を爲し、十二月は一年を爲し、三十年は一世を爲し、十二世は一運を爲し、三十運は一會を爲し、十二會は一元を爲す。即ち一元は十二萬九千六百年なり。皇極とは尙書洪範の皇極と同じ。この書は唐堯の甲辰より、後周の顯德己未までの治亂興亡を卦象もて推説したるものにして、第一篇より三篇までは天地人を論じ、四篇より十篇までは天人の關係を論じ、十一、十二篇は動植飛走の事に及べり。宋以來その學を傳ふるもの多し。

(8) 鼎は烹調の器にして、圓なるは三足、方なるは四足。兩耳あり。夏禹が九州の牧をして金を貢せしめて鑄て九鼎を造りしより傳國の重器となれり。故に古、天下を得るを定鼎と稱す。左傳に昔成王定三鼎于郊鄭と云へるは其の例なり。赧曹(曹)鼎第二器は恭王十年五作と傳へらる。

(9) 獻侯鼎は成王の時の鑄と稱せらる。禽鼎、旅鼎、貝鼎、令鼎と共に有名なるものなり。

(10) 周の第二世なり。姓は姬。名は誦。武王の子なり。武王崩ぜし時、成王猶ほ幼なり。周公政を攝すること七年。長じて政を還す。初め武王鎬京を作り、之を宗周といひ、西都となす。將に洛邑を營まんとして未だ果さずして崩ず。成王その志を繼ぎて王城を築き之を東都と爲す。王、西都に居り諸侯を東都に會同す。周公、召公、王を相けて陝より西は召公これを主どり、陝より東は周公これを主とる。禮樂を興し制度を改む。民和して頌聲起る。交趾の南に越裳氏あり。三譯を重ねて來り白雉を獻ず。在位三十七年にして崩す。

(11) 宗周鐘は昭王十年の器と傳へらる。就中、虢叔旅鐘(舊虢叔大林鐘)と共に史實的資料として貴重せらる。

(12) 周の第四世なり。名は瑕。康王の子なり。王德欠微して周政始めて衰ふと稱せられ、在位五十一年、南巡して漢水に

溺死す。

(13) 殷は敦(たい)なり。黍稷を盛る器なり。故に周禮天官に曰く、若合^二諸侯^一則共^二珠槃玉敦^一とあり。古、會盟には槃を以て血を盛り、敦を以て黍稷を盛りしなり。形は腹旁に兩耳あり。耳には珥といふ垂れたる飾を施せり。また珥のなきものあり。蓋と三足もしくは四足あり。その蓋にも圈足もしくは四足ありて、之を裏返せば、地に置き得るなり。耳足は獸形に象も。通殷(敦)は穆王の五十五年の器と稱せられ、井鼎と共に穆王、莽京にありて漁を呼びしことを記し、史料として極めて貴重なるものなり。王國維は周初に諡法の無かりしことを通敦跋に考證せり。

(14) 周の第五世なり。名は滿。昭王の子なり。即位の時、年已に五十なり。穆王、王道の衰微を慨し、將に大いに犬戎を征して兵を觀んとす。蔡公謀父これを諫めて曰く、先王德を耀して兵を觀さず。夫れ兵は戢めて時に動く。動くときは則ち威あり。觀するときは則ち玩ぶ。玩べば則ち震るるなりと。王これを聽かず。遂に之を征して四白狼四白鹿を得て歸る。これより荒服の者至らず。在立五十五年にして崩す。

(15) 尙(いう)は禮器にして鬱鬯酒を盛る中尊なり。蓋と提梁と圈足を有す。灌尊に注ぎ、地に灌ぎて、神を降すに用ゆ。中尊とは祭祀の時、尙を中位に据える爲めなるべし。されば孫炎曰く、尊彝を上と爲し、彝を下と爲し、尙は中に居ると。匡尙は懿王元年の器と稱せらる。

(16) 周の第七世なり。名は懿。共王の子なり。王の元年、西戎、鎬京を侵し、十三年狄人また岐を侵す。十五年宗周より都を陝西の槐重(今の陝西省興平縣の東南約十支里)に遷し、これより王室衰微し、時人これを諷刺すと。在位二十五年崩す。

(17) 江中は清の人。字は容甫。江蘇江都の人なり。乾隆丁酉の貢生なり。家貧にして母に事へて孝なり。意を仕道に絶ち經を治むる漢の學を宗とす。曰く、國朝の諸儒百起し、二千餘年の墜緒を接ぐ。顧亭林、閻百詩、梅定九、胡臚明、惠定宇、戴東原の如き、皆た往を繼ぎ來を開くに足る。經學は亭林より始めて其の端を開き、河圖洛書は胡氏に至りて明に、中西の推歩梅氏に至りて精に、力めて古文を開く者は閻氏、専ら漢易を治むる者は惠氏、東原出づるに及び集めて大成すと。その古文を治るに韓歐を取らずして漢魏六朝を則とす。畢沅、兩湖の總督となりし時、聘せられて幕に入りしが、後、四庫全書を浙江の文淵閣に校す。乾隆五十九年、病みて西湖葛嶺の僧舎に卒す。年五十一。

(18) 説文に曰く、儒柔也、術士之稱、從レ人需聲と云ひ、鄒玄は三禮日録に曰く、儒之言優也、柔也、能安レ人能服レ人と。
(19) 釋名の釋典藝に曰く、經徑也、如_レ徑路無_レ所_レ不_レ通可_レ常用_レ也と。また説文に曰く、經、織從絲也、从_レ糸聲といひ、段玉裁注に曰く、織_レ之從絲、謂_レ之經、必先有_レ經、而後有_レ緯、是故三綱五常六藝、謂_レ之天地之常經_レと。

(20) 後に傳を出す。

(21) 後に解を出す。

(22) 史記儒林列傳に曰く、夫れ齊魯の間は、文學に於て古より以來、其の天性なり云々と。

(23) 周の國名にして、楚はまた荆といふ。蘇秦の言に楚、天下之強國也。西有黔中巫郡、東有夏州海陽、南有洞庭蒼梧、北有汾陰之塞郟陽。地方五千里、此霸王之資也と。今の湖南、湖北、安徽、江蘇、浙江及び四川巫山の以東、廣西蒼梧の以北、陝西洵陽の以南は古の楚の地方なり。

(24) 史記、項羽記に籍與江東子弟八千人渡江而西とあるのが最古の稱呼ならむ。魏の禧日錄雜説に曰く、江有南北而無東

西。金陵、豫章俱在江南。對豫章言、則金陵居江南之東。對金陵言、則豫章居江南之右。故宋以金陵、太平、寧國、廣德爲江南東路。以今江西全省爲江南西路と。楊子江以東の地を指して言ふなり。

(25) 國策燕策に蘇秦の言を引く。即ち、燕東有朝鮮遼東。北有林胡樓煩。西有雲中九原。南有呼沱易水。地方二千里。南有碣石雁門之隄。北有栗東之利。此天府也と。今の河北省は古の燕の地なり。

(25) 西紀前三五七年、齊の威王、位に即き在位三十八年にして宣王これに代り、宣王在位十九年にして、此の間、齊最も隆盛なり。而して威宣の二王、聘を厚くして天下の書生を招き、當時、齊に集る學者七十餘人と稱せられしこと史記、田敬仲完世家に見ゆ。而して齊の都城は今の山東省臨淄にして、都城周圍五十里、十三門を開き、南門を稷門と稱せしは、南門は淄水を隔て、稷山に對すればなり。齊王、學者に邸宅を與へ、稷門の下に住せしめ、列大夫とす。時人、彼等を呼びて稷下の士といひ、その學説を稷下の學と呼べり。

第十八章

秦の始皇帝の時、李斯の上奏によつて易が焼亡されなかつたといふ事實は、何を物語るものであらう。

恐らくは純粹な、餘りに純粹な性質に於て卜筮の書であつたが爲ではあるまいか。即ち十翼の如き思想的な易儀書を附随しない易は、それ自身としては一つの象徴として存在するにとゞまる。従つて之を政治的に處理する必要がなかつたと思ふ。しかしながら従つて、少くとも孔子の時代までは經典とは見做されなかつたであらうと想像されるのである。

現存する儒者の文獻で、易を引用してゐるのは、子思の殘卷と想像される禮記の中の表記⁽¹⁾、坊記⁽²⁾、及び緇衣⁽³⁾が最古のものである。漢書藝文志によると、子思子二十三篇とあるが、今は其の悉くは傳はつて居らない。梁の沈約⁽⁴⁾は、禮記のうち、中庸、表記、坊記、緇衣は子思子の中から抄出したものだといふ説を立て、鄭玄また中庸を子思の作といふ。而も學者は中庸の前半を以て真となし、前記三篇これに次ぎ、後半は秦代の附加ならんと考證して居るのである。中庸錯簡の説は留意されべきである。

武内義雄氏は以上の點に就き、次の如く斷案を下して曰く

そこで子思子二十三篇の殘卷、即ち中庸、表記、坊記、緇衣の四篇を分析して考へると、そのうち(一)中庸の上半は子思に近い文章だが、(二)の表記、坊記、緇衣の三篇は恐らく戰國末秦初の子思學派の人の手に成つた

もの、(三)の中庸後半は秦に入つてからの子思學派の人が中庸を解説した文章で、これらによつて子思學派が如何に變遷したかを見ることが出来る。さうして(二)の中に易が稱引せられ、(三)の中に「國家將に興らむとするときは必ず禎祥あり。國家將に亡びんとするときは必ず妖孽あつて、著龜に見はる」と説いてゐるのは、これ亦、易を尊重してゐる證據であるから、易が儒家の經典として取扱はれるやうに成つたのは、子思學派の徒から始まつたことで、恐らく戰國末から始まつて、呂不韋(6)の時代に流行し、次で始皇の時、李斯の上奏によつて詩書が焼却された際にも、易だけは卜筮の書といふ名目で厄を免れたので、遂に易によつて儒の精神を鼓吹しようとするに至つたものであらう。

このやうにして易經が儒者達の或る目的意識のもとに、次第に完成されるに至つたことは想像するに難くない。それ故に氏は更に述べて曰く

さうして孔子の作と稱せられる易の十翼なるものも亦この頃に至つて出来上つたものだと思へられる。さて易の十翼の中で最も古く見える部分は彖傳と象傳とであるが、これらの部分では、すべて「中」を標準として處世道徳を説明してゐる。これは中庸上半に「其兩端を執つて其中を用ふ」といひ、「中立して倚らず」など言つたのと同じ思潮であるから、彖象傳も恐らく子思學派の間から生れたものに相違ない。また十翼の中で最も發達した思想を示してゐるのは繫辭傳と文言傳とであるが、これらの部分に説かれてゐる内容は中庸の後半に酷似して居る。清朝の儒者魏源(6)は兩者を比較して庸易通義を書いてゐるが、よく其の類同を觀破したものと云つて好い。さ

うして我が東條一堂は繫辭問答に於て、繫辭傳成立の年代に言及して、此の中に絶えて詩書を徴引せず、専ら易によつて立論してゐるのは、恐らく詩書が排斥された秦代の述作たることを示すものであらうと言つてゐるが、これも亦、千古の秘密を開いた卓見で、此の點から考へても繫辭傳は中庸後半と同じ時代の作と見られる。

と。

私が、易それ自身は一つの象徴にとゞまると言ふ所以は、易を維持するものは別種のものの説明を必要とし、その必要を擴大したものが十翼だと解してゐるからである。その點に本田成之氏も觸れて居られ

乾。元亨利貞。初九潜龍勿用とあるが、其の潜龍とは何か。之は幸に文言に龍徳而隠者也と解してあるから分るが、坤の西南得朋、東北喪朋とある。何故に西南には朋を得て、東北には朋を喪ふか、是は乾鑿度の坤養之於西南方などの説明を假らねば理解することは出来ぬ。而も坤の六爻の爻辭とは何等の關係もなさそうである。其ほか蹇、解などの卦辭に何れも利西南とあるが一は艮下坎上、一は坎下震上で坤の卦ではない。西南を割出すには外の坎を借りて來るか（五體、旁通）乾鑿度の説明を誤りとせねばならぬ。蠱の先甲三日、後甲三日。臨の元亨利貞、至干八月有凶といふやうな突發的の言葉は如何にして説明するか。それよりも何故に他の卦には右のやうな方位やら月日が無いのか。若し方位や月日をトはうとするに他の卦が出たら如何にするか。今の易の中には全く其等の説明がない。その爲に後世、卦氣、納甲、飛伏などが出來て之を説明せやうとしたのである。（中略）是は何を語るかと云へば易なるものが從來の多くの卜筮、例へば後世の五行家、堪輿家、建除家、叢辰家、歴家

天人家、太一家といふやうな者の材料から一節一節を取り來りて編纂したので、其の根本材料が亡びた今日では充分説明することは困難であるといふ一事である。

と言つて居られるのは其の間の消息を語るものである。純粹型の易は種々な角度から、色々な材料を以て、説明して尙ほ餘りあるのである。本田博士は亦、易の成立年代を別の方法で述べられ

象も象も共に獸名から來たと云ふのも面白い。而して其等が何れも南方もしくは蠻夷の獸類であると云ふのも奇である。其ほか飛龍、潛龍などの龍の傳説、匪寇婚媾といふ奪略結婚の風俗もある。これ等の事實から少くも易は荆楚以南と交通が開けて以後に出來たものといふ假定も無理ではなからうと思ふ。

しかしながら此は強ち博士の説に贊同出來ないのである。何故なら、本質的な易とは關り無く、その説明材料だからである。それゆゑに博士も亦、荀子を引いて

荀子は齊楚の間を往來して楚に終つたとある。而して其の荀子の書に先づ出て居るといふことは、易が先づ齊やら楚に現れたといふことにもなる。其所で予は易の成立年代を甚だ大早計ではあるが孟子以後荀子以前と推定し、其の出來た場所を楚もしくは齊と推定するものである。

と言はれて居る。

とにかく儒の經典としては採用されなかつた易が、秦の燔書坑儒の厄を免れたのは、儒學の傳統が始んと斷滅に類する受難時代にあつて、易のみが傳統し得たと主張する學者も一方にはあるのである。史記や漢書の儒林傳

に立派な、然も明白な傳系が記載されてゐるといふ事實は、一面、それを物語るものでなくして何であらう。

項羽との決定的な戦ひに勝つて、秦の後を承けたのは漢の高祖である。高祖の時代は尙ほ内亂を附隨した統一への時代で、僅かに叔孫通が用ひられたのが知られてゐるに過ぎない。叔孫通は魯の諸王を徴して朝儀を再興したと傳へられてゐるが、かつて高祖が項羽の領地であつた魯の國を包圍した時、魯の儒生が其の戦亂の中で尙ほ誦讀して禮樂を習ひ絃歌の聲が絶えなかつたと言はれてゐるが、魯の國には嚴として儒學の傳統が守られてゐたことを語るのである。

漢が興つて、先づ儒學史に登場したのは易學者であつたといふ事は記憶されべき事實である。二世惠帝の時、始めて秦の惡法である挾書の律を除いた。其所に大きく映し出されるのは田何である。

易、孔子より六傳して、齊の淄川の田何に傳へられた。字を子莊（一に裝に作る）といふ。子莊、年老ひ、家また貧しく、然も道を守つて敢て仕へず。惠帝その草廬に行幸して易傳を受けたと傳へられてゐる。齊及び魯の學者は、田何を以て宗となし、易學中興の祖となすのである。

漢書儒林傳によると、田何には有力な五人の門弟があつたと記されてゐる。その一は瑯琊東城の人で王同、字を子中といふのである。彼の臨淄の主父偃は王同に師事して易を受けたものである。その二は洛陽の周王、孫である。その三は梁の人で丁寛、字を子襄といふのである。丁寛の傳は一種の小説的な説話を有する。即ち初め梁の項生、田何に従つて易を學んでゐた。時に丁寛は項生の從者であつた。易を讀むこと精敏、また其の素質は主人

の項生を越えてゐた。遂に志を立てて田何に學んだ。學業成つて田何は丁寛を謝す。丁寛、東に歸つた。田何その門人衆に謂つて曰く、易以て東せりと。斯くて丁寛は雒陽に至り、後、周王孫に従つて古義を受け、それを周氏傳と稱したといふ。漢の四世景帝の時、丁寛は梁の孝王の將軍となり、吳楚を距ぐ。これより丁將軍と號した。丁寛、易說三萬言を作ると。訓詁大誼を擧ぐるのみ。今の小章句これなりと。丁寛の傳、一つの不思議は田門の偉材を以て、尙ほ且つ同門の周王孫に古義を受けたといふ一事である。故に強ひて言へば丁寛は、周王孫から古文易を受けたのであらうか。當時は勿論、今文で書かれたからである。洛陽の周王孫に就ては詳しくは知られない。しかしながら若し古文易を究めてゐたとすれば、易學史上では甚だ重要な存在と言はなければならない。これは尙ほ研究の餘地があると思ふ。その四は齊の服生である。その五は淄川の楊何である。しかし嚴格な意味に於ては以上の四人で、楊何は寧ろ王同の易を受けたと見るべきであらう。

漢書藝文志には王氏易傳二篇、王氏易楊二篇、周氏易傳二篇、丁氏易傳二篇、服氏易傳二篇を擧げる他に、蔡公易傳二篇、韓氏易傳二篇を掲げてゐる。蔡公に就ては其の傳を詳にしないが、周王孫から易を受けたらしい。してみると是れ亦、古義易であらうか。藝文志に記される韓氏は韓嬰である。彼は燕の人で、三世文帝の時に博士となり、四世景帝の時に常山王の太傅となり、五世武帝のとき董仲舒と論争したことで有名である。易意を推して其の傳を作つたが、燕趙の人々は詩の方を好むた爲に、易の方は發揮されなかつたと言はれてゐる。しかしながら詩の内外傳數萬言は今日まで韓詩として知られてゐるところのものである。今は唯、韓詩外傳十卷が世に

傳はつてゐるに過ぎない。

楊何は武帝の建元五年、始めて易博士となり、徵されて中大夫となつた。史記の如く、易を言ふもの楊何に本くとあるが、蓋し出藍の譽があつたからであらう。

漢初、易學の盛行を想ひ見るべきである。この時代までは、所謂、孔子易を祖述するに忠實な頃で、従つて師法を尊び妄りに異説を樹てることをしなかつたのである。

然るに楊何の門から彼の有名な京房が現れた。京房、字を君明といひ、易を治して極めて災變に長ずと稱せられた。六十卦を分ち、更に直日事を用ひ、風雨寒溫を以て候となした。

初め、焦延壽に易を學ぶといふ、焦延壽は字を贛といひ、少黃令となり、治績大いに擧つて、その化、郡中及びぶと、事に坐して左遷されるに當り、人民等は闕下に詣りて之を留む。この故に詔して秩祿を増さしめらる。

漢の八世元帝の朝、三老となる。孟喜に従つて易を學び、これを京房に傳へたといふことである。時に焦延壽歎じて曰く、吾が道を傳へて以て身を亡ぼす者は京房ならんと。後、果して封事を奉り敢えて災異をいふ罪に因り、獄に下して棄市せられた。一説に元帝の時、魏郡の太守となり、秩八百石を領したともいふのである。日名靜一氏の注に見るに異説多く次の如くである。

漢書藝文志。梁丘賀の弟子京房の條、顏師古の注に、別に一京房、焦延壽の弟子にあらず、或は書字の誤のみと雖も、清代、討覈して同名異人とする者多し。(孫堂二十一家易註京房周易章句自序及び王先謙漢書補注周壽)

昌の説

則ち、一は太中大夫の京房にして、淄川楊何の弟子、梁丘賀に従いて易を受けしもの言なし。

二は元帝の時の京房、字は君明、本姓は李、吹律清翁方綱經義攷補正第一に據れば、吹當に推に作るべしと自ら定めて京氏と爲し、易を梁人焦延壽に受けしもの、今の所謂、京氏易なるものなり。(四唐提要術數二京氏易傳及び張惠言の易義別録)

今、京氏易傳三卷あり。四庫全書總目經部に入れずして子部術數類に入る。乃ち篇數已に古に同じからずと雖も各代藝文志其目あり、近く嚴可均の所謂、京氏の易亡んで而も亡びざるものか。(鐵橋漫稿)

案するに明の姚士績、釋文集解を採り、合するに京氏の注を以てし、陸氏易解一卷を爲る。今の四庫本京氏易傳三卷京房撰吳陸績注なるもの是なり。(易義別録周易陸氏)

蓋し漢唐以來、易を引いて災異を言ふもの皆な多く京氏易を擧げるのである。故に四庫全書總目提要に曰く、易の書たる天道を推して以て人事を明かにするなり。左傳記する所の諸占は、蓋し猶ほ太卜の遺法なり。漢儒、象數を言ふ。古を去ること未だ遠からず、一變して京焦となり、禱祥に入る云々と。

それ故に京房學派を禱祥宗とも稱ぶのである。禱祥とは陰陽災變の説をいふのである。王充の論衡にまた曰く、京氏、六十四卦を一歲中に布き、六日七分毎に一卦事を用ふ。卦に陰陽あり、氣に昇降あり。陽升れば溫、陰升れば寒。寒溫卦に隨つて至る。

漢書五行志に京房易傳の例を擧ぐ。今、煩をはぶいて兼坂普氏の引用を借用す。

潜龍勿用（乾初九爻辭）

衆逆志を同うし、至徳廻ち潜む。厥の異は風なり。其の風や、行て解けず、物長ぜず、雨小にして傷ふ。政悖り徳隱る。茲を亂と謂ふ。厥の風は先づ風いて雨らず、大風暴に起り、屋を發し、木を折る。義を守りて進まず、茲を迄と謂ふ。厥の風は雲と俱に起り、五穀の莖を折る。臣上の政を易ふ、茲を不順と謂ふ。厥の風は太森屋を發く、賦斂理せず、茲を禍と謂ふ。厥の風は經緯を絶ち、止めば即ち溫、溫まれば即ち蟲あり。侯封を專にするを不統と謂ふ。厥の風は疾くして樹搖がず、穀成らず、辟道利を思はず、茲を無澤と謂ふ。厥の風は木を搖さず、旱して雲なく、禾を傷ふ。公利に常にす、茲を亂と謂ふ。厥の風は微にして溫、蟲蝗を生じ、五穀を害す。正を棄て滯を作す、茲を感と謂ふ。厥の風は溫、螟蟲起り、人に益ある物を害す。侯朝せず、茲を叛と謂ふ。厥の風は恒なし。地赤にして變じて人を殺す。

また曰く

經に稱す、觀其生（觀卦上九爻辭）

言ふ心は大臣の義、常に賢人を觀、其の性行を知り、推して之を貢すべし。否らずば善を聞いて與せずと爲す。茲に不知と謂ふ。厥の異は黃、厥の咎は蠱、厥の災は不嗣。黃とは日上の黃光散せずして火の如く、然れども黃濁の氣あり、天下に四塞す。賢を蔽ひ、道を絶つ。故に災異至り世を絶つなり。

その説は甚だ神秘的の色彩を帯び、寧ろ妖易とも稱すべきか、しかしながら此の時代あたりから自説を提唱する者のあつたことは注意すべき點である。而も京房の末路を思ふ時に、易の方術たるの難易を憶念せざるを得ないのである。術數を以て方術とする人の、術數に弊れたるもの京房を以て古今第一と爲すのである。

丁寛以後の傳統に就ては漢書に詳しい。曰く

丁寛、同郡の碭の田王孫に授く。王孫、施讎、孟喜、梁丘賀に授く。是に繇て易に施孟梁丘の學あり。孟喜は字を長卿、東海蘭陵の人なり。好んで自ら稱譽し、易家陰陽災變を候するを得、作りて言ふ、師田生(田何)且に死せんとする時、喜の膝を枕にし、獨り喜に傳ふと、諸儒これを以て之を耀とす。同門の梁丘賀、疏通して之を證明す。曰く、田生、施讎の手中に絶す。時に孟喜、東海に歸る、安んぞ此の事を得んと。孟喜、孝廉に擧げられ、郎の曲臺署の長と爲る、病みて免ず。丞相の椽と爲る、博士缺く。衆人喜を薦む。上、孟喜の師法を改めたるを聞き、遂に喜を用ひず。喜、同郡の白光少子、沛の翟牧子兄に授く、皆、博士と爲る。是に繇て翟孟白の學あり。梁丘賀、字は長翁、瑯琊の諸人なり。太中丈夫京房に從つて易を受く。房は淄川の楊何の弟子なり。房出で、齊郡の太守と爲る。賀、使ち田王孫に事ふ。宣帝(七世)の時、策に應あるを以て近幸せられ、太中大夫と爲る。年老ひ官に終り、子臨に傳ふ。また入つて説いて黃門郎と爲る云々と。

また京房本傳に據れば、焦延壽かつて孟喜に従ひて易を問ふ。會々、孟喜死す。京房以爲らく、延壽の易は即ち孟氏の學なりと。翟牧白生肯せず、皆曰く非なりと。

また京房、災異に明らかなるを以て幸せらるるを得、石顯に讒せられて誅せらるると。

また京房、東海の殷嘉、河東の姚平、河南の乘弘に授く。皆な郎博士と爲る。是に於て易に京氏の學ありと。

易本來の本質論から觀察すれば、當然、異端邪説たるべき京房の説が、後に京氏易として傳統せられ、當世の時代人に受け容れられたといふ事實は、京房一人の罪でなくして、一面、古來よりの支那人の民族性に依據するものと言はなければならぬ。彼等の間に異常に發達した陰陽道の如き、等しく京房の妖易を育成せしめたと同じ濫床であつたことを指適して置きたい。

後に劉向が秘中の書籍を校訂した時、諸儒の易説を比較研究してみると、何れも田何、何陽、丁寛を祖として大義は同じであつたが、京房だけが災異を説いて異つてゐるが、これは焦延壽が隱士の易を得て、之を孟喜に托し、それを傳へたものだらうと述べてゐる。惟ふに師資相承を如何に重んじたかゞ解るのである。

(1) 表記は君子の儀徳表に見るるものを記せり。

(2) 坊は防なり。聖人禮を作りて民の淫邪に流るるを防ぐ所以を記せり。

(3) 緇衣は國風の篇名にして鄭武公を美する詩にして、其の賢者を好むの厚きを善みして其の稱するところの詩を以て篇の名となすなり。劉猷曰く、此の編は公孫尼子の作るころなりと。

(4) 沈約は南北朝時代の人なり。字は休文。吳興武康の人。少うして篤志、學を好む。濟陽蔡興宗、郢州たるの時、引きて安西外兵參軍兼記室となす。荊州となるに及び又、征西記室となす。齊の文惠太子に仕へて歩兵校尉となり、永壽省に

直して四部の圖書を授す。竟陵王政を秉る。沈約、文學を以て親まれ、范雲等と號して八友と稱す。梁の武帝、西郊に在り沈約と善し、禪を受くるに及んで尙書僕射に拜し建昌侯に封ず。性、酒を嗜まず、待過隆重なりと雖も儉素なり。宅を東田に建て郊阜を望む。かつて郊居賦を作る。久うして侍中を加へ、特に進んで中軍將軍丹陽尹に徙る。天監十二年卒す。沈約は傳ふるところ左目重瞳子、腰に紫痣ありと。書を愛し聚書二萬餘卷に及べり。

(5) 呂不韋は陽翟の人なり。秦の莊襄王の元年、丞相となり、文信侯に封せられ、始皇帝のとき亦、相たり。士を愛して食客三千人に至る。かつて客をして聞ところを著さしめ、十二紀、八覽、六論となし、名づけて呂氏春秋といふ。始皇帝の十年、相國を免ぜられ、蜀に遷されて自殺す。

(6) 魏源は清朝の人。字は默深。湖南邵陽の人なり。道光二十四年の進士にして、出でて興化縣に知となり、高郵州に遷る。文筆與術、掌故に熟し、最も輿地の學に精しく海國圖誌及び理武記を著はせり。また宋學を姚燧塘に學び、公羊學を劉逢祿に受け、今文學を主張せり。著すところの書古微十七卷、詩古微二十二卷、古微堂内外集十卷、及び皇朝經世文編百二十卷あり。

(7) 東條一堂は上總國夷隅郡八幡原村の人。名は弘、字は子毅、一堂と號す。通稱は文藏、幼名を和七郎といふ。逸見二郎の二男世々豪農長兵衛を家の通稱とす。祖を采女といひ、考を自得といふ。自得齋に精しく業を江戸に開き治術遠近に開え、著述多し。一堂十三にして志を立て京師に遊び、十八にして一旦江戸に父母を省して再遊す。才學日に長じ名聲京洛に震ふ。二十二にして江戸に歸り朝川善庵、羽倉簡堂、佐藤一齋、龜田綾瀨、尾藤三州と親交す。弘前藩津輕氏聘して督學となす。事務を建議すること一再ならざれども皆な報ぜず、遂に致仕す。よりて駒込に塾を開き湯島に移る。居宅、

昌平校に隣す。校の教官及び諸生入門する者多し。また神田お玉ヶ池に塾を移す。諸侯を始め旗下庶人その門に遊ぶもの多し。杉浦出雲守（御用側役九千石）その學、澹洛を主張し該博を以て聞ゆ。一堂の才學を聞き一日來りて大いに誦ず。一堂の説に服し此より師事す。福山藩阿部正弘侯これに師事し、輿を以て送迎す。且つ米十人口を給し塾生を養ふの資とす。その他、盛岡、庄内、沼津、敦賀、長島等の諸侯師事す。著述及び校訂する所の書凡そ三十餘部なり。性溫厚にして言語明晰、人に對するに禮讓甚だ謹む。安政四年七月十三日、病を以て歿す。時に年八十なり。

(8) 太一は大一また泰一また太乙に作る。荀子禮論篇（大一）莊子天下篇等に見ゆる者を最古とす。蓋し道家の思想に基き、或は陰陽の本原とし（呂氏春秋仲夏紀大樂章、易繫辭傳の太極等）、或は渾沌の状態に於て一切萬有を包有する宇宙の太初とせり。（淮南子詮言訓）また老子の道生一の一も同じなり。方士の占星的思想と民間に介在する天または上帝への信仰結合し、宗教的性格を帯ぶるに至れり。即ち北極星を中心とする考と、之を帝王に比擬する思想と結合し紫微宮（上帝即ち太一の居）の觀念を生じ（淮南子天文訓を始め、易秋緯合誠圖、漢合學、文耀鉤等の緯書）、一轉して北極星そのものを太一となし（春秋緯保乾圖、易乾鑿度註）、一方、紫微宮と五行思想と結合し天の五宮説は自ら五帝の上に立つ上帝（太一）を中宮に置くに至れるなるべし。漢の文帝時代に定めたる郊祀の禮（天の五帝を祀る）は、武帝以後は太一（泰一）を天神の最も尊き者として祀り、而も五帝を佐として其の上に立つものとして郊祀の對象となせり。（史記封禪書、漢書郊祀書、武帝以後歷代本紀）

(9) 豨は茅犀の名にして、犀に似て小角、善く吉凶を知る獸類にして、交州、廣州に存し、土人は猪神と云へり。

(10) 象は大荒の獸なりと。

(11) 漢南曰荊州。漢南其氣候剛。秉性溫梁故曰剛。荆疆也。釋名以爲取荆山之名。今、湖南、湖北、及四川舊選義重慶二府。

(12) 叔孫通は漢の薛の人なり。博士となれり。古禮を採り、秦の朝儀と雜へて高祖のために朝儀を起すに魯の儒生三十人を具したと傳へらる。之を始めて長樂宮に用ふと。諸侯王より以下、悉く禮敬せざるものなし。漢の高祖嘆じて曰く、吾今日始めて皇帝の貴きを知ると。叔孫通を拜して太常となし、金五百斤を賜ふ。太子太傳に移る。常に弟子と野外に於て緇叢をなして之を習ふ。

第十九章

既に漢書を引用した如く、丁寛子襄より易を授けられた田王孫、字は寶嬰は、三人の優れた弟子に易を授けた。

その一は施讎である。字を長卿といひ、沛の人である。師業を受けて後、博士となり、漢の七世宣帝の甘露年中、諸儒と共に五經の異同を石渠閣(1)に論議して、當代に重きを示した大儒である。

漢にあつて三世文帝は寧ろ刑名の學を好み、四世景帝また儒者に任ぜず、而も竇太后は黃老の術を好んで却つて儒學とは距離があつた。然るに十七歳にして即位した武帝の時に、俄然、儒學が起つたのである。その勃興の仕方は然しながら必ずしも儒學の價値が認められたといふ意味ではない。それは文化とは何日でも政治的意圖のもとに形成される性格を有する爲である。即ち武帝の同母弟たる田蚡は武安侯に封ぜられ、太尉に至る。田蚡、性貧慾にして而も尊大、天下の權を專にせんとす。始め黃帝盤孟の事など雜家(2)の説を喜びしも、武帝の儒學を好むところから帝に迎合せんとして儒術を好む。建元六年、丞相となるに及んで黃老刑名百家の説を黜け、儒者を多く招致す。乃ち博士官に弟子五十人を置き、毎歲、試を施す。これより公卿士大夫彬彬として文學の士多く、六世昭帝の時には博士弟子百人に増し、七世宣帝の末には倍增して二百人となり、八世元帝のときには千人、九世成帝の時には三千人となる。凡そ官祿にして漢書儒林傳贊に曰く、蓋祿利之路然也。

何故に五經に通ずることが、博士に値するほど尊崇されたのであらうか。漢書藝文志を見ると、吉の學者は耕し且つ養ひ、三年にして一經に通じ、其の大體に通じ、經文を玩するのみ。是故に日を用ふることも少くして徳を蓄ふること多し。三十にして五經立つとある。然らば三十年間にして漸く五經に精通するが、而も尙ほ其の上に充分に人格が出来上つてゐる人物でなければならぬ。これが眞の五經博士の姿なのである。此の博士となつた施讎の門下に張禹がある。張禹は魯論を傳へたと言はれてゐる。この論は、例の論語の孔子、五十以學易の字を「亦」と爲し、五十にして學ぶも亦大過なからむ、といふ意味に解釋するのである。

その二は孟喜である。彼は師法を改めて同門の梁丘賀に非難せられたが、惟ふに彼が師法を改めるには其の根據があつたと解すべきであらう。何故なら孟喜の父、孟卿は荀子の在住した蘭陵の産で、荀卿に倣つて孟卿と稱したほどで、異る系統の學派の易を受けたと思はれるのである。しかしながら彼の卦氣の論は後代にまで傳へられてゐるのである。卦氣消息とは何であるか。

孟喜は卦氣直日の圖を造り、卦氣の消息、即ち陰陽消長の運を説いたに始まる。しかしながら其の根據はもとより繫辭上傳から出發したもので、變通配四時（變通は四時に配す）といふイデオロギヤが中心思想である。

先づ坎、離、震、兌を四正卦として、四方に配し、次に六十卦を十二辰に割り當て、一辰ごとに辟、候、大夫、卿、公の五卦を立てたのである。辟卦は君で、雜卦は臣、四正は方伯である。

辟に屬するものは復、臨、泰、大壯、夬、乾、姤、遯、否、觀、剝、坤の十二卦にして、之を十二辟といふの

である。

四正は四時を司り、分つて二十四爻と爲し、即ち二十四氣を主るとなすのである。

六十卦の爻數三百六十、毎爻は六日七分を司る。

十一月、用事の卦を未濟、蹇、頤、中孚、復とす。

十二月は屯、謙、賤、升、臨。

正月は小過、蒙、益、漸、泰。

二月は需、隨、晉、解、大壯。

三月は豫、訟、蠱、革、夬。

四月は旅、師、比、小畜、乾。

五月は大有、家人、井、咸、姤。

六月は鼎、豐、渙、履、遯。

七月は恒、節、同人、損、否。

八月は巽、萃、大畜、賁、觀。

九月は歸妹、无妄、明夷、困、剝。

十月は艮、既濟、噬嗑、大過、坤と爲す。

卦氣、中孚に起る。これを冬至の始めとする。

孟喜これを京房に授け、十二辟卦を以て十二月の卦主とす。即ち

復一陽……子、十一月。

臨二陽……丑、十二月。

泰三陽……寅、正月。

大壯四陽……卯、二月。

夬五陽……辰、三月。

乾六陽……巳、四月。

姤一陰……午、五月。

遯二陰……未、六月。

否三陰……申、七月。

觀四陰……酉、八月。

剝五陰……戌、九月。

坤六陰……亥、十月。

陽は子に起りて巳に止み、復に始まりて乾に終る。陰は午に起りて亥に止り、姤に始まりて坤に終る。

(この月立は夏正に擴り、夏正の正月は周正の三月に當る)

その三に梁丘賀がある。山東諸城の人である。一説に京房にも從つて易を學んだと傳へられる。智謀に富み、心計を能くするを以て武騎と爲る。七世宣帝、京房の門人中より此の偉材を見出し擧げて郎と爲したといふのは果して眞實であらうか。丘賀また小心周密、能く宣帝の心に協ひ、官、少府に至るとあるが、田王孫の門下の逸材として拔擢されたからであらう。漢書梁丘賀本傳によると、麒麟閣(一)に其の肖像を描れる●名譽を得たと、宣帝及び八世元帝の間、この施讎、孟喜、梁丘賀の三大家は、いづれも學官に擧げられ、家學として頗る隆盛を極めたのである。武帝の時に立てられた五經博士(二)の四家から、分れて十四家(三)を生じ、彬々たるものがあつたことが漢書藝文志によつて知られて居る。

施讎は亦、優れた二人の後繼者によつて知られてゐる、即ち既述の如く一人は張禹である。張禹は彭宣に傳へ、施家の家學に張彭の學ありと喧傳されるに至つた。張禹、字は子文、河内軹の人である。博士となつて子弟に教へるに當り、身は廣大な邸宅に居り、前堂では生徒に教授し、後堂は經竹管絃を列するといふ有様であつた。門弟の中で戴崇といふ者を格別に親愛し、彭宣はその卓抜した學才を賞しながらも心に疎んじたといふ。即ち戴崇が來れば後堂に引き入れて共に飲食し管絃を樂しむといふ風であつたが、彭宣に對しては便座に於て聖典を講義するに止まり、夜食に際しては一肉扨酒といふ粗餐を供するに過ぎなかつたと傳へられてゐる。惟ふに張禹は彭宣の學識を嫉妬したものであらう。しかしながら張禹の優れた學者であつたことは否定することが出來な

いのである。元帝、子文に詔して太子に論語を授けしめたが、太子、位に即き九世（成帝）の世となるに及んで、師傳の禮を盡されたといふ事である。金華殿に於て鄧寬中（つち）と共に書を講じたことは有名である。後に相に機し、安昌侯に卦ぜられるに至つた。

彭宣は師の張禹に疎んじられたとは云へ、子文は彼の學士と人格をまで没倒して、捨てたといふ謂ではない。元帝の時、子文は彭宣を推擧して曰く、經に明かに、古を傳へ、威重ありて、政治に任すべしと。依つて召されて右扶風に叙せらる。此に於て施家の門下、悉く顯榮を得て、その學風また天下に鳴るの盛況であつた。

四庫全書總目に曰く

易はもと卜筮の書、聖人、天下の理を推究して數に即きて以て象を立つ。後人、周易の象を推究して數に即きて理を明かにす。義文周孔の本旨、是の如きのみ。その後、象、數、理、岐れて三家となる。而して數また岐れて數家となる。孟喜焦贛京房以下その法殫く擧ぐべからず。而して易、是に於てか愈々雜なりと。

漢儒のみ、能く師法を守つたといふ傳説は、後の學徒が區々の説を樹立するうちに多分に粉飾されて、漸く光輝ある歴史と化さんとしたのである。何人もそれを肯定しないが、既に古易の編次さへ殺亂錯雜した今日、それを否定する根據も亦亡くなつたのである。一つの例を挙げれば、易に經の字を附したのは何人であるかといふことは分明しないのである。子夏の傳に分つて上下二篇と爲す、といふ記述があるが、これは篇であつて經ではないのである。前漢の孟喜本に、上下二經に分つとあるのを見ると孟喜以前、既に易經と名付けて通行したことが

想定されるのである。⁽⁸⁾それ故に漢代に入つて興學の風に乗じ、當時の儒家が之を尊んで經典と爲したであらうと迄は想像し得るのである。さうして漢儒が墨守したといふ易學は、そのやうな微細な諸問題をも含めて、湮滅して仕舞つたのである。

しかしながら漢儒が、先代の秦火の災厄を想起すればするほど、必死となつて師法を墨守し、その純粹さを保持するに努めたであらうことは充分に想像するに難くない。従つて強ひて言へば孔子易の傳統は、漢代まで兎も角も無難な姿で保存されたとも言ひ得るであらう。

先にも記した如く宣帝、元帝、成帝の三朝に歴史した劉向は、幾多の書を校して易説を考へ、諸易家の説は皆、田何、楊何、丁寛を祖とし、大説略同じ。即ち施孟梁三家の易説を對照し比較せば、時に無咎悔亡の字を脱去するあるのみ、と言つてゐるが、しかしながら亦、同時にこれは漢代の易學の有の儘の相を正しく記述したものと、甚だ重要な言葉なのである。

けれども時代は何時までも漢代の盛時を持続し能ふものではない。従つて時世の動搖は、當代の文化に直ちに反映したし、易學も亦、その影響を脱却し得るものではなかつたのである。

綏和二年三月、成帝、暴かに殞す。この頃より心ある人は漢の前途に不安を抱かずにはゐられなかつた。即ち王莽の勢威漸く加はつて來たのである。それより六年後には王莽政を乗り、翌年には自ら太傅となり、安漢公と號した。やがて元始五年十二月、帝を弑し、始初元年十二月、自ら新皇帝と稱した、之を新(國號)といふ。

王莽、天下を纂奪するや西漢末の諸儒これに阿諛する者多く、揚雄、劉歆の如きすら節操を捨て、之に媚び、
氣慨のある者は地を掃ふて無く、従つて名教また振はなかつたのである。

然るに劉秀當て爲天子といふ織緯は、たとひ迷信的なものであつたにせよ、劉演の弟たる一青年劉秀を奮起
せしむるに足るものがあつた。新の地皇三年、兵を春陵に起すや平林の兵皆な従ひ、翌年六月、王莽の軍を昆陽
に大いに破る。同年九月、王敗死して新國は滅亡した。

六月、即位して元を建武と改め、漢の中興の大業を成就したのは此の劉秀即ち光武帝である。これより以後を
史家は東漢と呼んで居る。

西漢の末、この動亂を避けて林藪に隠れた儒者達は、光武帝の中興に當り、悉く洛陽に戻つて來た。これより
亦儒學大いに興る。即ち易にあつては東漢の世、右の三家の家法を傳へて並び立つもの多かつた中に、南陽育陽
の人で注丹がある。注丹は字を子玉といふ。孟氏易を傳へて専心教授し、門下生數百人と號す。光武帝の建武の
初め、博士となり、大鴻臚に歴遷す。易通論七篇を作つた。世に注君通丹と稱せられ、學義研深、易家これを宗
とした。

また鮐陽鴻がある。字は孟孫。中山の人であるが、これ亦、孟氏易を以て知られて居る。二世明帝の永平中、
少府となつた。

また任安がある。字は定祖。少にして學を好み、隱居して利名を營まず。時の人これを稱して任孔子と言つた

とある。かつて史記の魯仲連傳(リ)を讀みて嘆じて曰く、性は潔白を以て怡となし、情は志を得るを以て樂となす。性怡に神道を體するを得て而して憂へず、彼棄て我取るも與に時を争ふなしと。遂に身を終るまで仕へなかつた。時の人これを號して任徵君と言つた。

また景翬がある。字は漢伯。廣漢洋潼の人である。少くして師に隨つて經學を修め、七州の地を遊歴して見聞をひろめ遂に經術に明るくなつた。還つて河洛に住み、禮略、詩解、月令章句を著し凡そ五十餘萬言を編むと。易に於ては施讎學を傳へて易說をなしたと傳へられてゐる。屢々、災變を救ふの術を上書したといふ。

また劉昆は、前漢の平帝の頃の人である戴賓(ト)から施氏易を受け、それを教授した。劉昆、字は桓公。蘭陽の人である。時に門下五百餘人といふ。王莽、漢の帝位を篡ふや、昆は河南の負犢山中に匿れた。光武帝の中興に際會して、江陵令となる、縣に連年、火災が絶えなかつた。昆が火に向つて叩頭すれば、能く雨を降らし、風を止むと。やがて弘農太守に遷つた。これより先、轍駟驛道に虎多く行人を惱ませた。昆、政を爲すこと三年、仁化大に行はる。虎その子を背負ひて河を渡つて遁ると。帝これを異なりとし、徵して光祿勳と爲す。而して召して問ひて曰く、前に江陵に在りては風を返し火を滅し、後に弘農に太守となりては虎逃げて河を渡る。何の徳を行ひてか是の事を致すと。答へて曰く、偶然のみ。左右皆な其の質訥を笑ふ。帝歎じて曰く、これ長者の言なりと。顧み命じて諸を策(シ)に書せしめたといふ事が傳へられて居る。

梁氏易を傳へた人に范升がある。光武帝の時に博士と爲り、左氏春秋の失を奏すること凡そ十四章。一家の見

を藏した學者である。その家學を門弟の楊政に授けた。楊政は字を士行といひ、京兆の人である。京師の諺に説經鏘楊子行と。その面目を察すべきである。かつて師の范升、事に連坐して獄に下つた。楊政は師の子を抱き、車駕を路傍に擁して、狀を具陳して自訴した。護衛の士これを防げたが、哀泣して訴へ、遂に帝の心を感じしめ、范升は許されたといふ挿話がある。

また郡陵の人、張興がある。同じく梁丘賀の易説を傳へた。孝廉に擧げられ、太子太傅に累進した。二世明帝、屢々これを訪ふて經術を聞く。聲稱著聞して子弟の門に遊ぶもの前後萬人に至ると。その子魴また家學を能くし、位、張掖屬國尉に至る。

また戴憑がある。字は次仲。平輿の人である。京房易を學び、明經に擧げられ、光武帝の頃、徵されて侍中に拜す。建武中、正月元旦の朝賀に、帝、群臣を召して能く經を説いて更に相ひ難詰せしめ、義通ぜざる者あれば、即ち席を奪つて、通ずる者に益す。戴憑は遂に五十餘席を重ね坐すと。故に郡の人これを語り傳へて、解經不窮戴侍中といふに至ると。

また南陽の人、魏滿。字は叔牙も京氏易を傳へて生徒に教へた。明帝の永平中、弘農の太守となつた。

また孫期がある。字は仲或。濟陰成武の人である。京氏易を傳へ、また古文尙書を修めた。家貧なれども仕へず、母に事へて至孝であつた。豚を大澤中に牧して以て孝養を盡したとある。従つて孫期に學ぶ者は、皆な經を用ひて於て習つたと傳へられてゐる。時に黃巾の賊起る。⁽¹²⁾孫期の村里に迫る。能かも賊等約して、孫先生の舍

を犯すことなからしむと。郡、方正に擧げ、吏を遣はし羊酒をもたらしめて期に請ふ。期、豚を追ふて草に隠れて出なかつたといふ。司徒黃琬、特にこれを召せども行かず。遂に家に終ると。

然もひとたび西晋の亂の大暴風に遇ふや、施家と梁家の家法は脆くも亡滅し、孟家の家學は、昔あつて師無きに至ると、隋書經籍志は嘆する有様であつた。然かも京房易も亦、西晋に及び湮滅したものと觀察して好いのである。

漢代の易學が斯の如く雲散霧消したことは惜しむべきことには相違ないが、戰爭のもたらす苛責なき破壊は、また次の新しい文化形態を生む母胎であつたのである。従つて吾々の知れる限りの易學が、必ずしも單に殺亂錯雜の結果に基いて雜駁に流れたものではなく、却つて發展的に派生し解消し行つたとも言ひ得られるのである。何故ならば次の時代に於て、漢易の中に潜むであつたところの、それに對立する新しい形態の易學の萌芽が花を開いてゐるからである。

(1) 未央殿の北にありし秘書を藏する閣の名なり。

(2) 文帝の夫人なり。史記卷四十九外戚世家に曰く、竇太后好黃帝、老子言。帝及太子諸寶不_レ得_レ不_レ讀_二黃帝、老子_一章_中其術_上と。竇太后ある時、博士轅固生を召して老子の書を問ひしに、轅固生は此れ家人の言ならんのみと答へ、太后の激怒を買ひしこと史記卷百二十一、儒林列傳に見ゆ。

(3) 九流の一なり。諸家の説を兼收して立論せり。漢書藝文志に曰く、雜家者滄出_二於議官_一兼_二儒墨_一合_二名法_一とあり。鹽

子、尸子、尹文子、鷓冠子、公孫龍子、鬼谷子、呂子春秋、淮南子、論衡、顔子家訓、管子、劉子、化書、子華子、郁離子、鳴道集說、空同子、於陵子、叔苴子の類これなり。

(4) 武帝時代に蕭河の造れる宮殿にして、武帝、麒麟を得し時に造らしめしといふ。宣帝の甘露三年、匈奴の呼韓邪單于、漢に來歸し即ち匈奴の患去りたるを以て、股肱の臣十一人の肖像を描かしめ、之を麒麟閣に掲げて官爵姓名を記す。その人は即ち大司馬大將軍博陸侯霍光、衛將軍富平侯張安世、車騎將軍龍雀侯韓增、後將軍營平侯趙充國、丞相高平侯魏相、丞相博陽侯丙吉、御史大夫延平侯杜延年、宗正陽城侯劉德、少府梁丘賀、太子太傅蕭望之、典屬國蘇武なり。

(5) 漢書儒林傳に曰く、武帝立五經博士と。而して初書唯有歐陽、禮后、易楊、春秋公羊而已と。武帝の建元五年のことなり。五經といひて四のみ舉ぐるは、詩は文帝の時、既に韓嬰ありて、韓詩を以て博士となり、景帝の時に申公の弟子王臧が魯詩を以て博士となり、轅固生は齊詩を以て既に博士たりし故なり。

(6) 易(施讎、孟喜、梁丘賀、京房)

書(歐陽生、夏侯勝〔大夏侯〕、夏侯建〔小夏侯〕)

詩(魯詩、齊詩、韓詩)

禮(大戴禮、小戴禮)

春秋(公羊傳)(嚴彭祖、顔安樂)

(7) 鄭寛中は陵の人なり。張三附を師として小夏侯の學を傳ふ。成帝の時、關内侯に封ぜらる。卒するに及んで谷永、上疏して曰く、鄭寛中は顔子の美質にして商偃の文學を包み、儼然として五經の妙論を統べ、師傳の顯位に立つ云々と。

(8) 先秦時代、聖賢の書に經の文字を用ひしは荀子なりと。即ち勸學に曰く、學惡乎始、惡乎終。曰、其數則始乎誦經、終乎讀禮と。また解蔽に曰く、道經曰、人心之危、道心之微と。

(9) 魯仲連は周代、齊の人なり。時に秦、趙を圍むこと急なり。魏、新垣衍をして趙に説き請ふて秦を帝とせしむ。仲連、衍に見へて曰く、彼れ即し肆然として帝と爲らば、連、東海を踏んで死せんのみと。秦軍これを聞き退くこと五十里、衍曰く、吾今乃ち仲連が天下の士たるを知ると。平原君、遂に千金を以て仲連が壽を爲さんと欲す。連笑ひて曰く、天下の士に貴ぶ所の者は人の爲に難を排し紛を解くに在り、何ぞ報を望まんやと。その後二十年、齊の田單、策を仲連に問ふて狄を下し、また聊城を破り、歸りて齊王に言ひて仲連を爵せんと欲す。仲連これを嫌ひ海上に逃れて曰く、吾れ富貴にして人に屈せんよりは寧ろ貧賤にして世を輕んじ志を肆まにせんと。

(10) 戴賓は沛の人なり。かつて易を同郡の施讎に受くと。

(11) 策は簡なり。その制、長さ二尺、短きは一尺なり。一札をとれば簡となし、諸簡を連れば策と謂ふ。古は紙筆無し。凡そ書字に多少あり。一行盡すべきは簡に書し、數行盡すべきは方に書し、方に容れざる所は策に書すと。

(12) 後漢末の内政の紊亂、風俗の弛廢、民衆の生活苦より反亂を生ず。河北鉅鹿の張角、この情勢を利し妖術を以て民を惑し、十年にして信徒數十萬を得。靈帝の中平元年、信徒を率ゐて兵を擧げ、その勢ひ青州、徐州、冀州、荊州、揚州、兗州、豫州の八州に亘り、官府を燒き村落を劫掠し、旬月にして天下の大亂となれり。張角は三十六方(方は將軍)を置き、自ら天公將軍と號し、弟寶を地公將軍、弟梁を人公將軍と稱し、衆徒は黃巾を着す。三月、帝、何進を大將に任じ都亭に屯して京師を鎮め、函谷、大谷、廣成、伊闕、轅轅、旋門、孟津、小平津の八關に都尉を置きて守らしめ、黨人

を大赦し、人心を慰撫す。北中郎將盧植を遣し、精兵を發して河北の張角を討ち、左中郎將皇甫嵩、右中郎將鄭朱儁をして潁川の黃巾を討たしむ。同月南陽の黃巾張曼成等郡守を殺して起つ。五月、朱儁まづ賊將波才に敗れ、波才は進んで皇甫嵩を長社に圍む。皇甫嵩、大風に乗じ計を以て賊を破り、曹操、朱儁と力を合せて追撃し、首を斬ること數萬級なり。更に追ひて汝南、陳國の黃巾を討ち悉く三郡を定む。南陽の太守秦頡、張曼成を斬る。盧植は屢々、河北に張角を破るも小黃門左豐の説により免職せらる。東中郎董卓これに代るも功なくして罪せられ、皇甫嵩再び張角を討つ。時に張角病歿し、冬十月、皇甫嵩は張梁を廢宗に討ち、首を斬ること三萬、河に溺るる者五萬なり。十一月、張寶を下曲陽に撃ち首を斬る十萬なりと。朱儁も潁川より南陽に轉じ、賊趙弘、韓忠を破り、進んで宛城を落す。かくして各地の賊を鎮壓せり。然るに其の後、五年、餘黨郭大、西河に兵を擧げ太原、河東を侵し、また益州に同類馬相の亂あり。獻帝の初平三年、青州に黃巾の殘黨百萬立ちて兗州を侵す。曹操これを破りしも、後、無數の亂賊起るに至れり。

第二十章

漢書、顏師古の注に、上下經及び十翼であるが故に十二篇といふ。惟ふに、それは今文易經を指すものであらう。既に述べた如く漢代は今文の全盛時代で、博士等また今文經を定本としたからである。

上繫に二篇の策萬有二千五百二十といひ、漢志また易の六爻を重ねて上下篇を作るとあるが、その上下二篇は所謂、上下經を指したものと解釋出来ないこともない。

易の十翼は、もと大傳と稱したといふことは、太史公自序張曼⁽¹⁾の注によつて既に知られてゐるが、顏師古また經大傳を總稱して十二篇と言つてゐる。

今文易が漸く漢の學官に取り立てられるところとなり、明らかに官學派が樹立されつゝある反面、吾々は眼野の遺賢に注ぐ必要に迫られる。即ち古文易經の先覺者として、吾々は漢の初めの頃、東萊の費直⁽²⁾その人を擧げずにはゐられないのである。費直は字を長翁といひ、膠東の人である。易を治め、筮に長じた。仕へて郎と爲り、單父令となつた。著すところ象象繫辭十篇、文言解説上下經等があつたが、遂に學官たることを得ないので、その家學は唯、民間に傳へられた。後に劉向が中古文の易經を以て費直の易を校書研究するに、全く古文と同じであつたと漢書藝文志は記してゐる。これは當時に於ては全く驚嘆すべき學的革命であつたに相違ない。

費直は眞を古に求め、その最も得意とするところは卦筮に長じ、章句なく、唯、象、象、繫辭の文言を以て上⁽²⁾

下經を解説したもので、如くである。漢書儒林本傳によると、當代の學風に嫌厭たる費直は、ひたすら復古の精神に立脚して、當時、何人も顧みなかつた方法によつて、孔子易の純一無雜さに接近しやうとしたことを想像することが出来るのである。惟ふに其の當時にあつて、散佚した古書を蒐集することが既に容易でなかつた上に、漢代に及んでは周代を隔ることも遙かで、従つて言語や文字の上にも著しい變遷があつて、古書の文義を知る上に頗る困難な時、斯の如き野の遺賢が先づ試みたといふことは特筆するに足るのである。

費直は後、瑯琊の田横（前漢書には横を璜に作る。案するに齊の田横とまぎらはしければ璜が宜しかるべし）に傳ふ。田璜の傳は不詳である。

また沛の人、高相。字は子康も費氏易を傳へたと言はれてゐるが、しかしながら高相は章句を亡みし、専ら陰陽災異を説き、その易學は丁將軍（丁寬）から傳統したと自稱した點から考へると、必ずしも高相は費直を學んだとも思へないのである。高相は蘭陵の母將永に授け、高氏易を唱へた。

後漢書儒林傳によると、高氏易は頗る民間に行はれたもので、如く、費直の古文易は未だ尙ほ俗耳に入り難かつたのを想像し得られるのである。従つて費直の折角の努力も、その門から却つて古文易を捨離して、今文易に近付うとする異端者を出したといふのも、それは費直の罪ではなく寧ろ當代の學風を反映したものと解釋すべきであらう。しかしながら宋の王應麟の玉海卷三十五、漢易十三家、費氏の原注に曰く

費氏、最も近古にして最も排資せらるゝも、千載の後、巋然として獨り存す。豈に天に非ずや。

とある知己の言を見る時、學を志す者として亦、瞑するに足るを思はしむるではないか。

然るに後漢の時代に入ると、勃然として費氏易の存在が顯揚されて來た。即ち蒼梧廣信の人、陳元がその先聲となつた。父の陳欽は春秋左氏傳を修め、一家の見を有してゐた。左氏春秋の遠く蒼梧に在るは即ち陳欽によると三輔決錄は記してゐる程である。武帝の時、用ひられて猶難將軍に至つた。子の元また父の業を受け、父の任を以て郎と爲り、即ち上疏して左氏の學を學官に立てんことを請願した。而して遂に武帝の容るゝところとなつたのである。前にも述べた如く漢代官學としての春秋は、今文家の手中にあり、公羊傳は公羊高の傳述に成り、これを公羊壽に傳へ、次で胡毋生に及び、董仲舒に至つて大成した。また穀梁傳は漢に入つて七世宣帝の世、瑕邱公に至つて世に行はれるやうになつた。然るに古文春秋は久しく民間の好學の士の間に保たれ、左丘明より曾申、吳起、虞卿、荀卿と相傳し、張蒼に至つて賈誼に授け、賈誼は左氏傳訓詁を著して其の位置の擡すべからざることを示したのである。その後、劉向、その子劉歆の父子は朝廷の秘書を整理するに當り、劉歆は古文左氏春秋傳を發見し、現に漢朝學官の傳へるものは正確を缺くところ多いものがあるので、十世哀帝に願つて古文經書の學を學官に立てられんとしたが、今文學者側に妨げられて仕舞のたのである。西漢末までの學的分野は斯の如き様であつたが、東漢に入つて勃然として古文學が起り、賈逵、服虔の學、或は西州に於て古文尙書を發見した杜林の努力等が、斯學を甚だ刺激し、新の王莽の世に及んで初めて學官に立てられるやうになつたのである。既に古文學を父から受けた陳元は、古文易を祖述したであらうことは極めて自然であつたのである。従つて彼は

今文易の隆盛時代にあつて、費氏易を家學とした因縁は、實は彼自身の學的傳統から結果したものであつたことに着目しなければならぬ。

更にまた費氏易を大ならしめるに力あつたのは開卦の人、鄭興の子、鄭衆であつた。字は仲師といふ。父の興は公羊學を修めた人であつたが、また左氏春秋にも兼ねて通達してゐた。興は劉歆と親しく、共に章句訓詁を條例し、三統曆を校書したので知られて居る。召されて大中大夫となつた。子の衆は後漢二世明帝の永平の初め、明經を以て給事中となつた。匈奴に使して節を持って拜禮をしなかつた。單于大いに怒り之を脅服せんと欲した。然るに鄭衆は劍を按じ自ら誓ふ。單于これを壯として許し歸した。後ち還つて上言して曰く、臣、誠に大漢の節を持ち、氍毹に對し獨り拜するに忍びずと。その人物を想見するに足る。彼も亦、陳元と等しく父より古文學を受け、従つて古文易たる費氏易の價値を宣布するに功があつたのである。

斯の如き時代を背景として馬融が出現した。字を季長といひ、扶風茂陵の人である。伏波將軍馬援(18)の族孫で漢の名族の末裔である。その人爲り、容姿端麗にして一代の俊秀であつたと傳へられる。初め京兆の掣掣(19)に従つて學び、師の娘と婚す。博く經史に通じた。永初二年、權勢並ぶなき鄧太后(20)の兄弟鄧騭(21)に招れたが地位が不満で拒絶した。同四年、校書郎中を拜し、東觀にいたり秘書を校するの職にあつた。時に鄧太后、朝に臨み、權貴六世安帝を凌ぐの有様であつた。鄧太后甚だ儒術を尊崇し、爲に俗儒腐儒の類ひ、太后に媚びて、文德興るべく武功廢すべしとなし、舉世、滔々として文弱に流れた。その極、遂に蒐狩戰陣の法を止めて仕舞つたのである。然る

に是を以て邊境寧日安きの日なく、狡賊その備への無きに乗じて縱横に攻掠を恣にし、漢の勢威、地に墮ちるの慨があつた。馬融、座視するに忍びずとなし、曰く、文武の道は聖賢墮さず、五才の用は廢すべきもの無しと。即ち廣成頌を作つて上り、以て諷諫した。この爲め鄧太后の怒りに觸れ、遂に禁錮せらる。十年徴されず。

太后崩じて安帝の政を親らするに及んで、召されて郎署に還り、河間王の厯長史となつた。時に帝が東巡した。馬融、即ち東巡頌を奉り、認められて郎中となる。安帝の後、北郷侯（後の七世少帝）政權を執つた時、退いて郡功曹となる。八世順帝の陽嘉三年、郭舉(22)に擧げられ、復して議郎に拜す。十一世桓帝の時、南郡太守となつた。これより先、大將軍梁冀(23)の旨に忤ひ、梁冀の忌むところとなつた。梁冀は卑劣にも馬融が吏として貧濁であると奏し、官を免ぜられ、朔地に徙された。彼は失望して自殺を決したが未遂に終つた。偶々、赦免されて再び議郎に拜せられたが、これより意を官に絶ち、東觀に在つて著述をして生涯を終つた。延熹九年卒す。時に年八十八歳である。馬融の學、諸子百家に亘り、易、詩、三禮、尚書、孝經、論語、列女傳、老子、淮南子、離騷に注す。かつて左氏春秋を注せんとして、賈逵、鄭衆の注を參見して曰く、賈逵は精しいが博くない。鄭衆は博いが精しくない。然し兩者で充分なりと。而して自ら春秋三傳異同説を著し、史記の訛謬を校正す。その他、賦頌、碑誄、書記、表奏、七言、琴歌、對策、遺令等二十有一篇ありと傳へらる。その門に集ふ子弟千を以て數ふといふ。唯、廣大なる邸宅に住み、美服を身に纏ひ、常に高堂に座して紅紗帳を施し、前に生徒に授け、後に女樂を列す。弟子次を以て相傳へ、その室に入るもの少しと傳へられ、このやうな私生活の故に世評は馬融を決し

て賞譽しないのである。しかしながら馬融の門から盧植、鄭玄の雄を出した事實は、馬融の偉大さを物語るものであらう。

盧植は馬氏易に關する限り、鄭玄ほど重要な役割を演じたとは言へない。彼は涿郡の人で、字は子幹といふ。身長八尺二寸。聲は洪鐘の如くであつたと傳へられる。馬融の門に遊ぶ時、師はその左右に數多の美女を侍す。盧植は數年間その師の門に出入しながら、遂に一度も美女に一盼しなかつたといふ。馬融は盧植の潔癖を敬してゐたものゝ如くであつた。斯くて諸子百家に通じ、官は累進して尙書の顯榮を致した。時に後漢最後の獻帝の時、逆臣董卓、漢室を凌虐して遂に廢立を行ふ。滿廷、唯、諾々として拱手するに過ぎない。その中で獨り盧植のみ、斷乎として抗議した。董卓怒つて之を殺さんとす。時に議郎彭伯といふ者、盧尙書は海内の大儒、今、之を害せば天下まさに震怖せんと。即ち董卓その害を加ふるを止め官を免す。よつて盧植は上谷に隱るといふ。今の昌平州軍都山は即ち其の隱棲の處と傳へられるのである。

鄭玄は前漢以來の諸説を大成し、所謂、訓詁を樹立したところの卓然たる大儒として知られて居る。漢に易をいふものゝ悉く鄭玄に參じ、甚しきに至つては孔孟の誤謬を諍る者はあつても、鄭玄あるひは服虔の非を云ふを憚つたと傳へられて居るのである。

鄭玄は字を康成といひ、北海高密の人である。その傳によると、八世順帝の永建二年丁卯七月五日に生れた。彼が四歳の時に論敵となつた何休(24)が生れ、六歳の時に同門の知己たりし盧植が生れたのである。世説新語に鄭玄

少好學書數とあつて、鄭珍は之を鄭玄の八歳頃の事としてゐるが、この時分に天才の萌芽を現してゐるのである。また十一二才の頃の記事に曰く

隨母還家、正臘宴會、同列十數人皆美服盛飾、語言闕通、公獨漠然、狀如不及、母私督數之、乃曰、非我所志、不在所願也。

と。之を見るに母氏の教育が鄭玄をして鄭玄たらしめたと言ひ得るであらう。十三にして五經に通じ好文占候風角隱術と云はる。十六にして神童と號せられ、その當時のことを太平御覽に記し

民有獻嘉木嘉瓜者、異本同質、縣欲表府、文辭鄙略、玄爲改作。

と。また十八九歳の頃の行狀を記すに

公少爲鄉耆夫、復爲鄉佐、得休歸、嘗詣學官、不樂爲吏、父數怒之、不能禁、亦不爲群弟所容。

と。二十一歳にして博く群書を極め、曆數圖緯の言に精しく、兼て算術に精しく、非常に記憶力強く、記憶したものは終身忘れなかつたと言はれてゐる。従つて此の強記が聽て諸經の注記に役立つたことは當然であつたのである。

十一世桓帝の建和二年、二十二歳になつた時、鄭玄の生涯にとつて一つの飛躍が來た、即ち

公爲鄉佐、北海相柱密、行春到高密縣、見公、知其異器、卽召署郡職、遂遣就學。自是遊學周秦之郊、往來幽並豫兗之域、凡在位通人處逸大儒、得意者咸從、捧手有所授焉。

杜密⁽²⁵⁾に認められるや、大學で業を受け、京兆の第五元⁽²⁶⁾に師事して京房易を學び、公羊春秋、三統曆、九章算術を受け、また東郡の張恭祖⁽²⁷⁾に従つては周官、禮記、古文尙書、左氏春秋、韓詩を學び、更に陳球⁽²⁸⁾に教を受けたのである。關に入つて馬融の門を叩いたのは三十五歳の頃であつた⁽²⁹⁾。後漢書鄭玄傳は記して曰く

玄在門下三年、不得見、乃使高業弟子傳授於玄。玄日夜尋誦、未嘗怠倦。

と、門下にあること三年、遂に師の馬融は驕貴の故に直接に教授さへしなかつた、しかしながら太平御覽三百九十三に一つの挿話を傳へてゐる。

馬融算渾天不合、召鄭玄、令一算便決。

といふ。鄭玄の數學に堪能であつたことは師も亦之を認めてゐたのであらう⁽³⁰⁾。されば忍從三年の苦學報ひられて、悉く滄奥を極めて學成つて歸るに、馬融は鄭玄が去るに臨み、鄭生、今去る、吾が道東すと言つて悦喜したことが傳へられてゐる。遊學十餘年にして郷里に歸ると、家は貧しく、親は年老ひてゐる。鄭玄は四十歳を過ぎ田を耕しながら諸生數百千人に教授した。

十二世靈帝の建寧の初め、黨争激しく史の所謂、黨禍なる政治的事件起る。黨錮の獄の直接の原因は、漢室、宿年の積弊たる宦官の跋扈であつて、これが聽て後漢滅亡の原因となつたとさへ言はれるのである。しかしながら政治的腐敗は軍に宦官にのみとどまらない。當時の特權階級全般が左様な意味では悉く腐敗墮落してゐたのであつて、後漢書を繙讀して見ると思ひ半に過ぐるものがあるのである。従つて漢室を憂へ、時世を痛憤する廟堂の

清廉の士や、在野の志ある儒生等が、斯の如き風潮を黙止する能はず、儒生横議の風を醸成し、それが漸く一大勢力たらんとした時に、黨錮の獄が勃發したのである。建寧四年春正月、天下に大赦あれども黨人のみは許されなかつた。翌熹平元年は太學の諸生千餘人が召し捕へられた。同四年、鄭玄四十九歳の頃、同郡の孫嵩等四十有餘人と共に捕へられて禁錮された。これより後、鄭玄は堅く門を閉ぢて、ひたすら業を修め、政治的活動の如きは友人の盧植の如くではなかつた。

時、恰も學界にあつても今古文の論争は春秋公羊傳を主題として勃發した。今文派は博士に取り立てられて以て師法を墨守すると共に保守的となり、更に進歩の跡なく學官に蟠踞するのみの状態であつた。然るに古文學派は民間にあつて次第に鬱然たる勢力とならんとし、進歩的な分子は擧つて之に趨くの有様であつた。されば何時かは今古文は戦はなければならぬ状態に置かれてゐたのである。馬融は傲然として博士を指して俗儒となせば、何休は古文を罵つて俗學と叫ぶ。而して遂に何休は公羊墨守、左氏膏肓、穀梁癡疾を著して公然と挑戦した。此に於て鄭玄は慨然として立ち、墨守を發し、膏肓を鍼し、癡疾を起す。その論戦の結果、遂に何休をして、康成は吾が室に入り、吾が戈を執り、吾を伐つもの乎、と噴ぜしめるに至つたほどである。宰相孔融、深く鄭玄を敬し、高密縣に特に一郷を立て、鄭公郷といひ、その門を通徳門と名付けたといふ。如何に世に重んぜられたかを知ることが出来るのである。鄭玄の後半生は斯る學的革命を貫いて、後鄭の天下は所謂、顛落する石の如き運命を辿り、黃巾の賊、所在に蜂起して社稷を危殆ならしめた。彼が七十歳の建安元年（十三世獻帝）、徐州より

高密に歸る時、道に黃巾の賊に遇ふ。時に數萬の賊は彼を見るや皆な禮拜し、遂に約して高密縣を侵犯しなかつたといふ。戒子益恩書に自ら記して

黃巾爲害、萍浮南北、復歸邦郷、入此歲來已七十矣、宿素衰落、仍有失誤。

といふ。誠に困苦の狀察するに餘りあるものがあつた。時に何進（しん）、頻りに辟すれども就かず。已前として山中に經を講じたといふことである。然るに其の山中、薤の葉の如き異草を生じた、仍て人々はそれを康成書帶草と名付けたといふ。

黃巾の賊等が鄭玄を見て拜禮したといふ事實は、彼の人格と盛名にも據ること勿論であるが、世説新語上之下文學篇注を見ると

玄長八尺餘、須眉美秀、姿容甚偉。

とある。鄭玄は正に神仙の如き風采であつたことを想見するに足る。賊ならずとも時の人は彼の前に叩頭したであらう。

また鄭玄は大酒家でもあつたらしい。例へば鄭玄傳には

飲酒一斛

とあり、南史陳暄傳には陳暄（38）の言に

鄭康成一飲三百杯、吾不以爲多。

とあり、鄭玄別傳には曰く

袁紹辟玄、及去饒之城東、欲玄必醉、會者三百餘人、皆離席奉觴、自旦及暮、度玄飲三百餘杯、而溫克之容、終日無怠。

といふ。まことに驚嘆すべき酒客であつたと言はなければならない。董卓の亂後、即ち三國の初め、袁紹は未だ鄴に都するの前、冀州にあつて師を統べてゐる時に屢々前陳の如く賓客を招いた。或る時、その宴席で諸客競つて異説を立て、百家、互に論難し合つたが、鄭玄は辯對して咸く問表に出づといふ。皆な彼の博識に嘆服した。それなればこそ詩、書、禮記、論語、孝經を始め之に注するもの百餘萬言といふ。就中、費氏易を祖述した功は没することが出来ないが、その易注は鄭玄の死の直前、元城に至つて之を注したと鄭玄の自序の文（孝經大題下正義引）を、鄭珍、評して曰く

康成是年春寢疾、^(一)至季夏遂卒、在元城、多不過四五日、而九卷易注成於病中、以知精力過人、臨死不衰如此。と。後漢の最後の帝である獻帝の建安五年庚辰、壽七十四にして卒した。^(二)後漢の滅亡を見ずして死んだのは寧ろ幸福であつたと言はなければならない。何故なら夫から十九年にして漢室は覆滅したから。

鄭玄、易注を作るや、序して曰く

易の名たる一言、三を涵す。易簡一なり。變易二なり。不易三なりと。

鄭玄の説によると、繫辭にいふ乾坤其易之蘊邪（乾坤は其れ易の蘊か）。またいふ易之門邪（易の門か）。また

いふ夫乾確然示人易矣、夫坤頤然示人簡矣（夫れ乾は確然として人に易を示す。夫れ坤は頤然として人に簡を示す）。またいふ易則易知、簡則易從（易なるときは則ち知り易く、簡なるときは則ち従ひ易し）と。此れその易簡の法を言へるなり。またいふ爲道也屢遷、變動不居、周流六虛上下無常、剛柔相易、不可爲典要、唯變所適（道たるや屢遷り、變動して居らず、六虚に周流して、上下常無く、剛柔相易はり、典要と爲すべからず、唯、變の適く所のまゝなり）と。これ時に順つて變易出入移動するものを言へるなり。またいふ天尊地卑乾坤定矣、卑高以陳貴賤位矣、動靜有常剛柔斷矣（天は尊く地は卑くして乾坤定まる、卑高以て陳りて貴賤位す、動靜常有りて剛柔斷る）と。此れ張設布列、易らざるものを言へるなりと。

しかしながら此の易の三義に就ては異說紛々たるものがあつたが、朱子が周易本義を著して、交易變易の義を發表して以來、定説となつたものゝ如くである。

鄭氏易に就て言はゞ、その易注を作るに當つて、孔子の象象を經に合し、注を經文に連ねるといふ方法に據つた。（象象等の十翼が孔子の作であるといふ説は、抑も史記孔子世家に始まり、後に漢書の成るや藝文志にその説を踏襲し、爾來それが定説となつたのである。しかしながら右の孔子作翼説が一つの傳説に過ぎないことは屢次説明した如くである。）

彼は、六爻の畫を省去し、また用九用六を省去し、卦の畫を顛覆して、上下體を卦畫の下に移し、また卦名を兩體の下に移し、また初九より用九までの爻位の文を移して、爻位を爻辭の上に加へた。

また前記の如く象傳象傳を上下經に合したばかりでなく、始めて象傳に於て象曰の字を加へ、象傳に於て象曰の文字を加へて明瞭ならしめたのである。案するに隋唐志みな古易の目がない。宋に至つて古易の名頗る多い。或は後人の依倣して之を録した者があるのではなからうか。日名靜一氏の註によると

石介象象を六爻の前に作り、小象を爻の下に繫逐するの說あり、「吳公武」これ吳仁傑の說と頗る異る。(吳仁傑の易自序「經義考三十」に見ゆ)

と。鄭玄易の特徴を要約すれば、その說多く五體を論ず。京房は二より四に至るを五體と爲し、三より五に至るを約象といふ。繫辭下傳の辯是與非則非其中爻不備(是と非とを辯せんとするときは則ち其中爻に非ざれば備はらず)を指して京房は五體なりとするのである。(漢上易叢說)また乾鑿度に基いて爻辰を以て易を説く。

當時、儒教の經術主義とは反對に、一般的風潮としては圖緯の學と五行思想が流行してゐた。蔣潛翊が其の緯學原流興廢師承に言へる如く、緯學は東漢に於て最も盛んであつたことが分明する。何故なら光武帝の中興も緯學的であつた如く、従つて後漢の朝廷に於ける尊信は、やがて一世を風靡したものに相違なかつたのである。況んや鄭玄その人は傳記にも見へる如く

年十三。誦五經。好天文古候風角隱術。

と世說新語にあり、また

年十七。在家見大風起、詣縣曰、某時當有大災、宜祭權穰廣設禁備時、火果起而不爲害。

と太平御覽八百六十八引鄭玄別傳にあり、また長するに及んでは

年二十一、博極群書、精曆數圖緯之言、

の如く一種の神秘思想を抱いて居り、それが時代精神を呼吸することに依つて、益せられたことは當然であつたのである。後の學者が鄭玄の大儒たるを肯定しながら、然も尙ほ彼の迷信的なることを非難するのは當らない。鄭玄の宗教的傾向に就いては未だ何人も研究されて居らないからである。

爻辰の象に就て惠棟は曰く

爻辰とは乾坤十二爻、值ふところの辰を謂ふ。乾は十一月子に貞し、間時にして六辰を治む。坤は六月末に貞す、また間時にして六辰を治む。乾は左行し、坤は右行す。十一月子は乾の初九なり。十二月丑は坤の六四なり。正月寅は乾の九二なり。二月卯は坤の六五なり。三月辰は乾の九三なり。四月巳は坤の上六なり。五月午は乾の九四なり。六月未は坤の初六なり。七月申は乾の九五なり。八月酉は坤の六二なり。九月戌は乾の上九なり。十月亥は坤の六三なり。二卦十二爻にして一歲に暮す云々と。

之を要するに爻辰とは乾坤十二爻に十二ヶ月十二辰を配當す。故に十二律、二十八宿をも配するのである。しかしながら此の思想は必ずしも鄭玄に始まるものではないのである。元來、十二支、十二律、二十八宿を十二ヶ月に配することは史記律書に見へ、漢書成るや其の律曆書に十二ヶ月、十二律、十二支を配するほかに乾坤十二支に配當する爻辰説が出たのである。しかしながら易學發達史から觀察して、鄭玄の爻辰説は寄與すること稀少

なのである。従つて爻辰の説は、鄭玄の後これを繼承する者はなかつたのである。

・費氏易——古文易勃興の功を忘れることの出来ない今一人の儒者に、荀爽がある。潁川の人、荀淑は字を季和といひ、朗陵侯の相となり、博學を以て鳴り、時の人これを神君と稱した。子息八人があつた。而して悉く才名があつた。即ち儉、鯁、靖、靈、汪、爽、肅、敷である。人これ呼んで西豪里の八龍となす。縣令范康(49)曰く、昔は高陽氏に才子八人ありと。遂に西豪里を改めて高陽里といふ、荀爽は即ち其の第六子で、順帝の永建三年生る。字を慈明といふ。十二歳にして春秋に通じたと云はれる神童であつた。杜喬(50)これを奇として、人の師たるべしと言つたが、後、果して名儒となるに至つた。或る人、許都(51)に問ふて曰く、靖(第三子)と爽と何れか賢なるかと。許都答へて曰く、二人皆な正、叔慈(靖の字なり)は内潤にして、慈明は外朗なりと。しかしながら荀爽は志を篤うして業を修め、微にも應じなかつた。然るに逆臣董卓、權を弄して漢室を傾け、故に賢者は山野に隠るゝといふ有様であつた。果然、荀爽の聰明なることを聞いた董卓は、彼を招いた。荀爽は驚いて遁れ去られんとしたが、吏また急迫して如何ともすることが能はなかつた。遂に一布衣より立ちて僅か九十五日の間に三公の榮位を占むるに至つた。もとより左様な榮位は彼の望むところではない。正に司徒王允等(49)と謀つて董卓を除かふとしたが、未だその志を遂げる機なく、献帝の初平元年、歿した。

荀爽の野に在るとき易傳を作るや(隋書經籍志)、升降の義を述べ、後世、荀氏易を言ふもの升降を語らないものはないのである。惠棟の説に據ると曰く

荀慈明の易を論ずる、以爲らく、陽の二に在る者は常に上坤五に升りて君たるべく、陰の五に在る者は降りて乾二に居り臣たるべしと。蓋し乾坤に升れば坎となり、坤乾に降れば離となり、既濟定を成せば六爻位を得、繫辭の所謂、上下无常剛柔相易（上下常无く剛柔相易る）、乾象の所謂、各正性命保合大和利貞之道也（各々性命を正しくし、大和を保合するは、利貞の道なり）といふものなり。左傳に、史墨魯の昭公の民を失ひ、季氏の民を得るを論じて云ふ、易卦に在りて、雷乾に乗するを大壯といふ、天の道なりと、九二の大夫の當に五に升りて君たるべきを言ふなり。慈明の説、古の占法に合す。故に仲翽⁽⁴¹⁾易に注するもまた之と同じ云々と。

荀爽が古易の心隨を得たるを望見するに足るのである。

斯の如く鄭玄、荀爽の輩出によつて、當代は大いに費直の學が興り、反面に田何の説は微々たるものがあつたのである。而して亦、如何に費氏易が當代の權威であつたかを物語る一挿話として、晋の荀崧⁽⁴²⁾奏して特に鄭易のために博士を一人置かんことを請ひ、詔許あつたに拘はらず、會々、王敦の非難に遇つて沙汰止みとなつたといふ事が、晋書卷七十五、荀崧傳に傳へられてゐるのである。

斯の如き費氏易の權威も、齊の代には僅かに其を傳ふる人あるを見るに過ぎず、（例へば梁陳の如きである）更に隋の時代に至つては早や湮滅したに等しかつたのである。

(1) 張晏は三國の人。字は子傳。中山の人なり。著すところ西漢書音釋四十卷あり。

(2) 吳仁傑は易自序に文言の二字を以て之言の誤りとす。また陳澧は其の東塾讀書記卷四原法に、十篇の二字、當に文言

の二字の下に在らば、文義乃ち順ならむと曰ふ。

(3) 案ずるに此の解説の文字に據り、後世、費直、乃ち始めて大傳を卦中に參入するの說あり。(果文總目序)されど解説と參入とは異る。況んや鄭氏文言の存するに於てをや。(日名靜一氏註)

(4) 三輔決錄は漢の趙岐の撰にして、晋の摯虞注す。三輔黃圖と似たれども、その撰の更に古きを以て貴重とせらる。

(5) 公羊高は戰國時代、齊の人と傳ふ。子夏の弟子なりと。春秋を受け、公羊傳を作る。

(6) 公羊壽は高の玄孫なり。漢の景帝のとき弟子胡毋生と共に、春秋傳を竹帛に書す。

(7) 胡毋生は漢の人。字は子都。景帝の朝、博士となれり。

(8) 董仲舒は漢の廣川の人なり。少にして春秋を治む。帷を下して講授すること三年、園圃を窺はずと。賢良を以て天人三策に對し、武帝に學を勉め、道を行ひ、諫言に説くる等の語を勸む。帝これを嘉みし以て江都の相と爲す。仲舒、學源委あり。正誼明道の言、諸子に度越す。漢の醇儒たり。かつて鮪龍僕に入るを夢見て春秋繁露十七卷を作る。大いに世に行はる。時に公孫弘、春秋を治むること仲舒に如かず。公孫弘は榮達を欲し、位、公卿に至る。仲舒これを以て從諛なりとす。弘これを聞きて仲舒を忌む。乃ち帝に言ひて曰く、獨り仲舒をして膠西王に相たらしむべしと。王もとより仲舒の文學有るを聞き、亦、善く之を待つ。仲舒久しくして罪を獲むことを恐れ、病ひと稱して桂巖山に隠れ、桂巖子と號す。卒するに至るまで産業を治めず。學を修め書を著はすを以て事と爲す。仲舒、人爲り廉直にして其の學また頗る純粹なり。治亂興亡より人事萬物の理に至るまで、配するに五行災異の說を以てす。漢興つてより諸儒、仲舒を最となす。その子及び孫、文學を以て大官に至る。

(9) 戦國時代、魯の人穀梁赤（一名俛）の撰にして十一卷なり。赤は公羊高と同じく子夏の門なりと。

(10) 瑕丘、江公は穀梁春秋及び詩を魯の申公より受く。武帝のとき董仲舒と共に並び稱せらる。

(11) 左丘明は周の魯の太史たり。姓は左、名は丘明（一説に左丘を以て復姓とす）傳へて左史倚相の後とす。少にして學を好み、經を孔子に受く。當時弟子春秋を譌するに各其の意に安んじ、その眞を失ふを以て徧く史書を參考して傳を作る。左氏春秋これなり。また國語を作る。司馬遷いふ、左丘、明を失ひ、それ國語ありと。後人その明を失ふといふにより、稱して盲左といひ、その書を盲史と稱す。

(12) 經典釋文序錄に傳來を記し、左氏より曾申―吳起―鄒椒―虞卿―荀卿といふ。一般には左氏より荀況―張蒼―賈誼となす。

(13) 張蒼は漢の人。陽武の人なり。かつて秦に仕へて御史と爲り、後に漢に歸す。臧荼を攻め功を以て北平侯に封ぜらる。孝文帝の初め丞相となる。年老ひて齒無し。女子の乳を呑み百餘歳を保つと。著書十八篇、専ら律曆陰陽のことをいふ。張蒼はじめ沛公に従ひ南陽を攻む。罪ありて斬に當る。衣を解き刑を受く。身長大にして肥白なる宛の如し。王陵これを見て異とす。沛公に請ひ之を赦す。張蒼、王陵を徳とし、父の讖を以て陵に仕ふ。王陵死するや慟哭已まず。毎日、朝退するに、先づ王陵の夫人に朝して食を上り、而して後、家に歸ると。

(14) 賈誼は漢の人。洛陽の人なり。世に賈生と稱す。年十八、能く詩を誦し、書を屬するを以て郡中に聞ゆ。吳廷尉、河南太守となり其の秀才なるを聞き、召して門下に置き甚だ之を愛す。孝文帝立ち河南太守を徵して廷尉とす。廷尉即ち賈生を推薦す。帝召して博士とす。時に賈誼わづかに二十歳前後なりき。博士中に於て最も年少なり。然れども詔令の議下

る毎に諸老先生言ふ能はざるもの、賈生悉く之が對を爲す。帝これを悦び起選して一歲の中に太中大夫に至る。賈生、思へらく漢興りて二十餘年、天下稱洽す。當に正朔を改め、服色を易へ、制度を法し、官名を定め、禮樂を興すべしと。乃ち悉く其の儀法を草具す。是に於て帝大いに賈生を任用し將に公卿の位に置かんとす。然るに絳漢東陽侯馮敬の徒悉く帝に讒して反對して曰く、洛陽の人、年少初學、専ら權をほしいままにし諸事を紛亂せんとすと。帝も亦遂に之を疏んじ、賈生を貶して長沙王の太傅となす。配所に至る途、湘水を渡るに弔屈原賦を作る。辭頗る沈鬱、俗を憎み世を傷むの情あり。長沙に居ること三年、その地卑濕、自ら以爲らく、壽長きを得ずと。漸くにして京に還るを得たり。而して梁の懷王の太傅と爲る。懷王は文帝の少子なり。賈生、上疏して曰く、諸侯あるひは數郡を連ぬるは古の制に非ず。禍これより生ぜん。宜しく之を削るべしと。帝聽かず。懷王落馬して死す。賈生、哭泣すること歲餘にして死す。時に年僅かに三十三なりき。

(15) 賈逵は賈誼の孫なり。陝西の平陵の人にして、字を景伯といふ。當に大學に居て人事に通ぜず。人これを問事不体賈長頭と言つたと傳へられる。父の徵實は左氏春秋に通じ、兼て國語、周官、尙書、毛詩をよくす。逵この業を傳へ、左氏傳解說三十篇、國語解說二十一篇を作る。明帝その書を重んじ、寫して秘館に藏せしむ。章帝の時、高才の者二十餘人を選び左氏を教へしむ。これより、以後左傳はじめて盛行すと。

(16) 服虔は漢の荊陽の人。字は子慎。少にして太學に入りて業を受く。靈帝のとき九江太守となり、亂に遭ひて客中に卒す。春秋左氏傳解を作る。當に少傳を以て何休に反對し、かつて何休の駁する漢事六十餘條を反駁せり。

(17) 杜林は後漢の人。字は伯山。世人呼んで通儒となせり。光武帝召して侍御史とし、官は大司空に至る。杜林、漆書古

文尙書を傳ふと。賈逵これが訓を作り、馬融これが傳を作り、鄭玄これが注解を施す。これにより古文尙書世に行はると。
(18) 馬援。字は文淵。茂陵の人なり。長兄況に云ひ、田園に牧せんと。混曰く、汝は大才なり晩成すべしと勵まざる。建武中、拜して伏波將軍と爲す。交趾を討ち、帯て薏苡之藜を受く。軍還る。故人孟冀これを迎へて勞す。援曰く、男兒要は邊野に死し馬革を以て尸を包み還葬すべきのみ。何ぞ能く床上に臥し兒女子の手中に在らんやと。冀曰く、誠に烈士と爲らば此の如くなるべしと。武陵五溪蠻、反す。馬援時に年八十餘。自ら行かんと請ひ、鞍により顧眄して以て用ふべきを示す。帝笑ひて曰く、嬰鑠たるかな是の翁也と。進んで壺頭に營す。戰ひ利を失ひ、病みて卒す。新息侯に封ぜらる。兄三人あり。即ち況、余、員なり。共に仕へて二千石となれり。馬援四子あり。廖、防、光、客卿。女あり。明帝の后となり徳、後宮に冠たり。崩じて明德と諡す。長子廖は順陽侯に封ぜられ、防は顯陽侯たり。ひとり客卿、幼にして岐嶷、馬援これを奇として、將相の器なりといふ。

(19) 擘恂。字は季直。京兆の人なり。易に明らかに、五經を治め、博く諸子百家に通ず。後漢六世安帝の永初年中、南山に隱棲し、召に應ぜず。その高名、關西に重し。馬融これに事へ、恂その才を愛して娘を以て妻す。後、融大儒となり時人その識に服すといふ。後、詔して天下に名儒を求む。公卿等、擘恂を奏薦して曰く、其の賢は顔閔に侔しく、學は仲舒に擬し、文は長卿に參し、才は賈生に同じく、實に瑚璉の器なり。宜しく宗廟に在らしめて國の禎輔と爲すべしと。是に由りて公車に徵辟す。然も遂に起たず。蒨名一世に鳴る。玉海卷三十五漢易通論に曰く、荀悅漢紀に馬融易辭を著し頗る異説を生ずと。

(20) 鄧皇后は後漢四世和帝の皇后なり。諱は綏。大傳禹の孫にして、光烈陰皇后の從弟の女なり。六歳にして詩書を能く

し、十二歳にして詩論語に通ず。諸兄、經傳を讀む毎に輒ち意を下して難問す。志、典籍にありて家事を思はず、母これを非とす。因りて晝は婦業を修め暮るれば經典を誦す。家人呼んで諸生といふ。父卒するや三年、醴菜を食せず憔悴異容す。永元七年、選ばれて宮に入る。后長七尺二寸、姿顔秀麗なり。同八年、掖庭に入りて貴人となる。時に年十六歳なり。恭肅小心、陰皇后に承事して夙夜戰々兢々たり。陰皇后、巫蠱の事を以て廢せられ、鄧皇后位に即く。元興元年、帝崩するに及び、廢帝生れて百日、后これを迎へて立つ。五世なり。后を尊びて皇太后となす。太后、宮人の訟を聽くに裁決流るゝが如し。詔して建武以來、諸の妖患を犯す者及び馬寶の家屬にして禁錮せらるゝ者を赦し、之を復して平人となす。廢帝崩す。太后、策を定めて安帝を立つ。尙ほ朝政に臨む。作事を濫約し、執法の怠懈を戒め、外戚親屬と雖も罪を犯せば假借する所なし。太后、陰氏の罪廢を愍み、その徒を許して郷に歸らしめ勅して資財を返すこと五百餘萬なり。太后、宮掖に入りてより、曹大家に従ひて經書を受け、天文算數を兼ぬ。晝は玉政を省み夜は誦讀す。博く諸儒劉珍等及び博士議郎四府掾史五十餘人を選び、東觀に至りて傳記讎校す。また中宮近臣に謂して、東觀に經傳を受讀せしめ以て宮人に教授す。太后、朝に臨みてより水旱十載、四夷外に侵し、盜賊内に起る。永寧二年三月病みて崩す。在位二十年、年四十一なり。順陵に合葬す。和熹鄧皇后といふ。

(21) 鄧騭は字を昭伯といひ、鄧皇后の兄なり。累進して車騎將軍、侯國二司となる。安帝を立てし功により上蔡侯に封ぜらる。受けず。西羌叛す。詔を受けて之を討ちて平ぐ。大將軍に拜せらる。かつて誣を被り羅侯に徒さる。飲食を絶して死す。

(23) 梁冀は商の子なり。字を伯卓といふ。兗州野台にして、外戚を以て權を專にし、後漢十世質帝は之を日して跋扈將軍といふ。後に誅せらる。冀の一門は三后、六貴人、七侯、二大將軍、公主に尙するもの三人、その他、卿郎尹校たりし者五十七人なりと。

(24) 何休は任城、樊の人なり。字は邵公といふ。質朴にして口訥なりと。六經に精通す。北新城の長に叙せられ、講舍を作り、生徒百を集めて學を講ず。太傅の陳蕃、これを召して政に參せしめしが、陳蕃、事に出りて退けられ、坐して廢銅せらる。これより門を閉ぢて一室に屏居し、春秋公羊解詁を作ると。

(25) 杜密。字は周甫。登封の人なり。北海の相となる。記めて歸る。毎に守令に謁して陳託するところ多し。同軍の劉勝また蜀より歸り門を閉ぢて出でず。太守王昱、杜密に言ひて曰く、劉季陵は高士なりと。密、昱の已を諷するを知る。答へて曰く、劉勝、位、大夫に列す。而して善を知りて薦めず。惡を聞いて言ふこと無し。情を隠し已を惜しみて自ら室蟬に同うす。これ罪人なりと。王昱慙ぢて謝す。黨人の獄起るや杜密も亦、李膺と同じく坐す。

(26) 第五元は京房易に精しく、また公羊春秋、三統曆、九章算術に通ぜり。

(27) 張恭祖は東郡の人。左氏春秋に通ず。古文尙書に精しく、兼て周官、韓詩を能くし、世の名儒たり。

(28) 陳球は下邳の人。字は伯眞。少くして儒學に涉り、律令を善くす。孝廉に擧げらる。進んで侍御史となる。桂陽の李研、衆を集めて寇を爲す。陳球、命を被りて零陵の太守となる。盜息む。光和の初め永樂少府となり、宦官を誅せんと謀むしも、事洩れ、獄中に死す。

(29) 傳に曰く、至是以山東無足問者。乃西人關。因盧植事馬融。讀門徒四百餘人、升堂進者五十餘生、而植爲冠首と。

(30) また曰く、會集諸生、考論圖緯、及算渾天不合。或言公能者。乃召見樓上令算、一轉便決。又剖裂七事、公思得五、植得三、衆咸駭服。融謂植曰、吾與汝皆弗如也。

(31) 孔融。字は文學。孔子二十代の孫孔褒の弟なり。年十歳、父に従ひて洛陽に行き、司隸校尉として盛名ある李膺を訪ふ。門に至りて、我は是れ李府君の親と。李膺問ふて曰く、高明の祖父、僕と舊恩ある乎と。答へて曰く、昔は先君仲尼、君の先人伯陽と道を同うして相ひ師友たり。即ち融と君とは累世の通家と。大中大夫陳寔、これを聞きて曰く、少時の了は大にして未だ必ずしも住ならずと。融返報して曰く、想ふに君が少時、必ず當に了たりしなるべしと。寔大いに蹴踏たりと。やがて北海の相となり、學校を立て儒術を表す。獻帝召して大中大夫に拜す。融、高談清教、玩して而して誦すべし。盛名一世に重し。漢皇の亂に逢ひて志は請難に在り。然れども未だ功無し。曹操これを忌む。後に融、罪を獲。二子尙ほ少なりと雖も許容なし。融、使者に言ひて曰く、願くは罪一身に止まり、一兒全うするを得べけんやと。兒おもむるに進んで曰く、大人豈に覆巢の下、尙ほ完卵あるを見る乎と。次で捕へらる。女あり、僅に七歳。また獄に在り。將に刑戮を加へられんとするに臨み、兄に言ひて曰く、若し死して知るあらば父母に見ゆるを得ん。豈に至願に非ずやと。乃ち頸を延べて斬らると。

(32) 何進は宛の人。字を逢高といふ。靈帝の朝に妹、皇后となり、侍中に拜し、大將軍となる。賊黨の奸を發いて憤侯に封ぜらる。何太后、朝に臨むや進んで太傅となりしも、後、宦官を誅せんとして却つて害せらる。

(33) 陳暄は南北朝の人。義興國山の人なり。慶之將軍の二男なり。學、師受せず。文才俊逸、酒を好む。太康年中、後主、東宮に在り、學士となす。位に即くに及びて、通直散騎當侍に遷る。後主甚だ之を親愛して而して亦甚だ輕侮す。かつて

倒に吊るし之に臨むに刃を以てし、命じて賦を作らしめ限るに暴刻を以てす。嗚、筆を投きて即ち成る。噓、悸を發して遂に死すと。

(34) 喜紹。字は本初。安四世の孫なり。姿貌威嚴あり。士を愛し民を養ふ。既に累世、台司にして賓客の歸する所たり。皆な心を傾け節を折り、争ひて廷に赴く。輜軒紫綬、街陌に喧接すと。大將軍を兼ねて冀青幽并四州牧を督す。曹操を討ちて勝たず、軍潰ゆ。病起りて卒す。

(35) 春公夢孔子告之曰、起起、今年歲在辰、來年歲在巳、既婚以譏合之、知命當終、右頰瘰疾と。

(35) 魏志六袁紹傳裴松之注に曰く、英雄記載太祖作董卓讞辭云、德行不虧缺、變故自難常、鄒康成行酒伏地氣絶と。即ち鄒玄は無病にして卒せしものにして、その大往生を見るべし。

(37) 范康。字は仲直。渤海重泰の人なり。少うして業を大學に受け、郭林宗と親善なり。孝廉に擧げられ、再び顯陰令に遷り、大山太守となる。山陰の張儉、常侍侯覽の母を殺し、其の宗黨賓客あるひは大山界に逃匿する者あるを禁ず。康、宦官を憎む。此によりて益々、急捕して遺脱を得る能はず。侯覽これを怨み、范康を誣ひ、廷尉に訴へ、死一等を減じて日南に遷す。顯陰の人民及び太守羊陟等、上に訟ふ。乃ち許されて郡に還り。家に卒す。

(38) 杜喬。林慮の人。字は叔榮。順帝のとき大司農となる。時に梁冀の子弟等五人、功なくして封ぜらる。杜喬これを上書して切諫す。廷内外喪氣す。ひとり杜喬のみ冀に忤る。遂に事に坐して獄中に死す。

(39) 許都は平輿の人。字は子將。好むで郷黨の人物を毎月に評す。故に汝南の俗、月旦評ありと。初め郡曹功となる。太守徐璆これを敬す。曹操いまだ微なる時、禮を厚うして迎ふ。都對へず。曹操怒りて之を脅す。都曰く、君は清平の姦賊、

亂世の英雄なりと。曹操大いに悦べりと。兄の處また名を知らる。故に時人これを平興の淵に三龍ありと稱せり。

(40) 王允、字は士節。郿縣の人なり。郭林宗これを見て異となして曰く、王允は一日千里、王佐の才なりと。董卓逆を構す。允、時に司徒となる。情を矯め性を屬して王室を扶く。ひそかに呂布と結び董卓を刺す。董卓の部將李傕、兵を領して關に入り長安を犯す。呂布、王允に曰く、賊兵急にして敵し難し、請ふ後圖をはからんと。允曰く、社稷の靈を奉じて國家を安せん者は吾が願なり、若し已を得ざれば則ち身を奉じて以て朝廷に死せん。幼主は我を特許のみ。努力して關東の諸公に謝せよと。李傕、遂に王允を殺す。宗族殺さるゝもの數十人なりき。

(41) 虞仲翔なり。次章に出づ。

(42) 荀崧は冀の玄孫なり。字は景猷。志操清純にして文學を好む。泰始年中、侍中となる。王、入洛せんとして途に死す。賊至る。崧、喪を守りて號泣し、傷を被りて氣絶すと。後、襄陽太守となる。元帝はじめて召して尙書僕射に拜す。太寧中、光祿大夫となる。年老ひて尙ほ孜々として勉學せりと。

(43) 王敦は晋の人。字は處仲。武帝の女、襄城公主に尙して權あり。駙馬都尉に拜す。累進して征南大將軍に進み、侍中に拜す。既にして志を得てより朝廷に於て專制を欲す。帝ひそかに之を憎む。明帝兵を起して之を討つ。王敦病死す。然るに墓を發いて衣冠を燒き、尸を出し跪せて之を刑すと。

第二十一章

三國の世は魏、蜀、吳が鼎立したから名付るのである。魏の武帝は曹操のことで、漢の都に蟠踞したが故に、より多く漢の文化を傳へたのは言ふまでもない。その子曹丕（後の二世文帝）、陳思王となつた曹植を三曹といひ、父子共に文名高かつたことは史の誌すところである。曹操の建安八年の令に曰く

喪亂已來十有五年、後生者不_レ見_二仁義禮讓之風_一、吾甚傷_レ之、共令_レ郡國各修_二文學_一、縣滿_三五百戶_一、置_二校官_一、選_二其師之俊造_一而教_二學_一、庶幾先王之道不_レ廢、而有_三以益_二天下_一。

と。魏の太祖は大いに經術を重んじたのである。二世文帝に至つては

帝好_二文學_一、以_二著述_一爲_レ務、自所_二勅成_一垂_三百篇_一、又使_レ諸儒撰_二集經傳_一、隨_レ類相隨、凡千餘篇、號曰_二皇覽_一。と魏書に記された如く甚だ文學を好むだ。されば黃初二年の詔に曰く

乃退考_二五代之禮_一、修_二素王之事_一、因_二魯史_一而制_二春秋_一、就_二太師_一而正_二雅頌_一（中略）遭_二天下大亂_一、百祀墮壞、舊居之廟毀而不_レ修、衰成之後絕而莫_レ繼、闕里不_レ聞_二講頌之聲_一、四時不_レ視_二蒸嘗之位_一。

とあり、翌三年には經術の士を登庸せんと詔し、黃初五年には太學を洛陽に立て、春秋穀梁の博士を置き、漢の制度に倣つて五經課試の法を設くと。

三世明帝また儒學を尊び、太和二年の詔に曰く

尊儒_レ貴_レ學。王教之本也。貞頃儒官或非_三其人_一將何以宣_三明聖道_一。其高_王選博士才任_三待中常侍_二者_一、申_三勅郡國_一貢士以_三經學_一爲_レ先。

といふ。蜀の劉備（昭烈帝）は興漢の目的で建國したのであるが、漢の文化の正統を繼承したものは、蜀漢に非ずして却つて魏であつたことは留意すべき點である。

漢易に京房の異ある如く、三國の代に至つて見遁してはならない人に虞翻がある。會稽餘姚の人である。字を仲翔といふ。始め會稽の太守王朗の功曹となつた。時に魏、蜀、吳の三國は大いに戦ひ、會稽また遂に吳の孫策（孫堅の長子）の攻むるところとなつた。依つて虞翻は王朗を説きすすめて一時、難を海上に避けしめた。會稽陥つて、歸つて吳の國に仕へ、孫策の功曹となつて頻りに重んぜられた。而して遂に富春の長と爲る。孫策死するや魏及び蜀から高位高官を以て頻りに招いたけれども、節を持って行かなかつた。このやうな性格であつたので、ともすれば頑直に偏し、屢々、新主孫權（孫堅の次子にして吳の太帝）の意に逆つて衝突した。一度は丹陽の涇縣に徙されたこともあつたが、また迎へられて騎都尉となり、再び怒られて斬られんとし、三度怒られて遂に交州に遷されたといふ。しかしながら吳に虞翻の在ることが知られるや、その門に集ふ學徒實に數百人。老子、論語、國語等に訓註したと傳へられるが今日、惜しくも傳來しない。讖緯、占候、卜筮に通じ、且つ醫術にも秀でてゐた。その易註十卷は、虞仲翔の存在を後世にまでも重からしめるものである。卒する年七十といふ。

虞翻は自ら孟喜の易を傳へたと稱した。斯の如く彼が其の家學を誇り得る所以のものは、彼の高祖虞光世は光

武帝の頃に孟氏易を祖述して、民間に一つの存在を示したのである。而して虞成に傳へ、三代虞鳳に傳へ、四代虞欽に傳へ、三國の世に及んで五代虞翻これを以て世に重んじられた。易學は斯の如き傳統を以て、虞家に於ては世襲の家學であつたのである。實際には虞注十卷は、孟喜ばかりでなく、京房易をも綜合したものであるが、純粹な意味で西漢易學を繼承した唯一のものと言ひ得るであらう。されば近代、清朝の漢學派の儒者達は、今日に傳來する唯一の漢易として虞氏易を非常に尊重するのである。

永嘉の亂に、諸易家の家法、悉く亡んだのに拘はらず虞仲翔の在つて幸に孟氏易の片鱗を今日に於て伺ひ知ることが出来るのは、學界のための欣びと言はなければならないのである。

虞翻に納甲の説があることは前に記した。蓋し納甲とは甲子を八卦に組み合せることであつて、既に漢代、京房に納甲の説がある。虞翻が孟氏易を傳へたと言はれる限りに於て、亦、京房の學統を引いたとも觀察され、此に於てか虞仲翔にも同じ説が主張されて居るのである。

京房易に曰く

天地乾坤の象を分ち、之に益するに甲乙壬癸を以てす。震巽の象に庚辛を配し、坎離の象に戊己を配し、艮兌の象に丙丁を配し、八卦陰陽を分ち、六位五行に配す云々。

吳の陸績の註に曰く

乾坤二卦は天地陰陽の本なり。故に甲乙壬癸を分つ。陰陽の終始なり。庚は陽、震に入り、辛は陰、巽に入り、

戊は陽、坎に入り、己は陰、離に入り、丙は陽、艮に入り、丁は陰、兌に入ると。

干に陰陽の別ありとし、甲丙戊庚壬は陽干となし、乙丁己辛癸は陰干となす。納甲の法は陽干を以て陽卦に配し、陰干を以て陰卦に配した。また十二辰を組み合せた納甲法がある。朱子發の解に曰く

乾坤に交りて震坎艮を生ず。故に子より順行す。震は子より戌に至る六位、長子父に代るなり。坎は震より子に至る六位、中男なり。艮は辰より寅に至る六位、少男なり。坤乾に交つて巽離兌を生む。故に丑より逆行す。巽は丑より卯に至る六位、長男に配するなり。離は卯より己に至る六位、中男に配するなり。兌は己より未に至る六位、少男に配するなり。

これ亦、前條の如く子寅辰午申戌を陽辰となし、丑卯己未酉亥を陰辰となす。納甲法によると陽辰を男に配し、陰辰を女に配した。

十二辰納甲法の機構は最も妙を極めて人々を納得せしむるであらう。即ち陽卦は順行し、陰卦は逆行すといふ原則のもとに、乾は初九の子に始まり、九二の寅、九三の辰と次第に上九に至り、坤は六四の丑に始まり、六三の卯、六二の巳、初六の未に下り、更に上六の酉に還り、六五の亥に終るのである。更に三男は初九に始まり、順次、上九に至り、三女は初六に始まり、上六に還り、順次、逆行して六二に終る。坤と始るところを異にするのは母子の相違に依るものとなすのである。また震子、巽丑、坎寅、離卯、艮辰、克己の順序に始まるは長少の位に依るものとなすのである。斯の如くして上卦の始め、即ち四に至つて六子相會し、午未申酉戌亥の順に排列

する、惠棟の易漢學に、京房及び虞翻の納甲圖を掲ぐるも、今、圖は略す。

五行排列の納甲法も亦、従つて在らねばならず、京氏も虞氏も共に之を試みてゐる。しかしながら此の法は、宋の魏伯陽(ウイハクヤウ)が京房説に基いて作り、丹家の法に應用してから流布し、虞翻はこれを易辭に採用しやうと試みて破綻を生じ、後世、嚴肅に批判されるに至つた。故に陳遵(チンジュン)は東塾讀書記に曰く

參同契は丹法を言ふ。儒者これを置いて論ぜざるべし。若し經を説くときは明に之を辯せざるべからず。虞説の如きは通すべきあり、通すべからざるあり云々。

と言つてゐる。至言といふべきであらう。

易經十翼に説卦傳のあることは何人も知るところであらう。説卦は、作易の大旨、卦徳、卦位、卦時、卦象などを説いたものであるが、之を一讀するに及んで作者の意余の那邊にあるかを直ちに知ることが出来るであらう。此では少しく卦象に關して注意を喚起して置きたい。

八卦の象は之を恒象といひ、六十四卦の象を偶象と呼んでゐる。

根本的には八卦の象、即ち天澤火雷風水山地が本象ではあるが、説卦あつて多義なる象辭の由るところを知り得られる。況んや六十四卦の偶象が上下經に列記せられるに於ては、易を學ぶ者、必らず説卦を肚裡に藏せずして易を語る資格はないといふも過言ではないのである。

眞に一面、易は象とも言ひ得られる。

恒象に就ては說卦に詳である。偶象に就て言はず、卦形より取つたものがあり、卦情より取つたものがある。例へば震の缶、巽の狀、損益の龜、小過の飛鳥の如きは明らかに卦の形から取つたものと言ふことが出来る。また乾の龍、中孚の鶴、漸の鴻などは卦情より來たものである。

ところが漢の代、逸象といふ問題が起り、それは後代にまで及んで論議のテーマとなつたのである。といふのは秦から漢への革命の際、易の說卦は一旦、滅亡したといふのである。然るに漢の孝宣帝の時、河内の一女子が老朽した一家屋から說卦及び古文老子を發見した。

荀爽及び虞翻は說卦は一旦亡びて後、得たものであるから、従つて脱缺が無い筈はない。此所に於て逸象があると主張したのである。

荀氏の逸象は九家逸象といひ、釋文叙錄によると右の九家とは荀爽、京房、馬融、鄭玄、宋衷、虞翻、陸績、姚信、翟子玄の九名といふのである。

宋衷は後漢の人。南陽章陵の人である。字は仲子。荊州の五業從事となる。かつて劉表等と共に五經章句を定む。世に世本注があつて行はれてゐる。

姚信は三國時代、吳の人で、武康の人である。字は元直。一に徳祐にも作る。天文易數の學に精しく、太常卿となつた。周易注を著してゐる。

それに關して朱子發の解に曰く

秦漢の際、易說卦を亡ひ、孝宣帝の時、河内の女子、老屋を發して說卦、古文老子を得。後、漢の荀爽集解に至りて、また八卦の逸象三十有一を得たり。今これを六十四卦に考ふるに其の説、闕鑿を印するが若しと。

九家逸象

陸氏釋文曰、說卦荀爽集解本、乾後更有四。爲龍、爲直、爲衣、爲言。

坤後有八。爲牝、爲迷、爲方、爲囊、爲裳、爲黃、爲帛、爲漿。

震後有三。爲王、爲鶴、爲鼓。

巽後有二。爲楊、爲鶴。

坎後有八。爲宮、爲律、爲可、爲棟、爲叢、爲狐、爲疾藥、爲桎梏。

離後有一。爲牝牛。

艮後有三。爲鼻、爲虎、爲狐。

兌後有二。爲常、爲輔頰。

この問題は更に種々の波瀾を生んだのである。荀子の逸象の後、虞翻の逸象が世に出たのは、清の惠士奇の子、惠棟の易漢學を以て始めとするものの如くである。曰く

荀九家、逸象三十有一、陸氏の釋文に見ゆ。朱子とつて本義に入る。虞翻その家を傳ふること五世、孟氏の學なり。八卦象を取ること九家に十倍す。大略譜を經に本づくとも雖も、然れども其の授受必ず自る所あらん。後

世の卿壁虚造、漫にして根據なきものには非るなり。

と言つて、河内老屋の傳説を支持し、逸象、實に三百三十一を擧げて居るのである。

虞翻逸象

乾——王、神、人、聖人、賢人、君子、善人、武人、行人、物、敬、威、嚴、道、德、性、信、善、良、愛、忿、生、慶、祥、喜、福、祿、積善、介福、告、始、知、大、盈、肥、好、施、利、清、治、高、甲、老、舊、古、久、畏、大明、晝、遠、郊、野、門、大謀、道門、百、歲、朱、頂、圭、著。

坤——妣、民、姓、刑人、小人、鬼、尸、形、白、我、躬、身、至、安、康、富、財、聚、重、厚、基、致、用、包、寡、徐、營、下、裕、虛、書、永、邇、近、思、默、惡、禮、義、事、類、閉、密、恥、欲、過、醜、怨、害、終、死、喪、殺、亂、喪期、積惡、冥、晦、夜、暑、乙、牛、十、年、蓋、戶、闔、戶、庶、政、大業、土、田、邑、國、邦、大邦、鬼方、器、缶、輻、虎、黃牛。

震——帝、主、諸侯、人、行人、士、見、夫、元夫、行、征、出、逐、作、興、奔、奔走、警衛、百、言、講、議、問、語、告、響、音、應、交、讎、反、後、世、從、守、左、生、緩、寬仁、樂、笑、大笑、陵、祭、鬯、草、茶、百穀、麀鹿、筐、趾。

坎——雲、玄雲、大川、志、謀、惕、疑、恤、遜、悔、涕夷、疾、災、破、罪、悖、欲、淫、獄、暴、毒、虛、瀆、孚、平、則、經、法、叢、聚、習、美、後、入、納、臂、要、背、陰夜、三歲、酒、鬼、稜、弧、弓彈、穿木。

長——弟、小子、賢人、童、童僕、官、友、道、時、小狐、狼、碩、碩果、慎、順、待、執、多、厚、求、篤實、穴居、城、宮、庭、盧、牖、居、舍、宗廟、社稷、星、斗、沫、眩、背、尾、皮。

巽——命、誥、號、商、隨、處、歸、利、同、交、白茅、蛇、魚。

離——黃、見、飛、明、光、甲、孕、戒、刀、斧、資斧、矢、黃矢、罔、鶴、鳥、飛鳥、甕、瓶。

兌——友、朋、刑、刑人、小、密、見、右、小知。

しかしながら問題を冷靜に觀察するときに、易が象たる限りに於て、荀氏の三十一逸象も、虞氏の三百三十一逸象も、左様な文献を、涉獵するまでもなく、無限に有り得る筈と言はなければならぬ。されば張惠言の虞氏義には、百四十八象を加へて、虞繻逸象四百七十九とするのである。近代、易を學ぶの人々は、日進月歩の文化諸形態を悉く新しい逸象として採用するだけの識見を有しなければならぬ所以である。

(1) 王朗、字は景興、東海、郟の人である。魏に仕へて司徒となり、蘭陵侯に封ぜらる。

(2) 讖緯は豫言書、乃至未來記の事なり。既述の如く讖は圖讖の事にて未來圖の類、故に隱語を以て綴る。緯は緯書のことにして豫言の類なり。漢に五經を外學といひ、七緯を内學と稱す。七緯とは易緯六編、書緯五篇、詩緯三篇、禮緯三篇、樂緯三篇、孝經緯二篇、春秋緯十三篇の三十五篇を包含す。

(3) 蜀は昭烈帝より後主禪の二代、四十三年にして亡び、吳は太帝、廢帝、景帝、烏孫侯の四主、五十二年にして滅び、魏は文帝、明帝、廢帝芳、廢帝髦、元帝の五世、四十六年なり。司馬懿（字は仲達）より司馬昭、而してその子司馬炎の

時に至つて、魏の元帝の讓りを受け、帝位に即きて國號を晉と稱す。即ち武帝これなり。都を洛陽に定め、初めて三國を統一せり。これより約五十年間、四代を史家は西晉と稱するなり。而して後漢の末年より、三國鼎立の内亂時代は從つて邊境の防備も怠り、今日の山西省汾水河谷の地方は、南匈奴の侵略占據するところとなれり。當時、匈奴族の中にありて最も勢力を振ひしものは於扶羅と其の弟の呼厨泉なり。於扶羅の子豹は左部帥たり。これ劉元海の兄なり。晋の武帝のとき、師を改めて都尉となすや、劉元海は左部及び北部の都尉を兼任し、晋の二世惠帝の時には五部大都督として威望あり。斯の如く劉元海は汾水河谷の匈奴を統一して天下の形勢を觀望しつゝありしなり。時に惠帝、權を失ひ、盜賊四方に蜂起す。而して内部には八王の亂勃發し、天下衰亡の兆歴然たり。劉宣等ひそかに議して曰く、今、司馬氏骨肉相ひ争ひ、四海鼎沸の湧くが如し。民族を興し天業を建つるは此の時なりと、劉元海を推して單于となし、離石の左國城に於て位に即き漢王と稱す。時に惠帝の永興元年なり。これより次第に勢威を増し、三世懷帝の永嘉二年には皇帝の位に即き、永鳳と年號を改め、宣爵を署す。翌三年、都を平陽に移し、この冬、第四子劉聰を總帥として王弼、劉曜の諸將をして大いに晋の都洛陽を攻めしむ。戦ひ利あらず軍を還せり。而して部將石勒も河南、山東の方面に進攻す。然るに永嘉四年六月、元海死するや、その子和、位に即きしも、四子聰、兄を弑して自立せり。永嘉五年、八王の一人たる東海王越は、懷帝と親和せず。憂憤して病歿するや、匈奴の猛將石勒これを攻めて、將士十萬を殺す。次で劉曜、王彌等の大軍は洛陽を攻めて落し、懷帝は囚へられて平陽に移され、聰のため七年弑に遇ふ。斯くて西晋ひとたび滅亡す。これを歴史上、永嘉の喪亂といふなり。

司馬懿の曾孫睿は江を渡りて逃げて建康（南京）に都す。元帝これなり。而して十一世恭帝まで約百年、これを東晋と

(4) 陸績。三國時代呉の人なり。字は公紀。呉郡の産なり。父康、武陵の太守たり。績、六歳にして、九江に於て袁術に見ゆ。術、橘を出す。績、三枚を懐にす。告辭して地に落す。袁術曰く、陸郎、賓客となりて橘を懐にするか。績曰く、歸りて以て母に遣らんとすと。袁術これを奇とす。既にして長じて博學多識なり。呉の孫堅に仕へて奏曹掾となる。直道を以て憚かられ、出でて潁林太守となる。軍事ありと雖も、著述を廢することなく、渾天圖注、易釋玄を作る。並に世に傳ふ。(5) 魏伯陽は呉の人なり。性甚だ道術を好み、弟子三人と共に山に入りて神丹を作る。丹成る。弟子これを試むるに死す。次の一弟子また丹を服して死す。餘の弟子服せずして山を下る。然るに魏伯陽及び死せる弟子等甦ると。而して參同契、五行相類を作ると。その説、周易を解釋するかの如くにして、實は丹を作る意を論じ、丹家修練の法と見るべきなり。また補塞遺脱一篇を作り、丹經の秘奥を演述すと言はる。

(6) 陳澧は清の番禺の人なり。字は剛。甫といふ。道光の舉人なり。汎く群書に通じ、凡そ天文、地理、樂律、算術、古文、駢體文、填詞、篆、籀、眞行書にして究めざるはなしと。その學つとめて漢宋門戶の見を排す。學海堂及び菊坡精舍の主講たり。東塾讀書記、漢儒通義、有聲律通考、切韻考、漢書水道圖說、說文聲統、東塾集あり。

(7) 缶(ふう。ふ)ほとき。またひ。腹部大にして口のつぼめる瓦器にして酒を盛る器なり。史記、李斯傳に擊囊叩缶とあり、秦の時代、宴會にて之を鼓して歌ひし最古の記事なり。近世、出土品の中に有之て商殷の時代以前に遡りて考證せらる。

又、量名にも使はれ、四斛を缶といふ。

第二十二章

漢易の最大の特徴は、象數を主として説を樹てたものと見做すことが出来る。象數が易の根本義といふところから其の主張が生れ出たものであらう。孟喜、京房以下、鄭玄、荀爽に至るまで悉く其の學系に屬し、陸續、虞翻現れて諸卦旁通の説を爲すに及んで、漢易象數學は極まつたと言つて好いのである。

しかしながら四庫全書總目が指適した如く、雜易と化したといふ謂は、畢竟、周易たるところの古易の面目を喪失し、所謂、漢に漢易あるの語を成すに至つたからであらう。

漢易が高度に發展した時に、當然、そこに一つの反動が來なければならなかつたし、また來たのであつた。これを魏易となすのである。而して其の人に王肅と王弼の二人を擧げなければならぬ。これはイデオロギー的な反動であると共に、それは亦、當時の社會的現象としての反動とも見ることが出来るのである。

後漢末の頽廢的な民心は、三國鼎立といふ政治的鬭争の渦中で漸く生氣を吹き返して來た。三國の天下争奪戰は、漢の繼承といふ政治的課題の前に關つたのであるが、従つて亦、文化的鬭争形態としても、より多く漢の文化を傳統しやうとする意嚮が働いてゐた。而して漢の古都に據つた魏が、有利な地位を占めたことは言ふ迄もない。従つて蜀及び吳の文化は、魏の文化の前に對しては極めて影の薄いものであつた。彼の建安の七子（あるひは鄴下の七子）と呼ばれた孔融、陳琳⁽¹⁾、王粲⁽²⁾、徐幹⁽³⁾、阮瑀⁽⁴⁾、應瑒⁽⁵⁾、劉楨⁽⁶⁾の如き才藻豊かな文人は、古都なればこ

そ其の文詞を展べ得たのである。

王肅は魏の國の人である。字を子雍といひ、東海郡の王朗の子である。父の王朗は黃初中、散騎黃門侍郎となり、太和年中には中領軍散騎常侍となつた。彼は官にある間、屢々上疏して、或は冗員を省き、俸祿を厚うし、進任者をして其の才能を展べしむべきこと等を進言し、時に政治の根本に觸れて陳べ、また農を貴び、更に輕々しく刑を行ふべからざること等を説いた。その易傳は子の王肅の傳へるところとなり、更に之を飛躍せしめたのである。また毋丘險(7)の事を起すに當つて、司馬氏を支持して種々と進言し、策を樹てた。王朝の娘は司馬文王に嫁し、晋の武帝を生んだのである。それ故に武帝は王肅にとつては外孫に當るのである。

王肅は十八歳にして宋忠(8)に就いて太玄(9)を學び、且つ此の解を作つて秀才の名を得た。學を修めるに従つて賈誼、馬融の學を好み、却つて鄭玄の學を是としなかつた。而して同異を采會して尙書(10)、詩(11)、論語(12)、三禮(13)、左氏春秋(14)の解を作つた。彼が父朗の作つたところの易傳を撰定したことは前述の如くで、遂に崇文觀祭酒に至ると、惜しい哉、王肅本周易注十卷と傳へて今は存せず。釋文に王肅注を引用するのであつて、その片鱗を僅かに知るを得るに過ぎない。

西晋の武帝は三國統一の大業をなさんとした踐祚の初め、洛陽に太學を起して學士三千人を收容した。斯の如く儒術を起さなければならなかつたといふのは、その反面、天下一統の大業を爲して、人心は忽ちに放縱に趨いたからである。當時の士大夫も泰平を謳歌するの餘り、宴樂を事とし、士氣大いに沈湎荒廢した。それを昔床と

して清談が生れたのである。されば武帝は鋭意、經學の勃興をはかつたのである。前述の如く武帝は王肅の外孫に當る。従つて王肅學が西晉の朝に權威を有つて來るのは當然なのである。尙書、詩、論語、三禮、左氏春秋、易など悉く王肅學によつて學官に立てられた。朝廷に於ける郊廟の禮さへが王肅の學説を用ひたと傳へられてゐる。

王肅をして經學史上、特異なる存在たらしめる一事は、彼によつて漢易が否定されたといふ學的革命にも據ること勿論であるが、他に一つの傳説があるのである。それは孔子家語は、漢書に明らかに記載されながら、何時となく亡佚してゐたといふのである。然るに王肅は孔子家語を僞作し、之によつて聖證論十二卷を著はし、朝廷の典制、郊祀、宗廟、表紀等に關し、孔子の言に假托して、鄭玄の説を反駁したといふのである。即ち今に傳はる孔子家語は實は王肅の作品であるといふ説である。非難をする人は、孔子家語は王肅の述作なるが故に信憑することが出来ないといふ主張するもの如くであるが、之を支持する人は亦、諸書載せるところの孔子の逸事を割裂し、綴輯して篇を成すものなるが故に、それは僞書とは云へ、而も之あるが爲に孔子の眞の遺文が傳へられたと斷するのである。私をして言はしむれば、若し孔子家語が王肅の僞作であるとしても、これ程の僞書を創作する王肅の能才は、何人も企及し能はないところのものであるといふ事である。僞書はヨーロッパにも其の例少くない、且つ亦、吾が日本に於ても古來、有名な僞書は少くないが、僞書作成は矢張り一種の創作才能であつて、その作家の力量を知る上に於て、眞の創作と擇ぶところは無いのである。況んや支那の如き易姓革命の國にあつて

は偽書は偽書なりに重要な價值を持つて居るのである。

かくて王肅が出現するや、鄭玄の學を奉ずる學徒は、こどもも起つて論戰を展開した。孫炎⁽¹⁴⁾、馬昭⁽¹⁵⁾、張融⁽¹⁶⁾などは鄭學を以て肉迫し、孔異⁽¹⁷⁾、孫綽⁽¹⁸⁾の類は王學を支持し、それは纏て鄭王二學派の論争にまで發展し、さしもの鄭玄の權威は此にその根柢に於て動搖を來し、天才王弼の現れるに及んで、漢易は徹底的に一掃されて仕舞つたのである。

王肅が武帝を外孫に有つが爲に、彼の學説が權威を持つたただけ解釋することは、王肅のために取らない。何とならば王肅の臣節は尙ほ儒者として非難し能はないからでもある。魏の明帝が、太和四年、大司馬曹眞をして蜀を討たしめんとした時、戰略的にその不可なる所以を説いて中止せしめたことは賢良である。また公卿と雖も五日に一度、必ず朝せしめんと古制に照して上疏したことは忠貞である。王肅が、左氏春秋を祖述した鄭玄に反して、寧ろ穀梁春秋を尙んだ點を見落してはならない。

されば唐の李鼎祚⁽¹⁹⁾が其の周易集解に、鄭玄の易は天象に基き、王肅の易は人事に基いてゐると言つてゐるのは、彼等の學的傾向を端的に指適した名評と云はなければならぬのである。

王弼は字を輔嗣といひ、山陽高平の人である。年少十餘歳にして既に老子に通じたといふ異常な天才である⁽²⁰⁾。その人爲り天才卓出、資性和理、辭才逸辯、必らず人を説伏せさんば止まない面目があり、談客は之を難ずることが出来なかつたといふ事である。一面、遊宴を好み、音律を好くし、投壺⁽²¹⁾を善くした。何晏⁽²²⁾これを奇となし、

召して台郎に補す。しかしながら老莊の虚無的な生活態度が、浮華な當時の風潮を更に色濃くしたと非難されるのである。

王弼かつて裴徽(へい)に答へて言ふのに、聖人は無を體し、而も無は訓ふべきではないから、無に言及しない。然るに老莊は有を免れないから、恆にその足らざるところを訓ふと云ひ、彼は老子の註解を施しながら尙ほ其を敢て批判してゐる點は注目すべきである。のみならず此のやうな解釋は亦佛敎的でもあるのである。

また何晏の聖人無喜怒哀樂論に對しては、聖人は人と同じく五情を有するが、その神明に於て人に勝れて居るのだ、といふ見解を述べてゐるのも、當時の思潮の人間的なイデオロギーが裏打ちされてゐるのを觀取することが出来るのである。

王弼は賈直の學を是とし、その易注六卷に於て、つとめて漢易象數の弊を破碎して曰く

夫れ象は意に出づる者なり。言は象を明かにするものなり。意を盡すは象に若くはなく、象を盡すは言に若くはなし。言は象に生ず。故に言を尋ねて以て象を觀るべし。象は意に生ず。故に象を尋ねて意を觀るべし。意は象を以て盡き、象は言を以て著はる。故に言は象を明にする所以なり。象を得て言を忘る、象は意を存する所以なり。意を得て象を忘る、言を存するものは象を得る者に非るなり。象を存するものは意を得る者に非るなり。象は意に生ず、而して象を存すれば、存する所の者乃ち其の象に非るなり。言は象に生ず、而して言を存すれば存する所の者乃ち其の言に非るなり。然れば則ち象を忘るる者は乃ち意を得る者なり。言を忘るる者は乃ち象を

得る者なり、爻、苟くも順に合せば何ぞ必ずしも坤にして乃ち牛と爲さん。義、苟くも健に應ぜば何ぞ必ずしも乾にして乃ち馬と爲さん。而して或る者は馬を乾に定め、爻を柔じ、卦を責め、馬あり乾なければ僞說滋漫紀すべき難し。五體足らず、遂に卦變に及ぶ。卦變また足らず、五行を推致す。一たび其の厚を失へば巧喻彌々甚し。たとひまた或は値るも義取る所なし。蓋し象を存し、意を忘るゝに由るなり。象を忘れて以て其の意を求むれば義、斯に見ると。(王氏略例)

この忘象論ひとたび世に現れて、象數の古説は漸く衰亡の途を辿らなければならなくなつたのである。漢以後、易が術數の末義に墮するのを揚棄したのが、王弼の忘象論といふことが出来る。⁽²⁶⁾

之を難する者は、何晏及び王弼の思想を以て正始の聲となし、魏晉時代の老莊的流行を攻撃し、晉の范寧の如きは、王弼何晏の罪は桀紂に過ぐ、と斷するのである。もとより范寧の言が多分に誇張されてゐることは言ふ迄もない。

しかしながら今日に傳へられる王弼の易註を仔細に吟味する時に、その思想的根據に於て多分に虚無的なものを存するとは云へ、而してその注解に老莊を援用するもの有るとは云へ、それは僅少であつて、六經を以て聖人の糟粕としたものでは斷じてないのである。畢竟、支那民族特有の大袈裟な身振りで言へば、王弼は恰も老莊によつて古聖を誤つたかの如くであるが、それは偏狭な儒者氣質から根差した非難が大部分を爲してゐることが了解されるのである。即ち兼坂晋氏の王注検出によると、明白なものは次の如き數例に過ぎないのである。

莊子達生篇の形也者物之累也から來た思想として

乾象、天之者形之名也。健也者用形者也。夫形者之累也、有天之形而能永保无虧、爲物之首、統之者豈非至健哉。

また老子第二章の不言之教から來た思想として

大有六五、居尊以柔、處大以中、无私於物、上下應之、信以發志、故其孚交如也。夫不私於物、物亦公焉。不疑於物、物亦誠焉。既公且信、何難何備。不言而教行、何爲而不威如。爲大有之主、而不以此道、吉可得乎。

また老子第二十六章の重爲輕根靜爲躁君の思想から來たものとしては

恒上六振恒凶。夫靜爲躁君、安爲動主。故安者上之所處也。靜者可久之道也。處卦之上、居動之極、以此爲恒、无施而得也。

また莊子駢拇篇に長者不爲有餘短者不爲不足是故鳧脰雖短續之則憂鶴脰雖長斷之則悲とある思想から來たものとして

損象、損益盈虛與時偕行。自然之質、各定其分、短者不爲不足、長者不爲不餘、損益將何加焉。非道之常、故必與時偕行也。

また至无を天地の心とする老子の思想に基いては

復象、復其見天地之心乎。復者反本之謂也。天地以本爲心者也。凡動息則靜、靜非對動也。語息則默、默非對

語者也。然則天地雖大、富有萬物、雷動風行、運化萬變寂然至无、是其本矣。故動息地中、乃天地之心見也。若其以有爲心則異類未獲具存矣。

また老子の第六十六章に江海所以能爲百谷王者以其善下之故能爲百谷王とある思想を反映しては

損六五、或益之十朋之龜、弗克違、元吉。以柔居尊、而爲損道。江海處下、百谷歸之、履尊以損則益之矣。陰非先唱、柔非自任。尊以日居、損以守之。故人用其力、事竭其功。智者慮能、明者慮策、弗能違也、則衆才之用盡矣。獲益而得十朋之龜、足以盡天人之助也。

以上を以て見れば王弼は繫辭傳に關してのみ述べ、且つそれも極めて特異なる例に就てのみ、その得意の思想で彩色したものと云ふことが出来る。

王弼は漢易が、象を貴ぶの餘り、象外に象を生ずるの弊を黜げ、そこに彼の思想を主張して義理を述べたのである。宋代、義理の易學が發展し、東洋民族の哲學的思惟を擴大するに至つたのは、實に王弼に始まると聲を大にして言ひたい。而して彼を非難する者は老莊の影響下にあるとか、虚無的であるとか言ふのであるが、それは必ずしも正しい批判ではないのである。

王弼の思想が最も燦然として輝くものを見るのは、略例の明象である。曰く

夫れ象とは何ぞや。一卦の體を統論し、其の由る所の主を明にする者なり。夫れ衆は衆を治むること能はず。

衆を治むる者は至りて寡なる者なり。夫れ動は動を制する能はず。天下の動を制する者は貞にして夫の一なる者

なり。故に衆の咸な存ずることを得る所以は、必ず致一なることを主とすればなり。動の咸な運ぐることを得る所以は、必ず无二なることを原とすればなり云々と。

斯の如きは單に周易の彖を解説したものであるばかりでなく、政體の本質を明確にし、東洋政治の根本義を闡明したものと云はなければならぬ。東洋に於ける王道政治の第一義諦は此に胚胎する。周易が六經の首に推される所以である。

この異常なる天才は、後世に偉大なる影響を残して、年齢わづかに二十四才にして、正始十年の秋、癘疾を病むで歿した。吾々は王弼のアルバイトを回顧する毎に、此の老成した思想が僅かに二十四才の若冠の青年の頭腦で、如何にして完成されたかに唯、驚嘆するばかりである。されば帝また嘆悼これを久うして、是れ天、予を喪すと云つたと傳へられる。

天才王弼は、その短い生涯のために、今日、四庫全書に收められてゐるのは周易注十卷、及び老子注二卷のみであるが、彼の出現によつて、さしもの漢易が衰へ、近世に至るまで王氏易が王座を占めたといふ事實は、如何にその影響力が大きく、廣く、且つ深かつたかを物語るに足るのである。

しかしながら今日、吾々が王弼注として知るところの周易註は、實は晋の韓伯の追加によつて完成されたものである。

韓伯は、字を康伯といふ。潁川長社の人である。少うして異才あり。長じて清和にして思素に勝れ、文に長ず。

勝氣膏を籠め、飛談霧を捲くと稱せらる。初め徴されたが就かず、後、簡文帝の談客となり、豫章太守を経て侍中となつた。更に丹陽尹吏部尙書領軍將軍に轉じ、太常を授けられんとして卒した。時に四十九歳である。前述の如く、王注は繫辭傳に及ばなかつたので、門人の韓康伯の註を以て其の闕を補つた。けれども此の補綴を以て何人も正しいとは受け取らないであらう。何となれば王弼の注は、王弼のイデオロギーから沁み出してゐるところにその眞價があるので、その未だ及ばなかつた點を韓伯の思想で塗り變へたところで、それは決して完全なものたり得ないことは言ふ迄もない。未完成の良き、といふものは古代の學者には許容し難かつたのであらう。王弼注周易は未完成であればある程、その眞實の相を示すであらうのに惜しいことである。

韓康伯また自ら別に周易二卷を著してゐるが、彼が老莊の學統を引いた故を以て、唐代、周易正義に定本として採擇するに當り、王韓混交せしめたことは、一言にして云へば愚劣な努力といふの他ないのである。従つて是說之(28)これを罵つて曰く

易に老莊を雜へて、専ら人事を明にするは則ち王弼より初り、易家、始めて其の傳ふる所を失ふ。(玉海卷三十六文句義疏)

と古易よりの逸脱を責めて居る。しかしながら思想といふものは一個の人間の生み出したものながら、時代を作る性格をも有ち、いつとなく時代思想が人の觀念形態を規定して仕舞ふ。梁及び陳の時代に至るまでに、幾人かの之に反對する思想家を生みながらも、王弼は儼然として一世を風靡する思想となり、最早や夫は何人の手に

よつても取り除くことが出来ないまでになり、極論すれば今日の支那人の民族的思想とまで成長して仕舞つたと
言つても好いのである。

(1) 陳琳。字は孔璋。廣陵の人なり。難を冀州に避く。袁紹、琳をして文翰を典らしむ。かつて袁紹の爲に檄を作りて曹操を罵れり。袁紹敗北の後、曹操に仕ふ。操その才を愛して敢へて舊惡を咎めず。軍國の檄多く琳の手に成る。曹操かつて病みて臥せし時、琳の文を読み、翕然として立つて曰く、これ我が病を癒すと。厚賜を加ふ。門下督に至る。

(2) 王粲。字は仲宣。山陽高平の人なり。襲の子。時に左中郎蔡邕(鄭玄と親交あり)才學顯著にして漢の朝廷に重んぜらる。粲を見て奇となして曰く、吾これに如かず。吾家の書籍文章盡く常に之に與ふべしと。後に魏の侍中となる。容貌短少にして醜醜なり。その文を作すに當り、筆を學ぐれば便ち成りて一字も改定せず。時人これを竇構といふ。建安二十二年卒す。時に四十一歳なり。兄凱もまた才略あり。劉表これに女を妻はす。

(3) 徐幹。字は偉長。北海の人なり。文章を好む。魏の文帝かつて吳質に與ふる書に曰く、偉長は懷文抱質、恬淡寡欲、箕山の節あらんと欲す、彬々たる君子と言ふべしと。中論を著はし、世に行はる。

(4) 阮瑀。字は元瑜。陳留尉氏の人なり。少うして學を蔡邕に受く。曹操召せども起たず、乃ち山中に逃る。操、人をして山を燒かしむ。授くるに司空軍謀祭酒記室を以てす。凡そ書檄多く瑀に出づ。帝、偶々出づ。瑀、隨從す。即ち馬上に草稿を具して之を呈す。帝、見て改むる所あらんと欲し、而も一字も損益する能はずと。

(5) 應瑒。字は德璉。汝南の人なり。文才を以て著はる。武帝召して丞相掾屬となす。後に五官中郎將文學となる。建安二十二年に卒す。

(6) 劉楨。字は公幹。東平の人なり。逸才あり。文を以て魏の文帝に重んぜらる。鐘磔かつて曰く、若し孔門、詩を用ひなば則ち劉公幹は堂に上り、子建は室に入らん。景陽潘陸は廊廡の間に坐すべしと。建安二十二年に卒す。

(7) 毋丘儉。字は仲恭。聞喜の人なり。魏の明帝、尙書郎となし、累進して荊州刺史たり。帝、遼東を討たんとして、儉の才略あるを以て幽州に移す。遼東平定す。安邑侯に封ぜらる。正始年中、高句麗を討ち、步騎萬人を督して追奔して肅慎氏の南界に至り、石に勒して功を記す。齊王廢せらる。儉は明帝の顧命に感じ、兵を舉げて司馬氏を討つ。戦ひ利あらず殺さる。

(8) 宋忠は後漢の中大夫たり。賈誼と同じく司馬李王を卜肆に訪ふと。

(9) 太玄經なり。

(10) 尙書注十卷。

(11) 毛詩注二十卷。

(12) 論語注十卷。

(13) 三禮音各一卷。禮記注三十卷。

(14) 左氏注三十卷。春秋左氏傳稽氏音一卷。

(15) 他に周官注十二卷あり。

(16) 孫炎は字を叔然といふ。武帝と同名の故を以て、字を以て稱せらる。樂安の人なり。鄭玄再傳の弟子といふ。東州の大儒と稱せられ、召されて秘書監とせらるゝも就かず。王肅、聖證論を作りて鄭玄を譏るを以て、その説を反駁す。周易

の注あり。孫炎は反切の法を作る。字音表示の法なり。この反切法、魏の世に大に行はる。爾雅注六卷を著すに此の法を用ゆ。

(17) 傳未詳。鄭玄の門下なり。孔子家語を目して、王肅の増加するところなりと言ふ。清代考證學起るに及び、王肅の手になると論ぜらる。馬昭、家語を王肅の僞撰となさず、増加するところと言ふもの、何ぞ據る所有りしか。之を知らず。

(18) 張融は南北朝時代の人。字は思光といふ。吳縣の人なり。敷の子。草書を能くし、百家に玩涉す。道士陸修靜、白鸞羽扇を造りて曰く、此の異物當きに異人に奉ずべしと。宋の武帝の時に參軍となり、後、封溪令を経て御史中丞となる。性、至孝なり。父母歿して皆な土を負ひて墳をなす。著す所、文集數十卷あり、玉海集と名づく。

(19) 孔晁。傳未詳。字を安國といふ。王肅の門下なり。逸周書十卷の注を著す。もと七十篇、序一篇、合せて七十一篇あり。漢書藝文志に周書七十一篇周史記とあるもの是なり。今日存するもの六十篇あり。文學博士武内義雄氏の支那思想史第十七章に曰く「王肅の注釋は今皆な散佚して傳はらないが、茲に一つ注意すべきは尙書の孔安國傳である。所謂、孔安國傳なるものは東晋の梅頤によつて世に出た本で、清初の考證家闕若璩は之を以て梅頤の僞撰と斷定したが、其の後、丁晏は梅頤以前にこの書が存在した證據を擧げ、また其の傳意が王肅義に合するものが多いことを指適して王肅の僞撰と想定した。然し丁晏の想定も未だ證據不十分である。王肅の門人に孔晁といふ學者があつて、逸周書の注を書いてゐるが、此の人にまた尙書疑問三卷の著作があつて、隋志には之を王肅孔晁の共撰だとしてゐるが、新唐志には之を王肅孔安國の問答を録したものと注記してゐるから、孔晁は之を安國と言つたことが明瞭である。そこで私は尙書の孔安國傳なるものを孔晁の傳だと考へたい。之を孔晁に配すれば、それが王肅義と合するもの當然で、又それが梅頤以前に存することに疑

ひを容れる必要がなくなる。」と新考證を出されて言へるは卓見なり。

(20) 孫統。平度の人。梁簡度使に拜せられ、南海都轉運使に移る。毛詩異同評十卷。春秋左氏傳義注十八卷。春秋左氏傳買服異同略五卷あり。

(21) 後に傳を出す。

(22) 王弼の族祖王粲は、後漢の名儒たる蔡邕の遺書を得、後これを弼の父業に譲り、業は之を長子弘に傳へ、弼は幼少にして兄の書を読み博覽の名高かりきと。

(23) 古、宴飲の際、才藝を講論する禮にして、矢を執り壺中に投じて勝負するなり。禮記に曰く、投壺之禮、主人奉_レ矢、司射奉_レ中、使_二人執_レ壺、主人請_レ曰、某有_二枉_レ矢_一、請_レ以_レ樂_レ賞_レと。

(24) 何晏。字は平叔。南陽宛の人なり。進の孫。その母尹氏、魏の太祖の夫人たりしにより、魏の公主に尙す。宮省に長じ、秀才を以て聞ゆ。美男なり。文帝その粉黛せるを疑ひ、夏日、熱餅を賜ふ。汗を拭へば容貌益々鮮美なりと。正始の初め曹爽に擧げられて散騎常侍となり、侍中尙書に移り、爵列侯を賜ふ。汗を拭へば容貌益々鮮美なりと。天下の士大夫これに倣ひ、遂に時世の風潮をなして亦制すべからざるに至る。傳へられるところに依るに、何晏、七歳にして明智なること神の如し。武帝これを奇として愛す。晏が宮内にあるところより養つて子と爲さんとす。晏乃ち地を畫してその中に在り。ハその故を問ふ。答へて曰く、何氏の廬なりと。武帝これを聞き即ち還らしむ。晏、易義をいふこと精なり。唯、了せざるもの九事あり。管輅に問ふ。輅、爲に玄旨を剖析して九事みな明かなり。時に鄧元茂も座に在り。曰く、君、易を善くし而して易中の辭義に及ばざるは何ぞやと。輅答へて曰く、夫れ易を善くするものは易を論ぜずと。晏これを贊して曰く、

要言煩ならずといふべしと。晉、曹爽、魏の帝室のため將軍司馬懿を細けんと謀り、事敗れて嘉平元年、曹爽と共に殺さる。周易私記の著あり。彼の論語集解十卷は今日に傳はる論語注の最古のものなり。

(25) 裴徽。字は文季。東泰と號す。河東聞喜の人なり。商才遠度、言詞を善くす。傳説、好んで虚を言ひ、荀彧よく玄を談ず。至る毎に共に語り、相争ふて相諱らず。徽その間にありて二家の義を釋し、彼此の懐を通ず。徽、兄弟八人あり。皆な善く文禮に通ず。時の人八王に方ぶ。即ち徽は王祥に比し、楷は王衍に比し、康は王綏に比し、緯は王澄に比し、瓚は王敦に比し、遐は王尋に比し、頰は王戎に比し、邈は王元に比すなり。

(26) 晋の孫楚の子盛は、王弼の易注を以て附會の説となせり。

(27) 范曄。字は武子。南陽順陽の人なり。少くして篤學なり。豫章の太守となる。時に郡に在りて大に庠序を設け、人を遣はして磬石を賣らしめ、以て學用に供す。遠近至るもの千餘人。而して資給衆費すべて一切私祿に出づと。後に讒せられて罪に當る。春秋穀梁傳集解十二卷は名著として知られ、隋、唐、及び宋代の春秋學者に影響すること甚だ大なりき。

(28) 晁説之。宋の人なり。字は以道。迥の玄孫にして、端彦の子なり。意を經術に刻す。司馬文正を慕ひて自ら景遷と號す。進士に登る。年未だ三十ならず。蘇子瞻これを朝に薦む。元符年中、黨籍に入りて放斥せらる。後、徽猷閣待制に終る。説之ひろく群籍を極め、六經に通じ、尤も易傳に精通し。また畫を善くす。著す所、客語等の書あり。世に行はる。

(29) 隋書經籍誌

第二十三章

三國時代の四十五年間は、前代の文化を破壊する爲の鬭争であつたことが回顧される。戦争の慘禍の中から、新しい文化が建設されるには、幾層倍かの年月と熱情を必要とするかを憶念せずにはゐられない。多分に誇張されてはゐるが面白い一つの例を擧げるならば、魏の正始の頃、詔して祭天の儀式である園丘のことを相談するために、多くの學者が召し寄せられた。この時、郎官や司徒にして役人を擁すること二萬餘人に及んでゐたが、彼等の中に文字を解する者がなかつた。然も朝廷に於ける公卿以下四百餘人の貴族階級にして、筆を把ることが出来る者は僅かに十指を屈するに足りなかつたといふことが傳へられてゐる。大儒鄭玄が歿して四五十年を出でざるに、斯程に文化的に低級な状態に至つたといふ半面、また同時に、其の時代の三國の武力といふものを想像せしむるのである。これを悲しむ學者は文化の低下を指適するが、他の武事に就て考察しないことは歴史を正しく見るものではない。魏が斯程に無智文旨によつて地位が占められた代り、吳、蜀を平定し得るほど強く、且つ有力な軍隊が勢力を握つてゐた事實を物語る。而して其の軍隊の中心的勢力であつた司馬氏が、魏を覆滅したのも亦、勢の趨くところであつたと云ふべきであらう。

しかしながらその反面、晋の統一に歸服しないで、却つて一勢力となつてゐた夷狄の諸酋長が多く學問を修めてゐたといふ事實は注目すべきである。たとへば前趙の冒頓族たる劉淵（リウエン）の如きは、幼より學を好み、上黨の崔游

に師事して毛詩や京氏易や馬氏尙書を修め、また春秋左氏傳に通じ、特に孫吳の兵法を善くし、また其の子劉知も學を好み、毛詩、左氏春秋、及び鄭氏易に通じた。また劉聰も年十四にして經史に通じ、諸子百家を綜覽せざるはなく、また劉曜も極めて學を好み、卽位の後は太學を長樂宮に立て、小學を未央宮に開き、生徒を收容すること千五百餘人といふことが傳へられてゐる。また前燕の慕容儁や、前秦の苻堅、苻登いづれも學問を好んだことが史に見へる。晋の經學が清談者流の空理に流れたといふことは、畢竟、イデオロギーの喪失を現はしてゐるものであつて、彼等が北狄だとか、東胡だとか指して輕侮してゐた異民族が、却つて彼等の文化を吸収し、左様な文化科學を利器として逆襲して來た次の時代への、大いなる悲劇的な過渡期の時代であつたといふことが理解されるのである。

五胡十六國の動亂時代は、支那に於ける佛教時代現出の必然さを語る陣痛期と言はなければならぬ。吾々は今、五胡十六國の歴史のために多くの頁を費しては居られないが、晋の末葉から中原に侵入し、しかも各自、建國した五種の民族は匈奴（前趙、夏、北涼）、羯（後趙）、鮮卑（前燕、後燕、西秦、南燕、南涼）、氐（前秦、後涼）、羌（後秦）に、更に巴蠻（成）を加へて六夷ともいふ。民族學的に分類すれば前の三種は蒙古民族を主力として若干のツングース系の混じたものであり、後の二者はチベット民族だと考察されてゐる。三國時代の内亂時代を経た漢民族は、半世紀に亘る戰爭のために多く流民と化し、この流民の自然發生的な暴動化が、傭兵として軍備を所有した此等の異民族をして蜂起せしむる導火線となつたのは極めて自然の趨勢と言はなければならぬ。

い。斯の如き混亂の世相の中で、恒心を失つたインテリゲンツイアは虚妄な空談に益々耽溺して行くのであつた。例へば晋の何劭(8)曰く、大原の王濟(9)、好んで易老莊を談ず。常に云ふ、王弼の易注を見て悟る所のもの多しと。王濟は多くの逸話を持つてゐるが、その風格は規範にとらはれない自由人型から逸脱して、寧ろ超現實的な存在となつて仕舞つてゐるのを見る。王濟は悲しくも滑稽な存在と言はなければならぬ。

吾は々此の時代、詩の陶淵明(10)、書の王羲之(11)、繪畫の顧凱之(12)を見出すことは極めて興味あることである。これ等の優れた文化人は、自らの藝術を創造することによつて、時代的苦悶から解脱したのであらう。しかしながら一般の大衆は、業火の里に沈湎して、結局、欣求したところのものは儒教に非ず、老莊に非ずして、疲光の都だつたのである。是に此の時代を契機としての佛教の興隆といふ問題が解決されなければならぬ。

後漢の明帝の永平年間に傳へられたと稱せられる佛教は、當然、譯經時代を現出した。而して斯の如き素材な布教期を経て、義解の時代に入つたのである。五胡十六國の地獄相を経て、民衆の信仰が漸く其盤を得、經文に對する鋭利は漸く隆盛時代に入つたのである。五胡十六國の地獄相を経て、民衆の信仰が漸く其盤を得、經文に對する鋭利細微な義解が行はれるやうになると、佛教的方法論が儒學にも採用されることは當然の影響としなければならぬ。そこに於て所謂、義疏の學が胚胎するのであつた。これ唐代義疏學の淵源となつたのである。

これから南北朝の易學に論及しようと思ふ。

北史儒林傳序(13)に曰く、南人簡約得其英華北人深蕪窮其枝葉（南人は簡約にして其の英華を得、北人は深蕪にし

て其の枝葉を窮む」と批判してゐるのであるが、これは如何にも江南と江北との性格を巧みに説明するものである。南朝は宋、齊、梁、陳ともに江南に都し漢民族これを支配したが、北朝は北魏、北齊、北周いづれも北方に都して且つ異民族の建設した國家であつた。氣候溫和、物資豊富な江南は、ともすれば風俗華美に流れ、しかしながら従つて藝術的雰囲気は漂ひ、詩人、文人の類を多く出したのに對して、素朴且つ粗野な北方にあつては、却つて眞面目に儒學が追究された。従つて北朝は漢學で終始一貫してゐるのに、南朝の經學は魏普はもとより、佛教思想さへ移入してゐたのである。斯の如き有様であつたので、その學的傾向も亦自ら對立し、北朝に於て採るところの易學は鄭玄であつたし、南朝に於ては當然、王弼を採り上げたのであつた。

北朝は後魏——(詳しくは北魏、東魏、西魏)北齊、北周の五朝であるが、その都を定めたのは北魏は雲中(後に洛陽に遷都す)、東魏は同じく洛陽、西魏は長安、北齊は鄴、北周は長安で、この間凡そ百七十餘年、しかしながら易學は殆んど進歩の跡見るべきものがなかつたのである。

拓拔珽⁽¹⁶⁾は東胡族の中から身を起し、中原を定めて北魏を建てた。意を文教に注いで大學を立て、五經博士を置き、當時、學生三千餘と稱せられたが、單に古人の糟粕を嘗めるに過ぎなかつた。その中にあつて徐遵明は、鄭氏易に通じ、その門から盧景裕が出て、周易の注を作つた。

徐遵明は字を子判といふ。華陰の人である。幼にして孤兒となり、學を好んで年十七、山東に至つて王聰を師として毛詩、尚書、禮記を受け、後、趙及び燕の地方に遊んで張吾貴⁽¹⁷⁾に師事したが、その學、何れも吾が心に慳

はずとして數ヶ月にして去り、范陽の孫買徳に就て業を受くること一年、また去つて後は蠶舍に籠り、門を出でざること六年といふ。その間に孝經、論語、毛詩、尙書、三禮を讀み、春秋義章を手撰す。時に笙笛を吹いて樂しみとなす優雅さが、亂世の人々には驚くべき存在であつたらしい。しかしながら門下に生徒が翹集して大儒の評が高くなるに従つて、頗る聚斂を好み、儒者としての品格を損ずるの行ひ多く、後世に惡評を残した。孝昌の末年より任城に移り住み、永安二年、元顯の舉兵入洛の騷擾に際して亂兵のために殺害された。時に五十五歳であつた。⁽¹⁸⁾

盧景裕は兄の子、字は仲孺、また白頭といふ。少うして敏、専ら經學を究めた。學成つて後、大寧山に浮世を避く。時人これを居士と呼んだ。師の遼明の惡聲に比べると人柄が餘程優れてゐるのである。かつて高澄⁽¹⁹⁾これを徵して諸子を教へしむ。景裕は尙書、孝經、論語、禮記、老子などに注したが、特にその周易注は理義精微、士君子これを嗟嘆したといふ。興和年中、齊王の開府屬に補せらる。晋陽に卒す。

盧景裕の門から權會と郭茂の二人が出た。權會は鄭の人である。字は正理。少うして鄭氏易及び詩書三禮を學んだ。孝廉に第して後、累遷して國子博士となる。その應答の妙を極めたことが傳へられてゐる。子あり。子襲といふ。聰敏精勤、而も幼にして成人の器量があつた。惜しい哉、父會に先立つて死に、之を送る者哀しまざるはなかつた。然るに會は唯一度、哭したきりで罷むと、人その違命を稱した。武平年中、馬から落ちて俄に死んだ。その後、鄭氏易を説くものは皆な此の二人の學統を引いたものであつた。しかしながら之を要するに南北朝

百七十餘年を通じて、北魏の六世孝文帝の時代を以て斯文極盛期となすのである。帝自ら乘輿にあつて尙ほ手から卷を釋かなかつたと傳へられる程で、従つて劉芳⁽²⁰⁾、李彪⁽²¹⁾などは經學を以て知られ、崔光⁽²²⁾、邢辯⁽²³⁾などは文史を以て名高く、文教の燦然たる時代であつたのである。

北齊は佛教が重んじられ、大儒李鉉を擧げるに過ぎない。字は寶鼎。渤海南皮の人である。少にして學に志し、李周仁に毛詩尙書を、劉子猛に禮記を、房蚪に周官儀禮を、鮮于靈馥に左氏春秋を受けた。しかしながら笈を負ふて徐遵明の門を叩き、居ること五年、刻苦した。二十三歳にして孝經、論語、毛詩、三禮の義疏、三傳異同、周易義例三十餘卷を著して氣を吐いた。二十七歳、故郷に歸るに教を請ふ生徒數百人といふ。燕趙の間、經を口にする者は多く其の門下であつたといふことである。三十六歳にして京師に至り、秀才に擧げられ、太學博士となり、天保の初め魏牧⁽²⁴⁾等と禮律を參議し、國子博士を兼ね、また房延祐、刁柔⁽²⁵⁾等と新曆の得失を參考した。鉉卒するや特に廷尉少卿を贈り、太子は祭奠の禮を致し、王人をして其の葬を送らしむと。時の儒者これを榮とした。北齊に於ける崇文の特例であらう。北齊に慧文⁽²⁶⁾現れ、中論の三諦偈⁽²⁷⁾。

因緣所生法

我説卽是空

亦名爲假名

亦是中道義

を讀み、中道の理を悟ると、これ天台教理の發想として留意すべきである。

北周は太祖、宇文泰⁽²⁸⁾、學問を好み、大儒蘇綽⁽²⁹⁾を重用し、政治上に於ても周官制を再現するに至つた。後代、隋が天下一統して踏襲したものは、實に此の宇文泰の實行した古制で、唐も亦これを踏襲したのである。彼の唐六典⁽³⁰⁾は之に因つて作られ、更に吾が國の大寶令⁽³¹⁾も之を傳統してゐること勿論である。その意味に於て北周の存在は歴史的な存在であつたと言へるのである。しかしながら易學方面には新機軸を生まなかつた。太祖の子、三世武帝は、經學を重んじたが、その反動として建德三年、寺觀を廢し、佛像を破毀し、沙門及び道士の類を悉く還俗せしめ、徹底的に佛敎と道教とを彈壓した。三武一宗の法難として、歷史上に有名な排佛毀釋を暴力的に行つた人として知られてゐるのである。隋書經藉志によれば、北齊は鄭義を傳へて、國學に列すと。

これより南朝を眺めるのであるが、江南の地方に據つた漢民族は、建康に都して宋、齊、梁、陳の四朝、而して遂に隋に征服されて仕舞つたのである。

世男に珍らしいほど逞ましい胃袋を有つた漢民族は、江南地方に割據しながら、晋代の餘風を受けた清談に耽つたり、後漢に發達した道教を受け容れたり、現世的な彼等にとつては描くことの出来ない佛敎を流行させてみたり、從來の支那的文化を極度に發達させながら、北方民族にとつては羨望の限りなる衣冠文物に新奇を競ひ合つてゐた。彼等は梵學を取り入れると、直ちに音韻學を發展せしめてゆくといふ風に、進歩的ではあつたが、儒學的イデオロギイは寧ろ退嬰的でさへあつたのである。近代支那が歐米的國家へ移行せんとする半面、ソ聯的イ

デオロギーを信奉して、何れの側もの思想的植民地と化しつつ、文字通り其の獨立性を喪失して行きつつあるのは、漢民族が彼等の獨自な思想を培養することなく、歴史が證明するが如き民族的融解性が多分に禍を爲しつつあることを此の際に指適して置きたいのである。それは兎も角として南朝に於ける經學は、益々、その純粹さを失つた代りに、却つて貪慾に變貌しつつあつたと言ふことが出来る。

宋の武帝劉裕⁽³²⁾、晋の禪りを受け、國を創め、二世文帝また學を好み、儒學館を北郊に立てて文選、一時、大いに興るかに見へた。しかしながら丹陽尹何尙之に命じて玄學を立てさせた如き、また元嘉十五年の以上の企てを、七年にして罷めるが如き、結局、經學の沈滯は之を如何ともすることが出来なかつたのである。

齊も亦、建元四年、國子學を立て學生二百人を置いたが、畢竟、これは國家的裝飾であつたとみへ、程なく廢して仕舞つた。しかし武帝の世になつて、永明三年、また立てて王儉⁽³⁴⁾を以て祭酒とす。また詔して王儉の宅に於て學士館を開き、四部書を以て之に充たしむと。これ後の四庫全書の祖となつたところのもので、この一事は記憶さるべきであらう。この間、吾々は伏曼容を見出すのである。伏曼容は字は公儀。平昌安丘の人である。早く孤兒となり、母兄と共に南海に流離しながらも、客居して然も手に書を離さず、周易と老子を究めた。宋の六世明帝は甚だ易を好んだ。常に朝臣を清暑殿に集めて之を講説し、伏曼容をして經を執らしめたと傳へられてゐる。齊の世となるや、衛將軍王儉に認められ、臨海太守となつた。また王儉の命によつて、喪服を撰し、更に禮學を定めんとしたが、王儉の死に會し、また齊の二世武帝の崩するあつて、遂に果さなかつた。容また甚だ多藝

音律、射馭、風角、醫算に通ずと。これ南朝學者氣質を表現するものであらう。多くの著書がある中で周易集解の著は彼の得意とするところのものであらう。

梁にあつて漸く亦學術興り、名儒、雲の如く集る。南朝歷世を通觀して、經學の最も盛んなのは齊の初めと、梁の武帝の時代であつた。武帝の天監四年、五館を立て、國學を開き、五經博士（平原の明山賓、吳の陸瑒、吳興の沈峻、建平の嚴植之、會稽の賀瑒）を置いて之を掌らしめ、これを以て吏の登龍の門と爲した。爲に天下の學生、笈を負ふて雲集すといふ。昭明太子また學を好み、東宮は藏書三萬と稱せらる。此等の學生は廬江の何胤に業を受けた。この何胤も亦、當代風の儒者氣質を示してゐる。何胤。字は子季、沛の劉嶽に師事して易及び詩、禮記を學んだ。情を恣にして節度を脱し、人かへつて之を奇として賞讃した。はじめ齊に仕へて建安太守となる。その太守たりし時、毎年の暮、獄囚を放ち、家に還つて新年を迎へしむるに、一人の囚徒と雖も期に遅れて戻る者がなかつたと傳へられてゐる。會稽の合戦を契機として齊を見限り、官を捨つ。梁の武帝、位に即き、詔して光祿大夫と爲す。司馬の王杲之をして意を諭さしむ。何胤曰く、わが年五十有七、米を食ふ四斗盡きず、何ぞまた官情あるべけんや。王杲之に謂ひて曰く、卿、何ぞ表して留りて吾と同じく隠れざるかと、杲之答へて曰く、この例を聞かずと。胤笑ふて曰く、檀弓兩卷皆な物の始を言ふ、何ぞ必ずしも例あらんと。王杲之還つて之を奏す。詔して白衣尙書の祿を給し、山陰に命じて月に五萬錢を給せしむ。これを固辭して受けず。秦望山に穩棲し、壽八十六を以て終る。その周易注また當然、老莊を交へ、その性格は準繩の埒を感えてゐた。右の王杲之との會

話も多分に清談者流の匂ひを藏してゐるが、概して當時の易家、清談者流の面目を藏すること何胤の例に就いて見るべきである。今一つの例として本田博士の支那經學史論、第五章、三國六朝時代の經學から抜く。

遵明の弟子、李業興⁽¹⁰⁾は始め梁武帝に仕へた。

武帝問ふ。「尙書正月上日、受_二終文祖_一と、此時は何の正月か」。

業興對へて曰ふ。「此れ夏の正月」。

梁武言ふ。「何を以て知ることを得ん」。

業興曰ふ。「尙書中候運衡篇を案するに云ふ、日月榮に始まると、故に夏正なるを知る」。

又問ふ。「堯以前は何の月を正とするか」。

對へて曰ふ。「堯より以上は書典載せず、實知らざる所」。

梁武又云ふ。「寅賓_三出日_一と、これ正月なり。田中屋島、以殷_二仲春_一と。即ち是れ二月、これ堯典に出づ。何ぞ

堯の時、何の正を用ふるを知らずと云ふを得ん」。

業興對へて曰ふ。「三正同じからずと雖も時節を言ふものは皆な夏時の正月に據る。周禮、仲春二月會_下男女之

無_二夫家_一者と、周より月を書すと雖も亦夏時、堯の日月亦當に此の如くなるべし。ただ見る所深からず、以て明

問を辯析するなし」と。(業興傳)

これ當時、經學の議論であるが半分は機智を戦はず問答である云々。

本田博士の指示せらるる如く、この機智を戦はずことなどは、清談と佛教との混交とも解釋されるのである。この梁武帝の時代に、天竺より達磨(一)が渡來して、帝にも見へ、且つ禪宗を唱へたことは多くの人の知るところである。而して此の宗教は隋に至つて漸く人々に理解されたらしい。

武帝の晩年は佛教に心酔して、政治を顧みなかつたので、王侯は次第に專横を極め、士大夫はまた國家を愛ふるよりも、空談に目を消する有様で、綱紀はいやが上に弛緩して行つた。時に北伐の大軍を起し、侯景を大將軍河南王に封じて北上せしめた。然るに戦ひ利あらず、志を得なかつた侯景は空しく軍を返すや却つて叛逆して、武帝を臺城に圍むの舉に出でた。然るに梁興つて四十七年、半世紀に近い江左地方の秦平は、建康の各階級をして徒らに豪奢を競はしめるだけで、糧食は半年の蓄へも無く、兵備また乏しく、上下大いに苦しみ、馬を屠り、果ては人肉を啖ふの悲惨な籠城戰となつて仕舞つた。而して遂に城陥り、武帝は侯景に迫られて餓死した。これを侯景の難と呼んでゐる。

三世孝元帝も亦、文籍を愛し、玄談を好み、書畫にたくみで、此の國難の中にあつて、之を挽回するの大勇なく、己前、治に居て亂を忘れるの狀態であつた。果然、北魏の大軍、南下して來寇し、城を圍んで攻め立てる中にあつて、尙ほ城中にあつて書を講じ、君臣等は悠然として詩を唱和し、讀レ書萬卷猶有二今日一と嘆じながら、城内古今の圖書十四萬卷を焚いて降參したのである。思想が國を亡すといふ好い例證である。

陳は、武帝(42)(霸先)の國を建てた當初、天下騷亂を極めて、文物の興るべきほどの餘裕もなかつた。漸く二世文

帝の代になつて、儒學の振興を目指し、天嘉以後には學官を置き、學生を集めたりしたが、概して齊の學術の餘波たるに過ぎないと言つて好い。唯、張譏を記すに足るだけである。字は直言。清河武城の人である。極めて早熟にして十四歳で論語、孝經に通じ、且つ老莊を好んだといふ。陳の末世、後主、位に即くや國子博士、東宮學士となる、性、極めて恬淡。常に閑寂を愛し、自邸に山池を營み、花果を植え、朝夕に易と老莊を講じたと傳へられて居る。しかしながら其の生活態度を一瞥しただけで、これ亦、清談者流の儒者たることを想はしむるものがあるではないか。易姓革命の國に生を享けると、斯く迄に國家的觀念が消滅して仕舞ふものであるかに驚かざるを得ないのである。彼に周易義三十卷の著がある。

南北朝の易學を通觀するに何等の高揚もなく、南北朝それ自體の易姓革命の騷擾を反映し、學術は概して不振と言はなければならぬ。獨自の見解を發表する學者もな、鄭玄の如く兩漢學說を綜合した大成者もなく、況んや易を修して之を身に體得する態の儒家も見當らないのである。

けれどもが然し、それたればこそ南北朝を通じて一種の學問が發生した、それは東漢以來、魏晉の學者が注釋したものに對し、更にその注解を施すといふ消極的な自己主張であつた。それを義疏の學と稱ぶのである。

例へば隋書儒林傳序に

于レ時舊儒多已凋亡、二劉拔_レ萃出_レ類、學通_二南北、博極_二古今、後生鑽仰、莫_二之能測、所_レ製諸經義疏、括紳咸師_二三宗_一之_二と。

褒め立てた劉焯⁽⁴³⁾、劉炫⁽⁴⁴⁾と雖も、遂に義疏の學を以て判ぜられるに過ぎない。されば隋書經籍志に載せるところの此の時代の注釋書類は悉く斯の如き規模による義疏の學なのである。

唐代の五經正義⁽⁴⁵⁾は、魏晉以後隋に至るまでの義疏學の集大成であつて、その意味での限りの他は、後代の人々が驚嘆したほど價值付けられるか否か大いに疑問とするところである。何となればオリヂナリテイこそが主要なのであるから。

しかしながら此の義疏學は、奈良朝時代の日本に傳へられた時は、新鮮なものとして受け取られ、聖徳太子の三經義疏⁽⁴⁶⁾の如きは吾が國最古のものである。

(1) 劉淵は五胡十六國の一たる前趙の祖にして、匈奴冒頓の後裔なりと。冒頓は漢の高祖の時、その宗族の女を公主として娶り、その子孫、離石左國城に據る。父は左賢王豹、母は延氏。魏の嘉平中生る。七歳のとき母を失ふ。かつて晉の武帝に召さる。父卒するや匈奴五部の一なる左部の帥となり、太康の末、北部都尉を拜す。次で建威將軍五部大都督となり、漢光郷侯に封ぜらる。部人の叛に坐して免ぜらる。當時、成都王穎、鄴に鎮し寧朔將軍に擧げられ五部軍事を監す。惠帝馭を失ひ寇盜蜂起するや、劉宣等、淵を大單于に推さんとす。乃ち呼延攸を淵の許に使す。即ち會葬に名をかりて成都王に歸郷を請へども許されず。西晉の内亂漸く激しく、東瀛公騰、安北將軍王浚兵を起して成都王を伐つに及び、成都王に言ひて曰く、匈奴五部の兵を以て、その二部を以て東瀛を討ち、三部を以て王浚を梟せんと。成都王これを喜び、北單于參丞相軍事に拜す。かくて淵、左國城に至る。大單于と號す。二旬にして兵五萬、離石に都す。成都王は王浚に敗れて洛

陽に奔る。永興元年、淵、漢王を僭して自立し、劉宣を以て丞相となし、崔海を御史大夫とす。東瀛公、淵を征して成らず。二年、離石大いに饑ゆ。黎亭に遷る。進んで河東に據り蒲坂、平陽を陥し、遂に蒲子を都とす。その後の、王彌、石勒の諸豪を降し、永嘉二年、皇帝となり、永鳳と改元す。更に平陽に遷都し、河瑞と改元す。永嘉四年死す。在位七年なり。五胡十六國の争亂は實に劉淵に始まる。

(2) 劉聰。字は玄明。一名載。淵の第四子なり。幼にして穎悟、臂力また優れ、弱冠京に遊びて名士と交る。晋の新興太守郭熙、辟して主簿となし郡事をゆだね、次で良將に擧げられ、入りて驍騎別部司馬となり、累遷して右部都尉となり、匈奴五部の豪みな歸す。淵、晋に叛いて左國城に都し大單于を稱するに及び、鹿蠡王に拜せられ、淵、帝位に即くに及び大司馬に拜せられ楚王となる。河瑞二年秋七月淵死し、太子和位を嗣ぐ。時に淵、和を殺して帝位を奪ひ、改元して光興と稱し、翌二年、劉曜、王彌等をして洛陽を攻めしめ、晋の諸王公以下三萬餘人を殺し、懷帝を執へて平陽に遷し、特進左光祿大夫平阿公となした。聰漸く驕奢淫暴、また殺戮度なく、嘉平三年懷帝を弑す。晋の秦王業、長安に帝位に即く。これ孝愍帝なり。聰また曜をして長安をして攻めしめ、愍帝を捕へて之を平陽に遷し、麟嘉二年十二月これを弑す。西晋亡ぶ。翌年秋七月病死す。在位九年なり。

(3) 劉曜。字は永明。淵の族子なり。少くして慧敏且つ膽略あり。讀書を好み、また武藝に長じ、淵に重要さる。淵及び聰の世、頻りに顯職を歴て聰の末年は相國として長安に鎮す。漢昌元年、漢帝劉粲その臣靳準に殺さるゝに及び曜、帝位に即き、改元して光初といふ。赤壁に靳氏を誅し、長安に都し國號を趙と改め、匈奴冒頓單于を天に配し、淵を太祖とす。西は張駿に通じ、帝は仇池を服す。後趙石勒と相ひ争ひ、光初十一年、石虎の蒲坂を攻むるや曜は之を擊破し、進みて石

生を洛陽に攻む。時に曜、士衆を撫せず、専ら嬖臣と欲博し、左右これを諫むれば怒つて之を斬る。是に於て石勒、步騎四萬を率ゐて洛陽を救ひ、大に西陽門に曜の軍を擊破す。曜大いに昏醉し、馬より落ちて石勒の將石堪に捕へられ、襄國に幽囚され、程なく勒に殺さる。曜の太子熙等、長安を捨て上邦に奔つて石虎に破られ、熙以下諸王公三千餘人皆な捕へられて殺され、次で台省文武秦雍大族九千餘人また襄國に遷され、王公等及び五部屠各五千餘人は洛陽に坑されて遂に前趙亡ぶ。

(4) 慕容儁。五胡十六國の一なる前燕の王なり。字は宣英。慕容皝の第二子。身長八尺二寸、容貌魁偉且つ文武に通ぜしにより祖父廆に愛さる。廆、遼東に據つて興り、既に至りて龍城（今日の熱河省朝陽）に都し、自ら燕王と稱し、國威大いに振ふ。儁、假安節北將軍、東夷校尉、左賢王、燕王世子となり、永和五年、父の死に會して燕王となる。時の石勒の後趙、冉閔、勢ひを逞うして共の主を殺し、遂に石氏を亡して、自立して冉魏と號す。儁、この内争に乗じて弟垂を前鋒都督、建鋒將軍となし、精兵二十萬を率ゐしめ、自ら三軍を率ひて之を征し、後趙の都薊（今の北京）を陥し、龍城より遷つて都し、更に兵を鄴に進めて冉閔を斬り、永和八年、帝位に即き、燕と號し、燕元と年號を改む。都を鄴に遷して中原に臨む。東晋の升平元年、次子暉を立て、皇太子となし、改元して光壽と號す。撫軍慕容垂、中軍慕容皝、護軍平熙を遣はして步騎八萬を率ゐて、丁零勅勒を討たしめ、大いに之を破り、俘を斬ること十餘萬級、馬を獲ること十三萬匹、牛羊億餘萬といふ。升平四年死す。年四十二なり。

(5) 苻堅。五胡十六國の一なる前秦の字なり。字は永固、また文王。雄の子なり。苻健の死後、その子生繼ぎしも暗愚にして殘虐なり。群臣堅にすゝめて生を弑して自立せしむ。堅、大秦天王と稱す。謀將に漢人王猛あり。よく堅を扶く。時

に燕の都鄴に慕容暉君臨す。東晋の北伐に會す。秦の兵力を藉らんとして使を遣し、洛陽の東方虎牢を割く約をなす。堅、兵を送りて晋軍を破る。後、燕約に背きて虎牢を拒む。堅、燕に攻め入りて鄴を陥れ、暉を捕へて燕を亡し、晋の梁州、益州を取る。而して更に前涼を壓し、張天錫遂に屈す。次で拓跋部を合せ、江北の全部を領し、諸國の貢するもの六十餘國に及ぶ。符堅、佛教を尊み、高句麗の小獸林王の世に、僧侶及び經典を贈る。これ佛教の朝鮮に入る嚆矢なり。王猛、屢々、堅の驕慢を諫めしも、間もなく王猛死し、堅、遂に支那統一を計畫し、百萬の大軍を發して、安徽の壽陽を陥れ、淝水に迫る。晋將謝石よく戰ひて大に之を破り、堅は流矢にあたり辛うじて長安に逃れ歸る。時に慕容垂は河北の中山に據り國を建て、後燕と號し、慕容冲また山西に於て獨立して西燕と號し、長安を攻む。堅遂に長安を脱し、途中、姚萇の軍に捕へられ佛寺に幽閉されて自縊す。在位僅かに七年、年四十八歳なり。

(6) 符登。前秦五世なり。字は文高。堅の族曾孫。勇猛にして細行を顧みず。長じて諄厚にして書を好む。狄道の長たり。關中亂るゝに及びて征伐に従ひ、堅の仇を報せんとす。苻丕の太平二年、姚萇を胡奴坂に破る。間もなく丕の死するや、丕の子懿を立てんとせしも國の爭亂の故を以て、勸められて帝位に即き、太初と號す。常に堅の神主を軍中に立て、輜幘羽青葆蓋車に乗せ、黃旗を建て、武賁の士三百人を以て守らせ、堅の威靈によりて敵を討つと鼓舞す。而して長稍鉤刀を以て方圓大陣を造り、向ふところ敵なかりき。抱罕附近の氏族をはじめ漢蕃の兵十餘萬を率ゐて姚萇の軍と戰ふ。安定の役に登を破り、妻毛氏以下を殺す。登と萇と合ふこと八年、萇卒し、興立つ。その幼弱を侮り一度敗れ、乞伏乾歸の援を以て馬毛山に戰つて敗死す。在位九年。年五十二なり。

(7) 匈奴(前趙、夏、北涼、羯(後趙)、鮮卑(前燕、後燕、西秦、南燕)、南涼、氏(前秦、後涼)、羌(後秦)を五胡とい

ふ。前三者は蒙古民族に屬し若干のツングース族を混じ、後二者はチベット民族なり。後漢の初め、匈奴、南北に分裂し、南匈奴は後漢に降りて今の山西地方を中心に廣く支那内地に分住せしが、魏の武帝はその勢力の増大するを怖れ、南單于を鄴に留め、南匈奴を左部一萬餘落、右部六千餘落、南部三千餘落、北部四千餘落、中部六千餘落の五部に分割し、單于族劉民を以て各部都尉として分治せしめ、晋また此の制を踏襲せしも、惠帝その馭を失してより大亂を招くに至りしなり。一説に巴蠻（成）を加へて六夷ともいふ。

(8) 何邵。字は敬祖。何曾の子なり。優游自足して權勢を貧らずと。

(9) 王濟。字は武子。風姿英爽にして弓馬を好み、勇力人に絶す。晋の武帝の常山公主に向す。而して性、豪放なり。時に洛陽の地貴し。地を買て馬埒を造り、錢を編して之に滿つ。時人これを金溝といふ。易及び老莊を善くすと。

(10) 陶淵明。字は元亮。侃の曾孫なり。晋に於ては淵明と名乗り、宋に至つて潜と改む。寓意あるに似たり。性恬淡。尋陽紫芝の栗里に居る。少くして高趣あり。博學不群。晋に住へて州の祭酒となり久しからずして歸る。主簿に召さる。就かず。後また彭澤令となる。官にあること八十餘日、郡、督郵を遣り至らしむ。吏曰く、當に東帶して之を見るべしと。淵明嘆じて曰く、我豈に能く五斗米の爲に腰を折りて郷里の小兒に向はんやと。即日、印綬を解き、歸去來の辭を賦す。門に五柳樹を植え五柳先生と號す。義熙の末に著作郎に召す。就かず。自ら先世晋の臣なるを以て宋に住へず。潜と改むる所以なり。妻翟氏また能く勤苦に安んじ、夫前に耕し、妻後に鋤く。公田は悉く種を種えしむ。妻かたく稼を種えんと請ふ。即ち半は稷を植え半は秣を種ひ。客至れば酒を設く。醉へば鋤く、我醉ふて眠らんと欲す、君且らく去れと。かつて弘王、淵明を識らんとす。淵明かつて廬山に住す。王弘、淵明の友廬逋之をして酒具をもたらし、半道の栗里に於

て之を要せしむ。淵明脚疾あり。一門生二兒をして藍輿を舁かしめ、既に至れば欣然として飲酌す。俄に王弘至る。また竹色無し。かつて九日に酒なし。菊を摘みて杯に滿て、坐して悵望す。之を久うして白衣の人至るを見る。乃ち王弘これ遣して酒を送るなり。即ち酩酊して歸ると。この類の逸語枚擧に遑なし。性育を解せず。常に素琴一張を蓄ふ。絃徽備はらず。朋酒の會毎に則ち撫して之を和して曰く、但譏琴中趣、何勞絃上音と。宋の文帝の元嘉四年に卒す。壽六十三。著はすところ文集あり。

(11) 王羲之。字は逸少。覽の孫にして、曠の子なり。王敦曰く、これ吾家の佳子弟なりと。王承、王愷と共に三少年と爲す。十三歳にして周顛に謁す。顛これを異とす。時に牛心の灸を重んず。坐客未だ暗はす、顛まづ羲之に奉ず。長ずるに及びて晋に仕へ右將軍會稽内史となる。池に臨み書を學ぶに池水盡く黒し。草隸に於て古今の冠たり。時人言ふ、飄として游雲の如く矯として警蛇の如しと。又曰く、煙飛霧結狀斷ゆるが斷くにして實は連り、鳳翥龍蟠勢斜めなるが如くにして反つて眞なりと。蘭亭記、樂毅論、黃庭經など特に有名なり。羲之既に官を去り、東土の人士と山水弋釣の娛みを營み、また道士許邁と共に服食し、遇々名藥を採れば千里を遠しとせずして東中諸郡の名山に遊び滄海に浮ぶ。嘆じく曰く、我卒に當に以て樂死すべしと。かつて郗鑒、人をして婿を王導に求む。導その篋子等を觀せしむ。歸て鑒に謂ひて曰く、曠の子弟みな佳なり。然れども信の至るを聞き皆自ら矜式す。唯一人、東牀に坦腹して臥し胡麻餠を食するもの、獨り聞かざるが如しと。鑒曰く、これ佳婿なりと。之を訪へば即ち羲之なり。羲之の妻また書を工みにすと。

(12) 顧愷之。字は長康。無錫の人なり。博學にして才氣あり。かつて桓温及び殷仲堪の參軍となる。謝安深く之を器重す。丹青圖畫に善く、支那第一流の名手とす。人を描く毎に數年日晴を點せずして曰く、傳神寫照は正に阿堵に在るのみ

と。義潮の初め敢騎常侍となる。尤も小術を信じ、以爲しく之を求むれば必ず得と。故に世に傳ふ。愷之に三絶あり。才絶、藝絶、癡絶と。かつて虎頭將軍となる。人これを顧虎頭といふ。文集及び啓蒙記あり。かつて或る人、愷之に問ふて曰く、君の筆賦と磻康の琴賦と如何。答へて曰く、賞せざる者は必ず後出を以て相遺れ、深く識る者は亦た高奇を以て貴ぶと。桓温かつて江陵城を治むるに甚だ麗なり。謂ふ、僚佐もし能く此の城を目する者は賞せんと。愷之、即ち目して曰く、遙望層城、丹樓如霞と。桓温賞するに二婢を以てすと。愷之、吏部郎中となる時、庭中に於て嘉樹を植えて曰く、吾れ愷之（孫なり）のために植うるのみと。

(13) 中論、十二門論、百論の三論によりて宗を立つる故に三論宗と名づく。中論とは大乘中實の理を申明すれば中論と名づくるなり。龍樹菩薩の作るところにして五百偈二十七品あり。十二門論また龍樹所造にして、所明の法門十二あれば然く名づく。百論は龍樹の弟子提婆菩薩の造るところにして、もと二十品、一品に各五偈あり。文殊菩薩を以て高祖となし、馬鳴を以て次祖となし、龍樹を三祖となす。龍樹より二流に分る。一は龍樹、龍智、清辨、智光、師子光と傳統し。一は龍樹、提婆、羅睺羅多、沙車王子、羅什の系これなり。羅什、支那に入りて三論を譯し、支那の高祖となす。

(14) 鳩摩羅什。つぶさには鳩摩羅什婆なり。父は天竺の人、出家して龜茲國に至りて國王の妹に婚して羅什を生む。七歳にして出家し、九歳にして罽賓國に入りて小乗を學び、止まること三年、歸途、月氏疏勒を経て莎車國に至り大乘を修む。秦王苻堅、建元十九年、呂光をして龜茲國を伐たしめ、羅什を捕へて還り、涼州に至りて符堅の敗北を聞き自立す。その後、後秦の姚興、涼を攻めて降し、羅什を獲て長安に入る。時に弘始三年なり。姚興、國師の禮を以て遇す。西明閣及び逍遙園に於て諸經を譯す。長安に留ること十三年、譯出せる經典三十九部、或は七十三部といひ、凡そ三百八十餘卷

なり。弘始十五年、長安大寺に寂す。逍遙園に於て外國の法に依りて火葬す。

(15) 北史。百卷あり。唐の李延壽の撰なり。北朝の魏より隋に至る四代、二百四十二年間の歴史を記す。本紀十二卷、列傳八十八卷より成り、周には文苑傳あり、齊には列女傳を加ふ。

(19) 拓跋は後魏の帝室元氏の舊姓なり。東胡の中の鮮卑の一氏族にして、原住地はその滿洲國洮兒河流域なり。魏書には鮮卑は黃帝の裔にして、土德を以て王たりしを以て拓跋を氏とすとあり。東胡民族は世襲酋長を有せず、數百千の邑落より成立す。勇健よく鬪訟を決し、兵器、鞍勒の製作に長じ、また醫藥、繡織の技を能くす。拓跋隣の時より大人となり世襲制となり、その孫力微に至りて陰山の南より定襄の盛樂（今の山西省大同縣西北三百餘里）に都し、諸部を合せて二十餘萬騎を有す。猗菟、猗廬の時、晋を援けて匈奴を討ち、大單于となる。猗廬は晋の懷帝より代公に封ぜられ、馬邑、陰館、樓煩、繁時、崞の五縣を與へられ、愍帝のとき代王に封ぜられて代、當山の二郡を得。什翼犍の時、自立して建國元年と號し、百官を置き、その勢力は東穢貊に、西は破洛那に及び、三十九年、苻堅のため大敗して什翼犍は亂軍中に就せらる。而して國土二分し、匈奴劉衛辰、獨孤部大人劉庫仁に分領せらる。淝水の役に苻堅大敗するや、獨孤部に亡命せる拓跋珪（什翼犍の孫）は舊部民を集合し、代王の位に即き盛樂に都す。天興元年、魏と號して皇帝の位に即く。後燕の慕容垂父子を伐つて中山を取り、一時、代（平城）は五十萬の人口を擁せりと。晩年、方士の説に惑ひ、寒食散を服し、爲に躁狂となりて喜怒常なく、屢々、人を手刃す。遂に次子紹に殺さる。年三十九なり。

(17) 張吾貴。中山の人なり。少くして聰敏、年十八にして魏に仕へ、太常博士となる。牛天祐に易を受け自得多しと。その左氏春秋を講ずるに、義例多く新意を以て之に參ふ。學者これを奇とすと。

(18) 清の趙翼曰く、遼明譚鄭康成所著易以傳盧景裕崔瑾是遼明深於易也云々と。

(19) 高澄は齊の神武の子なり。魏に仕へて吏部尙書となる。始めて崔亮が年勞の制を改め、賢才智能の士を抜きて皆な門下に引き、之と政を共にす。使を遣して誼しみを榮に通ず。蘭京のために殺さる。

(20) 劉芳。字は伯友。彭城の人なり。貧窮の中に學を修め、聰敏人に過ぐ。志を墳典に篤くし、書は舊書して以て自ら給し、夜は則ち經を窮めて寝ねず。窮通論を著して以て自ら慰む。魏に仕へて中書令に累遷す。著書凡そ十有六書と。

(21) 李彪。衛の人なり。字は道固。孝廉に擧げられ、孝文帝のとき秘書丞となる。前後六度、齊に使す。南人その養諤を奇とす。御史中尉に遷りしが、嚴酷を以て稱せらる。專恣を以て李冲を彈劾し、名を除かれて郷に還る。

(22) 崔光。初の名は孝伯。清河の人なり。家貧にして學を好み、晝耕夜讀、備書して親を養ふ。魏に仕へて中書博士となる。魏帝その才を稱して曰く、孝伯の才、浩々として黄河の東注するが如し、今日の文宗なりと。妖異ある毎に詔して光に問ふ。光みな詳對婉諫す。司徒中に累官し太保に進む。

(23) 邢辯。肅の從孫。少にして學を好み、清貧にして勵節、博く書史に通じ、また文才あり。魏に仕ふ。散騎常侍に累官し、次で尙書となる。

(24) 魏收。字は伯起。季景の族子なり。少うして機警、能く文を屬す。温子昇、邢邵と共に北朝の三才と稱せらる。北齊禪を受く。詔册の文及び魏史は收の撰なり。權史官となり、尙書左僕射に至る。

(25) 刁柔。字は子温。渤海の人なり。少うして學を好み心を儀禮に留む。博覽強記、古今の書を暗悉す。母の喪に居り孝を以て聞ゆ。國子博士となる。

(25) 慧文。北齊禪師または北齊尊者と言はる。章安灌頂以來、天台の祖と仰がるるも其の傳つまびらかならず。俗姓高氏。始め禪を修め、大智度論によりて心觀を修め、一心三智を證し、中道の義を悟ると。これ龍樹の觀法を繼承せしものなり。次で河淮の地を化導し、心觀を南岳禪師慧思に傳へ、一轉して天台大師に傳ふ。

(27) 慧文自ら記して曰く、我、河淮に獨歩せり。誰をか呼んで師とせん。若し經を得ば佛を師とし、若し論を得ば菩薩を師とせん。則ち大經藏に入り、香を燒き、花を散じて手を後にして之を取るに、龍樹菩薩所造の中觀論を得たり。論を開きて之を讀み、觀四諦品に至りて二十字一偈に會し、恍然として三諦の妙旨を悟り、以て南岳の慧思に授くと。天台一家の觀門にありては之を以て究竟の勘文となす。始終心要に曰く、夫三諦者天然三性德也。中諦者統一切法。眞諦者混一切法。俗諦者立一切法。心性不レ動假立ニ中名一、亡ニ泯三千ニ假立ニ空稱一、雖レ亡而存レ假立ニ假號ニと。

(28) 宇文泰。代の武川鎮の人なり。その先祖は匈奴の宇文氏。遼西に居り、慕容氏に亡されて燕に仕へ、慕容氏の北魏に亡さるるや代(山西省大同附近)に移る。少うして内亂の間に長じ、萬俟醜奴の關右に叛するや、賀拔岳に従つて關に入り、之を伐つてより關西に地歩を占む。その主將、岳の侯英、陳悅に殺さるゝや、代りて軍を統べ、勢威を増す。高歡、爾朱氏を破りて權を振ふや和せず、關の東西に對す。時に魏の孝武帝、高歡の壓迫により洛陽を去り、泰これを擁す。歡は孝靜帝を立つ。これ東魏なり。やがて泰、孝武帝を弑し文帝を立つ。文帝崩じ皇太子立つ。東魏にても高洋その主を廢して自立す。これ北齊の文宣帝なり。東魏の反將侯景、梁に入りて武帝に仕へ、後これに叛して帝を弑す。王族蕭緯、侯景を討つて誅し、江陵に於て即位す。これ元帝なり。泰、蜀に克ち、帝を廢して恭帝を立つ。次で梁の元帝を江陵に攻めて擒へて殺し、十餘萬を捕虜とす。蕭詧を立て、江陵に居らしめ、魏の附庸となす。かくて北周の基礎を築きて卒す。年

五十二なり。

(29) 蘇綽。字は令綽。武功の人なり。少くして學を好み、群書を博覽し、且つ算數に通ず。性儉素、産業を事とせず、家に餘財なく、天下を平にするを以て任とす。宇文泰に重用せられ、制度を確立す。その上疏文の如き、北史によるに自是之後、文筆皆依此體と。國家を憂ふるの餘り、遂に氣疾を患ひ、四十九歳にして卒す。太祖慟哭すと。佛性論、七經論の著あり。

(30) 唐六典。三十卷あり。唐の玄宗帝撰し、李林甫敕を奉じて註す。六典とは三師、三公、三省、九寺、五監、十二衛をいふ。その體例は六典の職司を列し、官佐はその品秩を敘す。

(31) 文武天皇の四年、刑部親王、藤原不比等に勅して律令を撰定せしめ、大寶元年に至りて成れり。律六卷。令十一卷あり。これを大寶律及び大寶令と稱す。また養老律令に對して古令、または前令といふ。

(32) 劉裕。南朝宋の太祖。その先は徐州の人なりと。曾祖父の時に京口に移る。戰亂の中に長じ、劉牢之、桓玄に迫られ憤死するや、玄に従ひて時を待つ。而して急に桓玄を襲ひ、玄、建康城を脱る。急追甚し。玄、四川に逃れんとして亂軍中に殺さる。これより建康にて安帝を立て晋室を復す。北伐して南燕、後秦を亡し、宋王に封ぜらる。義熙十四年、安帝崩じて恭帝立つ。年を越えて禪る。東晋亡びて宋新に興り、南北朝史の序を爲す。在位三年にして、永初三年崩す。年六十七なり。

(33) 王弼の易は玄虚と評せられ、老莊を玄學と稱す。嚴植之傳に少善三莊老一龍玄言とあり、沈峻傳に尤精三玄二とあり、張譏傳また篤好三玄言とあり。譏の著に玄部通義十二卷、游玄桂林二十四卷あり。

- (34) 王儉。字は仲賢。儒虞の姪なり。幼にして篤學。丹陽尹袁祭その名を聞き、之を見るに及んで宰相の才なり。松相豫章は小と雖も既に棟梁の氣あり、終に當に國家の事に任ずべしと。年十八にして秘書郎に拜す。齊に仕へて吏部を領し、また國子祭酒を兼ね。宋の世祖の文章を好みしより士大夫、政に専らなるものなし。儉、少うして讓學及び春秋を好み、言論造次必らず儒術に於てす。これによりて衣冠翦然として儒術を尙ぶ。儉かつて人に曰く、江左の風流宰相唯だ謝安ありと。意は以て自ら比するなり。齊王深くこれを委仗す。士流の選用、奏して可とせられざるなし。晋の中興より六世、名德海内の冠冕たり。毎に嘆じて曰く、維嶽降神、生甫及申と、天亦我が爲に儉を生ずるなりと。年三十八にして卒す。
- (35) 明山賓。僧紹の子。字は孝若。七歳にして能く玄理を言ひ、十三歳にして經史に通ず。累官して中書侍郎となる。初め青州所部平陸縣に臨む。歲歉なり。山賓、倉を開きて米を出し以て貧民を贖す。刺史、奏するに山賓の耗闕を爲すを以てす。有司追責して其の宅を籍して官に入る。山賓黙して自ら理せず。更に地を買ひ宅を造ると。
- (36) 陸璉。吳の人なり。天監五年、五經博士に補し、一館を主る。經を懷にし笈を負ふもの雲集す。
- (37) 沈峻。時人、敬山と字す。名聲あり。而も性儉吝なり。張溫、蜀に使す。布一端を贈つて曰く、以て卿を送らんと欲す。粗と爲す勿れと。
- (38) 嚴植之。字は孝源。補歸の人なり。少にして老莊を善くし、長じて鄒氏禮、周易、毛詩、左氏春秋を集む。謹みて長ずるところを以て人に驕らず。梁の天監中、五經博士となる。生徒常に數百。講總べて區段、次段ありて折理分明なり。後、中撫記室參軍に遷る。
- (39) 瑒賀。會稽山陰の人。字を德璉といふ。儒家に人となり、少くして名聲あり。武帝の時、五經博士となる。禮易老莊

講疏を著はせり。

(40) 李業興。長沙の人なり。博く百家、圖緯、風角、天文、占候に涉り、討練せざるなし。孝廉に擧げられ、校書郎となる。造曆の功を以て屯田縣子に封ぜらる。術業精微、當時及ぶものなし。

(41) 達磨。具さには菩提達磨。南天竺の婆羅門國王の第三子とも、ベルシャ人とも傳へらる。單に漢魏に遊化すと云はるゝも、初め宋境南越に達し、魏に至ると。百五十餘歳と傳へらる。嵩山少林寺に居し、面壁九年なりしと。傳詳ならず。

(42) 陳霸先。字は興國。小字は法生。吳興長城下若里の人なり。梁の武帝に仕へて大同年中、高陽の太守となり、次で交州刺史となる。侯景反するや、名將王僧辨と之を討つ。簡文帝、景の弑するところとなり、湘東王、位に即く。元帝なり。北方襄陽の岳陽王詵、西魏に降り、その兵により元帝殺さる。霸先、元帝の子方智を立てんとし、王僧辨は蕭淵王を梁王とし、方智を太子たらしめんとし、兩者和せず。霸先、遂に僧辨を殺し方智を立つ、敬帝なり。自ら丞相となり、相國陳公となり、帝の禪りを受けて帝位に即ち、國號を陳とし、建業に都して、永定と改元す。在位三年にして崩す。年五十七なり。

(43) 劉焯。字は士元。信都昌亭の人なり。性聰敏沈深。少うして劉焄と友として好し。相ひ共に詩を劉執思に、左傳を郭懋常に、禮を應安生に受け、後に武強の交津橋なる劉智海、藏書多きを以て借覽すること十年、その間、衣食に窮すと雖も晚學し、遂に儒を以て知られ隋に仕ふ。後、諸儒の妬恨に遭ひ、郷に歸る。天下、焄と共に二劉と稱す。惜しむらくは財貨に吝にして惡名を残せり。

(44) 劉焄。字は光伯。河間景城の人なり。少うして明敏。劉焯と共に戸を閉じて書を讀むこと十年。用ひられんとして吏部に至る。史部尙書韋世庸その能を問ふ。焄答へて曰く、周禮、禮記、毛詩、尙書、公羊、左氏、孝經、論語、孔鄉玉何

服杜の註凡そ十三家、その義に精粗ありと雖も並に講授に堪ふ。周易、儀禮、穀梁は之を修むること稍少し。史、子、文集、嘉言、故事悉く心に誦し、天文律曆はその微妙を極め、公私の文翰に至つては未だ嘗て人の手を假らずと。殿内將軍に至る。時に牛弘、天下の佚書を購はんことを奏す。炫、百餘卷を僞造し、連山易、魯史記等と稱す。賞を得て後、その僞作なることを訴ふる者ありて、死罪に行はれんとして繼に許さる。郷に歸りて教授す。後、門人にして盜たる者あり。時人累の及ばんことを懼れて炫に接する者なく、爲に凍餒して死す。著多し。

(45) 後に解を出す。

(46) 三經は勝覺經、法華經、維摩經なり。日本書紀、推古天皇を請じて勝覺經を講ぜられしを十四年と記す。法王帝説に曰く、戊午年(六年)四月十五日、天皇請上宮王、令講勝覺經、其儀如常也、諸王公主及臣連公民、信受無不嘉也、三箇之内講説訖也とある方信すべきが如し。即ち聖德太子、慧慈を師として勝覺經を受けしは前年即五年なり。太子傳補闕記の二年業成とは是なり。勝覺は天竺の沙門摩訶衍、宋の元嘉年間に譯せる一卷にして、實に聖德太子二十五歳のことなり。これより八年を経て十四年、同本宮に於て法華經を講じ給ふ。而して此の御り賜はりし布施、法隆寺の寺田となれり。次に維摩經を講じ給ふ。後、學問寺なる法隆寺に於て三經の註疏を編せらる。これ吾國著述の起原なり。聖德太子の三經義疏、早く支那及び朝鮮に傳はり、法王帝説に據るに、推古天皇二十三年、慧慈歸國するに當り、三經義疏を携ふと。而して支那に渡りしは勝覺と法華なり。また唐の大曆七年、わが國の使僧二人誠明と得清とは、揚州の龍興寺の靈祐に上宮義疏を贈りしと、光仁天皇の寶龜四年なること舊記に見ゆ。後、天台の荆溪湛然の門下明空、勝覺經義疏私抄を著はし、太子御疏の影響を蒙ること歴然見るべし。

第二十四章

南北朝は隋によつて統一された。

隋の始祖は楊堅（文帝）である。後漢の太尉楊震の後裔である。その祖先は世々、後魏に雇任して来た。父は忠。母は呂氏。西魏の大統六年六月に生れた。父の忠は北周の太祖に従ひ、功を以て隋國公に封せらる。武帝即位するや、子の楊堅は隋州刺史大將軍となり、續いて父の爵を襲つた。武帝の信任厚く、堅の長女を以て皇太子贊（後の宣帝）の妃となした。太子闡（靜帝）生る。傳によると楊堅は相貌奇異、丞相ありと評せられ、屢々、その異志を抱くと傳へられたが、深く自ら頼晦して巧みに難を遁れてゐたのである。宣帝即位するや外戚を以て威望あり、宣帝の歿後、靜帝立つや、朝政を統べ、大丞相となり、黃鉞を假せられ、相國、隋王となり九錫を加ふ。大定元年二月、靜帝の禪を受けて帝位に即く。開皇と元を立て隋と國號を稱す。周の朝政を總べてより九月、歷代纂叅史上稱に見る短日月の記録をなす。堅に反するの將兵、周の諸王等悉く誅せられ、靜帝を始め宇文氏の族すべて殺戮された。開皇八年、南伐して南朝の陳を亡し、遂に南北統一を成就した。晋室の南渡以來、二百七十三年にして支那全土は一つに歸したのである。

文帝の統一策は、北周の法制を改革し、前代の周禮模倣を廢して、再び漢魏の制を復活した。而して其の統一策のイデオロギーとしては佛教を利用した。私は其の宗教政策が隋國の基礎となつたと觀察してゐるのである。

従つて文帝は統一成るや、大いに學校を起し、學者を集め、文運漸く興隆に至らんとする機運に恵れたのである。しかしながら文帝は後年に及んで老莊を好み、儒教を次第に喜ばざる風があつた。楊素⁽⁵⁾の讒言を納れて太子勇を廢し、晋王廣（煬帝）を太子としたが、仁壽七年七月、勇のために弑され、文帝の雄大な構想としての郡縣制は遂に隋代を通じては實現を見るに至らなかつた。次の唐代に及んで、太宗の封建制が確立したのである。

隋にあつては支那佛教史に燦然たる存在を確立した天台大師が現れた。北齊の慧文によつて起り、陳の慧思によつて繼承せられ、隋の智顛によつて大成された天台宗は、法華と四論によつて開かれた。智顛は梁の武帝の普通三年に生れ、隋の文帝の開皇十七年に示寂したが、ヨーロッパが未だ野蠻と無智の暗黒時代にある六世紀の頃に、アジヤ的方法論⁽⁴⁾によつて佛教を大系付けた組織的頭腦は驚くのではない偉大なる思想家であつた。ともかく稀有な奢侈淫逸によつて隋の國を亡し、後世まで其の甲斐ない名を傳へてゐる煬帝は、しかしながら佛教の爲め⁽⁵⁾、また學問の爲めに意を注いだ⁽⁶⁾ことは争はれないのである。この時代の易學者としては何妥を擧げることが出来る。

何妥は字を棲鳳といひ、西域の人である。従つて異民族の出である。その父の細朝、通商のため蜀の國に往來し、中央アジヤから移つて郷縣に永住した。何妥は其所で生れたらしい。少うして才名あり、遂に隋の統一成るや、仕へて國子祭酒になつた。この事實は易學史の上に現れた幾多の學者の中で異數の一人と言ふことが出来る。かつて曰く、蘇威⁽⁷⁾は信任すべからずと。また八事を論じて上り、威大衡の龍州刺史たらしめることの不可を

諫めた。かゝる點でも非常な卓見を藏した人物であつたことが推測されるのである。その著に周易講疏があり、他に孝經義疏、莊子義疏がある。

煬帝は前章で傳した二劉（劉焯、劉炫）を重用したが、彼等の學問的努力は、南北朝の統一といふ政治的行動の線に添ふて、北學を亡し、南學によつて統制する根幹を爲したのである。故に隋書經籍志に曰く

易至隋王註盛行、鄭學浸微、今殆絕矣。書孔鄭並行、而鄭甚微。春秋杜氏盛行、服義及公羊穀梁浸微。今殆無師說。

といふ。制度に於て漢魏の復興を見ながら、その學的傾向は却つて南學に奔つたといふことは一見奇なるかに見へるのである。

これ等の時代を通じて、遂に官に仕へなかつたが爲に、正史には其の名をとどめなかつたが、民間に隠れた大儒が存在したことを忘れることが出来ない。その人こそ王通(8)である。

王通。字は仲淹。隋の開皇四年、絳州龍門(9)に生る。その父、これを筮して坤の師(8)に之(9)に遇ひ、之を祖に告ぐ。祖曰く、是れ素王の卦なり。君徳ありと雖も、その時に非ず。是の子、必らず能く天下の志を通ぜんと。即ち命名して通と云ふと。

六歳の時、開皇九年、陳亡ぶ。父の伯高、歎じて曰く、王道叙無し、天下何すれぞ一となるかと。通かたはらに在りて曰く、通これを聞く。古の邦を爲むるもの長久の策あり。故に四海つねに一統す。後の邦を爲むる者、

苟且の政を行ふ。故に魏晉以下數百年、定主ある無し。一是一非、何の當か之れ有らんと。伯高これを異とし、遂に告ぐるに元經(10)の事を以てす。通これを拜して受く。これより書を東海の李育に受け、詩を會稽の夏瑛に學び、禮を河東の關子明に問ひ、樂を北平の霍汲に正し、而して易を放父仲華に就きて究め、衣を解かざること實に六年有餘といふ。その勤勉なること斯の如きであつた。仁壽三年冠し、慨然として民衆を救ふの志を立てた。而して遙かに長安の都に赴き、文帝に見へて太平策十二を上奏した。帝、大いに之を悦んで曰く、天、生を以て朕に賜ふなりと。その策を公卿に下して議せしむ。時に太子勇をめぐつて蓄驕の禍あらんとした。通その策の容れられざるを悟つて去つた。翌年、晉王廣、帝を弑して位に即く。太業元年、煬帝これを徵したが至らず。河汾に歸臥して起たなかつた。それより後、孔子の業を紹ぐを以て自ら任じ、詩書を續ぎ、禮樂を正し、元經を修め、易を讀し、九年にして成ると。即ち禮論十卷、讀書二十九卷、續詩十五卷、而して讚易十卷である。元經五十篇あつたが傳はらない。また論語に擬して中說十卷がある。中說は王道、元地、事君、周公、問易、禮樂、魏相、立命、關朗の十篇であつて、多く問答體であつて格言多く、また儒佛老の三教合一を説くを以て特色としてゐる。屢々、召命あつたが就かず。大業十三年（義寧元年）病歿した。時に三十四歳である。門人等、孔子の文をして今に在らしめし徳を慕ひ、易の坤の六五、象辭の黃裳元吉文中也に基いて、文中子と謚した。

王道の名、四方に聞ゆるや、集ひ寄る門下生は遠方より數百人を過ぐと。門人杜淹(11)の文中子世家によれば、高名なる弟子の名を擧げてゐるが、河東の董常(12)、太山の姚義、京兆の杜淹、趙の李靖(13)、南陽の程元、扶風の竇威、

河東の薛收⁽¹⁵⁾、中山の賈瓊、清河の房玄齡⁽¹⁶⁾、鉅鹿の魏徵⁽¹⁷⁾、太原の溫大雅⁽¹⁸⁾、潁川の陳叔達⁽¹⁹⁾などであり、また中説の關朗篇に六藝に通ずる門下生の名を擧げてゐる。即ち禮に於て竇威、賈瓊、姚義であり、樂に於て溫彥博⁽²⁰⁾、杜如晦⁽²¹⁾、陳叔達であり、書に於て杜淹、房喬、魏徵であり、詩に於て李靖、薛方士、裴晞、王珪⁽²²⁾であり、元經に於て叔恬であり、六經に於て董常、仇璋、薛收、程元などである。就中、唐朝の王佐の名臣、高儒は殆んど皆な王通門より輩出したといふ事實は、特筆に値するのである。

王通が如何に優れてゐたか、而して如何に門下生等に影響を與へたかに就いて見るのは興あることであらう。即ち事君篇に其の日常の起居動作を記して曰く

子間居儼然、其動也徐、若^レ有^レ所^レ慮。其行也方、若^レ有^レ所^レ畏。其接^レ長也、恭々然如^レ不^レ足。接^レ幼者、溫々然如^レ有^レ就。子之服、儉以絮、無^レ長物^一焉。綺羅錦繡、不^レ入^レ于室。曰君子非^レ黃白^一不^レ御、婦人則有^レ青碧^一、子宴^レ賓、無^レ貳饌^一、食必去^レ生、味必適。果果菜非^レ其時^一不^レ食、曰非^レ大道^一也。非^レ其土^一不^レ食、曰非^レ地道^一也。鄉人有^レ窮而素者、曰爾於^レ我乎取、無^レ擾^レ爾隣里鄉黨^一爲^レ也、我則不^レ厭。鄉人有^レ喪、子必先往、反必後。子之言、應而不^レ唱、唱必有^レ大端^一。子之鄉無^レ爭者^一、或問^レ人善^一子知^レ其善^一、則稱^レ之、不善則曰、未^レ嘗與久^一也。子濟^レ大川^一有^レ風則止。不^レ登^レ高、不^レ履^レ危、不^レ乘^レ悍、不^レ奔馭^一。鄉人有^レ水土之役^一、則具^レ盂錡^一以往、曰吾非^レ從^レ大夫^一也。

斯の如くに謹嚴、斯の如くに寛容、斯の如くに儉素、眞に聖人に近しと言はなければならぬ。

魏相篇に、龍門關の吏たりし仇璋の語に曰く

吾視ニ其類類ニ如也、重而不_レ元。目燦如也、澈而不_レ瞬。口敦如也、闕而不_レ張。鳳頸龜背。鬚垂至_レ腰、參如也、與_レ之行、俯然而色卑。與_レ之言、泛然而後應。浪鷲施旋而不_レ懼、是必有_ニ異_レ人者_ニ也。吾聞_レ之、天下無_レ道、聖人藏焉、鞠躬守_レ默、斯人殆似也。

と。その風貌見るが如くに描き盡してゐる。けれども三十歳の王通の鬚が、參如として垂れて腰の邊に至つてゐたといふが如き支那式な描寫は私は取らない。斯様なことからして王通の存在を抹殺する説も出て來たものであらう。⁽²⁵⁾

(1) 黄金にて飾れる大なる錢(まさかり)は天子の征伐に用ふ。威嚴を示すものなり。書經、牧誓に曰く、王左杖_ニ黃錢_ニ、右秉_ニ白旄_ニ、以_レ麾と。

(2) 大功ある者に賜はる九品にして漢書、武帝紀註に曰く、一に車馬、二に衣服、三に樂器(一に樂則)、四に朱戶、五に納階、六に虎賁、七に鉄鉞、八に弓矢、九に租鬯(祭に用ふる酒)なりと。

(3) 楊素。字は處道。才、文武を兼ね、志また遠大にして、功名を以て自ら許す。周主これに謂ひて曰く、富貴ならざるを憂ふる勿れと。素答へて曰く、臣、富貴を圖るに心無し。但_レ富貴の臣に通るを恐るのみと。高祖に従ひ天下を定む。群臣その右に居る莫し。功を以て上柱國を加へ、越國公に封ぜらる。

(4) 天台大師は其の三大部により教(理論)觀(實踐)二門の規矩を示す。法華玄義に於て法華大義を論じ、五時八教の方

法論を展開す。法華文句に於て法華の意味を解釋するも、前者は唯物論的であり、後者は唯心論的なり。而して摩訶止観に於て宗教的修行を陳べたり。

(5) 煬帝また佛教を厚く信じ、開皇十一年、金城殿に千僧會を設け、天台大師に懇請して菩薩戒を頂受し、智顗大師の號を贈つて、天子自ら弟子と稱せしは此の砌りの事なり。

(6) 煬帝また學を好み、逸書を集むるを喜ぶ。既にして嘉期殿の藏書三十七萬卷(新唐書藝文志)と稱す。太業の末年に至りて亦多く喪失すと。

(7) 蘇威。綽の子なり。邪國公に封ぜらる。高顯と同心協贊す。江南平ぐ。五教を作り、民をして之を誦せしむ。

(8) 坤爲地なり。☷

(9) 地水師なり。☵☵

(10) 元經。十卷あり。隋の王通の撰なり。唐の薛收、續撰し、宋の阮逸これに注すと傳へらるるも、實は昔な阮逸の僞作なりといふ。此の書は孔子の春秋に倣ひ、前九卷には晋の太熙元年より隋の開皇九年までの史實を記し、最後の一卷は唐の武徳元年までの記事を載す。

(11) 杜淹。字は執禮。如晦の叔父たり。才辨あり。貞觀年中、檢校吏部尙書となる。

(12) 董常。一説に江南の人なりと。王通に師事し、天折す。周易篇に曰く、董常死、死哭し之、終日不絶と。師に重用せられしこと見るべし。

(13) 李靖。字は藥師。三原の人なり。容貌魁偉、かつて所親に謂ひて曰く、大丈夫、功名を以て富貴を取るべし。何ぞ章

句の儒となるに至らんと。その舅、韓擒虎ともに兵を論じて曰く、共に孫吳を語るべしと。唐の貞觀中、靖を以て特進となす。靖、病を以て遜る。上曰く、朕、公の意を嘉し、公を以て一代の摸楷となさんと欲すと。靖、將相に出入し、功業甚だ偉なり。衛國公に封じ、景武と諡す。肖像を凌煙閣に圖す。弟客師、累職、功あるを以て丹陽郡公に封ぜらる。

(14) 竇威。毅の子なり。字は文蔚。岐州の人。性沈澁にして器局あり。博く群言を見る。諸兒戯りて書痴となす。高祖、關に入り、召して丞相府司錄參軍に補す。既にして内史を授く。政事を論ずる毎に得失必ず古を陳じて驗と爲す。中書令となる。

(15) 薛收。字は伯褒。道衡の子なり。年十二にして王道に學ぶ。唐初、秦王府の主簿たり。從ひて王世充を討つ。劉黑闥を平ぐるに及びて、收、爲に檄を露布に書す。或は馬上に於てす。古話みな敏なること素稱の如し。後、封じて涪陰侯となす。收、早く卒す。太宗即位し房玄齡に語りて曰く、收、若し在らば當に中書令を以て之に處すべしと。

(16) 房玄齡。字は喬孫。世々、臨淄に居る。彥謙の子なり。幼にして慧敏。年十八にして進士に第す。高孝基、裴矩に謂ひて曰く、僕、人を見る多し、未だ斯の如き郎あらず。當に國器たるべしと。武德年中、唐の太宗、秦王となる。玄齡を引きて記室と爲す。墳典を博綜し、能く文を屬し、兼ねて草隸を善くす。十八學士の首席たり。また征伐に従ひ、獨り人物を收めて幕府に置く。尙書左僕射に累官し、宰相たること十五年なり。任公端節、世その賢を稱す。年七十にして卒す。太尉を贈り、文昭と諡す。玄齡かつて微賤の時、病みて死せんとす。その妻に謂ひて曰く、吾病ひ草り、君未だ年若し。寡居すべからず、必らず能く後夫に事へよと。盧氏泣いて帷中に入り、一眼を剔りて玄齡に示し、再嫁の意無きを示す。病癒えて後、これを禮して身を終ふと。盧氏の貞節聞ゆ。また玄齡世に出でて家を治むるに、つねに子孫の驕縱を憂へ、

則ち古今の家範を集め、書して屏風を造り、各々諸子に一具を頒つて曰く、此を了せば以て其の徳を世々にするに足ると。

(17) 魏徴。字は元成。或は曰く玄成と。下曲陽の人なり。唐の太宗の時、諫議大夫に拜せらる。徴、風彩揚らず、而も膽勇なり。龍顔を犯して敢諫す。上怒ること甚しと雖も、徴、神色自若たり。上もまた徴が爲に震威す。かつて上塚に謁告して避る。曰く、人は言ふ、陛下、南山に幸せんと欲す。外皆な嚴装已に畢る。陛下、竟に行かざるは何ぞや。上、笑ひて曰く、寔に此の心あり。卿を畏る。故に中にして輟むのみと。また上かつて雀鷁を得て自ら之を臂にす。魏徴の來るを望見し之を懷中に匿す。徴、事を奏す。ことさらに久しくして已まず。鷁つひに懷中に死す。徴、前後凡そ二百餘奏を上るに剴切にして帝の心に當らざるもの無し。後、秘書監を以て朝政に參與す。卒するに及び、帝、嘆じて曰く、銅を以て鑑となせば衣冠を正すべし。古を以て鑑となせば興替を見るべし。人を以て鑑となせば得失を知るべし。徴没す。朕、一鑑を失ふと。凌烟閣に登り、畫像を見て詩を賦し痛悼すと。鄴國公に封じ、文貞と諡す。かつて隋書本紀外傳を撰す。

(18) 温大雅。字は彦宏。第二人ともに高名なり。薛道衡これを見て曰く、三人皆な卿相の才なりと。董常等と河汾に至り、王通に師事して王佐の道を受く。太宗の朝、大雅、黎國公に封ぜらる。

(19) 陳叔達。字は子聰。武徳年中の初め、判納言たり。かつて葡萄を賜ふ。食はず。帝これを問ふ。答へて曰く、臣の母、渴を病み、葡萄を求むれども致す能はず。願くは之を奉らんと。

(20) 温大臨。字は彦博。大雅の次第なり。三弟大有、字は彦將と共に才名あり。

(21) 杜如晦。字は克明。少うして英邁、大節を負ふ。高孝基これを見て曰く、君まさに棟梁の用たるべし。願くば令徳を

保てと。また房玄齡曰く、如晦は王佐の才なりと。唐の太宗位に即き、右僕射に進め、元齡と共に朝政に參ず。房は善く謀り、杜は善く斷ず。二人知己たり。當世、良相を稱すれば必ず房玄齡、杜如晦となす。皮目休が五言絶句に歌ふ有り。曰く

吾愛杜與房

貧賤相聯步

黃閣三十年

清風一萬古

遂に秦國公に封ぜらる。子、觀荷、貶死す。次子楚咨、工部尙書たり。五世の孫元穎、元穎の姪審權、審權の子讓能、讓能の子曉、五代にして五人、宰相たり。

(22) 王珪。字は叔玠。祁縣の人なり。唐の太宗の時、諫議大夫となる。忠直敢言。上かつて曰く、卿、讒鑑精通、また談論を善くす。房玄齡以下の數子と何れと。答へて曰く、孜孜として國に奉じ、知りて言はざるなきは臣、房玄齡に如かず。才文武を兼ね、入りては相たり、出で、は將たるは臣、李靖に如かず。敷奏詳明、出納これ允なるは臣、温大臨に如かず。煩に居て劇を治め、衆務よく舉がるは臣、戴胄に如かず。君の堯舜の如くならざるを恥ぢ、諫諍を以て己が任と爲すは臣、魏徵に如かず。而して濁を激し、清を揚ぐるに至りては臣、數子に於てまた微長ありと。上これを嘉みす。子敬、公主に尙す。これより先、公主の下嫁するは皆な婦禮を以て舅姑に仕へず。珪曰く、主上欽明、動きて法度に循ふ。吾、公主の謁見を受くる豈に身の榮の爲ならんや。國家の美を成す所以なりと。即ち妻と共に就き、公主をして婦禮を行はしめたり

と。

(23) 正氏揮塵錄に曰く、文中子隋末大儒、歐陽文忠公、宋景文修^二唐書^一、房杜傳中、略不^レ及^二其姓名^一、或云、其書^二阮逸偽作^一、未^レ必有^二其人^一、然唐李習之嘗有^二識文中子^一、而劉禹錫作^二王華卿墓誌^一、序載^二其家世行事^一甚詳、云門多^二偉人^一、則與^二書所^レ言合矣、何疑之有、又皮日休有^二文中子碑^一、見^二於文粹^一と。(文獻通考)

第二十五章

唐は多くの人の知れる如く高祖（李淵）より哀宗に至るまで二十世、實に二百九十年、支那に於て最も高度な文化を生むだ時代である。

漢魏以來、國學は太常に屬してゐたが、後周の時代に太宗伯に屬せしめた。隋の文帝の時に至つて國子寺を以て一つの官と爲したが、後に寺を改めて學とした。煬帝は學を改めて監となしたが、唐の高祖は之を其の儘に踏襲した。武徳元年、皇族の子孫、功臣の子弟に詔して、秘書外省に於て小學を立て、子弟の訓育に充てた。高祖が儒學を重んじた意志が、唐代に悉く生きてゐるのは珍らしいことである。即ち七年、州、縣、郷に詔して學校を置かしめ、一經以上に明らかなる者があると、有司は試験して階叙を加へるのである。それは太宗の貞觀五年、唐の組織が整備すると共に完備した。同年、國學に行幸して學舎、國學、太學、四門を増築し、學生を増加し、書及び算にも各博士を置いた。凡て三千二百六十員、屯營飛騎にもまた博士を給して經學を授けしめ、學の普及を圖つた。この爲に朝鮮、高昌、西域の吐蕃等の諸國も亦、子弟を遣はして入學せしめるといふ風で、吾が國も亦、遣唐留學生を派したことは普く知るところであらう。羽田亨博士の西域文明史概論によると、獨逸のル・コック（ル・コック）によつて吐蕃（ツル）の西の雅爾湖（ヤル）から發掘せられた回鶻文（ウイグル）の易經があることを記されてゐるが、この事實は、高昌を根據地として西域に發展した回鶻部族の文化程度を物語るものである。このやうな發展相を語るもの

としては當時、國學に八千餘人の學生が居たと傳へられてゐる。

唐の制度では六學、即ち國學、太學、四門學、律學、算學、書學は皆な國子監に屬した。國子監は學生三百人で、文武の三品以上の子孫、もしくは従二品以上の曾孫、勳官二品、縣公京官四品帶三品勳封の子が入學を許可された。また太學生は五百人で五品以上の子孫、現職官吏五品の親戚、三品の曾孫、勳官三品以上の有封の子が許可された。四門學生は千三百人で、その五百人は勳官三品以上無封、四品有封、文武七品以上の子が許可された。八百人は人民中の俊才が許可された。律學生は五十人、書學生は三十人、算學生は三十人、共に八品以下の子、あるひは人民中の其の學に通ずる者を許可した。

京都の學生は八十人、下州は四十人、京縣は五十人、上縣は四十人、中縣中下縣各三十五人、下縣二十人を收容した。而して國子監生は尙書補祭酒が之を統べる。州縣の學生は州縣の長官補長史が之を司る。凡そ館が二つある。また門下省に弘文館生三十人がある。東宮には崇文館生二十人がある。これは皇族の親近なるもの宰相及び散官の一品現所有者、京官の現職三品黃門侍郎の子が許可される。而して凡そ諸の學校には皆な博士助教がある。その經藝は毎年仲冬に郡縣の館監が其の出來る者を試験し、長吏は屬寮を會し、郷飲の禮を設けて之を尙書省に送るのである。教師及び事務員は國子監は祭酒一人にして従三品、同業二人にして従四品下、承一人にして従六品下、主簿一人にして従七品下、錄事一人にして従九品下、府七人、史十三人、亭長六人、掌固八人である。國子博士は二人にして正五品上、助教二人にして従六位上、典學四人、廟幹二人、掌固四人である。太學博

士は三人にして正六品上、助教三人にして從七品上、典學四人、掌固六人である。四門博士は三人にして正七品上、助教三人にして從八品上、典學四人、掌固六人である。國子直講は四人、大成十人である。律學博士は一人にして從八品下、助教一人にして從九品上、典學二人である。書學博士は二人にして從九品下、典學二人である。算學博士は二人にして從九品下、典學二人である。

國子監、太學、四門學は大體同じ學料であつたが、易に關しては鄭玄及び王弼注を採用して、之を小經と唱へ、二年間學修せしめたのである。而して以上の三監より出身するものを明經といひ、その他に秀才、俊士、進士、明法、明字、明算があり、更に三史、一史、開元禮、道舉、童子の科があつた。しかしながら後には明經科は餘り流行せず、進士の方が盛んになつた。何故なれば、明經は經書研究するばかりでなく暗記をしなければならず、明らかに學の範圍が限定されるに反し、進士の方は文を能くすれば足りるので、従つて自らの才能を自由に發展せしめることが出来たので、頭腦の明敏な英材は悉く此の方面に奔つたのである。易學史に扱はれる人々の傳に、あるひは明經、あるひは進士に第するとは之を指すのである。

不世出の英傑であつた太宗の李世民は、その未だ秦王であつた時に既に、文學館を開き、文學の士を聘した。即位の後、弘文館を開き、杜如晦、房玄齡、虞世南、褚亮、姚志康、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、干志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、許敬宗、蓋文達を十八學士と號し、これを三番に分ち、交互宿直して經義を講じ、古今の得失を商議して、遂に夜に至つて乃ち罷むと傳へられてゐる。而して當代の巨匠闔

立本⁽¹⁵⁾をして十八學士の畫像を描かしめ、同じく十八學士の一人なる褚亮をして之が贊を爲さしめ、御府に藏して以て賢を禮するを彰顯した。天下の士大夫、皆な其の選に入るを榮となし、羨稱して之を登瀛洲と言つたといふことが新唐書褚亮傳によつて知ることが出来るのである。

經籍志に關しては、前漢書の藝文志に次いで異彩があり、且つ權威あるものとしては隋書の其を擧げなければならぬ。四庫全書の提要に曰く

後漢以後の藝文、惟、是に藉りて以て源流を考見し、眞僞を辨別す。亦、小疵を以て病とならず⁽¹⁶⁾と評する所以である。

即ち、唐の太宗の貞觀三年、魏徵等に詔して隋史を修せしめ、魏徵は顏師古、房喬⁽¹⁷⁾、孔穎達などをして編みあげからしめ、帝紀五卷、列傳五十卷を貞觀十年に成す。貞觀十五年また詔して長孫無忌⁽¹⁸⁾、于志寧、李淳風⁽¹⁹⁾、韋安石⁽²⁰⁾、李延壽⁽²¹⁾、令狐德棻等に命じて五代志(梁陳齊周隋)十志三十卷を撰せしむ。太宗の歿後、これを前の隋書に編入して、總て八十五卷である。そのうち經籍志は四卷で、擧ぐるところの書六千五百二十部、實に五萬六千八百八十一卷である。そのうち經(經、史、子、集)の部に見へる周易六十九部、五百五十一卷で、亡書を合すれば九十四部、八百二十九卷を擧げてゐる。即ち瀧熊之助氏の分類表に基いて、易に關する物のみを轉載すると次の如くである。

周易十卷

京房章句

西漢

周易八卷

孟喜章句

東漢

周易九卷

鄭玄注

周易五卷

劉表注

周易十一卷

荀爽注

周易十卷

荀爽九家注

周易十卷

王肅注

魏

周易十卷

王弼注（繫辭傳以下韓康伯注）

周易盡神論一卷

鐘會撰

周易十卷

姚信注

吳

周易九卷

虞翻注

周易十五卷

陸績注

蜀

周易十卷

才注

歸藏十三卷

薛貞注

周易四卷

黃穎注

周易十卷

于寶注

周易三卷

王廙注

晉

周易繫辭二卷

謝萬注

周易二卷

韓康伯注

周易象論三卷

變瓌撰

周易卦序論一卷

楊又撰

周易統略五卷

鄒湛撰

周易論二卷

阮渾撰

周易論一卷

宋倍撰

東晉

周易晉一卷

徐邈撰

周易一卷

弘範撰

宋

周易義一卷

周易問二十卷

周易義疏十九卷 (明帝群臣の講論を集む)

周易論十卷

周顒注

周易乾坤義一卷

劉瓛撰

周易繫辭義疏二卷

劉瓛撰

齊

第二十五章

周易十卷 何胤注

周易繫辭二卷 宋褰注

周易大義二十一卷 武帝撰

周易講疏三十五卷 武帝撰

梁 周易幾義一卷 南平王撰

周易講疏十六卷 褚仲都撰

周易義疏十四卷 蕭子政撰

周易繫辭義疏三卷 蕭子政撰

周易一卷 武帝撰

陳 周易講疏三十卷 張譏撰

周易義疏十六卷 崔弘正撰

後魏 周易十卷 崔浩注

隋 周易講疏十三卷 何妥撰

この序に唐代の典籍修撰に關して少しく記して置かうと思ふ。高祖の武德五年、令狐德棻の上疏に曰く、今乘喪亂之餘、經籍亡逸、請購募遺書、重加錢帛、增置楷書、專令繕寫」と。また太宗の貞觀二年、魏徵奏して

曰く、以三喪亂之後、典章紛雜、奏引學者、校定四部書と。而して魏徵は更に四部書の校正をも勧めた。四部書とは前記の弘文館に置かれた經、史、子、集の秘書で、この上奏は當代に實現しなかつたが、三世高宗の乾封元年に趙仁本、李懷儼、張文瓘等の學者の手によつて實現した。五世睿宗の景雲三年には、天下の經籍の殘缺してゐるものを探らせた。六世玄宗の開元七年には緒無量、馬懷素等によつて内庫の整理が行はれた。太宗より數代の間、弘文館の四庫の書籍冊數に就ては明瞭ではない。しかし玄宗の開元九年の調査によると、總計八萬一千九百九十卷あつた事が知られてゐる。即ち經庫に一萬三千七百五十三卷、史庫に二萬六千八百二十卷、子庫に二萬一千五百四十八卷、集庫に一萬九千八百六十九卷を數えることが出来る。然るにそれから十三年の後、天寶三年の調査によると、内亂の影響などの然らしむるところかもしれないが、經庫には七千七百六卷、史庫に一萬四千八百五十九卷、子庫に一萬六千二百八十七卷、集庫に一萬五千七百二十二卷を藏するに過ぎないことが知られて居るのである。此にも戰爭の文化破壊の跡を見出すのである。けれども然し、古い時代の文化は斯の如き書物の喪失によつて消滅する一方、新しい文化がその灰の中から誕生することも文化の性格、文化のエネルギー、文化の運命として觀することが出来るのである。何となれば唐代の修撰した典籍にして、今日まで歴然として残つてゐるものも少くないからである。即ち高祖の武德七年、歐陽詢は詔を奉じて藝文類聚一百卷を編纂した。また太宗の貞觀五年には魏徵は群書治要五十卷を著し、十三年には李襲譽は忠孝圖二十卷を著し、十五年には申國公等は文思博要千二百卷を撰し、二十三年には太宗自ら帝範十三篇を著してゐる。また高宗の永徽三年、顏師古は匡謬正

俗八卷⁽³⁶⁾を著し、顯慶二年には許敬宗は文館詞林一千卷⁽³⁷⁾を著し、また玄宗の開元十五年には徐堅は詔を奉じて初學記二十卷⁽³⁸⁾を編し、二十七年には張九齡は詔を奉じて唐六典三十卷⁽³⁹⁾を編し、八世僖宗の大曆十二年には顔真卿は韻海鏡原三百六十卷⁽⁴⁰⁾を著し、九世德宗の貞元十九年には杜佑は通典二百卷⁽⁴¹⁾を撰した。

唐の經學史上に於ける最も大きな事績は五經正義の制定でなければならぬ。しかしながら五經正義成立の序曲をなすところのものは顔師古の五經正文の考定これであつた。太宗は、經籍が聖人を去ること既に遠く、従つて儒家の門流多岐に亘り、各家各説を固執し、章句また繁雜に過ぐるを慨し、顔師古に命じて五經を秘書省に於て考定せしめた。貞觀四年のことである。稿成つて太宗、これを諸學者に示すに、多く自説を固持して師古の説を肯定しない。仍て師古は晋宋以來の今古文を擧げて説明し、漸く諸學者の諾ふところとなつたと言はれて居る。これ五經正義中の今定本である。

顔師古の本文が學界に受諾されることになつて、貞觀十二年、國子祭酒の孔穎達等に命じて五經の疏すべて百八十卷を撰せしめた。史家は此の撰定を目して三國以後の義疏學の集大成であり、従つて南北朝經學の總和であり、それが定本となつたところの南學をして、全國的なる規模に於ける統一を完成したものとみなすのである。前漢以來、屢々、見て來た如く斯の如き學的統一の形態は、毎にその時代の政治的動向を反映し、政治的統一の線に沿ふて發展したところの學問が、常に決定的に當代の思想を指導するものであることを知るであらう。鄭氏易が王氏易に取つて代られたのは、學的根據よりも、異民族である前朝で採り上げた鄭氏易を、漢民族である唐朝

の興隆によつて、南方に於いて重要した王氏易が驕逸したに過ぎない。南北の政治的均衡が破れ、隋並びに唐の統一は、政治的對立と共に學的對立を止揚したのである。

舊唐書の儒學傳に、太宗又以三經籍去^レ聖久遠多^レ訛謬、詔^レ前中書侍郎顏師古、考^レ定五經、頒^レ於天下、命^レ學者習^レ焉云々とある記事などを見ると、顏師古が正義編輯の主であるかの如き印象を受けるが、各經の序が孔穎達に出るところを見ると、彼が主であつたと言ふべきであらう。のみならず新齊唐書、唐會要、冊府元龜、また永徽年中の長孫無忌の上表中に孔穎達が撰定の主任であつたとする記事は動かしい證左である。

五經義訓、はじめ義贊と名づけ、後、詔あつて正義と改めたといふことが新唐書卷百九十八、孔穎達傳によつて知られる。しかしながら何故に、詔あつて正義と改題したかは分明しない、それ故に清の左暗⁽⁴¹⁾などは、後漢の桓譚⁽⁴²⁾が世祖が讖を信するのを憂へた上疏文に曰く

陛下宜^レ垂^レ明德、發^レ聖意、屏^レ群小之曲說、述^レ五經之正義、略^レ雷同之俗語、詳^レ通人之雅謀。

とあるところから、五經正義の名は之に基いたものだ^と断定するが、考證學的には此の見解も面白いが、改題の必然性は以前として把握することが出来ないのである。畢竟、呼び慣れ易い名を選んだといふに過ぎないのであるまいか。

五經正義の性質上、もとより一人の手によつて成立すべきものではなく、多くの學者によつて分擔されたのである。その易疏には馬嘉運⁽⁴³⁾、趙乾叶⁽⁴⁴⁾、蘇德融⁽⁴⁵⁾、趙弘智⁽⁴⁶⁾が當つた。而して書疏には王德韶⁽⁴⁷⁾、李子雲⁽⁴⁸⁾、朱長才⁽⁴⁹⁾、蘇德

融、隨德素、王士雄⁽⁵¹⁾。詩疏は王德韶、齊威⁽⁵²⁾、趙乾叶、賈普曜⁽⁵³⁾。春秋疏は谷那律⁽⁵⁴⁾、楊子助⁽⁵⁵⁾、朱長才、馬嘉運、王德韶、蘇德融、隨德素。禮記疏は朱子衮⁽⁵⁶⁾、李善信⁽⁵⁷⁾、賈公彥⁽⁵⁸⁾、柳士宣⁽⁵⁹⁾、范義鼎⁽⁶⁰⁾、張權⁽⁶¹⁾などが参じたのである。

周易に關しては魏の王弼注を取り、繫辭傳だけは韓康伯の注を採り、馬融、鄭玄、荀爽、虞翻等を若干引用したが多くの場合その説を否定し、褚仲都⁽⁶²⁾を採用してゐる。それ故に易疏は他の注疏に比して劣る感がする。されば後に朱子、五經の疏を評して曰く

周禮最好。詩、禮記次之。書易爲下。

と。しかしながら唐に正義が成立して、六朝の義疏は衰へたこと事實である。ともかく正義は略、貞觀十六年前後に一應成立を見たのであつた。

然るに正義が出来上つてから太學博士馬嘉運は、此に紕繆繁冗があるといふ意見を提出し、大いに駁正した。そこで十六年、四門博士蘇德融その他の學者の覆審(周易正義序及び唐書孔穎達傳)によつて、始めて繫辭以下三傳は晋の韓康伯の注を採用するに至つたのである。

その後、孔穎達は貞觀二十二年歿した。然るに永徽二年三月、長孫無忌及び中書門下國子三館博士、弘文館博士に詔して正義刊正をなさせしめんとした。即ち永徽四年これ等の諸學者によつて第二回の考定を経たのである。斯くして永徽四年三月、詔して天下に頒ち、學者に習はしめ、爾來、毎年の明經の試験には之に據つて考試せしむる制とした。顏師古が詔を受けて五經を考定して以來、實に二十四五年を経過して完成したのである。

五經正義に關する是非論は、近世に至るまで跡を絶たないのであるが、既にその當時に於いて阮元⁽⁶⁴⁾の門下なる趙坦⁽⁶⁴⁾は、唐孔穎達五經義疏得失論に曰く

易則宗鄭氏、而以李鼎祚所集之古注、及群書中所引之古注是、與鄭注相發明者附益之、次則取左傳中策法、都爲三編附焉、所謂刊輔嗣之野文、補康成之逸象、漢易梗槩、放斯可復云々。

と言つてゐるのは卓見である。

顏師古は字を籀。(舊唐書卷七十三の本傳に師古を字とす。)京兆萬年の人である。現に陝西省長安縣に屬す。顏子三十七代の孫と傳へられて居る。而して齊の顏之推の孫である。父の思魯も儒學を以て顯れ、幼少より家業を受けて出藍の褒れ高く、しかしながら性、傲慢であつたらしい。隋に仕へて安養の尉となり、唐の擧兵して國を建つるや、事へて朝散大夫となり、尋で中書舍人となつた。顏師古が五經正義定本に於て、王氏易を擧げたことに關し、王應麟は經義考卷六十九、韓康伯繫辭註に曰く

繫辭正義(大衍の章)に云ふ。韓氏自ら業を王弼に受け、弼の旨を承く。故に弼の云ふを引いて以て證し其の義を成すと。愚攷ふるに、弼は魏の正始十年に終り、韓康伯は東晋の簡文帝、引いて談客と爲す。二人時を同うせず。相去る甚だ遠し。之を親ら業を受くと謂ふは誤なり。

と。このやうに尙ほ幾多の缺點を藏しながら、師古の推す經書が底本となつたといふ事實は、五經正義はともかくとして、少くとも易疏に於て吾々は其の價値の低下を認めずには居られないのである。のみならず五經正義

成つて、經學の統一を成就した代りに、學ぶ者は正義を學んで更に發展的に努力することなく、次第に學風固陋となつた弊の大を思はねばならない。師古は貞觀十九年、太宗の東巡に従ひ、遂に歿した。

唐の易學を語るに當つて名を逸することの出來ないのは孔穎達である。冀州衡水の人である。字を仲達といふ。然るに舊唐書卷七十二、孔穎達傳には字を仲達と書いてゐるが、干志寧撰の孔穎達碑には字を冲遠とあり、二者相ひ同じからず。何れが正しいか解らない。孔子より三十二代の孫である。幼にして日に千餘言を誦し、梁の崔靈恩の三禮義宗(65)を暗記したのは僅に八才であつたと傳へられてゐる。服氏の左氏傳、鄭氏の尙書、毛詩、禮記に明らかに、別して王氏易に通じてゐた。また算曆を善くし、文章に巧みであつた。既に家郷に在る頃より名聲海内に高く、隋の煬帝の大業の頃、明經に擧げられて河内郡博士を授けられた。時に煬帝は天下の學者を都に集め、講學論議せしむるに當つて、孔穎達もまた選に當り、然もその論難に際しては成績第一の榮譽を得たのである。その爲に會同の先師宿儒の恨みを買ひ、遂には刺客を放つて孔穎達を刺さしめんとするに至つたのである。幸にこれは禮部尙書楊玄感の庇護によつて纔に免るゝを得たのであつた。斯くて隋亡んで唐興るや秦王(後の唐の太宗)府の文學館學士となり、武徳九年には國子博士となり、貞觀の初め曲阜縣男に封ぜられ、給事中となる。貞觀六年、國子司業として諸儒と曆及び明堂のことを議す。隋史の編纂によつて散騎常侍となり、十二年、國子祭酒を拜して東宮の侍講となつた。屢々、太子承乾(貞觀十七年に廢せらる)の不法を諫めたが、而も太子の容るゝところとならなかつたといふ。孔穎達六十九歳に及んで五經正義の覆審のこと起り、その功畢らざるに老を

以て翌年致仕し、貞觀二十二年に七十五歳を以て歿した。

既述の如く五經正義が唐朝の興隆期に當つて撰定せられ、これを以て明經の試験に考試するやうになつて、經學は當然、固陋とならざるを得なくなつた。學問の此のやうな膠着は、唐代の平和と繁榮とを反映するものとして説明することが出来るが、同時に活潑な研究もなく、従つて進歩の跡を認めることが出来ないものである。

かくて周易正義の定本が天下に流布されるや、漢以來、易を云ふもの多く象占の學に溺れたものも、一朝にして廢止せられて仕舞つた。而して鄭氏易を語る者一人もなく、悉く王氏易となつて仕舞つたのである。⁽⁶⁷⁾

然も注意すべき點は、象辭はもと六爻經辭の後にあつたものを、王弼は獨自の見解を以て之を分ち、各當爻の下に附した(正義坤の初六象)のである。

故に吳仁傑⁽⁶⁸⁾の易自序に従へば、王弼は鄭玄本を用ひて、更に文言を移して之を乾坤の二卦に附し、文言曰の三字を頭首に加へ、また說卦等の篇は其の舊によつて、別に自ら卷を爲し、これを總稱して繫辭と言つたといふのである。これより世儒、弼易あるを知りて、所謂、古經あるを知らずと。

されば四庫提要一に曰く、近世、古書亡缺して、學者その次を知る能はざるも、文言を分割して未だ經に附せざるは之に依りて知らる。その文言を分割し、附經するは始めて王弼本に見ると。

また古周易訂詁自序に曰く、近世諸儒、正義に本かざる者は皆な以て異説となす。只、分經合傳を非とする者は呂汲公⁽⁶⁹⁾、王原叔⁽⁷⁰⁾、晁以道⁽⁷¹⁾、李巽巖⁽⁷²⁾、呂恭伯⁽⁷³⁾、朱元晦⁽⁷⁴⁾なり。而して吳仁傑、稅與權は周易古經を編して、田何の

舊に還すと謂ふと。しかしながら分經合傳を非とするのは後代に屬する學說で、正義に依つて、却つて古易を忘却した觀があるのは最大の缺陷としなければならぬ。

唯、その間、玉海卷三十五、孔子十翼原注の如く、崇文總目に鄭氏易注一卷あることを指適し、文言、說卦、序卦、雜卦の四編を收録してゐるのを指して、世これを鄭氏文言と言ふ、と云つてゐるのは次の時代の學究的嗜好が古易を把握したものであつて、所謂、古經あるを知らざる闇黒時代が、如何に斯學の發展の障害となつたかを物語るものに他ならないのである。

舉世、斯の如き學風の中にあつて異とするに足る學者に李鼎祚がある。彼は資州の人で、著作郎秘閣學士である。周易集解十卷、略例一卷、索隱六卷を著したが、惜しいことに略例と索隱とは今日傳はらない。幸に集解が残つたので、古代の易說を知るよすがとすることが出来るのである。即ち子夏をはじめ、孟喜、京房、馬融、荀爽、鄭玄、何晏、虞翻、王肅、王弼などの三十有五家に及ぶ要籍を考輯して後人に裨益を與へてゐるのである。唯、これには彼自身の易說を見るを得ないが、正義以後、正義より一步も出るを嫌つた當代の諸儒の中で、周易研究に一つの角度を與へたといふことは特筆すべき事である。従つて李鼎祚の門より出でたる啖助⁽⁷⁶⁾、あるひは其の學統を繼いだ趙匡⁽⁷⁷⁾、陸淳⁽⁷⁸⁾などの弟子等は、聖教に對する自由研究の態度を提唱し、これが後世、宋代儒學の先聲となつたと見られるのである。

吾々は今一人、唐に於て忘れてはならない儒者を記して置かうと思ふ。即ち陸玄朗⁽⁷⁹⁾である。字は德明。蘇州の

人である。始め學を周弘正⁽⁷⁹⁾に受け、名、漸く高かつた。陳の後主、太子たりし時、徳明はじめて冠し、入講す。國子祭酒徐孝克⁽⁸⁰⁾と屢々論じて其の説を奪ふといふ。陳亡び故郷に歸る。隋の煬帝、秘書國子に擢で、國子助教とす。王世充⁽⁸¹⁾、王號を僭して、子の玄恕のために徳明を聘して師とせんとした。徳明これを恥辱として出仕せず。唐の太宗の王世充を平けて後、秦王府にあつて文學館學士となり、孔穎達と同席す。貞觀の頃に至つて、國子博士に拜せられ、吳縣男に封ぜられた。著すところ經典釋文⁽⁸²⁾三十卷、老子疏十五卷、而して易疏二十卷がある。そのうち經典釋文は最も知られてゐるが、これは周易、尙書、毛詩、周禮、儀禮、禮記、左氏傳、公羊傳、穀梁傳、孝經、論語、老子、莊子、爾雅に就いて漢魏六朝の音切をとること二百三十家、諸儒の訓詁を載せて各本の異同を正した。

△
唐代の易書を瞥見すると玄宗の頃、史徵⁽⁸³⁾は周易口訣義六卷を著した。同じく郭京⁽⁸⁴⁾に周易舉正三卷がある。また崔憬⁽⁸⁵⁾に周易探元三卷がある。また陰宏道⁽⁸⁶⁾に周易新論傳疏一卷がある。

また李淳風を擧げなければならぬ。彼は岐州雍の人である。幼にして秀才の譽れ高く、步天曆算に通じた。貞觀の初め、將仕郎を以て太史局に直す。渾天儀を制し、法象書七篇を著して上り、太史令となる。唐の太宗、讖を得て、武姓の者を探し之を殺さんと欲す。李淳風これを諫めて曰く、天の命するところ去るべからずと。太宗乃ち止む。昌樂縣男に封ぜらる。典章文物志、乙巳占等の著の他に、周易元義一卷がある。また徐助に周易新義一卷がある。

唐易に一人の異彩を放つ學僧を傳することを怪しむではならない。その人を一行禪師となすのである。

一行。俗姓は張氏。本名は遂。魏州昌樂（鍾鹿）の人である。唐初の襄州都督剡國公公謹の孫にして、太僕丞慄の子である。家系は世々、忠孝の士を出し公卿相繼ぐの名家である。母は隴西の李氏。容姿華麗にして性また聰慧。唐の高宗の弘道元年を以て一行を生む。生れて十歳、聰明なること人に過ぐ。人これを以て神童と稱す。母かつて夢に此の子大器なり、必らず國師たらんと。年二十歳にして既に老成の風あり、書を讀むこと二回ならずして能く暗誦すといふ。經史を極め、曆象陰陽五行の學に精通す。時に道士の尹崇なるものより、漢の楊雄の太玄經を借覽し、直ちに其の奧儀を究め、太衍玄圖及び義決一卷を著し、尹崇を驚ろかせたといふ事が傳へられてゐる。尋で嵩山に隠れ棲み、普寂禪師を拜して出家剃髮し、誦するところの經典として通ぜざるはなかつた。あまねく諸國を周遊し、荊州の當陽山にして悟真律師より毘尼（戒律）を學び、更に台州に至り、天台山國清寺に詣つて算法の祕訣を受けたといふ。五世睿宗その賢を聞き、東都留守韋安石に詔して一行を召されたが、病と稱して應じなかつた。然るに開元五年、玄宗皇帝はその族叔禮部郎中洽をして勅書をもたらせて荊州に行き、強ひて一行を召す。一行は止むを得ず都に上り、光泰殿に安國撫民の要を談するに、啓陳周到、敢て隱すところがなかつた。開元九年、大衍曆十二卷を撰す。この書百世の傑作と稱せられ、刑和璞の如きは、一行禪師を呼んで聖人と言つたほどである。開元十一年、黃道儀を撰し、玄宗は之の序を作つて天下に行はしめた。時に善無畏三藏のインドより東來するに當つて、一行禪師は大いに眞言密教を敬慕し、金剛智、及び不空の兩三藏に從つて灌頂を

受け、陀羅尼秘印を受けた。而して善無畏等に從つて密經の翻譯にあづかり、毘盧遮那經の口訣を受け、大日經疏二十卷を著した。これ眞言宗無二の寶典となつてゐるところのものである。開元十五年九月、華嚴寺に病む。帝、大違場を建て、一行のために病を祈つたが、十月八日、僅に四十五歳を以て寂す。玄宗悲しみに堪へずして曰く、禪師捨朕深用哀慕云々と。即ち朝を廢すること三日、大慈禪師と謚し、喪事すべて官費を用ひ、詔して銅人原に葬り、帝自ら碑銘を撰し、内庫錢五十萬を以て塔を建てた。著作に大衍論三卷。攝調伏藏十卷。天一太一經。太一局遁甲經。釋氏系錄各一卷。字母表。宿曜儀軌。北斗七星護摩法。七曜星辰別行法。最上乘受提心戒。心地祕訣。藥師如來消災除難念誦儀軌。而して開元大衍曆經五十卷がある。この曆經は勅を奉じて撰したもので、舊唐書律曆志に編入せられ、不刊の典となつた。而して其の易纂一卷は必らず斯學に志す者の就いて見るべきものであらう。

一行禪師に就いては、吾が國の眞言宗の人々ばかりではなく、昔から相學に關する一つの挿話に依つて知られて居た。源平盛衰記卷五の一行流罪の事といふのが其である。その文を引くに

時の横災は、權化の人も猶ほ遁れ給はざりけるにや、大唐の一行阿闍梨は、無實の讒訴によつて火羅國へ流され給ひけり。たとへば一行は玄宗皇帝の御加持の僧にておはししが、而も天下第一の相人におはしける。皇帝と楊貴妃と連理の御情深くして、萬機の政務も廢れ給ふほどなりけり。一行、帝后二人の御中を相するに、后には御臍の下に黒子あり、野邊にして死し給ふ相なり。帝には御後に紫の黒子あり、思ひに死する御相なりと申しけ

り。皇帝この事を聞し召して、大方の相は正しく見るとも、いかでか膚をも知るべき。通ふ道のあればこそ、臍の下の墨子をば知らめとて、流罪すべきの由、仰せ下されけるほどに公卿僉議あつて、一行は朝家の國師佛法の先達なり。就中、相に於ては天下第一なり。聲音を聞いて五體を知り、面を見て心中を相するに、敢て違ふこと無し。いかゞ流罪せらるべきと申しければ、暫らくさし置き給ひたりけるに、一行の弟子に賢鍔阿闍梨といふ者あり。佛敎博學にして、智徳高く長ぜり、忽に師資の儀を忘れて、獨り天下に秀でんことを思ひければ、ひそかに一行の亡び失せんことを思ひける折ふし、流罪の沙汰の有りければ、ついでを得て後の御こと種々に讒し申しければ、帝、逆鱗あつて火羅國へぞ流されける。彼の國へ行くには三の道あるとかや。一には林池道とて古き都なりければ、御寺のほかにはおぼろげにては人通はず。一には幽池道とて雜人の通ふ道なり。一には闇穴道とて罪ある者を流す道なり。されば一行も此の道よりぞつかはしける。件の道は、七日七夜が間、空を見ずして行くなれば闇穴道とぞ名づけたる。七十里の大河あり。碧潭深く流れて、白浪高く揚るなり。冥々として獨り行き、閑々として人もなし。前途の末も知らざれば、さこそは悲しくおぼしけぬ。天道無實の咎を哀みて、九曜形を現じつつ、闇穴をぞ照されける。一行、右の指を喰ひ切つて、その血を以て右の袖に寫し留め給ひけり。九曜曼陀羅はそれよりして弘まれり。彼の一行阿闍梨と申すは本は天台の一行三昧の禪師なりけるが、後に眞言に移りて、徳行高く顯れて國家の重寶たり。慈悲普く覆ひて、人臣の歸するところなり。讒し申されけるこそ懼しけれ。一行無實の由、皇帝聞し召し披き、則ち召し返さる。賢鍔造逆なり。不善の咎遁れ難しとて流罪せられける

ほどに、堅牢地神の罰を蒙つて、大地忽に裂けて生きながら大地獄にぞ落ちにける。在家を出でて佛家に入り、師恩を受けて法恩を聞く、たとひ報謝の心こそなからめ、いかでか阿黨を成すべき、在世の調達、滅後の賢鑑、とりどりにこそ無慚なれ。さても一行の相し申さるゝ如く、湯貴妃は安祿山が爲にすかし出されて、馬鬼の野邊に露と伴ひて消え給ふ。皇帝は後の名殘を悲しみて、方士を以て蓬萊宮を尋ねらる。玉の釋、金の鉸刀を返し送らる、いとど數に臥し給ひ、死にぞ失せ給ふ云々。

しかしながら一行流罪のこと其の本據を知らず。古來よりの傳説であらう、惟ふに眞言の法力を宣布せんための僧侶の作り物語であつたに相違ない。

(一) ルロック (Albert von Le Cag) は一八六〇年に生る。ベルリンの名門 Haguenot 家の後裔なり。父は廣東にて商業を營みしを以てダルムスタットに轉じ、次で父の商會に入り、ロンドンに一年、アメリカに六年その支店を經營し、更に藥學を修めて一八八七年に藥學博士の學位を得。その後ベルリン土俗博物館に出入して東洋語ゼミナールに通ひ、有名なグリエンツェーデルに認められ、一九〇一年より翌年への *Zeirih* 探險に参加して *Kurdische Texte* 二卷を著し、キール大學より哲學博士の學位を受く。この間、ヘーデン、スタイン等の成功に刺激せられ、ロシアのトルファン探險隊が組織さるゝに及び、一九〇四年、その第二回探險隊長となりて、トルファン及びハミを發掘し、一九〇五年グリエンツェーデルを道班とする第三回探險隊に合流して、更にクチャ及びカシユガルを調査して一九〇七年に歸獨す。その後また一九一三年より一四年に第四回探險隊を率ゐてクチャ及びマラルバシに赴く。而してその發掘美術品に對して中央アジア

東方アジアに及ぼせるヘレニズムの影響を唱へ、此の方面の研究に新分野を開拓せり。一九一四年第四回探險より歸りて同博物館副館長となり、一九二三年インド部長を兼ね、一九二五年退任す。著書多し。

(2) 虞世南。字は伯施。餘姚の人なり。荔の次子にして、兄の世基、字は茂世と共に學を顧野王に受く。十年精思懈らずと。文章溥博なり。その爲人、外は謹儒にして内に抗烈なり。太宗のとき房玄齡、杜如晦等十八人と共に文學館學士となれり。後、銀青光祿を以て致仕す。凌烟に圖形せらる。文懿と諡す。唐の太宗かつて命じて烈女傳を屏風に寫さしむ。本無し。之を暗疏し、一字の誤謬無し。帝つねに其の五絶を稱す。一に德行、二に忠直、三に博學、四に文詞、五に書翰と。帝かつて出でて行く。有司、書を載せて以て従はんと請ふ。帝曰く、虞世南、行に在り。之れ秘書なりと。

(3) 褚亮。字は希明。錢塘の人なり。少より警敏、博學にして圖史に通ず。陳の後主これを召見す。詩を賦す。江總の諸詞人みな其の工に服すと。後、唐に仕へて弘文館學士となり、官、散騎常侍に至る。卒する年八十八。太常卿を贈り、昭陵に陪葬せらる。その子また名あり。遂良これなり。

(4) 姚志廉。蔡の子なり。移りて萬年縣に居り、初め隋に仕へて代王の侍讀となる。唐の兵城に迫る。府僚みな逃亡す。獨り志廉、王に侍す。唐兵殿に昇る。志廉、聲を勵して曰く、唐公、義兵を起す。もとより王室を安せむがためなり、汝等よろしく禮無かるべからずと。兵等退きて階下に布列す。唐主淵、之を義となして曰く、仁者の勇なりと。後、唐に仕へて文學館十八學士の一人となり、魏徵と同じく梁陳書を撰す。

(5) 李玄道。隴西の人なり。世々鄆州に居る。貞觀の初め累遷して給事中たり。姑臧縣男に封ぜらる。而して出でて幽州の長吏たり。都督王君廓をたすけて府事を持ち、君廓に不法あれば、毎に義を以て之を裁判すと。後に常州の刺史となり、

治績を以て稱せらる。

(6) 蔡允恭。江陵の人なり。父大業、後梁の左民尙書たり。允恭、容姿秀美にして且つ詩に工なり。仕へて起居舍人たり。煬帝、賦するものあれば必ず諷誦せしめて宮人に教ゆ。允恭これを恥ぢ屢々病と稱して出でず。内史舍人を授け宮に入らしむ。固辭す。是に由りて疏斥せらる。後、唐に仕ふ。後梁春秋の著あり。

(7) 薛元敬。少より從父收、族兄德音と名を等しうす。世、河東三鳳と稱す。唐初、天策暗室參軍たり。また十八學士の選に與かる。後、太子舍人に除し、専ら文翰を掌る。

(8) 顏相時。顏師古の弟なり。太宗のとき瀛洲十八學士の一たり。通儒高行、學を以て聞ゆ。諫議、爭臣の風あり。師古死して哀しみに堪へずして卒す。

(9) 蘇島。島はキョクなり。太宗のとき十八學士の選に入る。

(10) 于志寧。字は仲讜。謹の耳孫たり。太宗これを引きて文學館學士となす。貞觀年中、太子右庶子となり、常に太子(承乾)を切諫す。太子これを憎み、刺客をして往きて之を殺さしめんとす。遂に能はず。後、侍中に累遷し、左僕射に拜せられ、燕國公に封ぜらる。

(11) 蘇世長。京兆の人なり。宴に披香殿に侍す。酒酣にして進んで曰く、これ煬帝の作れるかと。帝曰く、卿、好んで諫むるに直を以てす。然れども詐なり。此の殿は朕の嘗むところ、乃ち詭きて煬帝かといふと。答へて曰く、臣はたゞ傾宮廢台を見るのみ受命の聖人が爲るところのものに非ず。今乃ち隋の宮に即きて雕飾を加ふ、其の亂を易へんと欲するも得んやと。帝その言に啓動す。太宗の時、十八學士の選に入る。

(12) 李守素。趙州の人なり。氏族の學に通じ、世に肉譜と稱す。虞世南ともに江右山東人物を論じ、歎じて曰く、肉譜眞に畏るべしと。時に涇州の刺史李淹、また譜に明かなり。守素の論ずるところは唯だ李淹のみ能く之に抗すと言はる。

(13) 許敬宗。新城の人なり。性傲慢なりと。自ら高うして人を凌ぐ。十八學士の選に入る。孫あり、遠といふ。

(14) 蓋文達。翼州の人なり。博く群書に涉り、最も春秋に明かなり。十八學士の列に入る。

(15) 閻立本。かつて唐の太宗、侍臣と舟を春苑池に泛ぶ。二鳥の波に浴するを見て帝これを悦ぶ。坐者に詔して詩を賦せしめ、立本をして之を畫かしむ。傳呼して畫師といふ。立本この時既に主爵郎中たり。歸りて其の子に戒めて曰く、吾、少にして書を読み、今、畫を以て名あり。厮役等と等しうせらる。汝儼しみて習ふこと勿れと。總章元年、右相に拜せらる。時に姜恪、戰功を以て左相に擢ぶ。故に時の人、左相は威を砂漠に宣し、右相は譽を丹青に馳すの嘲あり。兄、立德、將作大監たり。弟、立行、衛尉卿たり。立德の子元邁、司農卿として名族の名高し。

(16) 清、章宗源、隋經籍志考證

清、姚振宗、隋書經籍志考證

(17) 未考

(18) 長孫無忌。長孫晟の子なり。字は輔慶。博く書史に涉る。かつて隋志を撰む。太宗を佐けて天下を定む。功勳第一たり。比部郎中に擢でられ、齊國公に封ぜらる。後、太子太師に累遷す。褚遂良と共に同じく顧命を受く。高宗の初め武昭儀を立てるを諫めしを以て、爵を剝られ、黔州に流さる。子に順德あり。

(19) 李淳風。岐州雍の人なり。幼にして秀才、博く群書に通じ、步天曆算に明かなり。貞觀の初め、將仕郎を以て太史

局に直す。渾天儀を制し、法象書七篇を著して之を奉る。太史令に累遷す。かつて太宗、譏を得て武姓を求め之を殺さんと欲す。淳風曰く、天の命する所去るべからずと。即ち止む。後、昌樂縣男に封ず。撰するところ典章文物志、乙巳占の書あり。

(20) 韋安石。萬年の人なり。孝寬の曾孫にして、性方嚴、苟しくも言筭せず。明經に擧げらる。武后の朝、鸞台侍郎、同平章事に擧げられ、中書令に官たり。時に二張及び武三思、寵ありて專横なり。安石これを屢々折辱す。延臣これを目して曰く、眞の宰相なりと。鄒國公に封ぜられ、文貞と諡す。

(21) 李延壽。字は遐齡。相州の人なり。崇文館學士となる。かつて父の志を追述し、南北史一百八十卷を作り之を奉る。また太宗政典を擇ぶ。高宗これを見て嘆美し、直筆を以て帛を賜ひ、之を褒す。

(22) 令狐德棻。また熙子といふ。華原に居る。博く文史に涉り、若くして名を知らる。高祖のとき秘書丞となる。時に經籍多く散逸す。德棻これを憂へて遺書を購はんことを奏請す。之を許す。而して數年にして群書ほぼ備はると。貞觀の年中、梁陳周齊隋の五史を修するに、その議もまた德棻の發するところなり。而して德棻自ら周書を領せり。高宗のとき弘文館學士となり、累遷して國子祭酒となる。唐朝の凡そ修撰あるや參ぜざるはなかりき。暮年著述に最も勤む。

(23) 趙仁本。河北の人なり。太宗のとき累轉して殿中侍郎御史となり、擢られて吏部員外郎となり、知政事となる。かつて右相許敬宗の請託を拒みて退く。尙書左丞を授けらるるに及んで知政事を罷む。咸亨の初め卒す。

(24) 李懷儼。翼子の從子なり。文才を以て著名なり。蘭台侍郎となる。四部の書を寫して上る。郢州刺史を授けらる。

(25) 張文瓘。字は稚圭。武城の人なり。高宗のとき宰相に位す。帝、宮殿を造り四夷を討じ、廐馬萬匹を養ふ。文瓘これ

を上書して諫む。改めて大理卿を兼ね。旬日ならずして疑獄を斷ずる四百。罪に抵る者怨言なし。後、侍中に拜す。卒するとき諸囚みな涙を下すと。幽州都督を贈らる。子四人あり、潜、沛、治、涉みな三品に至る。故に時人これを稱して萬石張家といふ。また弟文琮、文琮の子錫、ともに顯官たり。

(26) 褚無量。字は洪度。鹽官の人なり。家、平湖に臨む。龍有りて出づ。人みな走りて見る。無量時に尙ほ幼なり、兩も讀書して聞かざるものゝ如し。衆これを怪しむ。後、明經に擢でられ、司業に遷る。中宗まさに南郊に詔して皇后を亞獻となさんとす。無量これを極諫す。玄宗、位に即き左散騎常侍に遷る。

(27) 馬懷素。丹徒の人なり。進士に擧げられ左台監祭御史に累官す。武后詔して魏元忠、崔貞慎の反狀を按問す。使者追促す。懷素執りて從はず。元忠等免るゝを得たり。開元の初め昭文館學士に進み、褚無量と日に侍講す。玄宗迎ふるに師臣の禮を以てす。懷素、篤學謹嚴なり、時人これを推して長者と爲す。卒して謚して文と曰ふ。

(28) 歐陽詢。唐の歐陽詢は字を信本といふ。臨湘の人なり。幼にして敏悟人に絶すと。讀書一日數行、遂に博く經史を貫く。隋に仕へて太常博士となる。唐の高祖、微なるとき之と遊ぶ。既にして即位し太子卒率令に擢でらる。初め王羲之の書を習ふ。後、遒勁これに過ぐ。かつて索靖の碑下を過ぎ、歡賞して其の傍に三宿して去る。鶴林、使を遣はして彼の書を求む。高祖これを聞き歎じて曰く、詢の名、遂に夷狄に滿つかと。貞觀の初め、弘文館學士となり、累遷して渤海男に封ぜらる。卒する年八十五なり。

(29) 藝文類聚。天、歲時、地、州、郡、山、水、符命、帝王以下の四十六類に分ち、その事實の次に詩文を録せり。中に蘇味道、李嶠、宋之間、沈佺期の詩あるは後人の添入ならんと。この書早くより我國に傳はれり。

(30) 群書治要。周易、尙書、毛詩、春秋以下經史子三部六十六種より治政の要に關する語を彙録し、唐會要によるに貞觀五年成ると。宋初已に散佚せしも、我國には夙に傳來し、仁明天皇の承和五年には助教直道宿禰廣公が帝の御前に本書の第一卷を講ぜしこと續日本後紀に見ゆ。その後、御歴代の天皇みな之を尊崇せられしこと三代實錄、扶桑略記等に見ゆ。現に存する最古のものは内閣文庫に藏する金澤本の卷子本(四十卷)なり。徳川家康この書を重んじ、慶長十五年、命じて之を寫さしめ爾後この刊本續出せり。降つて天明七年、尾張藩に於て刊行し、これ支那に傳はり、阮元は四庫全書未收書目に著録し、清の宣宗、道光二十七年、楊慶石はこれを其の連筠篔叢書に收む。

(31) 李襲譽。狄道の人なり。通敏にして識度あり。高祖召して大府少卿を授く。江南巡撫使に擢づ。政を爲す嚴肅、得るところの俸賜は宗親に分給す。餘資を以て書を寫す。歸るに及び惟書を載すること數車。かつて諸子に謂ひて曰く、吾性財を喜ばず、遂に屢々乏しきに至る、然も負京の賜田千頃あり、能く之を耕さば以て食するに足る、河内の桑千枝、之を事とせば以て衣するに足る。江都の書、力めて之を讀まば以て進むべし、吾が没後、能く此を勤めば人に誇らるゝなからんと。

(32) 帝範。君體、建親、求賢、審官、納諫、去讒、誠盈、崇儉、賞罰、務農、閱武、崇文の十二篇に分つ。宋代、已に其の半を散佚す。元の吳萊、泰定二年にまた雲南より出づといふも其の傳本不明なり。今本は永樂大典より録出せるものなり。もと唐の賈行の注あり。本書の注に呂祖謙、楊萬里を引けるは元人の補注にして唐人の舊法に非ず。

(33) 匡謬正俗。前四卷は凡て五十五條。論語、尙書、禮記、春秋の訓詁音釋を論じ。後四卷は凡て百二十七條。史記、漢書等の字義字音及び俗語相承の異を論ぜり。

(34) 文館詞林。新舊唐志また崔元暉注文館詞林文八傳一百卷を收む。俱に當時折出の單行本なるべし。舊唐志所載類文三百士館詞林と一書なるを文館詞林と略稱せしなるべし。漢より唐初までの詩文を蒐集す。文選に次ぎ最古の總集なり。宋代已に散佚す。わが國の僧喬然、入宋して此の書の存在を語りしも、宋人にして知る者なかりき。我國にては平安朝時代に傳來し、貞觀の火災に散佚し、高野、大覺寺、東大寺に數冊を存せり。林述齋の佚存叢書に始めて四卷を刻せり。

(35) 徐堅。齊聘の子なり。字は元固。幼にして敏慧、秀才に擧げらる。萬年簿となる。文を屬するに典厚なり。張說等と共に三教珠英を修す。累遷して集賢院學士となる。

(35) 初學記。經史文章の要典故事を類聚したるものにして、凡て二十三部に分ち、三百十三の子目より成れり。

(37) 張九齡。字は子壽。父、韶州別駕となり任に卒す。遂に曲江に居り、七歳にして能く文を屬す。後、進士に擢でられ、また道侔伊呂科の高第を以て中書舍人となり、詞人の冠たり。時に號して文場元帥となす。左拾遺に遷る。玄宗の千秋節に群臣みな寶玩を獻ず。九齡即ち前世興廢の源を述べ、書五卷を作りて之を千秋金鑑録といひ、以て諷諭す。中書侍郎に累遷す。かつて李林甫を抑し、却つて排濟されて相を罷め、家居して卒す。天下稱して曲江公となして名を言はずと。玄宗かつて早く朝し、左右に謂て曰く、張九齡を見る毎に精神とみに生ずと。九齡罷むと雖も、相を拜する毎に帝即ち問うて曰く、風度張九齡の如きを得るや否やと。初め張守珪、契丹王屈烈及び可突於を斬る。帝、守珪の功を美とし以て相となさんと欲す。九齡曰く、宰相は天に代り物を理す、功を賞するの官に非るなり。帝曰く、假すに名を以てし其の職に任ぜずんば可ならんか。答へて曰く、たゞ名と器とは人君の司るところ、人に假すべからず、守珪出づかに契丹を破り即ち以て相となさば、若し悉く突厥を滅さば將に何の官を以て之を賞せんと。帝即ち奪ふ能はず。九齡少きとき群鴿を養ひ、

親知に書を與ふるとき即ち足に繋ぎ、教に依て往きて之を投ぜしむ。これを飛奴と號す。はじめ安祿山、律を失ひ師を喪ふ。守珪これを誅せんと欲す。玄宗その才を惜しみ、特に命じて之を宥す。九齡たたく争ふて曰く、祿山の貌、反相あり。殺さずんば必ず患をなさんと。帝これに従はず。後、祿山叛をなし、帝、蜀に幸す。九齡が先見の明を思ひ、之が爲に流涕し、使を曲江に遣して之を祭り、厚くその家を郵へしむ。祿山滅するに及び、追封して始興伯となし、文獻と諡す。

(38) 唐六典。周禮に擬し、唐の官職を三師、三公、三省、九寺、五監、十二衛に分ちて其の職司官佐を列べ、その品秩を叙す。その沿革は李林甫注に附載せり。この書、唐代既に吾が朝に傳來せり。近世にありては享保九年、攝政大臣近衛家熙公の考訂本あり。正徳本を底本とし、明の嘉靖本を參照し、詳密なる校語を夾註せり。

(39) 顔真卿。字は清臣。博學にして詩に巧に、また書を善くす。親に事へて孝なり。開元の年間、監察御史に遷り、河隴に使す。時に五原に冤獄あり。久しく決せず。太早あり。真卿、獄を辨じて雨降る。郡人これを呼びて御史雨なりと。次で平原太守となる。時に安祿山反す。真卿ひとり義を唱へて之を討つ。事變の初め玄宗嘆じて曰く、河北二十四郡のうち一人の忠臣なき耶と。然るに真卿、賊を討つる報を聞くに及びて曰く、朕、真卿とは何の狀をなすを知らず、而も即ち斯の如しと。徳宗の代に於て李布烈反す。朝廷、大臣をして往きて禍福を陳ぜしむ。盧杞ひそかに真卿を憎む。乃ち真卿を推舉して行かしむ。詔下り、滿延色を失ふ。真卿、從容として東都に至る。希烈これを脅して降參せしめんと欲す。真卿叱して曰く、汝、賊を罵りて死する顏某卿あるを知るか。これ即ち吾が見なり。吾、節を守りて死するを知るのみ。何ぞ必ずしも多端せん。希烈これを謝す。然るに後、朝廷、希烈の弟希清を誅す。希烈大いに怒り、即ち使者を遣して蔡州に至らしめ、真卿を縊り殺す。時に年八十なり。真卿、四朝に相たり。而して忠直孝友なり。故に詩評に曰く

千五百年如烈口

二十四郡惟一人

と。太師に位し、魯國公に封ぜられ、文忠と謚す。子二人あり。頤と頤なり。

(40) 杜佑。字は君弼。萬年の人なり。父希望。恒州刺史たり。佑、蔭を以て參軍に補せらる。德宗、憲宗の兩朝、司空に拜し、司徒に進み、岐國公に封ぜらる。佑、學を好み貴なりと雖も夜も猶ほ讀書す。通典二百篇、政典三十五篇を撰す。子二人あり。式と方と。觀祭使たり。從子郁、秘書丞たり。

(41) 通典。この書は劉秩の政典により、食貨、選舉、職官、禮、樂、兵刑、州郡、邊防の八門に分ち、上代より唐の天寶までの制度を收録せり。古より宋の鄒樵の通志と、馬端臨の文獻通考と共に、三通と稱せらる。

(42) 後に傳を出す。

(43) 桓譚。字は君山。沛國相の人なり。父、成帝のとき太樂令たり。譚、父の任を以て郎となる。よりて音樂を好み、徧く五經を學び、文章を能くし、最も古學を好む。光武帝、即位し、議郎を拜す。上疏して時政を陳ず。帝、譚を以て疑ひを決せんと欲す。譚、讖の經に非るを直言す。帝怒る。出でて六安郡丞となる。譚、書二十九篇を著し、當世の行事を言ふ。新論と號す。また賦誄書奏あり。

(44) 馬嘉運。魏州繁水の人なり。少くして沙門となり三論に通じ、還俗して儒學を收む。聰敏にして耳目の過ぐるところ終生忘れず、最も論難を善くせり。隋末に劍南に遊び、これより蜀人の學を成すもの多しと。貞觀の初め召されて越王東閣祭酒となり、白鹿山に退きて教授す。業を受くるもの千餘人。貞觀十一年召されて太學博士となり、弘文館學士に拜し、

十九年、國子博士となる。かつて孔穎達が五經註疏の疵を指し、當世の諸儒その精傳に服せざるはなしと。

(45) 未考

(46) 未考

(47) 趙弘智。軌子。幼にして孝を以て聞ゆ。三禮、史記、漢書に通ず。高亨の初め累轉して陳王の師たり。孝經を百福殿に講ず。時に宰相、弘文館學士、太學生みな席に在り。弘智、五孝を擧ぐるや諸儒これを詰す。問に隨ひて答ふるに流るゝが如し。帝大いに悦び、國子祭酒に進む。

(48) 未考

(49) 未考。(但し後漢に同名の人あり)

(50) 未考

(51) 未考

(52) 未考

(53) 未考

(54) 未考

(55) 谷那律。魏州の人なり。群書に淹貫す。褚遂良これを稱して九經庫といふ。國子博士となり、諫議大夫に遷る。高宗、出獵して雨に遇ふ。那律に問ひて曰く、雨衣若何すれば漏らざるかと。答へて曰く、瓦を以てすれば漏らずと。帝これによりて復た出獵せず。

(55) 未考

(57) 朱子容。蘇州の人なり。貞觀年中、高麗、百濟、新羅を伐つ。二者を遣して往きて三國を諭さしむ。子容、儀觀あり。兩人これを尊畏す。累遷して弘文館學士となる。

(58) 未考

(59) 賈公彥。永年の人なり。永徽年中、太學博士となる。周禮義疏、儀禮義疏あり。就中、周禮疏最も敏博にして鄒玄學を發揮せり。

(60) 未考

(61) 未考

(62) 未考

(63) 褚仲都。梁の天監年中、五經博士に歷す。周易に精なり。

(子の修。字は玉孫。また父の業を傳ふ。)

(64) 後に傳を出す。

(65) 後に傳を出す。

(65) 崔靈恩。武城の人なり。五經を習ひ、最も三禮三傳に精し。魏に仕へて太常博士となり、梁に歸して歩兵校尉兼國子博士となる。これより先、儒者の天を論ずるや、渾天、蓋天に執して二義合はず。靈恩議を立て、渾蓋を以て一となす。

その著數種皆な世に行はる。

(67) 三禮義宗。三十卷。南史本傳及び隋書經籍志に見え、唐人に頗る重んぜられしこと見ゆ。然れども今は亡佚して、僅に清の馬國翰の玉函山房叢佚書三八に存するのみなり。

(68) 後に傳を出す。

(69) (日名諱一氏註に據る)

陳振孫直齋書錄解題卷一

或はいふ、華氏棗竹堂書目に、長孫無忌の周易要義五冊、凡そ十八卷有り、無錫の秦對巖前輩今其書を有つ。大略、正義と相同じ。正義を考ふるに即ち長孫無忌の刊定に係る別に一書非るなりと。(經義考卷十四周易正義)

(70) 未考

(71) 未考

(72) 未考

(73) 未考

(74) 未考

(75) 朱熹なり。後に傳を出す。

(76) 稅輿權。宋の巴郡の人なり。字は巽甫といふ。業を魏了翁に受け、經學に精なり。古經傳、周禮折衷、また易學啓蒙小傳の著あり。

(77) 啖助。字は叔佐。趙州の人なり。後、關中に移る。經學に深く、春秋に精し。十年を経て春秋集傳を著せり。前漢以

後、一經を主として二傳乃至三傳に亘る者なし。啖助はじめて三傳を比較考究せしも、公羊、穀梁を取りて、左傳を排す。また春秋例統を著せしも今は傳はらず。

(78) 趙匡。字は伯簡。河東の人なり。官洋州の刺史たり。啖助の歿後、その春秋集傳を損益すと。

(79) 陸淳。字は伯仲。七代の祖陸澄、梁に仕へて大儒の名を得。而して世々、吳に住みて春秋を家學とせり。陸淳また家法を傳へ、集注春秋二十卷、集傳春秋纂例十卷、春秋微旨三卷、春秋辨疑十卷あり。今、四庫全書に入る。かつて台州の刺史たりしとき、吾が國より傳教大師最澄、渡唐して陸淳に會し、その書いまに比叡山に在り。日本天台宗にとりて因縁深き大儒なり。

(80) 周弘正。晋の人なり。字は思行。捨の從子なり。年十五にして國子正に補せらる。かつて國學に於て易を講ず。諸生各自その義を習ふ。後、司義侍郎となり、國子博士に累遷す。

(81) 徐孝克。南北朝の頃の人なり。擒の次子。性孝なり。五經に通じ、善く文を屬す、梁の太清年中、家を太學博士に起す。侯景の亂、歳飢う。母を養ひて饋粥給する能はず。乃ち剃髮して沙門となり、食を乞ひ以て給す。後、歸俗す。高宗の時、祭酒たり。侍宴毎に珍菓を取り以て母に遺る。高宗嗟嘆し、所司に敕して其の母に贈る。

(82) 王世充。字は行滿。西域の生れなり。移りて新豐に居る。その父、王粲の養子たりしを以て王を姓となす。捲髮豺聲にして詭詐多し。隋の文帝のとき軍功を以て儀同三司に拜せらる。煬帝、屢々、江都に幸す。世充を郡丞となす。善く帝の顔色を候す。入る毎に言事、帝これを善みす。大業の末年、天下大亂に及び、帝、世充を以て兵を領せしむ。而して屢々、賊を破る。字文化、煬帝を弑するに及び、世充、越王侗を立つ。李密と戦ひ大いに之を破る。遂に自立して鄭王と稱

し、創を廢して帝位に即く。而して唐兵の攻むるところとなり、兵敗れて遂に降り、長安に至る。仇人獨孤修德に殺さる。
(83) 經典釋文は初め經文は書し、音注は朱書せしめ、宋版以後、經注ともに墨書す。

(84) 未考

(85) 郭京。蘇州同州參軍たり。周易學正に關して一説あり。曰く、按此書唐書藝文志不載。後人疑出宋人僞託、并郭京之名。亦在有無疑似之間、而其說近理。朱子本義及晁公武易解多引用之。固自可取、見四庫全書提要と。

(86) 未考

(87) 未考

(88) 未考

第二十六章

唐亡んで宋に至る五十餘年間は、兵亂に繼ぐに兵亂を以てし、後梁、後唐、後晉、後漢、後周などとも立つて天下に臨み、唐代文化は次第に崩壞した。而して後周の禪を受けた趙匡胤(一)は、河南の開封に都を定めて、これを宋と號した。宋の太祖より百六十年を北宋といひ、十世高宗の南渡より宋の滅亡まで百五十年を南宋といふのである。

唐は彼の玄宗の時代、安祿山の反亂以來、唐末の節度使の跋扈甚しく、前記五代の革命は多く節度使の政權奪によつて遂に宗室を傾け、趙匡胤自ら節度使より立つて建國の大業を成就したのに鑑み、銳意、文治に意を注いだ。隋の文帝の佛教治國策、あるひは唐の太宗の封建制など、制度そのものとしては優れた政策と言ひ得られるが、支那民族の特徴である易姓革命の思想は、斯の如き制度を以てして尙ほ抑壓することが出来ないものゝ如くである。彼等が五經の一となす易經の彖傳に、湯武の革命を讚歎してゐる限りに於て、而してそれを聖人の語なりとする以上、支那民族は終始、革命を以て社稷及び國家を發展させる重大な要因となせるものであることが理解されるのである。然も革命を遂行する革命者が、ひとたび天下を掌握するや、如何にかして次の革命を回避せんかに腐心するのは吾々の甚だ怪しまざるを得ない點である。彼等は革命に對するに、毎に新しい制度を以て對抗した。支那に於ける制度學の發達は斯の如き規模のもとに把握されるのである。

宋の太祖は、唐並びに五代の篡奪に徴して、武臣に代るに文官を以て節度使たりしめ、斯の如き政策を以て中央集権の實を擧ぐるを期待した。宋代、文化が異常の發展を見たのは以上の理由に基くのである。されば太祖は國子監の學舍を増築し、先聖十哲の像を修飾し、七十二賢及び先儒二十二人の像を太學の東西廊の板壁に描き、また屢々、國子監に行幸し、詔して遺書を求めしむる等、更に便殿に御して親しく進士を試験する有様であつた。帝王が自ら學生を試験するのは此の時から始まつたのであるが、この好學の風が宋一代を通じて風靡したことは目覺しいこと、言はなければならぬ。

書籍は唐朝までを寫本時代と言ふことが出来る。寫本時代のそれは長廿二尺四寸の竹簡、または縑帛を使用した。また最近、西域地方から發掘される如き三角の木片等があつた。従つて書籍は珍寶の一つであつて、天下に流布することも稀に、重に宮廷の祕府、都城の書庫に祕藏せられ、兵亂の禍り、また天變地異に際して多く亡失したのである。然るに後漢の元興元年、蔡倫が紙を發明したと傳へられてゐる。これより紙が使用せられ、下つて唐の中世、佛典を印刷したのが支那印刷の嚆矢である。而して儒書の印刷は五代の後唐の長興三年、馮道によつて始めて石經文字により九經印板を刻したといふ。(一説に毋昭裔の手によると。) 經籍會通卷四に曰く、唐宋初鈔錄變而爲印摹、卷軸變而爲書冊といふのは是である。北宋に至つて、佛書儒典の印刷が盛んに行はれ、従つて前時代に見るを得なかつた未曾有の文化的發展がもたらされたが、實に宋代の高度なる文化は印刷術の發達に其の基礎を置くのである。而して四世仁宗の慶曆年間には、既に泥製の活字が畢昇によつて發明され

たことが夢溪筆談卷十八に誌されてゐる。

太祖は邢昺⁽⁸⁾、太宗は孫奭⁽⁹⁾等を重んじた。かつて記した如く唐の太宗、孔穎達等をして五經正義百八十卷(易、書、毛詩、春秋左傳、禮記)の撰定あり、その後、賈公彥の周禮義疏及び儀禮義疏、徐彥の春秋公羊傳義疏、楊士助の春秋穀梁傳義疏を加へて之を九經となし、宋に至つて三世眞宗の咸平三年、邢昺、孫奭など周禮、儀禮、公羊傳、穀梁傳の義疏を校定し、更に孝經、論語、爾雅の義疏を撰す、而して之に孫奭の孟子音義を加へて、十三經註疏といふのである。十三經註疏とは後人の名付けた題名であるが、此の定本は足利時代に吾が國に舶載せられ、わが國の儒學史上に於て重要な定本となつたのである。現行の十三經註疏本は四百十六卷、而して幾多の異本があることは、それが權威であつたからである。

宋代の易を語るには宋初の三先生、孫復⁽¹⁰⁾、石介⁽¹¹⁾、胡瑗と稱せられた胡瑗から始むべきであらう。

胡瑗、字は翼之。泰州海陵(江蘇)の人である。十三歳にして五經に通じ、幼にして聖賢を以て任じてゐたといふ。泰山に隠れて讀書すること十年、故郷の家より音信あつて、平安の二字を見るや之を潤に投じて、また讀書に耽つたと傳へられてゐる。四十歳餘の時まで屢々、試に應じて遂に及第しなかつた。然も范仲淹⁽¹²⁾、范文正公の推薦によつて、白衣を以て興政殿に對し、教書郎を授けられ、湖州教授に改まる。胡瑗の世に出た道は異數としなければならなかつた。胡瑗、人に教ふるに法あり、盛夏の折にも必ず正服し、いやしくも師弟の禮を嚴正にした。慶曆の頭、太學を中興するに及んで胡瑗の教育法が採用せられたのは注意すべき點である。門弟數百人、經術

齊治道齋を置き、體用の學を提唱す。胡瑗、自ら累試して當らず、所謂、學の膠着固陋を忌んだ。即ち深く自ら體験に徴して、明達體用の學を唱へたものであらう。されば嘗て試験に顔子所好學論といふ問題を與へ、學生の實力に訴へたといふ逸話が傳へられてゐる。而して胡瑗現れてより宋學に一新生面を開き、宋學は甚しく内省的となつた。漢に訓詁の學ひらき、唐に註疏の學なり、儒學漸く因習の久しきに亘つて固定的たらんとする時、宋學に於て義理の道ひらかれ、所謂、哲學的内容を盛るに至つた先驅者は、實に胡瑗の力に負ふところが多いのであつた。皇祐の頃、太常鐘磬を更鑄し、樂事を議して大理寺喚となり、後、太學に入る。禮部に採用された人士のうち十中の四五は彼の門下生であつた。嘉祐の初め太子中允天章閣侍講となつた。時の人、四眞の目といふ。曰く、富公(¹⁵)は眞宰相、包公(¹⁶)は眞御史中丞、永叔(¹⁷)は眞學士、而して胡熨(¹⁸)之は眞先生なりと。その著に周易口義十二卷がある。

胡瑗の門下に張巨(¹⁵)がある。武進の人で、嘉祐年中、明經に擧げられた。胡瑗に就學したのは彼の若年の頃からであつたと傳へられてゐる。蔣之奇(¹⁶)、胡宗愈(¹⁷)、丁際(¹⁸)と共に四友と稱せられた。召されて國子監直講となつてゐたが、時に王安石、政を執り、新法を布くや張巨は之を以て惡法なりとし、遂に身を引いて去つた。時論これを高潔となしたのである。その著に易解二十卷がある。

宋代、儒學の批判精神を代表する者は歐陽修に指を屈しなければならぬ。吉州廬陵縣（江西）の人である。字は永叔。醉翁と號し、晩年に及んで六一居士と稱した。既に早く四歳にして父を失ひ、その教育は賢母鄭氏の

手によつて成つた。家が貧しいため、菽を以て地上に文字を書き、而して學問を教へたと傳へられてゐる。稍や長じては隣家の書籍を借覽し、このやうにして群書を通讀したといふのである。かつて韓昌黎(19)の遺稿を手に入れ、心に欽慕して古文を作り、時習を一洗せんと志す。甲科に擧げられ西京推官となり、入朝して館閣校勘となつたが司諫高若訥(20)の意見に反對し、夷陵令に貶せらる。その性、剛勁にして幾度か貶謫せられるに至つた最初の失脚はこれであつた。傳記者は彼が四世仁宗の慶曆年中、再三顛沛し、貶謫せられ、困窮すと雖も自若として志操を變へなかつたことを稱揚してゐるが、少しくその經歷を辿つてみると、夷陵令より更に乾德令に左遷せられ、再び校勘となり、集賢校理になり、知諫院に召されて朋黨論を書いた。時に杜衍(21)、韓琦(22)、范仲淹、富弼等の名臣等は黨議のため罷免されるのを見、上疏して極諫し、爲に左遷され、潞州、揚州、潁州等の知州として田舎を廻ること十二年に及んだ。やがて再び召されて翰林學士となり、累進して禮部侍郎兼翰林侍讀學士となる。翰林にあること凡そ八年、新唐書を修するに當つて力を盡したのである。再び上書して時弊の病を擧げ、陳州の知に貶せらる。嘉祐五年、再び召されて樞密副使、更に參知政事、六世神宗即位の後には觀文殿學士刑部尙書知臺州、更に兵部尙書、更に太子少師の榮位に至つて、王安石と相容れず、その青苗法等の新法に反對して致仕す。彼の一生は常に闘ひであり、その戦ひは毎に批判精神から出發してゐたのである。尹洙(23)に従つて古文を學び、梅堯臣(24)と交つて詩文の宗となる。晩年、六一を號とした所以は、集古錄一千卷、書一萬卷、琴一張、棋一局、酒一壺、鶴一雙を愛藏したに由る。この集古錄たるや周漢以來の文章を集めて四百餘を録したもので、支那金石學上

の重要文獻なのである。熙寧五年、六十六歳にして卒す。孔子の十翼作説に對して最初の疑問を投げたのは實に歐陽修を以て嚆矢とする。

史記、孔子世家に曰く

孔子晩而喜易、序彖繫象說卦文言、讀易韋編三絶、日假我數年、若是我於易則彬々矣。

とあつて、孔子が易を喜んだとある。論語の子路篇に恒九三の爻辭を引用してゐることは古來から有名で、從つて晩年の孔子が易に關心を寄せたといふことは疑へないのである。しかしながら漢書藝文志は⁽²⁹⁾

孔子爲之彖易繫辭文言序卦之屬十篇

と明らかに、十翼の作者は孔子であると記し、而して何時からとなく其が定説となつて仕舞つたのである。

古來、八卦の作者は伏羲といひ、大成の卦の作者は伏羲といひ、神農といひ、夏の禹王といひ、周の文王といひ、諸説區々たるは易の作者は何人であるかといふ興味ある問題が、古代人の學究心を刺激した事實を説明するものであらう。しかしながら易の繫辭傳によれば神農時代の作となつてゐる。左傳、周禮などによつても夏の禹王、周の文王以前の制作と解されてゐる。卦辭は孔穎達の周易正義序によれば文王の作とある。而して爻辭の作者は文王といひ、或は周公といひ、殷末周初の制作は否定出來ない。斯の如く諸説紛々であるが、十翼が孔子の作だといふことは何人も疑はなかつたのである。史記が孔子十翼作の説を發表して以來、漢書、正義ともに異議をさしはさむ者はなかつたのである。⁽²⁷⁾

しかしながら唐の中世以後、漸次にさうした批判の風が起り、その先聲を爲したものは實に玄宗の孝經の改定に基くといつて好いのである。

歐陽修は、その逞ましい批判力を以て、十翼に對する疑義を投げかけた第一人者であつた。吾々は其所にも宋學の面目を見るのであつて、漢唐の易が象數に踏みとゞまつてゐたのに對し、宋易が寧ろ内在的な諸問題を包含してゐることを見出すのである。儒理易といひ、史事易といひ、共に宋易を構成する大切な因子なのである。

彼はその易童子問に曰く

童子問曰、繫辭非聖人之作乎。

曰、何獨繫辭焉、文言說卦而下、皆非聖人之作、而繫說淆亂、亦非一人之言也、昔之學易者、雜取以資其講說、而說非一家、是以或同或異、或是或非、其擇而不精、至使害經而惑世也。

然して其の主張の根據とするところは次の如くである。

(一) 繁衍叢腫なる點

(イ) 乾之初九曰潛龍勿用、象に陽在下也といひ、これを文言には四回も繰り返してゐること。

(ロ) 繫辭に乾以易知、坤以簡能、易則易知、簡則易從云々といひ、更に三回これを繰り返してゐること。

(ハ) 繫辭に六爻之動、三極之道也といひ、繫辭に三材之道といひ、說卦にもその意味を繰り返してゐること。

(三) 繫辭に繫辭焉而明吉凶といひ、これを四回も繰り返してゐること。

(二) 害經而惑世者なる點

(イ) 文言に元亨利貞を乾四徳とし、また忽ちにして四徳に非ずとすること。

(ロ) 繫辭に八卦を河圖洛書に則るといひ、また忽ちにして仰觀俯察によるといひ、また忽ちにして著に出づといふこと。

(三) 元亨利貞の四徳は魯穆姜の言である。それ故に文言は孔子の作に非ずといふ點

(四) 原始反終、故知死生之說、及び精神爲物、遊魂爲變是故知鬼神之情狀とは孔子平生の言に徴して是正に非ずといふ點

(五) 子曰は講師の言といふ點

(六) 說卦及び雜卦は筮人の占書といふ點

以上の重要な論點を擧げ、十翼は孔子の說に非ずと斷じたのである。この說は陸象山⁽²³⁾、あるひは鄒斌⁽²⁴⁾、あるひは崔述⁽²⁵⁾等の支持を受け、爾來、今日に於ては何人も十翼は孔子の作だと信する者はないのである。

吾が國に於ても伊藤東涯⁽²⁶⁾は歐陽修說を支持して曰く、仲尼は唯一個の仁を説き、孟子開口便ち仁義を説く。繫辭文言つねに仁義を双擧するは何ぞやと。

又曰く、十翼は或は孔子に先ち又孔子に後る。昭二年左傳に云ふ所、晉韓宣子が魯に聘して見たる易象は、先

儒周公の爻辭といへども、必らず大象小象なり。即ち象傳は孔子に先つ云々と。

けれども然し、それでは十翼は無價値な文献だとするならば、無論、これは甚しい早計と言はなければならぬ。故に歐陽修は曰く

繫辭は漢初これを易太傳といふ。之を聖人の作といへば即ち僞偽なれども、これを太傳といへば書禮の傳に勝ること遠しと(一)

されば十翼は、象は卦辭の傳であり、象は卦辭及び爻辭の傳であり、繫辭は易筮法の傳であり、說卦は大地萬物の傳であり、文言は乾坤の傳であり、序卦は六十四卦配列の傳であり、雜卦は六十四卦名の傳と言ふことを得、十翼を無視しては殆んど易經を理解し能はないのである。

(一) 趙匡胤。涿郡の人なり。初め募に應じて周高祖の帳下に入り、累遷して開封府馬直軍使と爲る。世宗に従ひて高平に戦ひ、大いに漢兵を破り、殿前都虞候に拜せらる。また従ひて淮南を征して忠武軍節度使となる。恭帝のとき歸德軍節度使となり軍を率ゐて契丹を防ぐ。時に周主、幼にして將士匡胤を戴かん事を謀る。往きて陳橋驛に宿す。軍兵等、夜、驛門に集り、匡胤に被らしむるに黃袍を以てし、羅拜して萬歳を叫ぶ。而して鼓譟して京に歸る。周主乃ち位を禪る。帝趙普に問ひて曰く、吾、天下の兵を翹めて國家長久の計をなさんと欲す、その道如何と。普答へて曰く、唐季より帝王數易るは節鎮甚だ重くして、君弱く臣強きに由るのみ。今稍やその權を奪ふに若くはなし。その錢穀を制し其の精兵を收めば則ち天下自ら安からんと。帝これに従ひ、漸を以て藩鎮の權を削る。乾德元年、高繼沖を伐つて荆南を平げ、同じく三年、

蜀を伐つて孟昶を降し、開寶三年、劉鋹を廣州に降し、同年、曾彬をして江南を平けしめ國內平定す。帝、嘗達にして大度あり。開寶の初め京城及び大内を修繕し、寢殿に坐して諸門を洞開せしむ。皆な端直軒窗にして雅緻あるなし。よりて左右に謂ひて曰く、これ我が心の如し。少しも邪曲あれば人皆な之を見ると。天下既に平き心を政事に留め、刑政租税を改定し、制度典章彬々として條理あり。在位十七年なり。

(2) 蔡倫。漢の人なり。字は敬仲。桂陽の人なり。才學あり、和帝の時、中常侍となり、元初年中、龍亭侯に封ぜらる。蔡倫曰く、古より書契多くは編むに竹を以てす。その縑帛を用ひて書くもの之を紙縑といふと。乃ち始めて樹膚麩頭紫衣魚網を用ひて紙を作る。天下みな蔡侯が紙を稱す。今、蔡陽縣の北に漢董門蔡倫の舊宅あり。宅西に石臼あり。言ふ是れ倫が春紙白なりと。

(3) 馮道。字は可道。瀛州景城の人なり。初めて劉守光に事ふ。守光敗れて張承業に歸す。承業その文學を以て之を薦む。莊宗乃ち戸部侍郎充翰林學士に拜す。道、人となり刻苦して儉約をなす。軍中に居り一茅庵を作り、牀席を設けず、一東菑に臥するのみ。その學士を解き、父の喪に景城に居るや、歳の饑に遇ひ、悉く有る所を出して以て郷里を賑す。明宗のとき端明殿學士に拜せらる。歳餘にして相となる。かつて明宗を戒めて曰く、凡そ危を踏むものは慮深くして念を獲、安に居るものは患、忽にする所に生ずと。相たること十年、明宗崩じて愍帝に相たり。潞王反して愍帝奔る。また潞王を迎へて之に相たり。唐滅びて晋に入り、また相に拜せられ、魯國公に封ぜらる。晋滅て漢に歸し、太師を以て朝請を奉ず。漢亡びて周に事へ、太師兼中書令に拜せらる。自ら長樂老と號し、書數百卷を著して、己が四姓及び契丹に更事し得るところの階勳官爵を陳して榮となす。自ら曰く、家に孝、國に忠、子となり、弟となり、人臣となり、司長となり、夫よな

り、父となり、子あり、孫あり、時に一卷を開き、一杯を飲み、味食ひ、聲を別ち、色を披り、考ひて當代に安んじ、老ひて自らを樂しむ、何の樂か之に如かんと。世宗のとき卒す。時に七十三歳なり。謚して文懿といひ、瀛王に追封す。

(4) 石經。

(イ) 後漢石經。熹平石經、鴻都石經、今字石經、一字石經ともいふ。後漢の靈帝、熹平四年に起手し、九年後の光和六年成る。祭酒蔡邕、七經の文字を校勘して碑に書し、石工に刻せしめ、洛陽太學門外に立つ。碑高一丈、幅四尺、隸書にして凡て四十六石。この石刻、唐代まで存せしも五代の亂に毀佚す。後、洪适その遺文一千九百餘字を得て會稽に刻せしも、亦、亡佚せり。

(ロ) 魏の石經。三字石經、正始石經ともいふ。正始年中、古文、篆、隸の三體を以て石刻し、漢碑の西に立つ。

(ハ) 晋の石經。西晋惠帝の時、五經文字を刻せり。

(ニ) 北魏石經。世帝の神龜元年補刻す。一説に事成らずして終ると。

(ホ) 唐の石經。開成石經、雍石經ともいふ。玄宗のとき石台孝經あり。玄宗の開成二年、國子祭酒鄭覃等十二經文字を刻し、長安の太學に立つ。そのほか張參の五經文字、唐玄度の九經字樣をも併刻す。この石經は太和七年に始まり開成二年に成り、現に長安の碑林にあり。阮元の十三經校勘記は之を基準とせりと。

此の他に後蜀の石經、北宋、南宋、而して清に石經あり。

(5) 毋(音フ)昭齋。五代の頃、蜀の人なり。財百萬を出して學宮を營むと傳へらる。

(6) 畢昇。傳未詳なり。一本に曰く、用膠泥刻字、薄如錢唇、每字爲一印、火燒令堅。先設一鐵板、其上以松脂蠟和紙灰

之類冒之、欲印則以一鐵籠置鐵板上、乃密布字印滿鐵籠爲一版、以火煬之、藥稍鎔、以一平板按其面、則字平如砥。印數千百本、極爲神速云々と。

(7) 夢溪筆談。二十六卷。補筆談二卷、續筆談一卷あり。宋の沈括の撰なり。凡て十七門に分てども、樂律象數を以て最も優れり。夢溪はその別業の名なり。

(8) 邢昺。字は叔明。曹州濟陰の人なり。太宗即位の初め九經の考試に第し、召されて國子監丞となり、轉じて國子博士に至り、累遷して金部郎中となれり。眞宗の咸平二年、翰林侍講學士を置くや、昺を任ず。詔を受けて諸儒と周禮、儀禮、公羊、穀梁の義疏を校定し、更に孝經、論語、爾雅の義疏をなす。即ち十三經註疏の論語、孝經、爾雅これなり。初め朝に講讀の職を置かるゝや、昺をして春秋左氏傳を講ぜしむ。五年を経て講終り、近臣と崇政殿に宴を設け、昺に襲衣金帶を賜ふ。眞宗かつて國子監に幸し、唐書を閲して昺に問ひて曰く、經書の版行せるもの幾何と。昺答へて曰く、國初四千に及ばず、今は十餘萬。經傳正義みな具す。臣少うして師に従ひ、儒を業とするの時、經備りて疏あるもの百に一二も無く、力能く傳寫すること能はざりき。今は板本大いに備りて士庶の家皆な之れ有り、乃ち儒者逢辰の幸なりと。帝喜んで曰く、國家儒術を尙ぶと雖も、四方無事に非ざんば何を以て此に及ばんと。

(9) 孫奭。字は宗古。博州博平の人なり。幼にして王微に學び、師歿して奭これに代りて經を講ずるに、門人數百これに従へりと。九經の試に第し、國子監直講となる。太宗、國子監に幸して奭に書を講ぜしむ。眞宗のとき龍圖閣待制となる。道を守りて自ら處し、言説かつて權門に阿附せず。時に眞宗、天書(符命)を奉ぜんと議し、諸臣これに贊す。奭ひとり臣最所聞天何言哉、豈有書也と奏して力諫す。仁宗のとき翰林侍講學士となり、七十にして致仕す。

(10) 孫復。字は明復。晋州平陽の人なり。進士の試に第せず、退いて泰山に居り四りて泰山先生と稱せらる。春秋章句王僉微十二卷を著す。唐の陸淳に本づき公羊、穀梁二傳を主とす。范仲淹、富弼等の薦により、召されて秘書省校書郎、國子監直講となり、累遷して殿中丞に至る。復病むや韓琦、仁宗に奏して、書吏を遣して、紙筆を給し、その門人祖無錫に命じ、復の家に就きて書十五萬言を得、之を錄して秘閣に藏せしむと。

(11) 石介。字は守道。袁州の人なり。徂徠先生と號す。少きときより胡安定、孫明復と共に書を泰山に讀み、刻苦して、淡を食ふと。慶曆年中、太子中允に擢でらる。時に富、韓、范、同時に政を執り、歐公、徐靖並びに諫官たり。石介、遂に慶曆聖徳の詩を作る。唐虞糾繆の著なり。

(12) 范仲淹。字は希文。吳縣の人なり。三歳にして孤なり。母の長由朱氏に再嫁するに隨ひ朱姓を冒す。大中祥符間、進士に擧げられ本姓に改む。謝啓に云ふ、志在投秦、入境遂稱於張祿、名非霸越、乘舟乃效於陶朱と。時人その親切に服す。初め長白山の僧舍に居り習讀す。日に粟米二升を煮て一器となし、刀畫して四塊となし、早晚、箸數莖を以て之を啖ふ。その清苦なる斯の如し。初め進士に擧られ金在銛賦を試む。曰く、如令區別蟬蚩、願爲金鑑、若使制平禍亂、請就手將、將相器業可見矣と。延安を鎮す。夏人相ひ戒めて曰く、延安を以て意となす勿れ、小范老子胸中自ら數萬の甲兵ありと。公、意を天下に鏡す、かつて曰く、士は當に天下の憂に先だちて憂へ、天下の樂みに後れて樂むべしと。班簿を取り、不才監司を見れば一筆に勾去す。富弼曰く、一筆一家の哭を爲すと。公曰く、一家の哭は何ぞ、一路の哭に如公、財を輕んじ施を好み殊に旅人に厚し。姑蘇に於て良田數千畝を買ひ、義庄となし、以て一族の貧者を養ふ。嫁娶喪葬みな贖給あり。右司諫より數州を経て至るところ惠政あり。召して樞密副使に拜し參知政事に進む。未だ處すところを得ずして卒す。文

正と謚し楚國公に追封す。公、佛を信ぜず。蘇公かつて其の之を信ぜざる所以を求む。公曰く、平生のこと目見る者に非らざれば信ぜずと。蘇曰く、公亦何ぞ能く然らんや。設し公疾あり、醫をして脈を切せしむ。醫曰く寒と。則ち熱藥を服す。醫曰く熱と。則ち寒藥を服す。公何ぞ嘗て脈を見て後之を信ぜんや。公默然たりと。

(13) 富弼。字は彥國。河南の人なり。篤學にして大度あり。仁宗のとき茂才異等に擧げらる。僉書河陽判官通判絳州たり。後ち使となり契丹に至りて和議を成す。樞密使に拜せらる。文彥博と並に相たり。天下稱して富文といふ。かつて西京に留守たり。府園牡丹盛なり。邵堯夫に問ふて曰く、此の花幾時か開盡すと。曰く、盡來の日午時と。明日客を會し其の言を驗するに、飲終りて恙無し。須臾に群馬風逸蹄嚼し花叢悉く毀る。聖歷年中、契丹、朝廷に西夏の憂あるに乗じ、蕭特末をして來りて關内の地を言ふ。帝、歲幣を増すを許し、呂夷簡をして報聘者を選ばしむ。夷簡もとより弼を悦ばず、囚りて之を薦む。弼、命を得て即ち入對して曰く、主憂ふれば臣辱めらる、臣敢て其の死を愛せずと。帝爲に色を動す。弼を樞密直學士に進む。弼辭して曰く、國家急あり義、勞を憚らず。何ぞ遂に官爵を以てせんと。遂に往く。契丹に至り其の主に見へて曰く、兩朝人主父子好を繼ぐ四十年に垂んとす。一旦、地を割くを求む北朝、章聖皇帝の大徳を忘れんか、澶淵の役、苟も諸將の言に従はゞ北兵駭るを得る者無し。且つ北朝中國と好を通せば則ち人主その利を專にして臣下獲る所なし。若し兵を用ひば則ち利臣下に歸して人主その禍に任ず。故に兵を用ふるを勸むる者は皆な身の爲に謀るのみ。且つ今、中國、封萬里の精兵百萬を提す、北朝兵を用ひんと欲せば能く其の必勝を得んや。たとひ其れ勝たしむるも亡するところの士馬、群臣之に當らんか。抑も人主之に當らんか。若し好を通じて絶たざれば歲幣悉く主に歸す。群臣何の利あらんと。契丹主大いに悟り首肯之を久うす。明日、契丹主、弼を召して同獵し、弼が馬を引き相ひ近づき謂ひて曰く、地

を得ば則ち歡好久かるべしと。彌言ふ、北朝既に地を得るを以て榮となさば、南朝必ず地を失ふを以て辱となさん。兄弟の國、豈に一榮一辱ならしむべけんやと。獵罷む、劉六符曰、帝主、公が榮辱の言を聞て意甚だ感悟す。今たゞ結婚議すべきのみと。彌曰く、婚姻、嫌隙を生じ易し。本朝、長公主出でて嫁す。齎送十萬緡に過ぎず、豈に饒裕無窮の利に如かんやと。契丹主、彌を諭して歸しめて曰く、卿が再至を待て當に一事を擇んで之を受くべしと。彌、還奏す。帝また彌をして和親納幣二議及び誓書を持って往かしめ、且つ命じて口傳の辭を政府に受けしむ。既に行き樂壽に宿す。副使張茂實に謂ひて曰く、吾、使者となりて國書を見ず。若し誓詞と口傳と異らば吾が事敗れんと。啓視すれば果して同じからず。疾く馳せて都に歸り入見して曰く、執政これを爲す、臣を死地に致さんと欲す、臣、惜しむに足らず、國事を奈何せん。帝、急に夷簡を召し之を問ふ。夷簡曰く、此れ誤りのみと。彌、語、夷簡を侵す。遂に書を代へて以て往く。彌、契丹に至り、また婚を議せず、専ら增幣を議す。契丹主曰く、南朝既に我に歲幣を増す、その辭當に賦といふべしと。彌曰く、南朝兄たり豈に兄、弟に賦するあらんやと。契丹主曰く、然らば則ち納の字となさん。彌曰く亦不可と。契丹主曰く、南朝既に厚幣を以て我に送る、これ我を懼るなり。然らば二字に於て何かあらん。我兵を擁して南下せば悔ゆるなきを得んやと。彌曰く、本朝、南北を兼愛す、もとより成を更ふるを懼らず何ぞ懼るゝをなさん。或は己むを得ずして兵を用ふるに至らば則ち當に曲直を以て勝負をなすべし、使臣の知るところに非るなりと。契丹主その奉ふべからざるを知り乃ち曰く、吾、當に自ら人を遣し之を議すべしと。乃ち增幣誓書を留めて邪律仁先、劉六府をして彌と共に來らしめ、且つ獻納二字を議す。彌至り入對す。因りて曰く、二字、彌、死を以て之を拒ぐ。彼氣挫く。許すなかるべしと。帝、晏殊の議を用ひ、遂に納字を以て之に與みす。和好また定る。臣をして翰林學士となす。固辭して拜せず。彌はじめ命を受け契丹に

使し、一女の死を聞き、再往して一男の生を聞く。皆な省みず。家書を得て未だかつて開かず、即ち之を焼きて曰く、たゞ人意を亂すのみと。故に能く兩國の好を成す。帝また樞密直學士に申命す。また辭す。また翰林に除す。彌これを辭して曰く、歳幣を増す臣の本意に非ず、特に方に元昊を討するを以て未だ與に争ふに暇あらず、故に死を忍ぶのみ、敢て賞を受けんやと。初め河北京東大水あり。民流れて青州に就食す。彌、所部の民に勸めて粟を出さしめ、益すに官廩を以てす。公私の虛舍十餘萬區を得て、其の人を散處し以て薪水を便する凡そ五日、即ち人を遣し酒肉飯糗を持して慰藉すること至誠に出づ。人々ために力を盡し、また山林川澤の利、生を資くべきもの民の擅取に聽す。凡そ五千餘萬人を活す。法を立つること簡便周盡、天下傳へて以て式と爲す。帝聞いて使を遣して褒勞し、禮部侍郎を加ふ。彌曰く、これ臣の職なり、敢て賞を受けんやと。帝かつて相を置くを王素に問ふ。素答へて曰く、たゞ宦官宮妾、姓名を知らざるもの其の選に充つべしと。帝曰く、斯の如きは則ち富弼のみと。是に至りて文彥博、彌と同じく召されて郊に至る。百官を召して之を迎ふ。范鎮言曰く、之を隆にするに虚禮を以てす、之を推すに至誠を以てするに如かずと。官制に及びて、士大夫、朝に相ひ慶す。帝、小黃門を遣して之を覘はしめ、翰林學士歐陽修に語つて曰く、古の相を命する或は諸を夢卜に得、今、朕、二相を用ふるに人情斯の如し、豈に夢卜に賢らずやと。修、頓首して賀す。偶々、契丹の使者耶律防至る。王德州ともに玉津關に射る。防曰く、天子公を以て樞密となし、而して富公を用ひて相となす。將相皆な人を得たりと。彌、母の喪を以て位を去る。詔して爲に春宴を罷む。故事に執政、喪に會へば皆起つて復びす。帝、位を虚うして五度之に起つ。彌かたく制を終へんと請ふ。且つ曰く、起復は余革の變禮、平世に施すべからずと。帝之を許す。彌かつて足疾を以て解政を求む。乃ち使相鄭國公を以て揚州に判とす。次で彌を以て司徒侍中平章事となす。初め彌、汝州より入覲す。命じて拜す

るかからしめ、坐語たゞ從容として訪ふに治道を以てす。彌答へて曰く、人君好惡、人をして窺測せしむべからず、窺測せしむれば則ち姦人以て稱會するを得、當に天の人を鑒する如くすべし。善惡皆な自ら取る所にして然る後、誅賞これに隨へば則ち功罪皆な其の實を得と。また邊事を問ふ。彌答へて曰く陛下臨御未だ久しからず、當に先づ德澤を布くべし。願くば二十年、口、兵を言はざれ。亦宜しく邊功を重賞すべからず。干戈一たび起らば繋る所の禍福細ならずと。帝默然たり。之を留めんと欲す。力辭して郡に赴く。召して是職に拜するに至りて、時に帝、災變を以て正殿を避け、膳を減じ、樂を撤す。王安石、帝に謂ひて曰く、災異はみな天數、人事得失の致す所に關するに非ずと。彌、道に在りて之を聞き數じて曰く、人君の畏るゝ所のは天のみ。若しそれ天を畏れざれば何事か爲すべからざる者ぞと。即ち上書數千言、春秋、洪範及び古今傳記人情物理を雜引して以て其の決して然らざるを明にす。人對に及びてまた曰く、君子小人の進退は王道の消長に繋る。願くば深く辨察を加へよ。大抵、小人は性、動を喜ぶことを生ずれば則ち其の間、希覲する所の者あり。若し朝廷、靜を守れば則ち事、常法あり。人何ぞ望むことあらんやと。時に王安石、事を用ふ。もとより彌と合はず。彌争ふ能はざるをはかり、多く病と稱して退くを求め、章數度上る。帝曰く、卿もし去らば誰か代るべきものぞと。文彦博を薦む。帝、默然稍や久うして曰く、王安石は如何と。彌もまた默然たり。遂に出でて亳州に判たり。彌かつて曰く、君子小人と並處す。その勢必らず勝たず。君子勝たざれば則ち身を奉じて退き、道を樂みて悶る無し。小人勝たざれば則ち交結構練し千岐萬轍、必ず勝つて而して後己む。その志を得るに及んでは遂に善良に肆毒す、天下の亂れざるを求むるも得べからざるなりと。後、彌、汝州に貶せらる。汝州に至る。上言す。新法は臣の曉らざるところ、以て郡を治むべからず、願くは洛に歸り疾を養はんと。遂に司空を以て致仕す。韓國公に進封す。彌、家居すと雖も、朝廷に大利害あれば

知りて言はざるなし。帝盡用せずと雖も而も眷禮衰へず。かつて王安石によりて建明する所あり、帝之を卻けて曰く、富弼手疎に老臣告訴する所なしと稱す。屋を仰いで竊に歎ずる所の者即ち當に至るべしと。その敬せらるゝ斯の如し。後、家居十餘年、乃ち卒す。弼早く公輔の望あり、名、夷狄に聞ゆ。遼使至る毎に必ず其の出處安否を問ふと。弼事に臨んで周悉、萬全ならざれば發せず、その敢言に當ては、忿りて身を顧みず、忠義の性老ひて愈々篤く、須臾も未だかつて朝廷を忘れず。訃聞す。太尉を贈り、文忠と諡す。唐鑑纂疏の著あり。

(14) 包拯。字は希仁。廬陵の人なり。令儀の子。進士の第に擧げられ、かつて郡守となる。少しも法を屈せず以て鄉曲を徇ふ。吏事推して第一と爲す。開封府に知たり、貴戚宦官これが爲に手を斂め、吏民敢て欺かず。童兒もまた其の名を知り呼んで包侍御といふ。京師これが爲に語りて曰く、關節不到、有闕羅包老と。其の笑を以て黃河の清に比す。御史中丞に擢でらる。時に東宮久しく闕け、儲貳未だ定まらず。極言して曰く、東宮虛位日久しく、天下以て憂となす、夫れ萬物皆な根本あり、而して太子は天子の根本なり。根本の立たざる禍いづれか之より大ならんと。帝曰く、卿、誰をか立てんと欲する。拯曰く、臣非才位に備はり、あらかじめ太子を建てんと乞ふ所以のものは、宗廟萬世の計をなすのみ。臣年七十にして且つ子なし、後福を邀ふる者に非ずと。帝喜びて曰く、當に徐に之を議すべしと。樞密副使に累官す。人となり峭直剛毅、惡を憎むこと仇の如しと雖も、未だかつて推すに忠恕を以てせずんば非ず。人と苟合せず。辭色を偽りて人を悦ばしめず。平生私書なく、故人親黨の干謁、一切これを絶つ。その飲食服用甚だ儉素、貴しと雖も布衣の時の如し。卒して禮部尙書を贈られ、孝肅と諡す。奏議十五卷あり。

(15) 張巨。薦を以て國子監直講に充てらる。王安石の新法行はれ、巨、即ち引き去る。時論之を高しとす。文集四十卷、

易解二十卷あり。

- (16) 蔣之奇。字は顯叔。宜興の人なり。進士に第し、賢色方正に擧げらる。英宗の初み殿前侍御史に遷る。哲宗のとき寇を平げ功を以て寶文閣待制に除せられ觀文殿學士知杭州に終る。蘇東坡と同年の進士なり。かつて共に陽羨に卜居するの約を定む。文集雜著百餘卷あり。孫興祖、陽武縣に知たり。金人京師を犯して其の境に道す。再戦して敵せず、之に死す。
- (17) 胡宗愈。宿の姪。字は完夫。進士に擧げらる。哲學即位す。首として六事を進め、また君子無黨論を進む。官を進めて吏部尙書たり。卒して修簡と諡す。

(18) 未考

- (19) 韓愈。字は退之。唐の南陽昌黎の人なり。代宗の大曆三年に生る。二歳にして孤なり。伯兄會が嶺表に貶せらるゝに隨ふ。會卒して親鄭氏ひとり能く之を鞠育す。貞元二年十九、始めて京師に至る。八年進士に第す。獨孤及、梁肅の徒に従つて遊ぶ。九年より十一年に至り博學宏辭を以て三度、吏部に試たるも皆な中書に黜けらる。京師を去り潼關より河陽に至り、また東都に行く。十四年、進士を以て宣武節度使董晉が汴州を平ぐるに従て推官さる。時に三十一なり。晉卒して武寧節度使建封に依る。建封奏して節度推官となす。操行堅正にして硬言忌む所なし。十八年、四門博士になり、十九年、監察御史に遷る。上疏して極めて宮市を論ず。德宗怒りて陽山令に貶す。後、江陵法曹參軍に改めらる。元和の初め三十九歳、江陵より召されて國子博士に拜せられ、元和聖德詩を上る。四年、都官員外郎に改められて河東令に拜せらる。六年、職方員外郎に遷り、七年また國子博士となる。退之既に才高うして屢々官を黜けられ下遷す。進學解を作りて自ら喻す。執政その才を奇とし、比部郎中史館修撰に改む。然れども史才は其の長ずるところに非ず。十一年、太子右庶

子となる。宰相裴度が淮西を宣慰するに及びて行軍司馬となる。退之、汴に入り、韓弘を説きて力を協さしむ。刑部侍郎に遷る。十四年、論佛骨表を上り、帝の怒りに觸れて潮州刺史に貶せらる。既にして帝、潮州刺史上表を見て感悔し、また用ひんとす。皇甫鎛に妨げられて袁州刺史に改む。十五年正月、穆宗位に即く。九月召して國子祭酒に拜す。長慶元年、兵部侍郎に轉ず。鎮州の亂を平げ吏部侍郎に轉ず。三月、京兆尹兼御史大夫となり、十月、兵部侍郎となり、數日にしてまた吏部侍郎となる。四年十二月二日を以て卒す。壽五十七なり。

(20) 高若訥。字は敏之。榆次の人なり、進士に第し累遷して樞密使に官す。皇祐年中、罷めて觀文殿學士尙書左丞となる。卒して文莊と謚す。強記にして能く勉學し、群籍に該通し曆學醫書に明かなり。文集二十卷あり。

(21) 杜衍。字は世昌。山陰の人なり。厲操篤學なり。進士甲科に擢られ、州縣を歴して皆な政績ありと。慶曆年中、相となり韓琦、富弼、范仲淹と同じく時弊を改めて紀綱を修す。而して衍、最も僥倖を抑す。凡そ内降の恩澤は一切與へず、積んで十數なる毎に必ず之を面約す。仁宗かつて歐陽修に謂て曰く、朕、禁中に居り、恩澤を求むる者あれば毎に衍が可かざるを以て之に告げて止むるもの封還する所より多しと。是に由りて僥倖寝々悦びず。相たること百日にして罷む。後、太子少師を以て致仕し、祁國公に封ぜらる。卒して正獻と謚す。時に清白宰相と號す。

(22) 韓琦。字は稚圭。相州の人なり。年二十にして進士第一に登第す。唱名終りて大史、日下に五色の雲見はると奏す。范仲淹と兵間に在ること最も久しきを以て、二公の名一時に重し。天下稱して韓范となす。邊人謠つて曰く

軍中有一韓 西賊聞之心膽寒

軍中有一范 西賊聞之驚破膽

と。秦州に知たる日、かつて夢に手を以て天を捧ぐるもの再び、その後、兩朝に歴相たり。己に先づ之を夢に兆す。定州安撫使たりし時、歲饑う。法を設けて賑を行ふ。活を全うするもの七百萬人。五代以來、學校久しく廢す。琦、舍宇を葺き儒生に絃誦を課す。琦かつて兵を延安に駐む。夜、人あり。匕首を携えて臥内に入る。琦起ちて問ふ、是れ誰ぞや。曰く、某來りて諫議を殺さんとす。また問ふ、誰か汝を遣す。曰く、張相公。琦また枕に就きて曰く、我首を取り去れ。某人曰く、忍びず、諫議の金帶を得ば足れりと。遂に去る。琦また此の事を治めず。かつて亦夜書を作る。一寸をして燭を持せしむ。偶々他顧し、公の鬚を灼く。公手を以て之を摩して書を作ること故の如し。少頃にして回顧すれば則ち別人を易ふ。琦、主吏の之を難せんことを恐れ、之を呼びて曰く、彼を易ふる勿れ、今、己に燭を持つを解すと。軍中嘆服す。琦の大名府に知たる日、人あり玉盞二隻を獻す。表裏瑕無し。百金を以て之に答ふ。宴を開く毎に一卓を設け、覆ふに錦衣を以てして玉盞を其の上に置く。一日宴に臨み、一吏誤りて其の卓を倒し、玉盞を碎く。座客愕然たり。吏、地に伏して罪を請ふ。琦、自若として曰く、凡そ物の成毀皆な時數あり。汝誤れるなり。故にせるに非ず、何の罪かあらんと。座客感服す。英宗はじめて立ち、曹太后、政を聽く。琦、太后の簾を撤して政を還さんことを欲す。乃ち十餘事を取りて賣す。帝の裁決悉く當る。琦、即ち太后に至りて覆奏す。太后、事毎に善しと稱す。琦よりて太后に白して去らんことを求めて曰く、前代の馬鄧、賢なりと雖も權勢を貧戀するを免れず。太后もし脱然として復辟せば即ち是れ千古未だ有らざる所なりと。太后曰く、自家何ぞ敢て賢人を望まんと。珂その意の回るを察し、則ち連りに之を贊成す。後、數日にして批出して曰く、某日、更に殿に御せずと。琦にわかに簾を捲き座を撤せしむ。乃ち往きて上に白す。上曰く、未だしきことなきや否やと。琦曰く、己に親詔を得たりと。遂上に釋然たり。初め帝、病あり。内侍兩宮を煽惑し遂に嫌隙をなす。琦、

歐陽修と同じく事を簾前に奏す。太后、嗚咽流涕して具さに不遜の状を言ふ。琦、修と反覆勸解すれども太后終に未だ釋けず。琦曰く、これ病固と爾り、病已まば必らず然らず。子の病、母これを容さざるべけんや。臣等外に在り、聖躬もし調護を失はざ、太后その責を辭するを得ずと。太后驚きて曰く、是れ何の言ぞや、我心更に切なりと。同列皆み頸を縮めて汗を流す。後、琦ひとり帝に見ゆ。帝曰く、太后我を待つこと恩少しと。答へて曰く、古より聖王明帝少しとなさず、獨り舜を稱して大孝となす、豈その餘悉く不孝ならんや。父母慈にして子孝なるは常事にして言ふに足らず。唯だ父母不慈にして子孝を失はずして乃ち稱すべしとなす。たゞ陛下の之に事ふること未だ至らざるを恐る、父母豈に不慈なるものあらんや。帝大に感悟す。初め任守忠、建議して昏弱を立て以て大利を邀めんと欲す。帝、位に即くに及び、また帝の疾に乗じて妄狂を語言し、兩宮を交闘す。一日、琦、空頭敕一道を出す。歐陽修己に僉す。趙槩これを難ず。修曰く、第だ之を書せよ、韓公必ず説あらんと。琦、政事堂に坐し、守忠を召して庭下に立たしめて曰く、汝が罪死に當す。姑く靳州に謫すと。即日押行す。少しく緩なれば即ち中ごろにして變せんことを慮るなり。その黨史昭錫等悉く南方に竄せらる。中外悉く快と稱す。琦、陝西を安撫するとき上疏して青苗法の不便を切言す。帝その疏を袖にして執政に示して曰く、琦は眞に忠臣なり、外に在りと雖も王室を忘れずと。遂に執政に諭して青苗法を止めしむ。王安石かたく持して肯せず。琦、申辯愈々切にして、且つ安石が周禮を引き以て上聽を惑すを論ず。琦、嘉祐の時にありて相となり、曾公亮、亞相たり、趙槩、歐陽修、參政たり。凡そ事、政令に關すれば則ち集賢に問へと曰ひ、典故は即ち東廳に問へ、文學は即ち西廳に問へと言ひ、大事に至りて則ち自ら決す。人以て宰相の體を得たりとなり。歐陽修その徳量に心服す。かつて曰く、韓公大事に臨み大疑を決し、紳を垂れ笏を正しうし、聲色を動かさずして天下を泰山の安きに置く、社稷の臣といふべしと。英

宗の朝、魏國公に封ぜらる。神宗の熙寧八年卒す。壽六十八なり。帝自ら碑文を爲り、その首に篆して曰く、兩朝顧命定策元勳之碑と。忠獻と謚す。

(23) 後に傳を出す。

(24) 尹洙。字は師魯。源の弟。博學にして春秋に深し。文を爲る謹嚴なり。進士に第し累遷して起居舍人たり。唐宋以來、文章淺や傲す。洙穆長侶と古文を爲り以て時の向ふ所を矯む。これより文風多く變ず。

(25) 梅堯臣。字は聖俞。宣城の人なり。詢の從子。詩に工なり。歐陽修等と詩友なり。仁宗、召試して進士出身を賜ふ。仕へて國子監直講となり、後、都官員外郎に遷る。晩年歐陽修等と唐書を修む。書成りて未だ卒らざるに歿す。時に年五十八といふ。

(26) 漢書藝文志の文、說卦の名を缺けども、當時の周易は十二篇の如し。顏師古曰、上下經及十翼故十二篇と。

(27) 其彖象十翼之辭、以爲孔子所作、先儒更无異論(易正義序)

(28) 後に傳を出す。

(29) 鄒臧。臨川の人なり。博學謹識なり。かつて陸九淵に見ゆ。問ふ、平日何の學か以て放心を求むると。一語を答へて契合す。制置使趙方かつて三關を經理するを委す。形勝措置方あり。魚湖の訟を決し、漢陽の獄を平反するに至りては皆な人心に當る。著すところ南塘稿あり。

(30) 後に傳を出す。

(31) 伊藤東涯。名は長胤。字は源藏。東涯と號し、また慥々齋と號し、世、紹述先生といふ。仁齋先生の長子なり。三四

歳にして能く字を知り、長じて博覽強記、能く文を作る。經術に達し、行誼方正、古君子の風格あり。また沈靜寡黙にして且つ恭儉謹慎、口に人の短を言はず。時に荻生徂徠、東都にありて、常に東涯を排すれども、東涯、敢て評騰せず。終身仕へず、家學を家に講じ、寒暑、手より卷を置かずといふ。元文元年七月死す。壽六十七なり。内大臣藤原常雅その墓碑銘を撰び、權中納言藤原俊將その篆額を、而して右中將藤原英朝これを書す。世以て榮となせり。

(32) 後漢の王允の論衡に曰く、聖人作其經賢者作其傳と。

また歐陽修の春秋論に曰く、傳所以述經也、經文隱而意深、三子者從而發之、故經有不言傳得而詳爾と。

第二十七章

宋學に於ける哲學的發展は北宋にあつては邵雍及び周子及び二程子、南宋にあつて陸象山及び朱子を以て最高峰とすることが出来るであらう。是等の偉大なる學者は、それ／＼の立場に於て、その哲學的思想を異常に發展せしめたのである。彼等が宋代儒學の發達を遂げしめた其の思想的背景に、傳統の古代思想を、一方に漸く發展期にあつた佛教思想をも併せて理解したといふ有利な状態に於て、新しい彼等の思想的所産を提供し得たといふ事實を見落してはならない。

易學に關して言へば、宋代に至つて易學の哲學的發展はめざましいもので、易學が眞に古代支那の文化科學として取り扱はれ得るに至つたのも畢竟、これ等の大儒の思惟業績の所産に他ならないのである。

邵雍。字は堯夫。河南范陽の人である。安樂先生と號す。始め母を失うて、蘇州の百源山に閑居し、堅苦刻厲、寒にも爐せず、暑にも扇せず、夜に寢に就かざること數年といふ。東都事略(1)によると其の學統が知られる。即ち、唐末宋初に陳搏(2)（希夷）、字は圖南といふ隱者があつて、その易學を種放(3)といふ人に授けた。種放はそれを許堅(4)といふ人に授けた。許堅は范諤昌(5)に之を授けた。而して種放に二人の弟子があり、一の劉牧(6)は易數鉤隱圖三卷の著者として知られてゐる。他の一人の穆修(7)は李之才(8)に授け、李之才は勤めて邵子を性命の學に向はしめ、圖書先天象數の學を授けたといふ。春秋を受け、易を傳へられたといふのが學的内容として知られてゐる。學成つ

て四方に周遊し、河汾を絶ち、淮漢を涉り、齊、魯、宋、鄭の間に周流し、之を久うして幡然として歸り來つて曰く、道此に在りと。洛に居ること四十年。六世神宗のとき灑寧の初め、著作郎を以て召されたが、遂に出でず。觀物内外篇、漁樵問答、伊川擊壤集二十卷等あり、邵子全集二十四卷は彼の全貌を語るものである。而して有名な皇極經世書六十卷は、インド思想の劫簸、即ち成住壞空の思想の影響を多分に見出すのである。

かつて四世仁宗の至和年中、客と江南の天津橋を歩みつつ、杜鵑の聲を聞き愀然として曰く、洛陽舊と杜鵑無し、今、始めて至れりと。客曰く、何の謂ぞや。答へて曰く、天下將に治まらんとすれば地氣北よりして南す。將に亂れんとすれば南よりして北す。今、南方の地氣至れり。禽鳥は氣の先を得、故に之を知ると。八世徽宗、九世欽宗のとき王安石等、事を用ひて果して其の言の如く敗れた。邵雍、病ひ重きに及んで、司馬溫公(9)に謂ひて曰く、吾化を觀て一巡せんと欲す、如何と、溫公曰く、先生未だ應に是に至らずと。邵雍笑つて曰く、死生は當事のみと。即ち一詩を大書して曰く

生乎太平世 死乎太平世

客問年幾何 六十有七歲

と。乃ち卒す。時に神宗の灑寧十年である。謚して康節先生といふ。⁽¹⁰⁾

河南に流寓するとき富弼、司馬光、第を治めて之を舍す。其の室に扁して安樂窩といふ。朝には則ち香を焚きて燕座し、夕には即ち酒を酌むこと三四甌、微醺なれば即ち已む。春秋に出遊するに小車に乗り、唯だ意の適

する所のままにす。士大夫の家、争うて相ひ迎候す。故に童孺等みな驩然として謂ひて曰く、吾家の先生至れりと。好事者は別に一室を作り、邵雍の居る所の如くし、以て其の至るを待つ。署してこれを行窩といふ。その人を爲を推して知るべきである。世にその學派を百源派といひ、また易家は造化宗と稱して居る。

邵雍の學は數に基準し、先天象數の學などと言はれ、一見、自然哲學の如き様相を示してゐるが、本質的には一種の觀念論なのである。古代支那には觀念論はなく、汎神論が發達して來たが、佛教哲學の影響を受けて、純然たる觀念論が起り、その萌芽を宋代に認めることが出来る。邵子はその代表的な先驅者であつた。⁽¹¹⁾

邵子いふ。心爲太極。また道爲太極と。

また漁樵問答にいふ。樵者曰、天地之道備于人、萬物之道備于身、衆妙之道備于神、天下之能事畢矣、又何思何慮と。

彼を目して觀念論者といふ謂は、次の言葉によつても知られるのである。即ちその觀物外篇に、天地之本其起于中乎、是以乾坤交變而不離乎中、人居天地之中、心居人之中、日中則盈、故君子貴中也と。

易學の理論的發展過程は支那古代に於ける自然辯證論として把握されることは既に指摘せられたところである。勿論、支那辯證家として吾々は正統儒學史の中に、數人の大儒を知つてゐる。鄧析子⁽¹²⁾であるとか、尹文子⁽¹³⁾であるとか、惠施⁽¹⁴⁾であるとか、就中、有名な公孫龍⁽¹⁵⁾であるとかの名家は、しかしながら近代の辯證論として吾々が扱ふ範疇に屬さないとやつても好い。易の包含する辯證論に留意したことはヘーゲルの哲學の洗禮を受けた近代

人、就中にエンゲルスの自然辯證論に刺激を受けた少數の有識者が、これを問題として取り上げてからである。しかしながら今日、邵雍のイデオロギーを分析すると既に宋代に於て、早くも斯の如き意圖に基いて、彼の世界觀を樹立してゐたものであることを發見することが出来るのである。

邵雍は、世界は滅亡する運命を持つてゐるが、それは再びまた新しく建設されるものと確信してゐた。このやうな考へは佛教の世界觀の影響を受けたと思はれるのであるが、佛教徒は世界時限、即ち劫筭を假定し、世界は一劫の間に生じ、また滅んで行く。一つの世界が生じてから、舊い世界が滅び、更に新しい世界が創造されると信じ、それを輪廻とし、それまでの時間を十三億四千四百萬年かゝるとされ、それを一大劫と呼んでゐるのである。邵子も亦、宇宙萬有は太極より出るものと見る。その學的根柢は易である點に留意しなければならぬ。

太極は一靜一動の間に於て始めて存するもので、それが動となり、靜となるといふ。動は天の四時であり、靜は地の四維である。この四つつのものが交感し、生成消長の變化を辯證法的に發展せしむるものが、彼の世界觀の基礎となつてゐるのである。皇極經世書は其の世界觀を説明したもので、即ち辰は一時であり、日は十二辰であり、月は三十日であり、年は十二ヶ月であり、世は三十年であり、運は十二世であり、會は三十運であり、元は十二會であり、斯の如くして一世界の期限は十二萬九千六百年續くといふのである。蓋し一年の過程を見るのに、十二と三十との相乘に過ぎない。而して一元を單位とし、推して元の元に至つて窮るとなす。窮れば變じ、變すれば生ずる。斯の如き循環は遂に止む時がないのである。この數を以て推す時に、天地の運化、萬物の起滅、

人事の盛衰として、一々、窮め能はないものはないといふ。以上の如く宇宙間に伏起生滅する萬種の現象は、時間の次序により、加一倍法を以て累進する。こゝに於てか其の説の窮極するところ、人間社會を以て一つの小宇宙を爲すものと觀ることが出来る。従つて其の思惟傾向は漢儒（董仲舒等）と佛家を加味したものと、如くにも受け取られるのである。加一倍説は邵子及び朱子の唱へた説で繫辭傳に基くのである。即ち

易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業。

とあるのが根據である。朱子の易學啓蒙に曰く

太極の判るゝ始めて一奇一偶を生じて一畫と爲るもの二、是を兩儀となす。その數は陽一にして陰二。邵子の所謂一分れて二と爲るとは此をいふなり。兩儀の上、各、一奇一偶を生じて二畫と爲るもの四、是を四象といふ。その位は太陽一、少陰二、少陽三、太陰四。その數は太陽九、少陰八、少陽七、太陰六。邵子の所謂、二分れて四と爲るとは此の謂なり。四象の上、各一奇一偶を生じて三畫となるもの八、是に於て三才略具はりて八卦の名あり。その位は乾一、兌二、離三、震四、巽五、坎六、艮七、坤八なり。邵子の所謂、八分れて十六と爲るとは是なり。四畫の上、各一奇一偶を生じて五畫と爲るもの三十二。邵子の所謂、十六分れて三十二と爲るとは是なり。五畫の上、各一奇一偶を生じて六畫と爲るもの六十四、則ち三才を兼ねて之を兩にす、而して八卦の八卦に乘ずるも亦周す。是に於て六十四卦の名立ちて易道大成す。邵子の所謂、三十二に分れて六十四と爲るとは是なり。

即ち一より二、二より四、四より八、八より十六と數學的級數で展開する。加一倍説の名ある所以である。⁽¹⁶⁾
加一倍法を以て宇宙の生成發展を學的に展開した所謂、先天の學は邵子を首唱者とするのであるが、元、これは既述の華山の道士、陳搏の創説に關り、邵子これを大成すといふ。故に陳邵の先天學といふのである。先天學の中心をなすものは卦位の圖である。その一を八卦次序の圖といひ、即ち一分れて二となり、四分れて八となるものである。その二は八卦方位の圖である。即ち乾南坤北の位がそれである。

八卦次序は説卦傳に據るのである。即ち、乾は天なり故に父と稱す。坤は地なり故に母と稱す。震は一索して男を得、故に之を長男と謂ふ。巽は一索して女を得、故に之を長女と謂ふ。坎は再索して男を得、故に之を中男と謂ふ。離は再索して女を得、故に之を中女と謂ふ。艮は三索して男を得、故に之を少男と謂ふ。兌は三索して女を得、故に之を少女と謂ふ。⁽¹⁷⁾従つて亦これを父母六子説といふのである。元の吳澄の説明によると

萬物始を天に資る、猶ほ子の氣の父に始るが如し。生々地に資る、猶ほ子の形の母に生ずるが如し。故に乾を父と稱し、坤を母と稱す。索は求めて之を取るなり。坤乾に交りて乾の初畫、中畫、上畫を求め取りて長中少の三男を得、乾坤に交りて坤の初畫、中畫、上畫を求め取りて長中少の三女を得。一索は初に交るを謂ひ、再索は中に交るを謂ひ、三索は上に交るを謂ふ。索の先後を以て長中少の次を爲すなりと。

邵子が現れる前までは、漢易を傳統して卦の次序には定説があつたものゝ如くである。唐の高宗の永徽中、太學博士たりし賈公彥は、朱子も推稱する如く周禮に詳しく、且つ鄭玄の學法を最も發揮した學者であるが、その

周禮義疏に畫卦に就いて言つてゐる。即ち

之を重ねる法は、乾の三爻を以て下體と爲し、上に乾の三爻を加へて純乾卦と爲す。また乾を以て下體と爲し、坤の三爻を加へて泰卦と爲す。また乾を以て本と爲し、上に震の三爻を加へて大壯の卦と爲す。また乾を以て本と爲し、巽を加へて小畜の卦と爲す。また乾を以て本と爲し、坎を加へて需の卦と爲す。また乾を以て本と爲し、離を加へて大有の卦と爲す。また乾を以て本と爲し、艮を加へて大畜の卦と爲す。また乾を以て本と爲し、兌を加へて夬の卦と爲す。此は是、乾の一重、七を得て八と爲る。また坤の三爻を以て本と爲し、上に坤を加へて純坤卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に乾を加へて否の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に震を加へて豫の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に巽を加へて觀の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に坎を加へて比の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に離を加へて晋の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に艮を加へて剝の卦と爲す。また坤を以て本と爲し、上に兌を加へて萃の卦と爲す。震より巽、坎、離、艮、兌、その法みな斯の如くして即ち八八、六十四と爲る。

これに因つて重ねるに由り、因重説とも言ふのである。

父母六子説に基き、賈公彦の方法で因重すると次の如き次序となる。

乾——泰 大壯 小畜 需 大有 大畜 夬

坤——否 豫 觀 比 晋 剝 萃

震	—	无妄	復	益	屯	噬嗑	頤	隨
巽	—	姤	升	恒	井	鼎	蠱	大過
坎	—	訟	師	解	渙	未濟	蒙	困
離	—	同人	明夷	豐	家人	既濟	賁	革
艮	—	遯	謙	小過	漸	蹇	旅	咸
兌	—	履	臨	歸妹	中孚	節	睽	損
乾	—	夬	大有	大壯	小畜	需	大畜	泰
履	—	兌	睽	歸妹	中孚	節	損	臨
同人	—	革	離	豐	家人	既濟	賁	明夷
无妄	—	隨	噬嗑	震	益	屯	頤	復
姤	—	大過	鼎	恒	巽	井	蠱	升
訟	—	困	未濟	解	渙	坎	蒙	師
遯	—	咸	旅	小過	漸	蹇	艮	謙

これは何人にも了解される如く、純卦、即ち上下同體の卦をつくりといふ條件のもとに、以上の如き配列となつたのである。然るに邵子は、加一倍法を以て次の如き卦の配列を成就した。

否 萃 晉 豫 觀 比 剝 坤

即ち一貞八悔、盡く乾兌離震巽坎艮坤の順序に配列せられるのである。而して其を指して先天卦次といふのである。⁽¹⁹⁾

次に八卦方位に就いて記さう。

説卦傳に曰く、帝は震に出で、巽に齊ひ、離に相見、坤に致役し、兌に説言し、乾に戦ひ、坎に勞し、艮に成言す。萬物震に出づ。震は東方なり。巽に齊ふ。巽に東南なり。齊ふとは萬物の契齊するを言ふなり。離とは明なり。萬物みな相見る。南方の卦なり。聖人南面して天下に聽き、明に嚮ひて治むるは、蓋し諸を此に取れるなり。坤とは地なり。萬物みな養を致す。故に坤に致役すと曰ふ。兌は正秋なり。萬物の説ぶ所なり。故に兌に説言すと曰ふ。乾に戦ふとは、乾は西北の卦なり。陰陽相薄るを言ふなり。坎とは水なり。正北方の卦なり。勞卦なり。萬物の歸する所なり。故に坎に勞すと曰ふ。艮は東北の卦なり。萬物の終を成す所にして始を成す所なり。故に艮に成言すと曰ふ。⁽²⁰⁾

即ち、これに據れば震東、兌西、離南、坎北、艮東北、巽東南、坤西南、乾西北となり、邵子に言はしむると以上の方位なるものは、文王の後天の方位だといふのである。

然らば伏羲の先天の方位がなければならぬ筈で、それは乾南、坤北、離東、坎西、震東北、兌東南、巽西南、艮西北だとするのである。而して邵子は、説卦の次の文、即ち

天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火相射はずして、八卦相錯はる。往を數ふる者は順にして、來を知る者は逆なり。是の故に易は逆數なり。⁽²¹⁾

とあるのを指して、これは伏羲の卦位を説明したものと解釋したのである。⁽²²⁾而して亦、邵子が乾の卦の文言傳に

天に先ちて天違はず、天に後れて天の時を奉ず。⁽²³⁾

とあるのを以て、八卦方位に先天と後天とを唱へた事は、その見解の獨創的なのを認めずには居られない。然して先天を體となし、後天を用となす解釋法は、彼が佛法の解釋法を巧みに援用したと言はなければならぬのである。⁽²⁴⁾

邵子の造化の學の内容をなす三つの支柱、即ち、八卦次序と方位と而して六十四卦次序に就いて觸れるべき時が來た。前にも述べた如く八卦の次序は、乾一、兌二、離三、震四、巽五、坎六、艮七、坤八であるが、方位の圖に就いて見ると、正南乾一に始り、兌二、離三、震四と左行し、巽以下は乾の右より巽五、坎六、艮七、坤八と右行する。これは何故であるかといふに、說卦傳の天地定位章に謂ふ數往者順、知來者逆、是故易逆數也とあるところから來た解釋なのである。邵子の說に據ると、數往者順とは天に順つて行くが如し、是れ左旋なり。皆な已生の卦なり。故に往を數ふと言ふなり。知來者逆とは天に逆らふて行くが如し、是れ右旋なり。皆な未生の卦なり。故に來を知るなり。と説明してゐるのである。

此では、天が左行するといふ假説は、重大な命題であることを知らなければならぬ。而して古代の支那人が、天が左旋しつとあると信する迄には、彼等の自然科学に若干の注意を拂ふ必要があるのである。

按ずるに禮記月令の疏に曰く

鄭考靈耀に注して云ふ、天は純陽清明にして形なし。聖人之に則り、璇璣玉衡を制して以て其の象を度ると。鄭の此の言の如くんば天は是れ大虛、本、形體なし。但、諸星の運轉を指して以て天と爲すのみ。但、諸星の轉ずる東よりして西す。必らず三百六十五日四分日の一にして、星、舊所に復る。星、既に左轉し、日は右行す。また三百六十五日四分日の一にして舊星の所に至る。即ち一日の行を以て一度と爲す。計二十八宿一周天、凡そ三百六十五度四分度の一、是れ天の一周の數なり。

周髀算經は天に對する概念を記した最古のものといふのであるが、そこから所謂、蓋天説が出たのである。⁽²⁵⁾ 天が東から西に北極の周圍を圓を描いて廻轉する説を、東漢の王允は其の論衡に於て支持してゐる。⁽²⁶⁾

而して蓋天説は渾天説と爭論し、梁の武帝の時に蓋天説が採用せられたが、纏て渾天説が行はれるやうになつた。如上、禮記にいふ璇璣玉衡は傳説によると、舜が帝たりし時に作られたと言はれる、所謂、廻轉する天體儀で、漢の賈逵はこれに黃道を付け、更に漢の張衡によつて完全なものとなつた。一説に張衡を以て渾天儀の制作者とする人もあるほどである。⁽²⁷⁾ その他に宣夜説、穹天説等がある。⁽²⁸⁾⁽³⁰⁾

邵子が、天に順つてゐるとか、逆つて行くとかといふ風な表現をしてゐるのは、畢竟、その根本に右の如く天

は必らず左行してゐるといふ假説に基いて判斷してゐるのである。清の胡渭⁽³¹⁾は、その易圖明辨に天地定位章を解説して、邵子の不通の點に觸れ、次のやうに言ふのである。即ち

按するに此の章は八方の位と渉るなし。天地定位は乾坤自ら匹を爲すを言ふなり。山深通氣は艮兌自ら匹を爲すを言ふなり。雷風相薄は震巽自ら匹を爲すを言ふなり。水火不相射は坎離自ら匹を爲すを言ふなり。八卦相錯に至つては天或は下に位し、地或は上に位す、而も且つ六子の位と列を同うす。山澤の氣たゞ二者の自ら相通するのみならず且つ天地雷風水火の氣と互に相通するなり。雷風水火もまた然り。上の四句は即ち所謂、八卦成列、象在其中なるもの、下の一句は即ち因而重之、爻在其中なるものなり。章下句を重んず。孔疏に云ふ、卦象に就き重卦の意を明かにすと、深く經旨を得たり。夫子の大象は二體八物を以て其の義を發明す。この節は正に其の注脚なり。八卦相錯れば是れ六十四卦たり、而して占筮の法生ず。卦之徳方以知、知以藏往は所謂、數往者順なり。君子居則觀其象而玩其辭は藏往の學なり。著之徳圓而神、神以知來は所謂、知來者逆なり。君子動則觀其變而玩其占は知來の道なり。往來並舉すと雖も却つて重きは知來に在り。來を知るは乃ち揲著求卦のことなり。繫辭傳に云ふ、極數知來之謂占と。また云ふ、無有遠近幽深、遂知來物と。また云ふ、占事知來と。一つとして著を以て言はざるものなし。卦に於て何ぞ與らん。卦は象を主とし、著は數を主とす。象中また數あり、數中また象ありと雖も其の間に賓主の辨あり。韓康伯曰く、著數を極めて以て象を定め、卦象を備へて以て數を盡すと。賓主極めて其れ分明なり。希夷の圖は象學なり。而して邵康節は精を専らにす。故に往々著數を以て卦象と爲

し、經旨と背く。横圖に據り、中より折取し、以て震より乾に至るまでを順數己生の卦と爲し、巽より坤に至るまでを逆推未生の卦と爲す。然らば則ち易は逆數なり。豈に専ら巽坎艮坤を用ひて乾兌離震を用ひざらんや。その言に就て之を解するも已に得て通ぜざるものあり云々。

六十四卦次序の圖を作つた邵子は、八卦方位の圖と同じく、乾宮一、兌宮二、離宮三、震宮四の順を以て左旋し、巽宮五、坎宮六、艮宮七、坤宮八は乾より右旋せしめたのである。この圓圖に配するに四正卦二十四爻と二十四氣とを以てしたのが卦氣の圖である。而してまた八宮を一列づつ層疊したのが方圖といふのである。⁽³²⁾卦氣の圖は占候に用ひられるのである。

(1) 東都事略。百三十卷。宋の王偁の撰なり。北宋九朝の事蹟を記す。本紀十二世家五、列傳百五、附錄八。宋史研究者にとり必讀の書なり。

(2) 陳搏。五代の人。字は圖南。真源の人なり。華山に隱居し、寢所して百餘日起きず。かつて白驢に乗り汗中に入らんとす。路に太祖の登極を聞き、大いに笑うて驢より落ちて曰く、天下これより定まらんと。太宗召して羽服を以て延英殿に見る。宋琪、修養の道を問ふ。搏曰く、たとひ白日昇天するも何の益あらん、今や君臣同徳、興化勤め行ふ、修煉出づる無しと。此に於て帝、益々之を重んじ、號を賜ふて希夷先生といふ。また自ら扶搖子と號す。搏はじめて四歳、渦水の側に戯る。青衣の嫗あり。抱いて懷中に置き之を乳す。聰悟日に増す。武當山に入り、辟穀鍊氣二十餘年、移りて華山の雲台觀に居る。周の世宗、召して禁中に至らしめ、號を白雲先生と賜ふ。宋の太宗再び召す。辭して曰く、九重回詔、休

教丹鳳衛來、一片野心、已被白雲留住と。端拱の初め弟子張超に命じ、石を鑿りて室を造らしめ、蓬花峰下に化形す。搏かつて曰く、優游之地勿久戀、得志之物勿再往と。聞くもの以て至言と爲す。

(3) 种放。字は沈逸。別業あり終南に在り。酒を嗜み自ら耕し、雲谿醉叟と號せり。一日往いて陳希夷に見ゆ。樵夫となりて庭下に叩拜す。希夷これ上に引きて曰く、君豈に樵夫ならんや、二十年後まさに顯官たるべしと。放曰く、某道義の爲に來る、官爵願ふ所に非るなりと。希夷笑ふて曰く、君の骨相、當るのみと。後、張齊賢、放、隱居志を求む、顧問に備ふべきを言ふ。眞宗召して左司諫と爲し、手を携へて龍圖閣に登り天下のことを論じて第一區を賜ふ。辭して山に歸る。祥符八年秋、忽ち早起、道衣を服し、諸生を集めて列飲し、平生作る所の文稿を取り悉く之を焚く。酒數行にして逝く。時に年六十なり。娶らず子無し。工部尙書を贈らる。

(4) 許堅。江左の人なり。異術あり。若くして江南の李氏に事へしも、意滿たずして辭して茅山に隱る。太平興國年間、廬山に遊び、洪州の西山、吉州の玉笥山に及ぶ。後、終るところを知らずといふ。

(5) 未考

(6) 劉牧。字は先之。西安の人なり。進士に第し、調州軍事推官となる。興州の將と争ひて排せられ、范仲淹のもとに至るに及んで大に喜びて曰く、これ吾が師なりと。仲淹、河東を撫するに及び、牧を擧げて治せしむ。是に於て荆湖北路轉運判官となりて終る。易解、卦德通論、先儒遺論九事あり。弘治衛州府志を按ずるに、牧、字は牧之と。官は屯田員外郎を以て終る。易解と易象鉤隱圖の著ありと。また四庫提要は彭城の人といひ、字は長民。墓誌は字を先之に作り、官、太常博士に至ると。宋元學案に據る。

(7) 穆修。字は伯長。陳搏を師として易學を傳ふ。祥符の初め進士に第す。時に學者、聲律に従事して未だ古文を知らず。修これが爲に尹洙兄弟を倡ふ。始めて之に従つて古文を學び春秋の學を傳ふ。家に韓柳の集を有す。親厚する所の者に乞ひ、金を得て板を鑿り京師に賣る。儒生數輩あり輒ち取り閱す。修曰く、先生能く一篇を讀まば當に以て一帙を贈となすべしと。是より過問する者なし。文學參軍たり。

(8) 李之才。字は挺之。青社の人なり。性朴直、古文章を爲るに語直にして意深し。穆修を師として易を受く。修の易これを种放を受け、放これを陳搏に受く。その圖書象數變通の妙、秦漢より以來知るもの少し。之才かつて權共城令たり。邵雍その學を傳ふ。官殿中丞に至る。

(9) 後に傳を出す。

(10) 程子稱して振古の豪傑なりといふ。朱文公の贊に曰く

天 挺 人 豪 英 邁 蓋 世

駕 風 鞭 霆 歷 覽 無 際

手 探 月 窟 足 攝 天 根

閑 中 今 古 醉 裏 乾 坤

(11) 宋元學案卷九、百源學案、觀物外篇、先天之學心也、後天之學迹也、出入、有無、死生者道也。

(12) 鄧析子。鄧の人なりと。漢書藝文志に鄧析二篇、與子產並時とあり。顏師古注に曰く、列子及孫卿並云、子產殺鄧析據左傳昭公二十年、子產卒、定公九年、鬪獸殺鄧析而用竹刑則非子產所殺と。

(13) 尹文子。齊の稷下の學士なり。漢書藝文志、尹文子一篇、說齊宣王先公孫龍と。その書亡し。馬敘倫の莊子義證天下篇に曰く、今尹文子二篇詞說庸近不類戰國時文、陳義尤雜出仲長統所撰定、然仲長統之序、前儒證其僞作蓋與二篇並出僞作と

(14) 惠施。傳未詳。その書亡し。玉函山房解佚書に輯本あり。

(15) 公孫龍。漢書藝文志、公孫龍子十四篇。趙の人なり。顏師古注に即爲堅白之辯者と。列子注に據るに字は子秉と。その書殘缺す。

(16) また一畫より二畫、二畫より三畫、三畫より四畫、四畫より五畫、五畫より六畫と一畫づつ加へてゆくところより一名を爻漸生說ともいふ。四季を陰陽太少に配すること董仲舒の春秋繁露に見へ、即ち天地の理、一歲の變を分つて以て四時と爲す。四時も亦天の四選のみ、是故に春は少陽の選なり、夏は太陽の選なり、秋は少陰の選なり、冬は太陰の選なりと。

陰陽老少を以て四象と爲すは唐僧一行に始まる。曰く、三變皆剛、太陽の象。四變皆柔、太陰の象。一剛二柔、少陽の象。一柔二剛、少陰の象と。

(17) 說卦傳十章。

(18) 後に傳を出す。

(19) 崔東壁の考信錄に易卦圖說一卷に別の配列を發表す。然れども之を因重すれば結果は邵子の次席に同じ。

(20) 說卦傳五章。

通解に曰く、此舉陰陽造化之氣、往來終始乎一歲之中者、配之八卦之象而言。

本義に曰く、上言帝、此言萬物之隨帝以出入也。

(21) 說卦傳三章。

通解に曰く、此就八卦之象而言天地之間、陰陽二氣相交成化。

(22) 朱子本義。邵子曰、此伏羲八卦之位。乾南坤北、離東坎西、兌居東南、震居東北、巽居西南、艮居西北。於是八卦相

交而成六十四卦所謂先天之學也。

(23) 文言傳六節。

(24) 明の蔡清曰く、伏羲の八卦は乃ち對待の體にして之を先天といひ、文王の八卦は乃ち流行の用にして之を後天といふ。

楊升庵の升庵經說に據るに、晋の干寶の周禮注を擧げて曰く

周禮太卜掌三易之法。千令升、注して曰く、天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射は小成の易なり。帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、說言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮は連山の易なり。初乾、初巽、初艮、初兌、初離、初震、初巽は歸藏の易なり。小成は伏羲の易なり。而して文王これに因る。連山は列山氏の書なり。而して夏人これに因る。歸藏は軒轅氏の書なり。而して商人これに因る。夏は人統を得、故に歳は建寅を首とし、卦は艮を首とす。商は地統を得、故に歳は建丑を首として、卦は坤を首とす。周は天統を得、故に歳は建子を首として、卦は乾を首とす。伏羲の易は小成なり、先天と爲す。神農の易は中成なり、中天と爲す。黃帝の易は大成なり、後天と爲す。邵康節の易、先天後天を按ずるに、その源は此に出づ。今の易を讀むもの、先天、後天あるを知つて中天あるを知らず云々と。

(25) 周髀長八尺、夏至之日晷一尺六寸。蓋髀者股也。於周地立八尺之表以爲股、其影爲勾、故曰周髀。首章周公與商高問答、實勾股之鼻祖云々。其本文之廣大精微者、皆足以存古法之意、開西法之源云々。古蓋天之學、此其遺法、蓋渾天如毬、寫星象之外人自天外觀天、蓋天如笠、寫星象於內、人自天內觀天、笠形半圓、有如張蓋、故稱蓋天、合地上地下兩半圓體、即天體之渾圓矣、其法失傳已久、故自漢以迄元明、皆主渾天云々。(李淳風註周算經二卷)

(26) 无左旋、日月之行、不繫於天、各自旋轉、難之曰、使日月自行、不繫於天、日行一度、月行十三度、當日月出時、當進而東旋、何還始西轉、繫於天、隨天四時轉行也、其喻若蟻行於礎上、月日行遲、天行疾、天持日月傳、故日月實東行而反西旋也云々。附天所行、若人附地而圓行、其取喻若蟻行於礎上焉。(論衡上卷說日篇)

(27) 前出

(28) 張衡。西鄂の人なり。字は平子。少くして善く文を屬して五經に通じ六藝を貫く。時に天下泰平、王侯以下これに狎る。衡、二京賦を十年にして作り以て諷諫す。安帝召して郎中に拜し、選りて太史令となる。渾天儀を作る。靈憲算罔論を著し、また候風地動儀を作る。後、侍中となり、永和の初め出でて河間の相となり、尙書に拜せられる。周易訓詁の著あり。

(29) 丹陽葛洪釋之曰、渾天儀注云、天如鷄子、地如鷄中黃、孤居於天內、天大而地小、天表裏有水、天地各乘氣而立、載水而行、周天三百六十五度四分度之一、又中分之、則半覆地上、半繞地下、故二十八宿半見半隱、天轉如車轂之運也。

(30) 晉書天文志上卷。天體、宣夜之書云、惟漢祕書郎際萌記先師相傳云、天了無質、仰而瞻之、高遠無極、眼瞥精絕、故蒼々然也、譬之旁望遠道之黃山、而皆青、俯察千仞之深谷、而窈黑、夫青非眞色、而黑非有體也、日月彗星、自然浮生虛

空之中、其行其止、皆須氣焉、是以七曜或遊或住或順或逆、伏見無常、進退不同、由乎無所根繫故、各異也、故辰極常居其所、而北斗不與衆星同沒也、攝提、填星皆東行、日行一度、月行十三度、遲疾任情、其無所繫著、可知矣、若綴天體、不得爾也。

晉書天文志上。吳太常姚信造昕天論云、人爲靈蟲、形最似天、今人頤前多臨胷、而項不能覆背、近取諸身、故知天之體、南低入地、北則偏高、又冬至極低、而天運近南、故日去人遠、而斗去人近、北天氣至、故冰寒也、夏至極起、而天運近北、而斗去人遠、日去人近、南天氣旱、故蒸熱也、極之立時、日行地中淺、故夜短、天去地高、故晝長也、極之低時、日行地中深、故夜長、天去地下淺、故晝短也。

晉書天文志。虞喜族祖河間相聳、又立穹天論云、天形穹隆如鷄子、幕其際周接四海之表、浮於元氣之上、譬如覆奩以抑水而不沒者、氣充其中故也、日繞辰極沒西、而還東、不出入地中、天之有極、猶蓋之有斗也。

(31) 後に傳を出す。

(32) 邵子の詩に曰く

冬至子之半 天心無改移

一陽初動處 萬物未生時

と。氣に中歇なく、但、動靜屈伸の希幾くは會すべきあるを明かにせるのみ。一歳の元は此を以て根と爲す。今第だ毎歳冬至の日を取り、何甲に屬し、甲は何干、何支に屬するかを視、即ち此の干支に擬して一歳の冬至と爲す。再び此日の冬至は確に何時に屬するかを視、即ち此の時に擬して天心と爲し、乍ち轉定して復卦と爲す。此より復の一刻積んで之を引

き、五日候と爲し、或は十日、或は十五日、一氣の節と爲し、時を逐ひ、日を逐ひ、叙して之を數へ、或は甲子たり、或は乙丑たり、本日値ふ所の干支は即ち占者値ふ所の卦爻なり。凡そ干支の一日は即ち卦中の一畫なり。畫を以て日に配す、毫も謬ることを得ず。是に於て干支を以て理氣の盛衰を詳にし、卦爻を以て理氣の當否を詳にす。理貞なるものは吉、なるものは凶なり。氣舒ぶる者は昌へ、氣促る者は掩はる。數長ざる者は福、數盡くる者は進、消息盈虛、太極不貞に歸し、萬物萬事能く遁るゝなし。

又曰く、如今年歲辛巳に在り、筮者六月朔に於て問ふ、其の日乙巳に在れば、冬至は當に庚辰の歲戊子の月九日丙戌の辰時に在るべし。丙戌の日より辰時よりして順に之を數へ、辛巳の歲六月の朔に至りて過二百日を得、因て復の初爻に於て順に之を數へ、遷に頤よりして屯、而して益、以て姤の上及び大過の初に至り、適二百爻を得、姤過乘除の候に在り、其の節氣は小暑なり。值ふ所を視るに姤の上爲らんか、則ち日は甲辰たり。冬至に於て丙戌の干を生と爲す。而して支を冲と爲す。姤の上は角、剛にして觸るゝを喜ぶ。黨助皆剛、靜に處る徳なし。五月は木盛に、陽氣特に窮らんとす。正に乾の午中に盡くる時なり。值ふ所の者を視るに其れ大過の初か。則ち月は乙巳たり。冬至の丙戌に於て干既に生に逢ひ、支また旺を助く。初爻は白茅无咎。徳を慎し、物を載せ、事を濟ふ人あり。正月木盛にして之を藉くに芽を用ふ。また陰候に在り、時を得、朋を得、才あり器ある者なり。消息盈虛、理正に此の如し。冬至の日時を視、以て順に節氣を數へ、卦畫を配分するに應ぜざるものなし。學者の神にして之を明かにするに在るのみ。(周一敬)

朱文公易說に曰く、包揚問ふ、邵康節の數を以て物を推すは如何。曰く、此れ康節の下なる者を知るのみ、今の覆射する者また之を能くす。康節の學は明理に本づく。明道の所謂、天地の運化を觀、然る後、頽然として其れ順ひ、浩然として

其れ歸るもの、乃ち康節の到る所なり。康節の學は先天に得、蓋これ專心志を致し、這の物事を看得して孰了し、自然に前知するなり。

第二十八章

宋の儒林は鬱然として吾等の眼前にある。蓋し名木の多い高山を望見するの概あるは宋儒傳でなければならぬ。而も卓然として其の中に屹立するものは周子である。

周敦頤。字は茂叔。濂溪と號す。道州營道縣の人である。もと敦實と名乗つたが、五世英宗の諱を避けて之を改めた。幼少の頃に孤となり、母の父である龍圖學士鄭向(1)の家に養はる。天資英睿、博學力行。景祐三年、鄭向の推薦によつて伊州分寧縣の主簿となつた。時に獄事あり、久しく決せず、敦頤主簿となつて再審し、直ちに之を辨じて令名を唱へられた。後、安南軍司參軍轉使となる。この安南に官たるの時、二程子の父、彼の非凡なるを見て其の二子を托して就學せしめた。程明道及び程伊川は即ち是である。蓋し漢の儒學、たゞ傳經の學として止まり、而して其の性を説き、道を説くは久しく其の傳統を絶つてゐた。然るに茂叔は此の間に崛起し所謂、宋儒性理の學の始を成したのである。毎に孔顏の樂しむところ何事なるかを以てす。二程子の學は實に此から出發してゐるのである。歴遷して虞部郎中廣東轉運判官となり、尋で病を以て乞ふて南康軍に知たり。因つて廬山の蓮花峰に家居し、濂溪と名づく。甚だ高節あり、當世に意無きを以て閑居を樂しみ、窓前の雜草をさへ除かなかつたといふ。詩人黃山谷(2)は彼の人品を評して曰く、胸中瀝落、光風霽月の如しと。また常に蓮花を愛して愛蓮説を作る。著すところ有名な太極圖及び太極圖說、通書四十篇、文集七卷がある。太極圖說は宇宙生成の理を太極圖

といふ圖式で表現したものの、解説である。また通書は易通ともいひ易の通論である。通書に於て、易及び中庸によつて道徳を論じたのは彼を以て始めとする。

また張方平⁽³⁾曰く、儒道淡薄にして、一時の聖賢盡く釋氏に歸す。而も關洛の諸公、亦、必ずや釋氏の言を玩味し、而して後、能く洙泗不傳の秘を接續せん云々と。宋儒の佛教思想との融解を指適する言として注目に値するのである。⁽⁴⁾

太極圖説は字數にして僅に二百二十八字。しかしながら宋學の眞骨頭を見る。曰く

無極而太極。太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜。五爲其根。分陰分陽。兩儀立焉。陽變陰合。而生水火木金土。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也。各一其性。無極之眞。二五之精。妙合而凝。乾道成男。坤道成女。二氣交感。化生萬物。萬物生々。而變化無窮焉。惟人也。得其秀而最靈。形既生矣。神發知矣。五性感動。而善惡分。萬事出矣。聖人定之。以中正仁義（聖人之道仁義中正而已焉）⁽⁵⁾而主靜。（無欲故靜）⁽⁶⁾立人極焉。故聖人與天地合其德。日月合其明。四時合其序。鬼神合其吉凶。君子修之吉。小人悖之凶。故曰。立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人之道。曰仁與義。又曰。原始反終。故知死生之說。大哉易也。斯其至矣。

周子の無極説は、以來、幾多の大儒の論議のテーマになつたものであるが、畢竟、太極觀の超越性を主張するところに無極論が存在する。それなればこそ朱子は懇ろに其の註を施したものであらう。⁽⁷⁾而して太極圖説の首句

に二説の傳來があり、朱子は五字説（無極而太極）を傳へた。⁽⁸⁾

惟ふに太極圖説は儒家本來の説に、道教の思想を加味したものであることは最も注目すべき點である。道家は陰陽の二原理を示すのに、水と火とを以てし、易に於ては坎☵と離☲の卦によつて表現され、これを合せて圓形を作る時に、周子の太極圖が構成されるのである。而して理論的基礎としては、天地は無より生ずるといふ道家の説と、天地の生々は二氣五行の運行によるといふ儒家の學説とを、巧みに調和したものと見ることが出来るのである。而して清の毛奇齡の研究によれば此の圖は陳搏に出で、必ずしも周子の創造ではないとするもの、如くである。

宋史の道學傳總論に曰く、孔子歿して曾子獨りその傳を得て之を子思に傳へ、以て孟子に及べり。孟子歿して傳ふるなし——宋の中葉に至り、周敦頤、春陵に出でて乃ち聖賢不傳の學を得、太極圖説と通書とを作りて陰陽五行の理を推明し、天に命ありて諸れを人に性とすもの際として掌を指すが若し。張載、西銘を作りて又理一分殊の情を極言す。然して後、道の大原天に出づるもの灼然として疑なし云々と。

張載。字を子厚といふ。大梁に居る。父が任官先で歿してから、鳳翔眉縣、橫渠鎮の人となり、世人、之を目して張橫渠といふ。若年の頃、年十八、志氣群ならず喜んで兵を談ず。二十一の時、慨然として功名を以て自ら許し、上書して范仲淹に謁す。仲淹その器を見て曰く、儒者自ら名教を樂しむべきあり、何ぞ兵を事とせんと。中庸を授く。未だ足らずとして佛教あるひは道教を極め、而も得るところなく反つて之を六經に求む。嘉祐の初

め京師に至り、虎皮に坐して易經を講ず。聽從する者が甚だ多かつた。然るに一夕、二程子（明道と伊川）を訪ね、ともに易を談ず、翌日その門人等に語りて、この頃、二程子を見るに深く易道に明らかなり。吾の遠く及ばざるところ、汝等これを師とすべしと。講座を徹して、吾が道自ら足れり、何ぞ旁求を事とせん。既にして進士に擧げられ、雲巖令となり、熙寧の初め著作佐郎簽書渭州軍事判官となる。六世神宗のとき治道を問はれたのに答へて、治を爲す、三代に法らざれば苟道に終らむと。因つて崇文院校書に除せらる。後、王安石に忌まれ、遂に病に托して横渠に歸り、終日、一室に籠り、左右簡編、俯して讀み仰いで思ひ、冥心妙契、中夜と雖も必ず燭を取りて疾書す。而して曰く、我が學すでに諸を心に得たり。乃ちその辭命を修す、辭命失ふなく、吾乃ち沛然たりと。蓋しその道に志さず、精思未だ始より須臾も息まなかつた。門下生に告ぐるに、學必らず聖人の如くして已むを以てす。爲以へらく、人を知つて天を知らず、賢人たるを求めて聖人たるを求めず、これ秦漢學者の大弊なりと。

即ち易を以て宗となし、中庸を以て的となし、禮を以て體となし、孔孟を以て極となす。此に於て古禮に循つて倡をなし、關中の風俗、一變して古の如く敦厚となつたと傳へられるのである。熙寧九年、召されて太常禮院の知となつたが、議合はず、その翌年辭し歸る途、潼關に至つて病のため卒した。張載もとより三代の法に志があつたので仁政は經界正しからざれば、貧富均しからず、教養法なし。誰か治を言はんと欲し、而も素架するのみと云ふ。その著に正蒙⁽⁹⁾、經學理窟、語錄、東銘及び西銘⁽¹⁰⁾、易說⁽¹¹⁾がある。

程伊川曰く、西銘の一篇、理一にして分殊なるを明かにせりと。蓋し支那倫理思想の最高峰を示すものとして西銘は知られて居る。正蒙は、呂大臨⁽¹²⁾の横渠先生行狀によれば、張子の歿する前年、即ち灑寧九年に成つたものであるが、此の年の一時の作ではなく、殆ど生涯を通じて折に觸れ書いた文章を、門人蘇昞⁽¹³⁾が類從編輯して十七篇を成したのである。この書の獨自の價値は、彼が自己の思想的立場からしたところの哲學的著述であるに他ならない。正蒙太和篇に曰く

太虚無形、氣之本體。其聚其散、變化之客形爾。(太虚にして形無きは氣の本體なり。其の聚まり其の散するは變化の客形のみ)

また曰く、天地之氣。雖聚散攻取百塗。然其爲理也。順而不妄。氣之爲物、散入無形、適得吾體、聚爲有象、不失吾常。太虚不能無氣。氣不能不聚而爲萬物。萬物不能不散而爲太虚。循是出入、是皆不得已而然也。然則盡道其間、兼體而不累者、存神其至矣。彼語寂滅者、往而不友。徇生執有者、物而不化、二者雖有間矣。以言乎失道則均焉。(天地の氣、聚散攻取すること百塗なりと雖も、然れども其の理たるや順ひて妄りならず。氣の物たる、散すれば無形に入つて適吾が體を得、聚れば有象と爲つて吾が常を失はず。太虚なるも氣無きこと能はず。氣は聚りて萬物と爲らざること能はず。萬物は散じて太虚と爲らざること能はず。是に循つて出入するは、是れ皆已むを得ずして然る也。然れば則ち道を其の間に盡くし、兼ね體して累はされざる者にして、神を存すること其れ至れり。彼の寂滅を語る者は往いて反らず。生と緬み有に執する者は物にして化せず。二者は間有りと雖も

以て道を失へるより言ふときは則ち均し)

また曰く、知虚空即氣、則有無隱顯神化性命通一無二。顧聚散出入形不形、能推本所從來。則深於易者也。若謂虛能生氣、則虛無窮氣有限、體用殊絕。入老子有生於無。自然之論、不識所謂一之常。若謂萬象、爲太虛中所見之物、則物與虛不相資。(虚空は即ち氣なることを知れば、即ち有無、隱顯、神化、性命は一に通じて一無し。聚散、出入、形不形を顧み、能く従つて來る所を推し本づくるは、則ち易に深き者なり。若し虚能く氣を生ずと謂はば、則ち虚は窮り、無くして氣は限り有り、體と用と殊れ絶ちて、老子の有は無より生ず自然の論に入り、所謂、有無限一の常を識らず。若し萬象は太虛中に見るる所の物のみと謂はば、則ち物と虚と相資せず)

また曰く、氣塊然太虚。升降飛揚。未嘗止息。易所謂網緼。(氣は太虚に塊然として升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。易に所謂網緼)

此等の言葉に見られる如く張子は無を言はない。而して空を主張し、それは氣によつて充されるとなすのである。張子は太虚にその根源を置いて論を展開せしめるが、程子は其の説が非物質的でないとして攻撃したのである。

周子には中庸の思想が、張子には道教の思想が、その易觀に織り込まれてゐる。吾々は時代を経るに従つて易の思想に、諸子百家乃至は佛教思想が加味されてゐることを看過し得ない。學者が既に指摘してゐる如く、易と中庸とは非常に近似してゐる。それは六十四卦中のみならず、十翼に至つては更に共通と覺しき言葉が多いので

ある。(14)

(1) 郷向。字は公明。陳留の人なり。進士に第し甲科たり。大理評事より龍圖閣直學士に遷り、杭州に知たり。五代の亂、史册多く亡佚す。向、開皇紀三十卷を著して遺事を摭拾す。頗る補ありといふ。

(2) 晝庭堅。字は魯直。山谷と號す。庶の子なり。治平丙午、郷試に赴く。廬陵の李詢、庭堅を試す。詩に涓水空藏月、傳巖深鎖烟の句あるに至り、節を擧ちて嘆じて曰く、此の人唯だ文理の冠場たるのみならず、異日當に詩を以て四海に雄たるべしと。遂に首薦に膺る。後、進士に擧げられて北京に教授す。國子監蘇軾その詩文を見て、その萬物の表に獨立するを嘆じ、表して之を薦めて曰く、瑰奇の文は當世に絶妙に、孝友の行は古人に追配すべしと。著作佐郎に遷る。神宗實錄成る。起居舍人に擢でらる。紹聖の初め鄂州に知たり。章惇蔡京等に憎まれ、謫せられて涪州別駕黔州安置を授けられ、戎州に移り、次で宜州に謫せらる。江西の詩派は庭堅その祖たり。世その詩を以て蘇軾に配し、蘇黃と稱す。その行書尤も工なり。山谷かつて曰く、士大夫三日讀まざれば理義胸中に交はらず、鏡に對して面目憎むべきを覺れば、人に向ひて言語無味ならんと。山谷かつて、吾無隱乎爾の義、詮釋再三すれども解する能はざるを以て、因つて黃堂寺晦堂老子に問ふ。晦堂答へず。時に暑退き涼生じ秋風院に滿つ。晦堂よつて問ひて曰く、木犀の香を聞かや。山谷曰く、聞く。晦堂曰く、吾無隱乎爾と。山谷嘆服す。山谷の子相、字は小德、その生母は徽庭に出づ。故に詩あり曰く、解著潛夫論、不妨無外家と。東坡これに次韻して曰く、名騎已汗血、老蚌空泥沙と。山谷かつて黔中に在り、王澹州に與ふる帖に、小子相、今年十四、骨相差々龐厚と。時に詩に曰く、小兒未可知、各或許敦龐と。

(3) 張方平。字は安道。宋城の人なり。少くして穎悟絶倫、書、眼を過ぐれば再讀せず。進士に第し著作郎となる。平戎

十策を上るに宰相呂夷簡これを見て樞密宋綬に謂ひて曰く、大科人を得たりと。參知政事南京留守知陳州に累官し、太子少卿を以て致仕す。幸して文定と謚す。初め蜀を守りし時、蘇洵と其の子軾と轍とを得、深く之を異とす。かつて軾を薦めて諫官となす。晩年、知を神宗に受く。王安石、事を用ふ。巖然として屈せず。是を以て望一時に高し。少くして家貧にして書なし。人の三史を借り旬日にして之を返して曰く、己に其の論を知ると。平生文を屬するに嘗て草を起さず。宋綬、蔡齊、以て天下の奇才となし共に之を薦む。帝その文章典雅にして三代の風ありとなす。仁宗、英宗、神宗の三朝、始終一節、時論これを重んず。

(4) 今北洪川の禪海一瀾卷上に曰く、何の幸か宋に及びて周敦頤なる者出づる有り。聖學の支離決裂を慨歎し、諸を古に復さんと欲し、遺經を搜索し、研究歳を積むも、茫として入る可き無し。竟に黃龍山慧南に參控し、教外別傳の旨を問ふ。南曰く、孔子謂く、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと。畢竟何を以てか道と爲して、夕に死すとも可なりや。敦頤答ふる能はず。尋いで金山佛印に參じ問ふて曰く、畢竟何を以てか道と爲すと。印曰く、滿目青山看るに一任す。敦頤擬議す。印、呵々大笑す。頤頤然として省有り。後、東林總の處に於て淵源に透徹し、後來、易學心傳を撰述し、學徒を諭して曰く、吾が此の妙心は實に南考に啓迪せられ、佛印に發明す。若し東林總の開遮拂拭斷を得ざれば、表裏洞然該貫弘博なること能はず云々。

(5) (6) 5 及び 6 は宋元學案卷十二濂溪學案に無し。周子の自注。

(7) 上天之載、無聲無臭、而實造化之樞紐、品彙之根柢也。故曰、無極而太極、非太極之外復有無極也。(朱子太極圖說解)

(8) (文學博士高瀬武次郎氏の解説に據る。)

周子の太極圖説の首句に無極而太極の五字句にて傳はれるものと、自無極而爲太極の七字句にて傳はれると兩傳がありま
す。五字句の方は朱子に依りて傳へられた。もと太極圖説は北宋に在りては邵康節、程明道、伊川の諸子は之に論及せざ
りし故に世人も未だ其の文を見ざりしが、南宋の乾道年間に至つて朱子が始めて之を世に示し、また太極圖説解を作りて
廣く之を發表し、世の學者或は之に對して疑を抱く者もありて、朱子に駁書を送れるもありしが朱子は之に答へて其の疑
惑を解けり。朱子が太極圖説解を作りしは乾道四年にして、其の後、二十年も経過して玉山といふ地に於て、時の國史編
修官洪邁に面會して其の原稿本を見て、始めて其の道學傳中の周子の傳に圖説の原文を掲げて、その首句が自無極而爲太
極となつてゐるのを知つて、之を誤と爲し、斯くては周子を累し、また後世の學者の疑を生ずる者なれば須く自爲の二字
を削除せらるべしと懇望したけれども、洪邁は頑として聽き入れず、遂にそのまゝ七字句として一國の正史たる宋史に傳
はれるものであります。尙ほ清の毛奇齡の太極圖説遺議(西河合集)に、洪邁は其の性嚴格誠實なるより見るも、博覽多
識なる點より見るも、決して他人の遺文を妄りに増加することなく、且つ歴史編修官が先賢の全文を掲げながら之を増減
すること無ければ、洪邁が自爲の二字を増加せずと云ひ、朱子と洪邁とは兩様の傳來を得たものであらう。

(9) 正蒙。十卷。太和、參兩、天道、神仙、動靜、誠明等の十七篇より成る。正蒙解二卷朱子撰、注蒙二卷李光地撰。

(10) 西銘。一卷。張子その家塾の東西二窓に硯墨、訂頑の二銘を作り諸生を訓戒す。後に硯墨を東銘、訂頑を西銘と改む。
西銘はその倫理を述べしものにして朱子の解によりて普く知らる。西銘一卷朱子撰。

(11) 四庫全書に横渠、易說三卷あり。

(12) 後に傳を出す。

(13) 蘇昞。武功の人なり。始め張子に學び、後、二陳に事へて業を卒ふ。元祐年中、呂大中これを薦めて太常博士となす。後、元符の上書に坐して黨籍に入り、饒州に貶せらる。

(14) 錢大昕曰く

中庸の蔑は何ぞや。天地の道、帝王の治、聖賢の學、皆、中に外ならず。中とは過不及なきの名、堯の舜に傳ふるや曰く、允に其の中を執れと。而して舜また以て禹に命ず。洪範九疇は天の禹に錫ふ所以なり。五は九疇の中に居る。故に曰く、建つるに皇極を用ふと。皇極とは大中の謂なり。孔子易の十翼を作る。彖傳の中を言ふ者三十三、象傳の中を言ふ者三十、其の中を言ふや、曰く正中、曰く時中、曰く大中、曰く中道、曰く中行、曰く剛中、曰く柔中。剛柔は中に非るなり。而して中を得るものは咎なし。故に嘗て謂へらく、易六十四卦三百八十四爻、一言以て之を蔽ふ、曰く中のみ。子思。孔の意を述べて中庸を作り大易と相表裏す。其の中也者天下之大本也といふは其の體を言ふなり。君子而時中といふは其の用を言ふなり。此れ堯舜以來傳授の心法なり。堯舜以來、中と言ひ、庸と言はず、孔子の中庸といふは何ぞや。曰く、説文に、庸は庚に从ひ、用に从ふ。庸の言は用なり。中とは天の命ずる所の性にして、之を用ふる人に在り。天より之を言へば之を中と謂ふ。傳に曰く、民受天地之中とは是なり。人より之を言へば之を中庸と謂ふ。唐虞相傳へて皆執中といふ。而して孔子之を申ぶ。曰く、其の兩端を執り其の中を民に用ふと。然れば則ち中庸は即ち執中の義なり。故に曰く君子之中庸也、君子而時中と。中には定體なし。而して中を執るは、時に隨ふに如くはなし。時中は中の用なり。然りと雖も時中は唯だ聖者のみ之を能くす。而も中を擇んで之を執るは人皆勉むべし。中の在る所は善の在る所なり。故に亦之を擇善

と謂ふ。聖人の人を教ふるや、知愚賢不肖の偏をして其の過不及を去りて中に歸せしめんと欲す。故に之に示すに人に従ふ方を以てす。曰く擇乎中庸と。擇とは能不能未定の詞なり。之を擇んで之を得、之を得て之を固執し、之を久うして時として其の中を用ひざるなし。此を時中と謂ふ。此を中庸に依ると謂ふ。然れば則ち何を以て復謂和と言ふ。曰く、未發を體と爲し、已發を用と爲し、發して節に中る者は時に合する者なり。天に四時あり。其の序に順ふ、之を太和と謂ふ。人に七情あり、其の節に中る、之を中和と謂ふ。中は和を以て用と爲す、時に非れば和せず。故に博雅に、庸を訓じて和と爲す而して中庸一篇、首として中和を致すことを言ふ。中和は即ち中庸なり。道體を以て之を言へば中和と言ひ、人道を以て之を言へば中庸と曰ふ。言固より各當る所あるのみ。然れば先儒何を以て庸を訓じて常と爲す。曰く、凡そ物の其の常を失ふ者は以て用ふべからず。其の常に用ふべき者は皆な中道なり。一人の身にして其の分は子臣弟友、其境は富貴貧賤、夷狄患難位同じからず、而して各當然の道あり。當然とは時に合する者なり。時にして然る後行ふ、之を庸徳と謂ひ、時にして然る後言ふ、之を庸言と謂ふ。故に曰く、君子素其位而行と。其位に素するは時中の用なり。易の六爻の位に在り。二は多譽、四は多懼、三は多凶、五は多功。然り而して其の用に當る者は三四も時ありて吉、其の用を失ふ者は二五も時ありて凶なり。所謂、君子は入るとして自得せざる無き而なり。乾の用九は之を戒むるに天徳不可爲首を以てす。其の剛に過ぎて中を失はんことを懼るゝなり。坤の用六は之を戒むるに永貞を以てす。其の柔に過ぎて之を失はんことを懼るるなり。六十四卦は時中に外ならず。而して乾坤にのみ特り用を言ふなり。故に曰く、易と其庸とは其の理一のみ。(春聽曰く、最近の學說では、中庸は老子に抗する爲に作られたるものなるが故に、中庸先づ成つて然る後に十翼作られたりと爲すものの如し)

第二十九章

程明道は河南洛陽の人である。名吏程考の長子で、字を伯淳といひ、顥といふ。能く詩賦を爲る。十二三にして庠序に居り、恰も老成人の面影があつたと傳へられる。弟頤と共に經術を以て諸儒の倡坐であつた。泥塑の人の如く人に接する凡て是れ一團の和氣あり。居宅の牕前に茂草あり、人あつて之を刈ることを勧めたのに對し、常に造化の生意を見んが爲であると管へたといふ。また池を堀り、魚數尾を養ひ、時々これを觀る。而して萬物自得の意を觀んと欲すと言つた。かつて范祖禹⁽¹⁾、陳瑩中⁽²⁾に曰く、顔子の過を忒せざる、唯、伯淳これを能くするを論ずと。瑩中曰く、伯淳とは何人ぞ。祖禹曰く、程伯淳を識らざるかと。瑩中曰く、予は東南に生長す、實に未だ知らざるなりと、乃ち責沈文を作りて以て自ら責む。十五歳にして其の弟と共に周茂叙に従つて學び、これより慨然として道を求むるの志を抱いた。躄て進士に擧げられ、鄆縣主簿に調せられ、後、上元縣に改めらる。時に茅山に池あり、龍を産す。蜥蜴の如くにして五色なり。祥符年中、二龍を取りて都に入る。半途にその一つを失ふ。明道これを捕へて脯にす。既にして晋城令に移る。民を視ること子の如く、民、事を以て縣に至るものあれば、必らず告ぐるに孝悌忠信を以てし、事を辨せんと言ふもの或は牒を持せず、徑に庭下に至れば、從容その曲直を理して釋然たらざるはなく、鄉村の遠近を度りて保伍となし、これをして力役相ひ助け、患難相卹ましめ、而も姦僞容るゝところなし。およそ孤孀殘廢のもの之を親戚鄉黨に責めて所を失ふことなからしめ、行旅

その途に出づるもの、疾病みな養ふところがあつたといふ。郷には必らず學校を設け、暇を設けては親ら至り、父老を召して之と兒童が讀むところの書に就て語り、親ら爲に句讀を正し、教ふるところの者善からざれば爲に易置す。民これを愛すること父母の如しといふ。従つて郷民自ら社會をなし、科條を立て、善惡を旌別し、勤むるあり、恥づるあらしむ。縣に在ること三年、民に強盜及び鬪死の者がなかつた。然るに秧滿つるや、一人の吏、夜俄かに門を叩き、人を殺せしものありと訴ふ。明道が曰く、吾が邑、安んぞ之あらむ。誠に之あらば必らず某村某人ならむと。之を問へば果して然り。ある人その故を問ふ。曰く、吾かつて此の人惡少の革む無きものたるを疑へばなりと。著作佐郎に改めらる。尋で遷寧の初め、御史中丞呂公著（ひさゆき）の推薦によつて、太子中允を授けられ、權監察御史裏行となる。六世神宗もとより明道の名を知る。便殿に召見し、從容として咨訪す。將に退かんとするや曰く、卿頻りに來つて對を求むべし、常に相見んと欲するのみと。明道、詞辯を飾らず、獨り誠意を以て帝を感動す。前後進說甚だ多かつた。大要は正心窒慾求賢育才を以て先となす。かつて曰く、人主は未萌の欲を防ぐべしと。神宗、身を俯し手を拱して曰く、常に卿の爲に之を戒むべしと。

王安石、執政となり、法令を改むるを議し、言者これを攻むる甚だ力む。明道、旨を彼り中堂に赴いて事を議す。安石まさに怒り、言者色を厲うして之を待つ。明道徐ろに曰く、天下のことは一家の私議に非ず。願くば氣を平にして以て聽けと。安石これが爲に愧ぢて屈す。新法の行はるゝや乃ち曰く、新法の害、吾が黨、至誠を以て上意を動かす能はず、偶ま之を混成せしのみと。また曰く、智者禹水を行るが如くすれば、行くとこる事なし。

古より治を興し事を立つる、中外人情交も不可と謂ひて能く成るものならず。たとひ小成を徵徯せしむるも、而かも興利の臣、日に進み、尙徳の風浸く衰ふ、尤も朝廷の福に非ずと。かつて帝、御史たる所以を問ふ。答へて曰く、臣をして拾遺補闕して朝廷を裨贊せしめば則ち可、臣をして陛下の短長を拾掇し以て直名を清らしめば則ち能はずと。上曰く、眞御史の體を得たりと。安石と法を議して合はず、言職を去るを乞ふ。帝また其の去を重んじ、屢々請へども許さず。明道、門を閉じて罪を待つ。安石は明道と善かつた。その已に附かざるを追ふに當り、猶ほ之を敬して深く怒らず。曰く、此の人道を知らずと雖も亦忠信の人なりと。乃ち提點京西刑獄に除せらる。固辭して曰く、臣が言は是れ之を行ふを願ふ。如し其の妄言ならば願くば顯謫を賜へと。改めて簽書鎮寧軍判官となる。河決を治するの功によつて太常丞になる。帝命じて三經義を修せしめんと欲す。執政これを沮む。出で、扶溝縣に知たり。時に内侍王中正、保甲を閱す。權煇震灼、隣邑大いに侈を競ひ、供帳これを悦ばしむ。主吏來り請ふ。然るに明道が曰く、吾が邑は貧なり。獨り邑令の故青帳あり、用ふべきのみと。王中正しばく境上を往來しながら遂に明道の知たる境に入らなかつた。幾もなくして除判武學李定のために、新法の初め、異論をなせしを以て彈劾せられ、逸獄に坐し、責められて汝州の酒税を監す。やがて七世哲宗立つや、召して宗正丞となす。彼は平生、經濟に意あり、徵還せらるゝに及び、世まさに其の大に用ひらるゝことを冀ふ。然るに惜しいかな未だ赴かざるに年五十四にして卒す。時に元豊八年である。士大夫の知ると知らざると共に悲傷せざるはなかつたといふ。明道は秦漢以來、斯文の久煙を慨き、振つて之を起さんと欲して次の如く曰く

道の明かならざるは異端これを害すればなり。昔の害は近くして知り易く、今の害は深くして辨じ難し。昔の人を惑はすや其の高明に因る。邪誕妖異の説競ひ起り、生民の耳目を塗し、天下を汚濁に溺す。高才明智と雖も見聞に膠し、醉生尊死自ら覺らず、是れ皆な正路榛蕪、聖門閉塞すればなり。之を闢きて後、以て大道に偕ふべし。

と。路公文彦博、衆議を采り、その墓に表して明道先生といふ⁽⁶⁾。その資性人に過ぎて、充實道あり、和粹の氣、面背に溢る。門人交友、之に従ふこと數十年未だ嘗てその忿厲の容を見ず。事に遇ふや優爲、倉卒に當ると雖も聲色を動かさずといふ。頗る篤摯深厚、その人品を知るべきである。その學間に於ける修爲の工夫また其の性格上より來るものといふべく、然もその著述としては成書なく、ひとり語録として定性書が残されてゐる。これは聖教の秘奥を闡明するもので、太極圖說と相ひ表裏すると稱せられて居るのである。

宋代、一元論を祖述したものは何人も明道に指を屈し、後の王陽明の學は陸象山に基き、陸象山の學は言ふ迄もなく程明道によつて啓發せられたのである。⁽⁷⁾即ち森羅萬象は、上は日月星辰より、下は山川草木、禽獸虫魚に至るまで悉く氣によつて成るもので、もと一氣であつたものが、その屈伸消長に従つて陰陽二元に分れ、更に五行に分れたのである。然もこの陰陽五行の氣なるものが、その發現に清なるもの、濁なるもの、昏なるもの、明なるものとそれ〴〵に別を生じ、此に人と物との別が出來るとなす此の觀念論は、あらゆる形體、而して生もまた死も、此の一氣の變相に過ぎないと見るのである。

人々は一般に、彼等兄弟を目して二程子と呼ぶのであるが、その學説は弟の伊川に至つて二元論となり、これが後に至つて陸朱の別を生ずるに至つたのである。

程伊川は伯淳の弟。字は正叔。頤といふ。天資嚴毅にして、完く兄顥と性格を異にしたと言はれてゐる。兄と共に濂溪先生に就學し、十四五歳にして銳然として聖人を學ばむの志があつた。大學に入るに及んで、胡璉(8)その論文を見、大いに驚異となし、居らしむるに學職を以てす。彼が早熟であつた事實は、十八歳の時、闕下に上書して、帝が世俗の論を黜け王道を以て心となさむことを奏した事によつても知られるのである。大臣等屢々官途に就かむことを薦めたが就かず。七世哲宗の天祐の初めの頃、司馬光奏して、伊川は文章好古、貧に安んじ、節を守り、言必らず忠信、動儀禮に遵ふ。然も年五十を踰えて進仕を求めず、眞に儒者の高踏、聖世の逸なりと。詔あつて西京國子教授を以てし、尋いで祕書校書郎を以て召さる。入見して崇政殿說書を拜し、經筵進講の命を蒙つた。かつて疏言して曰く

習は知と長じ、化は心と成る。大率一日の中、賢士大夫に接するの時多く、寺人宮女に親しむの時少なければ、氣質變化自然に成る。願くば名儒を選び、入侍せしめて以て顧問に備へば必ず能く聖徳を養成せんと。

また帝の宮中に噴水して蟻を避くるを聞き、伊川奏して曰く、願くば此の心を推して以て四海に及ぼせと。

伊川その身を持つること謹嚴、少しも假借せず。蘇軾（東坡）と合はず。従つて其の門下生等は互に攻訐し、爭論甚しく、世の所謂、洛蜀二黨の爭議を惹き起し、遂に出でて西京國子監を管勾す。力辭した。報せず。紹聖

の年間、元祐の諸臣を追貶し、黨人を目して奸黨と爲す。伊川また之に連坐して罪を獲て涪州に流竄せられた。八世徽宗位に即き、峽州に移つた。崇寧の年に及んで、黨禁また弛み、宣議郎に復職した。やがて致仕して大觀元年、その家に卒す。時に年七十五であつた。文彦博これを稱して眞侍講となす。伊川は師尊尊嚴、その門下には多くの名流を出した。涪州の諸民、北巖に祀る。世に伊川先生といふ。⁽⁹⁾

伊川は大學、論語、孟子、中庸を以て標的とし、之を四書といひ、六經に達し、動止語默、一に聖人を以て師と爲す。故に當時、その家學は道學の名を得たほどである。

程氏兄弟は二程子と稱し、共に周茂叔に師事した事實を以て、その學説をも包括的に取り扱ふが、兄の明道が汎神論的一元論者であるのに對して、伊川は二元論の創始者といふことが出来るのである。有名な易傳を著述した伊川は易傳を以て終生の仕事となした如く、彼の思想は易の影響のもとに立つ。彼の易傳が後世、そのやうに價値付けられてゐることは、畢竟、從來の易學傳統を破つて、徹頭徹尾、理によつて易を解釋した點に存する。而して斯る独自の解釋を爲し得たといふことは、彼が彼自身の哲學を展開したといふ事實に他ならない。端的に言ふならば伊川は、易を以て、象によつて理を顯現するものと主張するのである。それ故に曰く
至顯なるものは事に如くなく、至微なるものは理に如くなし。而して事理一致、顯微一源なり。

此に伊川の理念の核心が潜む。即ち伊川は、事象を以て理の作用となし、理は事象の本體と考へた。従つて現象界の事象と本體の理とは分離すべからざるもので、理と事象の一致を、事理一致、體用一源といふ言葉で表は

してゐる。しかしながら現實には、現象界といふものは千差萬別で必ずしも伊川の主張するが如くではない。斯の如き差別は、如何にして一理より生ずるのであるか——伊川はそれを理一分殊といふ。⁽¹⁰⁾

このやうな展開を見る時に、人々は伊川思想の中に、華嚴哲學が多分に影響してゐることを認めるであらう。先にも指摘した如く、宋代の儒者の思想には佛教が色濃く投影してゐることで差別即平等、平等即差別といふ認識の仕方は、また伊川の間論にも見出すことが出来るのである。即ち理性と氣質の二つを對説し、前者は理の人に存するもので勿論平等であるが、後者は各人が曾受した氣の偏もしくは正によつて定まつた才質で、各人に異なる。けれどもが然し、理と氣とは一體であつて、氣は理の用に過ぎないといふのである。この性を、理氣となす彼の學説は、朱子によつて繼承せられ且つ大成して、吾が國に傳來して儒教の正統派として發展したことは人の知るところであらう。伊川學案上、語録に曰く

離了陰陽、更無道、所以陰陽者是道也、陰陽氣也、氣是形而下者、道是形而上者、形而上者則是密也。

また曰く、離陰陽、則無道、陰陽氣也、形而下也道太虛也、形而上也。

伊川かつて曰く、今、農夫は祁寒暑雨五穀を播種す。吾得て之を食す。百工は肆に居り器物を作爲す。吾得て之を用ふ。介冑の士披堅執銳、以て土宇を守る。吾得て之に安んず。若し功澤の人に及ぼす無くして歲月を浪度せば、晏然、天地間の一蠹魚のみ。聖人の遺書を綴輯する、補あるに庶幾しと。

伊川かつて蜀の成都に遊び、治篋籊籊の者、冊を挾むを見て、就てこれを見れば易なり。篋者問ひて曰く、若

ち嘗て此を好くかと。因つて未濟の卦を論ず。伊川爽然たり。後、袁滋に謂ひて曰く、易學は蜀に在りと。

また成都に遊び、賣藥翁なる者を見て與に語り、大いに得るところあり。蓋し篋叟、醫翁等は皆な隱君子であつたと傳へられてゐる。

伊川、晩年に及んで彼の有名な易傳四卷を著した。而して彼の易を儒理宗とも稱するのである。

黃氏震⁽¹¹⁾曰く、伊川程先生、易傳を作り、以て聖人の道を明かにす。謂へらく、易に聖人の道四あり、以て言ふ者は其の辭を尙び、以て動く者は其の變を尙び、以て器を制する者は其の象を尙び、以て卜筮する者は其の占を尙ぶ。吉凶消長の理、進退存亡の道、辭に備はる。辭を推し、卦を考へ、以て變を知るべし。而して象と占と其の中に在り。故に其の傳を爲る、専ら辭を主とし、理を發すること精明、日月を掲ぐるが如し。

伊川の易傳の正文は王弼本に據つてゐる。この弼本を底本としたといふ事實は易學史上にも、儒學史上からも甚だ重要な契機を孕んでゐるのである。王弼本を取り擧げた伊川の學的態度は、やがて後世、濂洛關閩の學と稱せられるに至つたもので（周濂溪の濂を取り、二程子は河南洛陽の産であり、張橫渠は關中の人なるが故に、而して朱子は閩（福建）の李侗の學を受けた所謂、宋學の別名）その結果は馬融、鄭玄、服虔などの學的價値が滅殺したのである。それ故に伊川が王弼本に據つたといふことは、易傳がまた一つの轉換期を持つたといふ重大な事でもあるのである。

伊川の易傳は、六十四卦繫序傳あるに止まつて、爻卦に及ぶものは傳中に挿入し、従つて繫辭がないのである。⁽¹³⁾

その展開した學は、一に義理を以て教となした（朱子跋）故に、伊川はその自序に曰く

吉凶消長の理、進退存止の道は辭に備る。辭を推し、卦を考へ以て變を知るべし。象と占とは其の中に在り。予が傳ふる所のは辭なり。辭に由つて以て其の意を得るは則ち人に在るのみと。⁽¹⁴⁾

されば後世の人、朱子の周易本義と並稱して、程傳朱義といふのである。今その一二の例を挙げれば、復卦の象を解釋して次の如くに言ふのである。

象曰、復亨。剛反、動而以順行。是以出入无疾、朋來无咎。反復其道、七日來復、天行也。利有攸往、剛長也。復見天地之心乎。即ち、復亨とは剛反りて亨るを謂ふなり。陽剛消し極りて來り反る。既に來り反れば、漸く長盛して亨通す。動いて順を以て行く。是を以て出入无疾、朋來无咎は卦才を以て其の然る所以を言ふなり。下動いて上順、是れ動いて順を以て行くなり。陽剛反て順動す。是を以て出入疾なく、朋來て咎なきを得るなり。朋の來るもまた順動なり。其の道反復往來迭に消し、迭に息し、七日にして來復すとは、天地の運行斯の如きなり。消長相因るは天の理なり。陽剛君子の道長ず、故に利有攸往。一賜下に復る。乃ち天地生物の心なり。先儒みな靜を以て天地の心を見ると爲す。蓋し動の端は乃ち天地の心なるを知らざるなり。道を知る者に非れば孰か能く之を識らんや。⁽¹⁵⁾

また例を損の卦に取ると、凡損抑其過、以就義理、皆損之道也。損之道必有孚誠、謂至誠順於理也。人之所損或過或不及、或不常、皆不合正理、非有孚也、非有孚則无吉而有咎、非可貞之道、不可行也と言ひ、その六五の

或益之、十朋之龜弗克違。元吉の解に曰く、六五は損の時に於て、中順を以て尊位に居り、其の中を虚うして自ら損し以て在下の賢に順從するなり。能く是の如くすれば、孰が己を損し、自ら盡して以て之を益さざらむ。故に或は之に益す事あれば、十朋これを助けん。十は衆の辭、龜は是非吉凶を決するものなり。衆人の公論は必ず正理に合す。龜筮と雖も違ふ能はざるなり。斯の如くなれば大善の吉といふべし。古人曰く、謀りて衆に従へば天心に合すと。

今、四庫全書に残る温公易説六卷は、司馬光の著作として知られてゐる。

司馬光。字は君實。涑水先生と號し、温公として有名である。かつて群兒と座に戯れ、一兒、甕に登りて水中に没す。光、石を以て甕を破り、兒の溺れんとするのを救つた話や、或はまた七歳にして凛然として成人の面影あり、左氏春秋を講じたなどといふ逸話は、世に普く知られてゐるのである。四世仁宗の寶元年中、進士甲科にあたり、端明學士に累官し、永興軍に知たり。やがて諫院の知となり、仁宗の不豫の時、繼嗣を定めんことを請ひ、五世英宗の代に及んで僕王崇奉の典禮を議し、正論を吐いた爲に却て斥けられ、更に六世神宗の代、侍讀學士となり傍ら御史中丞となる。然るに熙寧元年、彼の王安石が廟堂に立つに至つて、翌年より新法を行ふや、青苗助の弊を痛論す。帝の御前に反覆詳道し、帝まさに光の言を容れんとす。王安石曰く、司馬光の言ふところ盡く政を害するの事なり。今、光を用ひんとするは是れ異論者と赤幟を立てるなりと。仍つて病と稱す。光を以て樞密副使となす。拜辭して曰く、陛下の臣を用ふる所は其の狂直を察し、國家に補あることを庶幾ふならん。若

し徒らに祿位を以て之を榮とし、其の言を取らざれば、是れ天官を以て人に私するものなり。臣、徒らに祿位を以て自ら榮として生民を救ふ能はず、民の患を除かざれば是れ名器を竊みて以て其の身に私するものなり。陛下、誠に能く新法を廢して天下の苦患を除き、青苗助役の法を行はざれば、臣を用ひずと雖も臣は賜を受くること多しと。これより口を閉ぢて事を論ぜず。洛陽に歸つて十有五年、ひたすら修史の業に携つて十九ヶ年を閲す。即ち資治通鑑これである。元豐八年、神宗崩す。光、都に赴き入りて哭す。士これを望見して、皆な手を以て額に加へ、兒童、走卒に至るまで道を遮り、數人の人々その馬首を擁して叫んで曰く、公よ、洛陽に歸る勿れ。留りて天子に相となり、百姓を活かせよと。然も光はその志の未だ容れられざるを計つて洛陽に歸つたのである。光祐元年、病の床に臥す。時に外患としては西戎の紛亂あり、内憂としては青苗、免役、將官の惡法が在る。従つて大いに嘆じて曰く、四患未だ除かず、吾、死すとも瞑目せずと。即ち折簡して呂公著に與へて曰く、光、身を以て醫に付し、家事を以て患子に付す。唯、國家未だ託するところあらず、今以て公に屈すと。既にして朝覲を免じ、肩輿に乗り、三日一たび省に入るを許さる。光、敢て當らずして曰く、君を見ざれば以て事を視すと。司馬光の子、康に詔して扶けて入り對せしむ。乃ち免役の五害を論じ、直ちに勅を降して之を罷めんことを乞ひ、且つ新政の弊事を論じて悉く之を改廢せんことを乞ふ。七世哲宗、幼にして立ち、高太后、朝に臨む。太后は溫公の見解を是として起用し、門下侍郎を拜し、保甲、方田、市易、保馬を廢し、青苗法を廢して常平法を復活す。かつて議者曰く、三年父の道を改むる勿れ。姑らく新法の甚しき者を損して足らんと。光、聲を勵して曰く、

先帝の法、良きものは百法と雖も變ずべからず。王安石、呂惠卿等⁽¹⁷⁾の立てたるものにして、天下の害をなし、先帝の本意に非るものは、當に焚を救ひ、溺を拯ふが如くなるべし。況んや皇太后、母を以て子の道を改めんとするにあり。父の道を改むるに非ざるをやと。海内の百姓、再生の思ひがあつたと傳へられてゐる。されば遼夏の外使、入朝する毎に司馬光の起居動靜を問ひ、且つ國境の守備兵に傳へて、支那、司馬光を相とす。輕々しく事を生じ隙を開く勿れと。相として廟堂に立つや、人々その身體の餘りに羸虚なるを憂ひて、少しく節して勞を省かんことを勧む。光曰く、死生は命なりと。身を以て社稷に殉ぜん⁽¹⁸⁾と欲し、遂に病革るに及び、夢中の語みな天下の事なりといふ。相位にあること僅かに八ヶ月、政敵王安石の死後六ヶ月にして卒す。時に六十八歳であつた。また易乾坤別解を著した史通は、字を子深といひ、四川の青神の人である。元祐年中の進士で、兄の史珣と共に文學を以て名を知られ、官は通州尉、盤石令を歴任した。

(1) 范祖禹。字は淳夫。鎮の從孫なり。初の字を夢得といふ。生るゝとき母、夢に一丈夫あり、金甲を被りて寢室に至りて曰く、吾は故漢將鄧禹なりと。故に以て名と爲す。進士甲科に擧げられ秘書郎となる。司馬光に従ひ、資治通鑑を編修す。書成る。薦められて秘書正字に除せらる。後、右諫議大夫に拜せらる。上疏して哲宗に邪正を辨ずるを勧むる甚だ懇切なり。官、翰林學士に至る。かつて帝學八卷、唐鑑十二卷、仁宗正典六卷を進む。

(2) 末考

(3) 呂公著。字は晦叔。夷簡の子なり。幼にして學を嗜み寢食を忘るゝに至る。夷簡これを器として曰く、他日必らず公

輔たらんと。洛陽に寓居す。進士に第し御史中丞に累官す。元祐の初め尙書右僕射に拜せられ、中書侍郎を兼ね。司馬光と心を同うして政を輔く。公著、簡重清儉、天性に出づ。冬月火を附けず、夏月扇を用ひず、嗜慾寡く、滋味を薄うし、聲色華輝これを見るも漠如たり。御書墓誌に曰く、純誠孝徳之碑と。甲國公に封せられ、正獻と諡す。

(4) 王中正。嵐州の人なり。博學強記。家財に豪なり。賓客を待つに豊厚にして自ら奉ずるに甚だ儉なり。再び薄らさず。亦仕へず。一室に屏居して數年にして乃ち出づ。人その談吐詩翰の異常なるを覺ゆ。晩年名を雲鶴と改む。

(5) 李定。字は資深。揚州の人なり。少くして王安石に學び、進士に第し、定遠尉、秀州判官となる。神宗召して青苗のことを問ふに、その便なることを極言す。これより新法の不便を言ふ者、皆な聽かれず。太子中允、監察御史裏行、知制誥に拜せらる。かつて庶母の死を匿して喪に服せず。改めて崇政殿説書となり、累官して御史中丞となる。而して蘇軾を劾す。爲に世論これを惡み、不孝の名と共に益々著し。

(6) 朱子の賛に曰く

揚休玉立	玉色金聲
元氣之會	渾然天成
瑞日祥雲	和風甘露
龍徳正中	厥施斯普

(7) 文學博士秋月胤繼氏曰く、宋代に於ける代表的學者は何れも理を説くと同時に氣を説かざるなし。唯、理氣を同一物なりとして一元論を立すると、理氣を別物として二元論を立するとを異にするのみと。

(8) 未考

(9) 朱子の賛に曰

規圓矩方 繩直準平

允矣君子 展也大成

布帛之文 菽粟之味

知德者希 誰識其貴

(10) 張橫渠は一氣分殊と言へり。

(11) 未考

(12) 後に傳を出す。

(13) 董眞卿。周易會通因革程子易。

(14) (日名靜一氏に據る)

其卷數、東都事略、宋史藝文志、二程全書、載する所相同じからず。また楊時の跋語を考ふるに當時、定本なかりしもの如し。

四庫提要卷二參照

(15) 張橫渠曰、天地之大德曰生、則以生物爲本者、乃天地之心也。(易說)

(16) 高皇后(宣仁聖烈)。英宗の皇后なり。蒙城の人。神宗及び二王を生む。英宗、位に即くに及びて皇后となる。神宗立

つや、尊んで皇太后となす。寶慈宮に居る。帝かさねて高氏の大第を警まんと欲す。后これを許さず。但、望春門外の空地を斥賜す。哲宗立つに及びて太皇太后となす。誕生日を坤成節となす。后、朝に臨むや司馬光、呂公著を召して相と爲し、同心政を輔佐せしむ。一時知名の士朝廷に彙進す。凡そ熙寧以來の政事にして便ならざるものあれば次第に之を罷め、常平舊式を以て青苗を改め、嘉祐差役募役を以て市易の法を除き、茶鹽の禁を道し、邊砦不毛の地を擧げて以て西戎に賜ふ。宇内また安寧なり。政に臨むこと九年、朝廷清明、華夏綏定せり。力めて故事を行ひ外家の私恩を抑絶す。文思院奉上の物、巨細を問はず終身その一をも取らず。人以て女中の堯舜となす。元祐八年九月、壽六十二にして崩す。宣仁聖烈と諡す。

(17) 未考。名吏呂璿の子なり。

第三十章

次に程伊川の論敵、蘇東坡に觸れなければならない。東坡はその父、及び弟を含めて三蘇と稱せられた。従つて先づ順序として老蘇と云はれた其の父の傳を記さう。

蘇洵。字は明允。老泉と號した。四川眉山縣の眉山の人である。蘇祐(1)の曾孫で、二十七才の晩學であつた。しかしながら發憤して學に志し、試に應じたが當らず、憤激して嘗て作るところの文を焚き、戸を閉ぢて益々書を讀み、遂に六經諸子百家の學に通ずるに至つた。筆を下せば直ちに數千言をなし、その文、奇峭雄拔、先秦の風がある(2)と稱揚せられ、權書、衡論、機策、二十有餘篇を著した。至和、嘉祐の間、二人の子を引き具して都に上つた。老泉は妻に先立れ、子六人をなしたが、僅に二人を残して皆なこれも夭折した。その二人こそ長を軾となし、次を轍といふのである。老泉、都に上つて先に著した二十三篇の闔閭縱横の書を翰林學士歐陽修の手を経て上つた。これより都の士大夫、争つてその文を傳誦し、三蘇の名は天下に喧傳せられるに至つたのである。宰相韓琦、朝に奏して舍人院に召す。彼は疾と稱して辭した。帝に上るの書およそ六千言。遂に秘書省校書郎に任ぜらる。後、太常寺の命を受け、霸州文安縣主簿となる。偶ま建隆以來の禮書を修めんとす。即ち命あつて陳州項城令姚闢等と共に太常因革禮一百卷を作つた。書成つて卒す。時に五十八。帝これを哀れみ、縑銀二百を賜ふ。軾これを拜辭し、却つて贈官を請ひ、特に光祿寺丞を賜り、有司に敕し、舟を具し、その喪を乗せて蜀の眉山に

歸らしめた。文集二十卷、謚法三卷がある。平生、易を修め、易傳を著した。

その長子、名は軾、字は子瞻。東坡はその號である。また和仲とも別號す。趙子昂(3)の文忠公遺像は東坡の面影を彷彿するのを以て有名である。幼少より大志あり、父が四方に遊學するに當つて、その母程氏、親ら學問を授け、加冠する頃には既に博く經史に通じて、莊子、賈誼、陸贄を讀んだと傳へられてゐる。嘉祐二年、弟と共に禮部の試に應ず。主司歐陽修その文を稱し第二に擧げ、吾、當に此の人の一頭地を出すを避くべしといふ。また制策に對して三等に入る。五世英宗召して翰林に入れんと欲す。知制誥韓琦曰く、蘇軾の才は遠大の器なり。他日當に天下の用たるべし。朝廷これを培養するを要すと。召試を請ひて直史館を得た。既に福昌主簿、大理評事、簽書鳳翔府判官を經、英宗の砌り登聞鼓院に判し、史館に直せしめたのであつた。神宗、卽位して王安石、宰相となり、軾の論が已に異るのを以て誥院の判官とした。然るに安石の新法を布くや、縷々萬餘言を上書して其の不可を論じ、安石の怒りに觸れて杭州の通判となり、從つて密州の知となり、更に徐州を経て、湖州の知となり、轉々として地方に在つた。執政に對する不滿より烏臺の詩に托して、國に補あらんことを庶ふ。御史李定これを以て訕謗となし、彈劾せられて捕へられ、臺獄に投ぜられて死罪を宣せられた。然るに神宗その才を憐れみ、黃州團練副使とせられて死一等を免がる。よつて田父野老と溪山の間遊び、室を東坡に築いて以て號となし、山水を樂しむ。時に弟轍また連坐して筠州に貶せらる。赤壁の賦前後篇の成つたのは實に此の時期である。その後、汝州に移され、また泗より、常州に移る。哲宗、位に卽ぎ、高太皇太后政を聽く。再び召されて禮部郎

中に任じ、起居舍人に擢でられ、元祐元年に中書舍人、次で翰林學士、侍讀を兼ね、便殿に召對す。この頃、程伊川の徒と論争し、遂に出で、杭州の知となる。既にして召して翰林承旨となつたが、讒に會ふ潁州の知となつた。揚州の知をしてゐた時、重ねて兵部尙書兼侍讀を拜し、禮部尙書より端明殿學士を以て翰林侍讀の兩學士を兼ねた。時に宣仁太皇太后崩じ、七世哲宗政を親らす。また外を請ふて定州の知となる。時に紹興年間の初め、姦黨の勢ひ猛にして、元祐の君子等は概ね斥けられ、従つて東坡はまた瓊州別駕に貶せられるの憂き目に遭ふた。後、八世徽宗、位に即き、大赦に浴して廉州に移り、舒州團練副使となる。許されて朝奉郎に復し、提學成都玉局觀、居住その便に従ふことを許さる。建中靖國元年七月、常州に卒す。年六十六である。唐宋八大家の一人として其の詩文は餘りに有名である。父老泉、晩年に及んで易傳を作り、未だその完璧を期するを得なかつた。東坡その志を繼承して易傳九卷を成す。今、四庫全書總目提要にある。

宋代、學徒その門戸を立てて争論するに至つたのは、既述の如く伊川及び東坡の徒から淵源する。多くの理論鬭争は何時しか純理を逸脱して、黨争の形相を示して來るものである。伊川及び東坡はその講席に於いて、全く兩者の相容れざる姿を示した。奔放不羈な詩人肌の東坡は、従つて諧謔を好み、その生活態度の上にも詩酒と兒女の情を織り交せてゐる。一方、謹嚴重厚な學者肌の伊川は、自ら禮法を守つた。詩人と道學者は宋代、既に斷じて相容れざることを身を以て實證したのである。此に於いて伊川の學派を洛黨といひ、東坡の學徒を蜀黨と稱したことは既述の如くである。彼等が相争ふべきは或は宿命であつたかも知れない。しかしながら彼等が好むと

好まざるとに拘はらず、爾後の學徒が、その自説を主張するために門戸を張つたといふ社會的現象は之を逸することが出来ないのである。斯の如き狀勢から劉摯⁽⁴⁾、王巖叟⁽⁵⁾、劉安世⁽⁶⁾の徒が輩出し、それぞれに門戸を張つた。これを大朝黨と稱した。而して南宋に及んで蜀黨及び大湖黨は衰へ、獨り洛黨のみ盛んとなり、その洛黨から大儒朱子が現れたのである。

劉安世の門より李光が出た。李光。字は泰發。上虞の人である。崇寧五年、進士に登第し、參知政事となる。紹興十年、秦檜、金兵の南京を陥れるや南宋一世高宗に和議を勸説し、卒先して國耻を取る。李これに忤らひ、嶺南に謫せられた。これより亦時事を論ぜず。自ら讀易老人と號し、得るところを據べ以て讀易群説を成した。

蓋し歴史的事實を以て易辭を參證するは、既に遠く西晋の安帝の頃、于寶その周易注十卷に見へ、次に唐の高宗の頃、李鼎祚の周易集解十七卷に胚胎し、程子易傳、朱子本義ともに其の例を見出すのであるが、而も尙ほ六十四卦、三百八十四爻の全部に亘つて、その一々を參證するものは李光を以て最初となすのである。四庫全書總目提要に曰く

當世の治亂、一身の進退に於いて、觀象玩辭、恒に三たび意を致す。書中、卦爻の辭に於いて、皆、君臣に即き立言し、證するに史事を以てす。或は間々、牽合あるを免れず。然れども聖人の易を作りて以て訓を垂るる、將に天下萬世をして從違する所を知らざる無からしめんとす。徒に上智數人をして衿談妙悟すること、佛家の心印を傳へ、道家の丹訣を授くるが如くならしむるに非ず。異を好む者、性命を推闡し、奇偶を鉤稽してより、其

の言、愈々精、愈々妙、而して聖人の立教庸民の旨に於いて、愈々、南轅にして北轍す、轉々光の是の書を作るの切實、理に近く學者に益ありと爲すに若かず云々。

易の流派に於いては史事宗と名付けてゐるが、一種の史觀に立脚する歴史哲學と稱することが出来るのである。北宋末年の兵亂に際會して、所謂、史的轉換期を眺め、その志容れられず、而も嶺南に貶謫せられた李光その人の半生を想ひ描く時に、彼が易によつて其の史觀を發展せしめたであらう千萬無量の心境を忖度し、後世、易を修する者また感無きを得ないのである。

易學史は今や南宋に及ばんとする。

然しながら南宋は、高宗より九世約百五十年に亘つてゐるが、國家とは實は名のみであつて、僅かに江南の地に其の餘喘を保つに過ぎず、天下は北方の金これを占有し、やがて更に北方なる蒙古民族の統一下に服したのである。

現に吾々が當面してゐる支那は、昭和十二年夏、盧溝橋に端を發した事變以來、首都南京の陥落を契機として、支那國民政府は今や有名無實の一地方軍閥として奥地に幽かなる存在を示して居るに過ぎない。これは恰も金兵の南下によつて、江南の地域に窘迫せられた古の南宋の在り方と等しい。無力の辭に妄りに尊大な支那人は然も尙、南宋と誇稱して最後の斷末魔に到るまで、その面目を保持せんと務めた。従つて吾々はその時代を便宜上、南宋として取り扱ふのであるが、政治的經濟的、乃至、軍事的には金國は確に存在したが、南宋などといふ國家

は獨立した存在ではなかつたことを知らなければならぬ。しかしながら文化史的に南宋の存在し得る理由は、金や、後の元の有し得なかつた文化を持つてゐたからに他ならないのである。吾々は此の一點にのみ支那民族の優秀性を認め得るのである。彼等は譬ひ國破れたりと雖も、燦然たる文化を持つてゐた。さうして江南の地域に踰躋しながらも、唯一つ彼等に與へられたところの文化を築く努力を、少しも怠らなかつた點を偉としなければならぬ。現在の末路衰れた黨國支那によつて、果して如何なる文化が生み出されるであらうか。惟ふに近代支那が、左様な偉大な文化を生む力を喪失したところに、その民族の衰亡性を露出したものではあるまいか。南宋は焦土の中に於て尙ほ且つ、その民族性に基礎を置いた文化を守つた。しかしながら近代支那は其の國家觀と民族性に背馳しつゝ、寧ろ支那的文化を破壊する役割を演じたのではなかつたか。吾々、支那を愛する者は永い間それを支那の爲に憂へたのであつた。而して今や新しい支那は、焦土の中から不死鳥の如く生誕しつゝある。而して新支那の新しい文化こそ、吾々の最も大きな關心事でなければならぬ。願くば大和民族の日本エネルギーを攝取して、新しい亞細亞の建設に参加せられたい。日本民族を主體性とする東亞新秩序の構想は、全アジア民族の運命共同體として把握されなければならないのである。

吾々は戰塵の中から生れた南京の文化に敬意を表する。而してそのやうな亂世にあつて、多くの學者が易學のために少なからぬ著述を残した偉業を純粹に讃嘆したい。南宋は亡滅したが、彼等に賦與された豊かな知性によつて、支那民族本來の文化を創意豊かに生んだことは、亡國南宋の誇りに數えて好いと思ふ。

彼の有名な康節先生邵子には、矢張り優れた後繼者があつた。これを伯温となす、字は子文。易學辨惑の著の他に、聞見録、皇極見解がある。

また徐人傑を逸することが出来ない。玉山の人で、紹興の初め進士に登第した。盛んに主戦論を説き、唯、金軍に仇を報ずるを上書し、而して和平論者秦檜に忤つた。遂にその爲め職を辭した。しかしながら平生、生産を意はず、清貧のうちに汲した。身邊數篋の圖書を残すのみで全く無一物であつたといふ。彼に易傳の著がある。

また朱震がある。字は子發。荆門の人である。政和年中に進士に第し、累進して翰林學士となつた。經學深湛、人これを稱して漢上先生といふ。弟巽また學者として知られ、當時、二朱と號せられた。漢上易集傳十一卷は其の代表作である。

南軒易說三卷を著した張栻は、有名な張浚の子である。張浚に二子あり、栻と杓といふ。張栻は字を敬夫といひ、南軒はその號である。かつて王大寶(8)を師とし、また胡宏(9)に及ぶ。しかしながら五峰の説よりは、程子の説を尊信したものと如くである。全祖望は曰く、南軒は明道に似たりと。金國の南征に際し、主戦論を唱へたのは父の志を繼承したものであらう。撫州、嚴州の知を経て、やがて吏部侍郎、起居郎、侍立官となつた。朝に立つて屢々直言し、遂に忌まれて野に下ること數年、再び召されて知靜江府、經略安撫廣南西路となつた。而して朱子と親交厚かつた。右文閣修撰となつて、僅に四十七才で卒した。父の張浚また兵馬倥偬の間にあつて五經解などの著がある。傳記的には其の二子よりも父の浚の方が華やかにして且つ悲劇的であつたことは、歴史を讀く人々

の知るところであらう。

朱子、張栻と共に、東南の三賢と美稱せられたのは呂祖謙である。字は伯恭。東萊に居るを以て人これを東萊先生と呼んだが、その方が有名になつた。夷簡の六世、公著の五世、希哲⁽¹¹⁾の四世の孫である。その曾祖の尙書右承好問⁽¹²⁾は高宗に從つて南渡し、祖父の弼中⁽¹³⁾はじめて務州(浙江省金華縣)に居り、彼は桂林甥館に生れた。長じて林之奇⁽¹⁴⁾、汪應辰⁽¹⁵⁾、胡憲⁽¹⁶⁾に就て學び、二世孝宗の隆興元年、進士に登第し、博學宏詞科にも合格し、祕書郎となつた。累遷して太常博士兼國史院編修官實錄院檢討官となる。屢々、帝に説いて恢復の大事を述べ、且つ聖學を述べ。また徽宗實錄を修して治道を論じた。かつて聖宋文海の誤謬の多いことを憂へ、孝宗は此を臨安府に命じて校正刊行せしめた。然るに學士周必大⁽¹⁷⁾は其の困難を述べたが、東萊は遂に刻苦努力して其の誤ちを訂正して完成した。これ皇朝文鑑⁽¹⁷⁾である。その少年の時は性、偏急、かつて病中、論語の躬自厚而薄責于人(躬自ら厚うして人を責むるや薄し)に至つて渙然として深省し、終生、怒りをなさなかつたといふことである。故に朱子曰く、學、伯恭の如き、方に是れ能く氣質を變化し、居家の政皆な世法たるべきものと。朱子、南軒と友として親しかつたことは既述の如くであるが、一時、英偉卓犖の士皆な心を東萊に歸したと傳へられる。彼は學深かつたのみならず、自ら身を修めること斯の如く、眞に程子を繼承せるものであることが知られるのである。故に學者これを目して、學は關洛を宗とし、更に博覽して考究し、詩書春秋にては多く古義を考へ、十七史⁽¹⁸⁾にては皆な詳節ありと。有名な東萊博義⁽¹⁹⁾は左傳の事實に就て論じたものであるが、自序によると諸生學業のためにするの作といふ

ことが解るのである。即ち曰く

始め予、東陽の武川に屏所し、林を仰ぎ壑に俯し、戸を出でて望む。日盡きて來人無し。居る半歲、里中、稍々蓬藿を披き、予に従ひて遊ぶ。談餘語隙、課試の文に波及す。予以て其の筆端を佐くる有るを思ひ、乃ち左氏の書、理亂得失の蹟を取り、其の説を下に疏し、旬儲月積浸々編帙を就す。諸生歲時休沐、必らず抄して楮中に實く。其の歸裝を解き虚なる者無し。並舍姍黨復た従ひて之を廣め、曼衍四出し、漫りに收むべからず云々と。

傳説によると、東萊博義は伯恭が新妻を娶つて僅かに一ヶ月の間に成ると言はれてゐるが、これは誤りで、實は乾道四年、母の喪を持って明招山に居つて際に成つたものゝ如くである。畢竟、東萊の才能を讃するの餘りに出でた傳説なのであつた。考訂古周易書說一卷は見逃してはならない重要な文獻である。淳熙五年、官、著作郎に除せられ、國史院編修官にあるの時、同年わづかに四十五歳を以て卒した。晩年、友を會するの地を麗澤書院といふ。既に没して郡の人、之を祀つた。他に讀詩記、大事記等がある。

その弟、祖儉⁽²⁰⁾、祖泰⁽²¹⁾、また共に硬骨の士で、屢々朝廷に上書して時弊を痛論し、貶謫せられるの苦難な路を歩いた。

(一) 蘇祐。唐の人。蜀の眉山の人なり。咏道の後裔。少にして穎悟人に過ぐ。都城に至りて道士に會ふ。道士これを異とし、人を屏けて謂ひて曰く、吾能く百物を變化す。將に以て子に授けんとすと。祐、固辭す。道士笑ふて曰く、是れ果して以て人に過ぐるありと。是より隱名益々顯はる。書を讀みて大義に通じ、詩を爲るに志を達するを務む。三子あり、潛、

漁、洵と。洵は即ち老泉なり。

(2) 姚闢。字は子張。贈辭博學。項城令、通州判に歷任す。至るところ聲望あり。詞華を黜去し心を經術に容む。一時の名士、歐陽修、王荊公など皆な共に交遊す。

(3) 後に傳を出す。

(4) 劉攀。字は華老。東光の人なり。兒たりし時、父、居正、課するに書を以てし、朝夕少時あらず。或人問ふ、君たゞ一子、獨り郵を加へざるやと。居正曰く、唯一子なるを以て縦にすべからざるなりと。御史に拜す。歸りて家人に語りて曰く、趣に装せよ久安の計を爲す勿れと。章數十たび上る。朝臣目を側つ。神宗問ふ、卿、王安石に従學せるか。安石極めて卿の器識を稱すと。答へて曰く、臣は北人、少くして孤にして獨學す。安石を知らざるなりと。尙書僕射に累遷す。攀、峭直氣節あり。時に母后、簾を垂れて政を聽く。攀これを輔け、能く元祐の治をして隆盛を嘉祐に比せしむ。然れども惡を憎む太嚴なるを以て、群ふに中てられ竄逐のうちに死す。世論これを冤とす。忠肅と諡す。かつて呂大防と位を回らす。國家大事は多く大防に決す。たゞ士大夫を進退するは實に攀その柄を執れり。然れども心を持する怨多く、惡を去るに勇なり、竟に朋黨に奇中せられて大防と隙を生ぜしは惜しむべし。

(5) 王巖叟。哲宗の初め侍御史と爲る。數十疏を累ねて蔡確の罪狀を言ふ。上その直言を善みして擢でて樞密院に知とす。職に居ること五年、正諫して隱すなし。屢々、言を帝及び太后に進む。兩宮深く之を納る。

(6) 劉安世。字は器之。大名府元城の人なり。航の子。進士に第して就かず。司馬光に従つて學問し、心を盡し已を行ふの要を問ふ。光これに教ふるに誠を以てす。且つ自ら妄語せざらしむ。始め洛州法司に調せられ、臺諫を歷。事を論ずる

や剛直、一時これを敬懼す。色を正しうして朝に立ち知つて言はざるなく、言つて盡さざるなし。其の曲折延諫するや、雷霆の怒赫然たるに至れば、即ち簡を執り劫立して天威を伺ふ。少しく鬻るれば復た前んで極論す。一時奏對、且つ進み縮疎聽し之を目して殿上の虎といふ。哲宗の末、元祐の黨に坐して英梅等の州に安置せらる。徽宗、即位して内郡に移さる。安世、儀狀魁碩、音吐鐘の如し。忠孝正直、家に居て未だ嘗て惰容あらず。嘗て曰く、吾、元祐全人と爲つて司馬公に地下に見えむと欲するなりと。年七十八にして卒す。忠定と謚し、元城先生と號す。

(7) 前出

(8) 王大寶。海城の人なり。建炎の初、廷試第二なり。登聞鼓院に差監して奉祠す。趙鼎、潮州に謫せらる。大寶、日に従つて學を講ず。後、連州に知たり。張浚また謫居す。子杖に命じて共に學を講ぜしむ。次で改めて袁州に知たり。召して國子司業と爲す。孝宗の時、禮部侍郎諫議大夫に遷る。上書して宰相湯思退が和を主とし國を誤るの罪を彈劾す。兵部侍郎に改む。力めて詞を乞ふ。後、召して禮部尙書と爲す。

(9) 胡宏。名儒安國の末子なり。字は仁仲。衡山の下に優游すること二十年餘、心を神明に玩びて晝夜をすてず。紹興年中、上書數千言、初め蔭を以て承務郎に補せられ、調せず。秦檜死す。宏、召さる。疾を以て辭す。知言並びに皇王大紀八十卷の著あり。世、五峰先生と稱す。

(10) 後に傳を出す。

(11) 呂希哲。字は原明。公著の子なり。少うして孫復、石介、胡瑗等に従つて學ぶ。また二程張載に従つて學び、見聞益々廣く躬行實踐に務む。元祐年中、崇政殿說書となる。人主を勧め、導くに正心誠意を以て本と爲す。徽宗のとき曹相邢

三州を歴知す。人となり樂易にして至行あり。遠近皆な之を師尊す。滎陽公に封ぜらる。

(12) 呂好問。字は堯徒。希哲の子なり。蔭を以て官に補せらる。靖康年中、御史中丞となり、屢々、大議を経て彈劾畏避するところなし。次で吏部侍郎に遷る。金人入寇するに及び委曲以て中興の業を成す。建炎の初、尙書右丞となり、後、資政殿學士を以て宣州に知たり。東萊郡侯に封ぜられ以て終る。

(13) 林之奇。字は少穎。候官の人なり。拙齋と號す。校書郎に補せらる。偶々、朝廷の策士、王安石の三經を參用せんと欲す。之奇曰く、三經は率ね新法たり。晋人、王衍の清譚を以て罪桀紂よりも深しとす。安石實に之に似たりと。其の持論の正直、多く此の類なり。呂祖謙、北面して弟子と稱す。書經全簡の著あり。卒して學に祀る。

(14) 汪應辰。字は聖錫。元の名は洋。玉山と號す。紹興五年の進士第一たり。令名を御賜す。後、秘書監たり。累官して吏部尙書たり。剛方正直、敢言を避けず。朝に在りて弊政を革むること多し。中貴人皆な目を側つ。上皇方に石を斲みて池となし、水銀を以て水となし、金鳧魚を上に乗ぶ。帝これに過ぎる。上皇指示して曰く、水銀正に乏し、此れ之を注尙書が家に買へと。帝怒りて曰く、汪應辰は朕に廊房を建つるを力言す。民と利を争ひ、乃ち自ら水銀を取らんやと。時に發運使史正志に緡錢二百萬を賜ひ、均輸和糴の用となす。應辰三たび上疏して之を論ず。遂に出でて知平江府たり。然も水銀、實は應辰が家に買はざるなり。

(15) 胡憲。淵の子なり。字は原仲。郷貢を以て太學に入り、後、故山に歸隱し、田を力め藥を賣り以て親に奉ず。淵その隱君子の操あるを稱す。晩年召されて秘書正字となる。朱松、その子に屬して曰く、籀溪の胡原仲は吾が友なり。學、淵源あり、汝、往きて之を師とせよと。熹これに師事する頗る久し。世、籀溪先生と稱す。兩漢辨正の著あり。

(16) 周必大。字は子充。初の名は洪道。廬陵の人なり。進士に擧げらる。紹興年中、博學宏詞科に中り、祕書省正字に除せられ、國史院編修官を兼ねぬ。高宗その文を見て之を奇とす。孝宗即位して起居郎權給事中に除せらる。つとめて權倖を排するを以て旨に忤ひ、福建路提刑に改めらる。後、參知政事に除し、少保益國公に進む。卒して文忠と謚し、學に祀せらる。文集ありて世に行はる。嘗て曰く、六十四卦たゞ謙の六爻は皆な吉なりと。また常に、夫子其恕乎の一語を誦す。故に平生、己を處するに謙を以てし、物を待つに恕を以てす。黑髮にして退居すること十五年、自ら平園老叟と號す。室を樂きて名づけて玉和といふ。

(17) 皇朝文鑑。また宋文鑑。百五十卷あり。初めは聖宋文海と名づけ、周必大、旨を奉じて序を作り、呂祖謙、敕を奉じて皇朝文鑑といひ、商輅の序に至りて亦、宋文鑑と改む。此の書は文章の外に賦、律賦、詩、五言古詩以下、神道碑、露布に至る七十七史に分てり。

(18) 十七史。宋の仁宗、英宗の際、史記、漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、南史、北史、隋書、新唐書、新五代史、等十七種の史を刊行せり。これを十七史といふ。呂祖謙に十七史詳節あり。

(19) 東萊博義。二十五卷。左氏傳中の重なる記事百六十八を抜く、その得失を論ぜり。

(20) 呂祖儉。字は子約。祖謙の二弟なり。仕へて太常寺丞に至る。慶元の間、姦惡を論じて旨に忤ひ、韶州に謫せられて卒す。謚を忠と賜ふ。大愚と號す。文集あり。

(21) 呂祖泰。祖謙の三弟なり。性、疏達にして氣誼を尙ぶ。學問該洽、當世知名の士に交はる。兄祖儉の貶せらるや、祖

泰往きて省して曰く、吾兄の貶せられてより諸人、口を拵す。我、無位と雖も義必らず言ひ、以て國に報ぜむと。上書して姦惡を誅し禍亂を防がむと請ふ。語甚だ激越なり。詔して祖泰を連州に拘す。

第三十一章

南宋の世、朱子ひとたび現れて易は一應の大成を見、近代易は朱子を淵源とするものの如くである。されば沈懋學⁽¹⁾は、その周易博義自序に曰く、本義及び啓蒙は天下の學者の宗とするところと言ひ、また潘來⁽²⁾の遂初堂易論下に曰く

明初大全⁽³⁾を編纂するに唯、朱子門弟子の師説を發明する者のみを取りて、其の他を捨てて録せず。舉業を習ふ者これを奉じて章程として循牆して走り、天下の聰明を盡して之を錮し、敢へて一見を出し、一辭を吐かしめずと。

この風、元、明を風靡して人心の歸嚮するところを知るに足るのである。易學史を按ずるに漢易の勃興より以來、幾人かの先哲大儒により、幾度かの變遷を経て遂に宋代朱子に至つた。建安に講を開いてより、その生涯の而して後に吳章⁽⁴⁾及ひ王陽明⁽⁵⁾の出現に至るまでの永い間、學問上の論敵なる陸象山との論争が、決定的に朱子及び其の學派に勝利をもたらせてから、朱子の易學も亦、正統派として決定的な位置を戦ひ取つたのである。青田の高儒との大極圖説に關する論争は、支那形而上學史に特筆さるべき理論論争であるが、斯の如き激しい學問的闘争の背景なくしても、朱子易が存在の理由と其の價値とを滅殺するものではないのである。しかしながら其の爲に却つて、朱子易の在ることを知つて、朱子易への重大な發展的過程を見落したところに、當時の學徒のセク

卜的な缺陷が指適されなければならぬのである。

朱子も亦、その易傳を作るのに、王弼本を底本としたといふ事實は極めて重大視して好いことである。而して更に見通してならないことは呂東萊の古周易書説を以て其の朱子本義、經二卷、傳十卷を作成したといふ事實である。⁽⁶⁾しかしながら易傳、本義ともに二種の底本がある爲に、内容が異なるかといふのに、それは大旨ほぼ同じく、易傳に於て唯、詳細に亘つてゐるに過ぎないのである。朱子易の主張は、その占筮を主としてゐるところに全ての面目があるのである。⁽⁷⁾

朱子。名は熹。字は元晦。一の字は仲晦。晦庵と號す。建炎四年九月、安徽省徽州婺源に生る。徽州は晋の時代の新安であるから、自ら新安の人と號したこともある。父の名は松。字は喬年。章齊と號した。傳へられるところに依れば五歳にして小學に入り、孝經を授けられ、之に題して曰く不若是非人也（かくの如くならざれば人に非るなり）といふ事である。且つ群兒と共に嬉遊する時も、獨り砂を以て八卦の象を列ね、詳に觀て側に玩び、斯の如く異つてゐた。八歳のとき、日を指して吏部に問うて曰く、日何れの所に附くかと。曰く、天に附く。また問ふて曰く、天何の所にか附くと。吏部これを奇としたと傳へられてゐる。十四歳、父を喪ふ。遺言により胡憲、⁽⁸⁾劉勉之、⁽⁹⁾劉子翬⁽¹⁰⁾に就いて學んだ。劉子翬かつて之に告げて曰く、吾、易に於て徳に入るの門を得たり。所謂、不遠復といふもの乃ち吾が三字の符なり。之を勉めよと。而して後、女を以て熹に嫁す。然るに白水、屏山は早く没したので胡籍溪に仕へること久しく、これは賢母の教育方針であつたと言はれてゐる。十八歳にして郷

に貢せられ、十九歳にして紹興の進士に第し、紹興十八年、泉州同安縣の主簿となつたのが彼の二十二歳の時であつた。二十四歳の時、初めて李侗⁽¹¹⁾に見へ其の説を聴いた。それまで徒らに空濶の言をなし、時としては奇を逐ふの癖さへあつたのが、始めて大に覺るところ有り師弟の禮を執つた。朱子の學的影響は李侗に負ふこと深いとされる所以である。⁽¹²⁾

二世孝宗即位し、直言を求む。時に南宋、金兵のために壓迫せられて日に勢成衰へ、滿廷また全軍に恐れて計を献する者がなかつた。朱子これを概して主戰の封書を上る。隆興元年また奏して曰く、大學の道は格物にあり、君父の仇は共に天を戴くべからざるを以てす。而して宰相等⁽¹³⁾和議を主張す、三たび封書を上る。廷臣これを見て、道學者は名を道に假りて以て偽を爲すと上言した。本部侍郎林栗⁽¹⁴⁾は朱子と易及び銘を論戰したのを恨みて曰く、朱熹もと無學無識、徒らに張載程頤の殘唾を舐ぶりて自ら道學と稱し、門生數十人を従へ、古昔、孔孟の周遊に擬するは甚だ怪しむべしと。葉適⁽¹⁵⁾の如きも亦これを罵る。而して和平論者に忌まれて轉運副使となる。隆興八年、入府して武學博士に除せられたが、言容れられず乞ふて歸り、淳熙五年、南康郡の知となる。その崇安にあつて紫陽山下に居るや、請書堂に扁して紫陽書堂といふ。この頃、白鹿洞書院⁽¹⁶⁾を復舊し、學規⁽¹⁶⁾を創立した。而して陸象山を招いて學を講じ、君子礪義小人礪利の章を論じたことは有名である。明年、大旱あり、詔に應じ民間の利病を條具した。次で浙東提舉となり、提點江南刑獄に除せられ、その後、兵部郎官に任ぜられたが疾を以て辭し、直寶文閣に改められ、煥章閣待制となり、嵩山崇福宮に主管となつた。淳熙十五年、朱子五十九歳のとき

六事を論じて上つた。これ所謂、戊申封事である。即ち一に曰く補翼太子、二に曰く選任大臣、三に曰く振舉綱紀、四に曰く變化風俗、五に曰く愛養民力、六に曰く修明軍政と。孝宗大に感じて、太乙宮の主管となし、兼ねて崇政殿說書に任じたが受けず、遂に祕閣修撰に叙せられた。次で三世光宗即位し、出でて潭州の知となる。この時、屬縣無名の賦士百萬を罷め、經總制錢四百萬を減せんことを奏した。而して南京鴻慶宮に主管となる。四世寧宗位に即く。時に趙汝愚⁽¹⁷⁾政を執り首として薦められて召さる。朱子、行在に赴いて時事を上疏し、執政たる韓侂胄⁽¹⁸⁾の專恣を彈じた。而して旨に忤ひ四十六日にして罷めらる。反朱子學派これに乗じ、沈繼相⁽¹⁹⁾、胡紘⁽²⁰⁾、劉德秀⁽²¹⁾の輩、朱子學を以て僞と爲し、遂に神器を窮伺するものとなして、僞學變じて逆黨となした。而して朱子の十罪を誣ひ、落職祠を罷め、朱子の危きことを言語に絶した。然もその一門は僞學と判ぜられ、禁學の厄に遭ふ。その間、朱子は泰然として學を考亭精舍に講ず。自ら滄州病叟と號したのは此の頃のことである。人これを諫む。曰く、禍福自ら命あり、君の言もとより我を愛するに出でたるものなるべし。然れども我が壁立千仞の氣象、豈に斯道の榮光ならずやと。かつて室を建陽に建てて雲谷老人と號し、また其の草堂を晦庵といひ、自ら晦翁といふ。晩年は遜翁と號した。慶元六年三月、病まさに革まんとするや衣冠を整へて逝く。時に年七十有一であつた。その葬式に當り、反對黨上言して曰く、僞學の徒輩、その僞師を葬らんとして四方より集り來り、遂に非道をなさん。宜しく之を監察すべしと。然も合葬する者千餘人といふ。外に強大な金軍の侵略を迎へながら、南宋の政治家と智識階級とは内部的に此のやうな鬭争を演じて、その滅亡を早からしめたのは彼等の民族性の罪

であつたのだらうか。

朱子傳に觸れる以上、彼の最大の論敵であつた陸象山及び其の兄等に及ばずには居られない。陸象山には三人の兄があつた。長兄は陸九思である。字を子強といひ、進士に登第した。幼弟の九淵（象山）が生れた時、撫州金溪（江西省）の人が養子として求めて來た。兩親が子供が多いから同郷の人でもあるので呉れやうとした時に、九思は不可なることを説いた。同年、九思は子の渙を儲けた。九思その妻に曰く、我が子渙は乳母に授け、九淵は汝の乳で育てよといふ。然も九思の妻は欣然として之に従つて九淵を育てた。斯の如くして成長した九淵は、兄夫婦に仕へること父母に事へるに異らなかつたといふ。九淵は後、荆門の知となつて赴任した時に兄九思を任地に迎へた。然し乍ら九思は半歳を経ずして歸郷した。畢竟、九淵の負擔を輕からしめやうとしたのであらう。九淵は書面を以て郡政に關する報告を兄の許に致した。然るに九思は猶ほ功に誇ること勿れと返書に責めたと傳へられてゐる。陸家は斯の如く嚴格な家法を維持した。

次兄九韶。字は子美。梭山に學を講じたので梭山と號した。朱子と時を同うした。自ら梭山老圃と號した。

兄九齡。字は子壽。復齋と號す。幼にして穎悟。許忻(22)たまたま臨川に退居してゐる時に、復齋を一見して悦喜し悉く當代の文献を告げたと云はれてゐる程である。乾道五年の進士で、諸子百家に通じ、陰陽星曆五行卜筮に通達した。文集があつたが遺憾乍ら今日傳はらず、僅に黃氏日抄に其の精語の片鱗を藏すといふ。

九淵。字は子靜。晩年、學を象山に講じたので、人これと呼んで象山先生といふのである。朱子の幼年時代と

等しい傳説が彼の幼年期にも語り傳へられてゐる。即ち生れて三四歳、その父に天地は何の所にか窮際するかと問ふ。父笑ふて答へず、遂に深く思ふて寢食を忘るゝに至ると。支那思想界に於ける偉大なる二人の論敵同志に、殆んど同じ傳説があるのは何故であらう。何れも後人の假托に據るものとすれば、このやうな相等しい説話は、畢竟、二人ともに左様なことが無かつたといふに等しい。もとより吾々は其の様な傳説に信を置くものではないが、彼等が共に聰明であつたといふ事實を説明するために、このやうな傳説が生れたことを否定するものではない。七歳、學に入り、十三歳にして聖學に志す。乾道八年、三十四歳にして進士に登第し、淳熙元年、三十六歳で官に就き、迪功郎隆興府靖安縣の主簿となる。その翌年が朱子との鶯湖の會である。同六年、崇安縣の主簿となり、同八年、白鹿洞書院に講議をした。同九年、國子正に除せられ、同十一年、將作監丞に除せらる。然るに五事を論じて上り、就中、主戰論を唱へて忌まれ、台州崇道觀の主管として貶せられた。斯くて故山に歸り、同十四年、貴溪の應天山中に精舍を建て、山名を改めて象山といひ、隱棲五年餘り、三世光宗即位するに及び、召されて荊門軍に知となり、官に死す。時に年五十四といふ。朱子に與へた書翰によると某舊有血疾二三年寢劇近又轉而成痔云々と。されば九淵は肺を患つてゐたものの如くである。

朱子に對する陸一族の論争の口火を切つた者は、梭山からである。梭山は朱子が周茂叔の太極圖説を支持するところから書を送つて、周子の太極圖説は通書と類せず、是れ其の作に非ずと言つたことから初るのである。次で復齋と象山と、朱子の學説に對立するや、兩者と共に親しい呂東萊は彼等の間に立つて調停を試みた。これを

鷺湖の會といふのである。即ち南宋の二世孝宗の世、淳熙二年、呂東萊は劉子澄(23)と共に立會となり、復齋と象山と朱子とを廣信の鷺湖に會合せしめたのである。會に先立ち復齋、象山に向ひ、呂伯恭、朱元晦に約して此の集會を爲すは正に學術の異同の爲なり。某等兄弟、先づ自ら同ぜずんば鷺湖の間を望むべからずと。因つて相ひ對論せる後、象山の説を是なりとして之に贊同し、而して左の一律を賦す。

孩提知愛知欽 古聖相傳只此心

大抵有基方築室 未聞無址忽成岑

留情傳注翻榛塞 著意精微轉陸沈

珍重友朋相切磋 須知至樂在于今

斯の如くして復齋と象山の兄弟は、相伴ふて鷺湖寺に行つた。呂東萊は復齋に問ふに、別後の新功を以てした。そこで復齋は右の詩を示した。然るに朱子は、僅に其の四句を聞くだけで傍の東萊を顧みて曰く、復齋早や已に象山の船に乗つて仕舞つたと。而して象山は、兄の詩に和して左の詩を示した。

墟墓興哀宗廟欽 斯人千古不磨心

涓滴流到滄溟水 拳石崇成泰華岑

易簡工夫終久大 支離事業意浮沈

欲知自下升高處 眞僞先須辨只今

復齋の詩に於ては朱子學を以て基礎の無きものと言ひ、象山の詩にあつては朱子學は支離の學といふ。共に朱子に對する甚しい諷刺を以てした。就中、象山の詩は露骨極るもので、九歳も年下の象山に此のやうに放言されて朱子は蓋し心平かでなかつたのである。朱子は其の席では應酬せず、三年を経て其の和韻を作つた。

德義風流夙所欽 別離三載更關心

偶扶藜杖出寒谷 又枉藍輿度遠岑

舊學商量加邃密 新知培養轉深沈

卻愁說到無言處 不信人間有古今

折角の呂東萊の配慮も、非妥協的な象山の言動によつて空しくなつた。畢竟、朱陸は相容れざる立場を死守してゐた。然し乍ら東萊の書によると、晩年に及んで復齋は自の學の偏向を知つたかの如くであつた。⁽²⁴⁾淳熙二年、象山三十七歳の客氣に乗じて、四十六歳の先輩朱子に對して禮を缺く態度を以てした。彼等は其の後、太極圖說論で再び三度、論争を繰り返したが、それは飽くまでも學術的論争であり、従つて亦、その態度も學者的良心のもとに爲されてゐる。されば象山が呂東萊の死に會し、彼を祭つた文に曰く、比年以來觀省加細、追惟曩昔龔心浮氣徒致參辰、豈足酬義とあるのは、鷺湖寺の會合に於て青年客氣のまま儒者としての慎重を缺いた點を深く反省したものと見ることが出来るであらう。

前述の如く周子の太極圖說に關し、朱陸の論争の端緒は先づ陸梭山と朱子との間に起り、文書で論戰すること

二回である。而して陸象山また此の論争を繼承し、象山より朱子に書を送ること三回、朱子より象山に書を送ること二回、而して其の問題は後に門下生の間にも展開されたのである。朱子は周子の太極圖説を絶対に支持し之に注釋（太極圖解）を加へた。⁽²⁵⁾ 陸梭山は朱子に對し、太極圖説を以て信するに足らざるものとし、周子の學の眞を見るべきものは通書であり、その通書には太極といふ文字はあるが、無極とは言はないと警告した。梭山が朱子に送つた文書は今日亡失して其の全貌を知るを得ない。⁽²⁶⁾

朱子は、無極と太極と相俟ちて太極の意義を明白ならしめると反駁し、不言無極則太極同于一物而不足爲萬化根本、不言太極則無極淪于空寂而不能爲萬化根本と言つてゐる。梭山が之に對して更に辯駁した第二書も不幸にして傳はらない。しかしながら朱子の梭山への第二の反駁書から見ると、梭山は朱子の不言無極則太極同于一物不足爲萬化根本をとらへ、これは太極を一物と見做してゐるものとして攻撃を加へたらしい。朱子は周先生は根源の原理は何か物質的のものであると言はれることを恐れて、無の原理が根源の原理であると言つてゐるのであつて、根源の原理の他に更に一つの根本的原理があるといふのではないと反駁したらしい。且如太極之説、熹謂周先生之意恐學者錯認太極別爲一物、故著無極二字以明之、此是推原前賢立言之本意、所以不厭重複、蓋有深指、而來諱便謂熹以太極下同一物、是則非惟不盡周先生之妙旨而于熹之淺陋妄説亦未察其情矣云々といふ。⁽²⁷⁾ 象山は、朱子と兄との論争が一應終つたに拘はらず、彼は自の立場から改めて挑戦した。曰く、尊兄向與梭山書云、不言無極則太極同于一物而不足爲萬化根本、不言太極則無極淪于空寂而不能爲萬化根本。夫太極者實有是

理、聖人從而發明之耳。非以空言立論使後人欺弄于頰舌紙筆之間也、其爲萬化根本固自素定、其足不足不能豈以人言不言之故邪。易大傳曰、易有太極、聖人言有、今乃言無也。作大傳時不言無極、太極何嘗同于一物而不足爲萬化根本邪。洪範五皇極列在九疇之中、不言無極、太極亦何嘗同于一物而不足爲萬化根本邪と。このやうに太極の上に無極を置くことの無用を述べてゐる。無極即是無形、太極即是有理、周先生恐學者錯認太極別爲一物、故著無極二字明之。大傳曰、形而上者謂之道。又曰一陰一陽之謂道、一陰一陽已是形而上者、況太極乎。曉文義者舉知之矣、自有大傳至今幾年、未聞有錯認太極別爲一物者設有愚謬至此豈不能以三隅反、何足上頰老先生特地于太極上加無極二字以曉乎と。然も象山の言はんとするところは次の如きである。極字亦不可以形字釋也。蓋極者中也。言無極則是猶言無中也。是奚可哉。と極を以て中となすものの如くである。

朱子これを駁して曰く、來書反復其于無極太極之辯詳矣。然以翫觀之、伏羲作易一畫以下文王演易自乾元以下皆未嘗言太極也。而孔子言之。孔子贊易自太極以下未嘗言無極也。而周子言之。夫先聖後聖豈不同條而共貫哉、若干此有以灼然實見太極之眞體、則知不言者不爲少而言之者不爲多矣、何至若此之紛々哉と。而して象山が極在中と訓ずるを難じ、極とは至極の意であると主張した。即ち、且夫太極傳之太者何也、即兩儀四象八卦之理具于三者之先而蘊于三者之内者也。聖人之意正以其究竟至極無名可名故轉謂之太極、猶曰舉天下之至極無以加此云爾。初不以其中而命之也、至如北極之極極之極皇極之極諸儒雖有解爲中者蓋以此物之極嘗在此物之中、非指極字而訓之以中也云々と。就中、象山が大傳を引いて一陰一陽は道にして形而上なりと言ふに對して、太傳は決して

陰陽その物を以て道とせるに非ず。陰陽は形器に屬す。只、一陰一陽する所以のものが道であると言ひ、觀念論者に對するに科學的を見方を示してゐるのである。⁽²⁸⁾

されば朱子の考へ方は、太極とは道體の至極を指すものとし、道とは太極の流行よりして名づけ、本と一物だといふ。従つて周子の所謂、無極は太極の方所形狀なきものを示したもので、象山の如く直ちに陰陽を以て形而上とするのを排撃するのである。即ち曰く、至于太傳既日形而上者謂之道矣、而又日一陰一陽之謂道、此豈真以陰陽爲形而上者哉、正所以見一陰一陽雖屬形器然其所以一陰一陽者是乃道體之所爲也、故語道體之至極則謂之太極、語太極之流行則謂之道、雖有二名初無兩體、周子所以謂之無極、正以其無方所無形狀、以爲在無物之前而未嘗不立于有物之後、以爲在陰陽之外而未嘗不行乎陰陽之中、以爲通貫全體無所不在、則又初無聲臭影響之可言也、今乃深詆無極之不然、則是直以太極爲有形狀有方所矣、直以陰陽爲形而上者、則又昧于道器之分矣と。

朱子と陸象山との往復文書は非常に長いものである。⁽²⁹⁾ 煩をばぶいて秋月文學博士の摘記を引用する。

(陸曰) 無極の二字を用ふるによりて灼然、太極の眞體を實見すと云ふは此れ未だ太極を實見せざるが故なり。若し之を實見せば太極の上面に無極を著け、下面に眞體を置くの要なし。是れ虚見なるを知るべし。

(朱曰) 太極の本と無極にして眞體あるを知らず。故に極を中と訓じ又陰陽を以て形而上の道とす。反つて是れ虚見なり。

(陸曰) 無を以て有の上に置くは老子の説なり。

(朱曰) 老子の有無と云ふは有無を以て二とす。周子の有無を云ふは有無を以て一とす。本と同じからず。

(陸曰) 此の理は宇宙の固有する所にして無といふべからず。若し無とすれば倫理綱常なし。

(朱曰) 理無しと言はず。

(陸曰) 極も亦此の理なり。中もまた此の理なり。五は九疇の中に居りて皇極といふ。此れ其の中を以て命ぜらるなり。左傳に民受天地之中以生と云ひ、詩に立我烝民莫匪爾極と云へるは、亦、其の中を以て之に命ぜらるなり。中庸に中也天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和天地位焉、萬物育焉とあり。中とは理なり。太極なり。中の外、別に太極といふものなし。

(朱曰) 中といひ極といふは同じく此の理なるも、其の名は各當る所ありて其の用を異にす。此の理の至極を指して極といひ、此の理の不偏を指して中といふ。皇極民極の極は標準の意に取れるにて、其の中を以て之に命ぜるに非ず。

(陸曰) 極を中と訓ずるを理に明ならずとせば、極を形と訓じて理に明なりとするか。

(朱曰) 極を中と訓ずるは老兄の説なり。熹は嘗て極を形と訓ぜず。

(陸曰) 字義は固より一字にして數義あるものあり。字を用ふるに一義に限ることあり。教義を兼ねることあり。極の字の如きは實に數義を兼ね。中の義もあり。至極の義もあり。等しく此の理を指すのみ。中は即ち至理にして自ら至の義を兼ね、大學文言に知至の語あり。所謂、至とは即ち此の理なり。

(朱曰) 知至の二字同じきも、大學にいふ所と文言にいふ所と其の義を異にす。之に混ずるは不可なり。且つ知至の至は太極の極と相似す。

(陸曰) 易の道たる一陰一陽のみ。始終晦明動靜上下進退闔闢盈虛消長等適く所として一陰一陽ならざるなし。説卦にも是以立天之道曰陰與陽とあり。然るに今、陰陽を以て形器にして道に非ずとなす。反つて道器の分に味きにあらずや。

(朱曰) 若し陰陽を以て形而上者とするときは形而下者はそも何者ぞ。熹は凡そ形象あるものを器とし、是の器を寫す所以の理を道とす。來書に所謂始終晦明奇偶の屬は皆な陰陽爲す所の器にして、此の器を爲す所以の理、乃ち道なり。

(陸曰) 通書に中者和也、中節也、天下之達道也、聖人之事也、故聖人立教傳人自易其惡自致其中而已矣とあり。周子も亦、中の字を重んずること此の如し。

(朱曰) 周子、中を云つて和の字にて之を釋す。是れ中庸の所謂、中に非ずして氣質の發用に就きて其の過不及なき所を言へるにて未發本體の中に非ず。

(陸曰) 大傳洪範毛詩周禮と太極圖説と孰れか古き。然るに圖説に従ひ、極を以て形となし、中となすを得ずといひ、一陰一陽は器にして道となすを得ずといふ。是れ古書を黜けて自己の胸臆の判斷に任ずるにならざるか。

(朱曰) 大傳洪範詩禮は皆な極といへるのみにて、嘗て極を謂て中となさず。先儒あるひは此の極處が物の中に在るより、中を以て之を釋せり。是れ甚しき失當には非るも、さればとて後人が直に極を以て中と訓ずるは先儒の本意を知らずといふべし。

(陸曰) 來書に周子は人の敢て説かざる底の道理を説きて無極といひ、太極の方所形状なきを知らしむるといふも、聖門に在りては無極の二字を此の如く太極の上に加へ言ふを肯んぜず。

(朱曰) 無極而太極とは猶ほ莫大之爲而爲。莫之致而至といふが如く、別に一物ありといふに非ず。其の意もとより皇極民極の極の如く、方所形状あらず。但、此の理の至極ありといふが如し。此の如くならば決して無極而太極といふべからざる理なし。上天之載云々は有中に無を説き、無極而太極は無中に有を説けるもの、有無をいふに先後の善あるのみにて同一義なり。

(1) 後に傳を出す。

(2) 後に傳を出す。

(3) 後に解を附す。

(4) 後に傳を出す。

(5) 後に傳を出す。

(6) 本義開卷

直齋書錄解題

(7) 清の顧炎武の日知錄卷一、汝成の註によれば、御纂周易折中は朱子本の舊形なりとあり。

(8) 前出

(9) 劉勉之。字は致中。崇安の人なり。謙定に師事し心を伊洛の旨に究む。力耕自給す。紹興の間、召されて至る。秦檜と合はず即ち疾を以て歸る。學者これを稱して白水先生と爲す。朱松卒す。囑するに後事を以てす。且つ子焘をして業を受け之を勉めしむ。焘を教ふること子の如し。女を以て之に妻す。

(10) 劉子輦。字は彥冲。父の死を傷みて墓に廬すること三年。服除きて通判興化軍に除せらる。吏事に堪へざるを以て辭して武英山に歸る。妻死して再び娶らず。母兄に事ふる孝友を盡くす。講學倦まず學者多く之に従ふ。屏山に家居す。閩林水石の勝あり、屏山先生と稱せらる。晩年歌詠自適す。兄弟の間、怡々如たり。家に二齋あり。東を復齋といひ、西を蒙齋といふ。各記あり。

(11) 李侗。字は愿中。劍浦の人なり。羅縱彦に就きて學ぶ。芽を山田に結び、世を謝すること四十年餘、飲食あるひは充たず、而も怡然自得たり。沙縣の鄧勉かつて曰く、冰壺秋月澄澈無瑕と評す。亦かつて曰く、學問之道不在多言、但嘿坐澄心體認天理と。世これを延平先生と稱せり。朱子これに従學す。侗、焘の才學を賞し、羅博文に與へし文中に曰く、元晦進學甚力、樂善畏義、我黨鮮有云々と。卒して文靖と諡す。二子あり。友直と信甫と皆な進士に第す。

(12) 李侗は羅縱彦の弟子なり。縱彦は二程子の門人楊龜山の學統を繼ぐ。而して伊川の學系は龜山より羅豫章、李侗を経て朱子に至りて大成す。

(13) 林栗。字は黃中。福清の人なり。紹興の進士にして累官して兵部侍郎となる。時に朱子、江西提刑より召されて兵部郎官となり、既に國門に入れども未だ職に就かず。栗相ひ見て易と西銘を論ずるに合はず。遂に朱子を失脚せしめんとす。時に太常博士葉適も亦、封事を上りて之を論ず。是に於て侍御史胡普臣、栗を劾す。出でて泉州の知たり。卒して簡齋と謚す。周易經傳集解の著あり。

(14) 葉適。字は正則。永嘉の人なり。司業に官たり。かつて陳傅良を薦む。時人その人を得たるを稱せり。韓侂胄に忤ひ、坐して杜門に貶せらる。著述自ら一家を成す。學者これを仰ぐこと山の如しと。水心先生と號す。

(15) 白鹿洞書院は江西省南康府五老峰下にあり。唐初の賢人李渤の舊棲の所にして、此所に白鹿を養ひし故事によりて此の名稱あり。朱子、孝宗の淳熙五年、南康軍に知となり、翌六年十月これを復舊す。

(16) 朱子實記に曰く、約聖賢教人爲學之大端、條例以示學者、爲說以勉之。而去學規不用、規模廣大、工夫切密、足爲萬世學者定式云々と。これ白鹿洞書院掲示なり。(學規略す)

(17) 趙汝愚。字は子直。餘干の人なり。樞密に累遷す。孝宗崩じて光宗病み、中外洶々たり。汝愚ふるつて身を省みず頃刻にして大計を定む。賢士を招きて寧宗を輔佐す。遂に韓侂胄の爲に讒構せられ、永州に謫せられて卒す。沂國公に追封せられ、忠定と謚す。

(18) 韓侂胄。字は節夫。琦の曾孫。光宗のとき知開門事たり。寧宗即位す。侂胄、定策の功をたのみて甚だ專横なり。善類を貶逐するもの紀するに勝ふべからず。黨人の姓名を籍記し、目して僞學と云ひ朱子を以て首魁と爲す。既にして陳自強、相となる。侂胄、太師平原郡王を以て軍國のことを章事し、安りに兵を弄びて事を邊境に構ふ。開禧三年、北伐の諸

軍皆な潰敗し、金兵しきりに蜀漢荆襄兩淮諸郡を陥る。此に於て皇后楊氏、侍郎史彌遠と謀りて、遂に侂胄を殺し、嘉定元年、その首を函にして以て金國に謝し、和議また成れり。

(19) 沈繼相。韓侂胄に用ひられて其の鷹犬と爲る。

(20) 胡紘。韓侂胄に用ひられて其の鷹犬たり。

(21) 劉德秀。退軒と別人なり。韓侂胄に用ひられて其の鷹犬となる。

(22) 許忻。字は子禮。襄邑の人なり。宣和の進士にして高宗の時、吏部員外郎と爲る。主戦を唱へて極論す。荆湖南路轉運判官を授けられ、撫州に謫居す。

(23) 未考

(24) 東萊集卷四

子壽前日經過留此二十餘日、潘然以爲湖前見爲非甚、欲著實言書講論、心平氣下相識中甚難得也。

(25) (秋月文學博士に據る) 漢上先生朱震の言に、濂溪得太極國干穆伯長、伯長之傳出於陳希夷とあり。此の言必ず據る所あるべし。希夷は老子の學を爲せるものにて、無極の二字は老子知其雄章に出で、吾儒に無き所なり。老子の首章に無名天地之始、有名萬物之母とあり。此れ老子の宗旨にして圖說の無極而太極とは亦此の旨なり。また通書には中焉止矣といへるのみにて無極に言及せず。周子の學を傳へたりといはるる二程子の言論多きも未だ嘗て無極に及ばず。圖說の信憑するに足らざる知るべし。

(26) 象山より朱子に送りし書に、梭山の主張の片鱗を見るを得べし。曰く、梭山兄謂。太極圖說與通書不類、疑非周子所

爲、不然則或是其學未成時所作、不然則或是傳他人之文、後人不辨也。蓋通書理性命章言中焉止矣、二氣五行化生萬物、五殊二實、二本則一、日一、日中、卽太極也。未嘗干其上加無極字、動靜章言五行陰陽太極、亦無無極之文、假令太極圖說是其所傳、或其少時所作、則作通書時不言無極、蓋已知其說之非矣。(象山集卷二)

(27) 詳細は宋元學案卷十二、濂溪學案、太極圖說、附朱陸太極圖說辯を見よ。

(28) 朱子語類卷四十九に論及する如く、陰陽による生物の最初の産出のみが自然發生的なることを主張せる第一人者にして、これは最も注目すべき點なり。

(29) 朱子文集卷三十六及び象山全集卷一

第三十二章

今日、自然科學として把握せられる太極説は、畢竟、古代支那に於ける天文學の分野に屬し、明らかに星雲説として首肯することが出来るであらう。周濂溪の太極説が太陽系の創造に觸れてゐる點は、宋代に於ては遺憾乍ら見落されてゐたのである。而して其れ故に却つて煩瑣な哲學上の論争の主題として取り扱はれたのである。既に述べた如く支那の天文家の荒誕な學説の中で、最後まで支持を得たのは蓋天説と渾天説であるが、而も宋の時代、ラプラーズやカントに見られる如き星雲説が周子によつて提出されたといふ事實は、極めて驚嘆すべきオリヂナルな思想であつた。

吾々が朱子の言説を科學的と謂ふ所以のものは、程伊川の二元論を繼承して、彼自身の體系を築き上げたといふ事ばかりでなく、實に周濂溪の太極説を支持する其の主張に在るのである。朱子學が吾が鎌倉の北條時代の末期に傳來し、降つて徳川時代の官學たる地位を占めたに拘はらず、その觀念論的な一面だけが採り上げられ、彼の科學的な他の面が全く閑却されて、今日に至るまで朱子學と言へば一種の固陋なアカデミーとしてしか理解されないのは誠に遺憾なことと言はなければならない。アルフレッド・フォルケ(I)は賢明にも朱子の其の點に觸れて言つてゐる。

朱子によると氣は原理としての理に支配されてゐる瓦斯狀乃至は氣態の實體である。世界創造以前の原始狀態

に於て「大なる統一」即ち太一 (Tai Yi) の時代に於て、既に二つの原理は存在して居るのである。氣が二つの原體、即ち陰と陽に分裂してから後でも、理は常に陰陽に附着して居るのである。「理は騎手が其の馬に乗つてゐるやうに、陰陽の上に憑つて居る」(ラ・ガルの朱熹、その學說と影響。一〇七頁。(S. Le Gall, Tchou Hi, sadoctrine, son influence, S. 107)

氣と理とが合一して始めて知覺する能力が生じ、また意識が生ずる。両者が分離した状態に於ては氣も理も此の能力をもたないのである。「氣は凝聚して形を造成する。理が氣に合一すると知覺が可能になることは、恰も脂肪に火が點ぜられたとき赫々たる炎を發するやうなものである。知覺されたものは心の理性であり、知覺するものは氣の精巧なものである」

理は純粹な超越的な有であつて、全く道家の道に似てゐる。「理性は肉體的の痕跡のない純粹と空と、而して無限の擴りの世界である」

理、即ち理性は根源の原理、即ち太極 (Tai-tou) とも稱することが出来る。之は原始状態に於ける理と解することが出来る。太極とは極限、最早や巨物をも附加することが出来ない最も始めのものである。

朱子は理性を定義するのに、道家に於て道に關して述べられたと殆ど同一の語を用ひて居る。即ち理は限界なく形態のない、知覺の出来ないもので、根源の原理としては、時空に於て無限なる一つの大きなものであるべく、天地に先立つて既に存し、永久に持續するのである。理とは不可能なもの、不可思議なもので、それは何時

も支配の位置に立ち、そして完全な純粹さと完全な價值とを有する。

理性には感覺もなく意識もなく、そして道と同様に活動をしないのである。「氣は凝結して物を生ずることが出来る。理性は何等の感情・意志・目論見をも有せず、そして何物をも生じないが、氣が凝聚するときは、理性はその眞只中に在るのである」

理はあらゆる生命、あらゆる徳の源泉であつて、潜在的には凡ゆる激情をも含有して居るが、自らはそれに支配されるやうなことはない。それは自らは運動または静止することなく、然も運動と静止とを起し、そして之に氣を移すのである。それは運動によつて陽を生じ、静止によつて陰を生じたのであつて、今も尙世界を動かして居る所のものである。「初に唯一の本體が存したのではなく、唯、この理性のみがあつた。この理性があつて運動を起すことが出来たのである。理は陽を生じた。そこで再び静止に戻つて陰を生じた云々。天地があつてから以來、この本體は存して旋廻運動を起してゐるのである。日、月、年は夫々の毎日の、毎月の、毎年の運動をして居る。日、月、年を廻轉せしめるものは此の本體に過ぎないものである」

朱子は自ら把握した自然哲學を次のやうに述べてゐる。即ち曰く、天地初間、只是陰陽之氣、這一箇氣運行、磨來磨去、磨得急了、便拶許多渣滓、裏面無處出、便結成箇地在中央、氣之清者、便爲天、爲日月、爲星辰、只在非常周還運轉、地便在中央不動、不是在下と。⁽²⁾

この一節など星雲説の宇宙創成の遊星出現を説明するものでないと、何人も否定し得ないであらう。されば朱

子の思想的背景として、吾々は必然的にも無神論傾向を見出さずには居られないのである。それ故にフォルケも亦言ふのである。即ち

朱子は人格的の神の假定は之を斷乎として斥けて居る、それは彼が永遠の理性、即ち第二の原理として實體、即ち氣が附加する非人格的な最高の世界原理のみを認めてゐるからである。朱子は古典の中にある唯一神論的な色彩を帯びた個所は、之を切り離して解釋しやうとして居る。此の意見は正統派と見做されて居る。彼の作つた古典の註釋の中にも含まれて居るから、彼は其の註によつて、支那民族の魂に深刻な影響を及ぼしたのである。朱子は孔子が既に半ば無意識的に反抗した古代の神の信仰を解消し、その代りに自己の合理的な哲學を以て置換へたのである。「蒼穹を名づけて天といふ。天は圓周を描いて廻轉し休む時がない。あの天に人間の罪や悪行を裁く何者かゞ居るといふのは當つて居ない。之に反して一般に規則などいふものは無いといふのも亦誤りである。人々は之を明確に知らねばならぬ」と。上帝並びに天の活動に就て述べてある二三の古典中の文の意味に就て或る弟子が朱子に問ふた。「之に據れば彼方の蒼穹には左様な行動をとる支配者が實際に存するのであるか。乃至は惟だ理性が左様に活動するに過ぎないと結論しなければならぬか」と。朱子は之に對して「この三箇所とも同一の意味である。即ち此等の何の場合に於ても左様に活動するのは惟だ、理性のみである」と答へて居る。

惟ふに朱子の此の考へ方は、人間精神は道と同一であつて、亦その限りに於て運命の起點でもあるといふ思惟に流れ寄る。されば其の易觀に於て、占筮に重點を置いたのは當然であつたであらう。

既述の如く繫辭傳に記された占筮法の大衍の數に關しては、聊か諸儒の各説を擧げたが、程子は天地の數の節が、大衍の數の節の後に依り、天一の節（天一より地十に終る二十字を指す）を天地の數の節の上に加へたのである。而して呂東萊また此の説を取り、郭雍(3)また此の説に従つた。しかしながら朱子は、天地の數の節を大衍の數の節の前に移し、天一の節を更にその前に加へた。(4)朱子は夫を以て獨自の見解に出るものと爲したのであつた。

右の繫辭上傳の卜筮を朱子は數學的に證明した。(5)上野清氏は之を解説して曰く

朱子の易學啓蒙には此の一章を最も適切に且つ精細に證明せり。朱子は不定方程式の原理を應用したり。然れども當時は支那には代數學方程式なき時代なるを以て、朱子は非常に苦心して陰陽の數を黑白の二點にて示したり。朱子が記號を用ひず數理に據つて千古不磨の經典中に乾坤の策數と易經二篇の策數とを明記ありし數を算出せしは、實に支那易學者中の第一人者として尊敬するに足るべし。支那易學者も日本の易學者も此の點に就きても朱子の前に低頭平身して敬意を表せざるべからず。（證明を略す）

とにかく朱子は邵子の重卦排列法によつて易學啓蒙を著したのであるが、當時、方程式を完全に理解して驅使した人は朱子唯一人であつたといふ事が出来るのである。

彖傳に、剛柔の上下往來を以て卦名卦辭を釋したものが少くないことは、既に留意せられた點であらう。卦變の説とは之であつて、上下往來の法則を規定しやうとしたのに他ならない。

これは既に苟爽あるひは虞翻に始まり、昔は此を之卦と呼んだのである、蓋し古變から來た名である。故に錢大晰は曰く、之卦は即ち變卦なり。兩爻を以て交易して一卦を得ると、また惠棟は曰く、周易は變ずるを以て占を爲す。故に彖傳獨り卦變を言ふと。

朱子は之を説明して曰く

卦に兩様の生あり。兩儀四象の加倍より生じ來るものあり。卦中、互に換り、自ら一卦を生ずるものあり。互に換りて卦を成す兩爻を換ふるに過ぎずと。

而して又曰く

太極兩儀四象八卦は、伏羲畫卦の法なり。説卦の天地定位より坤以藏以前に至る迄は伏羲畫する所の八卦の位なり。帝出乎震以下は文王伏羲已成の卦に即きて其の義類を推せる詞なり。卦變圖の剛來り柔進む類の如きも、亦、卦己に成る後に就て、意を用ひて推説し、此を以て彼の卦よりして來ると爲すのみ。眞に先づ彼卦ありて而して後此の卦あるに非るなり。古註に、賁卦は泰封よりして來ると説く。先儒これを非として以爲へらく乾坤合して泰となる。豈泰復變じて賁と爲る理あらんや。殊に知らず若し伏羲の畫卦を論ぜば六十四卦一時俱に了す。乾坤と雖も亦能く諸卦を生ずる理なきを。若し文王孔子の説の如くんば、縱横曲直、反覆相生、可ならざる所なし。要するに看得して活終し、拘泥する所なきに在り、即ち通ぜざるなきのみ。

古卦變に就て蕉循曰く

荀爽謂へらく、屯はは本坎卦、初六二に升り、九初に降る。蒙は本艮卦、二進んで三に居り、三降つて二に居ると、則ち六子に本づくなり。謙來つて坤に之くと、即ち乾上坤三に之くといふ。解は動いて坤に之くとは乾坤交通し動いて解を成すをいふ。即ち乾坤に本づくなり。訟は陽來りて二に居ると、則ち遯に本づく。旅は陰升りて五に居ると、則ち否に本づく。晋は陰進んで五に居ると、則ち觀に本づく。損は乾三に之きて上に居ると、則ち泰に本づく。是また十二辟に本づくなり。乃ち萃には云ふ、此本否卦、上九の陽爻滅せられて遷移すと、是則ち易林の法を用ふるなり。所謂、否萃に之くなり。隨は震の歸魂たり。蠱は巽なり、解は震の世なりと。是また京房の説を用ひたるなり。⁽¹⁰⁾

荀爽の書は今日完本無く、虞仲翔また自ら其の彊ふべからざるを知るものか、その書多く其の辭を晦まして、遂に秘奥とするに足らないもの如くである。されば蕉循は重ねて曰く

其の豐に於ては云ふ、此の卦三陰三陽の例、常に泰の二四に之くに從ふべきも、豐の三噬嗑の上より來て三に之き、坎獄中に折れて豐を成すと。旅に於ては云ふ、賁の初四に之き、否の三五に之く、乾坤の往來に非るなり。噬嗑豐に之くと義を同うすと、説者また此を以て兩象易の例と爲す。然れば則ち卦の來るや、乾坤よりするもの一なり。六子よりするもの二なり。十辟よりするもの三なり。上下相加へて損益するもの四なり。上下剛柔相變する、小畜、履の如きもの五なり。兩象易六なり。兩爻これを齊うする、遯先づ訟を生じ、次に中孚を生ずるが如き七なり。諸卦各自つと來る所ありと謂はんか。每卦自て來る所を兼有すと謂はんか。

これを要するに古卦變の缺點は、終始、脈絡の無いこと是であつて、その頭初に於て錯亂を來してゐる爲に遂に支離滅裂して適從する所を知らないのである。

(1) アルフレッド・フォルケ。Forke Alfred 一八六七年に生る。獨逸の外交官にして支那學者なり。一八九〇年、通譯見習生として北京に赴任し。後、廈門、上海、天津の領事たり。一九〇一年、通譯官となり、次で上海總領事、北京東洋協會、上海王立アジア協會の書記たり。一九一四年より一八年、米國加州のバークリ大學教授となり、一九二三年にはハンプルグ大學教授となる。

(2) 宋元學案四十八。晦翁學案

(3) 郭雍。字は子和。その父の學を傳へ、陝州に隱居す。乾道年中、旌召すれども立たず。號を冲晦處士と賜ふ。孝宗その賢を稔知す。更に頤正先生に封ず。部使者をして官を遣り就て問はしむ。時に年八十三なり。雍、易に於て發明精到す。淳熙の初め、學者、忠孝を哀集す。雍が所著を七大家に列し、大易粹言と題せり。

(4) 本義上繫九章

(5) ト筮法の數理的研究を最初に試みし人は遠藤利貞氏にして、明治二十九年、東京數學物理學會記事第一集第八卷第一號に發表せる「易の策數及び筮法を論ず」これ也。現に九州大學工學部教授、伊藤德之助氏に數種の研究あり。

(6) 後に傳を出す。

(7) 後に傳を出す。

(8) 諸說區々として、或は乾坤二卦を母卦とし、或は兼ねて六子説を宗とし、或は辟卦を主とす。荀虞の如きは易林世應

の法を探れり。

卦變の説、新古あり。古卦變は荀爽等の説にして、新卦變は宋代以後の説とす。

世應の説、京房の八宮卦次による。即ち八卦を八宮と爲し、他の五十六卦これに分屬し、各世變を以て卦次を定む。世とは八卦を母卦とする卦變の世次にして、母卦は上爻を以て世爻と爲し、子卦は變爻を以て世爻と爲す。世爻に應爻あり。これを併稱して世應といふなり。

易林は焦延壽の著、即ち焦氏易林をいふ。

(9) 蕉循。字は里堂。江蘇甘泉の人なり。博覽強記、識力精卓、學に於て通ぜざるところなく、經に於て治めざるところなし。而して周易、孟子に於ては専ら勅して書を成す。循、壯年にして即ち名、海内に重く、錢辛楣、王西莊、程易田の諸輩、皆之を推敬す。英嶼齋家宰、其の易學に序し、以て千古未發の蘊を發くと爲す。卒する年五十有八なり。

(10) 易林の法、譬へば乾卦を以て云へば、一爻變は姤、同人、履、小畜、大有、夬なり。二爻變は遯、中孚、大壯、訟、家人、賤、需、大過、離、革、鼎、巽、大畜、无妄、兌なり。三爻變は否、泰、未濟、既濟、咸、隨、節、損、益、漸、恒、豐、歸妹、噬嗑、蠱、井、渙、困、賁、旅なり。四爻變は觀、臨、頤、明夷、艮、小過、蹇なり。五爻變は剝、復、比、豫、師、謙なり。六爻變は坤と乾と合せて六十四卦。焦氏每卦この法に従つて變じ、六十四卦を乗じて四千九十六卦と爲し、一々これに繇辭を繋く。

第三十三章

此所に於てか宋代、理論的發展の時代に入つて、新卦變の理論が生れた。卦變説に最初の革命をもたらせたのは李挺⁽¹⁾である。その六十四卦相生圖は、その意味に於て劃期的な試みであり、それ故に逸早く朱震が其を取り上げた。朱震の漢上易傳六十四卦相生圖は次の如きものである。

乾坤者諸卦之祖

乾一交而爲姤、坤一交而爲復

凡卦五陰一陽者、皆自復卦而來、復一交五變而成五卦。

師、謙、豫、比、剝。

凡卦五陽一陰者、皆自姤卦而來、姤一交五變而成五卦。

同人、履、小畜、大有、夬。

乾再交而爲遯、坤再交而爲臨

凡卦四陰二陽者皆自臨卦而來、臨五復五變而成十四卦。

明夷、震、屯、頤、升、解、坎、蒙、小過、萃、觀、蹇、晉、艮。

朱震は第三復以後は二交全部を移す。而も第四、第五の三卦を兩復に分つ理由を明白にしないのである。故に

之を非難する毛奇齡は曰く

總て二爻を移す時は其の位を離る。何を以て臨より來るを見んや。また第四、第五また皆な不倫なり。知らず三卦、何を以て分ちて兩復と作す。且つ並に臨卦の根柢無きは何ぞやと。

之を要するに朱震の説は少くとも論理的ではないのである。言葉を代へて云へば、朱震は遂に數學的ではなかつたのである。従つて錯亂が有るのである。朱震は曾つて、朱子が陸氏兄弟と論戦した時に、朱子が周子の太極圖説を支持するの輕忽を警めたのであるが、朱子は朱震の卦變説を學者的に批判して居るのである。吾々が朱子の態度を是とするのは、學徒に共通する偏狹さから、朱震を批判して居らない點が了解されるからである。何故なら公平に見て朱子の批判は正しいし、亦その卦變説は更に確實だからである。其の文公易説に曰く

朱漢上の易卦變は只變じて三文に到りて止む。卦辭に於て多く通ぜざるところ有り。某更に推量し方に通ず。无妄の剛外より來りて内に主たるが如き、只是れ初剛訟のより移下し來る。晋の柔進んで上行するは、只是れ五柔、觀の四より挨上し去る。此等の類、漢上の卦變を案すれば通じ得ず云々と。

上野清氏は次の如く證明して居る。

朱子の著、啓蒙の卷末に於て、代數學の組合法を用ひて六十四卦の八卦より他の卦に變化する卦變の順序を示し、以て各八卦より六十四卦を生ずるの理を記載せり。即ち次に示す所のものなり。先づ乾の八卦より、卦變に由りて六十四卦を生ずる順序を示さんとす。之を求むるが爲に組合の公式



を用ふ。

乾 先づ乾を置き一爻變より六爻變までを順次に作ることに次の如し。

姤、同人、履、小畜、大有、夬。

此の六卦は皆、乾の一爻變の卦なり。姤より初爻變じ、次第に上りて夬に至る。其の六卦なる數は前記の組合公式に由りて得ること次の如し。

五陽一陰 $\frac{5}{1} = 6$ 即ち一爻變は六卦

遯、訟、巽、鼎、大過。

二爻變は初爻と第二爻の變を以て遯より始まり、而して初爻は動かざるものとす。

无妄、家人、離、革。

次に第三爻の變を以て无妄より始む。而して第二爻は動かざるものとす。

中孚、睽、兌。

次に第三爻と第四爻の變を以て中孚より始む。而して第三爻は動かざるものとす。

大畜、需。

次に第四爻と第五爻の變を以て大畜より始む、而して第四爻は動かざるものとす。

大壯。

第五爻、第六爻の變は大壯ただ一つなり。

四陽二陰

$$\begin{array}{c} 6 \\ \hline 2 \\ \hline 4 \end{array} = 15 \quad \text{即ち二爻變は十五卦}$$

否、漸、旅、咸。

三爻變は初爻、第二爻、第三爻の變を以て否より始む、而して第一爻、第二爻は動かざるものとす。

渙、未濟、困。

次に初爻、第三爻、第四爻變を以て渙より始む、而して初爻、第三爻を不動とす。

蠱、井、恒。

次に初爻、第四爻、第五爻變を以て蠱より始む、而して初爻、第四爻を不動とす。

益、噬嗑、隨。

次に第二爻、第三爻、第四爻變を以て益より始む、而して第二爻、第三爻を不動とす。

賁、既濟。

次に第二爻、第四爻、第五爻變を以て賁より始む、而して第二爻、第四爻を不動とす。

豐。

次に第二爻、第四爻、上交變を以て豊より始む。而して第二爻、第四爻を不動とすれば、上交は窮りて升る能はず。

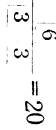
損、節。

次に第三爻、第四爻、第五爻變を以て損より始む。而して第三爻、第四爻を不動とす。

歸妹、泰。

終りに第三爻、第五爻、上交變は歸妹一つ。第四爻、第五爻、上交變は泰一つなり。

三陽三陰



即ち三爻變は二十卦

觀、晋、萃。

四爻變は初爻、第二爻、第三爻、第四爻の變を以て觀より始む。而して初爻、第三爻、第四爻を以て不動とす。

解、升。

次に初爻、第三爻、第五爻、上交變及び初爻、第四爻、第五爻、上交變は各一つなり。

頤、屯。

次に第二爻、第三爻、第四爻、第五爻變を以て頤より始む。而して第二爻、第三爻、第四爻を不動とす。

震、明夷、臨。

次に第二爻、第三爻、第五爻、上交の變は震一つ。第二爻、第五爻、上交の變は明夷一つ。第三爻、第四爻、

第五爻、上爻の變は臨一つなり。

二陽四陰 $\begin{array}{c} 6 \\ 4 \quad 2 \\ \hline \end{array} = 15$ 即ち四爻變は十五卦

剝、比。

五爻變は初爻、第二爻、第三爻、第四爻、第五爻の變を以て剝より始む。而して初爻、第二爻、第三爻、第四爻を不動とす。

豫、謙、師、復。

次に初爻、第二爻、第三爻、第四爻、第五爻の變は豫一つ。初爻、第二爻、第四爻、第五爻、上爻の變は師一つ。第二爻、第三爻、第四爻、第五爻、上爻の變は謙一つ。初爻、第三爻、第四爻、第五爻、上爻の變は復一つなり。

一陽五陰 $\begin{array}{c} 6 \\ 5 \quad 1 \\ \hline \end{array} = 6$ 即ち五爻變は六卦

坤。

六爻變は坤一つなり。

之に由りて乾一卦より本卦と其の變化する卦數との合計は

$$1 + 6 + 15 + 20 + 15 + 9 + 1 = 64 \quad \text{即ち六十四卦を得。}$$

之を公式そのままに用ふれば

$$\frac{0}{6} + \frac{1}{6} + \frac{2}{6} + \frac{3}{6} + \frac{4}{6} + \frac{5}{6} + \frac{6}{6} = (1+1)^6 = 2^6 = 64$$

斯の如く他の一卦よりも同様の方法にて六十三卦を變出すべきが故に、本卦と共に各六十四卦を得べし。故に此の方法を各卦に用ふれば(64)即ち四千九十六變得べしと。

朱子の易學に關する重なる著述は、太極圖解、周易本義、易學啓蒙、著卦攷誤等である。黎靖徳の編輯した朱子語類百四十卷は、彼の學問の凡ゆる層に亘つて、朱子が其の門人と問答したものを集録したもので、其の五十門の目には勿論、易に就いても語られてゐるので必讀の書と言はなければならない。

朱子門は其の多士濟々を誇ることが出来る。その門の四子として知られた蔡元定⁽⁴⁾、黃幹⁽⁵⁾、陳淳⁽⁶⁾、輔廣⁽⁷⁾など枚舉に違がないが、易學啓蒙發揮二卷を著した何基も亦、その流風を汲んだものと云ふことが出来る。何基。字は子恭。北山と號した。金華の人である。幼少より端重に言笑寡く、已に學者の風があつたと傳へられて居る。朱子門の高足黃幹を師として伊洛の源奥を探り、長じて隱居して、人の知るを求めなかつた。淳祐の間、崇政殿說書を以て召されたが、遂に起たず。承務郎を授けて西嶽廟を主管せしめられた。

先に讀易老人李光現れて、史觀を易に托した。南宋の悲運に際會して、志あるの士は擧つて國難に赴くか、さうでない場合は亡びゆく宋の世の文化に殉じたと言ひ得やう。誠齋楊萬里また胸臆の鬱塊をこれ亦、易に托して易傳二十卷を残した。四庫全書總目提要は記して曰く

此の書、大旨、程氏を本として、多く史傳を引きて以て之を證す。初め易外傳と名付け、後、乃ち今の名に改定す。宋代書肆會つて程傳と並刊して以て行ひ、之を程楊易傳と謂ふ。新安の陳櫟(8)、極めて之を非る。以爲へらく、以て文士の觀瞻を聳かして、以て窮經の士の心を服するに足らずと。吳澄、跋を作る。亦、微詞あり。然れども聖人、易を作る、本、吉凶悔吝を以て人事の從る所を示す。箕子の貞、鬼方の伐、帝乙の歸妹、周公あきらかに其の人を著すときは、三百八十四爻を以て例擧すべし。人事を舍いて天道を談ず、正に後儒說易の病なり。未だ以て史を引き經を證するを以て萬里を病ましむべからざるなりと。

楊萬里は字を廷秀。吉水の人である。始め進士に擧げられ、零陵丞に調せらる。時に英雄張浚、謫居す。萬里これを寓せしむ。また平生、つとめて正心誠意の學を講じ、遂に誠を以て齋に名付け、人これを呼んで誠齋先生といふ。奉新を改知す。二世孝宗のとき召されて國子監博士となり、後、寶謨閣待制を以て致仕し、寶謨閣學士に進んだ。萬里は三朝に際遇し、然も終始一節、忠君愛國の心、峻然として日月と光を争ふと言はれた程の人物である。如何にも宋代末期の國士の風格を具へてゐた。されば孝完これを稱して曰く、仁者の勇ある者と爲す。また曰く、書生兵を知るは唯、萬里一人のみと。しかしながら四世寧宗の開淳の間、佞相韓侂胄、政を執り、北伐聲を啓くを聞き、謂へらく、必らず國を誤らんと。即ち憂憤して絶食し、自ら十四言を書し、草稿を擲ち、几に隠つて歿す。時に年八十であつた。萬里の名が知られてゐるのは、彼が有數な詩人であつたからである。寧ろ吾國には憂國の詩人としての名聲の方が響いてゐるのである。宋末文苑の俊豪たる陸游(9)、范成大(10)と共に並び稱せら

れ、その詩體を號して世人は誠齋體と云ふのである。易學史に於ける一異彩たるを失はないのである。

その釋例を示すならば、澤地萃の六二を取る。引吉。无咎。孚乃利用禴。⁽¹¹⁾象曰、引吉、无咎、中未變也。

引けば吉なり。咎無し。孚あれば乃ち禴を用ふるに利らし。象に曰く、引けば吉なり、咎無しとは、中未だ變ぜざればなり。曰く、君臣の聚會は相ひ求むるに始まり、相ひ信ずるに終る。臣固より君を求むるなり。然れども君の臣を求むる、臣の君を求むるより甚し。湯の伊尹⁽¹²⁾に於ける、先主の孔明⁽¹⁴⁾に於けるを觀ば見えん。然らば何の道か以て之を求むる。星辰は能く自ら高うするに非るなり。引いて之を高うするものは天なり。賢臣は能く自ら進むに非るなり。引いて之を進むる者は君なり。六二の進むは九五の之を引くに非ずして誰ぞや。故に曰く、引吉无咎と。此れ初に相ひ求むる道なり。相得相信する後に及んでは、骨肉の如く一體の如し。豈復外餘を事とせんや。故に馮唐⁽¹⁵⁾の文帝に對する、張玄素⁽¹⁶⁾の太宗に對する、初は以て廷辱すと爲せるも、卒に其の説を盡せり。馬援⁽¹⁷⁾の光武に謂ふ邊幅を脱略し、魏徵⁽¹⁸⁾の太宗に告ぐる形跡を事とせず。皆な心孚にして文薄き者なり。禴は祭の薄くして文なきものなり。故に以て喩ふ。此れ終に相ひ信ずる道なり。然れども六二は、徳は中正なるも才は陰柔なり。陽剛伊尹の如くなるに非るよりは、孰れか五たび桀⁽¹⁹⁾を去るを得んや。九五の六二を引くが如き、幸に其の中未だ變ぜざる時に及んで、之を引かば得ん。然らずんば丁公⁽²⁰⁾の楚に事ふる、呂布⁽²¹⁾の魏に事ふるが如し。之を引くと雖も、何の吉にして咎なきことかあらん。

吾々は斯の如く楊萬里の寓意の在るところを、涙無くしては讀過し能はないのである。楊萬里に依つて把握せ

られた歴史は人生の掘り穿つた河床として、嚴肅に認識されたのである。易學の一つの方向を指示したものと
して楊萬里の易は、独自の存在理由を主張するものであらう。

楊氏易傳二十卷を著した楊簡は、字を敬仲といひ、慈溪の人である。乾道五年、進士に擧げられ、富陽の主簿
となり、たまたま陸象山に接して疑ひを決し、その家學を事とす。人これ呼んで慈湖先生といふ。嘉定三年、
著作郎となり、將作少監に補せられ、四世寧宗に拜謁して、斯心、即ち大道なることを説いた。やがて温州の知
となり、累遷して寶謨閣學士となり、太中大夫を以て致仕し、寶慶二年、年八十六で卒した。已易、易啓蔽等の
著がある。

太學博士舒津⁽²²⁾の從弟、舒辯また繫辭三卷、易釋二十卷を著した。字は平叟。同じく奉化の人である。清苦して
獨學し、遂に舒津と共に並び稱せられるに至り、景定元年、太學に於て正學を講明し、暑夏と雖も之を廢さな
かつたといふ。其の精勵想ひ見るべきである。

南宋末に一つの偉材があつた。これを魏了翁と爲す。四川の蒲江の人である。字を華父といひ、鶴山と號し
た。其の本姓は高氏。魏家に入つて改めた。幼にして神童の褒れ高く、諸兄に従つて學に入り、既に成人の風が
あつたと傳へられて居る。英悟絶倫にして日に千餘言を誦し、書を讀むに一度眼を過ぐれば終生これを忘れな
かつたといふ。十五歳にして韓愈論を著し、抑揚頓挫、眞に作家の風ありと稱せられた。慶元五年、進士に第し、
嘉泰二年、召されて國子正となり、翌年、武學博士となる。開禧二年、校書郎に移り、やがて嘉定府の知となつ

た。かつて朱子の門人、輔漢卿と友として好く、従つて朱子學に通じてゐた。蜀にあること十七年。これより蜀人、義理の學に通ずといふ。また白鶴山下に室を築き、自ら鶴山と號した。蜀の名士、多く此の門より出づと。

嘉定十五年、召されて入對し、疏二千餘言を上る。帝その言を容れ、兵部郎中に進め、また司封郎中兼國史院編修官となつた。時に南宋、金及び元との三國關係切迫し、宋の危機愈々加はつた。然るに朝廷にあつては韓侂胄及び史彌遠⁽²³⁾の奸臣、政を執り、綱紀甚だ頽廢し、志ある者は多く亡國を現前に見るの想ひであつた。了翁、慨然として上疏す。その間、省試參詳官、太常少卿兼侍立修注官、秘書監、起居舍人等を歴任し、寧宗崩じ、五世理宗立つに及び、權尙書工部侍郎(寶慶元年)に拜せられ、病ひを以て辭し、集英殿修撰を以て湖南の帝德府に知たりし時、諫議大夫朱端常⁽²⁴⁾の爲に彈劾せられ、靖州に謫居す。鶴山書院を築き門を閉ざすこと實に前後六年、然も湖湘江浙の人士、千里を遠しとせずして就きて學ぶといふ有様であつた。紹定四年、復職し、後、遂寧府の知となり、致仕す。史彌遠死没して、帝、親政の時至るや、華文閣待制に進む。尋で權禮部尙書兼直學士となる。これより上奏すること二十餘回に及んだ。然るに之を忌む者、相ひ謀つて排斥し、出でて端明殿學士同僉書樞密院事を以て京湖の軍馬を督せしむ。此の混亂の時局に當つて充分に其の識見を行ふを得させられなかつたのは惜しい事であるが、このやうな政治機構の缺陷も亦、南宋を滅亡させるに寧ろ役立つたかの感があるのである。嘗つて曰く、結髮、聖人の門に遊びしより、遠遠を窮探す。今、髮星々、大いに年數の足らざるを懼る。其の他、道に於ては蓋し未だ及ぶに迫らざるなりと。嘉熙元年、知福州福建安撫使たりし時、卒す。時に年六十とい

ふ。周易集義、また易舉隅の著があつた。

五世理宗の世、朱鑑に朱文公易說二十三卷がある。その内容は前出の例の如くであるが、字は子明、累遷して湖廣總領となつた。しかしながら寶慶の間、志の行はれないのを知つて、建安の紫霞洲に遷居し、朱子の祠を居る所の左に健て、著述に親しんだ。賢人が多く、このやうに幽かに世を遁れてゐたのは、益々、宋の時運の傾いたのを證するものであらう。

理宗の端平元年、新興勢力たる蒙古は、金を亡ぼし、嘉熙二年、元と國號を稱して燕京に都を建てた。即ち南宋、その危急に際會して直言を求む。張志道、封事を上つて建儲遷都の不可を進言した。しかしながら亡ぶる運命は之を如何ともし難いのであらう。怒濤のやうに南下する元軍は、幾多の哀史を血で織りなした宋を滅ぼして仕舞つた。張志道は宋亡び、門を閉ぢて、易傳を著した。亡國の遺臣は、家貧にして且つ衣食に窮すと。而も此の間に處して泰然たりしと傳へられて居る。易を修むる君子の一つの態度を記して、南京没落の章の筆を擱く。

(1) 李挺。字は之才。明は同名の人あり。混同すべからず。

(2) 後に傳を出す。

(3) 黎靖德。永嘉の人なり。嘉祐の間、沙縣主簿となる。縣事を攝すること清謹、よく繁劇を理む。博學にして文詞を能くす。かつて沙陽誌を修す。

(4) 蔡元定。字は季通。西山と號す。陽の入なり。父の發、群書を博覽し、牧堂居士と號す。元定、八才にして詩を能

くし、日に數千言を記す。長ずるに及び、西山の絶頂に登り、饑を忍び、齋を咬み、書に於て讀まざる所なし。朱子の名を聞きて行いて之を師とす。朱子その學を扣き、大いに驚いて曰く、これ吾が老友なり、當に弟子の列に在らしむべからずと。韓侂胄、僞學を禁ぜしとき、道州に謫せらる。書を朱子に貽りて曰く、獨行鬼に愧ぢず、獨寢衾に恥ぢず、吾が罪を得るを以ての故に、遂に自ら懈弛する勿れと。卒して後、文節を賜ふ。著すところ律呂新書、八陣圖說、洪範解、太衍詳説の書あり。學者これを西山先生と稱す。

5) 黃幹。瑀の子。字は直卿。安慶を知す。時に金兵、光山を破る。隣境悉く恐震す。幹、兵を治めて城を築く。一郡安堵す。已にして洪水俄かに至る。城ひとり完し。舒人これを頌して曰く、冠に残せず、水に陥らず、我を生む者は黃父なりと。朱子かつて曰く、直卿、志堅にして思苦ろなり、之と處ること益ありと。遂に女を以て之に妻はす。朱子、病ひ革まる。書する所を出して幹に授けて曰く、吾が道、託して此に在りと。卒して文肅と謚す。世これを勉齋先生と稱す。

6) 陳淳。字は安卿。龍溪の人なり。朱子かつて漳に太守たりし時、淳、郡齋に従遊す。朱子曰く、南來して吾が道、一安卿を得たりと。學者これを稱して北溪先生と號す。(明に同名の人あり)

7) 輔廣。字は漢卿。達の子なり。東萊及び朱子に師事す。慶元の初め、僞學の禁起る。而して學者多く解散す。廣ひとり爲に動かず。朱子深く之を器重す。嘉定の間、仕へて祠官たり。罷めて歸りて浚溪に隱れ、著述を以て務となす。五經註釋、四書問答、詩童子問、通鑑集議、日新錄、師訓篇の著あり。世これを稱して傳貽先生と號す。

8) 陳櫟。宋の亡臣なり。字は壽翁。休寧の人なり。宋亡びて後は隱居して著述を事とす。元の延祐年中、詔して科擧を以て士を取る。有司、櫟を強ゆ。即ち郷試に中れども赴かず。家にありて教授す。居るところの堂を定宇といふ。困りて

學者、定宇先生と稱す。晩年に及びて東阜老人といふ。卒する年八十三歳なり。尙書集傳纂疏、歷朝通略、勤有堂隨錄、定宇集の著あり。

(9) 陸游。字は務觀。寧ろ其の放翁の號を以て多く知らる。山陰の人なり。徽宗の宣和七年十月、淮上の舟中に於て生ると。性忠孝なり。始め秦檜に憎くまる。檜死して漸く韋德主簿となり、樞密院編修を歴て、夔巖二州の知となる。淳熙二年、五十歳の時、范成大來りて蜀に帥たり。游を招きて參議官となす。成大また詩を能くす。此に於て文學の交りを以てして禮法に拘泥せず。人その頽放を誹る。故に自ら放翁と號せり。七年、山陰に歸る。白髮蕭然たり。官、太中大夫、寶謨閣待制に至りて致仕す。後渭南伯に封ぜらる。食邑八百戸。嘉定三年、八十五歳の壽を以て家に卒す。その臨終の詩に曰く

王師北復中原日

家祭無忘告乃翁

と。南唐書、家聲舊聞、入蜀記、渭南文集、劍南詩稿、老學庵筆記の著あり。

(10) 范成大。字は知能。石湖居士の號の方知らる。吳郡の人なり。紹興二十四年の進士にして、隆興年中、出でて金國に使し、節を竭し忠を盡せり。孝宗のとき權吏部尙書參政知事となり、後、四川に制置たり。明州に知とし、金陵に帥たり。資政殿大學士を以て奉詞す。紹熙四年卒す。時に年六十八なり。石湖もとより文名あり、石湖集百三十六卷、吳門志五十卷あり。人曰く、北に使すれば則ち攪纒錄あり、海を過ぐれば則ち虞衡志あり、蜀に出づれば則ち吳船錄ありと。三高亭記の如き、天下これを誦す。

(11) 釋文經典には論とし、異本は躍とし、一本には_二論_一に作る。

(12) 伊尹。殷の人なり。名は摯。湯を干さんと欲するも由なし。乃ち有莘氏の媵臣となり、鼎俎を負ひ滋味を以て湯に説く。或は曰ふ、伊尹は處士なり。湯、人をして之を聘迎せしめ五たび反りて、而して後に肯て往くと。湯を佐けて桀を滅し、海内を平定す。號して阿衡といふ。帝仲壬崩じて伊尹、太丁の子太甲を立て、天子と爲す。太甲不明にして暴虐なり。伊尹これを桐宮に放ち、自ら天子のことを攝する三年。太甲過を悔ゆ。伊尹これを迎へて政を還し、伊訓、太甲三篇を作り以て帝を悔ふ。百歳にして卒すと。帝沃丁、天子の禮を以て亳に葬る。

(13) 蜀の劉備

(14) 諸葛亮。字は孔明。

(15) 馮唐。漢の人なり。趙に生る。中郎署長となる。かつて曰く、雲中守魏尙、功あり而るに其の爵を削ると。文帝これを納れ、馮唐を使い、節を持ち、魏尙を赦して亦、雲中守となし、唐を拜して車騎都尉となす。

(16) 張玄素。唐の虞郷の人なり。初め隋に仕へて景城縣戸曹となる。竇建德、捕へて將に之を殺さんとす。邑人千餘、號泣して代らんと請ふ。之を釋す。武徳の間、易州錄事參軍となる。唐の太宗その名を聞き、召見して問ふに治道を以てす。玄素の條對、帝の旨にかなひ擢でられて侍御史に拜し、給事中に遷る。太宗、卒を發して洛陽宮を修め以て巡幸に備へんと欲す。玄素上書して極諫す。帝、房玄齡に謂ひて曰く、玄素の言ふところ極めて理あり、即ち役を罷む。後、或は事ありて洛陽に至らば、露宿すと雖もまた傷むなしと。魏徵これを聞き嘆じて曰く、張公、事を論ずる回天の力あり、仁人の言といふべしと。太子左庶子を歴る。

(17) 前出

(18) 前出

(19) 桀。夏后氏第十七世、姒姓なり。帝履癸。帝發の子。貧虐なり。力能く鉤を伸べ鐵を索す。その力を恃みて徳を修めず百姓を武傷す。末喜を寵して國勢を傾く。湯、夏を伐つ。桀、鳴條に走りて死す。在位五十二年、夏后氏凡そ十七世、四百五十八年にして亡ぶ。

(20) 丁公。周の齊の君なり。姜姓にして呂氏。名は伋。太公の子なり。

(21) 呂布。字は奉先。三國時代の九原の人なり。驍武を以て并州騎都尉となり、河内に屯す。董卓甚だ之を親愛す。卓、亂をなすや卓を誅す。功を以て溫侯に封ぜらる。布かつて良馬に御す。赤兔といふ。時人語つて曰く、馬中赤兔あり、人中呂布ありと。後、曹操のために害せらる。

(22) 舒津。字は通叟。奉化の人なり。讀書積學、古人に至るを期す。景定三年、進士に第し、太學博士に遷り、平江を知す。事に臨みて勤敏、雅志澹如たり。かつて續蒙求、尙書解、春秋集註、十七史綱目を著せり。

(23) 史彌遠。字は同叔。浩の子なり。父の蔭を以て官と爲る。開禧年中、司封郎に遷る。力疏して韓侂胄が邊を開くの非計を言ふ。侂胄、誅に伏して禮部尙書に進み、嘉定元年、遂に右相となる。趙恕愚の冤を雪ぎ、朱子、彭龜年、楊萬里、

呂東萊を褒贈して其の子孫を登用す。寶慶の初め少師に拜し、魏國公に封ぜらる。

(24) 未考

(別注) 林述齋の佚存叢書六十卷に、宋の李中正の泰軒易說あり。支那に亡びて却つて我國に傳來せる珍本の由なれども、不幸にして未見のものなれば唯、録して後日の研究に譲る。明の萬曆の頃、同名の人あり。混同すべからず。

(終)

跋

○

古來、支那學は其の歴史的發展過程に於て把握せられ、それ故に考證學的性格を賦與されて來た。此の方法は好むと好まざるとに拘はらず支那學を理解する一つの重要な鍵なのである。本書も亦、多分に其を踏襲したのは是非もない。

更に本書は、易學史を主題として、それに易に關する若干の考察と、或は筮儀に就き、乃至は筮法に關する等の序説を附し、その上に史的研究の便の爲め注を施した事に依つて、或はまた易傳史とも見られるのである。眞に煩を重ぬるに似たが、畢竟、斯學に於ける一つの大いなる展望を與へ得れば本書の目的は達せられたと言つて好いのである。

唯、屢々、重複する點のあるのは、本稿は當初、斯學を修める人士の爲め研究資料に書かれた部分と、後に増補した部分とが、完全に整備されて居らない爲で、讀者これを諒とせられたい。

○

儒學に對する研究は、支那學の日本傳來以來、既に千有餘年を閲して、尙、今日に至るまで賑々として盡るところを知らないのである。しかしながら不幸にして體系付けられた儒學史の完本は無いのである。儒學史といひ、經學史といひ、近世に於てこそ稍や文獻の徵すべきもの有るも、而も未だ必ずしも完備したものを見ないのである。多くの支那學研究者が何故このやうな不便を忍むで居るか私には解らない。

唯、次のやうには考へられる。抑も儒學史の基礎である五經は、既に一經毎に有力な史的發展過程を有ち、従つて五經通史を描くことが既に容易な業ではないことはである。而して最初の困難は五經の定本を決定することではなければならない。次の大いなる困難は、悠久な儒學史に登場する歴代學者の傳である。況んや其の學的内容を敘述し、批判し、分類し、所謂、四庫全書的綜合研究に至つては、良く一人の微力を以てして能はないことはである。さういふ意味では、本書も亦、完全でないこと言ふ迄もない。

○

元來、本稿は加藤大岳君が汎日本易學協會を結成し、著者も亦、喜んで顧問の席に加はり、且つその機關誌たる雜誌「運命學」(神祕改題)及び「易學研究」に若干の原稿を徵せられるに及んで、協會員の爲に幾何かの參考資料を提供する意味に於て易學史執筆を思ひ立つたものである。

即ち、易を言ふ者、多く宋の大儒朱子を宗とするところから、古易より始まり、朱子に至るまで其の間、易學およそ六變するの狀を述べんとし、難解にして且つ史的根據に乏しい文獻を整理しつゝ、聊か鳥瞰圖的構想を描かむと試みたのである。前述の如く易學史は儒學史と並行するのみでなく、それが史學に關する限りに於て亦、支那歴史の側面觀として一つの新しい史的分野を展開するのである。詩史、禮史、尙書史、春秋史と共に、易史の存在せねばならぬ所以である。されば支那に對する再認識の要請せられつゝある今日、本書が少しでも役立つ事があれば望外の喜びとしなければならぬ。

○

初め本稿執筆の計畫を樹てた時、支那に於ては無論のこと、また吾國に於ても易の傳繼が歴史

的のものであるだけに、謂ふ所の易學史が存在するものといふ假定の許に、而して其を私は充分に參考し得るといふ安心の下に稿を起さむと企てたのである。然るに實際には意外な事に、易に關する著述は日支に於て五車に餘るほど在り乍ら、完全な易學史は遂に之を得ることが出來なかつたのである。

朱子易に至るまで易學六變するといふ見方も、多分に獨斷的な變遷史たるを免れないが、千有餘年の易學史を大觀するに、大きな波濤の起伏が六度まで看取し得るところから、それを主題とした迄である。

然しながら易の傳繼を史に徵すると、嚴密には商瞿より田何に至るといふ此の一系より他に無い、といふのが正しい結論であらう。けれどもが其だけでは何等の發展の様相を語るものではないのである。焦氏が後に現れ、費氏に及んで古文となり、而して漢に始めて易三有りと稱せられた。更に田氏の易は五家に分る。謂ふ所の楊、施、孟、梁丘、高の諸氏である。而して孟氏久しく行はれ、焦氏の易は京氏となり、費氏の興るや孟、京ともに微となつた。故に傳統を以てすれば、田何、丁寬の授受は則ち孟氏易たること疑ふ餘地が無いのである。その行はるゝこと尙ほ費

氏に及ばないのは、傳受者の少かつた事と、且つ費氏の經、古文に同じく、馬融、鄭玄その註を爲つたがためであらう。

斯くて西漢の易、讖祥を雜へ、東漢また讖緯を交へ、稍や逸脱を指摘し得られる。

魏晉に至つて術數に流れ、六代、隋、唐ともに道徳に浸淫すと稱せられた。

然しながら尙ほ唐初、易說多く、陸徳明の釋文敍録には晋より以前三十有二家を數へ、また李鼎祚の集解には二十有三家を擧ぐる程である。

斯のやうにして宋の慶曆年間に至るまでは、易經を談ずる者は専ら訓故を守るのみであつた。

けれども然し此のやうな重疊たる起伏の形相は、能く此の小著を以てしては爲し能はないところである。

○

既にノートを作りつゝ、其の事に氣が付いて驚いたのであるが、無きには増ると覺悟したのである。その爲の不便や困難が俄かに倍加したのは言ふ迄もない。

況んや永い間、重患の牀から漸く氣力を恢復しつゝある私にとつて、此の仕事は實に容易なら

の努力であつた。その間、幾度か發熱したり、またしても臥床する日が續いたり、遂に卒倒した
ことさへ一度や二度ではなかつたのである。而して昭和十二年春、ノートを整理し、稿を起した
のは其の秋の十月であつた。かくて第一章は同十三年、「運命學」正月號から連載することを得た
のである。

想へば性懶怠、況んや斯の如き著述に習熟しない私は、加藤大岳君、乃至は終始、怠りがちな
私を勵まして呉れた塚本龍泉君の鞭撻なくしては生涯、此のやうな著述をする機會がなかつたで
あらう。更に精進堅固な協會員の熱烈な支持と相俟つて、漸く四ケ年を閲して兎も角も千枚許り
の稿成つたのである。誠に感慨無量なるものがある。

○

更に錦繡を添ふるものは谷崎潤一郎及び佐藤春夫の兩先輩の序文である。

想へば文學に志を立て、笈を負ふて東都に遊學したのは私の十八の年であるが、爾來、此の二
人の偉大な文學者の影響を忘れることが出来ないのである。支那文學に對する逸早い關心を喚起
せしめられたのは實に此の二人の先輩の存在を無視しては、私の學的研究の發足は有り得なかつ

たであらう。日本文學史の中に織り込まるべき東洋風の浪漫的文學は、實に此の二人の偉大な文學者の文藝的活動によつて樹立されたと私は觀察して居るものであるが、其等の片鱗にさへ最も多く共感を見出し、その中から私の學的方向をさへ導き出したものだと思つて居るのである。

谷崎、佐藤兩先輩との交情を叙して居たならば、この跋文自體が一篇の自叙傳に近いものになつて仕舞ふであらう。それは何時の日か思ひ出草として語る折もあらうかと思はれるが、ともあれ、得難い序文を頂き、此の貧しい著述をして燦然たる光彩を放たしめられた事は感激の他はないのである。恐らく讀者は此の二大家の序文だけを讀まれることによつても、易の性格、而して易を修する者の生活態度、乃至、人の運命といふやうなものを考へ合せられることが出来るであらう。

○ 正しく著者たる私の運命こそ、運命學の一つの好き標本であるには相違ないのだから。

今にして私が聊か易の何たるかを解すと自負する所以のものは、身を以て易を修するが爲である。故に聖人曰く

跋

知、萬物に周くして道、天下を濟ふ、故に過たず。旁く行いて流せず、天を樂しみて命を知る、故に憂へず。土に安んじ、仁に敦し、故に能く愛すと。

四七四

昭和十六年一月三十一日於天台閣

東
光
坊
春
聽

史學易・氏今

第一刷四五〇部

著者檢閱捺印章

昭和十六年三月十一日 印刷
昭和十六年三月十八日 發行

〔定價金八圓五拾錢〕

著作權者 今 春 聽

東京市神田區須田町一ノ二四

發行者 加 藤 四 郎

東京市牛込早稻田鶴卷町三七一

印刷者 大 育 社 印刷所

東京市神田區須田町一ノ二四

發行所 紀 元 書 房

振替東京一五三二〇四

加藤大岳先生講述
汎日本易學協會編

（納判每卷三〇〇頁・全八卷美本
會費每冊貳圓八拾錢・送料廿一錢
全期八冊完納貳拾參圓・送料共）

【內容案内書
要郵券三錢】

易學大講座（全八卷）

書店品切の際は
直接本社へ御申
込を乞ふ

古來難解を以て稱せられ、諸說紛雜、區々として其の解釋の亂れたる易經も、本書の出現に依り最も平易に最も正しく解説が歸一されたばかりでなく、象・意・變の三面より明快にされた易辭を以て行ふ占示も亦各卦每爻詳細を極め、而かも傑れたる實占例を添示して讀者の理解に資し、萬般に亘り懇切を盡した堂々二千五百頁の大冊は、正に實占易書の定本として千古に其の光芒を放つものである。本書ひとたび發刊せらるゝや絶讚、激勵の辭、怒濤の如く机上を埋め編纂者を感じ激せしむ、以て其の眞價の如何に偉大なるかを知る。

振替口座
一五三〇二〇四番
東京

紀元書房發行

東京市神田區須田町一丁目四番地